日本戯曲全集
第二卷

不破名古屋狂言集

東京
春陽堂版

四世中村歌右衛門の物草太郎

日本戯曲全集 第二巻 目次

不破名古屋狂言集

東山殿劇場段幕

（ひがしやまどのかぶきのだんまく）

五世松本幸四郎の不破伴左衛門

東山殿劇場段幕

序　幕

橋の寮茶摘の場
大内の場

役名——佐々木左衛門賴方。石橋三位。細川圖書。長谷部雲谷。岩倉宰相。土佐左馬次郎。足輕、岡平。花形屋曾平。傾城、遠山。同、玉の井。同、巴。同、千代菊。遣り手、おうら。小栗宗丹。

本舞臺、向ふ樹矢來の塀、うちより樹木の梢見え、爰に石橋三位、公家の裝束にて、乗り物に乗り、侍ひ、駕籠の戸を開き、其ほか供廻り附き添ひ居る。下に土佐左馬次郎、麻上下の形、絹羽織の侍ひ、供なしてゐる。管絃にて、幕明く。

侍ひ　ハツ、佐々木の御一家、土佐左馬次郎さま、お出迎ひでござりまする。

石橋　ナニ、左馬次郎の出迎ひとな。

ト乗り物より出ようとする。

左馬　アイヤ石橋三位さまには、矢張り其まゝ。先刻岩倉宰相さま、其ほか小栗宗丹さま、細川圖書どのにもお出であつて、お待ち兼ねにござりまする。

石橋　それは〳〵、遲刻の段、赦し召されい。然らば一刻も早く。

左馬　直さまお乗り物。

石橋　乗輿ゆるし召されい。

ト戸を閉める。

侍ひ　立ちませい。

陸尺　ハ、ア。

ト管絃になり、この人數殘らず下座へ入る。直ぐに向ふより、岡平、足輕の形、目錄箱を持ち、後より花形屋曾平、茶屋の亭主、ばつち、尻からげにて出て來る。

曾平　オイ〳〵、こなたは桂之助さまの御家來、岡平どのじやないか。

岡平　オヽ、花形屋の曾平、こなたは何しに爰へ來た。

曾平　コレ、何しにどころか。一體こなたにも云ひ分があ

るぞえ。大名の弟御ぢやと聞けばこそ、遠山が揚げ代のたゝまりも、便々だらりと待つてゐるに、今日まで梨の礫もないワ。嫌うなら廓を退いたれど、今日この橋の寮へお客人があるに依つて、その御馳走に借ると云ふて、五人と云ふもの攫み込みに來さつしやれたが、エヽ、聞こえた。こりや揚げ屋を退かれたに依つて、爰へ引出すのぢやと思ふから、マア、遠山から引上げに來たのぢや。

岡平　これはしたり、曾平どの、どうしたものぢや。先の相手はお大名だわな。女郎の一人や二人、揚げ代でも間違ひ引きがあるものかな。

曾平　そりや又あつたとて捨てゝ置くものか。なんにせい遠山は、是非連れて戻らにやならぬ。

岡平　これはしたり、遠山を連れて行かれてたまるものか。それぢやアお客へ不馳走になるわえ。

曾平　イヤ、なんでも連れて行くか、揚げ代貰ふかせねば、親方の鼻の下が干上がるわえ。

岡平　ハテ、聞き分けのない男ではある。

曾平　捨てゝ置かつしやれ。

ト岡平、留めるを、振り切つて、門のうちへ入る。岡平も同じく入る。早舞ひになり、道具廻る。

本舞臺、正面、茶園、雨障子、よし垣綺麗に結ひ廻し、茶の木大分、上に燈を灯し、上下に櫻の立ち木、この根元に大和垣、山吹の下草、朝顏附きの手燭を數多置き、日覆ひより釣り枝下ろし、爰に遠山、玉の井、巴、千代萩、女郎。おうら、遣り手にて、みな練りの上着、片襷、晒しの手拭ひを冠り、提げ籠をそばに置き、茶を摘んでゐる。茶摘み歌にて、道具納まる。

ト皆々は後向きに茶を摘んでゐる。矢張り茶摘み歌にて、向ふより禿二人、晝飯を持ち出て來る。花道にちやつと留まり、少し振りあつて、舞臺へ來たり

禿一　おうらどん、晝飯とやらのお辨を

禿二　持つて來たぞえ。

うら　なんだこの子達は、やう〳〵今取つて來たのか。何を道草してゐたのだな。サアサア、どなたもお辨が來たよ。お上がりでないか。お嫌ならマア、わたしや御酒から食べやうよ。

ト吸ひ筒を出して、茶碗酒呑む。

石橋　アヽ、醉ふた〳〵。赦してくれい。
　ト茶摘み唄になり、石橋、岩倉、雲谷、出て來る。床几にかゝる。
これは〳〵雲谷、種々の饗應、心配り、忝ない〳〵。シテ、その趣向の傾城の茶摘み女と申すは、これか〳〵。
岩倉　住吉の田植ゑは年々見たれど、傾城の茶摘みは始めて。雲谷、出來た〳〵。
雲谷　イヤモウ、主人左衞門、此度の役目首尾よく勤めまするは、全く各々樣のお引廻しゆゑ。さすればいか程の事いたしたとて、なんの〳〵、云はゞこれしきの儀は九牛が一毛でござる。コリヤ〳〵、君達、ちとこちら向いて、御機嫌を取つてくりやれ。
うら　そんならもう、こちら向いてもようござりますかえ。
雲谷　オヽ、よいとも〳〵。早うこちらへ來て、千代菊が顏を見せてくれいやい。
うら　そんなら皆さん。
皆々　オヽ、しんど。
　トこちら向き
遠山　しつけぬ茶摘みで、ほつとしたわいな。

玉の　わたしや又夜店張つた樣に、いつ迄もかうしてゐるのかと思ふたわいな。
巴　それになんぢやゝら、初昔の極昔のと、わからぬ事ばつかり。こちらにはとんと極むづかしぢやわいな。
千代　それいな、岩井の白と聞いた時は、役者の名ぢやと思ふたわいな。
うら　お前方、其やうにお云ひでない。お茶を摘むのはまだしも、お茶を引くにはましぢやぞえ。
皆々　なにを。皆さん、ようお出でたなア。
　ト下の方、床几へかゝる。
石橋　ヤア、誰れかと思や遠山太夫、巴、玉の井、千代菊もゐるな。道理こそ、得ならぬ薫りぢやと思ふた。
遠山　又その樣な惡口を。
岩倉　イヤ〳〵、コリヤ、玉の井、いつも廓へ通ふ度毎に情なくもてなせども、今宵は左衞門のもてなしと云ひ
石橋　どれ〳〵も情なうなるまいぞや。
四人　知らぬわいなア。
雲谷　コリヤ〳〵、それではお客方へ不馳走、兎角御機嫌のよい樣に、おうら、頼む〳〵。
うら　頼まれいでも雲谷さん、お前の事なら承知ぢやぞ

え。
皆々　イヨ、雲谷の色男め。
雲谷　これは怪しからぬ事仰しやりまする。併しこりやあなた方も、折々は廊へも
石橋　イヤサ・遊所へ参るはきつい法度なれども、折り折りは忍びに参るゆゑ、役人どもが喧しう申すて。
岩倉　我れ／＼が忍びと申すを存じて、傾城どもが悪しざまに致すが、今宵茶湯にいたして此方へ呼びつけたも、ありやうは左衛門への所望。そち達も否應は云はさぬぞよ。
雲谷　なるほどあなた方が自由に廊へ、お通ひなされては留めどがござりますまい。
うら　そりや又なんと云ふても雲の上人ぢやもの、女郎見物も浮かれて、つい芥川になるわいな。
石橋　イヤ、まだ其やうな目に逢ふた事はないわえ。
岩倉　時に御亭主左衛門、あの又宗丹には、いかゞ致したな。
雲谷　慥か夜の櫻を御覧あるとて、築山の方へ、アレ／＼、向ふの燈火は慥か小栗宗丹さま。
うら　ほんに殿様も見えるわいな。

遠山　ナニ、殿さんが
ト思ひ入れ。
石橋　コリヤ、遠山、今宵は側は放さぬぞ。
ト琴入りたる茶摘み唄になり、向うより左馬次郎、手燭を持ち、後より宗丹、羽織衣裳、圖書、燈火を持ち、後より左衛門、羽織、袴、皆々庭下駄にて、出て來たり、花道にて
宗丹　誠に春宵一刻價千金と申すが、露を含む夜櫻に、宇治の茶園を移されて、時ならぬ留め木の薫り。櫻に匂ひあらばと申した昔の人に、この遊びをさせたいもの。そればかりは拙者が筆にも、及ばぬ景色でござる。
圖書　當時畫道の名譽たる、宗丹どの、筆勢に及ばぬとあれば、云ふばかりもないこの眺め。終日の御馳走と申し、喜見城の樂しみとは、かやうな事でござらう。
左衛　これは／＼、驚き入りたる御挨拶。武骨者の趣向お心に叶ひ、亭主大慶に存じまする。
左馬　何はともあれ、設けの茶店にて、割りごを開き又一盞。
宗丹　イヤもう、酩酊いたしてござるぞ。
ト又唄になり、皆々、本舞臺へ來る。

雲谷　これは〳〵、小栗宗丹さま。
石岩　最前より待ち兼ねました。
宗丹　ハヽア、コリヤ色ある君達を引寄せて、面白い最中と見えまするな。
石橋　イヤ〳〵、まだ面白い口もとへも行かぬて。
遠山　ツッともう、殿さんがござんすと聞いたゆゑ、桂之助さまかと思や、左衛門さまや圖書さま
玉の　宗丹さまや堅苦しい
皆々　辛氣な事ぢやなア。
石橋　イヤナニ、御主人、この程うち續き種々の御雜作、昨日は北山の櫻狩り、明日は大井の鮎汲みと、春の興にも盡き果てゝ
岩倉　この橋の字へ宇治の茶園を移され、傾城を呼び寄せて茶摘みの趣向
圖書　お心の届いたなされ方。これまで種々の取り次ぎもいたしたなれど、此度の樣な御丁寧な儀はござらぬ。
左衛　それと申すも此度の大役、鎌倉の名代は家の面目、首尾よく勤め[illegible]するは全く各々樣、宗丹どのゝお執成しなければ叶はぬ。弓馬の道ならば佐々木左衛門、思慮工夫もござるべきが、何を申すも案内知らぬ大内の式。殊に對顏も[illegible]日と　ざれば、猶この上萬事よろしう頼み奉りまする。
石橋　イヤ〳〵、その儀ならば氣遣ひあるな。當今御幼年にましませど、繪の道を好ませ給ひ、即ちこれなる小栗宗丹を師と仰がせ給へば
岩倉　堂上堂下も皆宗丹の門弟。殊に大内の式は彼の又五郎、男にも勝りて詳しき事なれば、ナウ、圖書。
圖書　左樣でござる。當春も任大臣の節會の時、山口さまが内齊をお勤めなされ、宣命を持たずに堂上せられし所、ソレ、宗丹どのが、申し繼ぎの女房に内々で届けさつしやれたゆゑ、不調法にもならず濟んだと云ふもの。この圖書なども毎度御師範で助かりまするて。
宗丹　こりや各々には何事を仰せらるゝ。ハヽヽヽ。イヤナニ、左衛門どの、もと身共が畫は兆典子吉山を師として、その妙を得たと云ふではなけれども、大内の御師事を申せば此うへもない面目。又貴殿はもとより、あれに居る土佐左馬次郎も、繪の道を執心ゆゑ、及ばずながら筆意の御傳授申した、その縁により此度の式作法までのお頼み、大内殿上の事に何事も身が心の儘。明日の事は、必らず苦勞にさつしやれぬがよい。

左衛　ハッ。

石橋　宗丹が詰合へば大丈夫。ナニ、左衛門、マア、昔より、我が身の明日の参内が、首尾のよい天上であらうかい。

左衛　有り難うござりまする。

雲谷　時に最早初夜も過ぎましたれば、なんと打くつろいで無禮講で、大酒盛りはどうでござりませうな。

左衛　こりやよい所へ心が附いた。左馬次郎も、サヽ、お勧め申してくりやれ。

左馬　三位さま、宰相さま、ちとあちらへ入らつしやりませ。

うら　オヤ／＼、ぬしは若い衆の標だよ。ホヽヽヽ。

圖書　誰れかと思へば花車のおうら。われがやうな體なれば、定めし酒は呑むであらうな。

うら　呑む段ぢやござりません。さつきから酒にしたうてしたうて、待つて居りますて。サア、女郎さん方、皆さんを連れて大酒にせうかいな。

女皆　なんぢやゝら、こちらは浮かぬ心ぢやわいな。

圖書　扨ては遠山、桂之助が見えぬゆゑぢやな。

遠山　何を。

石橋　ドッコイ／＼、遠山は麿ぢやぞ／＼。

岩倉　玉の井は康綱ぢやぞ。

圖書　身共は己。

雲谷　お相伴に千代菊は、拙者が申し受けまする。

うら　わたしや差詰めお前かえ。

ト左馬次郎に抱きつく。

左馬　エヽ、何をたわけめ。

うら　オヽ、痛。

皆々　ハヽヽヽヽ。

石岩　サヽ、來やれ。

ト茶摘み唄になり、面々、手を引いて下座へ入る。宗丹、左衛門、殘る。

宗丹　ハテサテ、騒々しい事かな。

左衛　イエ／＼、あれでなければ御遊興になりませぬ。

宗丹　時に左衛門どの、只今式禮御指南申すに依つて申しまするが、かの今の儀はどうでござる。

左衛　今の儀とは、何事でござるな。

宗丹　ハテ、ソレ、内々申したかの事サ。

左衛　エヽ、それはなん時なりとも、掛け屋方より

宗丹　イヤサ、それではなしに

ト云ひ兼ね
御内室の儀でござる。
　トこの時、奥にて
大勢　所望ぢや〱。
　ト獅子とらでんの太鼓入りの唄になり、少しあり
左衛　エヽ、奥の騷ぎで、物音が知れぬ。もつと大きな聲
で御意なされい。
宗丹　イヤサ、大きい聲もしにくい。御内室の事でござる
て。
左衛　エヽ、阿國が事かな。サア、奥が事なら、進上いた
すと申して置きましたではござらぬか。
宗丹　恥を云はねば理が聞こえぬと申しまするが、あの阿
國御前はもとこの京都の舞子、恥かしながら拙者命も身
上も擲つて惚れましたれど、兎角すつたのもぢつたのと
云ふうち、こなたが國元へ連れて歸らつしやれたと聞い
た時は、きつう意地を含みましたが、所が此度大内參内
の御上使。なんでも縮尻らさうと存じて居りましたが、
思ひの外、阿國どのをやらうと仰しやる。とんとそれで
腰が拔けて、扨て附き合つて見ればきつい粹。これ迄の
恨みもさらりと晴れ申したが、そんなら愈々

左衛　阿國をやらうと申したを、まだ噓ぢやと疑はつしや
るのか。
宗丹　ハテ、疑はいで。女房を下され、やらうと云ふ事ぢ
やもの。
左衛　愚痴ぢや、きつい愚痴。一體マア表向きは女房で、
ついぞ一つに寐た事はござらぬて。
宗丹　そりや噓ぢや、大噓。女房に持つて抱いて寐いでた
まるものか。そりや此度の事があるに依つて、身共への
左衛　誓文々々、ほんの事。
宗丹　スリヤ、愈々
左衛　弓矢八幡、僞りは申さぬ。
宗丹　そんなら聞く事がある。雲谷々々。
　ト呼ぶ。この時、花に戯れと唄の切れにて、雲谷、下
座より、扇獅子を持ち、走り出て來たり、あちこち踊
り歩るく。
左衛　コリヤ、雲谷々々。
宗丹　雲谷やい。
左衛　コリヤ、何を其やうにうろたゆるのぢや。
雲谷　イヤ、何もうろたへはいたしませぬ。只今奥より石
橋のあてぶり最中、誰れやら雲谷々々と呼ぶ樣に覺えま

したゆゑ、思はず參じましたが
宗丹　オヽ、呼んだは身共ぢや。
雲谷　左樣でござりましたか。こりや御免なされませ。イ
ヤ、大汗になりました。
宗丹　コリヤ〳〵、雲谷、呼んだは餘の事でない。內々そ
ちに口說いて貰ふた、かの阿國御前の事。
雲谷　ア、モシ、コレ。
宗丹　大事ない〳〵。
雲谷　それでも左衞門さまが
宗丹　苦しうない。左衞門どのには、疾うに貰ふて置いた
て。
左衞　扨ては今まで雲谷に口說かしたのぢやな。
宗丹　面目次第もない。
左衞　なるほど思案の外ぢやなア。
雲谷　ムウ、主人左衞門さまには、御合點でござります
か。
左衞　われが取り持つたが却て俺が仕合はせ、出かした出
かした。
雲谷　それで讀めた。モシ、宗丹さま、御返事が參りまし
た。

宗丹　ヤア。
雲谷　折を見合はせ、上げうと存じて居りました。
左衞　今までお目にかけぬと云ふ事があるものか。
宗丹　ちやつと早く〳〵。
ト狀を取り出し
末かけて賴む方樣へ、阿國より。
左衞　末かけて賴むとは、變らぬと云ふ心ぢやな。
宗丹　エヽ、嬲らつしやるな。雲谷、讀んでくれ。
雲谷　主人の前では、あんまり
左衞　エヽ、氣の弱い。その性根で、よう今まで取り持つ
たな。大事ない、讀め〳〵。
雲谷　然らばちやつと讀み上げませう。
左衞　聞きたい〳〵。
ト雲谷、文を開き
雲谷　疾くよりお返事いたし度く候へども、人目の關に差
扣へ候ふ。誠に御無事の樣子風の便りに聞きまし、嬉し
き御事に候ふ。ましては數ならぬ身に左程まで、思し召
し下され候ふ事、嬉しさ限りなく、飛び立つばかりに御
座候ふ。ソレ、もう飛び立つばかりでござりまする。
左衞　飛び立つばかりぢや〳〵。

宗丹　ばかりで〳〵。
雲谷　前かた情なう致せし殿御の、心の飛鳥川を見申さんと、思はず左衛門に請出され、國へ參り候へども、好かぬ事ゆゑ、ついぞ側へ寄つた事も御座なく候ふ。
左衛　なんと〳〵。
宗丹　後は〳〵。
雲谷　お前のお志し嬉しいと思ふ魂が、うつゝにも通へかしと、可愛さ日に增して、夫婦になりたいに候ふ。
宗丹　サア、たまらぬワ〳〵。
雲谷　どうぞ〳〵、表向きの譯を立て下され候ふや、御心もじの程待ち入り候ふ。かしこ。宗丹さま。焦るゝ身より。サア、焦るる身よりぢやワ。
左衛　イヨ〳〵、焦れてさま。
宗丹　もう今までに疑ひました。眞平不調法。これからは其許の事でなら、命でも進上いたさう。
左衛　それは忝ない。さつぱりと進上いたす。
宗丹　コレ、手を突きまする。
左衛　きつい嬉しがりやうな。
雲谷　その橋渡しはこの雲谷、御褒美はしつかりでござりませうな。

宗丹　いかほどでも望み次第。
左衛　身共も遣はすぞ〳〵。
雲谷　エヽ、有難い。この勢ひに奥へ行て、もう一騒ぎ。大金りきんの御褒美貰ふて、獅子の座にこそ直りけり。
　ト踊りながら、下座へ入る。
宗丹　雲谷め、なか〳〵味をやりました。
左衛　その代りには明日の式、滯りなきやう。
宗丹　皆まで仰しやるな、胸にござる。先づ鎌倉よりの御名代なれば、公家門よりうちは大納言の代官でござる。裝束お附けなされたか。
左衛　夜前石橋三位さまがお着けなされて、篤と承知いたしました。
宗丹　池上圖書さまは非藏人役でござるが、御簾を巻き上げまするに、いで縮尻らさうと思へば、やう〳〵疊から二尺ばかり上げて置きまする、御簾へ冠りをさへぬが古實ゆゑ、四つ這ひにはならず、イヤモウ、見苦しいざまでござるて。
左衛　明日は高う上げたいものでござるな。
宗丹　イヤモウ、其許の事なら、三寸一杯に上げまする。邪魔になるなら引ちぎつて歸らつしやれ。

左衛　ハテ、眞の御太刀拜領は、矢張り紫宸殿でござるかな。

宗丹　いかにも、御盃頂戴の時、是非にかの土器が割れますて。

左衛　直ぐに鎌倉へ右土器を、早飛脚で遣はしまするに、自然割れましては

宗丹　サア、そこでござる。その通り土器は二枚でござる。一枚は即ち拙者が持つて居る。かの天盃頂戴して、鎌倉へ下すは、身共が代りの土器を下し召されい。割れても少しも大事ない。同じ土器でさへあらば、ほんの京、鎌倉の儀式を仕るのサ。

左衛　左樣あれば頂上の仕合はせでござる。

宗丹　まだ〳〵御指南申す事もござれど、聞取りも致さねばならぬ。詳しくは奥にて。

左衛　左樣がようございまする。云はゞ今晩が總稽古でござりまする。

宗丹　たとへ稽古がないと云ふても、始終手前が附添ひ居れば、氣遣ひのキの字もござらぬ。サア〳〵、お出でなされ。

左衛　マヽ、貴殿から。

宗丹　ハテ、其許から。結ぶの神樣。

ト左衞門を突きやり、顔見合はせ笑ふ。唄になり、兩人、奥へ入る。向うより岡平、走り來たり、懐より文を出し

岡平　ハテ、コレ、どうで奥樣のお文、殿樣へ差上げたいものだが。左馬次郎さまにでもお目にかゝりたいものだ。

ト思ひ入れ。下座にて

岩倉　サア〳〵、來やれ〳〵。

トこれにて岡平、ちやつと下手へ入る。下座より岩倉、玉の井を連れて出て來たり

コレ〳〵、用がある。ちやつとおぢや〳〵。

玉の　アヽモシ、なにをなされますぞいなア。

岩倉　何をするとは、男が女を捕へてするものは外にはない。ちやつと戀歌の添さくをして貰ふのぢや。

ト抱き附く。

玉の　アヽ、滅相な、門中でそんな事が

岩倉　コリヤ、爰でならねば、あの休み所で。

玉の　サア、行くは行きまするが、顔合はして恥かしい樣なものぢやぞえ。

岩倉　なんのおぼこぢやあるまいし。コリヤ、そちさへ應と云へば、明りは消すワ。
ト明りを消し、暗闇の思ひ入れ。
これでよからうがや。
玉の　そんなら休み所へ
岩倉　來てくれるか。
玉の　サア、ござんせ。
ト上の障子屋體のうちへ岩倉を入れて、障子ぴつしやり締め
ゆるりとお休みなされませ。
ト合ひ方になり、ついと下座へ入る。
岩倉　ヤイ〳〵、おのれ、コリヤ、酷い目に遭はしたな。どこへ行た〳〵。
ト暗がりを探し歩るく。この時下座より、おうら、醉ふて出て來たり
うら　ア、、醉ふた〳〵。流石のおうらも盛り殺された。
ト岩倉、おうらに探り當たり
岩倉　ドツコイ、逃がさぬぞ〳〵。
うら　オ、、怪しからぬ。何をするのだな。
岩倉　もうその手は食はぬぞ〳〵。

ト兩人、捻せりふにて、無理矢理におうらを引つ張り、障子屋體へ入る。奥ばた〳〵にて、遠山、左馬次郎を捕へ、巴、千代菊、手燭を持つて、宥めながら、附き添ひ、出て來たり
左馬　これはマア遠山どの、何をさつしやるのぢや。
遠山　何をとは、お前も聞えぬお方ぢやぞえ。今宵は殿さんがござんすと云はしやんしたに依つて、皆さんと一緒に此やうに、茶摘みになつて來て見れば、殿さんと云ふのは桂之助さまではござんせぬではないかいな。
左馬　ハテ、身共が殿樣と申したは、左衞門さまの事、コリヤ、廓でこそ桂之助さまの事を殿樣と云へど、屋敷うちでは部屋住みゆゑ、名を申すわやい。
千代　ハ、ア、廓で殿さん〳〵と云ふゆゑ、左馬次郎さんの殿さんと仰しやるを、桂之助さまと聞き違へ
巴　折角ござんした遠山さん、腹立てなんすも無理ではないわいな。
遠由　久しう殿さんには逢はず、逢ふたらたんと積もる恨みを、云はう〳〵と思ふて來たゆゑ
左馬　出逢ひ頭に身共が胸倉、遠山どのに引つ張られて出た時は、どうやら色男の樣でござつたが、こりやとんだ

門違ひな。

ト岡平、出て來る。

岡平　左馬次郎さま、これにでござりまするか。即ち今日のお客へお土産の目錄、殘らず御宿所へ届けましてござりまする。

左馬　オヽ、世話岡平、大儀々々。

岡平　又その外に、殿樣へ内々のお文。

ト以前の文を出す。

左馬　さしたる事にもあるまい。時候のお見舞ひか。

岡平　何か、あとは火中と記してござりまする。折を見合はせ殿樣へ。

遠山　そりや殿さんへ、文ぢやとあるからは、大方どこぞの女中からの文であらう。

ト引つたくり

此やうな事があるゆゑ、廓へはさつぱりござんせぬ。エヽ、腹の立つ。

ト後ろへ投げる。

岡平　これはしたり、そりや左衞門さまへのお文ぢや。

左馬　又殿樣違ひぢや。尋ねい／＼。

ト尋ぬる思ひ入れ。下座ばた／＼にて、曾平、雲谷、圖書、石橋、引つ張り出て來る。玉の井も出る。これにて皆々、上の床几にかゝりゐる。

曾平　濟みませぬぞ／＼。

圖書　コリヤ、其やうに云はいでもよいわえ。

曾平　イヤ／＼、云はにやならぬ／＼。

石橋　ハテ、靜かにしやれな。

曾平　ハテ、靜かにせにやア、なんとさつしやりますぞ。

左馬　ソリヤ、又一組み始まつたが、門違ひぢやないかな。

雲谷　コリヤ／＼、曾平、其やうに云はずとも、金子さへ遣はせば濟むではないか。

曾平　サア、貰ひませう。あるかえ、あるまいがな。頭からかうなると知つてゐるに依つて、マア第一お公家樣を客にする事は嫌ぢやと云ふたれど、何もかも引受ける、大事ないと云ふて、毎日々々太夫衆を揚げることなさん達で、外の客をせぬに依つて、親方は上がつたり、今日の明日のと引ずられ、橋の寮に來い、合點ぢやと來て見たら、どこに金。首筋押へても取らにや置かぬ。ヤイ、おうらよ、この騷動にどこにゐるのぢや。おうらよ／＼。

うら　アイ／＼、親方さんの聲ぢやが、又なんぢやな。

ト障子より出る。

岩倉　コリヤ〳〵、玉の井、まだ去なされぬぞ〳〵。

ト同じく兩人、自墮落な形にて出て、おうら、皆々を見て

うら　ヤア、雲谷さん。休み場に待つてると云はしやんしたゆゑ、お前ぢやと思ふたに依つて……そんなら

ト岩倉を見て、愕りする。

岩倉　ヤア〳〵、玉の井ぢやと思ふたら、花車のおうらか。

うら　康綱さまかいな。オヽ、笑止。

岩倉　道理で臭い匂ひがしたわいやい。

石橋　ヤア〳〵、そんなら宰相どのは、アノ、おうらを締めさつしやつたか。

圖書　ハテ、物食ひのよい、公家の食ひ倒れだ。

岩倉　イヤ〳〵、康がおうらを締める筈ぢや。先祖は浦島でござる。

曾平　イヤモウ、どれも〳〵、かゝつた事ぢやない。よい加減に馬鹿つくさつしやれ。サア、どうぢや、金よこさつしやれぬと、石橋三位さまと康綱さまが、斯う〳〵ぢやと屆けまするぞや。

石橋　それを云はれてたまるものか。

圖書　コリヤ、雲谷、どうぞ仕樣はないか。

雲谷　エヽ、コレ、もう料簡がならぬぞや。

曾平　なんぢや、切るなら切られやう〳〵。

雲谷　おのれを眞二つに

ト拔かうとする。宗丹、出て

宗丹　雲谷、待て。

雲谷　イヤ、お留めなさるな。

宗丹　ハテ、何もかも皆聞いた。相手にならぬ狼狽へ者めが。

曾平　イヤ、宗丹さま、町人の無法者とは、金貸して取らうと云ふが、どうして又無法でござる。

ト宗丹、金を曾平へ打ちつける。

アイタヽヽヽ、こりや金ぢや。

宗丹　二百兩、受取れ。

曾平　オヽ、受取らいで。

ト取りにかゝる。宗丹、むね打ちに打ち据ゑる。

宗丹　身の程知らぬ奴、おのれ高家を客にした事申し上ぐると、うぬが首が飛ぶぞ。最前の樣な事も一度云ふて見よ。打ち放すぞ。

曾平　アイヤ〳〵、段々誤り入りました。
宗丹　金は身が續ける程に、雲谷、各々を伴ふて、いか程でも、やれサ〳〵。
雲谷　エヽ、有難うござります。今まで段々お金を貰ひましたゆゑ、ありやうは申し兼ねて居りました。
石橋　曾平、これから居續けぢやぞ。
岩倉　宗丹と云ふ尻押しがあれば
曾平　なんぼでも入らつしやりませ。
圖書　イヤ、慾面の引張つた奴ぢや。
　トばた〳〵にて、侍ひ一人出て來る。
侍ひ　ハツ、申し上げまする。佐々木左衛門さまに、追つつけ七つの刻限でござりまする、明朝のおこしらへにお歸りあるやう、お役所よりお迎ひでござりまする。
雲谷　なるほどさうであらう。左衛門さま左衛門さま。
　ト左衛門、出て來る。
左衛　宗丹さま、それにござりまするか。最前から一遍と尋ねました。
宗丹　イヤモウ、其やうに念が入つて、稽古するにも及ばぬてや。
雲谷　ハツ、お役所よりお迎ひの使ひ、參りましてござりまする。
左衛　スリヤ、最早參らずばなるまいか。併し乍らお客を差置いて、先へ歸るも
宗丹　イヤ〳〵、そりや苦しうござらぬ。何かと小用のあるもの。先へ出さつしやい。
石橋　俺も押附け後から參内する。
岩倉　大きに長居いたした。
宗丹　然らば先刻も申した通り、諸事は明朝、大内でお目にかゝらう。
左衛　いよ〳〵頼み入りまする。
圖書　イヤモウ、一面にお味方サ。
左衛　左樣ならば各卿、御免下されませう。
石橋　オヽ、明日逢ひませう。
岩倉　明日々々。
左衛　廓の者ども、皆大儀。
曾平　ハイ〳〵、ひどい目に逢ひました。
左衛　然らば宗丹さま。
宗丹　左衛門どの。
左衛　明朝。
兩人　御意得ませう。

ト唄になり、左衛門、先に、侍ひ附いて向うへ入る。

おうら、文を見附け、取り上げて

うら　文が落ちてあるわいな。

女皆　そりやさつき殿さんの

うら　なんぢや、頼みのお方樣、あとは火中。乙な文ぢやな。

雲谷　そりや宗丹さまの

宗丹　ほんに身共が

ト取り

ヤヽまだ封じ目切らぬ……頼む方樣、御存じより。御覽の後は火中、人に見せなと云ふ事か。こりやもうせきを拔いて、頼む方ぢや。

雲圖　追つかけての文とは、うまいな〳〵。

石岩　宗丹、そちが日頃の戀人、叶ふたか

宗丹　叶ふたとも〳〵。エヽ、有難い。

うら　ハア、そんならお前のかえ。

女皆　サア、こちらはもう去ならうぢやあるまいかえ。

雲谷　コリヤ、お客を捨てゝは歸されぬ。

宗丹　イヤ〳〵、廓の者は皆歸せ〳〵。

曾平　サア。大將樣のお許しが出た。太夫さん方、お出でなされませい。

女皆　そんなら皆さん、これにえ。

男皆　明日は必らず

女皆　待つてゐぬぞえ。

曾う　サア、行きませう。

ト唄になり、皆々、向うへ入る。跡、四人、文を讀む件。

雲谷　サア、これからは戀人の書簡、承りたい。

宗丹　さつきの狀の上、引續けてよこしたは、眞實ほんの事と見えるわえ。

石岩　エヽ、あやかり者め。

圖書　ちつとあやかる爲ぢや。われ等讀み上げうか。

宗丹　ひけらかすではないが、大聲あげて讀んで下され。

石岩　さらば聽聞仕らうか。

圖書　愈々御機嫌よくお渡りなさるべくと悦び入り候ふ。左樣候へば雲谷に文遣はし候ふ。大方御覽も候はんと存じ候ふ。

宗丹　見たとも〳〵。

圖書　隨分々々厭らしき事ども書き連ね候ふゆゑ、若しも御覽もなされては。お笑ひ草と存じ候ふ。

宗丹　隨分臆らしいのがいゝ。なに笑ふもので。
石橋　ドレ〳〵、ちつと我れらが讀んで遣はさう。前方京に居りし時分から、色々口說き候へども、身しんたえて宗丹は臆にて候ふゆゑ、七里結界、願籠めいたし候ふお庇にて、お前樣と連れ添ひ、朝夕有難く存じ候ふ。
皆々　ヤア。
宗丹　も一度讀んで聞かせなされい。
石橋　身しんたへて宗丹は臆にて候ふゆゑ、七里結界
岩倉　ドレ〳〵、大分風が變つて來た。後を麿が讀みませう。
ト取つて
七里結界。願籠めいたし候ふお庇にて、お前樣と連添ひ、朝夕有難く存じ候ふ。なんの事ぢや。
ト雲谷、取つて見て
雲谷　こりや最前のとは違ふたか。
宗丹　大事ない、後を讀め。
雲谷　ハイ。
宗丹　早く讀め。
雲谷　ハイ。
ト氣味惡さうに
所に又々家來雲谷を賴み、色々と口說き申し候ふゆゑ、元より宗丹は臆にて、阿呆とも存じ候ふが、雲谷めが振舞ひ、より〳〵に手討ちと存じ居り候ふ。ヤア。
宗丹　サ、後を讀め。
雲谷　ハイ。
宗丹　讀めやい。
岩倉　エヽ、讀んでしまへやい。
ト引つたくり
惡緣契り深しと、今度の御上京、宗丹に御所の作法御習ひ、諸事お賴みなさらねばならず、それゆゑ私しに宗丹への文遣はし候ふ樣に、こま〴〵御申し越しゆゑ、筆も硯も穢れし樣に存じ候へども、道ならぬ文遣はし申し候ふ。
ト思ひ入れ。
圖書　ドレ、ちつと讀まうか。御申し越しの通りあの文にては、いかな宗丹も腰うち拔き申すべくと存じ候ふ。お使ひ首尾よく濟み候ふ後にては、思し召しの通り宗丹を引出し、赤恥を搔かせ候ふ心に御座候ふ。一體慾深き侫人にて御座候ふまゝ、そのお心得、又國へお歸りの節、雲谷を逆ばつゝけにお上げなさるゝ由、御尤もに存じ候

皆々　ヤア〳〵。

ト悧り。

圖書　御機嫌にて早く御歸宅待ち入り候ふ。火中々々。左衞門賴方さま參る。阿國より。ムウ、そんなら賴む方様と讀んだは、賴方さまの事であつたか。

皆々　コリヤ、どうだ。

石岩　宗丹、こりやどうしたものであらう。

ト本調子の合ひ方。右のうち、宗丹、腹の立つ事あつて、文を取つて、思ひ入れ。

宗丹　今まで下された金、騙られたと思へば濟む。

ト雲谷を見て、思ひ入れあつて、向うへ行かうとする。

雲谷　待つた。

宗丹　物ぬかすと打ち放すぞ。

雲谷　なるほど御立腹は御尤も。今までこなた樣を僞り、金銀を騙り取つたかと、思し召す所がどうも濟まぬ。サア、お手にかゝりませう。

ト宗丹、戻つて、切らうとする。

宗丹　ぶち放すぞ。

雲谷　今の狀の文體、國へ行けば逆ばつゝけ、どちらでもない命。エ、憎いは左衞門め、きやつらに恨みてこそあれ、大恩はこなた樣。

ト宗丹、思ひ入れして

宗丹　もうなん時ぢや。

圖書　追つゝけ夜が明けまする。

宗丹　おのれそれ程に思ふなら、云ひ附ける用がある。

雲谷　何なりとも。

宗丹　コリヤ。

ト囁く。

雲谷　畏まりましてござりまする。

宗丹　行け。

雲谷　ハツ。

ト時の鐘にて、向うへ入る。

圖書　宗丹どの。

石岩　そちが心は

宗丹　コレ。

ト段々囁く。

三人　なるほど。

ト思ひ入れ。下座より左馬次郎、岡平、出て來たり

左馬　最早鷄鳴。

岡平　お供廻りも、殘らず揃ひ居りますでござりまする。

石橋　然らば宗丹、

岩倉　直さま出仕。

宗丹　列國の諸侯も、かほどまで心置かるゝ宗丹へ、恥辱を與へるにつくい女、恨み重なる左衞門め。

左岡　エ。

宗丹　サ、參りませう。

左馬　お立ち。

トヘ、アと聲する。下り葉になり、石橋、岩倉、宗丹圖書、岡平附き添ひ、向うへ入る。道具廻る。

本舞臺、一面の御簾かゝりたる高欄附きの廊下になる。

ト左衞門、花道より、靜々と出て來る。下座より、公家一、素袍にて出て來たり、左衞門と花道にてすれ違ひさま、躓く。

公一　無作法な奴の。

左衞　御免なされませい。

公一　わりや誰れぢや。

左衞　イヤ、御免なされませ。

公一　見知つたぞ。

左衞　イヤア〳〵。

ト云ひ捨てにして、公家一、向うへ入る。左衞門、本舞臺の方へ來る。下座より公家二、素袍にて出て來る又行き當り

公二　アイタ、、、、。

トこける。左衞門、抱き起こし

左衞　これは不調法。御料簡なされませ。

公二　ヤイ、わりや見馴れぬものぢやが、誰れぢや。

左衞　私しは鎌倉の上使。

公二　ムウ、侍ひが御所へ來るに、疊さはりの作法も知らずに參つたか。但し鎌倉からからせいと云ひ附けたか。

左衞　イヤ、眞平不調法でござりまする。

公二　後日に屹と云ひ附ける程に、さう思へ。

ト行かうとする。

左衞　イヤ、それは

公二　エ、慮外者めが。

ト突き飛ばし入る。左衞門、思ひ入れあり

左衞　ムウ、宗丹どのは何して、どこへ行かれた事ぢや。

トうろ／＼する。又下座より、公家三、出て來たり

公三　それに居るは何者ぢや。

左衛　イヤ、對顔の間へはどう參じまする。

公三　ハヽ、服改めて、對顔の間を知らぬのか。ハヽヽヽハ。

左衛　イヤ、ちと便りにする人を見失ひました。何卒お教へなされて下さりませ。

公三　對顔の間か。それは斯う行つて斯う行け。

ト頭にて教へる。

左衛　どう參じまする。

公三　さう行くのぢや。

左衛　どうでござりまする。

公三　さうおやと云ふに。エヽ、鈍な奴の。

ト中啓にて色々教へ、トヾ左衛門が額を突き、ついと向うへ入る。

左衛　なんと云ふても頼りにする人がゐぬに依つて、どこへ行かうも知れぬ。

ト當惑の所へ、向うより岩倉、出て來たる。

イヤ、これは岩倉宰相。よい所でお目にかゝりました。扨て夜前は

岩倉　コリヤ／＼、われは遂に見た事もない者ぢやが、誰れぢや。

左衛　ハテ、私しでござりまする。

岩倉　私しとは、聞けば鎌倉の使ひとあるが、武士に心安う物云はれる覺えはない。夜前とはなんの事ぢや、知らぬぞ。

左衛　なるほど御尤も。遂にお見受け申した事はござりませぬが、ちと御無心がござりまする。對顔の間へはどう參りまする。教へさつしやつて下さりませ。

岩倉　對顔の間か、それはな、われが足の向いた方へ行け大馬鹿め。

ト惡口して、これも下座へ入る。左衛門、呆れて

左衛　こりや食ひ違つたか。併し岩倉宰相がから行かれたからは、この方が

ト奥を見て

櫻と橘が見える。斯うぢや／＼。

ト行く。これより御殿を引出す。左衛門、御簾の側へ行く。御簾低うかゝりあるを、扇にて上げる。圖書、出て來たり

圖書　コリヤ／＼、御簾を上げる事はならぬ。潜れ／＼。

左衛　さう仰しやるは圖書さま。餘り御簾が低うござりまする。もそつとお上げなされて

圖書　ヤイ／＼、御簾を上げいとは、御所の事を采配するか、慮外者めが。

左衛　采配はいたさねど、この約束では

圖書　約束とは何を約束。御簾へ手をさへると後日に屹と鎌倉へ申し附けるぞ。

ト左衛門、はつと思ひ入れあり、御簾を潜る。圖書、烏帽子を持つて落とす。

不吉者めが、烏帽子を落とした。管領へ申し上げるぞ。待つて居れ。

ト走り入る。

左衛　ヤ、コレ、申し。

ト思案して、胸を極めたる思ひ入れにて、烏帽子をさし、又御簾の所へ行く。奥より、石橋、圖書、宗丹、その外大名四人出て來たり

圖石　鎌倉の上使、御座所ぢやぞ。

左衛　ハア。

トこれにて、遙か下つて、思ひ入れ。

圖石　御座近う參れ。

宗丹　出御。

ト下り葉にて、御簾少し上げる。

圖書　毎度の格式に任せ、眞の御太刀を下さるゝ。

左衛　ハア。

ト宗丹、御簾のうちより、黃金作りの太刀を出し、鞘を振り、身ばかりをやる。左衛門、見て、悔りして、柄の方を取らうとする。圖書、白刃を突きつける。色色あつて、左衛門、取る。

皆々　御座が近い。白刃を隱せ／＼。

左衛　ハア／＼。

ト裝束の袖の下へ隱す。

皆々　頂戴物、隱すは緩怠。

左衛　ハア／＼。

ト出す。

皆々　眞劍狼藉。

左衛　ハア／＼。

石圖　天下の下され物、腰へ脇挾む慮外者め。

左衛　ハア／＼。

皆々　眞劍狼藉。

左衛　ハア／＼。

皆々　ト又隱す。
　隱すは緩怠。

左衞　ハア〳〵。
　ト出す。このせりふ、疊みかけて、色々あり、出し入れ度々あつて、トゞ左衞門、器用に卷き、腰へ差す。

宗丹　先格の進物はなんと。

左衞　先達て進獻の間へ、差上げましてござりまする。

宗丹　不調法千萬な奴、進獻の間に受取つたる者一人もない。直ぐに持つて上らぬは不念、狼藉、法外な奴の。

左衞　ハツ〳〵。
　ト此うち無念なる身振り少しあり

石橋　お盃頂戴。
　ト石橋、三寶に土器乘せ、御簾へうちより持ち出で、左衞門が側へ置く。土器を割つて置く。左衞門、土器を取り、割れてあるゆゑ、ちやつと懷へ、袱紗に包み入れる。
此度の上使、甚だ法外の至りなれども、其まゝに差し赦す。退れ〳〵。

左衞　ハア。
　ト左衞門、下の方へ行く。向うへ公家一、二、立ち塞がる。上へ行く、岩倉、公家三、立ち塞がる。石橋、圖書、其ほか大名、宗丹、下り立つて、左衞門を中へ取り卷く。
　コリヤ、いづれも樣、なんとなされまする。

公一　イヤ、なんとも致さぬ。承はれば左衞門どのには、亂舞がお上手でござるさうな。誠に御內證には以前舞子とやら、貴殿が打つて御內證が舞はるゝと、兼ねて承はつて居つたが、ちとその妙手を

皆々　承はらうと存じて

左衞　アイヤ、どう致して、未熟なる技藝、なか〳〵お耳に觸れるなどゝ申す儀は、且つ所もござらうに今日は大禮、場所がらと申した樣な儀は

公二　ならぬと云はつしやるか。場所がらとはまだしもの一言、左程場所を辨へる者が、なぜ今日の式禮、知らずに出仕召された。問合はせは誰れでござる。師匠番は誰れでござる。

左衞　サ、それは
　ト宗丹を見る。宗丹、顏を背向ける。左衞門、じつとなる。

圖書　エヽ、扨ては問合はせも師匠番もござらぬか。田舍

者と申す者は、押しの強いものでござる。コレ、鎌倉管領持氏どのゝ館とは違ふぞよ。御所と云ふ所ぢやぞよ。

岩倉　これがほんの盲目蛇に怖ぢずと譬への通り、春先になると、かやうな蛇めが、ぬら〳〵と出歩るきまして、こんな蛇めが

ト左衛門が額を、中啓にて突く。

公二　さう云はるれば、どうやら蛇に似て居ります。いけまじ〳〵としたこの面は、イヤ、面の皮の厚い蛇でござる。

ト同じく額を突く。

左衛　イヤ、どのやうになされても、知らぬ事は存じませぬが、その式禮の御指南受けうと申したれど、仁木さま細川さま、圖書さま、宗丹さまにも、餘り酷い。

三人　ナニ、酷いとは。

左衛　イヤサ、宥までは

石橋　宥までとは、上使が宥に對面しても大事ないか。

左衛　イヤサ、それは

圖書　大事の上使が、御對面もすまぬうち、我れ〳〵へ逢うても大事ないか。

岩倉　逢ふたが定か、宥までとは

皆々　宥までとは〳〵。

左衛　イヤ、遂にお目にかゝりませぬ。

皆々　その筈〳〵。

左衛　宗丹どの、段々の御雜作、お禮はゆるりと申さう。先づ差當つて土器が割れました。直ぐに鎌倉へ下しませねばならぬ土器、どうぞ所望させて、せめてはそれ程の事は相違なう、下さるまいか

宗丹　替へ土器とはなんの事ぢや。

左衛　ハテ、この間から數へさしやつた、替へ土器の事。

宗丹　お盃は其まゝで、直ぐに鎌倉へ遣はす。あの方で戴く物ぢやが、アゝ、お上がりの土器は捨てゝ、仕舞ふて、餘の土器を鎌倉へやるのか。

左衛　イヤ、左様ではなけれども

宗丹　阿呆盡したら鎌倉まで祟りが行かうぞよ。アノ、大だわけめ。

ト左衛門を蹴る。思ひ入れあつて

左衛　ハア、よう思へば、扨てはなんぞ足らぬ物があるに依つて、僅かに此やうになつたと見える。後日に謝禮はいか程でも用立てませう。

宗丹　コリヤ〳〵、謝禮とはなんぢや。なんの事ぢや。上様の土器をごもくへ捨てゝ、金で買ふた土器を鎌倉へやるのか。

左衞　イヤ、全く左様ではござりませぬ。

宗丹　先づ第一見た事もないざまで、横柄に宗丹どのなぞと、餘り横柄にぬかすと青侍ひに云ひ附け、頤を切つて放すぞ。

左衞　それはあんまり。

宗丹　あんまりとは。

皆々　あんまりとは〳〵。

左衞　サア〳〵、なる程どなたもお近附きではござりませぬ。うや〳〵しい御所へ参りまして、少し氣を取りのぼしましたか、てんどう致したさうにござりまする。眞平お赦されて下さりませ。

宗丹　さう云へばまだしもぢやが、今日の格式は皆破れた後日にお祟りが行く程に、さう思ふて覺悟して居らう。

左衞　なる程かうなりまするからは、後日のお咎めは覺悟の前。又宗丹どの、餘り酷いと申すもの。宵までは式作法殘る所なく、懇ろに指南なされて、今更此やうな事はなんぞ一物なけりやアならぬ。どう云ふ事で此やうに、惡く横に出さつしやるは

宗丹　横とは、なんぢや〳〵。

左衞　サア〳〵、横と申すは拙者が事、各々様の事ではござりませぬ。宗丹どの、所詮この度の役目を損じた上からは、私しは縛り首に逢ひましても厭ひはござらぬが、お盃の土器、眞の御太刀は鎌倉へ納めねば、末代まで鎌倉の名折れ。爰をとつくりと聞き分けて、コレ、武士が手を下げる、假にも持氏の御名代、頭をすり附けまする程に、その土器をどうぞ下さりませ。

宗丹　ア、氣の毒な事ぢや、なるほど土器は只二枚、一枚は宗丹が持つてゐる。コレ

ト出して見せ

欲しからうなア。さつきに土器を割つたのも俺が業。

左衞　なる程、よく〳〵お腹の立つ事があるに依つてゞござりませうが、いかやうになりともお腹のいる様にして、その土器を下されい、賴みまする。コレ、宗丹どの、イヤ、宗丹さま、どうぞ下されい、賴みまする。

宗丹　コレ、皆々、この吠えるざまを見さつしやれ。

圖書　ドレ、吠える面へ扇一手、ふるまはうかえ。

ト叩く。

石橋　俺も一つ食らはさう。

皆々　イヤ、これ食らへ〳〵。

ト皆々散々に叩き伏せ、蹴る。左衛門、キツとなる

宗丹　無念なか。

左衛　なんのこの位な事、無念でござりませう。

宗丹　それならば又土器、やるまいものでもない。

左衛　どうぞ下されい。

宗丹　オヽ、やらう。

ト扇にて、額へ疵附ける。左衛門、キツとする。

無念かな。

左衛　なんの無念にござりませう。

宗丹　おし附けやるぞ。

皆々　ドレ、早く貰ふやうにしてやらう。

ト蹴倒す。

圖書　ドレ、俺も貰ふてやらう。

ト叩く

宗丹　もうやるぞ〳〵。

左衛　どうなりとなされませ。

皆々　オヽ、どうなりとせうわえ〳〵。

ト左衛門を蹴倒し、踏みにぢり、色々ある。左衛門、宗丹が側へ行き

左衛　サ、もうこれ程なされたからは、腹いつたでござりませう。

宗丹　その位にしたらもうよい。今こそやるぞ、と云つたらよからうが、マアならぬ。

左衛　此やうにしてもなりませぬか。

宗丹　コリヤ、これを見よ。これでならぬ。

ト以前の状を抛る。左衛門、取つて、ちよつと見て、愕りする。

左衛　スリヤ、この状を見たゆゑに

宗丹　うぬが絶體絶命、土器は斯う。

ト打ち割る。

左衛　もう是非に及ばぬ。

ト宗丹に切りつける。疵附く。皆々、介抱する。

皆々　ヤア、斬つたワ。

ト立ち騒ぐ、これより左衛門、皆々と少しタテあつて追ひ込み、思ひ入れあつて、裝束を括り、身輕になり爰へ半素袍、長道具を持ちたる捕り手、出て、立ち廻りあつて、これを追うて入る。ト又元の廊下に戻る。公家大勢、あちこち逃げ歩るき、騒ぐ事あつて、入る

ト石橋、下座、圖書、向うより、出て

石橋　サア、大ていの事ではない。

圖書　細川どのか。

石橋　圖書どの。宗丹どのはなんとなされた。

圖書　宗丹どのは今出川の御門から、二條の將軍屋敷へ送りました。

石橋　上樣や女中はどうぢや。

圖書　關白方のお指圖で、夜の御殿へ入られましてござりまする。北面の者に固めさしました。

石橋　淀、伏見、膳所の屋敷へ、早打ちにて知らしたれば追つけ加勢が來るであらう。

圖書　萬事關白方へ伺ひませう。

ト兩人、左右へ別れ入る。ト向うより左衞門、捕り手八人と立ち廻りながら出て來たり、タテあつて、八人を追ひ込む。上下の口より、公家一、石橋、公家二、公家三、岩倉、圖書、皆々裳束凛々しく括り上げ、左衞門を取り卷く。花々しきタテあつて、この間々に

左衞　卑怯な宗丹、出ぬか、出合はぬか。

ト宗丹を尋ねる。此うち始終遠攻め。左衞門、大勢を切り伏せ、花道へかゝる。向うにてアリャ／＼の聲するゆゑ、下座へかゝる。又聲するゆゑ、立ち留まる。一人かゝるを、切つて捨て、ぽんと井戸へ入る。ト石橋、大勢を連れて出て來たり

石橋　南無三寶、空井戸へ取り逃がした。お次の堀り拔き水門を探せ／＼。

ト皆々、向うへ走り入る。ドンチヤンにて、道具廻る

本舞臺、幕明きの築地になり、道具留まる。

ト下座より官人の仕出し大勢出て來り、入れ違ひ尋ね合ふて、入る。ト鳴り物になり、左衞門、水門を破り土器、眞の御太刀を持つて出て來たり、邊りへ思ひ入れあつて、靜かに裳束を脫ぎ、御太刀、土器を包み、側へ置き、身繕ひして、腹へ突き立てる。向うバタバタにて、左馬次郎、出て來り、この體を見て

左馬　ヤア、左衞門さまか。

左衞　オヽ、左馬次郎か。

左馬　ハツ、今少し早く馳け附けたら、かく闇々とは御生害はさせまいもの。チエヽ、殘念な。

左衞　イヤ、悔むな。御所騷がしたれば、牛裂き釜煎りの刑罪は知れた事、切腹するが我が本懷。

左馬　委細の樣子は承はりました。小栗宗丹が奧方へ無證の戀慕、それゆゑの邪しま。
左衞　無念に無念はこらやうが、眞の御太刀、お盃の土器は此とほり、鎌倉への申し譯、どうも立たぬ。
左馬　御尤も。併し宗丹を討ち洩らし、嘸殘念に思し召しませう。
左衞　シテ、宗丹はなんとした。
左馬　疵養生に二條の屋敷へ歸りました。
左衞　エ、。
左馬　お道理でござりまする。
左衞　そちは身が首に此お盃の土器、眞の御太刀を添へ鎌倉へありの儘に言上いたし、お指圖を待て。
左馬　ハツ、ありの儘に言上せば、理非は立つても、御所騷がしたる科、輕うてからが門前拂ひ、お國を沒收せられなば、奧樣や若樣は追放、後室にはいづくの大名へかお預け。
左衞　佐々木の家も斷絶。
左馬　お國も城も、身のなり果て。
兩人　エヽ、口惜しい。
ト兩人、思ひ入れあつて

左衞　コリヤ、この腹へ突込んだる刀、名古屋山三に渡し宗丹を討ち洩らしたが無念なと云へ。
左馬　畏まりました。修羅の御無念晴らさせまする程に、潔よう御臨終。
左衞　云ふにや及ぶ。サヽ、介錯いたせ。
左馬　ハツ。
ト立つて、白刃を振り上げる。チョンと木の頭。左衞門引き廻す。キザミにてよろしく　ひやうし幕
ト幕引き附けると、エイと首打ち落とす。跡シヤギリ

二幕目　佐々木館の場

役名――佐々木桂之助。後室、藤波。阿國御前。門弟、丹五。同、文藏。同、九平太。同、喜六太。同、佐五郎。同、本兵衞。犬上團八。三上官藏。笹野才藏。長谷部雲谷。土佐左馬次郎。土佐將監光任。傾城、葛城。銀杏の前。金魚賣り、金八。土佐の又平。名古屋山三。不破伴左衞門。

本舞臺、三間の間、中足の御殿、向う金襖、上下綱代塀、跳らへの通り、幕のうちより、上に伴左衞門、下に山三、上下、上手に門弟一、二、三、下手に四、五、六、麻上下、双方の門弟にて、反り打ち、詰めかけ居るを、小姓一、二、中へ入り、留めて居る。二重舞臺に後室藤波、立ちかゝり、早き舞ひ、バタバタにて、幕明く。

三人 サア、眞劍の勝負〳〵。

ト立ちかゝる。

藤波 双方ともに自らが、待てと申すに、マアマア、待たぬか。

小一 いづれも、後室樣の御意。

小二 お扣へなされい。

三人 デモ、餘りの過言。

伴左 これは門弟衆、何をざわ〳〵。不破と名古屋が太刀筋、どちらがよい惡いは、犬打つ童も存じの事。今爭ふには及ばぬ。仰せ渡されたる刻限に、竹刀打ちの勝負。その時物の見事に勝つて、伴左衞門が望みは叶へる。扣へてござれ。

門皆 その廣言ゆゑ我れ〳〵が。

山三 これはしたり、後室樣の御意と云ひ、そりやいかゞの儀でござる。無敵流と眞影流、勝負に打勝つた方が、御用を勤めるお上の御意。いまだ何れとも解らぬうちに、立ち騷いで無禮千萬。扣へてござれ。

門皆 でも、餘りなる過言ゆゑ。

山三 ハテ、理非は勝負にあるでござる。

藤波 佐々木の知行この江州は、名に負ふ湖水、山々も數多なるゆゑ、山三は山奉行、湖の支配は伴左衞門と、申し附け置きたるに、互ひに威勢を爭ふて、役目等閑。

門一 伴左衞門どの、湖方の百姓ども、湖年貢の儀を願ひ居りまするが、いかゞ申し出だしませうな。

伴左 ハテサテ、最前から申す事をなんと聞き召さる。今宵の勝負に打勝ち、湖も山も一つに支配。その時萬事申し附けうとお云やれ。

門四 イヤ、山三どの、山方の持ち〳〵申し出だした願ひ、いかが計らひませうな。

山三 各々も只今聞かるゝ通り、是非今宵中には、いづれ此方へかため取り、諸事申し附けるであらうと仰せられい。

伴左　ハヽヽヽ、いかさま盲人千人目明き千人とはよく云つたもの。いま日本に眼を患ふる者、絶えない不破伴左衛門が、門弟になつた各々方は、コレ目明き。薪ざつぱで犬猫を叩く様な劍術を、有難く信仰する奴等は、即ち盲目、馬鹿者とはこの事。

門背　左様でござります。

伴左　福と貧乏ほど違ふ流儀を知らぬとは、不便な事だてなア。

山三　人間は水と見れば、天人は瑠璃と見る。まつた餓鬼はこれを焔と見る。劍術もまつその如く、邪しまを以て向ふ時は、刃金もなまり無刀も同然。

門二　山三どの、其許のお弟子は明き盲目ではござらぬか。

山三　武術ばかりでなく、文學も武士の嗜み。

伴左　イヤ、皆よく聞かれよ。アノ、大鵬と云ふ鳥は、片羽がひが九萬里づゝ延びると云ふ大鳥。見た事はござるまいな。

門三　ついぞ拜見仕らぬ。

伴左　見たらばこれだ。

ト我が鼻を教へ

身ども大鵬でござる。兵法に取つては片羽がひが九萬里も延びる。その大鵬の前とも憚らず、盲目雀どもがチヤチヤクチヤ〳〵と、ムヽ、ハヽヽヽ。

山左　イヤァノ、烏と云ふものは、えて月などが冴えますると、夜が明けたと心得、ガアガアと吠えます事。これを彼の阿呆鳥と申すが、なんとよく啼く烏めではござらぬか。

門五　なる程よく啼きまするてな。

山三　色の黒いは憎まねど、口に憎まれまする。

伴左　オヽ、憎むと云ふ烏、因縁聞かうか。

山三　烏の因縁聞かうとあるに、雀の因縁聞かずにもゐられまいか。

立三　左様でござる。お聞きなされい〳〵。

トせき立つる。

伴左　ハヽヽヽ、雀が囀るワ。

立三　ナニ、雀とな。

伴左　イヤ、こりやお身達の事ではない。雀の事、貧乏雀の事、ナア、何れも。

敵三　左様々々、不愍な事でござる。

山三　ハヽヽヽ、烏どもが啼くワ〳〵。

敵三　ナニ、烏とは。
　トせき立つる。
山三　アイヤ、こりや其許方の事ぢやない。烏めが事でござる。
伴左　ヤイ、雀、よく聞け。あの猿と云ふ奴が、おのが面の赤いを誠と心得、金色の佛の面を見て笑ふとよ。
山三　あの蟹と云ふ奴が、うぬが横に歩るくを誠と心得、人の直ぐに行くを見て笑ふとサ。
伴左　澁柿が甘い柿の人に食はるゝを見て、笑ふとよ。
山三　磔刑が獄門を見て、足がないとて笑ふとよ。
伴左　そちや獄門の鹽梅、よく知つてゐるな。
山三　知らずばちと知らさうか。
伴左　習はうか。
山三　アノ、お身が。
伴左　そちが。
山三　小癪な。
　ト双方立ちかゝる。
藤波　双方ともに、マア、待たぬか。
兩人　でも。
藤波　女と思ひ、侮つての爭ひか。

兩人　ハア、恐れ入りましてござりまする。
藤波　そち達兩人は、武術の師範をいたす者ゆゑ、かたみ恨みのない様に、山三には山方、伴左衞門には湖方と、支配を受けて申し附けるに、又しても今の如く、爭ひに役目延引。殊に今宵は次男桂之助へ、土佐將監の娘銀杏を、婚禮の夜ではないか。家督左衞門は鎌倉の上使に上京の留守と云ひ、目出度い夜に口論に及び、家事不取締りと、主に恥辱を掻かすのか。
兩人　イヤ、全く。
藤波　その心のそち達ゆゑ、今宵子の刻に、兩人立合ひの勝負を決し、勝つたる方へ師範の印可を渡し、湖も山も一人に支配、云ひ附けいとある云ひ附けなれば、兵法も役目も勝つた方へ、承る筈でないか。それにマア今の爭ひは、主を蔑ろにするのか。
兩人　サア、その儀は。
藤波　以後を屹と愼んでよからう。
兩人　ハア、恐れ入りましてござりまする。
藤波　子の刻までは魚と水との交はり、家中の者へも篤と云ひ附け、必らず粗相のない様に。
山三　ハツ、イヤナニ、伴左衞門どの、この座に後室様と

申す重しがなくば、そこ許と口論刃傷にも及びませうに
御主人は有難いもの。身共が粗忽、御用捨下されい。

伴左　何サ、最上な貴殿の武術をさみなしたは、自分が誤り。

山三　イヤ、手前が不調法。

伴左　イヤ、身共が。

山三　手前が。

伴左　互ひに。

兩人　御用捨に預からう。

　ト思ひ入れ。

藤波　オヽ、二人ともその心なら、山方湖方の者も子の刻まで、中の口に扣へ居れと申し附けい。

小姓　畏まりました。

伴左　後室樣にも一先づ奥へ。

藤波　皆も一緒に。

山三　伴左衛門どの。

伴左　山三どの。

山三　勝負も子の刻。

伴左　後刻。

兩人　御意得ませう。

　ト唄になり、藤波先に、一件殘らず奥へ入る。右の唄長く、向うより桂之助、若殿、上下にて、文を讀み讀み出て來る。犬上團八、これも上下にて、島臺、長柄を持ち、附いて出て來たり、花道にて

團八　モシ〳〵、若殿桂之助さま、今宵は姫君のお入り、嘸お悅びでござりませう。

桂之　なにを、その奥が來るので、腹が立つやら氣が揉めるやら、氣が氣ではないわい。

團八　これは怪しからぬ。誰れあらう繪所土佐將監さまの娘御、美しい銀杏の前さまと云ふを。

桂之　イヤモウ、銀杏やら紙帳やら、この緣組みを破つて欲しい。

團八　ムウ、その破りたいと云ふも、その文からでござりませう。

　トちよつと手をかけるを。

桂之　ア、コレ、この文破つてたまるものか。

　ト隱すを

團八　でも、それが、祝儀は否との腰押し。

桂之　イヤ、これよりは、しつかりとした腰押しが欲しいわい。

ト合ひ方にて、桂之助、そわ〳〵と舞臺へ來る。
團八　イヤモシ、腰押しが欲しいと今のお詞、御家來の犬
上團八、どのやうにも働きませうが、嫁御を厭と仰しや
るも、兼ねて馴染みの。
ト女郎の眞似をして
奴めゆゑでござりませうが。
桂之　なるほど黒星。ありやうは云ひ交した太夫葛城。兄
貴が都へ上使に行かるゝに附き、供に行た雲谷に、身請
けの事を云ふてやつたれど、埒が明かぬと云ふて廓から、
コレ、急の文。
ト文を出して、今の讀みさしを讀む。
團八　なる程、それでは嫁御が厭も御尤も。
桂之　どうぞ變替へる思案はないか。
團八　サア、思案と申して今宵の祝言、壁に馬。
桂之　アヽ、から云ふ時に、孔明か楠が欲しいなア。
ト思ひ入れ。この時向うにて。
官藏　慮外者め、退り居らう。
トてんつゝになり、向うより金八、やつし、金魚賣り
の荷を擔ぎ、出て來るを、官藏、上下にて、陸尺棒を
つき、出て來たり

ヤイ〳〵、おのれ御殿をつか〳〵と、見れば金魚賣りめ
だな。
金八　左樣でござりまする。金八と申す緣日商人。もう時
分柄暖かでもあり、目高や金魚を賣り附けませうと。
官藏　イヤ、そんな御用がありやア、お出入りへ云ひ附け
る。知らぬわいらが、のぶとい奴の。
金八　わしを知らぬと云ふお前こそ、爰のお屋敷では見馴
れぬお方、新參のお方かえ。
官藏　サ、それは。
金八　なんと何れも樣、あなた方も御存じでござりますま
い。
官藏　アヽ、コレサ、さう云はれては仕方がない。ありや
うは俺は今度、加賀屋の親方と一緒に來た、中村芝六と
云ふ者よ。
金八　ムウ、そんなら俺と一つ幕。早うそれを云やア、心
遣ひせぬものを。
官藏　どうぞ何れも樣の御贔屓して下さる樣に。
金八　ハテ、そりや追ひ〳〵に願つてやらうが、その代り
俺も貴樣に頼みがある。
官藏　頼みとは。

金八　サア、金魚を賣り附けうと云ふは嘘。俺は土佐の將監と云ふ人の娘と、疾うから云ひ交はしてゐる。
官藏　ムウ、スリヤ、アノ、今宵この屋敷へ嫁入りしてござる、銀杏の前さまの事か。
金八　サア、その銀杏々々、いてふ馬鹿にした、嫁入りと聞いて腹が立つて、口惜しいやら。なんとこの祝言、變替へになる工夫はあるまいか。
官藏　サア、工夫と云ふて足もとから鳥。殊に俺はまだ初初しい事なり。
金八　コリヤ、工夫は出來ぬと云ふか。
官藏　ハテマア、とつくり枕を碎いて。
ト考へる。此うち桂之助、文を見て、色々思案。團八は花道へ來たり、樣子を聞いてゐる。官藏、心附きたることなしにて
イヤ、よい事がある。思ひ出した〱。
金八　あるか〱。
官藏　イヤ、俺はないが、こんな事にはよい智慧を出す、犬上團八と云ふ男、この人にとつくり。
團八　イヤ、相談に及ばぬ。呑込んだ。
トそこへ來る。

官藏　ヤ、こりや團八どの。
金八　スリヤ、委細の樣子を。
團八　とつくりと聞いて、工夫は附いた。
金八　スリヤ、婚禮を邪魔さすか。
團八　ハテ、物數云はずと、一緒に來やれサ。
ト管絃になり、三人、舞臺へ來たり
若殿、今の工夫は附きました。
桂之　スリヤ、アノ、嫁入りして來る
團八　サア、その銀杏の前さまには、云ひ交はしてござる蟲の男めがござる。
桂之　ヤア、スリヤ、アノ、箱入りぢやと思ふてゐたに。シテ、その男めは。
金八　小鬢ながら金八と申す、私しめにござります。
トそこへ出る。
桂之　オヽ、よい男ぢや。よう蟲になり居つた。
金八　エヽ、スリヤ、あなたの方でも、銀杏の前どのには。
桂之　とんと望みなし。こつちにも云ひ交はした、葛城と云ふ太夫がある。
金八　スリヤ、お前も銀杏の前と祝言は、厭でござりまするか。

桂之　厭も厭、極上々の厭。
金八　そんなら合ふたり叶ふたり。
官蔵　今宵の祝言をちやつちやむちやらにする、團八どの、思案がござるか。
團八　そりや手もない事。金八とやら、そちや人に見知られぬを幸ひ、武士と偽り、すわ祝言と云ふ時、ゆすりかけい。
金八　そりや、どうしてな。
團八　知れた事。手前は何の某と云ふ者、即ち土佐の将監が娘銀杏と云ひ交して、夫ある者をめとるは、不義間男と、ねだり込め。
桂之　なるほど面白い。
團八　そこで桂さま、お前は扨てはさうか、左様な淫らなものを女房には持たれぬ、去つたと離縁するワ。
金八　これも尤も。
官蔵　いかさま智慧もあるもの。さう云やァ後室どのも言分云はれず、離縁になつた所で其あとは駈落ち、将監どのも娘の事、ついそれなり夫婦になられる。
桂金　奇妙々々。
團八　なんとよい智慧であらうがな。

金八　南無大上結ぶの神様。
桂之　シテ、手前、すわと云ふ時、侍ひになれるか。
金八　なんでも強う聞かせる名はあるまいか。
官蔵　武士で強いは猪武者、猪々。
團八　イヤ、猪より熊が強い。
金八　そんなら苗字は猪の熊。役柄知れると云ふ心で、名は門兵衛とせうかえ。
桂之　猪の熊門兵衛、こりやよいわい。ハヽヽヽ。
ト所へ、バタ／＼にて、向うより侍ひ一人、走り出て來る。
侍ひ　申し上げまする、
官蔵　何事ぢや。
侍ひ　大津の町人山形屋善八と申す者、若殿様に是非お目にかゝらうと申しますが、いかゞ計らひませうな。
桂之　ヤア、そりや俺が金を借用した
ト思ひ入れあつて
團八　コリヤ、何か若殿の内證事、爰にゐてはお差合ひ。その町人、これへと申せ。
侍ひ　ハツ。
ト向うへ取つて返す。

官藏　さう云ふ事ならこの官藏も、御一緒に奧へ參らう。

關八　金八にはまだ云ひ敎へる事もあれば、身共に附いて

金八　ハイ〳〵、左樣なら殿樣、必らず云ひ合はせの通り

桂之　いづれ後程。

金八　狂言たつぷりやりますぞえ。

ト唄になり、關八、官藏、金八附いて、奧へ入る。この唄のうち、向うより善八、やつしにて、出て來たり。

善八　ヤア、桂之助さま、そこにござりまするか。

桂之　ヤア、山形屋善八か。

ト奧へ行かうとするを。

善八　どつこい、逃がす事はならぬ。お前も大名の若殿に似合はぬ事をさつしやりまするな。

ト引留める。此うち伴左衞門、出て、聞いてゐる。

桂之　コリヤ、聲が高い、奧へ聞こえるわいやい。

善八　イヤ、聞こえる樣に云ふのぢや。お前が廓通ひの揚げ代に詰つて、どうもならぬ程に、金子三百兩貸せと仰しやつたれど、今時の大名、油斷がならぬと云ふたれば、金濟ませる、違ひない證據に、お上から預かつた御朱印を渡さうと、コレ〳〵、この證文に判して、三百兩貸しましたぞや。

ト證文を出し、ひらつかす。

桂之　コレ、大きな聲しては惡い。

善八　金子相濟み申さず候はゞ、御朱印相渡し申すべく候ふ。かう云ふ證文渡して置いて、幾月になると思はつしやる。

桂之　サア〳〵、尤もぢや。その朱印の事は、急の手詰めゆゑ書き入れたが、なか〳〵そち達に渡す物ぢやない。追ッつけ金子渡す程に、もう二三日。

善八　イヤ、その大切な物を書き入れたが山。ようござんす。

ト行かうとするを。

桂之　コリヤ、どこへ行く。

善八　知れた事、奧へ行て親御樣に云つて、この證文金にする。

桂之　イヤ、それを云はれては。

善八　厭なら金をよこすか。

桂之　サア、その金は。

善八　金と云つたらあるまいが。

桂之　サア。

善八　サア〳〵、面倒な、親御へぶちまけるが近道。

ト桂之助を突き退け、奥へ行かうとするを、伴左衞門、
見事に取つて投げ出す。

桂之　ヤア、伴左衞門、よい所へよう來てくれたなア。

伴左　拙者參るからは、落着いてござりませせサ。

ト善八、起き上がり。

善八　ヤア、俺をひどい目に遭はせたは、われか。

伴左　何を慮外な、素町人めが。

善八　イヤ、怖い顔をするな。こつちには。

ト懷を探し

ヤア〳〵、こりや證文を、どこへやつた。

伴左　身共が取つた。

善八　その證文を。

ト取りにかゝる。その手を捩ぢ上げる。

アイタヽヽヽ。

伴左　大盜人め、御朱印々々と大切な品を、書き入れさせたおのれ、表立つて詮議せば、首が飛ぶぞよ。

善八　ヤア。

ト恟り。

伴左　この證文は缺所、命から〴〵歸るを有難い事と、早く失せ居らう。

善八　そりや又あんまり。

伴左　但し打ち殺さうか。

善八　ア、、御免なされませ〳〵。

トほう〳〵逃げて向うへ入る。

桂之　テモ、よい氣味な。伴左衞門、忘れは置かぬ、忝ない。

伴左　お上より下し置かるゝ大切な御朱印を、金子のかたに書き入れるなぞとは、いかに若いとて、お嗜みなされい。かやうな事が流布いたすと、お國の大事になりますぞえ。

桂之　サア、俺もさうは思ふたれど、ついっそれはさうと、どうぞわが身が取つたその證文を

伴左　返してくれと仰しやるのか。

桂之　オイナウ。

伴左　なるほど返しは返しませうが、桂之助さま、伴左衞門が御無心がござりまするが、なんと聞いて下されうか。

桂之　イヤモウ、今の難儀を救ふてたもつた禮、なんなりとも。

伴左　忝ない。外でもござらぬ。こなたの深う云ひ交は

してござる、傾城葛城が貰ひたい。
桂之　エヽ、スリヤ、アノ、太夫を
伴左　身共ぞつこん執心ゆゑ、その度々廓へ通ふても、こなたと云ふ蟲があるゆゑ不得心。外の者なら仕樣もあれど、主と云ふ字に胸の修羅、燃やしてばかり居つた所へ、今の幸ひ、禮とあらばさつぱりと、持つてござる起請と共に、太夫は身共が貰つたぞ。
桂之　イヤ〳〵、ならぬ〳〵。伴左衞門、そちや氣が違ひはせぬか。
伴左　何がどう致した。
兵之　イヤモウ、興もあすも醒め果てた人でなし。
伴左　なんと云はれても貰ひさへすりや、不足も聞きうち。
桂之　イヤ、ならぬ。主の云ひ交はした女に、惚れるさへあるに、なんぢや、廓へ通ふた。そんなら大方ほかの客の顏で、打つて取つたも知れぬ。よう俺に向ふて起請をくれいと、云はれた事ぢや。
伴左　ムウ、スリヤ、今の樣に云ふても
桂之　ならぬ〳〵。押して云ふと手討ちにするぞ。
伴左　ムッ、ようござります。それ程腹の立つ事なら、貰ひますまい。
桂之　なんの又やらう。
伴左　くれぬ物をへばり附いてもゐられまい。
ト立つて行かうとするを
桂之　コリヤ、待て。行くなら今の證文を
ト懷へ手を入れるを
伴左　イヤ、折角取つた證文、まゝにも致さう。
ト突き退けるを
桂之　ヤイ、その證文持つて行つてどうする。
伴左　どうも致さぬ。大切な御朱印を書き入れた證文ゆゑ、物を云はせる……ものだてなア。
桂之　ヤ。
伴左　サア、この物も、太夫をさつぱりくれると云へばやるし、厭だと云ふと、物だてなア。
桂之　そんならおのれ、證文の譯云ふ氣ぢやな。
伴左　くれゝば云はず、くれねば云ふ。
桂之　エヽ、おのれはなア。
トかゝるを、突き飛ばし
伴左　こなたのからだの一大事、とつくりと思案さつしやれ。遲いと物を云はせるぞや。

桂之　エヽ、人でなしめ。
　トかゝるを、ちよつと當てゝ
伴左　ハテ、いゝ物が手に入つたなア。
　ト唄になり、伴左衞門、證文をひらつかせ、走り入る。桂之助、起き上がり、無念なこなし、身繕ひして、行かうとする所へ、山三、出て來たり
山三　エレ、若殿、待つた。血相して、コリヤ、どこへござる。
桂之　知れた事。伴左衞門を斬つて俺も腹切る。退け退け。
　ト行くを、立廻りに、留め
山三　サア、さう見ましたゆゑお止め申す。最前よりの樣子は、拙者もあれにて承はり居つたれども、日頃不和なる伴左衞門、これへ出ましては猶更我強う申さうと、扣へて居つたが、今宵は大切な御祝言の夜。かやうな事が後室のお耳へ入つてはお身の不爲。マア〳〵、お腹は立たうが御料簡あつて、御辛抱が第一。
桂之　デモ、山三、どうも堪忍がならぬ。
山三　サヽヽ、御尤もぢやが、何を申すもあの方に、證文を取られ居れば、荒立てる程事の破れ、お家に疵が附きますぞや。
桂之　ぢやに依つて、是非とも證文
山三　拙者が取り戻して上げませう。
桂之　ヤア。
山三　サア、あれさへ取り返せば、手の下の罪人、どうなされませうとお心の儘。
桂之　スリヤ、我が身がきつと證文を
山三　ハテ、御念に及ばぬ。落着いてお出でなされい。
　ト所へ奥にて
小姓　桂之助さま〳〵、後室樣がお召しなされまする。
桂之　オイ〳〵、それへ參ると申し上げや。
山三　お召しとあらば、ちやつとお出でなされませ。
桂之　そんなら頼んだぞや。
　ト合ひ方にて、桂之助、奥へ入る。山三、跡見送り
山三　いかに金子に困りたればとて、大切なる御朱印を質物に、入れうと云ふ證文書くと云ふは、アヽ、それもお若いに依つて、お心の附かつしやらぬも無理ではなし、アヽコレ、急に取り返さずばなるまいが、日頃不和なる伴左衞門、よもや容易く渡すまい。むづかしい所を受取りやうは、カウツ。

ト色々手を組み思案して、思ひ附いたこなしにて、膝を叩き

ほんにさうよ。かうしたらついそれと

ト四つ半の時計鳴る。

ありや四つ半のお時計。勝負まではもう半時、こりや愈愈その思案に

ト立ち上がり、思ひ入れあつて

お主のため。アヽ、まゝよ。

ト唄になり、首かたむけ、思ひ入れあつて、入る。ト管絃、少しバタ〳〵にて、奥より金八、大小差し、桂之助、藤波、官藏、附き、出て來たり

藤波　桂之助、見馴れぬお人ぢやが、あのお侍ひは何者ぢや。

桂之　サア、拙者も存じませぬが、慥か

金八　猪の熊門兵衞と云ふ浪人。サア、桂之助、腕廻せ。異議に及ぶと踏み附けて繩打つが、返答はどうぢや。

官藏　待つた、猪の熊門兵衞とやら、此方の若殿には何科あつて、繩かけうとお云やるな。

金八　桂之助は不義者ゆゑ

桂之　ナニ、不義者とは

金八　今宵屋敷へ嫁入りして來る、土佐の將監が娘銀杏の前は、疾より身共が夫婦の契約。さすれば主のある女を嫁に取れば、なんと不義者ではあるまいか。

桂之　ムウ、そんなら今宵嫁入りして來る銀杏の前と、そちは懇ろしてゐるか。

官藏　若殿、こりや疵物をかぶせられたと見えるわえ。

桂之　ソレ〳〵、母者人、こりや緣組みを變替へして、貰はずばなりますまい。

金八　さうぢや〳〵。緣さへ切ればこつちに言分もなし

官藏　後室樣、この儀は早く

藤波　イヤ、さう輕々しう破談はならぬ。禁廷の繪所を預かる將監どのが、男のある者を緣組みしやう筈もなし

金八　デモ、身共がしつかりと夫婦の契約。

藤波　それにはなんぞ、慥かな證據がござるか。

金八　サ、それは

官藏　アヽ、コレ〳〵、さう行き詰つてはつまらぬ。なんなりと出たらめに、證據を思ひ出して

金八　サア、その證據は、文でなし、證文でなし

ト色々あつて、やう〳〵思ひ出し

オヽ、ある〳〵。極上飛び切りの證據。銀杏の前が直筆

で、二世までと云ひ交はした起請がある。
ト懐より出すを
桂之　それ程よい物があるに。ドレ、それを
ト手を出すを
金八　イヤ、それから御覧じろ。
官蔵　それさへあれば嫁御の縁も、づんど切れます、よく切れます。
金八　早く仕舞ふが、二つ取りなら仕合はせ。
ト非人の様に云うて、起請を懐へ入れる。
桂之　所を出し居らう、出しませい。
ト取りにかゝるを、わざと渡すまいと云ふ立ち廻り。金八、當てろと云ふこなし。桂之助、當てる。金八、うんと、わざと氣を失ふ思ひ入れ。桂之助、直ぐに懐の起請を取り出し
こりや相違はない起請。から云ふ慥かな證據があるからは、ナア、官蔵。
ト官蔵、起請を取つて
官蔵　なるほどこれぢやア、後室様、愈々嫁君を
藤波　イヤ、縁切るは銀杏の前に逢ふた上。折悪う相嫁左衛門が妻の、お國御前も佛參の留守。いづれ打ち寄り糺した上。
桂之　縁を切らうと仰しやりまするか。
藤波　サア、悪は延べろと譬への通り。
桂之　こりや六部の道中、果てしがないワ。
ト頭掻く。所へバタ／＼にて、向うより才蔵、奴にて、走り出て來たり
才蔵　後室様、これにお出でなされまするか。
藤波　笹野才蔵、何事ぢや。
才蔵　ハツ、只今御門前に、親御將監さまお着きなされ、嫁君お入りでござりまする。
桂之　スリヤ、最早銀杏の前が
金八　爰へ來ると云ふのか。
ト起き上がり、きよろ／＼する。
官蔵　それでは云ひ合はせが、どうやら
金八　イヤ、大事ない。なんの云ひ交はしたは嘘ぢやなし
桂之　ソレ／＼、破れかぶれと、舅に一理屈云はうか。
藤波　官蔵は下部と一緒に、門前までお迎ひ。爰の仔細を將監どのに話せ。早うこれへと申しや。
官蔵　畏まりました。
才蔵　サア、ござりませ。

ト兩人、向うへ走り入る。

桂之　コリヤ、猪の熊門兵衛とやら、舅に逢ふたらきつと云へよ。

金八　オヽ、よう口の廻る樣、油揚げなぞ食つて來ればよかつた。

ト此うち行列になり、向うより才藏、箱提灯持ち、陸尺、女乘り物を舁き、後より將監、上下、官藏、その後に挾み箱持ち、中間、附き、出て、直ぐに舞臺へ來たり

官藏　ハツ、姫君お入りでござりまする。

藤波　これは將監さま、御老體の御苦勞に存じまする。

將監　イヤ、子ゆゑに使はるゝと思や、別して大儀な儀もござらぬが、只今御家來に承はれば、猪の熊門兵衛とやら云ふ浪人、娘銀杏に譯ある由。シテ、その侍ひは

金八　いかにも猪の熊門兵衛、身共でえすわい。

才藏　將監さま、お覺えがござりまするかな。

將監　ハテ、やくたいもない。土佐の將監が娘に、不義いたづらがあつて相濟まうか。

桂之　イヤナニ、將監さま、なんとやら私しも心が惡うござりまする。あの侍ひに銀杏どのをお逢はせなされて、

將監　誠不義ぢやと即座に離緣いたしますぞや。又不義がないと、御浪人、その分には相濟まぬぞ。

金八　オヽ、そりや承知。銀杏の前に逢ふて、愈々云ひ交はした事が知れたら、女房に貰はにや置かぬぞ。

將監　そりやその時の事。マア、なんにせい、早う娘をこれへ。

才藏　畏まりました。

ト合ひ方にて、才藏、駕籠の戸を明ける。うちより葛城、綿帽子着て出る。乘り物、供は、下手へ入る。

金八　ヤア、銀杏の前、我が身もてつきり心に染まぬ嫁入りであらう。俺も又外へやつては立たぬゆゑ、先へ來てよい樣にして置いた程に、餘の筋はいらぬ、云ひ交はしてゐる事を

桂之　ソレ〳〵、さつぱりとそこで云や。

ト金八が側へ突きやれど、振り切つて、桂之助が側へ來る。

ハテ、諸事は後で知れる程に、マア、浪人どのゝ側へ行て

ト又突きやれど、桂之助が側へ來る。

ハテ、面妖な。
金八　コレ、怖い事はないわいなう。
　ト連れて來やうとしても、振り切り、嫌がる。
桂之　マア、その綿帽子を取つて
　ト帽子を取り、顔見て恟り
金八　ヤア、銀杏の前と思ひの外
桂之　我が身は太夫。
葛城　桂之助さん。
宮藏　ほんに島原の
將監　アイヤ、土佐の將監が娘、曇り霞みのない銀杏の前でござる。
宮金　こりやどうぢや。
桂之　どうも斯うもない。この嫁なら拜んで持つが、どう云ふ仔細で
葛城　ア、モシ、わたしや將監が娘、嫁入りして來たればお前の女房。可愛がつて下さんせえ。
桂之　夢ではないか。將監さま、こりやどう云ふ事で
將監　アイヤ、桂之助どの、當佐々木と土佐は、先祖より內縁と云ひ、亡父六角どのと契約いたした、娘銀杏はそれでござる。こなたを戀ひ焦れるゆゑ、取り急いでの嫁入り、必らず仲よう頼みますぞや。
金八　とんと合點が行かぬ。
桂之　俺も合點が行かぬ。
將監　忰、不得心か。
桂之　滅相な、これが不得心でよいものでござりまするか。
將監　然らばしかと進ぜまするぞ。
桂之　有り難うござりまする。
金八　なんの事ぢや。根つからつまらぬは俺ぢや。
藤波　サア、お侍ひ、銀杏どのに云ひ交はしてゐると、これへねだり込みしやつたな。
才藏　愈々そこ許、云ひ約束なされたかな。
金八　サア、俺が云ひ交はした銀杏は、これぢやない。一體この銀杏の前は違ふてゐる。誠の銀杏を爰へ出した。
將監　將監が娘銀杏の前が、二人あつて相濟まうか。
金八　イヤサ、それは
才藏　スリヤ、この嫁君に云ひ交はしてはござらぬな。
金八　サ、それは
藤波　云ひ交はさねば不義ではないな。
金八　サア。

藤波　サア〳〵、なんと。
金八　アヽ、ちよいと行つて參じませう。
　ト逃げ出さうとするを
才藏　どつこい、この場は歸されぬ。
　ト立ち廻りにて、引き留め
　サア、侍ひ、云ひ交はした覺えがなければ、僞り構へる騙りの骨頂。引括る。覺悟なせ。
金八　アヽ、コレ〳〵、これには段々樣子がある。コレ、桂之助さま、よいやうに言譯を。
桂之　何をそつちの言譯、俺が知らうか。俺はあれさへ女房に持ちやア本望。外には構はぬ。
金八　エヽ、情ない。そんなら出來合ひの銀杏の前どの、こなた
葛城　アヽコレ、出來合ひのなんのと誠の銀杏を、怖いお人、わしや殿さんと添ひさへすりや、人の事には構ふてゐられぬ。
金八　エヽ、面々ばつかりうまい目に逢つたと思つて。そんなら官藏さま、お前もこの云ひ合はせの發端
官藏　アヽコレ、身共は何も云ふた覺えないぞ。身に火が附いたとて、さま〴〵な事ぬかすな。

金八　なんの事だ。さう〳〵寄つて俺一人突き出し物。さう云やもう破れかぶれ、あの銀杏の前と云ふは、ありや島原の
將監　其奴括れ。
才藏　取つた。
　ト金八を縛る。
將監　ヤイ、騙りめ、何もぬかすな。口外すると爲にならぬぞ。
金八　ムウ。
　ト呆れる。この立ち廻りに、金八、守り袋を落し置くを、才藏、取り上げ
才藏　この者の懷中より、取り落しましたるこの守り。
　ト藤波、取つて
藤波　逢坂裂れの守り袋。
官藏　なんぞ仔細がござるかな。
藤波　アイヤ、こりやあの侍ひが詮議の手蔓、妾がしつかり預かり置く。
　ト九つの時計鳴る。
才藏　ありや九つのお時計。
官藏　不破名古屋が勝負の刻限。

藤波　桂之助は左衞門の代り、妾と一緒に
將監　檢分とあらば、拙者も見物仕らう。
藤波　嫁女と共に綱附きを
官藏　奥へ召連れまするでござらう。
才藏　サア、立たう。
金八　とんと夢ぢや。
ト管絃にて、葛城に官藏附き、才藏、金八を引立て、奥へ入る。ト藤波、二重の眞中、將監、上、桂之助、下へ並ぶ。ト下座にて
門一　不破伴左衞門どの。
門五　名古屋山三どの。
六人　お立合ひの刻限でござる。
兩人　ハア、。
ト管絃になり、山三先に、門弟四、五、六、附き、下手に扣へる。伴左衞門に門弟一、二、三、附き出て、上手に扣へ、平伏する。小姓一、二、竹刀を持つて出て、作法の通りに置く。
藤波　伴左衞門、山三、最前申し附けた通り、この勝負に勝つたる方へ、師範の印可、湖山の支配、一緒に申し附ける程に、その通り心得てよからう。

兩人　ハア、。
將監　不破名古屋が爭ひは、承はり及んだ今日の勝負。
桂之　コリヤ、山三、大切な場所ぢやに依つて、あいつに負けぬやうに。
伴左　何を要らざる
トむつとする。
官藏　ハテ、御前でござる。
小姓　兩方ともにお立合ひなされ。
兩人　ハツ。
ト三味線入り、誂らへの白囃子になり、兩人、支度。双方の門弟、介添へよろしく、伴左衞門、山三、辭儀して、竹刀を取りかゝる。双方の門弟、かけ聲。この立ち廻りいろ〳〵面白くあつて、トゞ伴左衞門、山三を打ち据ゑる。
敵三　ヤア、伴左衞門どの、お出かしなされた〳〵。
將監　天晴れなる手のうち、見事々々。
藤波　出かした。勝つたる方へ印可役目、改めて申し附けるぞ。
伴左　ハ、ア、有難うござりまする。門弟衆、悦ばつしやい。

敵三　お手柄、御苦勞でござりました。
伴左　イヤ、これしきは、子供の遊び同然サ。
藤波　常々と代り、脆う負けを取つた山三が手のうち。
桂之　イヤモウ、手がすべつたか足がこけたか、どう云ふ事で此やうに、脆うやられた事ぢやぞ。
伴左　誰れしも負けたうて負けるものでもなし、せいぎり汗かいてやつたなれど、そこが不鍛練、未熟からサ。
桂之　エ、ソレ、その口を
伴左　側から物云ふと、こつちも物だぞや物だぞや。
桂之　エ、コレ、腹の立つ。
藤波　その立腹を鎭めさすは
將監　娘と早う祝言。
伴左　その祝言の樣子も承知。それも今に……物するでな。
桂之　エ、コレ、どうしてくれうぞ。
將監　ハテ、氣をいらだず、マア、奥へ。
ト唄になり、桂之助を將監、宥め、藤波、小姓兩人附き、奥へ入る。
伴左　エ、、聞き腹の立つ今夜の祝言、今に思ひ知らせて
ト山三と顔見合はせて

なんと門弟衆、日頃立派に口を叩いても、今のざまを見られたか。
門一　イヤモウ、見ぬ事は話しにならぬと、黑澤丹吾驚き入りました。
門二　あの又叩かれたざまと云ふものが、この文藏も呆れました。
門三　かの後ろ足を毆られた所は、病犬がどぶへ落ちた樣、九平太腹を抱へました。
伴左　イヤモウ、身共も少しは手應へと思ひの外、あれがかの腕なしのふるずんばいと云ふのであらう。
門四　イヤモウ、山三どの、今日の勝負にこの喜六太も、摩利支天に立願を立てる程の儀、そこ許無念にはござらぬか。
門五　イヤモウ、百萬陀羅申したとて跡の祭り、李兵衛とんと思ひ切りました。
門六　この佐五郎もこれからよい師匠を、取り直さずばなりませぬが、いづれもはなんと思し召す。
門五　我れ〳〵も左樣でござる。
門四　山三どの、向後指南は頼みませぬ。
門六　師範の緣切りましたぞや。

門五　伴左衛門どの、此方一人も残らず、お弟子に罷りなりたい。
伴左　オヽ、こりや皆、發明になられた。それでこそ米を食ふ武士、シタガ、碌でもない事を、舊せん筋が教へこまれ、錆附いてあるを一人々々、東海道へ教へ直すは世話なれど、名人と生れたが不肖、弟子に致して進ぜう。
三人　有難うござりまする。
伴左　ドレ、弟子師匠の盃いたさう。皆奥へ來やれ。
六人　ハツ。
　ト行かうとするを
山三　イヤ、伴左衛門どの、ちよつと御意得ませう。
伴左　アノ、身共にや。
山三　如何にも、ちよつとお目にかゝりたい。
　ト向うへ出る。
伴左　用とはなんでござる。
山三　ハヽヽヽ、かやうにいかめしく呼び留める用事と申すは、懺悔話し。イヤハヤ、拙者も日頃はスワと云はば、たとへ樊噲項羽が勢ひたりとも、只一握りの様に存じたが、サア、参るぞかゝるぞになつては、なかなか行くものぢやござらぬ。只今そこ許の働き、彼のみんみやうの構へ、イヤハヤ、それは、邊りへ寄り附かれる事ではない手のうち、驚き入りました。當時天下の豪傑と申すは貴殿の事。向後先生とあがめ奉らねばならぬぢや。イヤ、モシ、先生、拙者もこの後劍術の指南は止めにして、そこ許の弟子になり、指南を受けて、かの餘所へ出ましても、拳の一つもよける程の、鍛錬が致したいが、なんとお弟子になされては下さるまいかな。
伴左　これは痛み入つた御挨拶、さうお云やれば向後睦まじく申し談じやうと云ひたいが、マア厭だ。天が下に兵法を我ればかりの様に、いかに腕の蝶番ひがあればとて、人も多いにこの伴左衛門と、立ち並んで爭ふと云ふは、盲ら蛇と云はうか、面の皮の厚いと云はうか、身の程を知らぬ馬鹿、押しの重いとはお身が事、なんと今に腰骨が痛まうが。併しありや身共が、ぶちたくてぶつたのぢやない、お身が不器用ゆゑだぞ。例へて云へばかの子供の、足へ泥龜めが食ひ附いて、引込まう／＼とする所を、引揚げられて料られる様なもの。お身やとんとその泥龜。池の端や山下で、辻放下や居合ひ抜き、なかなか左様と齒磨き賣りの受け太刀が、お身にやァ相應。ハヽヽヽヽ。

山三　イヤハヤ、こりや結構な御教訓、拙者を不憫と思し召せばこそ、さま〴〵のお指圖、いづれ御所存に任するでござらうが、時に伴左衞門どの、最前の立合ひに勝たつしやれたで、印可も役目も申し受けさつしやる。それでとんとそこ許の十分。そこが彼の滿つれば缺くるとやら、少しの不倖に無心がござるが、なんと聞いて下されうか。

伴左　ムウ、無心とは。

山三　サ、外の儀でもござらぬ。かの物でござる。

伴左　ヤ。

山三　イヤサ、かの物でござる。ハヽヽヽサア、その物をどうぞ下さるまいかと申す事でござる。

伴左　ムウ、なんの無心かと思やア、物が欲しいと云ふのか。

山三　なか〳〵左樣。

伴左　イ、ヤ、厭だ。ならぬ事だ。

山三　サ、そこを存じたゆゑ最前の立合ひ、その許の十分に致して納めましたと申すが拙者が忠義。その忠義を思ひやつて

伴左　ヤイ〳〵、默れ。そんなら何か、その物が欲しさに、最前の立合ひに負けてやつたと云ふのか。

山三　イヤ、全くさうではない。さう聞けば

伴左　エヽ、喧しいワ。いけもせぬ立合ひに打ちのめされて面目なさ、物にかこつけ云ひくろめるのか。

山三　イヤサ、全く。

伴左　厭だ。ずんどならぬぞ。面の皮の千枚張りで、よくも身共にこぢ附けて物をぬかす。おのれが弟子は皆散つて、この伴左衞門が門弟になつたが、口惜しくはないか。この面で向後廣言を吐くな。せめて無念だと云ふ性根があらば、舌でも食つてくたばれ。コナ、大べら坊めが。

山三　スリヤ、此やうに云ふても、ならぬのぢやな。

伴左　オヽ、くどい、ならぬワ。

山三　おきやアがれ、コナ、うず虫めが。うぬは武士か侍ひか。現在お主の御難儀をよい事と心得、いかめしく刀を差して、それで武士道が立つか。この山三はこの身の欲を捨てゝ、貰ひかゝつた證文、穩便に濟まさうと、美しう云へばつけ上がるうづ虫め、早々出せ。出しても出さす、出さいでも出さす。出しやうが遲いとからだ中が粉になつて、ばつ〳〵と散るぞ。今のは私しが出損ひ、

誤りましたと、犬つくばひにつくばふて、出し居らう。

伴左　門弟衆、あの頬桁を開かしやつたか。

皆々　今の様に打たれても、恥かしくはないか。

山三　忠義の辱めは伍子胥が諫言、韓信が股、天下の英雄、雀蝗どもが知る事でない。すッ込んで居らう。

門一　面白い。その丈夫な所へ、ちよつとお相手にならうかえ。

山三　しほらしい一言、腰骨に厭ひなくば、何時でも。

二三　過言な一言。我れ〳〵が

ト　かゝる。ちよつと立ち廻りに、皆々を打ち据ゑる。

山三　マア、ざつとこんなものぢや。いでやらうと思へば、ぶつて〳〵打ち据ゑる。

伴左　そりやその筈、犬猫を見る様な猿松、この先生は行かねて。

山三　その先生でも、滅多にやり兼ねはしまい。

伴左　ハヽヽヽ、やり兼ねずば、最前御前でなぜやらぬ。そこが口調法負け惜しみ。コレ、よい事を云ふて聞かさう。今爰でま一度勝負して身共に勝つたならば、我れが望みの證文を

山三　戻し下れうと申すか。そればつかりがこつちの望み。

伴左　ハヽヽヽ、證文は爰にあるワ。マア、その竹刀の先が、蚤の頭を八つ割にした、その片割れ程でも中つたら、直ぐにやる。

山三　マア、行からうか行くまいか知らねども、力一杯。

伴左　オヽ、出かす〳〵。思ひよらぬ所を、かう。

ト　打つてかゝるを、山三、見事に留めて

山三　かう留めるでありさうなものぢや。

伴左　イヤ、余ッ程あがつたわえ。所をかうして。

ト　騙し打ちにする。山三、見事に留める。ト　これより又両人、色々あり、トゞ山三、伴左衛門を打ち据ゑる。弟子ども、ア、〳〵と怖がる。

山三　動いたら打ち放すぞ。マア、ざつと出來合ひがこんなもの。ドレ、約束の證文出さう。

ト　證文取る。

伴左　ヤア、それを。

山三　それとは、お身今なんと云つた。コレ、この竹刀の先が、蚤の頭を八つ割りに割つたその片割れ程でも中つたら、やらうと云つたでないか。中つたぞよ。しかもひどう中つたぞよ。約束ゆゑに取つたらなんとした。こり

や大切な物ぢや〳〵。マア、この物も着服いたさう。

ト懐へ入れる。

伴左　ムウ、所を又

ト口惜しきこなしにて、抜いて切りかけるを、立ち廻つて、打ち据ゑる。又抜くを、大小ともに叩き落とし、散々に打ち据ゑ

山三　お望みなら何度でも、どいつこいつの用捨はない。門弟衆も相手にならぬか。

ト皆々顔見合はせ、蹲る。

イヤナニ、先生、これは全く身共が強うて勝つたではない。お身が不器用不鍛錬ゆゑ叩かれたのぢや。一體お身は面の皮の厚い泥龜ぢや。池の端や山下で、辻放下居合ひ抜き、歯磨き賣りの受け太刀が相應。なま兵法大疵のもと。ハテ、笑止千萬。

ト門弟皆々、氣の毒なるこなし。伴左衛門、起き上がり、衣紋直し、からだの痛みを隠し、刀を拾ひ、鞘に差し

伴左　爰で恥辱を取らうとも、勝つ所では勝ちさへすれば、伴左衛門が武士は立つ。山三、なか〳〵手利き、よく打つた、この禮は重ねてきつと云ふぞよ。

山三　不破と名古屋、何時なりとも鬱憤は承らう。

伴左　云はいで置かうか。

山三　聞かいでならうか。

伴左　どうで遅いか

山三　早いか

伴左　禮云ふ所は

山三　互ひの切端。

伴左　しつかりと

兩人　忘れるなよ。

ト唄になり、伴左衛門、門弟皆々を連れ下座へ入る。奥より桂之助、葛城、出て來たり

桂之　山三、出かしやつた〳〵。

葛城　大てい氣味のよい事ではなかつたわいなア。

山三　この證文ゆゑに、大てい骨折つた事ぢやござりませぬ。それはさうと、葛城、どうして

葛城　サア、今宵殿さんの所へ、銀杏の前さんが嫁入りでござんすと聞いて、身も世もあられぬ所へ、將監さんのお使ひが身請け、まだ立金は濟まねども、綺所の威勢で引取られ、銀杏さんの妬みでどうぞせらるゝかと、案じは却て主の代り、銀杏さんになつてこの嫁入り。

桂之　近年にない男太夫の粋な捌き。
山三　それにはなんぞ深い樣子が
葛城　サア、あの銀杏さんも、外に云ひ交はした男がある
ゆゑでござんせう。
桂之　その男めも屋敷へ來てゐれば
葛城　銀杏さんも無心なるまいと、思ひ遣るのも
山三　オヽ、流石それ者ぢやなア。
ト思ひ入れ。所へばた〳〵にて、向ふより銀杏の前、
走り出て來たり、直ぐに舞臺へ來て、ウンと氣を失
ふ。
葛城　ヤア、こりやどこの女中さんやら
桂之　滅相な、人の屋敷へ氣を失ひに來ると云ふ事がある
ものか。
ト山三も立ち寄り、見て
山三　ヤア、こりや銀杏の前さま。
桂之　はんに銀杏ぢや。
葛城　コレイナア、銀杏さん〳〵。
ト呼び活ける。銀杏、心附く。
山三　心が附きましたか。
銀杏　ヤア、桂之助さま、お前に逢ふては
ト立ち上がり、逃げうとする。
桂之　ア、コレ、樣子知らねば、俺に逢ふては面目なう思
はうが
葛城　お前に云ひ交はした金八さんも、屋敷へ來てゐるわ
いなア。
銀杏　その事を御存じの上は、何を隱しませう。あの人と
云ひ交はし、嫁入りしては濟まぬゆゑ、昨夜駈落ち。所
に金八さんが見えぬゆゑ、方々と尋ね歩るき、思はずこ
の門前で樣子を聞けば、この屋敷へ來て、縫目に遭ふて
ゐると聞いて、心も心ならず、門前の衆に見附けられま
いと、隱れて入り走つて來たので、つい氣が上つて今の
やうに
葛城　氣を失はしやんしたのか。
銀杏　シテ、金八さんはえ。
山三　氣遣ひせまい。爰へ來るやう云ふてやらう。
桂之　そんならそなたが
山三　後室樣へ何かの密談。
ト行きかゝり、桂之助が前へ證文を拋る。
桂之　ヤ、こりや取られた證文。
山三　見られぬやうに、火中なされい。

ト唄になり、山三、奥へ入る。

桂之　エ、モウ、この證文で、なんぼの苦勞した事やら。

ト火鉢を引寄せ、證文燒く所へ、ばた／＼にて、奥より金八、繩ひき切り、逃げて出るを、團八、官藏、追つかけ出て來る。

銀杏　ヤア、お前は金八さんか。

金八　そなたは銀杏どの。

ト云ふうち、團八、金八を引捕へ

團八　動きやアがるな。おのれ騙りにうせたのみならず、繩を引き切り逃げうとは、のぶとい奴の。

金八　ア、モシ、騙り／＼と、その云ひ合はせを教へたは、皆お前方二人ではござりませぬか。

團八　何を、そんな事知らぬ、覺えないぞ。

桂之　コレ、團八、そりや我が身が無理。なるほど俺にも入れ智惠して

團八　ア、コレ、若殿、お家の用人も勤める拙者、傾城賣女を引込み、指圖いたして相濟まうか。

銀杏　コレ、金八さん、どんな事して騙りぢやのなんのと云はるゝのぢやえ。

金八　サア、それもそなたが、ほんまに爰へ嫁入りして來ると心得、跡追ふて來た所が

桂之　思ひの外嫁入つて來たは、太夫葛城。

金八　この金八と銀杏どのと、云ひ交はしてゐる事は、皆承知してゐながら

官藏　何を承知、此方の嫁君と不義ひろいだ下郎。

團八　傾城を引込み、若殿、後室樣、將監さま

官藏　不義者でござる。お出合ひなされ／＼。

ト管絃になり、奥より後室、將監、急病のこなしにて、刀を杖に、才藏、介抱し麻上下の侍二人附き、二重へ出て來る。銀杏、將監を見て、ハッとこなし、俯向く。

藤波　團八、官藏、騷々しい、不義者とは何者ぢや。

團八　今宵嫁入りして參つたは、島原の城傾葛城。許嫁の銀杏の前は、外に男がある。殘らず不義者。

將監　待て團八、身が附添ひし娘を

團八　ハテ、お隱しなさるな。慥かな證據は若殿の懷中。

ト桂之助の懷中より、最前の文を出す。

桂之　ア、コレ、それは

ト寄るを、突き退け、きつと開き

團八　お前樣と末は女夫と申し交はし候ふゆゑ、外に嫁御

は持たさせ申さず……外は讀むに及ばぬ。なんと若殿、斯う惚れ込んだこなたが嫡御を、得心して嬉しがるが、傾城と看板打つた證據。

桂之　イヤサ、それは

團八　將監さま、なんと傾城を娘にして、嫁入らせたであらうがな。

將監　サア

ト云ひ譯なきこなし。

藤波　シテ、又誠の銀杏の前に、不義があるとは。

官藏　その證據は、最前卷上げて置いたこの起請。

ト懷より出して

天罰起請文の事。跡は讀むに及ばぬ。金八さまへ、銀杏より。

藤波　シテ、その金八と云ふは

官藏　これなる下郎。

ト金八をそこへ突き出す。

藤波　その者が金八なら、下郎ではない。家督左衞門が妻の阿國御前が弟。

金八　エヽ、スリヤ、私しは

藤波　最前取り置いたこの守り、捨て子の弟あり、尋ね合ふは逢坂裂れの守りと、阿國御前が所持した、コレ、この守りと同じ錦。

金八　なるほど捨て子の時より、附けてありし守りとあるゆゑ、今以て所持いたしましたが、そんなら

後室　名乘り合ふたらお國御前が、慥かに弟。

團八　イヤ、奧方の弟にしろ、若殿と言ひ號けの銀杏どのに譯あらば、金八は不義者であるまいか。

金八　サアそれは

團八　傾城に狂ふ若殿は放埒。

桂之　イヤサ、それは

團八　サア〳〵〳〵、四人ともに返答ござるか。

四人　ムウ。

ト當惑の所へ、向ふにて、殿のお歸りと呼ぶ。

才藏　ナニ、殿樣の御歸館とや。

團八　爰で申さば支へこさへ、途中へ出迎ひ不義の仔細、文と起請を證據に言上。

ト文を官藏に渡す。

官藏　心得ました。

ト文と起請を一つに持ち、行かうとするを

才藏　イヤ、家來の身として主の落度。やる事ならぬ。そ

の書き物

ト取らんとするを

官藏　何を小癪な。

ト立廻りにて、才藏を當て

ソレ。

ト一散に向ふへ走り入る。ト揚げ幕のうち、少しぼたばたにて、直ぐに官藏、駈けて出て來て、花道にて見事に極る。

椎之　ヤア、あれは

ト行列の白囃子の樣な鳴り物になり、向うより又平、足輕、殿の刀を袱紗にて持ち添へ、右の書き物を持ちつか／＼と出て來る。官藏、起き上がつて、それとかかるを、ちよつと立ち廻つて、書き物を懷へ入れ、刀を差附け、ぢり／＼と官藏を押し戻し、舞臺へ來る

藤波　ヤア、そちや左衞門に附添ひ

椎之　都へ供せし

又平　浮世部屋の

ト官藏、又かゝるを、ポンと投げ退け

ヘイ、又平めでござりまする。

椎之　シテ、兄左衞門さまには

又平　只今御門前まで御歸館の所、官藏さまがお乘り物越し、二つの書き物を證據なりと、申し上げたる不義の仔細、御自身お捌きあらんなれど、都のお役目首尾よく御歸國、氏神へ御禮拜、お乘り物にて祈念のうち、其方先へ參り身になり替り、取り捌けと仰せを受けて、お先走りにかく云ふ又平。

團八　ムウ、スリヤ、其方は殿に代つて

又平　不義の成敗お家の作法、洩らさず亂さず取り捌けと仰せは重き殿の魂、此お刀が慥かな證據。

ト刀を差し出す。

藤波　スリヤ、愈々左衞門に代つて

將監　又平ならぬ佐々木賴方。

又平　家中の者共、末座いたせ。

ト管絃になり、又平、上へ通る。團八、その外、思ひ入れあつて、下へ下り

團八　官藏が言上とあれば、くどう申すに及ばぬ。若殿始め不義者の一件。

官藏　お捌きは大かた大それた罪人。

團八　其お刀で

又平　いかにも斬り捨て。

葛銀　エヽ、スリヤ、わたし等を

桂之　エヽコレ、何驚く事がある。身より出だせし不義の科。

金八　間男同然はお定まり。重ねて置いて四つになる氣。

藤波　ぢやと云ふて、そりや又あんまり。

團八　何あんまりな事がござらう。お手討ちは當り前。

官藏　ちつとも早う四人の者ども。

又平　云ふにや及ぶ。

ト持つて來た刀をすらりと拔く。皆々、ハツと思ひ入れ。又平、懐より、以前の文と起請を出し、寸々に裂く。

團八　ヤア／＼、切ると云ふから首を切ると思ひの外

桂之　こりやどうぢや。

又平　イヤ、切ると云ふたは血筋の縁、不義いたづらの桂之助、縁切つて兄が勘當。

桂之　エヽ、スリヤ、それもお指圖。

五平　勘當なせば傾城を、女房に持たうが勝手次第。

桂之　エヽ、忝ない。

將監　其お手本が出るからは、娘銀杏も親が勘當。

銀杏　スリヤ、アノ、あたしも

將監　縁切つたれば、誰れと添はうが親は構はぬ。

金八　仇にはならぬお心盡し。

ト此うち奥より、山三、出てゐて

山三　ムウ、スリヤ、お二人ともに、御勘當とな。

又平　そりやあの者ばかりでない。名古屋山三、そちも勘當。

山三　ヤ、なんと。

又平　武術申し立ての身を以て、今日の勝負、物の見事に打ち負けしと、門前の取り沙汰。

山三　スリヤ、その儀も上聞に達して

又平　勘當せよと、それとても殿のお指圖。

山三　ハヽツ、恐れ入りましてござりまする。

藤波　面々落度の勘當ゆゑ、母乍ら詫びもならず。

又平　父母います時はこれに隨ふ。勘當お屆けの書き物、お認め下さりませう。

藤波　尤も。

ト手早く願書を認め

侍ひ衆、この願ひ書、大津の記錄所へ差上げい。

侍兩　畏まつてござりまする。

桂之　其お書き物が、親子兄弟縁の切れ目。

銀杏　今更わたしも父上に
金八　ハテ、又お詫び申す時節もあらう。
葛城　そんなら殿さん、これがお屋敷の見納め。
又平　笹野才藏、追放の役は其方、必らず匿ひなぞ致すな
と、これもお指圖。
才藏　拙者が受取りますからは、お氣遣ひ……イヤ、用捨
は仕りませぬ。
又平　出かした。早う追拂へ。
桂之　そんなら母者人。
銀杏　父上樣。
金葛　これがもう
ト思ひ入れあるを
才藏　ハテ、きり〳〵立たう。
ト三重になり、葛城先に、桂之助、銀杏、金八を、才
藏、追ひ立て、侍ひ兩人、願書を持ち、向うへ入る。
藤波　とは云へ不憫な……イヤ、不孝者にはよい見せしめ
團八　この趣きを伴左衞門どのへ、屆け申さう。
藤波　妾も阿國御前へ、今日の仕儀を。
官藏　扶持離れの名古屋山三。
團八　ハテ、みじめな。

ト管絃になり、藤波、團八、官藏、奧へ入る。ト七つ
の時計鳴る。
又平　ありや七つ、今宵の
ト致死期を繰る思ひ入れにて、向うへ窺ひ
殿のお乘り物、これへ。
ト向うにて
侍ひ　ハア。
ト時の太鼓、侍ひ四人組みにて、乘り物を舁ぎ、つか
つかと出て來たり。舞臺へ下ろす。ト奧にて
阿國　伴左衞門さまのお歸りとや。
ト合ひ方にて、阿國御前、つか〳〵と出て來たり
大切なお役目、嘸お疲れ遊ばしたであらう。
又平　只今御對面。いづれもには
ト侍ひに奧へ行けとこなし。侍ひ、ハッと、四人、奧
へ入る。
イザ、殿樣にはこれへ。
ト乘り物の戸を明ける。土佐左馬次郎前幕の形、手負
ひにて、左衞門が首と眞の太刀と、土器の割れを持ち
よろめき出る。皆々、恟り。
山三　ヤ、、、、、コリヤ、殿樣と思ひの外

将監　悴左馬次郎が

阿國　深傷の様子

山三　仔細は〳〵。

左馬　殿左衛門さまは斯くの通り。

ト　そこへ首を出す。

阿國　ヤ、、、、こりや我が夫のお首、なんとして、どうして

左馬　シ、眞の御太刀、御盃の土器。

ト　そこへ出すを

山三　ヤ、、、、この土器の二つに割れしは

左馬　サ、殿左衛門さま、大切なこの程の上使、禁廷表の執成しを頼まんと、小栗宗丹へさま〴〵の追從、專ら御心配。十が九つ首尾する所に、拙者が粗相、文の間違ひより

ト　反り返るを

将監　コリヤ、悴、氣を慥かに。

山三　シテ、跡の様子は。

又平　コレ、左馬次郎さま。

ト　抱き起こしても物云はれぬゆゑ

サア、日頃邪慾の小栗宗丹、兼ねてお國御前さまに心をかけしを、殿にもそれを御承知分。所に戀路の叶はぬ文右の意趣やら大内にて、首尾も手筈も鶍のはし〳〵。

山三　スリヤ、大内にて、この土器が割れしゆゑ、日頃の御短慮、騒動に及んで御切腹か。

ト　左馬次郎、心附き

左馬　眞の御太刀の切ッ先の血を、山三に無念を請け繼げよと

山三　御上意を殘されしか。

左馬　拙者までもその座の無念口惜しさ。おのれ宗丹

ト　色々苦しみ、落ち入る。

阿國　ア、コレ、わしにも御遺言はなかつたか。コレナウ

ト　色々搖り動かし

こりやもう落入つたか。ハア、、女子の淺墓、お役目首尾ようしたいばつかりに、心に染まぬ宗丹に、色よい返事の顔したが、却て我が夫のお身の上になつたか。ハアア。

又平　その落度は拙者にも。この又平は土佐家の御恩を受けし者、御一家の誼みにて、左馬次郎さまもこの佐々木家へ、大家を見習ふお客分。小身乍ら拙者めも、共々勤めて此度のお供。折惡しく男山へ御代參の留守に騒動、

道より聞き附け駈け付けたれど、はや殿様は御生害。左馬次郎さまも既に大勢に取卷かれ、危ふい場所を逭ひ散らし、お供せんにもあの深傷、やう〳〵殘る家中を語らひ、かくの仕合せ。然し禁廷を騷がせし、お咎めあるは必定と、若殿さま始め山三さままで、御勘當と殿の口眞似、お届けまで致せしは、お身に凶事なき、コレ、計らひ。此うへの御用心、お家再興、山三さま、この儀さへ申し置けば、その世に用なきこの又平。申譯には、南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとするを

將監　ヤレ、待て又平、言譯の切腹は尤もなれども、佐々木の家には山三あれば、又立つべき事もあれど、そちが死んでは、土佐の家が立たぬわいやい。

又平　イヤ、左馬次郎さまがお果なされても、まだお年寄つてもあなたと云ふ

將監　イヤ、將監も斯くの通り

ト肌を脱ぐ。腹帶を解くと、腹切つてゐる。

山三　こりや何ゆゑに將監さまには

黄國　お腹なされましたぞ。

將監　桂之助に許嫁の娘銀杏、外に男を持つ徒ら、左衞門どのへの言譯に、疾くこの如く生害も、家の騷動、無駄死同然。

山三　スリヤ、傾城を息女にして、嫁入りも深き御所存。

將監　倅左馬次郎と云ひ、身どもまで相果てなば、殘るは銀杏只一人、見所ある又平、其方暫し土佐の家名を受繼ぎ、大内繪所の役目預かりくれよ。

又平　仰せ有難くはござれども、武家の事なら兎も角も致さんが、人形の首一つ、繪と云ふものは出來ぬ拙者に

將監　萬一御用の節もあらば、心がけながらも桂之助どの繪執心にて教へ置けば、土佐の流儀は殘り居る。是非とも暫し

ト袂より袋に入りし勅書を出し

イザ、繪所のこの勅書を、渡す上は、これより土佐の又平光興と名乘り、繪所を預かりくれよ。

ト渡す。

又平　身にも應ぜぬ事乍ら、この期に及んで辭退は不忠。なるかならぬか暫しのうち

山三　土佐を名乘つて繪所を

又平　預かり奉るでござらう。

ト勅書を取つて納める。とドン〳〵早太鼓になる、

阿國　ヤア、あの物音は

ト　バタ／＼にて、門弟五、走り出て來たり

門五　申し上げまする。三四百人の人數を以て出口の固め、承はれば屋敷も缺所、血筋の者は召捕りの人數とござりまする。

阿山　すりや禁廷のお咎め。

ト　又バタ／＼にて、門弟四、走り出て來

門四　申し上げまする。寶藏の錠を捩ぢ切り、御朱印まつたお家の旗、何者か盗み取り、逃げ失せましてござりまする。

ト　門弟五、同じく四、引返して奥へ入る。

山三　ヤ、、、、御朱印と云ひお家の旗まで、紛失とは

阿國　心懸りな、後室樣。

山三　この場の事は、又平、頼む。

阿國　山三、おぢや。

山三　ハツ。

ト　矢張りドン／＼にて、兩人、奥へ走り入る。左馬次郎、心附き

左馬　ヤア、父上も御生害か。

將監　子ゆゑの切腹、この騒動、かばねの恥辱を見せんより

左馬　又平、親子の介錯、たのむ。

又平　ぢやと申して、御主人に等しき人々

將監　違背して苦痛の上に

左馬　恥辱を取らすか。

又平　サ、、それは

兩人　サア／＼／＼

ト　ヂリ／＼三人、二重へ上がり

急いで介錯。

又平　是非に及ばぬ。

ト　一腰を拔き

南無阿彌陀佛。

ト　刀振り上げる。この見得、ドン／＼、早舞ひにて、チョン／＼、返し。道具廻る。

本舞臺、向う一面の障子、奥御殿の道具、燭臺附け、爰に雲谷、前幕の形にて、藤波に手を負はせ、阿國御前を引き附けてゐる。この見得にて、道具留まる

阿國　ヤ、、、、コリヤ、雲谷の人でなし、母上を殺しやるか。

雲谷　オヽ、宗丹どのに隨はうと、俺までを一杯はめたばつかりに、左衞門が自滅。サア、お國御前、俺と一緒に小栗どのへ、行かうとぬかせ。

阿國　何を家來の身を以て、主に仇する人畜生。

ト懷劍にて切りかける。立ち廻りに、又藤波を切る。

藤波　アヽコレ、わしやこの深傷。そなた怪我せぬ樣に、早うこの場を

阿國　イエ〳〵、母樣の歎き

ト又かゝるを、立ち廻りに、又藤波、切られ、ウンと死ぬる。途端奥より、又平、つか〳〵と出て來たり

又平　ヤヽ、コリヤ、後室樣を

雲谷　南無三、又平。

トちよつと掛かる。立ち廻りに、燭臺踏みこかし、暗闇。又平、雲谷が襟髮取つて

又平　侍ひ衆、明り〳〵。

雲谷　こりや斯うしては

ト闇を幸ひ、雲谷、振り切る。時の鐘、向うへ逃げて入る所へ、奥より門弟六、手燭を持ち、出て來るを

又平　南無三、雲谷めを取り逃がしたか。跡追つかけて

門六　心得ました。

ト手燭を置き、向うへ追つかけ入る。

阿國　モシ、母上樣、藤浪さま。コリヤ、もう絆が切れたか。

ト死骸を搖り動かし

我が夫と云ひ母上まで、その上に家の退轉、いつそ死にたい、死にたいわいなう。

又平　モシ、御尤もぢやが、あなたには、小栗宗丹、長谷部雲谷と云ふ、兩人の敵。

ト阿國、キツとなり、又平、眞の太刀を目先へ突きつけ

コレ、この切先の血は、左衞門さまの血汐でございますぞや。

阿國　エヽ、口惜しい。

又平　オヽ、その御無念に心の張り弓。時節を待つて

ト刀を手拭ひに包み、阿國御前が腰へささせる。所へ後へ、團八、出て

團八　その眞の御太刀を

ト取りにかゝるを、突き退け

又平　コリヤ、おのれも伴左衞門が

團八　知れた事、企みの犬上、宗丹どのへ阿國御前、眞の

太刀は伴左衛門どのへ、引ッ浚つて出世の種。邪魔せずと、又平、渡せ。

又平　小癪な。非道に組みすれば我れから招く天の責め。そこ退くまいか。

團八　イヽヤ。是非ともその御太刀を

ト掛かる。けはしき立ち廻り、トヾ又平、見事に團八をポンと切る。

阿國　これは

又平　惡事の荷擔人、まつこの通り。

阿國　やがて敵を

又平　モシ。

ト兩人、よろしく、ドン〳〵、早舞ひにて、チョンチョン、返し。道具廻る。

本舞臺、一面の柵矢來、下手、境杭と書きたる石の傍示杭。よき所に用水桶、上に番手桶積み、所々に見越しの松、誂らへの道具に納まる。

ト矢張りドン〳〵、バタ〳〵にて、下座より若い衆の侍ひ、中間、大勢、いろ〳〵の道具を持ち、出て來たり

侍ひ　屋敷は缺所、面々の道具が大事。

皆々　運べ〳〵。

ト向うへ走り入る。トばつたり音して、柵矢來をバタバタと内より壞し、時の鐘、誂らへの鳴り物にて、うちより山三、系圖の一卷を啣へ、拔身を持ち出て來たり、あたりを窺ひ

山三　御朱印旗は紛失しても、何より大事な佐々木の系圖命限り取り出したが、これさへあれば二品を、詮議し出だし敵を亡ぼし、若殿の御代。一先づ屋敷を立ち退いて

ト行きにかゝるを、後ろへ宮藏、出てゐて

宮藏　扶持放されの山三、待て。

山三　ヤ、わりや三上の宮藏。

宮藏　ムウ、今までは朋輩、これからは不破どのへ一味の手土產。系圖の一卷、俺に渡せ。

山三　ハヽヽヽヽ、忠義磐石の山三が手にある、一卷を渡せなどゝは、身の程知らぬ蠅虫めら、ならば手柄に

宮藏　所を俺が

トかゝるを、けはしき立ち廻りにて、山三、宮藏をポンと切る。途端、鐵砲來て、山三が右の手に中り、尻居にどうとなる。

山三　何奴なれば飛び道具を以て、卑怯者めが。

ト誂らへの鳴り物にて、右の柵矢來の壞れより、伴左衞門、種ヶ島を持ち、づッと出て

伴左　ハテ、よいざま〳〵。殺す一期に云ひ聞かす事があつて、利き腕を打ち拔き、嬲り殺し。悦べ〳〵。

山三　ムウ、スリヤ、今の鐵砲は、伴左衞門、おのれであつたか。

伴左　左衞門めは大内の上使を縮尻り、其うへ兄宗丹に手を負はせたる科に依つて、その身は自滅、家は退轉。

山三　兄宗丹とぬかすからは、扨ては小栗めが弟よな。

伴左　オヽ、佐々木の所領は宗丹へ下され、この伴左衞門も、とも〳〵に立身。

山三　エヽ、人も多いにおのれら兄弟に、押領せらるゝと思へば

伴左　跪くな〳〵。阿國御前には兄宗丹、傾城葛城には伴左衞門執心なれば、手に入れる。桂之助めも後から冥途へやる程に、先へ行つて待つて居れ。

山三　エヽ、聞けば聞く程、企みの罠。死物狂ひ、伴左衞門。

トかゝるを

伴左　おのれこそ天下の科人左衞門が家來、ふッ放せと記錄所の指圖。

ト立ち廻つて、刀振り上げる。所へ又平、つか〳〵と出て、伴左衞門を留め

又平　苦しうない。立退かれよ。

伴左　ヤヽ、うぬ足輕の分際で、苦しうないとは。

又平　イヤ、今日今宵土佐の苗字、繪所を預かれば、禁廷の臣下。證據は繪所免許の勅書。

伴左　ヤヽ、スリヤ、將監めがくたばり際、家督をおのれに預けたな。

又平　土佐を名乘れば佐々木の家門、桂之助山三兩人勘當した事、記錄所へ屆け濟めば、立退いても大事ない。

伴左　でも、武將より從類を

又平　絕やせとは寅の一天。勘當は丑の上刻。

伴左　なんと。

又平　この願ひを立てんため、幾世の心配。この場を早う

山三　詞に任せ。

ト行かうとするを

伴左　ヤア、立退かば後から追ひ討ち。

ト鐵砲構へる。又平、鐺を返つて、トン〳〵と後へ引

き戻し、手桶の水を火繩へかける。

山三　ヤ、これは

又平　追ひ打ちの氣遣ひなく

山三　この場を水に

又平　立退けとは云ふものゝ、その手傷では

作左　どうで寂滅。

トかゝるを、三人、ちよつと立ち廻つて、山三側なる石の榜示を見事に切り

山三　かくの通り。

又平　天晴れ。

トチヨンと木の頭。伴左衞門立ち掛かゝるを、又平、勅書をさし附け、山三刀を見る。

見事。

ト右の仕組み、三人よろしく　ひやうし幕

三幕目　朱雀廓花形屋の場

役名——不破伴左衞門。名古屋山三。同奴、鹿蔵實ハ福島左近。幇間、喜作。傾城、葛城、同、遠山。同、巴。同、千代菊。遣り手、お玉。奴、桃平。仲居、お粂。仲居、お宮。物草屋太郎兵衞石塚瀬平。花形屋會平。長谷部雲谷。若者、五郎藏實ハ福島左近。

佐々木桂之助。

本舞臺、三間の間、向う一面の長暖簾、上の方、二間程筋違ひに塗り骨障子、この前に大衝立、よき所に門口、花形屋と書きたる掛け行燈、この外に切り戸口、中庭の植込みを見せ、すべて朱雀の廓、揚げ屋のかゝり、よろしく、幕のうちより、銚子杯鉢肴、三つ物なぞ取り散らし、舞臺先に物草屋太郎兵衞、片肌脱ぎ、鉢巻きしてゐる。花形屋會平、亭主の形。お玉、遣り手の形、幇間、これを留めてゐる。千代菊、巴、いづれも三建目女郎の形、居並び、賑やかなる騒ぎ唄にて、幕明く。

三人　マア〳〵、お待ちなされませ〳〵。

太郎　厭ぢや〳〵。うぬ等は俺を誰れぢやと思ふ。物草屋の太郎兵衞、物くれて阿房にされちやア、濟まぬぞ濟まぬぞ。

會平　サア〳〵、御尤もでございます。コレ、お玉、どう

した物ぢや。女郎衆のよあしは貴樣の役ぢや、きつと云ふたがよいわいの。

たま　イエモウ、わたしに如才はないが、アレ、あの玉の井さんは、御覽じる通りの突き出し新造、振るのなんのと可愛さうに、まだその智惠はござりやせん。

幇間　ほんに太郎兵衞さん、お前でもござりませぬ。新造衆に腹立てるは、大人げなうござりますぞえ。

太郎　コリヤイ、金出して買ふお客を、新造なら振つても大事ないか。イヤサ、あいつ等に振られて俺が立つか。振つたぞ〳〵。振りやアがつたわい。

たま　これは又困つたものぢや。ようござります。振りなすつたか振らぬのか、わたしが詮議いたしませう。

曾平　さうぢや〳〵。大切なお客樣の御機嫌に違へては、第一揚げ屋のわしが迷惑。重ねての爲ぢや。きつと云ふたがよいわいの。

たま　サア、そりやわしも色々に……イヤ、ほんによい事があるわいな。お宮どのが大事にする、新造衆の葛城さん、あのお子をお前に呼ばせたら、お宮どのを口説くよい人質であらうぞえ。

曾平　イヤ〳〵、あの葛城は先達て、土佐の將監さまとやらが身請けなされて、勤めも引いてゞあつたれど、將監さまはどうやらした事で、腹切つてお果てなされたげな。まだ後金が濟まぬゆゑ、それから廓へ二度の勤め。

幇間　其うへにまだ、今では不破の伴左衞門さまと云ふ、お大盡さまの御先約がござりまする。

太郎　イヤ〳〵、不破でも鍬でも、俺が錢で俺が女郎買ふに、どいつが點の打ち手がある。

幇間　でも、揚詰めでござりまする。

曾平　伴左衞門さまはお歷々、お侍ひ樣でござりますぞえ。

太郎　侍ひ相手にようせまいと思ふか。コリヤ、誰れぢやと思ふ。物草屋太郎兵衞さまぢや。忌々しいぞ〳〵。なんでもこれから暴れ呑みぢや。エヽ、あのお宮めをな、ドレ、夢にでも見てこませ。

ト衝立の影へ手枕してころりと寢る。ト又地になり、吹替へ出る。

曾平　イエモウ、いつそ疱瘡子に狐が憑いたよりまだ困り物ぢや。

千代　エヽ、贅澤もよい加減に

皆々　捨てゝ置いたがよいわいなア。

幸作　ほんに呆れが禮者ではない。女郎買ひも氣が強いぞ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

ト皆々笑ふこなし。又騷ぎになり、花道より名古屋山三、羽織、大小、覆面頭巾にて出る。後より石塚瀨平、羽織大小の形にて、附いて出て來る。山三、これに思ひ入れあつて、切り戸口へツイと入る。瀨平、これを見て、思案して、門口に扣へる。淸搔になり、花道より、五郎藏、着流し、若い者の形にて、誂らへの抱き人形を持ち、出て來て

五郎　これは廓一見の者にて候ふ。死なざ止むまい三味線枕。

トうか〳〵瀨平に行き當たる。

瀨平　コリヤ、慮外者め、何ひろぐ。

五郎　ハイ〳〵、御免なされませ。伴左衞門さまのお先觸れ、太夫さん方のお歸り。

ト高く呼びながら門口へ入る。太郎兵衞、起き上がつて

太郎　ナニ、侍ひが戾り居るか。

五郎　ハ、ア、物草屋の太郎兵衞さん、お前も久しい氣紛れさん、叶はぬ願ひに日參だな。

太郎　イヤ、待て暫し我が心、お宮を口說くがよからうか。

曾平　そこを矢ッ張り脇道から

太郎　葛城貰ふがよからうか。

曾平　さらば戀の捌け口。

女皆　わたし等も早う見たいわいなア。

ト摺り鉦入り賑やかなる出の唄になり、花道より遠山襠、傾城の形。この後より伴左衞門、羽織、衣裳、大小。禿兩人。葛城、新造の形、お宮、赤前垂れ、仲居の形、醉うたるこなしにて、葛城に靠れ、外に仲居桃平、奴の形にて、草履を持つて出て來る。

遠山　主をば誰れともわかず春はたゞ、垣根の梅を尋ねてぞ見る。

伴左　尋ね廓の横縱を、梅見の酒の醉ひ心。

禿一　ほんに危ないお宮どの

禿二　それ又眠らしやんすぞえ。

みや　これはしたり、どこにわたしが、なんの眠らう。醉ひはせぬぞえ。醉はぬに依つて花の垣、色の目代に仲居の役、ちつとお邪魔ぢやあらうけれど、人には折らさぬ

大事の花、峰の白雲高窓の、葛城さん、お前も慮外乍ら、不躾け乍ら、お客はわたし、アイ、金出して揚詰めのお宮大盡、さま〴〵な悋氣手管も里の癖、色には迷ふ浮き世ぢやなア。

伴左　何を仲居の分際で、葛城を揚詰め、全盛顔、居眠りこけうと捨てゝ置け。

葛城　イ、エイナア、面白う誰れも過ごすは曲輪の酒、醉ふたが科でもないわいなア。

仲居　さうでござんす、今日は又いつよりきつい御機嫌よう。

桃平　さまとはあんまり。モシ、旦那、ふざけ過ぎた奴等でござります。

伴左　イヤモウ、口のへらぬのは遊所の習ひ、マア、揚げ屋へ、桃平、今のに氣を附けろ。

桃平　そりや合點でござりまする。

ト鳴り物の切れにて、皆々本舞臺へ來る。曾平、立ちかゝり

曾平　伴左衛門さま、最前からお待ち申して居りました。

喜作　サア、先づお入りなされませ。

太郎　ハ、ア、追從し居るな。おのれ貰ふてこますワ。イヤ、爰が酒ぢや。

ト伴左衛門先に、皆々うちへ入る。瀬平も附いて入る。

瀬平　伴左衛門さま。

伴左　石塚瀬平、最前の奴は

瀬平　大方それと存じまして、拙者が附いて參りましたを、氣取りましたと見えまして、この内へ附込みましたゆゑ、お出でを待つて居りました。

伴左　慥かにきやつに違ひない。亭主、何者だ。内に居るか。

曾平　ハイ、お客樣がござりまする。

太郎　へ、、、葛城はこれぢやな。よいワよいワ。

伴左　瀬平、そいつ腕廻せ。

瀬平　心得ました。ソレ、桃平。

桃平　お旦那の御意だ。腕廻せ。

ト太郎兵衛へかゝる。思ひ入れ、

太郎　コリヤ、なんとなされまする。

瀬平　逃げ隱れても遁れはない。

ト太郎兵衛を引き据ゑ、捻ぢ上げ、見て

ホウ、こりや違つた。ハテ、よく似た奴もあるもの。馬

鹿な面だ。
　ト突き放す。
伴左　いかさま、横顔を見れば其まゝ。よいワ〳〵、附け
込みさへしたら何時でも、締め上げるのはこつちの儘。
取り逃がさぬ樣に網を張れ。
瀨平　心得ました。
桃平　ドレ、裏道から侍ひ衆、手配りいたしてまゐりませ
う。
　ト合ひ方になり、桃平、奥へツィと入る。此うちお宮
膝枕に寢てゐる、太郎兵衞鉢卷きを締め、强い身振り
をして、伴左衞門が側へ寄り
太郎　婆婆で逢ふた彌次郎の樣な面してうせるは、こいつ
が旦那ぢやさうな。コリヤ、そこにゐる葛城を貰ふた
ぞよ。
瀨平　こいつ素町人の分際、慮外な奴の。
太郎　慮外とはわいら等ぢや。人の顏を灰吹きぢやと思ふて
けつかる。サア、侍ひ、くれればよし、くれぬとぬかし
やア、われ
　ト伴左衞門、睨む。
なんぢやい〳〵。睨んでも、なんともないぞ。

　ト强い身振りにて、後へ寄る。瀨平、刀を拔きかけ
る。太郎兵衞、悧りして
なんぢやい〳〵。拔いたと云ふても三文とも思ふのぢや
ない。サア、侍ひ、返答は
伴左　大べら坊め、汚ないざまアひろいで、亭主、この罪
人め、どこから來た。
曾平　ハイ、イヤ、此お方は、仲居のお宮に惚れ込んで、
お通ひなさるゝお客樣。その戀が叶はぬに依つて、葛城
さんを人質にせうと云ふて、それでの事でござります。
伴左　素町人の分際で、葛城を身にくれいとは、根性の据
つた天晴れ愛い奴。褒美をくれう。コリヤ、瀨平、こい
つ唐竹割りにぶつ放せ。
瀨平　心得ました。サア、町人、仕合はせ者だ、爰へうせ
う。
　ト立ちかゝる。太郎兵衞、ちやつと飛び退き
太郎　もう厭ぢや。貰はぬわえ。なんの別に跨ぎ廻つた事
せうより、直ぐにお宮を口說くが勝ちぢや。
伴左　ハ、、、、、なるほど命は惜しい物。葛城、そちも
伴左衞門へ靡くが厭なら、刀の銹。これ程に惚れさせ
て、コリヤ、イ、返事はどうしてくれる。

ト葛城が側へ寄る。
葛城　アイ、なるほど色賣る身では、どなたでもお客に隔てはなけれども、お前ばかりはどこまでも、わたしが心に染まぬわいなア。
伴左　ムウ、そりや桂之助へ、おぬしが立てる心中か。
葛城　イヽエ、ふつゝりいつやらから、便りも文も音信れも、顔見た事もないわいなア。
伴左　僞り云ふな。名古屋山三、桂之助も、この廓へ折節來るであらうがな。
遠山　モシ、伴左衛門さん、疑ひ深い。お二人乍らこの里へ、お出でぬ事はわたしが證據。人にこそ云はね心では、わたしも待つてゐるわいなア。
伴左　どいつもこいつも、けしぶとい。山三が肩持つ野狐め等、四も五もないワ。葛城來い。
ト葛城を引つ立てる。お宮、ちやつと起きて、突き放し
みや　アイ、イエ、さうはなりませぬ。
伴左　なぜならぬ。
みや　ハテ、この宮が揚詰めの新造さん、アイ、慮外乍ら金の威光で、葛城さんはわたしが揚げでござんすぞえ。

伴左　ヤ、なんと。
みや　しやつとでも云ふて見やしやんせ。
太郎　シタリ、出來た。どうでもおらが樣々ぢや。
ト お宮が側へ行く。
みや　ヤア、お前は
ト太郎兵衛が顔を見て
エヽ、又取り違へた。アヽ、どんな前店の紙雛、どれがどれやら目まぐろしい顔ぢやわいなア。
太郎　コリヤ、振り賣りの鰹かなんぞの樣に、指で値なすな。サア、返事はどうだ。
みや　又野暮を云ひ出して、返事々々も喧しい。ソレ、禿衆。お手が鳴るぞや。返事せぬか。
禿兩　アイ、〳〵。
ト長く云ふ。
太郎　エヽ、べら坊め、わい等ぢやない。仲居、俺と寐くされやい。
みや　又寐いか。有難いなア、とんとやくたい役目もそこのけ。此やうにマア面白う。誰れが醉はせた酒の科。
太郎　コレ、餘所へこかすな。俺ぢやわやい。物草屋さんに抱かれて寐い。

みや　とんと厭、厭も厭、大極上箱入り飛切りなし厭で候ふ、目出度くかしく、七里結界、鶴龜々々厭ぢやぞえ。
太郎　可笑しくない。邪でも非でも抱いて寐る。俺も物草屋太郎兵衞ぢや。
伴左　流石名取りの仲居のお宮、揚詰めの葛城、俺に貸しやれ。
みや　それもならぬぢや。お氣の毒乍ら、ちつと側を放されぬ、いはれ因緣故事來歷。
ト葛城を引き寄せ
惚れたわたしを餘所にして、殿さんに逢ひたい逢ひたいと、何が苦になる事ぢややら、氣遣ひせまい。世間では金貰ふ仲居が金出して、揚詰めのうちは葛城さん、外のお客へ勤めは恐か、顏見せる事もならぬぞえ。
伴左　然らばいつそ身請けせう。コリヤ、亭主、葛城が身の代は。
曾平　ハイ、五十兩でござりまする。
伴左　伴左衞門が身請けいたす。外より異議はあるまいな。
みや　外にはないがわたしがある。揚詰めのうちに身請けはならぬ。都の八重櫻やら腹立ちの金づくでも、廓の法が立たぬぞえ。
曾平　イヤ〳〵、お宮、さうではない。現在身請けのお客樣。
みや　アヽ、コレイナア、云はしやんすな。廓の法で揚詰めの日のあるうちは、よそ外へ手放す事はなるまいがな。
曾平　サヽそれはな。
みや　ソレ、五郎藏どの、喜作さん、そこな遣り手衆もお働き。
ト紙入れより、金四五兩出して、撒く。
三人　ソリヤ、山吹色が散つたワ。
ト皆々拾ふ。
五郎　モシ、花形屋の御亭主さん、揚詰めのある葛城さん、外の身請けはなりませぬよ。
喜作　廓の掟を背いてなら、餘所へ斷りまするぞえ。
たま　さうぢやわいなア、金輪奈落、外へ身請けはならぬ事。それでも無理を云ひなさると、璽を附けて頭をがりがりかぢるぞえ。
曾平　エヽ、どう云へば斯う云ふと、いけ喧しいあごた骨。

たま　ナニ、あごたとはえ。
五喜　あごたとは、なんだ〳〵。
　ト三人、立ちかゝる。
みや　エヽ、喧しいわいなア。
三人　アイ〳〵。
　ト下に居る。
みや　なんであらうと身請けさへ出來ねば、宵の口舌もさらり、こそで済んだと云ふものぢや。
三人　ほんに左様でござりまする。
伴左　時に瀬平、酒に致さう。云ひ附けやれ。
曾平　ハイ〳〵、コリヤ、お粂、お肴出さぬか。禿粂も來てお酌をしたり〳〵。
禿兩　アイ〳〵〳〵。
　ト銚子を持つて來て、酌する。お粂、肴など持つて來て
くめ　又わつさりと太郎兵衛さま、お前さんもお上がりなされませ。
太郎　オヽ、呑む〳〵。コリヤ、お宮、大盡は大盡、わりや仲居ぢやないか。爰へ來て物草屋が座敷を持て。
みや　エヽ、さうぢやな。肝心の商賣を忘れてゐた。アイ太郎兵衛さん、ちとお相いたしませう。
太郎　オヽ、差すワ。サア、仲居め、この鉢で呑め。
　ト肴うち明け、大鉢を出す。
遠山　モシ、太郎兵衛さん。お宮どのはきつう醉ふてぢやぞえ。
千代　ソレイナア、呑ましやんしては爲に惡い。
巴　もうよい加減に置きなさんせいなア
太郎　喧しいわえ。わい等が構ふ事はない。サア、これぢや。
　ト紙入れより金一兩出して、鉢の中へ入れなんと偉いか。一兩、サア、呑め〳〵。醉ひ潰さして仕樣があるワ。
　ト突きつける。お宮、同じく紙入れより金二兩出して、鉢の中へ入れる。
みや　エヽコレ、誰れぞ助けて欲しいなア。
喜作　オット、外へはその盃。
五郎　エヽ、まんがちな、お押へ〳〵。
たま　イエ〳〵、わたしが助けるわいなア。
　トせり合ふて、三人、呑み
三人　一兩づゝ、こりや有難い。

ト銘々分けて取る。太郎兵衞、手を打つ。

太郎　見事。仲居大盡のお捌き、さても、ようしたものぢやなア。

ト呆れる。お宮、じろりと見て

みや　太郎兵衞さん、お前譯があるぞえ。野暮な仲居のわたしでも、金で自由になるものと、男の癖の仇つきに、乗りさうな女子と思ふてか。持つた自慢か知らねども、お前一人がこの廓の、大盡さんぢやあるまいし、これではどうぢやと云はぬばかり。金出して人に腹立てさせる色も意氣地もないお前に、意見云ふのぢやなけれども、そんな野暮らしい古い手事は置きなさんせ。人に變つて慮外乍ら、わたしや氣まゝの氣隨者、厭味と云ふたら金輪際、ならぬのぬの字ぬらくらと、吊つて置くのぢやない程に、思ひ切つたがよいわいなア。

太郎　サア、それは

みや　ほんに家名もよう附けた。物草らしいお方ぢやなア。

女皆　エイ〱、云ひ負けて、オヽ、笑止。

ト皆々笑ふ。太郎兵衞、悄げる。

伴左　サア、葛城、我れもこれで一つ呑め。

葛城　アイ、わたしや露ほども

伴左　酒は呑まぬか。下戸なら猶、盛り殺すが俺が意地。

葛城　それぢやと云ふて。

瀬平　肴進上。オヽ、幸ひ。

ト火入れの火を、箸にて挾み

おこり切つたこの切り炭。

伴左　それを肴に一つ呑め。

遠山　エヽ、そんな無理な事。

女皆　いとしほなげに、措かしやんせ。

伴左　無理も合點、サア、呑め。

瀬平　食らへ。

葛城　サア、それはな。

伴左　サア〱〱、桂之助へ心中に、葛城呑まずばなるまいぞよ。

トキッと云ふ。お宮、寢ながら、じつと見て

みや　長い物には卷かれろぢや、揚げ詰めのわたしが貸しませう。

葛左　ヤ、なんと。

みや　ハテ、葛城さんを貸すからは、お前の自由にしなさんせ。

葛城　エヽモシ、それでは

みや　ハテ、大事ない。悪い様にはせぬわいなう。

伴左　葛城、そちも得心か。

曾平　ハテ、揚げ詰めのお客から、貸すとあるのに二言はない。

伴左　いかさまさうだ。然らば奥へ。

瀬平　かの奴を詮議いたしませう。

太郎　エヽ、忌々しい。俺一人値のならぬ所にゐやうより、氣を替へて奥で呑み直さう。

三人　わたし等もお相いたしませう。

太郎　勝手にさらせ。

伴左　葛城、來やれ。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト騒ぎになり、伴左衞門先に、皆々附いて奥へ入る。お宮、矢張り寢てゐる。太郎兵衞、曾平、殘り

曾平　太郎兵衞さま、お前もちつと嗜みなされ。あの不破の伴左衞門さまはな、ありや小栗宗丹さまの弟御でござりますぞえ。

太郎　ヤア、そんならあの常から俺に目をかけて下さる、宗丹さまの弟御かえ。ヤイ、それなら矢ツ張りこつちの幕。そんなら疾から、俺にさう云つてくれゝばよい。

曾平　それでもお前、お宮が事ばつかり云ふて、何を云ふても聞きなさらぬゆゑ。

太郎　弟御なら氣の毒な事云ふたなア。それに附けても名古屋山三、搦めてさへ出せば、愈々あの

曾平　コレサ、大きな聲せまい。詳しい事は宗丹さまから、お前への宛てた狀が來る筈ぢや。

太郎　ヤア、狀で云ふて來るか。狀では濟まぬ。狀で濟むものかい。

曾平　ハテ、狀が來たら、つい讀んで見りやア、それで樣子が知れるぢやござりませぬか。

太郎　イヤ／＼、人に物を頼んで置いて、狀では濟まぬ。それとも狀で濟む事なら、貴樣どつこへも行かずに、一緒に讀んで見やれ。

曾平　ハテサテ、わたしが側に居らぬとて、お前が讀んで御覽じたら解りませうぞえ。

太郎　氣のもや／＼する時、ごて／＼讀んでゐらるゝものかいの。阿呆臭い。

ト困つたる思ひ入れ。

曾平　ハヽア、太郎兵衞さん、お前無筆ぢやな。察する所

明き盲目ぢやわい。
太郎　エヽ、阿呆らしい、なんぢや、物書くわいやい。
曾平　イヤ〳〵、仰せられな。お前と又深いお馴染みでないゆゑ、今までは知らなんだ。この間そばで見るに、お前は無筆ぢや。ハテ、一目見てもやる物ぢやない。隱さずとも云ふて仕舞ひなされ。
太郎　目高め、さう突かれては隱されぬ。ありやうは一字も讀めぬ器用者。
曾平　ホイ、そりやア惜しい事ぢや。
太郎　サア、なんでも貴樣と云ひ合はせた通り、この事が首尾すりやア金儲け。
曾平　そりやもう御褒美は狀と一緒、前金に來る筈でござります。
太郎　うまいワ。コレ、狀が來たら側離れまいぞ。
曾平　そりや合點でござります。
太郎　前祝ひに奧で呑み直さう。
曾平　そんなら太郎兵衞さま。
太郎　サア、來やれ。
ト騷ぎ唄になり、太郎兵衞先に、曾平附いて、奧へ入る。あと合ひ方。お宮、枕を上げ、あたりを見廻し、思ひ入れ。
みや　合點の行かぬ今二人、醉ふた振りしてよそ事に、聞き捨てならぬ夫の身の上。思へば變る世のなり行き。佐佐木のお家に誰れあらう、名古屋山三が妻女房と、云はるゝわたしが此やうに、遣り手仲居と樣を變へ、馴れぬ廓の奉公も、お家のお旗紛失の、御朱印詮議のそのために、葛城どのゝ二度の勤め。身を穢しては殿樣の、生きてはゐぬとの御短慮を、今日まで漸く揚げ詰めの、金の手段ももう盡きて、思案工夫も女子の智惠。思ひ合せば二品の、ありかも慥かに伴左衞門、お家の仇に無理酒の、憎い口說を、ドレ、開かうか。
ト合ひ方になり、お宮、思ひ入れあつて、奧へ入る。又騷ぎになり、花道より雲谷、深編み笠、大小、浪人の拵らへ、後より鹿藏、木綿やつし、阿呆の拵らへにて、風呂敷包みに狀箱を括り添へたるを背負ひ、出て來る。
鹿藏　ハヽア、騷ぐワ〳〵。から野良手合ひの騷ぐ所が廓だと、聞いたに違ひない。イヤ、待てよ、なんとか云つた。オヽ、それそれ。モシ、お侍ひさま、はなくた屋はどこでござりまする。

雲谷　なんぢや、はなくた屋。ムウ、そりやどこぞのかつたい村であらう。
鹿藏　イエ〱、朱雀の傾城町でござりまする。
雲谷　傾城町にはなくた屋。ア丶、聞こえた。花形屋の曾平が事であらう。
鹿藏　ハイ〱、その花形屋は、天ぷらも賣りませうね。
雲谷　變つた事を。そりや又なぜ。
鹿藏　イエサ、お前、揚げ物屋だと聞きましたよ。
雲谷　大だわけめ。コリヤ、花形屋の曾平と云ふ揚げ屋は、即ちこれぢや。
鹿藏　ハイ〱、これは御きんとふにお世話でござりまする。
雲谷　まだたわけ居るか。
ト本舞臺へ來る。あたりを見廻し、思ひ入れあつて、切り戸口へついと入る。鹿藏、うろ〱して
鹿藏　よう叱る侍ひだ。忽ち姿は消え失せたが、狸でもあるまい。ドレ、花形屋の揚げ物屋へ、さらば案内いたさうか。ものもう。どうれ。
ト獨り云ひながら、うちへ入る。奧より山三、出て
山三　ヤ、鹿藏ぢやないか。

鹿藏　オ丶、山三さまでござりまするか。ヤレヤレ、久し振りにてお目にかゝりました。
山三　ヤレ〱、鹿藏、無事にあつたか。大儀々々。
鹿藏　今もこれへ來る道、狸が侍ひに化けて、どこへか消えてなくなつたに依つて、見ればお前も矢ツ張り……ほんに、それ〱、山三さまでござりましたか。
山三　何を又たわけな。シテ、其方が參りしは
鹿藏　今日はわたしも大津から飛脚に頼まれて
山三　大津からとは、そりやどこから。
鹿藏　アイサ、わたしが斯う云ふ者だから、久しく兄貴の又平どのに、見限られて居りました、がモシ、今では兄貴も殿樣の株にあり附いてね。
山三　オ丶、そりや噂に聞き及ぶ、土佐の繪所相續して
鹿藏　イエモウ、ほんに仕合はせ者サ。そして何かをよく知つて、お前が爰にござらうから、この狀を屆けてくれろ、この狀には余の者はやられぬ、それでわたしに云ひ附けると、丁寧に叱つてよこしやした。そしてほんにまだあるワ。
ト風呂敷より、半斤入りの茶を出して
久し振りで來たから、こりやアほんのわたしがお土産で

ございまする。
山三　オヽ、殊勝らしい、過分なぞや。
ト狀箱と共に取る。
大津よりの使ひ、ドレ、その狀。
ト狀を見る。中より繪姿出る。
ヤア、こりや殿を尋ね探す配符の繪姿。ムウ、扨ては
ト思ひ入れ。
鹿藏　モシ、まだ爰にこんな物が落ちてございまする。
ト狀箱より落ちたる香包みを渡す。山三、取つて
山三　ハテナア、この香包みに、鶯の巢と書いたるは
ト思案して
しやが父に似てしやが父に似ず。
ト鹿藏が顏を詠め
鹿藏、來い。
鹿藏　オツトショ。
ト唄になり、山三先に、鹿藏附いて、障子のうちへ入る。暮れ六つの鐘鳴る。矢張り唄のうち、遠山、奥より行燈を提げて出て來て、あたりを見廻し、懐より文を出して
遠山　奥で拾ふた殿さんのこの文。葛城さんへは此やうに……エヽ、羨ましい。なんと書いてあるか知らん。
ト行燈にて、文を讀む。此うち後へ伴左衞門、出て
伴左　遠山、その文ちよつと見せう。
遠山　エ。
ト悧り後へ隱して
イエ／＼、こりや文ぢやござんせん。
伴左　ぬかすな、桂之助より葛城への文。隱す事はない、爰へ出せ。
遠山　どうしてマア、滅相な。今のはわたしがお客の文。
伴左　さうでもあらうが、コレ、遠山、おぬしは愚かな者だなア。なんぼそれ程桂之助を、附けつ廻しつ惚れてゐても、葛城と二人深い仲。
遠山　それぢやに依つて、わたしやよう諦めてゐるわいなア。
伴左　悟つたものだなア。それはそれよ。今の文をちよつと見せう。
遠山　イエ／＼、文ぢやござんせん。
伴左　いけ面倒な、出しやアがれ。
遠山　エヽ、モシ、それを
トかゝる。この時遠山が懐より、書き物落ちる。

伴左　葛城への文と思ひの外、守り袋に、コリヤ、臍の緒。

トこの時、切り戸より、雲谷、出て、窺ひゐる。

なんだ、寶徳元年己の年己の月己の日己の刻の誕生。

遠山　それ見なさんせ。そりやわたしが

雲谷　生れ年度も丁度幸ひ。

伴左　さう云ふ聲は雲谷か。

雲谷　伴左衛門どの。不愍ながら。

ト笠取つて、うちへ入る。

遠山　その守りを

ト伴左衛門、醜く顛倒し、下緒にて括し上げる。雲谷、手拭ひにて、遠山に猿轡をかけ

雲谷　相好變へる願ひの妙薬。

伴左　爰で殺せば跡の雑儀。コリヤ。

ト驚き、懐より袱紗包みの白旗を出して渡す。

雲谷　スリヤ、この旗も宗丹どのへ。

ト取つて懐中する。

伴左　何かは旅宿で

雲谷　心得ました。

ト袂より呼び子を出して吹く。ト切り戸口より、駕籠舁き二人、四つ手駕籠を舁き出る。雲谷、遠山を引立て、駕籠へ打ち込み

伴左衛門どのには今暫らく。

伴左　構はず行きやれ。

雲谷　やれ嬉しや。日本晴れがした様な。

ト又時の鐘になり、雲谷、編笠を着て、いそ／＼駕籠を追つたて、向うへ入る。伴左衛門、これを見送り

伴左　思はぬ幸ひ、これもよし。手剛い奴は名古屋山三、きやつを吊り出す一工夫。ドリヤ、奥で思案せうか。

ト合ひ方、矢張り時の鐘にて、伴左衛門思ひ入れあつて、奥へ入る。直ぐに唄浄瑠璃になる。

〽普化の流れの目せき笠、人目忍ぶの里に來て、よしや思ひをたけの音に、焦れ待つ間の節こめて、御嬉しくの返し書き。

ト戀慕の合ひ方になり花道より桂之助、虚無僧の形、尺八を吹きながら出て來る。奥より葛城、硯箱に卷紙を持ち添へ、出て來て、行燈の元に文を書いてゐる。桂之助、門口へ來る。

〽假名で一言、エ、儘ならぬ、夜の巣籠り主や誰れ、山吹衣くちなしの、色さへ解けぬ氷面鏡。

ト此うち葛城、鏡臺の鏡を取り、門口へ來て、桂之助へ突き附け、顏を見て、今の文を鏡へ乘せて出す。

桂之　浮き世につるゝたはんの修行、志しの手のうち忝ない。

ト文を取らうとする。葛城、その手を取つて、直ぐにうちへ連れて入る。桂之助、天蓋を取つて

世間晴れての俺なれば、毎日顏見に來やうもの、遲う來たゆゑこの文か。さりとは愚痴な、何を云やる。

葛城　待つ程辛い片便り、推量してくれたがよいわいなア。

桂之　サア、それぢやに依つて、今日もわざわざ。

葛城　お前はいつ迄逢はいでも、それで心が濟むかいなア。

桂之　なんの濟まう、俺ぢやと云ふて。

ト桂之助、よろしく今の文を心にて讀み

ムウ、こりや不破の伴左衞門、矢ツ張りそなたを

葛城　アイナア、身請けすると云ふて、それでお前へ知らせの文。

桂之　そんなら今日もこの揚げ屋に

葛城　山三さんやお前の事、詮議すると云ふて居るわいなア。

桂之　エヽ、不忠者、家の仇。いつその事に俺が逢ふて、腹存分。

ト血相變へ、奥へ行かうとする。葛城ちやつと留め

葛城　アヽモシ、そりやお前

桂之　ハテ、俺ぢやで、手もある、足もあるわえ。

ト强い思ひ入れ。

葛城　それぢやと云ふて、モシ、殿さん。

〽同じ心の月の隈、晴れぬ思ひの中にもほんに神かけて、さぞ忘られぬ胸のありたけ、互ひの誠通ふ心の色見草。

桂之　それもさうぢや。そんなら葛城、わしやもう去なうか。

葛城　エヽ、折角來て、顏見たばかり、遠山さんが待つてぢやわえ。

桂之　これはしたり、又野暮な事云やる。

葛城　アイ、わたしや野暮、野暮に構ふて下さんすな。

桂之　イヽヤイノ、伴左衞門めは野暮な奴。

葛城　アレ、まだそんなよい口な、何もかもよう知つてゐるぞえ。

桂之　知つてゐるとは、そりや何を。

葛城　隱しなさんすな。あの遠山づらめがな、ほんに云ふまいと思へど、それに又お前も同じ樣に、いかに御全盛の太夫さんぢやと云ふて

桂之　そんなら俺があやまる程に、堪忍しや。

葛城　厭でござんす。

桂之　コレ、しつこいぞや。これ程云ふに聞き分けのない。

葛城　アイ、あやまり樣が氣に入らぬ。

桂之　さうしてどうするのぢや。

葛城　爰へござんせ。

桂之　オツト、來たワ。

葛城　もそつと側へ寄りなさんせ。

桂之　寄つたがどうする。

葛城　桂之助や。

桂之　ハア、。

　ト誂らへの合ひ方。

葛城　その間造の山さまを止めにして、粹になりや。

桂之　仰せの趣き承知仕る。シテ、その粹とは

葛城　早う身まゝになつて、世帶がしたいわいなア。

桂之　世帶とはどうするのぢや。

葛城　先づ世帶とは、と云ふものぢや。

桂之　なるほど解つた。併しながら身まゝにして、奥にするのは葛城と云ふ名では可笑しいものぢや。

葛城　わたしが亭主になるのに、桂之助も野暮ぢやね。

桂之　待ちやれよ、今も云やるし、又常々から、世帶々々と云やる程に、今云やつた世帶道具で云ふて見やうなら、摺り粉木姫。

葛城　姫はあんまり可愛らしい。もつと粹な名がいゝに。

桂之　そんなら待つたり、俎板御前。

葛城　それも惡い。

桂之　そんなら水瓶御前。

葛城　それも厭。

桂之　そんならまなばしの方、庖丁の前、釜御前ではどうであらう。

葛城　こりや余ッ程堅氣な名ぢや。そんならお前も桂之助を改めて、三助はどうぢやえ。

桂之　こりや短うて堅氣な名ぢや。

葛城　そんならこれから

桂之　お釜の前。

葛城　三助さん。オヽ、嬉し。

伴左　ト抱きつく。ト直ぐに奥より
　　仲居は居らぬか。葛城々々。
　　ト呼びながら出る。葛城、これにて、桂之助をちやつと後へ囲ふ。伴左衞門、思ひ入れあつて、葛城を引退ける。お宮、奥よりつか／＼と出て、伴左衞門を突き退け、桂之助を手ばしかく衝立の後へ突きやる。伴左衞門、構はず、葛城を連れ行かうとする。お宮、ちやつと留める。
みや　待ちなさんせ。こりやお前葛城さんを手籠めにして
伴左　オヽ、知れた事、抱いて來るワ。
みや　イヤ、そりやならぬ。揚け詰めのわたしが手切れせぬうち、指さする事もなりますまい。
伴左　ハテ、膽玉の太い奴。さうでもあらうか。名古屋山三が女房のお宮。
みや　エ。
伴左　われから見れば山三めは、卑怯未練な大腰拔け。不破の伴左衞門名古屋山三と、互ひに武術も爭つた程の奴が、うぬが國を思ふまゝ人に押領されても、面出しひろがぬ臆病者。今また見ればどこやらへ、アレ、忍んだ瘦せ虚無僧、こいつも同じ人外め、猫めに追はれた鼠の樣に、身が影を見て、よいざまなア。
　　ト笑ふ。桂之助、出やうとするを、お宮、ちやつと押へ
みや　サア、モシ、畜生と云はれうが、腰拔けと云はれうが、大切な願ひ叶はぬうち。
伴左　願ひとは、エヽ、何か、近江一國の御朱印。そりや氣を揉むな。俺がぼつぼに所持してゐる。
みや　エヽ。
伴左　欲しいか。可哀やわい等がどの樣に跪いても、手出しはならぬ。なぜと云へ、伴左衞門にちよつとでも疵が附くが最期の助、御朱印は天へ飛んで仕舞ふ。マア、この世界のうちには置かぬ。よくしたものか。それとも欲しくば山三めを出せ。勝負して取り返せ。出ぬか。出られまい。葛城も俺が抱いて來る。御朱印はうぬら欲しくはないか。
みや　サア、それはな。
伴左　葛城を渡すか。
みや　サア、それは
伴左　但し御朱印踏ん裂かうか。
みや　サア

伴左　サア

兩人　サア／＼／＼

伴左　葛城、來い。

　ト葛城を引つ立てる。桂之助、こらへず、衝立より出て

桂之　伴左衞門め、エヽ、おのれ。

　ト伴左衞門へ武者振りつく。お宮、思ひ入れ。伴左衞門、じつと突き放す。

伴左　扨てこそ。まい／＼うづ蟲どの、御朱印が欲しいか。葛城を思ひ切る事はならないか。

桂之　エヽ、おのれこそ恩知らずめ、桂之助は主ぢやぞよ。大切な御朱印盜んだおのれ、家國の仇、われはなア、サア、御朱印出せ。エヽ、おのれ、出させずに置かうか。

　ト伴左衞門、默つてゐる。桂之助、伴左衞門が懷を色々探し

　コリヤ、どうぢや。懷にはない。どこへ隱した。サア、眞直ぐに云へやい。

伴左　小癪な二才め、大切な御朱印、うぬ等がほてのさはる所へ置くものか。コリヤヤイ、小栗宗丹が弟不破伴左衞門、今は大名、その大名の懷へ、ほて差込んで慮外な奴。サア、葛城を上げませうとぬかせ。

桂之　イヤ、そりやならぬ。なんのおのれ。

伴左　おのれとはいけぞんざいな。生白けた小胸の惡いしやつ面へ、伴左衞門が極印打つてやらう。

　ト桂之助が眉間へ、刀の柄にて疵附ける。

葛城　エヽ、そりやあんまり。

伴左　何があんまり、御朱印くれうとぬかすではないか。

葛城　それぢやと云ふて

伴左　抱かれて寐るか。

葛城　サア、それは。

桂之　コレ、葛城、應と云ふたりや死ぬるぞや。

伴左　支へ立てすりや打ッ放すぞ。

葛城　是非に及ばぬ。エヽ、情ない。

　ト泣き伏す。伴左衞門、につこりして

伴左　それでさつぱり。ヤイ、二才め、命冥加な奴だなア。

　ト唄になり、伴左衞門、桂之助を蹴倒し、葛城を無理に引つ立て、奥へ入る。桂之助起き上がつて

桂之　もう堪忍が。おのれ待て。

ト行かうとする。上の障子より、山三、出て、桂之助を留め

山三　コリヤ、今奧へござつては、葛城どのに凶事の元。

みや　何を云ふても御朱印を、奪ひ返さぬ其うちは

桂之　そんなら手ざしはならぬかいやい。

トじつとなる。此うち喜作、門口へ窺ひ出て

喜作　お尋ね者の名古屋山三、慥かに見附けた。待つてゐろ。

ト向うへ走り入る。

桂之　南無三、扨ては

ト行かうとして

こりやもう網を張つたわやい。

ト思案する。奧にて

女皆　太郎兵衞さん、どこへ行かしやんす。

ト大勢の聲する。これにてお宮、思ひ入れあつて

みや　コレ、モシ。

ト山三に囁く。

山三　出來た。そんなら暫らく……若旦那、マア、ござりませ。

ト桂之助を連れ、上の障子へツイと入る。トお宮、銚子杯を取つて、火鉢へかけ、思案してゐる。

太郎　お宮はどこへ行た。

ト合ひ方になり、太郎兵衞、出て來て

一ぺんと捜した。コレ、お宮、わりや最前からなんぞ用かえ。

みや　太郎兵衞さん、お前はマアきよと〳〵と、わたしに用がなうては。

太郎　用がなうては。併し又、七里結界をぬかしくさるであらう。

みや　さうでもないわいな。マア、爰へ來てあたりなさんせ。

太郎　ついぞない事云ふな。ドレ、あたつてこまそ。

トお宮、思ひ入れ、太郎兵衞も思ひ入れあつて、火鉢の側へ寄り

オヽ、寒い事ぢや。

みや　ソレイナア、寒いに依つてわたしも一つ呑まうと思うて、見なさんせ、銚子もかけてある。

太郎　有難い。俺もお相なとせうか。

みや　サア、呑みなさんせ。ぢやがな、太郎兵衞さん、お前わたしに常から云ひなさんす事、ありやマア誠にか、嘘か、嘘であらうなア。

太郎　オヽコレ、嘘とは曲がない。モウ〳〵〳〵、てつぺんから足の先までこたへて

みや　イヤ、嘘ぢや〳〵。ようわたしが深々と乗らうぞいなア。

太郎　エヽ、これは又疑ひ深い。寐ても覺めても、覺めても寐ても、わが身が事は忘れられぬ。死なれた親父を地獄落とし、無間の釜の湯の子にする法もあれ

みや　それに違ひはないかえ。

太郎　ハテ、なんの違ひがあるものか。物草屋太郎兵衛、男に二言はないわいやい。

みや　その詞覺えてゐなさんし。引かしはせぬぞえ。

太郎　なんの違へよう、引く事ぢやない。

みや　それならようござんす。

ト　お宮、暖簾のうちより、枕と蒲團を取つて來て、よき所へ敷き、屏風引き廻す。太郎兵衛、これに附いて廻り、おかしみのこなしよろしく、お宮、寢床を敷き

寒いに火鉢に入れうなア。

太郎　よからう〳〵。なんぢや耳が、うぢやうぢやする樣な。

ト　云ひ〳〵、兩人、蒲團の上へ上がり

みや　太郎兵衛さん。

太郎　ヤア〳〵。

みや　お前の心を見拔いたに依つて、とんと今帶紐解いて、抱かれて寐るぞえ。

太郎　エヽ、コレ、夢ではないか。夢なら覺めてくれぬな。

みや　斯うなつたら、二世までの女夫ぢやぞえ。

太郎　女房とも〳〵。もうこりやたまらぬワ。

ト　抱きつかうとする。

みや　待ちなさんせ。イヤ、滅多には寐られぬわいなア。

太郎　そりや又なぜ〳〵。

みや　心中が見たい。

太郎　オヽ、心中なら、腕なりと股なりと、いつそ指切らうか。アヽ、痛からうなア。

みや　それ見やしやんせ。厭ならわたしも厭。

太郎　アヽコレ〳〵、厭とは云はん。君の事ならいかやうとも、御意は背かぬ、どうなりとも〳〵。

みや　そんならいつそ、入れ黒子して下さんせ。

太郎　ハヽア、入れ黒子くらゐお茶の子ぢや。お前の事ぢやもの、丁子車に三つ扇、そこらだけが腕だらけ、脊中から腹へよい所に、通し小紋になるわいの。

みや　そんなら書くぞえ。
　ト硯を引き寄せ
太郎　ハテ、知れた事。お宮命。
　なんと書かうぞ。
みや　ほんにさうぢやな、知れた事を。
　ト云ひ〳〵、太郎兵衛、色々おかしみあつて
太郎　えらう太いなア。
　ト痛さうに云ふ。
みや　厭かえ。厭なら勝手にさんせ。
太郎　アヽコレ、誰れが厭と云ふた。サアサア、お突きな
　さい〳〵。
　ト腕を突き出す。
みや　そんならよいな。エヽコレ、針が欲しいが……オヽ
　お前の腰提げの根付けは、さすがぢやな。ドレ、貸しな
　さんせ。
　トさすがを取る。
太郎　これは酷いワ。アヽ、儘よ、ちつと痛い目するも、
　たんと痛い目するもおんなじぢや。
みや　そんなら突くぞえ。
　ト手を掴まへる。

太郎　アイタヽヽヽ。
みや　オヽ、仰山な、まだぢやわいな。
太郎　ハヽア、まだか。俺やもうかと思ふて、一寸アイタ
　タヽヽと云ふても見たのぢや。サア〳〵、お突きなさ
　れい〳〵。
みや　そんなら突くぞえ。痛むぢやあらうなア。
太郎　なんの痛い事があるものか。
　ト云ひ〳〵、額をしかめる。
みや　此やうにマア願ひの叶ふと云ふも、大てい深い縁で
　あらうなア。
太郎　左様々々。
　ト又額をしかめる。
みや　ソレ、人もよう云ふ、天にあらば比翼の鳥。
　ト突きながら云う。
太郎　地にあらばうごろもち。
みや　二世は愚か先の世までも
太郎　放れまいぞや蝶番ひ。
　ト唄にて云ふ。此うち入れ黒子へ、墨入れる事あつて
みや　サア、出來た。
太郎　オヽ、皮切りから仕舞ひまで、おんなじ痛さぢや。

ト恨めしさうに腕を見る。

みや　オヽ、これはしたり、どうしてか、いつそ吹きかへつて

太郎　ドレ〳〵。

ト取らうとして

オヽ、熱々。

ト火傷する。

みや　エヽ、まんがちな、待ちなさんぜ。

ト鼻紙で、蔓を持ち、太郎兵衛が肩先へ銚子を當てる。

太郎　ワアイ、熱いぞ〳〵。

みや　これも心中ぢや。こたへなさんせ。

太郎　フウ、心中ならこたへる。

ト齒ぎしりする。

みや　熱いかえ。

太郎　アヽ、よい氣味ぢや。

みや　それでこそわたしの男なれ。

ト銚子を取る。

太郎　ホヽウ、一生に此やうなアタ痛い、熱い、よい氣味な目に遭ふた事がない。コレ、ぐつすり跡がくへた。

みや　心中見えた。モシ、わたしが男ぢやぞえ。

トそこにある山三の羽織を着せて

とんと、そのまゝのこちの人ぢや。

太郎　エヽ、有難い。

ト色々おかしみにて、抱き附かうとする。てんつゝになり、花道より飛脚、一本差し、飛脚の形にて、狀箱と弓張り提灯を持ち、つか〳〵出て來て、直ぐに門口を入り

飛脚　頼まうぞ〳〵。急用ぢや、頼みませう頼みませう。

ト仰山に云ふ。これにて太郎兵衛、起きて出て

太郎　うまい所へ仇けたゝましい。なんの用ぢや。

飛脚　イヤ、御免なされ〳〵。氣の急くまゝに無禮いたした。免しやれ〳〵。扨てちと物が尋ねたい。花形屋と云ふ揚げ屋はこれでござるかな。

太郎　アヽ、これでござる。

ト腹立ちさうに云ふ。

飛脚　サア、それなれば、物草屋太郎兵衛と云ふ人が、爰へ來てゐる筈ぢや。貴樣知つてゐるなら敎へて下され。貴樣知らぬか知らぬか。

太郎　ナニ、物草屋太郎兵衛。ハアヽ、どうやら聞いた樣

お名なやが。

飛脚　それは幸ひ、どうぞ早く教へ下され。

太郎　オヽ、聞いた筈ぢや。物草屋太郎兵衛とは即ちわしぢや。

飛脚　ハアヽ、そんならお身が、物草屋太郎兵衛ぢやな。

太郎　さうぢや。エヽ、お前、そんなら小栗宗丹さまからのお使ひぢやござりませぬか。

飛脚　なるほど拙者は宗丹どのからのお使ひだ。

太郎　さうかいな。遅い事ぢや。大てい待つた事ぢやござりませぬ。

飛脚　イヤ、お手前物草屋太郎兵衛ならば、お旦那宗丹さまから御状が參つた。お返事を早く認めて貰ひたいな。

ト状を渡す。太郎兵衛、迷惑さうに取つて、

太郎　ハイ／＼、それは／＼、御苦勞さまでござりまする。然らば提灯お貸しなされ。あなたはそれでお莨お上がり下さりませ。

トこちらへ状を持つて來て、開き見て、一字も讀めぬこなし。お宮、後ろより覗いて見る。太郎兵衛、もじもじ、飛脚が側へ行き

お手紙拜見仕りました。シテ、其やうすは、いかがでござりまする。

飛脚　拙者はお使ひの事ゆゑ、委細の事は存ぜぬが、其お手紙に委しく認めある筈ぢや。篤と讀んで、コレ、早くお返事をしやれ。ちつとも早く歸りたいわえ。

太郎　スリヤ、委細御状で知れますぢやな。ハヽヽ、ヽ、私しとした事が、小口ばかり讀んで、肝心の奧を見ませなんだ。お使御苦勞でござりまする。エヽ、コレ、折惡うお茶さへ上げませぬ。

トこちらへ來て、又状を見るこなし。お宮、又後ろへ廻り、状を覗く。太郎兵衛、いろ／＼あつて、又飛脚が側へ行き

なるほど、お手紙拜見仕りました。お使ひの樣子どうでござりまするな。

飛脚　エヽ、不埒な男だ。俺はお使ひの事ぢやに依つて、譯は知らぬ。お手前その状讀んで見たぢやないか。

太郎　ハヽヽ、ヽ、ありやうは、恥を云はねば、理が聞こえぬ。何を隱しませうぞ。私しは、アノ、きつい無筆でござりまする。

飛脚　無筆ならその状讀める筈ぢやが、ハアヽ、こりやお手前無筆ぢやの。無筆か／＼。

太郎　サア、その無筆ならようございまするが、私しは矢ッ張り祐筆で困りまする。

飛脚　ホヽオ、それは御不自由であらう。然らば苦しうなくば、俺がその狀讀んで遣はさう程に、直ぐに返事をさつしやれ。それで拙者も早う歸れると云ふものぢや。

太郎　ハイ〳〵、それは御苦勞でござりまする。左樣ならはおむつかし乍ら、お讀みなされて下さりませ。

飛脚　ドレ〳〵、提灯爰へ。

ト取り寄せ、太郎兵衞、今の狀を飛脚へ渡す。此うちお宮、心遣ひの思ひ入れ。飛脚、狀を開き見て

ホヽオ、なんぢや……未だ御意得ず候へども、わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ。然らば花形屋曾平へ談じ置き候ふ通り、名古屋山三こと愈々

ト讀むうち、お宮、思ひ入れあつて、飛脚が脇差しを取り、拔き、其まゝ飛脚が首うち落とす。太郎兵衞、恟り、飛び退き

太郎　ハア、人殺しだ〳〵〳〵。

ト震ふ。

みや　ア、コレ、聲が高い〳〵。大きな聲せまいぞ。

ト同じく震へながら云ふ。

太郎　それでも人殺しぢや〳〵。

みや　ア、コレイナア、使ひを斬つたはお前のためぢやわいなア。

太郎　とんと合點が行かぬ。あのお使ひに狀を讀んで貰ふてゐたら、後ろからポンと、なんの事ぢや。

みや　エヽ、惡い合點ぢや。わたしは女子の事なり、大きな聲しなさんしたら、お前が人殺しぢやと云ふぞえ。オオ〳〵、マア、その狀にはなんと書いてある、讀んで見なさんせ。

太郎　サア、その狀が讀めぬゆゑ、讀んで貰ふてゐたら、後ろからポンと、なんの事ぢや。

みや　そんならあの狀わたしが讀む程に、よう聞きなさんせ。

太郎　むつかし乍ら讀んで聞かして下され。

トお宮、狀を取り上げ

みや　よう聞きなさんせや。未だ御意得ず候へども、わざわざ飛脚を以て申し入れ候ふ。然れば花形屋曾平へ申し談じ候ふ……談じ申し候へば、花形屋曾平はきつい嘘つきにて御座候ふ。曾平が云ふ事を誠になさるゝと、當てが違ひ申すべく候ふ。扨て又、急な事御座候ふて、其許

の命要る事が出來申し候ふ。近頃わりなき御無心に御座候へども、そこ許の命を少々おくれなさるべく候ふ。その代りとして金子百兩持たせ遣はし候ふまゝ、その金が屆いたら、早く命を下さるべく候ふ。委細の事は夕方。ちと／＼遊びにお出でなさるべく候ふ。と書いてある手紙ぢやなア。

太郎　そんならこの狀に、俺が命くれいと書いてあるか。

みや　命をくれいの段か。しかも、コレ／＼で返す／＼早う命をおくれなさるべく候ふ　目出度くかしこと書いてあるわいなア。お前が先へ行きなさんしたら命がないぞえ。それでわたしは使ひを斬つた。大事に思ふてゐるお前を殺して、明日から誰れを賴りにせうぞいなア。

ト涙のこなし。太郎兵衛も泣き出し

太郎　エヽ、忝い。扨てもそなたは心中な人ぢやなう。嬶大明神、手を合はす、これぢや／＼。

トお宮を拜み

待ちや。今の狀にこの使ひへ、金百兩持たせてやると書いてあるぢやないか。

みや　アイ、さう書いてあるわいなア。

太郎　そんならあの使ひが持つてゐるかいなう。俺や一寸搜して見やう。そなた、そこで誰れぞ來るか見てゐや。

ト飛脚が懷へ手を入れる。

オヽ、あるぞ／＼。

ト金を引き出し、死骸を片附け

これ見や、丁度百兩のかさぢや。

トお宮へ見せる。お宮、思ひ入れあつて

みや　太郎兵衛さん、お前も最前聞きなさんした通り、あの葛城さんはわたしが手を、放す事のならぬ譯のあるお方、それに又あの伴左衞門さんが、身請けすると云ふてぢやゆゑ、心ならねば、ソレ、その金わたしに貸して、葛城さんの手附けに渡しては下さんせぬか。お前には又何やかや、たんと云はにやならぬ事がある。どこへも行かずと、待つてゐて下さんせ。ドレ、親方さん呼んで來やう。

ト行かうとするを、太郎兵衛、留めて

太郎　アヽ、コレ、其やうに親方呼んで、あちらこちらするうちはない。葛城が身請けするなら、直ぐにこの金貴樣持つて行て渡しやいの。

みや　イエ／＼、わたしやそんな自墮落な事は厭。矢ツ張りお前親方さんに渡して、證文取つて下さんせ。

太郎　エ、、コレ〳〵、さりとは大事ない。其やうになぜ分け隔てをしやるぞいの。俺が女房ぢやないかの。わが身のために遁れぬ譯のある葛城なら、俺がためにも遁れぬ仲ぢや。コレ大事ない、この金で身請けしてやりややりや。

ト無理にお宮へ金渡す。

みや　そんなら、わたしにこの金下さんすか。

太郎　やらいでやわいの。命の親ぢや。ヤレ、結構な肩持つた事ぢや。

ト此うち奥より、曾平、出て來て

曾平　もう、コレ、約束のお使ひが來る時分ぢやが。

ト云ひ〳〵、太郎兵衛に行き當たり

ア、太郎兵衛さん、爰にでござりまするか

ト太郎兵衛、顔見合はせ

太郎　わりや曾平ぢやな。おのれに逢ひたかつた。爰へうせ居らう。

ト曾平が胸倉を取つて、引据ゑる。曾平、惘りして

曾平　ア、コレ、何をなされまする。お前に何も恨まれる覺えはない。

太郎　覺えはない。おのれよう俺が命を、百両に賣り居つたなア。サア、そこへ直れ。

曾平　エ、、何をきよろ〳〵と。そんな事わたしや覺えはござりませぬ。

太郎　覺えない。コリヤ、この狀讀んで見い。

ト今の狀を投げ出す。お宮、思ひ入れ。曾平、狀を取り上げ

曾平　この狀がどうしました。ムウ、なんだ……未だ御意得ず候へども、わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ。然れば花形屋曾平へ、談じ置き候ふ通り、名古屋山三こと愈愈お見當たり次第、早速搦め捕らるべく候ふ。褒美として金百両持たせ遣はし候ふ。猶働き次第、金子は望みに任すべく候ふ。早々以上。物草屋太郎兵衛どの、花形屋曾平どの。小栗宗丹……これ御覽じませ。首のくの字も書いてはないぞや。お前、無筆も大概程のあるものだ。

太郎　ヤア、そんなら俺が首の事は書いてはないか。コリヤ、一杯やり居つたな。

トお宮が側へ行かうとする。此うち後ろへ、石塚瀬平捕り手大勢連れ、出て來て

瀬平　ヤア、わりやア最前の仲居、名古屋山三が女房であらうがな。

みや　エヽ、わたしは
トもじ〳〵する。太郎兵衛、逃げるな
瀬平　待ち居れ。うぬは
みや　こちの人でござりまする。
瀬平　扨てこそ、これに居るワ。ソリヤ。
捕手　動くな。
トかゝる。太郎兵衛、恟りして
太郎　ヤア〳〵、なんで動くなでござりまする。
瀬平　何ぬかす。うぬは名古屋山三。
太郎　ア、、滅相な〳〵。名古屋山三と云ふにはなんぞ
瀬平　着致したる羽織が目印し。其うへにこの女め
太郎　サア、こりやわたしが女房でござりまする。
瀬平　それぢやに依つて、家來ども、ソレ。
捕手　腕廻せ。
ト又かゝる。
太郎　ア、、待つた〳〵〳〵。女房は女房ぢやが、たつた
今ぬく〳〵の女房ぢや。俺やそんなものぢやないぞ。
會平　ほんにこれは人違ひ。申し此お方は
ト云はうとする。奥より、五郎藏、野袴大小の形に改
め、つか〳〵と出て、會平を取つて投げ

五郎　妨げいたさば共に同罪。但しおのれも繩打たうか。
會平、なんのお前、御勝手になされませ。
ト逃げて入る。
五郎　家來ども、桂之助をこれへ引け。
家來　ハア、
ト侍ひ二人、桂之助の形に着替へたる鹿藏に繩かけ、
引立て來る。
五郎　室町の嚴命、桂之助を召し捕る上は、急いで山三が
詮議召され。
瀬平　ヤア、胡亂なるお手前。
五郎　暫らく廓に隱し目附け、五郎藏と申した若い者、即
ち拙者福島左近。名古屋山三に由緣の女、ソレ、見覺え
て居らうがな。
みや　ヤア、お前は
鹿藏　名古屋山三、もう叶はぬ、一期の浮沈になつたわや
い。
ト思ひ入れ、但し鹿藏が額に、最前の疵あり。太郎兵
衛、うぢ〳〵して
太郎　ヤイ〳〵、何ぬかす。俺や名古屋山三ぢやないぞ
瀬平　左の股に鐵砲疵。

太郎　ついぞ鐵砲とやら打たれた事がない。サア、見て貰はう。

ト突きつける。捕り手、見て

捕手　鐵砲疵がござりまする。

太郎　どこにこれが鐵砲疵、こりや火傷でござります。

瀬平　同じく腕に、お宮命と入れ黒子。

捕手　お宮命とござります。

瀬平　相違はない、ソリヤ。

捕手　名古屋山三、捕つた。

ト太郎兵衛をのめらせ、括し上げる。

太郎　これは又因果な事ぢやわい。女め、えらいたんかにかけたぞよ。

瀬平　然らば左近どのとやら、桂之助めも御一緒に

左近　召し連れませう。イザ、此まゝ

瀬平　囚人引け。

捕手　科人立たう。

太郎　オヽ、立つたワ。

ト時の太鼓になり、太郎兵衛、花道に、いづれもよろしく、鹿蔵ともに、捕手皆々、瀬平、左近、附いて、入る。直ぐに早替り、山三、出て

山三　まんまと首尾よう

みや　山三どの。

山三　これで一先づ夫婦が身抜け。

ト奥より桂之助、走り出で

桂之　伴左衛門が葛城を、裏道から連れて逃げたぞえ。

山三　ヤア〳〵、それやつては。

桂之　もそつと先ぢや。

山三　程は行くまい。

桂之　これが近道。

山三　女房ども。

みや　行てござんせ。

ト矢張り辻打ちにて、山三、凜々しく走り入る。お宮桂之助、よろしく、道具廻る。

本舞臺、上の方、大門口、後ろへ一面の黒幕、この前に黒塗りの板塀、忍び返し附け、塀の上、片ふたの二階、よき所に出口の柳、よろしく雨車、時の鐘にて道具留まる。

ト門のうちより、桃平、箱提灯を提げ、伴左衛門、長合羽、高足駄、さし傘にて出る。後より四つ手の駕籠

四世中村歌右衛門の物草太郎兵衛

挺、縄からげにして出て來る。

駕一 モシ、お供様、道は暗し雨は強し、急いではかつがれませぬ。

駕二 桐油を取つて來る間、お待ちなされて下さりませ。

桃平 ヤイ〳〵、何をぬかしやアがる。仔細あつて道をお急ぎなさるゝのだ。小言ぬかすとぶつた切るぞ。

伴左 コリヤ、其やうに叱るな。駕籠の者ども、賃錢はそたちが存分に、望みに遣はさう。

二人 ハイ、左様ならござりませ。

伴左 桃平、急いで提灯やれ。

ト行かうとする。向ふより山三、走り出て來て、駕籠を引据ゑ、一息つく。

桃平 ヤア、慮外者、何奴だ。

伴左 ムウ、わりや名古屋山三だな。

山三 伴左衞門か。

ト引抜いて、斬り拂ふ。駕籠の者、逃げて入る。山三、きつとなつて

最前は影乍ら、女房宮へ何やかや、御雑作であつた。伴左衞門、絶えて久しき名古屋山三。用がある、マア〳〵待ちやれ。

伴左 用とはなんだ。いけツ太い。わりやア葛城を取り返しに來たな。そりやアならねえ。山三、われには遺恨がある奴だ。

山三 それも合點。そなたの腹の癒るゝ程に

伴左 知れた事だワ。俺が存分は斯うするのだ。

ト山三が襟髪取つて引据ゑ、傘にてしたゝか打擲する山三、じつとなつて

山三 腹さへ癒るなら山三が五體、粉に碎けても大事ないサ、いかやうとも〳〵。

伴左 そんなら斯う〳〵。

ト足駄にて顏を踏みにじり

へ、、、これ程にされても無念にはないか。口惜しくはないか。所詮うぬが分際で、伴左衞門に歯は立たねえ。

ト蹴飛ばす。桃平、後ろより斬りつける。山三、よろしく立廻つて

山三 サ、伴左衞門どの、もう存分、こなたの腹は癒たであらう。

伴左 ぬかしやアがるな。わりや俺を斬る氣であらうがな

山三 エ、、曲もない。其やうに刃向ふ所存あるならば、最前揚げ屋で隠れはせぬ。微塵も野心のない證據。よし

又以前の意趣があらば、其うへに又踏むなりと、蹴るなりと、こなたの心のまゝにして、葛城どのをどうぞ戻して下され。コレ、山三が手を下げる。頭を大地へつけるぞや。聞き屆けて下され、伴左衞門どの。

伴左　それほど悲しいか。存分にして戻してやらう。

ト斬りつける。山三、立廻つて

山三　この存分にはちとなり難い。

ト直ぐに拔き合はせ、あしらふ。立廻りのうち、山三が刀の切先、伴左衞門が紋所へさわる。破れより御朱印出る。山三きつと見て

ヤア、こりや御朱印。

伴左　それを知つたら

ト駕籠へかゝる。山三、支へるうち、伴左衞門、御朱印を柳の枝へ投げる。この時、塀越しの二階へ、お宮、手燭を袖にかくし、出て、見て居る。伴左衞門、山三立廻り、よろしく、留まり

山三　嬉しや御朱印、見附けたからは千人力。

伴左　喧しいわえ。くたばつてしまへ。

トこれより賑やかなる鳴り物になり、兩人、見事なる大タテよろしく、桃平、かせになる事あつて、トゞ伴左衞門を一太刀斬る、チョンと月出る。斬り倒し、乗りかゝつて、止めを刺す。明け六つの鐘鳴る。ホッと思ひ入れあつて

山三　ほのかに白む、アリヤ明け六つ。

トお宮、二階へ出で

みや　こちの人、ソレ、御朱印。

ト柳の枝より取つて、投げる。

山三　近江一國、お家の御朱印。

ト取り上げる。門のうちより、曾平、出て

曾平　關破りの葛城。

ト寄らうとする。

みや　身請けの手附け、

曾平　これは

ト以前の百兩を投げる。曾平、取り上げるうち、桃平起き上がつて

桃平　山三め、うぬを

トかゝるを、見事に斬り倒す。

曾平　ヤア、人殺し。

みや　コレ。

ト云はうとする。山三、其まゝ、刀をひらりと見せる

木の頭。曾平、悧りして

曾平　ではない。

ト震へ、下に居る。二階の障子シヤンと締める。山三刀の血を拭ふ。よろしく

ひやうし幕

大詰　土佐屋敷の場

役名――小栗宗丹 實ハ赤松彦次郎政則。奴、岡平阿國御前。弟、鹿藏。又平妹、藤浪。銀杏の前。佐々木桂之助。不破道犬 實ハ長谷部雲谷。金魚屋金八。岩倉栴丸。土佐又平。

本舞臺、三間の間。吾妻屋葺き、中足の屋體、上手床の間、違ひ棚、風呂、茶の湯道具飾り、眞中、塗り壁の瓦燈に、唐更紗の緞帳かけ、下手、本箱置き戸棚、繪道具飾り、向ふ砂壁、下座の口、九尺の二階屋、これも吾妻屋葺き、上の庇、下の庇とも、戸樋竹かゝり、上手に大屋根より樋の受け筒、誂へあり。この前通り、池、浪板、杜若おびたゞしく、盛りの體。いつもの所に枝折戸、下手に柴垣。山吹の植込み、花盛り。後ろ、櫻の立ち木、此うへ吊り枝、誂への通り。幕のうちより、二重、上の手に道犬、誂への形にて、茶を立てゐる。下手に藤浪、振袖、娘にて、繪を畫いてゐる。平舞臺に、岡平、奴にて、草箒、木鋏を持ち、杜若の手入れ、庭の掃除してゐる見得。只の唄にて、幕明く。

岡平　イヤモウ、この池の杜若、盛りが見事ぢやが、庭の掃除にはほつとした。モシ、藤浪さま、お前も爰へ來てちつと手傳ふて下さりませ。

藤浪　サア、共々手傳ふてやりたいけれど、わしや畫きかかつた大事の繪が

岡平　ムウ、お前、繪を習はつしやりまするか。

藤浪　サア、兄さん又平さんが、思ひも寄らぬ土佐の苗字をお繼ぎなされ、將監さまの此お屋敷を貰ひなされたれど、武家の事はお馴れなされても、繪の事は御存じなきゆゑ、せめてわしでもと

岡平　何を泥坊見て繩を綯ふ樣に、急に繪が出來るものぢやない。それよりはつい出來る事があるが、なされませぬか。

藤浪　つい出來る事とはえ。

岡平　女と男と抱きついて、此やうな繪を
ト二重へ上がり、抱きつくを
藤浪　ア、コレ、悪い事を
岡平　ハテ、よい事ちやわな。
ト此うち道犬、茶を立てゝゐて
道犬　ヤイ〳〵、岡平、そりや何し居る。
岡平　イヤサ、これは
道犬　このほど島原の廓にて、お尋ね者の佐々木桂之助を
悴宗丹方へ召し捕りし所、この家の又平、昔の誼みを思
ひ、科落着まで預かりたき、願ひに任せその預け中
岡平　お旦那宗丹さまの親御、あなたが附添ひこの家に御
逗留中、私しめも何か御用を足せと、共々お供のこの岡
平。
藤浪　こなさん慥か生國は、難波とやら聞いたが
岡平　なるほど私し、ありやうは、芝翫罷り下るに附き、
一緒に參つた淺尾友藏と申す厄介者、どうぞ御當地でお
取り立て下さるやう
道犬　イヤ、そりや俺ももとは上方、御贔屓強い所なれば
折を見て芝翫どのが
岡平　何事も頼りは加賀屋の親方。

道犬　そりや即ち悴宗丹、今日御上使を同道にて、この家
へ參る兼ねての知らせ。
岡平　スリヤ、お旦那宗丹さまが
道犬　最早參るに間もあるまい、途中まで迎ひに參れ。
岡平　畏まりました。左樣なら道犬さま。
道犬　岡平、早う。
岡平　ドリヤ、行て參じませうか。
ト時の鐘、合ひ方にて、岡平向うへ急ぎ入る。
藤浪　折角繪の稽古せうと思や、あの岡平が邪魔をして、
つツともう。
ト又書きにかゝる。
道犬　サア、さうあらうと、あいつを叱つて追ひやつて置
いて、身共が斯うぢや。
ト抱きつく、藤浪、恟り。
藤浪　ア、モシ、お年寄りの癖に何をなされまする。
道犬　イヤ、年寄りは猶新造が好きなもの。又たつた年は
七十六。
ト引寄せるを
藤浪　アレマア、滅相な。
ト書いた繪を持ち、舞臺へ逃げて下りるを、道犬も共

共下り

道犬　コレサ、年は寄つても戀は放れぬ。濃茶を教へる。

濃い茶アいゝわえ。

ト藤浪を追はへ歩ろく。此うち奥より鹿藏、誂への形にて出てゐて。道犬、藤浪に抱きつく所を

鹿藏　不義者見附けた。

藤浪　エヽ。

道犬　ヤア、わりや桂之助、大分利口な事云ふたなア。

鹿藏　不義はお家のきつい御法度、見附けられたら互ひの難儀。

道犬　ヤア。

ト悧り。

鹿藏　と淨瑠璃で語つたを聞いた。

道犬　何をぬかすやら、矢ッ張り阿房ぢや。

鹿藏　つける藥があつたら、高からうな。

道犬　何を云つても氣遣ひなしだ。

藤浪　イヤ、氣遣ひはこつちに、折角繪を習はうと思ふに

鹿藏　なんぢや、繪を習ふ。ドレ〳〵。

ト取つて見て

ムウ、女子の繪に棒を書いて、コリヤ、いの字をナ……

藤浪に依つて藤の花ぢやなア。

藤浪　サア、いとしいと云ふ判じ物。

鹿藏　ヤア、いとしいと云ふからは、コリヤ、こそばゆい事知つたな〳〵。

道犬　サア、その色氣を知つたゆゑ、身共も共々心のたけを書いた文、讀んで見てくれ。

ト文を出して、藤浪が懐へ入れやうとする。

藤浪　アレ、滅相な。

ト突き放すを

道犬　コレ。藤浪、藤に卷かれて寐とござるぢや。

ト無理に文を懐へ入れる。

藤浪　アレ、惡い事すると兄さんに告げるぞえ。

道犬　告げたら大事か、取つてくれやう。

ト追ひ廻す所へ、合ひ方にて、奥より、又平、つぎ上下にて、短檠に火をともし、持つて出て來たり、道犬又平に抱きつき、悧り。

ヤア、そこ許は

又平　主土佐の又平でござりまする。

道犬　さて〳〵これは惡い所へ。

藤浪　イヤ、よい所へ兄さん、あの親仁めが、色々の事を

又平　コリヤ、何を申す。あなたは誰れあらう、小栗宗丹どの、親御、お預かり申す桂之助さまに附いて、御逗留のお客人。

鹿蔵　イヤ、藤浪は、藤に巻かれて寐たがるには困つた。

道犬　ア、、コレサ、そりやあの不時に今日御上使同道と伜が方より知らせ。それゆゑお茶を献上と、只今まで支度。

又平　それは一段の御馳走。アノ、茶の湯にも、云ふたら大事か取つてくれやうと申す儀がござるかな。

道犬　ア、、コレ、何を云ふたか年寄りのせうどなし。ドレ、奥へ行て、生け花の支度いたさう。

ト合ひ方にて、道犬、こそ／＼と逃げて入る。

又平　ハ、、、、、合點の行かぬ道犬が立居振舞ひ。それはさうと、若殿桂之助さまには、今日上使の御用意、何かにお心附けられて

鹿蔵　ア、、これサ兄貴、他人のゐる所ではその若殿、取り置いて下され。もう桂之助こと、窮屈で／＼。

又平　ア、コレ／＼、その心配は知れてあれど、あの廓より山三どのが、そちが面體若殿に、瓜を二つに似てゐるを幸ひ、桂之助さまに仕立て、宗丹方へ虜にさせしも、この兄と云ひ合はせの深き思案。

藤浪　モシ、兄さん、そんならあなたは、常々話しなさんした、次ぎの兄さん鹿蔵さんかいな

又平　オ、サ、災ひも三年と、愚かなれども今度のお役。

藤浪　シテ、誠の桂之助さまは、マア、どれに。

又平　御縁家金八どの方へ、人知れず忍ばせ置く。

鹿蔵　ハ、、ア、藤浪、我が身が聞くは、扨ては誠の若殿か。この繪のいとしやな

藤浪　ア、コレ、そんな事。

鹿蔵　イヤモウ、この顔が似たばつかりで、此やうな苦しい事、マア、ちつとのうち氣を伸ばして

ト足を投げ出し、寐はら這ふ。

又平　ア、コレ、あれほど申し附けて置くのに。

ト叱る。

鹿蔵　オツト、若殿桂之助ぢや。

ト起き上がり、ちやんと坐る。合ひ方、時の鐘にて、向うより金八、頬冠り、半纏を背負ひ、出て來たり、枝折戸の外にて

金八　ハイ、モシ、ちとお頼み申します。

藤浪　ヤア、誰れやらあれへ。

ト　こなしあつて

又平　イヤ、若殿には餘り端近。妹、奥へ。

藤浪　サア、殿さん。

鹿藏　ドレ、奥へ行て遊ばうか。

ト唄になり、鹿藏、ついと奥へ入る。藤浪、續いて入る。又平、枝折を明ける。

金八　ヤ、又平さま。

又平　金八どの、背負つてござつた半櫃は。

金八　若殿桂之助さまをお連れ申しました。

又平　ヤ、、、そりやどう云ふ仔細で。

金八　サア、間所もないわしが隱れ家、お前の弟御鹿藏どのを若殿に仕立て、敵に一杯食はしてはあれど、何か世間がそわ〳〵と、心がゝりゆゑ、どうぞちつとのうち、お匿ひ申して貰ひたい。

又平　なるほどさう云ふ事もござらう。併し弟鹿藏を、若殿にしてある上に、又ぞろ誠の桂之助さまを

金八　サア、隱し所に骨が折れませう。

又平　マ、、何にせい。

ト手傳ひ、半櫃を下ろさせ

併しこの半櫃のうちへは

金八　矢ッ張り口元の床の下。

又平　なるほど。

ト二重の疊を上げるうち、金八、半櫃を明ける。うちより桂之助、誂らへのやつしを着て出る。此うち奥より、藤浪、出て來たり

藤浪　ヤア、あなたは誠の桂之助さま。

又平　コレ、誰れにも沙汰は相成らぬぞ。

金八　ちやつとあの床の下へ

桂之　兎も角も

ト又平、桂之助を、床の下へ入れる。

金八　ア、、これで落着いた。そんならわしはもう

又平　イヤ、まだ話す事もあれば

金八　そんなら爰から行て道犬めに逢ふも厭、庭傳ひに供部屋へでも行きませう。

又平　いづれ後方、密々に。

金八　萬事お頼み申しまする。

ト唄になり、金八、下手より奥へ入る。又平、藤浪、殘る。所へ、向うにて

岡平　サア、非人め、出し居らう。

阿國　お許しなされて下さりませ。

ト跳らへの合ひ方、時の鐘、バタ〳〵にて、向うより阿國御前、非人にて、走り出るを、岡平追つかけ出て來る。花道にて、引捕へ

ヤイ非人め、今おのれが隱したるは、慥かに刃物。こつちへ出さぬか。

阿國　ア、、モシ〳〵、何も私しは隱しはいたしませぬ。

岡平　まだぬかすか。ありやうに出さぬと、手ひどい目に逢はすぞ。

阿國　お免しなされて下さりませ。

岡平　たつて出さねば、おのれ。

ト改めにかゝる。阿國御前、支へる。立ち廻りながら、兩人、舞臺へ來る。

藤浪　岡平、何を爭ふのぢや。

岡平　只今宗丹さまのお迎ひに、御門外まで出ました所、あの非人めが何やら合點の行かぬ面構へ、お屋敷うちを窺ひます。氣を附けて見ますれば、刃物を所持いたし居るゆゑ、詮議いたすのでござりまする。

藤浪　非人の身として刃物を所持するとは、合點の行かぬ。

岡平　サア、出し居らぬか。

阿國　イエ〳〵、何も隱した物はござりませぬ。

岡平　しぶとい女郎、出し居らう。

ト又かゝる。立ち廻り少々あつて、阿國御前、隱し持つたる一腰をひらりと拔いて、差し附ける。

扨てこそ刄物。

トぎよつと思ひ入れ。

阿國　サア、隱さるゝだけは隱しますれども、お目立ちまする上からは、是非に及ばぬ。なるほど刃でござりまする。非人になり下りましても、持ち傳へました所持なす刀、非人は刀を所持いたす事はなりませぬかな。

岡平　イヤサ、それは

又平　非人の女、それへ參れ。

阿國　ハツ。

トつか〳〵と側へ來る。岡平、附いて來る。

ヤア、そちや又平。

又平　ア、コレ、知らぬぞ。以前はともあれ、今は繪所を預かる、土佐の將監が跡目又平光興、ついに見た事もない、見苦しい非人め。必らず粗相申すな。

阿國　なるほど知らぬ旦那樣。シテ、これへお呼びなされたは。

又平　非人の身として刃物を持ち、屋敷を窺へば咎める筈。シテ、何ゆゑ門前には居つたぞ。
阿國　この一腰を求めて貰ひたさに。
又平　なんと。
阿國　サア、尾羽うち枯らしまして、所々をさまよふ非人、土佐の又平さまはお情深いと承りまして、この刀を買ふて貰ひませうと存じまして
又平　スリヤ、その刀を
阿國　それがお願ひ。
又平　非人、そりや身共ではあるまい。外に求めて貰ひたい人があるであらうがな。
阿國　エヽ。
又平　今日御沙汰ある、御上使守護の公家に相應な刀ぢやと思ふて、身共に取次ぎを頼むのか。
阿國　御推量の通り、外へ手放しまする心はござりませぬ。目ざす所は
又平　宗丹どのか。
阿國　いかにも左樣。
岡平　ハヽヽヽ、見れば僅かな小太刀、其うへ切先は錆び腐つてあるなまくら物を、宗丹さまへ賣り附けうとは、の太い奴の。
阿國　莫耶が劍も、持ち手に依ると、刀の錆は見苦しけれど、無念の血汐を落とさぬが、直ぐなる心の亂れ燒き。ついお氣には合ふまいが、素破と云ふとどなたでも、斬り兼ねぬ業物でござりまする。
又平　ムウ、さうあらうて。
岡平　口の過ぎた非人め、うぬを。
　トかゝる。ちよつと立ち廻り、阿國御前、岡平を當てる。ウンと倒れる。
又平　ドレ、その刀。
阿國　ハツ。
　トよろしく刀を渡す。又平、取つて見て
又平　今にあり〱切先の血、ハテ、御無念に……イヤ、口惜しうあらうなア、
藤浪　女中、シテ、その價は。
阿國　イヤ、金銀に望みはござりませぬ。その價には
又平　この屋敷へ奉公がしたいと云ふのか。
阿國　いかにも左樣。
又平　そりやなるまい。
阿國　とは又なぜな。

又平　この度禁廷のお繪を認めよと、關白殿下より御上使お入り。守護は卽ち小栗宗丹、御用向き濟まざるうちに、過ちあれば朝敵同然。
藤浪　スリヤ、あの女中は。
ト又平、岡平が口へ手を當て、息を考へ、當り見廻し
又平　佐々木の奧方阿國御前さま。
藤浪　エヽ。
又平　妹、奧に心を附けい。
藤浪　畏まりました。
ト合ひ方にて、藤浪、ついと奧へ入る。
又平　奧樣、アヽ、いかうお窶れなされましたなア。
阿國　又平、そちが土佐を繼いだも
又平　佐々木のお家へ忠義の一つ。
阿國　スリヤ、推量の通り。
又平　後室樣の敵、長谷部雲谷にお逢ひなされたか。
阿國　サア、宗丹は高位の交はり、せめて長谷部雲谷なりともと、さま〴〵心を盡しても
又平　知れぬ筈、宗丹が匿ひ居りまする。
阿國　たとへ朝敵にならうと儘よ。

又平　モシ、お家が大事か、敵が大事か。
阿國　なんと。
又平　火急に仇を討つて、御先祖の功は立ちませうが、お家の寶御朱印は手に入つても、まだ一色のお旗の行くへ。
阿國　それも慥かにあの宗丹
又平　サ、ぢやに依つて、大切なお旗無難に取り戻し、雲谷が行くへも尋ね、萬端手番ひ首尾する迄は
阿國　急く事はならぬかな。
又平　サア、急いでは事を損ずる基。まだ其うへに、まさかの時に手のうちは
ト阿國御前、簪を、下手の櫻へ手裏劍に打つ。小鳥數多飛ぶ。簪にて鳩一羽貫いて落ちる。
阿國　兼ねて手練はかくの通り。
又平　見事。女儀に稀なるその手のうち。併し撥すに手なし、思ひがけない所をカウ
トちよつと切りつけるを、阿國御前、莨盆にて、シャンと受け
阿國　この手練ではな。
又平　天晴れ。所をカウ。

ト手裏劍を打つ。阿國御前、庭下駄にて受け留め

阿國　この手のうちでは。

又平　イヤ、まだカウ。

ト又抜きかける。ちよつと立ち廻りに、二重へ上がり、疊蹴上げる。下より桂之助、顔を出す。阿國御前、見て

阿國　ヤア、桂さまか。

ト疊をシヤンと直し

又平　サ、かなで云はれぬ何れも朋輩。

阿國　サ、それゆゑにこそ押しての目見得。

又平　昔の家來も

阿國　今の御主人。

又平　望み叶はゞ

阿國　やがてお暇。

又平　マア、それ迄ば

ト向うにて、上使と呼ぶ。

阿國　ありやもう小栗が

トきつとなるを

又平　コレ、衣類着替へい。

阿國　ハツ。

ト唄になり、阿國、一腰を抱へ、思ひ入れあつて、奥へ入る。又平、こなしあつて、岡平を引き起こし、活を入れる。岡平、起きて

岡平　ヤ、最前の女めは

又平　召抱へた。

岡平　スリヤ、非人めを、この屋敷へ

又平　成り上がりの身が家來には相應。

岡平　コリヤ、御尤も。

又平　最早、上使のお入りとある。其方の主人宗丹どのも入來。

岡平　然らば迎ひに、ドリヤ、參りませうか。

ト又上使と呼ぶ。三味線入り、亂れの樣な鳴り物になり、岡平、向うへ行きかける、花道より、子役岩倉梅丸、長上下、後より宗丹、半上下、乘り物を吊らせ、家來三人附き、出て來て、花道に留まる。奥より道犬、出て、又平と共に出迎ひ

道犬　これは關白家の御上使、見ますれば未だ御幼少。ハア、それゆゑ伜宗丹、そちが

宗丹　附添ひ參つたは、關白家の重役岩倉多門之頭どの御死去に就き、幼少なれど家督たる梅丸どの、今日の御上

使。
梅丸　俺は子供ゆゑ、何事も宗丹に聞けと、君よりの仰せ。
又丹　何は兎もあれ、御兩所樣、先づ〳〵これへ。
宗丹　罷り通るでござらう。
ト矢張り右の鳴り物にて、皆々舞臺へ來たり、梅丸は二重、宗丹は上手、それ〴〵に住ひ
又平　これは〳〵、御幼少なれど關白家の御上使樣、殊に誰れあらう宗丹どのゝ御同伴とあれば、先土佐の將監存生でござれば、何か御馳走も申し上げませうに、何を申すも不束な跡目の拙者。
道犬　そりやその筈、先達てまで土佐と佐々木をかけ持ちに、雇ひ足輕同然な其許、貴人高位をもてなしの仕樣もお知りやるまいて。
梅丸　イヤ、何を馳走せいでも、この大津まで來る道すがらの景色、面白い、よい慰みであつたわいの。
道犬　オヽ、父御は御座らいでも、流石は關白家の御家來、小さうても挨拶諸禮の立派さ。それになんぢや、上使入來の式作法も、杓子定規の押しつけ業、名ばかり土佐の繪所のと、看板ばかり立派でも、効きめの惡い賣藥同然。ハヽヽヽヽ。
梅丸　イヤ、コレ、宗丹、外事よりはお使ひの事を、早くあの者に。
又平　いかさま、何を差措き、お上使の趣き。
宗丹　外でもない。先達て佐々木左衞門、大内にての狼藉、勘當の屆けはあれど、兄の罪弟にかゝると、桂之助儀、このほど島原の廓に於いて召捕り所、以前に變つて正體なきうつけ。
又平　その儀は館騷動の砌り、仰天いたして發せし病ひと承り、お願ひ申して拙者が方へ
宗丹　預け遣はすにも、若し病氣に僞りあらんかと、身が父道犬をさし添へ罷り起したが、ナニ、親人、桂之助には、矢張り以前の如くでござるかな。
道犬　サ、身共も附添ひ心を附けれど、ナア、岡平。
岡平　左樣、さして作り阿房とも見えませぬ。
宗丹　たとへ誠の病ひに致せ、打捨て置かれぬ科人。罪重るは、首打てよとの
又平　御上使でござりまするか。
宗丹　申さば主筋、アッと返事は
又平　イヤ、致しまする。

宗丹　なんと。
又平　昔は昔、今は預かる土佐の苗字が、何より大切。外に今
宗丹　ムウ、尤もその返事は卽答にも出來やうが、外に今一條。
又平　御不審がござりまするかな。
宗丹　繪所を預かる其方、土佐流の繪が出來るか。
又平　イヤサ、それは
道犬　その職にてその職の繪が出來ぬとは、云はれまいが。
又平　サア。
宗丹　サア〳〵〳〵、なんと。
又平　イヤ、それも仕りませう。
宗丹　なんと。
又平　一心の以て習ひ學ばゝ、吳道子が龍、金岡が馬も、念力のなす所、暫時がうちに一流工夫、畫き出してお目にかけう。
岡平　ハヽヽ、こりや可笑しい。初午の行燈や、辻で賣るあぶり出しの繪でさへ、つい一寸は出來ぬのに、一流の工夫のなんのと、人もなげなる太平樂。
宗丹　アイヤ、云はゞ云はして置くサ。今禁廷を弟子に持つて、筆勢と云ひ身の威勢、筆に墨つけて紙の上を轉がしても、宗丹と云ふ名さへあれば、諸人が寵愛すると
や。
又平　そりやもう、其許樣に及ぶ者はござりませぬ。
宗丹　凡そ世界にたつた二人。
又平　そりや誰れと誰れとでござりまする。
宗丹　ハテ、一人は身共。殘り一人は三千世界の繪畫きめ等を、寄せた所が一人サ。
又平　なるほど左樣。イヤ、見ますれば御上使樣には、徒步をお拾ひ遊ばせしに、あのお乘り物は
宗丹　岡平、乘り物の女を引け。
岡平　畏まつてござりまする。
ト乘り物の戶を明ける。うちより銀杏の前、腰繩にてゐるを引き出す。
又平　ヤア、こなたは將監さまの娘御、銀杏の前さま。
銀杏　又平、イヤ、殿、恥かしい形で逢ひますわいなう。
道犬　見れば女に腰繩をかけあるが、仔細があるか。
宗丹　只今これへ參りがけ、御上使と拙者が眞中へ、鐵砲をうちかけました。
道犬　ハテ、それは危ない事の。

宗丹　早速邊りを吟味いたした所、きやつが鐵砲を持ち居るゆゑ、直ぐに捕へ搦めてござる。
道犬　女の手業にかやうな事を企むは、同類があらう、ありやうに云へ。
銀杏　狙ひすまして本望遂げうと思ふたに、仕損じて、エヽ口惜しい。おのれを
　ト懐劍抜いて、突きかけにかゝらうとするを
岡平　まだ手向ひか。
　ト引き据ゑる。
宗丹　土佐氏、この女見知つて居るか。
又平　アイヤ、存じませぬ。
宗丹　アノ、將監が娘でも
又平　主同然の女にもせよ、一旦親御が勘當いたされたれば、拙者とても赤の他人。
宗丹　ハテ、氣散じな心がけ。
道犬　悴、この間は夜が寐にくい。用心しやれ。
銀杏　おのれ宗丹。
　ト又突きかけるを
宗丹　コリヤ、おのれ、親を切るか。
銀杏　親とは。

宗丹　最前取り押へし時、肌を捜せば守りの臍の緒の書附け、巳の年の巳の月巳の日巳の刻の誕生と書附けあるは、宗丹が手ぢやわいやい。
銀杏　エヽ。
宗丹　鬼やらひの節會の夜、婢の女に手をかけ懷胎、その母も些かの誤りにて大内を追放、其のうち娘誕生と聞いたゆゑ、守り袋を證據に、この程しきつてそちが行くへを尋ねしに、無事でゐたか。コリヤ、そちが守り袋とこの提げ物の裂れ、合はせて見よ。
　ト出すを、銀杏の前、合はせて見て
銀杏　ヤ、ヽヽヽ、こりや同じ模樣。そんならお前は父上であつたか。ハア、ヽ。
又平　瀨田の橋に、由ありげなる守りを添へ捨てゝあつたを拾ひ上げたと、將監さまのお話しであつたが、扨ては宗丹どのゝ胤であつたか。
銀杏　夫への功、左衞門さまの敵、一太刀なりと恨まうと思ふたに、敵は父さん。こりやマアなんとせう。
　ト泣く。
又平　御上使樣へ手向ひなした其許、所詮命はござらぬ。覺悟。

銀杏　父上にもせよ、何にもせよ、夫が恨みを含む仇人。

ト又突きかゝるを、宗丹、留め

宗丹　ハテサテ、スリヤ、佐々木方の奴等と腐れ合ふたか。

銀杏　夫への面晴れ。

ト又かゝるを、立廻つて、宗丹、銀杏の前を當てる。ウンと氣を失ふ。

道犬　これは

宗丹　藥でもやつて下され。

ト道犬、印籠より藥を出し、吞ませる。銀杏の前、心附き

銀杏　エヽ。

ト泣く。

宗丹　子は三界の首枷と、憎い乍らも、云ひ交はした男め、世にない佐々木に荷擔せずと、この宗丹に從はゞ添はせもする。取り立て、立身出世を願はゞ、魂を入れ替へて、共々にすゝめい。ナウ、親人。

道犬　さうとも〳〵。

又平　イヤ、出世と申せば、宗丹どの、拙者今日召抱へました新參の女子、其許樣を戀ひ侘びまして、何卒お伽と申すも慮外、お茶の給仕なりとも望みまする。幸ひ持ち傳へましたる太刀一振り、これを橋渡しにいたしたいと申すゆゑ、次ぎに扣へさせ置きましたが、なんと御覽なされて遣はされますまいか。

宗丹　ムウ、身共に小太刀を賣りたいとは

又平　御親子ともにお目利きの上手と、聞き及びましたかも知れませぬ。

岡平　そりや慥かに最前の非人の女め、旦那に刀を賣りたいとは、合點參らぬ。

宗丹　イヤ、その刃物を見やうかえ。

又平　然らば

ト以前の太刀を出すを、宗丹、見て

宗丹　ヤア、こりや慥かに眞の御太刀。

又平　その切先の銹を申し立てに。

宗丹　オヽ、いかにも求めう。シテ、その賣り主は。

又平　只今。

ト奥へ向ひ

小太刀の賣り主、これへ。

阿國　畏まりました。

ト合ひ方にて、阿國御前、腰元の形にて出て來る。

宗丹　ヤア、わりや左衞門が女房、阿國御前。
道犬　誠に。
ト悧り、立ち上がるを、宗丹、袖を引く。これにてちやつと下に居る。
阿國　宗丹さま。
トつか／＼と寄るを、又平、コレと留める。
お久し振りでお目にかゝりましたなア。
宗丹　ムウ、久しう見ぬうち餘程窶れはあれど、まだ美しいものではある。なんと宗丹を、厭ぢや／＼と嫌ふたを、今思ひ知つたか。
阿國　エヽ。
ト思ひ入れあるを、又平、留める。
サア、昔が今の氣であらうならば、この流浪は致しますまいものをと、悔んでばかり居りまする。
宗丹　又平、阿國御前をこれへ引込んだは、この宗丹を
又平　お寐間のお伽が致したいとの願ひ。
宗丹　ヤア。
又平　意氣地を立てまするも身が可愛ゆさ、野心ないと申す證據には、妾になりとも、昔の誼みが受けたいとの願ひゆゑ、もし、御馳走にはなりますまいかと存じまして。
宗丹　スリヤ、左衞門への貞心を捨て
阿國　お恥かし乍ら、どこへ取りつく島もないこの身、昔の誼みを思し召して、お側のお伽が致したさ。日頃逢ひたい／＼と思ふて居りましたに、おまめなお顏を見て嬉しうござりまするわいなア。
宗丹　スリヤ、アノ、宗丹が側で
阿國　御奉公がいたしたさ。
又平　それゆゑ太刀を差上げたいと申しまする。
宗丹　オヽ、飼ひ申さう。一旦心をかけた阿國御前、寐間の伽も致させう程に、爰へ。
阿國　參りませう。
トきつとなるを
又平　ア、コレ、神妙に。
ト阿國御前、宗丹が側へ行き、思ひ入れ。
宗丹　ハテ、美しいなア。身が心をかけたも尤もであらう。そちさへ伽をしてくれるなら、心底うち解けて
ト斬りにかゝるを、引退けて
又平　こりや、なんとなされまする。
宗丹　ハテ、此方へ求めた刀、切先の錆で若し切れ味が惡

いか、試して見るのだ。
又平　イヤ、憚り乍ら、そりや御粗相。
宗丹　なんと。
又平　こなた樣には御上使守護の役目、それに血をあやな
　してもの済みまするかな。
宗丹　然らば親人。
道犬　合點ぢや。
　ト阿國御前を斬りにかゝる。立廻りのうち、又平、刀
を叩き落とす。
　コリヤ、なんとするのぢや。
又平　サア、イヤ、御老體に似合はぬ血氣の振舞ひ。
道犬　イヤサア、ヤア、腰痛や〳〵。
　ト急に親仁になる。
又平　道犬さま、あなたは今日御上使へ、お茶を差上げら
るゝとやら、それに錆びたる刃物を持つさへあるに、人
を試さうとは
道犬　イヤサ、それは。
宗丹　なる程、こりや親人の粗相。上使の前で血をあやな
　しては不調法。
道犬　サア、年寄りのせうどなし、さて〳〵、誤り入つた
　事。
又平　アイヤ、その御挨拶受けませうと
宗丹　然らば岡平。
岡平　女めは身どもが
　ト阿國御前にかゝる。立廻りに、又平、刀を引つたく
り、岡平が首筋へ、刀のむねを當てる。
道犬　コリヤ、下郎なんとする。
又平　こりや斬つても大事ない者。
道犬　大事ないとは。
又平　この者は即ち不義者。
道犬　不義者とは
藤浪　その證據は私しでござりまする。
　ト奥より藤浪、ついと出て來る。
宗丹　女、そちが證據とは
又平　ありや拙者が妹、外へ縁談、スリヤ、主ある女に
藤浪　惚れたのなんのと最前も、コレ、この文、道犬さま
　にもよう御存じ。
　ト最前の文を出す。
岡平　ア、コレ〳〵、身共こなたを口說いた事は
道犬　ア、コレ、默れ。其方が口說いたその文、主の離儀

は家來がかぶる、家來の粗相は主が誤り。さて〳〵粗
相。
藤浪　さう仰しやれば、改めるにも及ばぬ文。
又平　此まゝに打ち放したら、首はころり。銹には寄らぬ
この銘作。覺束なくば試しませうか。
ト岡平、びく〳〵身を縮める。
宗丹　アイヤ、それには及ばぬ。求めくれう。
又平　然らば女はお側のお伽。
ト太刀を阿國御前に渡し、宗丹の方へ突きやる。
宗丹　シテ、桂之助が首打つは。
又平　暫しの宥免。
道犬　畫道の工夫も
又平　何れ後方。
岡平　それまで馳走は
阿銀　わたし等が
ト きつとなるを
宗丹　虎の子どもは、土佐氏、きつと
又平　預かる上は
道犬　落着いて
梅丸　皆も奥へ

宗丹　案内。
ト唄になり、梅丸先に、宗丹、道犬、岡平、阿國御前
藤浪附いて、奥へ入る。又平、銀杏の前、殘る。所へ
下手より、枝折戸の外へ、金八、出で來たり
金八　サア、銀杏、俺と一緒に來やれ。
ト手を引くを
銀杏　オヽ、金八さん、わたしをどこへ。
金八　そなたの親御宗丹さまの前へ。
銀杏　ムウ、そんなら委細の事を
金八　あの柴垣の影へ忍んで、殘らず
銀杏　それにわたしを連れて行くとは。
又平　金八どのは御臺の弟、敵宗丹の娘は添はれぬゆゑ、
連れて行て親子の縁を切らすのでござらうがの。
金八　イヤ、俺や姉の緣を切る心。
銀杏　スリヤ、阿國御前さまと。
金八　サア、今宗丹さまの云ふを聞けば、この金八が心さ
へ改め、あつちへ隨へば、娘のそなたを女房に持ち、立
身出世と、木に餅のなるうまい相談。
銀杏　エヽ、スリヤ、あの惡人の父さんに隨ふて
金八　姉を捨てゝもこの身を立てるが、兄弟他人の始まり

とやら。

銀杏　イエ〳〵、そりやなりませぬ。なんぼ父上でもこつちは懸人、阿國御前さまと緣を切らせては、わたしが濟まぬわいなア。

金八　濟まうが濟むまいが、世にないものが附いてゐて、共つぶれにならうより、名を取らうより得の世の中。夫に附くが女房の役。俺が云ふなりになつて、宗丹さまの前へ。

銀杏　穢らはしい、厭でござんす。

金八　さう云や、引立てゝでも連れて行くぞや。

銀杏　厭と云ふものを、どうして連れて行かんすか。

金八　かうして。

ト引立てにかゝる。又平、仲へ入り、銀杏の前を上手金八を下手へ引分け

又平　イヤ、そりや銀杏さまより、わたしがさせぬ。

金八　スリヤ、アノ、こなたが

又平　云ひ聞かす事がある。マア、下にござれ。

ト下に引据ゑる。合ひ方。

これまでは眞直ぐな心であつたと聞いたに、どう云ふ天魔が見入つて、敵同志の

ト小聲になり

宗丹に隨身しやうと云はつしやるぞ。元々こなさんの姉阿國御前さまは、都の舞ひ子であつたさうなを、佐々木左衛門さまがお屋敷へお召しなされ、今樣朗詠、その舞ひ振りがお目に留まつて、世上へはさる堂上方よりと、取り成してこの奥樣なり、スリヤ、姉御には大恩の左衛門さま、その仇人ならこなたも共々、力にならにやアならぬ所を、却つて義理を立てる女房まで、邪しまへ引込まうとさつしやれば、コレ、いとしや銀杏さまは死なねばならぬぞや。

ト銀杏の前、思ひ入れ。

サ、こなたと銀杏さま、夫婦揃つてござる所は、コレ、丁度この池の杜若。

ト前の杜若を二本取り

一體水に咲く時は、この通り美しけれど、合はぬ所へ植ゑ替へれば、大方は枯れ萎む。まつたその通り銀杏さまも、心にもなき邪しまに引入れさつしやつて、義理の樹に堰き留められて、落花するぞや。

金八　イヤ〳〵、なんの役にも立たぬ花の引き事。

銀杏　スリヤ、又平どのがあれ程云ふても

金八　聞かぬ證據は、意見の花をこの通り。
　ト花を取つて打ちつける。此うち後ろに、阿國御前、
　出てゐて、この時金八の胸倉取つて引据ゑる。
ヤ、こなたは姉御。
阿國　最前からの樣子は殘らず聞いた。エヽ、わが身なん
ぢや、銀杏どのが宗丹の娘ゆゑ、これから宗丹どのに隨
ふて立身する。ようマア、そんな事が云はれた事。コリ
ヤヤイ、少しなりと人らしい心があるなら、女房が敵の
娘なら、緣切らにやならぬ所を、女に引かれて非道者に
組するとは
銀杏　アヽモシ、なんのわたしゆゑ……わたしや親でも、
非道な父さん、討つてなりとも女夫にと、思ふに任せぬ
あの心。夫に附けば非道者、附かねば世上の義理知ら
ず。世界中の女子の因果を、この身一つに受けた悲しさ
言譯には
　ト懷劍にて死なうとするを
又平　アヽコレ、早まつた事
　ト留めるを、突き退け、ついと上手へ駈け込む。又平
　も杜若の花を持つて、續いて上手へ入る。ト直ぐに二
　階ばた〳〵、立廻りのこなし。二階にて

銀杏　アヽコレ、留めずと放して、殺して
又平　ハテ、それ程になされいでも
　ト又二階ばた〳〵。よい程に、障子へ、さつと血烟か
　かる。
ヤヽヽ、こりやどうでも自害さつしやつたか。
阿國　スリヤ、銀杏どのは
　ト此うち下の柴垣より、岡平、顏を出し、窺ひ居り
岡平　扨ては死んだか。
金八　ヤ。
　ト岡平、ついと引込む。
阿國　思へばいとしい。これと云ふも金八、そちが
金八　イヤ、死んで仕舞へば、女に引かれ宗丹どのへ、隨
身と思はれぬがこの身の一德。姉御、こなたも緣切つ
た。
阿國　スリヤ、女房が意見の自害でも
金八　變りかゝつた男の魂、これからは敵同志、未練な
心を出さつしやるな。
　ト唄になり、金八、ついと奧へ入る。
阿國　エヽ、思へば憎い。
　ト奧へ行かうとして

不愍な銀杏どの。

ト二階の側へ行き、見上げる。此うち障子の血、仕掛けにて、庇の戸樋竹へ流れ落ちる。

ヤア〳〵、コレ、二階より血汐が、戸樋を傳ふて

トこなしあつて

銀杏の前は宗丹が胤、親子は一體、敵の血汐を見るは吉左右、器へ受けて

ト手水鉢の柄杓にて、血汐を受ける。此うち二階の障子を明け

又平　それこそ巳の年の揃ひし血汐。

阿國　エ。

又平　この杜若の花と混じ、用ゆるが詮議の一つ。

阿國　スリヤ、銀杏どのは、犬死では

又平　モシ、これへ。

ト阿國御前、柄杓を差出す。又平、取り

お主同然のお人なれど、敵のためには小の蟲。

トほろり。

阿國　シテ、その仔細は

又平　幸ひの囁き竹。

ト上手に家根より下りし戸樋の受け筒を取つて、差出す。阿國御前、これへ耳を當てろ。二階より又平、囁く思ひ入れ、よろしくあつて

阿國　スリヤ、道犬と云ふは

又平　モシ、細工の仕上げは

阿國　ヤ。

又平　いづれ後刻

ト唄になり、二階の障子、シヤンと締める。

阿國　何かと敏きあの又平、後室樣の敵長谷部雲谷、草を分けて尋ねても知れず、よくよく思へばあの道犬、七十有餘の老人が、人なき折には血氣の振舞ひ、察する所かの宗丹が家の秘藥、巳の年月揃ひし血汐に、藥を混へてこれを呑み、姿を變へしに相違なし。これを消すには今の血汐と、囁き竹に詳しい樣子。ア、コレ、どうぞ今宵のうちに、雲谷が實否も糺し、夫の敵の宗丹も、どうぞ首尾よう。

ト眞の太刀をきつと見て

やがて無念を晴らさせまするぞ。

ト唄になり、阿國御前、太刀を隱し、上手へついと入る。ト奥ばた〳〵にて、以前の侍ひ二人、道犬を取り卷き、又平、茶の湯茶碗を持ち、楠丸を守護して出て

來たり
侍雨　道犬どの、動くまいぞ。
道犬　待つた。何ゆゑ身共を動くなと申す。
又雨　科は其許覺えがござらう。
侍平　腕廻した。
ト詰め寄る所へ、宗丹、出て來たり
宗丹　侍ひども、引け。又平、親道犬には何科あつて、繩かゝれとは
又平　只今お上使へ道犬どのが差上げるお茶、心得難き事ござるゆゑ、取り上げ見ますれば、コレ、この如く紫の泡。合點行かぬと手飼ひの狆の口を割り、無體に呑ませば直ぐに卽死。お供の衆、狆の死骸をそれへ。
侍雨　心得ました。まツこの通り。
ト狆の死骸をそこへ出す。
道犬　ヤア〳〵、スリヤ、その狆めがくたばつたとな。
又平　なんと、御上使へ毒を盛らんとしたるは、誰れ彼れなしに、その罪人ではござりませぬか。
宗丹　サア、ナニ、親人、覺えがござるか。
道犬　イヤモウ、微塵芥子ほども覺えは
又平　ないものが、なぜ又毒味の狆が卽死でござらう。
道犬　サア、それは
又平　サア〳〵、なんと。
道犬　こりやどうも合點が
宗丹　行かぬ程覺えがなくば、是非に及ばぬ、親人、あの茶を呑んで、明白に言譯さつしやい。
道犬　なるほど、此まゝ居らば、なんとやら人の疑ひ、いかにも呑んで言譯せう。
又平　七轉八倒して死ぬるはいらぬもの。
道犬　イヽヤ、この身の言譯。
ト又平が持つてゐる茶碗を引つたくり、呑む。
又平　まだしものお覺悟、正しくちん毒に極まる。毒より惡の廻りの早さ。
道犬　イヤ、コレ、又平、茶は呑んだが、腹中はなんともないぞよ。これでも毒か。
又平　今にそろ〳〵廻つて參らう。
ト色々道犬が素振りを見て
ヤ、ヽ、色も變らず痛痛もないは、正しく狆めにこの茶を呑ますと、血を吐いて卽死。その茶を直ぐに道犬どのが、服しても仔細ないは、こりやどうぢや。
宗丹　又平、親道犬、毒は盛りはせぬぞよ。

又八　サ、それは、

宗丹　あの茶を呑んでも、即死はせぬぞよ。

又八　サア。

宗丹　爰な僞り者めが。

ト又平が首筋取つて、引附ける。此うち道犬、頭を無性に掻き出し、色々身を揉む。

コリヤ、ヤイ、道犬どのを誰れぢやと思ふ。小栗宗丹が親、大内で茶の湯の根元、それが毒を盛つたなぞとは、粗忽無法のたわけ者。

又平　段々の御立腹、拙者めが一生の誤り。

宗丹　昔が昔ゆゑ、髑髏おのれは左衞門方の肩を持ち、この宗丹を討たう〳〵とするが、關白家の御上使を守護すれば、鵜の毛で突いた程も身に凶事あれば、おのれが身の上。云ひかけひろいだこの場の折檻。かう〳〵かう。

ト扇にて打擲する。

以後をきつと嗜み居らう。

ト突き放す。此うち奥より、鹿藏、出て見てゐて、當惑せし又平の側へ來たり

鹿藏　又平、ばア〻。

又平　ヤ、こなたは桂之助さま。

鹿藏　俺を常に叱るゆゑ叩かれた。ア、よい氣味なよい氣味な。

ト手を叩き嬉しがる。又平、思ひ入れ

道犬　悴、桂之助がていたらく、お見やつたか。

ト鹿藏を突きつける。宗丹、鹿藏が首筋取つて、引き附け、顔を見て

宗丹　見覺えある桂之助、以前と變るたわけの振舞ひ。

鹿藏　コレ〳〵、其やうにわしが顔に見惚れるは、ハア、こりや俺に惚れたのぢやな。こりや油斷がならぬ。

宗丹　五音腹中、こりや作り阿呆とも思はれぬ證。

ト突き放す。

又平　人至つて心痛いたせば、樣々の病ひを發す。御覽の通りの仕儀なれば、たとへ此まゝ置かせられても、さまでの事も仕出だすまい、痛はしい儀と思し召され、お命ばかりは

宗丹　イヤ、そりや罷りならぬ。

又平　スリヤ、どこまでも

宗丹　大内を騷がせし重罪人の弟、是非とも首を

鹿藏　エ、ナニ、首を

ト恟り、首筋を撫で廻し、氣味惡きこなし。

又平　アモシ、御覽の體ゆゑ、白地に申さば逃げ步るき、未練な事でも仕らば、世になき家名の末代恥辱。但しすかして物の見事に

宗丹　討つて渡すか。

鹿藏　ハヽア、討て〳〵とせがむは、扨てはこなたは蕎麥が好きぢやな。

道犬　イヤモウ、恥辱は搔き次第ぢや。

鹿藏　イヤ、恥辱とやらより、俺や繪を畫く事が好きぢや。

又平　オヽ、その繪がお好み。虛無僧や山づみ天狗のしし山、白壁へけし炭で書く樣なじやれ事も好む所、又身を入れて心附かぬその所を

宗丹　しかと討つて渡せよ。

又平　何卒それもこの場をよけて

宗丹　それも半時、亥の刻まで

梅丸　猶豫の用捨いたして遣はせ。

鹿藏　其うへ上手な、俺は繪を

道犬　畫くと聞いても、俺やかゆい。

　　ト無性に搔く。

又平　然らば御兩所。

宗丹　又平、しかと申しつけたぞ。

　　ト獨吟になる。

〽いつ迄も、變らぬ色は常磐木の、枝に譬へて誓ひし事も

　　ト此うち、梅丸先に、宗丹、一件皆々、奧へ入る。鹿藏、又平、殘り、鹿藏は繪畫き道具と紙を出し、畫きかゝる。又平は鹿藏に見えぬ樣に、寢刄を合はす。

〽筆の命も嫌ふとは、本に繪の具のさらさらに、思はぬ辛苦する墨も、たとへば戀が嬉しうて、そふて唐紙の神神さんへ、二世を誠に緣結び。

　　ト此うち鹿藏は、一心に無駄繪を畫いてゐる。又平は隙を窺ひ、切らんと拔きかゝる。鹿藏振り向くゆゑ、ちやつと刄物を隱し、流石恩愛、切り兼ねる愁ひ、この仕組みよろしく、唄一くさり切れぎは、又平、思ひ切つて打ちかける。鹿藏、ちやつと飛び退き

鹿藏　アヽコレ、兄貴、こりやマアなんでわしを斬るのぢや。

又平　アヽコレ〳〵、兄と云ふては惡い。矢張り若殿桂之助さま。

鹿藏　サア、弟の鹿藏と知られては惡い、桂之助さまにな

つてゐると云ふから、窮屈な若殿の身振りしてゐるに、なんで殺すのぢや。

又平　イヤサ、これは

鹿藏　悪い事があるなら、勘忍して下され、コレ、兄貴。

又平　ヤレ、まだ云ふか。

鹿藏　そんなら云ふまい程に、どうぞ斬る事は

又平　ア、コレ、なんの殺したからう。片輪な者が猶不愍なと、愚かしい程千年も萬年も、達者で置きたい親身なれど、殺さにやならぬ譯と云ふは、コリヤ、よう聞き分けよ。

ト矢張り胡弓入りの合ひ方。

鹿藏　アイ〳〵、どうぞ赦して下され。

トにじり寄る。又平、顔を手で上げて見て

又平　コレ、この顔が桂之助さまに似たのがそちが因果。佐々木の知行を其まゝに、大内のお首尾よき儘に、申し請けた小栗宗丹、若殿この世にござつては、心にかゝる瘤持つ足、科人の垂類なりと、猶も讒言。今日關白家の御上使も、幼稚の方を同道は、おのれが心の儘になす、首打てよとの上意。かくあらんと疾よりも推量せしゆゑ、先達て曲輪より、其方を若殿に仕立て、敵の手へ送りしも、山三どのと申し合はせ、まさかの代りと兼ねての覺悟も、不思議にこの程この又平方へ預けくれしは、ア、悦嬉しや佛神の加護力にて、やがて宥免、助かる事と、悦ぶ甲斐も今日の上使、打たねばならぬ手詰めの今宵、そちは孝行、兄は忠義と、愚かなれども汲み分けて、潔く死んでくれ、聞き分けてくれ鹿藏。

鹿藏　ア、モシ、そんならどうでも、わしや死なねばなりませぬか。

又平　から云ふ兄が胸の苦しさ、推量して、コレ、頼む頼む。

ト手を合はせ、色々こなし。

鹿藏　ア、コレ、拜まれて命やる事なら、不動さまや觀音さまは、常住死んで人に命をやらざアなるまい。こんな切ない目に逢ふはしか、最前妹の藤浪めが、我が體といの印しを十書き、いとしいと云ふ判じ物を書きやつたに依つて、おのれあいつに負けまいと、コレ〳〵、俺も謎繪の判じ物。

ト書きたる繪をそこへ出し

又平　ムウ、なんぢや。鬼が衣を着てゐるこの繪。

鹿藏　サア、鬼が衣を着たとかけて、生娘が婚禮と解く。

又平　シテ、その心は。
鹿藏　怖い樣で有り難い。
又平　ムウ、足らぬ者は足らぬなり、それ程の作まへあれば、コレ、とつくりとよく聞き分けて
鹿藏　ア、、喧しい。節季のかけ取りの樣に、さうせがまつしやるなら、ようごんす、死にませう。
又平　ヤ、、、スリヤ、得心して
鹿藏　サア、なんぼ痛いとて、熱い茶一ぱい吞む間であらう。
又平　オ、、よう覺悟してくれた。さう得心の上は、尋常に御切腹の證に
鹿藏　アヽコレ、まだ小みづがあるかいの。
又き　サア、申さば佐々木桂之助さまの御生害、掻き首、刎ね首と思はるゝも殘念ゆゑ
トあり合ふ三寶へ刀を乘せ、鹿藏が前へ直す。鹿藏、悔り、氣味惡きこなし。
サア、この短刀を右手の腹へ突き立て、きりきりと引廻すうち、身共が介錯いたすワ。
鹿藏　なんの面々が痛うない事だと思ふて
又平　サ、、、得心の上は時刻が移る。
トせき込み、支度する。
鹿藏　オッと、待つたり。俺や自隨念佛所へ、この頃百日法華のうちぢやが、題目と念佛で死んで、まごつきやアせまいかの。
又平　ハテ、くど／＼云はずと、覺悟せいサ。
トきつと云ふ。
鹿藏　オ、、覺悟してくれう。
ト腹立て、キッと云ふ。
又平　オ、、出かした。
ト又獨吟。
〽胸の誓紙は變らねど、僞り勝ちの浮き世ぢやものを、閨の屛風の繪そら事。
ト此うち鹿藏は、いろ／＼嫌なるこなし。又平はせき立て、思ひ入れ樣々あつて、獨吟切れる。途端、又平、拔きかける。鹿藏、アッと逃げ出すを、首筋捕へ、引き附け
南無阿彌陀佛。
ト刀振り上げる。所へ、奥より、金八、岡平、飛んで出て
金八　イヤ、身替り食はぬ。

岡平　無駄死させるな。
又平　なんと。
金八　邪魔な阿呆め。
　ト鹿藏を下手の半欄へ入れる。
又平　ヤア、あの若殿より外に桂之助さまは
金八　イヤ、誠の殿は爰に
　ト二重の疊を上げる。下より桂之助、顏を出す。
又平　ヤア、それ知られたら
　ト金八に切つてかゝるを、岡平、留める。金八、又平を、ちよつと當てる。又平、ウンと氣絶して、後向きに打伏すうち、金八、桂之助の首をポンと切る。奧より宗丹、出て來たり
宗丹　金八、出かした。心底見えた。
金八　誠の桂之助が首。
　ト袖へ包み、そこへ出す。
宗丹　小賢しくも又平めが、阿呆の弟を殿に仕立て、この宗丹を謀らんとなせど、娘は死んでもその縁にて隨ふ金八、誠の首を打ちたる褒美、立身さする割り符には、佐々木の旗を願ひの通り。
　ト旗を渡すを、金八、取つて

金八　ハツ、これさへ預かれば、出世なしたも卽ち同然。
　ト喜ぶ所へ、奧より道犬、若き拵らへ、腰かゞめ、出て
道犬　伜、これに居るか。桂之助が本首取つて、さて〳〵悅びでおぢやらう。
宗丹　ヤイ〳〵、うぬがその身振りはなんぢや。
道犬　イヤサ、年取れば腰が痛くて、さて〳〵
宗丹　エヽモウ、その身振り置いて、我が顏を水鏡で見居れ。
道犬　ナニ、水鏡で見い。
　ト云ひ〳〵、上手の池にて、姿を見て
　ヤア、こりや頭も眞黑。宗丹さま、どうして私しは此やうになりました。
宗丹　己の年月の娘が血汐、慥かに又平めが、最前の狆に入れて食らはしたと見える。
道犬　道理で生臭いと思ふた。
宗丹　今まで宗丹が親と申し觸らし置いたに、その姿では同道ならぬ。わりや裏道から湖水の城へ
岡平　シテ、お旦那には、これより直ぐに
宗丹　上使の子伜は裏手より歸したれば、身は直さま湖水

の城へ立ち歸る。金八、そちは阿國御前を召し連れて
金八　後より同道いたしませう。
宗丹　待たせ置いたる同勢に、岡平、供觸れ。
岡平　とくと申しつけ置きました。
雲谷　左樣なら宗丹さま。
宗丹　岡平、參れ。
ト唄になり、雲谷は上手より奧へ、宗丹先に、岡平、首を抱へ、向うへ入る。所へ奧より、阿國御前、出て來たり
阿國　桂どのゝ敵、弟、そちを
ト懷劍にて、金八に突いてかゝる。ちよつと立ち廻り。又平、むつくと起き
又平　ヤレ、早まり給ふな。誠の若殿は御安泰。
阿國　ヤヽヽ、なんと。
金八　卽ちこれに。
ト半櫃を明ける。うちより桂之助、出る。
阿國　ヤヽヽ、スリヤ、鹿藏と思ふたは
又平　矢ッ張り若殿桂さま。
桂之　邪智深き宗丹、なか〳〵迂濶の計らひならずと思ふ所に
又平　幸ひなるかな拙者が弟、愚かなれども若殿に生き寫し、これ屈強と廓より、若殿に仕立て虜にさせしと、人人に思はせしも
桂之　矢ッ張りこの桂之助、鹿藏になりて作り阿呆も、皆又平が殘らず指圖。
阿國　スリヤ、殿と思はせ死んだのは
又平　拙者が弟、誠の鹿藏。
金八　この金八が心變り、宗丹へ隨身せしも、心を許させこの計らひ、成就せんため。
阿國　さうとは知らずそちを恨んで、自害した銀杏どのゝ不愍さ。
金八　アイヤ、あの銀杏さまと見せたるも、又平が妹の藤浪。
阿國　ヤヽヽ、シテ、銀杏の前どのは
又平　二階のうちにて妹と吹きかへ、銀杏の前さまは
銀杏　無事で爰に居りますわいの。
ト上手より出て來る。
阿國　スリヤ、巳の歳の年月、宗丹が娘と云ふたは。
又平　矢ッ張り妹、瀨田の橋に守りを添へ、捨て子たりしを拙者が親、拾ひ取りしと日頃の話し、守りのうちには

已の年月の臍の緒書き、親はいづくの誰れならんと尋ねる由、これ幸ひと右の守りを銀杏さまに持たせ、わざと宗丹が手籠めに合ひ、娘と思はせ斯くせしも

金八　この金八に心許させ、この旗を取らんため。

ト旗を桂之助へ渡す。

又平　敵の娘の妹藤浪、よう得心させ覺悟の自害。

阿國　出かしやつた。それゆゑにこそ雲谷が、姿變へしも元の通り

又平　見紛ふ方なき若男、長谷部雲谷、裏手より湖水の城へ

銀杏　近道行けば粟津邊りで、出逢ふは定のもの。

阿國　金八諸共。

金八　銀杏どの、一緒に

銀杏　ござんせ。

ト時の鐘にて、兩人、ついと上手へ入る。

桂之　さるにても、我が身に代りし不愍なは鹿藏。

又平　形見に殘すは最前のこの繪。

ト鬼の繪を取り上げる。

阿國　可愛いは藤浪が、銀杏に代つてさつきの自害。

又平　哀れとゞめし名殘の繪に、いの字を十の判じ物。

ト又平片手に、藤浪が書きし繪を持つ。

桂之　現在、弟を殺すのも

又平　心は鬼と佛果の念佛。

阿國　いの字を十のいとしさは

又手　藤にしがらむ難儀の自害。

阿國　二枚のその繪が

桂之　二人の兄妹。

ト又平、二枚の繪をキッと見て

又平　ハ、ア、これにて工夫附いたるは、畫道の諸流さまざまあれど、土佐を名乘つて土佐流を、畫く事ならぬ又平、弟妹が形見を手本に、心の鬼も念佛の形、藤をかたげたおやま繪も、一流を書き出さば、たとへ不束不器用なりとも、又風雅とも世の人の、氣に大津繪ともてはやさば、二人が未來佛果のため。

桂之　ハ、ア天晴れ又平、その工夫附く上は

又平　これを便りに宗丹が、跡追つかけて本道より、拙者は直ぐに、御兩所は

桂之　裏手の近道、湖通り

阿國　急ぎの手段先へ廻り、首尾よく敵

桂阿　宗丹に

又平　モシ、早う。

トこなし。チョン〳〵、返し。時の鐘、かけりにて、
道具廻る。

本舞臺、向う板松の並木、土手の引き臺に取りつき、
後黒幕、誂らへの通り、爰に雲谷に金八、銀杏の前、
つめかけゐて道具留まる。

雲谷　コリヤ、うぬ等、なんとする。
金八　知れた事。後室樣を手にかけ、主殺しの雲谷。
銀杏　藥を以て形を變へれば、今ぞ良藥が現はす姿。
金八　最早遁れぬ、覺悟なせ。
雲谷　小癪な、二人ながらぶつ放す、觀念なせ。
金八　うぬから覺悟。

ト三人、ちよつと立ち廻り、雲谷、一卷を落とすを、
金八、取り上げ

こりや宗丹が連判狀。
雲谷　それを

ト來るを、見事に切り下げる。

銀杏　嬉しや敵を
金八　討ち取つた。

トこれにてチョン〳〵、引き臺にて、三人を上手へ引
く。松並木引き取る。

本臺舞、向う打ち拔き、湖水の城、水車、遠見、前
通り、浪手摺り、上手より擬寶珠の附きし橋と共に、
前へ苫船を突き出す。霞に月出て居る。この道具に
納まる。

ト直ぐに時の鐘、行列になり、向うより中間二人、宗
丹の替へ紋附きたる提灯を持ち、後より羽織の徒士二
人、次ぎに陸尺二人、乘り物を舁き、又徒士二人、中
間二人、箱提灯、槍、挾み箱、合羽籠二つ、押へ附き
出て來たり、先手、舞臺へ來たる時分、バタ〳〵にて、
向うより又平、麻上下、股立ち、淺黄の風呂敷へ物を
包み、腰へ卷き、三寶へ右の繪二枚乘せ、持ち、走り
出て來たり

又平　憚りながら其お乘り物、暫らく〳〵。

ト同勢を千鳥に分けて來る。これにて同勢、バタ〳〵
と舞臺へ來たり、駕籠を立てる。

徒一　お乘り物を無體に留める狼藉者。
皆々　動くな。

ト乘り物のうちにて

宗丹　イヤ、側すに及ばぬ。對面いたしてくれう。

ト乘り物の戸を明け、宗丹、出て

そちや又平、誠の桂之助を不意に討たれ、鬱憤を云はんと參つたか。

又平　アイヤ、全く左樣には候はず。若殿の儀は何卒お命赦免と存ぜしが、顯はれしは自業自得。拙者參つたは、仰せつけられし書面の工夫つきましたるゆゑ。

宗丹　ムウ、スリヤ、一流を書き出すとな。

又平　サ、不束な戯れ繪なれど、御上覽。

ト三寶差出す。宗丹、取つて見て

宗丹　ムウ、コリヤ、鬼の念佛に藤のおやま繪。

又平　殘らず謎繪の判じ物。

宗丹　こりや面白い。

又平　拙者住所の地名をかたどり、大津繪とも呼び、巷に賣買お許しあらば、有難う存じまする。

宗丹　シテ、この謎の解き樣は。

又平　サア、それには種々深き仔細、お心入りにもなる儀でござれば、仲間の憚り、暫時御同勢をおよけ下されい。

宗丹　望みある某、心入りとあれば、家來ども、城内の升形に相待ち居れ。

皆々　ハアヽ。

ト同勢殘らず、橋より奥へ入る。

宗丹　シテ、その樣子は

又平　殘らずこの一卷に認め

ト懷より一卷を出し、擴げ、差附ける。

宗丹　ヤヽヽ、コリヤコレ、この宗丹に一味の連判狀、これがどうして

又平　所持せし奴は卽ちこの者。

ト風呂敷より、雲谷が切り首を出す。

宗丹　ヤヽヽ、こりや雲谷めが死首。スリヤ、逃げ損ふて討ち取られ、身が企みまで洩らしたか、エヽ〱、愛な大たわけめが。

ト首を川へボンと蹴込む。ドンと遠攻めになる。宗丹、キツとなり、股立ち取りながら

ヤア、あの太鼓は。

又平　企みの樣子、諸方へ告げやり、お身を逃がさぬ組み子の遠卷き

宗丹　ヤア、小賢しく計らふとも、主人と賴む桂之助をば

討ち取つたれば
又平　イヤ、あれこそ矢ツ張り弟の鹿藏。
宗丹　ムウ、シテ、又誠の桂之助は
ト舟のうちにて
桂之　疾よりこれに、家の仇たる
阿國　小栗宗丹。
兩人　改め見參。
ト苫をはね除け、桂之助、阿國御前、誂らへの形にて、ついと出る。
宗丹　スリヤ、殘らずわい等に計られたか。
トどん／＼、バタ／＼にて、橋より、タテの同勢大勢、バラ／＼と逃げて出て
徒士　ハッ、升形へ參りし所、早桃の井の人數入れ替はり
皆々　我れ／＼を追ひ出しましてござりまする。
宗丹　ヤ、、、、スリヤ、城中は敵に
又平　畫道を云ひ立て、禁廷へ取り入り叛逆の企て、一味の連判にて明白。
桂之　その實名を名乘つた／＼。
宗丹　ムウ、かくなる上は包むに及ばぬ。我れこそ播州白旗の城にて落命なした、赤松滿祐が嫡子、彦次郎則政なるワ。
又平　扨てこそ、その白旗の城の大將は、佐々木の大殿なるゆゑに
桂之　その遺恨にて天盃を打割り、斷絕させしと覺えたり。
宗丹　オヽ、よい推量。此うへは破れかぶれ。
皆々　動くな。
ト又平を取り卷く。
宗丹　我れは城へ馳せ入つて、敵城を取り返さん。
桂阿　家の敵、覺悟。
宗丹　小癪な。
トドン／＼にて、宗丹、阿國御前、桂之助、立ち廻りて、橋より奥へ入る。同勢皆々、又平にかゝる。又平、手早く繩襷をかけ、シヤンと見得。チヨンと月入る。これより暗がり、誂らへの合ひ方にて、又平、同勢を二人三人づゝ立廻つてはポン／＼と、見事に切る事よろしく、トヾ殘らず切り盡くし
又平　御兩所のお身の上。
ト矢張りドン／＼にて、橋よりついと奥へ入る。引違へて、橋より、宗丹、綱四天の形になり、阿國御前、

桂之助と、立ち廻りしい〳〵出て來たり、ちよつと立ち廻り面白くあつて、どつこいと留まる。矢張りドンドン、突かけにて、向うより金八、肌脱ぎ、立て文を持ち、捕り手大勢連れ出て來る。後より又平も出て來る。

桂阿　則政、動くな。

金八　待つた〳〵。佐々木の落度はお赦しの勅書、まつた宗丹は天下の科人、糺明の上仇討ちは追つて。

宗丹　スリヤ、この則政を、禁廷へ引くか。

桂之　佐々木の家名立つからは

阿國　この場は此まゝ

桂之　直さま參内。

捕皆　動くな。

ト取り卷く。皆々、見得よく、これより二番目上幕、狂言始まり、左樣と、打ち込みにて、よろしく　幕

東山殿劇場段幕（終り）

けいせい廓(くるわ)源(げん)氏(じ)

再　演　絵　番　附　表　紙

けいせい廓源氏

發端　鷹狩の段

口明　北野繪馬堂の段

役名──眞柴久吉。佐々木義賢。堀尾帶刀。長束內藏之助。岸田民部。林山城之助。大谷式部。茂山賴母。唐島修理。遠藤軍治。眞木大助。熊井團右衞門。櫻木宮藏。宮木平內。馬場屯。娘、お糸傾城、大國。同、道柴。仲居、お澤。同、お桐。蘆屋姬。於次丸久春。傾城、福花。同、遠山。腰元早枝。奴、岡平。藏人妻、撫子。金八女房、お宮物草女房、柵。松井左近。白川部。別當、梅松院粟津軍藏。庄屋、庄右衞門。長谷藤太郎。名古屋將監。佐々木彈正。犬上團八。堀尾帶刀。生駒親之助。猪熊門兵衞。百姓、金八。物草太郎。寺子屋、當作。不破伴左衞門。

造り物、見附け奥深に淺黃幕、一面の二重舞臺、蹴込み草土手の書割り、東西に板松、眞中三間の間幕中を立て、五三の桐の幕を打ち出し、狩り場の體よろしく、幕のうちより右二重舞臺眞中に、眞柴久吉、鷹狩りの形、相引にかゝり居る。次ぎに於次丸久春、同じ形にて、中床几にかゝる。佐々木義賢、堀尾帶刀、長束內藏之助、岸田民部、林山城之助、双方に別れゐる。平舞臺に大谷式部、茂山賴母、唐島修理、遠藤軍治、眞木大助、熊井團右衞門、櫻木宮藏、宮木平內、馬場屯、いづれも鷹狩りの形、東西に別れゐる。鷹匠二人、鷹を据ゑ。軍卒二人、小姓一人、上下にて、太刀を持ち、この人數、久吉の後ろに扣へる。橋がゝりの方に、陣笠を着たる列卒並ぶ。この見得にて

一聲謠〽重山雲を帶びて人煙遠く、樵夫道を失ふて水聲近し、あら面白の景色や〱。

ト右一聲謠にて、幕開く。

久吉　いかに方々、此度久吉朝鮮國を征伐の思ひ立ち、全く我が威を振ふにあらず、三韓とも昔より、我が朝に隨

ひ靡き、貢ぎを贈り來たりし所、近頃使者をだに差越さず。これに依つて帝の逆鱗、叡慮を慰め奉らんと、加藤小西を始めとし、其ほか諸將に大軍を授け、彼の國を攻め討たしむ。實に神國の威德に依つて、味方十分勝利の由、早打ちを以て日々の注進、これ全く久吉が天運の至る所と、予が悦び大方ならず、各々祝賀いたされてよからう。

義賢　誠に以て上意の如く、その昔神功皇后、三韓を亡ぼし給ひしより、我が日の本の屬國となり、貢ぎを贈る四夷八蠻。

久吉　然るに近年神國の、帝を恐れ奉らず、貢ぎを怠る不敵の段々。

帯刀　御憤りあつて此度の思ひ立ち、加藤小西を始めとし黑田浮田小早川、其ほか隨ふ諸國の勇士、いづれも一騎當千の者ども。

内藏　風波逆浪の厭ひもなく、身命を擲つて釜山海まで押し渡り。

民部　彼の國に至るや否や、鋒先鋭く攻め撃ち〳〵

山城　遂に都を攻め破り、國王太子を虜となす。中にも加藤主計之頭

式部　彼の國王の姫宮たる、錦花皇女は無双の美形、別しては異國の寶物、蘆屋釜と名附くる名器

賴母　淸正送り越したるゆゑ、君の御秘藏斜めならず、御陣中に差置かれ、勤番仰せつけられし所

修理　何者とも相知れず、蘆屋釜諸共に、皇女を奪ひ行き方知れず。

軍治　諸將は猶もたゆみなく

大助　大明の加勢を打破り

門右　蔚山の城を陥れ

官藏　阿蘭海まで打入り〳〵

平内　四海余州を切り隨へ

屯　追つゝけ凱陣。和國の譽れ

義賢　千鶴萬龜、只々

皆々　お目出度う存じまする。

久吉　目出度い〳〵。さり乍ら心がゝりは、義賢の臣四の宮藏人、勇猛無双の侍ひなるに、彼の地によつて討ち死とも、又は行く方知れずとも、その沙汰いまだ分明ならず。義賢には愛臣の失ひ、嘸殘念に思はれん。

義賢　陪臣の藏人づれに、尊慮を苦しめ下さるゝ段、義賢が身に取つて、恐悦この上や候ふべき。この者の儀は、

義賢京地の居館にて生ひ立ち、膝元にはあらざる者ゆゑ不愍さも一入、御賢察下さりませう。

久吉　さこそ〳〵。

ト とひよになる。ト向う桟敷より、紅掛けにて鶴一羽飛んで舞ひ遊ぶ有様。

帯刀　君御覧あられしか。今日の御遊猟に、世に珍らしき丹頂の真鶴、舞ひ遊ぶ有様は、愈々味方勝利の吉瑞。

久吉　面白し〳〵。予が秘藏の珪陽。これへ。

鷹匠　ハッ。

ト鷹匠、鷹を渡す。久吉、足革を解き、鷹を放す。皆皆、息を詰め、これを見る。仕掛けにて、鷹、飛び行き鶴を蹴落さうとする。鷹、少し弱り、危ふくなる。

久吉　鶴の勢ひ至つて強し、鷹の命危ふし危ふし。ソレ、誰れかある。矢先にかけて射て落せ〳〵。早く〳〵。

ト皆々、猶豫してゐる。

民部　ヤア、何を猶豫、疾く射て取れ。誰れ彼れと云はんより、射藝に達せし佐々木義賢、鶴を射取つてお手柄あれ。ソレ、弓矢々々。

山城　心得ました。

ト山城之助、義賢が前に、弓矢さし置く。

義賢　辭退は却て臆するに似たり。いづれも御免。

ト弓矢を取り、向うへ出る。狙ひすまして兵と放つ。誤つて、鷹、ばつたり落ちる。義賢、はつと驚ろく。鶴、喜び、向うへ飛んで入る。

南無三、射損ぜしか。ホイ。

ト當惑のこなし。立役皆々、顔見合はせ氣の毒なるこなし。彈正、民部と顔見合はせ、舌なめづりして

内藏　アヽ、氣の毒千萬、軍勝利の悦びの御遊猟に、御秘藏の鷹を射たるは、味方に取つて第一不吉。

民部　言譯の筋なくば、潔く腹召され。

山城　なんとして、えゝ切るまい。ドレ、身共が介錯。

ト立ちかゝる。

帯刀　山城之助、待ちやれ。

山城　イヤ、落度ある義賢なれば

帯刀　イヤ、これしきを落度とあつて切腹なすは、不覺の第一。

民内　ナニ、切腹に及ばぬとは。

帯刀　珪陽を射たるは、眼前の誤りなれど、佐々木は代々勲功の家筋、少しき誤りを以て一命を果たしなば、補佐の臣下を失ふと云ふ、差當つて御凱陣に不吉の沙汰、切

腹たそとは思ひも寄らず。

三人　でも、此まゝでは

帯刀　達て自殺を勸むるは、コリヤ、何か各々方には、義賢に遺恨ばしあつてか。

三人　イヤ、全く

帯刀　我が君の上意も待たず、尾籠とや云はん、扣へ召され。

三人　ム、、。

帯刀　ハツ、恐れ乍ら我が君様、義賢が射藝未熟にはあらねど、丹頂の羽うつて飛びしは、君高運たらんと神明の然らしむる所、これ以て高座の吉瑞、惜むべきは珪陽の鷹なれど、かれをこれに思し召し替へられ、何卒御賢察あつて、ナウ、いづれも。

式部　なるほど累代大功の家柄と云ひ

頼母　我れ／＼どもがこの場のお願ひ

屯　殊には君に仕へて二心なき義賢

式部　御仁愛の程を

帯刀　偏へに

皆々　希ひ奉る。

久吉　予が秘蔵とは云へど、申さば鳥類、これに替へて人命を斷つは、差當つたる不仁の至り。君子はその罪を憎んで、その人を憎まずと云ふ。殊には方々の推擧と云ひ、いまだ若年の義賢、以後の心得、とくと申し聞けてよからう。

帯刀　ハツ／＼、有難き嚴命。我れ／＼がこの場の大慶、義賢どの一旦の落度は時の不肖、小事に屈せざるを大丈夫の志しと申せば、今日の仕儀、必らず恥辱とばし思はれぬがよい。

ト義賢、返答なく、默して、思案のこなし。

内藏　なんといづれも、家柄がよいわの、イヤ筋目が正しいわのとあつて

民部　眼前の仕落ちを、なんのお咎めもなく、生ぬるいお捌き。

山城　それと申すが、側からのちよつぽくさ。

修理　かの下世話に申す左平次とやら。

軍治　兎角武藝も射藝もうつちやつて

大助　口先の手練が第一。

彈正　お髭の塵取り下稽古を

平内　我れ／＼も仕らう。

山城　命助かつても恥辱は恥辱

内藏　恥曝しとは、この事でがなあらう。
民部　いづれも、まじ〳〵とした顏を見さつしやれ。
敵皆　ハ、、、、。
久吉　ヤア、尾籠なり。汝等たとへ勳功の家柄にもあれ、その罪を糺すは四海の鏡。政道に於て依怙のあるべきいはれやあらん。申さばこれは時の戲くれ、予が赦すと申すからは、軍中に虛言なし、これを否むは主を誘るのことはり、達てこの誘りをなさば、罪は却て汝等に及ぶであらう。不屆きとや云はん、扣へてよからう。
ト皆々、顏見合はせ
敵皆　御意、恐れ入り奉つてござりまする。
トちやん〳〵と七つの半鐘鳴る。
久春　最早申の刻、御歸陣の急がれ、然るべう存じまする
久吉　歸るであらう。
皆々　ハツ〳〵。
ト次第になり、久吉先に、各々人數、段々列を正し、向うへ行きかゝる。久吉、花道に留まり
久吉　佐々木義賢。
義賢　ハツ。
久吉　大功は細瑾を顧ず、大量は小恥に拘らずと云へる古語、承知いたし居るか。
義賢　ハツ〳〵。
久吉　供のいたせ。
團八　君の御歸陣。
皆々　ハア。
ト所知入りになり、久吉、久春、其ほか皆々、列を正し、向うへ入る。ト義賢、跡見送り
義賢　我れ幼少より射藝を好み、數度の戰場に後れを取らず、僅かなるかけ鳥を射損じ、諸大名の人前にて恥辱を蒙る。これぞ武運の盡きたる所。天我れを亡ぼせり〳〵ソレ。
ト刀に手をかけ、腹切らうとする。橋がゝりにて
伴左　待つた我が君、暫らく〳〵。
ト聲をかけ、伴左衞門、着附け、馬乘り袴、腰に鞭を差し、ツカ〳〵と出て
先づ〳〵お止まりあられませう。
義賢　伴左衞門、義賢が一生の不覺、生きながらへて何面目に對面せん。潔く切腹して、今の恥辱を雪がん心底。介錯いたせ。
ト又手をかけるを、きつと留め

伴左　御短慮なり我が君、かほどの小事に拘つて、御生害あらんとは、度量が小さい、度量が小さい。

ト義賢、こなしあつて

義賢　して又、義賢が今の恥辱、雪ぐべき手段やある。

伴左　その手段と申すは

トこなしあつて、落ちたる鷹を取り上げ、矢を引き抜き、義賢が側へ持ち行き

この矢柄を篤と御覧なされ。

ト義賢、矢をしごいて見て

義賢　最前は氣の急くまゝ、それと心も附かざりしが、今改むれば矢柄の狂ひ、ムウ。

トきつと向うを見て

扨ては久吉、我れに恥辱を取らさんと、外れ矢を與へしものなるか。ハテ、奇ッ怪千萬。

伴左　君は正しく宇多天皇の後胤、そのかみ源平の戰ひに高名ありし佐々木の末流。

義賢　今大領久吉と、威勢盛んに秀づれども、もとは尾州の土民の伜。小田春永にこびへつらひ、桶挾間の合戰の折柄、我れ數多の兵器を貸して、彼れに手柄をさせしがゆゑに、日々の立身出世。さすればこの義賢には、大恩ある匹夫の久吉。

伴左　その麾下に屈服して、勳功武名を埋むるは、瓦を黄金に交ゆる譬へ。

義賢　今日の只今より、義賢大儀を思ひ立ち、久吉を攻め亡ぼし、四海に羽をのす佐々木の再興。

伴左　ヤヽ、なんと御意なさるゝ。

義賢　氏と云ひ系圖と云ひ、誰れ憚らぬ我が身の上。ハテ面白い。

伴左　扨ては君にはお心一致に

義賢　大領久吉を亡ぼして見せう。

伴左　こは存じ依らざる御意。今眞柴家は威勢盛んに、我が日の本は云ふに及ばず、異國朝鮮まで攻め詰むる、その久吉に敵對あらん事、卵を以て磐石を打つ譬へ、危ふし危ふし。

義賢　不義の榮えは浮べる雲、なに匹夫の久吉。恐るゝに足らんや。

伴左　イヤ／＼、進む者は退き易し、その思ひ立ちは幾重にも

義賢　ヤア、無益なる諫言立て、再び云ふな。聞き入れぬぞ。

伴左　スリヤ、いかやうに申し上げても
義賢　我が存心は、まッこの通り。
ト矢をへし折る。
伴左　矢を折つて誓ひを立てしは、愈々以て飜さぬ御心底、天晴れ度量、恐れ入り奉る。
義賢　伴左衛門、して、其方が所存はいかに。
伴左　仰せにや及ぶべき、君を諫むるは臣の道。
義賢　諫めて隨はざる時は
伴義　例へ、しゝびしほになるとても
義賢　背く心はないぢやよな。
伴左　お馬の先にて分捕り高名、運命つきる時節に至らば討ち死いたすが本望でござりまする。
義賢　ハテ、勇ましい。
伴左　さり乍ら、火急に事を謀らんといたさば、梢を傳ふ猿猴、却て災ひ招くに似たり。
義賢　西國四國の山林に、隱れひそむる殘黨原
伴左　大内尼子松永なんどの、討ち洩らされに牒し合はせ
義賢　謀を固めて不日に旗擧げ。
伴左　先づそれ迄は
義賢　祕すべし／＼。

トちやん／＼と暮れ六つ。勢子一人、出て
勢子　お迎ひ。
義賢　近う。
勢子　ハッ。
ト寄るを
義賢　大義の手始め
トぽんと切る。
伴左　天晴れ。
ト義賢、刀を差し出す。伴左衛門、血を拭ふ。

幕

ト口上出て、かやうに仕りまするが狂言の發端、彌々大序の始まり、左樣に、と直ぐに鳴り物になる。

造り物、見附け淺黃幕、板松、舞臺先浪板、加茂川流れの模樣、幕のうちよりお宮、撫子、早枝、蘆屋姫、遠山、福花、お桐、道芝、大國、お澤、辰彌、文字野、この人數、揃ひの形、前垂れ、置き手拭ひ襷がけ、布晒し、大小入り、花やかなる唄にて、幕開く。

ト唄に合はせ、段々入違へ／＼の模樣、所作心にて、

よろしくあろ。よき程に向うより

侍ひ　エイ〳〵〳〵。

侍ひ　サッサッサ。

同　エイ〳〵〳〵。

同　サッ〳〵サ。

トかけ聲して、大助、官藏、着附け、上張り、鉢卷き締め、臼を荷ひ出る。團右衛門、平内、水盥を荷ひ、軍藏、久春、棒に布を引つかけ、藤太郎、前髪にて、歌之助、つき杵をかたげ出て、本舞臺へ來て

皆々　ヨイトコナ。

トよき所へ下ろす。

撫子　ほんにマアお前方は、今まで何をして

女皆　ゐやしやんしたぞいなア。

歌之　何をしてゐたとは、よう思ふても見い。下の瀬から爰までは凡そ五町余り

團右　松の木の杵が、水にほとびしその重さ。

久春　加茂川の水は淸らかにして、輕いと云ふは大きな嘘言。

軍藏　荷ひ桶に半分も入れたからと云ふものは、肩の骨が碎ける如しぢや。

藤太　イヤ、それよりは、濡れた布と云ふものが、なかなか非力でいけるものではないわい。

大助　貴樣達も仰山な、このうちで重たい大將と云ふは、この臼ぢや。

官藏　これを持たしたら、大方道でへたばるであらう。

みや　これはしたり、思ひ〳〵に云ふてゐずと、わたし等が受取りの布は、さつぱりと晒し上げた程に、お前方もちやつと仕事にかゝらんせぬかいなア。

軍藏　いかさま、たま〳〵男に生れ乍ら、女子に負けたと云はれては詰まるまい。

早枝　お前方の仕事のうちに、こちらもこの晒した布を、干さうではないかいなア。

女皆　さうせうわいなア。

歌之　此方も早う、仕事を始めい〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト又晒しの合ひ方になる。官藏、大助、眞中へ臼を据ゑる。歌之助、軍藏、杵を持ち、兩方へ別れる。女形は布を引張り干す。此うち應屋、久春が側へ行く。ト久春、すげなうして、福花が側へ寄る。福花、ついと退いて、歌之助が側へ行く。早枝、歌之助が側へ行か

うとするを、藤太郎、支へて、嫌らしうする。早枝、嫌がる。この模様よろしく、立ち合はせあるべし。

歌之　ヤレ／＼、しんどや／＼、息が切れるぞ。水ぢや水ぢや。

きり　アイ／＼、合點でござんす。

ト桶なる杓にて、汲んで持ち行く。歌之助、一口呑んで

歌之　ヤア、この水は

きり　なんと、よい水でござんせうがな。

歌之　えらし／＼。これが誠に天上の甘露でがなあらう。

さわ　所で、まだから云ふ物があるわいな。

トこちの桶より、肴鉢、とさん、銚子、杯なぞ取り出す。

藤太　ヤア、こりやけうといワ。何卒我れらも御相伴がいたしたいなア。

軍藏　何がなしに打混じて、呑みかけうではあるまいか。

久春　よからう／＼。早う計らへ。

大助　畏まつてござりまする。毛氈の代りには

平國　幸ひのこの干し布。

トよき所へ敷く。

歌之　小盞酒が始まつた。父も母も、ござれや／＼。

女皆　アイ／＼、合點ぢやわいなア。

ト在郷めきたる合ひ方になる。皆々、並よく並び、酒盛りになる。

久春　なんと皆の者、この於次丸久春は、父久吉もろとも西國にありしが、元服の祝賀につき、此度はじめての參内。

歌之　主人義賢が妹、これなる蘿屋姫とは、兼ねてお言ひ號けの久春公、さすれば佐々木家の花聟君、京地御逗留のその間は、粗略なく御馳走申せと、義賢が下知に依つて、かく申す生駒歌之助を始め

藤太　同家山長谷部藤太郎。

軍藏　この粟津軍藏なぞ、申し合はせて君の饗應。

撫子　夫四の宮藏人は、御主人義賢公の御名代として、小西加藤の人々に隨ひ、朝鮮國へ出陣の所、かの地に於いて亂軍に討たれし趣き、弟伊織を守り立てまして、女乍らも四の宮の跡目、相續いたす妾。

早枝　姫君樣のお手廻りに、召し使はるゝ腰元早枝。

稲花　歌さんの計らひで、この間からの揚げ詰め

遠山　久さんの御機嫌を取るわたし等は、島原の傾城遠

山。
大國　同じ流れのこの大國。
きり　仲居のお桐。
さわ　お澤まで
文字　皆云ひ合はして
女告　今日の趣向。
みや　憚りながら顧みず、賤の手業は馴れ申した、私しは一の瀨村の百姓、金八と申す者の女房。夫金八どのはもと名古屋家の御家來、私しとてももとはお家のお腰元、宮城野と申せし者、互ひに若氣の忍び合ひ、度重なりて因果の胤をお腹に宿し、遂には上のお聞きに達し、既にお手討ちにも遭ふべき所を、親旦那將監さま、御夫婦のお情にて、命を助かりお屋敷を追放、金八どのゝ故郷へ歸り、程なう生み落としましたは、小光と申して女の子、成人するに隨ひまして、どうぞ御勘當が赦されたい、元の侍ひになりたいと、明け暮れ苦にせられまするが悲しさに、夫にも知らさず上りましたも、どうぞま一度歸參のお願ひ、お詫びが申し上げたさ。參る事は參つても、お屋敷へは面伏せ、ふと昨日千本通りの松原で、お目にかゝつた歌之助さま、やれよい所へ來た、かう〳〵云ふ趣向ちや程に、賤の手業を皆さんへ、御指南申せよとの御意。ハイ〳〵畏まりましたと、何がなしに布晒しの御傳授、御遠慮なしにどうなされませ、かうなされませと、ほんにわたしとした事が、厚釜しい、ホヽヽヽヽ。今申しまする通りの品なれば、何卒皆さんのお執成しにて、將監さまへ夫の勘當御免のお願ひ、そこへよろしくお執成し、お頼み申し上げまするわいなア。
早枝　ほんに、よう思へば腰元の宮城野。コレ、將監の娘早枝ぢやわいなう。
みや　ほんにさうぢや。どうやらお顏を見ました樣に思ひましたが、その時はまだお六つかお七つ、とんと見それましたわいなア。マア〳〵、御成人を見屆けまして、悦しう存じまする。
福花　樣子を聞けばいとしぼいお心根。
撫子　將監さまとは日頃から、お心安い歌之助さま、そこへよろしうお執成しを、なされておやり遊ばせいなア。
歌之　その儀は拙者承知なれども、不義ゆゑの勘當とあれば、これぞと云ふ功がなくては、執成しも致し難い。われが夫金八とも相談の上、一つの功さへ相立てば
撫子　共々にこの樣子も、及ばずながら詞を添へてやりま

せうわい。

早枝　この早枝も父様へ、とも〴〵お願ひ申さうわいなう。

みや　あなた様方のお詞、エヽ、有り難う存じまする。立ち歸りてこの様子、金八どのへ話しましたら、さぞ悦ばるゝでござりませう。エヽ、有り難う存じまする。

ト上下侍ひ、一人、出て

侍ひ　申し上げまする。主人義賢、追つつけ北野天滿宮へ參詣、久春公にも早々御社參あるべきやう、申し上げよとの儀でござりまする。

歌之　お聞きの通り、主人義賢御招請の使ひ、これより直ぐに北野神社へ、お入り下されませう。

久春　いかさま、靈現著しき天滿宮、參詣の望みもあれば、幸ひの折柄。

軍藏　然らば御禮服に改められて、然るべう存じまする。

久春　イヤ〳〵、義賢より馳走の趣向、女どもゝ此まゝに、召し連れても苦しかるまいか。

藤太　ともかうもお心任せ。

福花　そんならいつそこの形で

道芝　練り物に出た心持ち

女皆　北野までお供せうわいなア。

みや　左様なら私しは、これからお暇を頂いて、早う在所へ歸りたうござりまする。

早枝　それはさうでもあらうが、大事なくばどうぞ一緒に、ナア、皆さん。

福花　ソレ〳〵、馴染みになつたら名殘りが惜しい。今日一日は、こちらに附き合ふておくれいなア。

みや　其やうに仰しやるを、達てと云ふは結句不躾け

久春　とてもの事に女共、面白う囃せ〳〵。

女皆　アイ〳〵、合點でござんす。

ト摺り鉦入りの賑はしき唄になり、この人數皆々、向うへ入る。とチョン〳〵、返し、道具廻る。

造り物、一面の藪疊になる。庄右衛門、ぼつとせ、木綿やつし、簑笠にて、眞中に相引きにかゝり居る。ちよん兵衛、一の瀬村と書いたる紙幟を持ち、庄屋一、三つ松村、庄屋二、岩瀧村、同三、鳴瀬村、同四、中岡村、同五、早尾村と書いたる紙幟を持ち、其ほか御囃子、樂屋若い衆なぞ雇ひにて、大勢百姓にて、簑笠竹槍を持ち、押し合ひ居る。法螺太鼓に

て、道具留まる。
ちよ　大庄屋庄右衞門どの、相圖の法螺が鳴つたゆゑ
庄一　皆云ひ合はして、
皆々　馳けつけましてごんす。
庄右　オヽ、皆早速に、ようこそ〳〵。今度我れ〳〵が領主佐々木義賢どの、非道無法の政道ゆゑ、云ひ合はしての強訴。竹原村に居る寺子屋の當作と云ふは、もと大和の浪人と聞いて大將に頼み、大手搦め手攻めつける、大手の軍師は寺子屋どの、搦め手はこの庄右衞門、俺が指圖に隨ふて、必らず皆拔かるまいぞや。
皆々　合點ぢや〳〵。
庄右　一の瀨村の庄屋ちよん兵衞、それへ出や。
ちよ　なんでごんすぞ。
庄右　そちの村の金八と云ふ奴、いじむじと吐かして先度の連判の時も、判をせなんだと聞いたが、どうしやつた。
ちよ　イヤ、そりや歩るきをやつて置いたれば、追つつけ連れてごんせうわい。
　トこの時、橋がゝりのうちにて
喜嘉　サア、おぢぢやいの〳〵。
　ト在郷になり、金八、百姓の形。喜助、嘉助、簑笠にて、引張り出る。
金八　これはしたり、其やうにせいでも、來いならどつこまでも行く。マア、爰を放して下され。
喜助　イヤ、兎角和御寮は、逃げう〳〵とする。
嘉助　ひよつと取り逃がしたら、庄屋へこちらが言譯がない。
兩人　サア、おぢや〳〵。
　ト連れて出て
アイ、金八を引張つて參りました。
ちよ　オヽ、大儀々々。庄右衞門さん、こいつがこちの村の金八めにござります。
　ト庄右衞門、くわん〳〵と、見やり
庄右　ウム、一の瀨村の金八とは、わごぜよな。
金八　ハア、。
庄右　聞きも及ばん。おらが事は栗本郡十一ヶ村の惣支配、庄屋の庄右衞門とはおらが事なり。
金八　ハア、。
庄右　時に今度の一揆、十一ヶ村の男たいした者は、六十から十五まで、皆一統に連判したのに、われ一人なんで

不承知ぬかすのぢや。サア、返答に依つて思案があるが、金八、どうぢや。
金八　ハイ、皆一統の固めを私し一人、なんのかのと云ひまするも、これにはちつと入り組んだ、譯のある事でござりまする。
ちよ　譯もへちまもいつた物か。細言云はゞ、始めからの固めの通り
庄四　さうぢや〳〵、この通りの竹槍で
百皆　突き殺せ〳〵。
ト立ちかゝる。
庄右　オッと、待つたり〳〵。入り組んだ様子があると云ふに、聞かずにあいつを突き殺すは理不盡ぢや。マア、皆、鎭まりや鎭まりや。
百皆　アイ。
ト鎭まる。
庄右　サア、金八、その譯を早う云へ、聞いてやるわい。
金八　流石は又大庄屋様。その譯と云ひますは、外でもないが、一體今度の企ては、皆こつちが無理の様に、この金八は思ひまする。
庄右　イヤ、そりや我れが思ひ違ひぢや。五年この方年々の過役、高一石に銀三十目、一間々口に六歩、年貢の外のお取り上げ、凶作不作を歎いても、聞き入れのない胴慾な政道、此やうにしてゐたら、追つつけ百姓どもは、皆かつえ死に死なにやアならぬわい。
ちよ　とても死ぬる命なら、恨みのある殿様を相手に
庄五　腹存分暴れて死ぬるが、せめてもの心ゆかしぢやわい。
金八　サア、そこが料簡違ひ。全體この取り方の事は、殿様の知らしやつた事ではごんすまい。皆下役人の惡さ。それに殿様へ敵たふは、どうも理に當たらぬではごんすまいか。
庄右　様子を聞かぬゆゑ、さう思ふも尤も。おらも殿様義賢さまの業ではあるまいと思ふて、段々と願ひを立てた所が、一向お取り上げもなし、誠にお家の伯父御彈正さまの口から直に聞いたが、矢ッ張り殿様の慾心に違ひないとの事。それで一統に固まつたのぢやわい。
金八　何は然れこの固めは、わしをどうぞ省いて下され。
庄右　なぜ、わればかりさう云ふ。
金八　サア、その譯と云ふは、もとわたしは佐々木の御家來、名古屋將監さまの所に中間奉公、様子あつてお家を

出て、今一の瀬村で水呑み百姓。段々深い御恩もあり、
その古主將監さまが、大切になさるゝ佐々木のお家、わしが爲には云はゞ重恩。刃向ふては心が濟まぬ程に、ならう事なら省いて下さりませ。

庄右　イヤ、ならぬ。恩があらうが何があらうが、そりやわれの得手勝手、一統の固めに一人省いては惣崩れ。ハテ、脈と云やア是非がない、ナア、皆の者。

嘉助　首途の血祭り。

喜助　竹槍で金八めを

皆々　突き殺せ〱。

ト立ちかゝる。

金八　マア〱〱、待つて下さりませ。今云ふ通り大恩あるお主樣へ、敵對せぬが科とあつて、突き殺されるわたしが命、更に惜しいとは思ひませねど、村の衆が知つての通り、私しには年寄つた一人の母者人がごんす。今こゝで殺されたら、誰れ養ふ者はなし、忽ち袖乞ひ非人になつて、路頭に立たつしやると思へば、それぱかりが悲しさ。命が惜しい、死にともなうござります。爰の道理を聞き分けて、助けて下さりませ。頼みます〱わいなう。

ちよ　ほんに、われは馬鹿律義な者ぢやわい。そちの婆は村一番のならず者、あんな惡い奴は死ならうが乞食せうが、構ふ事はないぢやないかい。

金八　サア、そこでござります。惡い人でも親は親、殊にわたしとは義理ある仲、見捨てずてが濟みませうか。こちらはお主、一人は親、どちらをどうとも分け兼ねた、金八が心の切なさ、爰の道理を聞き分けて、一揆も省き、命も助けて下さりませ。慈悲ぢや、情ぢや。コレ、手を合はして拜みます〱わいなう。

トいろ〱こなしあつて云う。

庄右　ハア、、義理と義理とに搦められた、金八が今の話し、聞いて哀れを催した。なんと皆、どう思ふぞ。爰は一番金八を、省いてやらうではあるまいか。

ちよ　イヤ、ならぬぞ〱。金八に親があれば、こちらにも女房子がある。

嘉助　可愛い嬶を振り捨てゝ來たは、皆一統の固め、さう我が儘は、さゝぬぞ〱。

金八　そんならこれ程に理解を云ふても

庄三　四の五の云ふなら手短かに

庄一　この竹槍で突き殺さうか。

金八　サア、それは
皆々　一味するか。
金八　サア
皆々　サア／＼／＼、どうぢや。
金八　ホイ、是非に及ばぬ。一味仕りませう。
庄右　そんなら得心ぢやな。
金八　得心ではなけれども、かうなつたれば、せう事がない。
庄右　オヽ、よう得心した。それでこの場も納まると云ふもの。マア、一統して目出度い／＼。
ちよ　時に、聞いた所が、今日は殿様始め一家中
一二　北野の森に入るとの事。
三四　戻りを待ち受ける鳥居前
皆々　有無を云はさず攻めかゝらう。
庄右　首途の祝儀、皆、エイ／＼ワアぢや。
皆々　エイ／＼ワア。
トドンチヤン打ち上げにて、庄右衛門、列を正し、向うへ入る。金八、氣の濟まぬこなし、手を組み居るを、サア、來い／＼と、喜助、無理に引つ張り、向うへ入る。チヨン／＼にて、返し

鼓疊、引いて取り、淺黄幕、切つて落とす。
造り物、九間の間、惣一面の繪馬堂、奉納の繪馬、さま／＼かけあり、うち、武内の宿禰の繪馬に、仕掛けあり、一枚、木太刀五腰、皆々取れる樣にしてあり、よき所に、物草太郎、杖つツ張つて、立つてゐる。庭神樂にて、道具留まる。
ト向うよりお桐、お澤、仲居の形、お糸、振り袖、娘の形、辰彌、文字野、禿の形にて、連れ立ち出て、太郎を見て
いと　お桐どの、お澤どの、あれを見やんせ。
辰彌　首筋へ笠を着て、おかしい人ではないかいなア。
きり　あれがこの頃噂のある、物草とやらであらうぞいなア。
さわ　ほんにどうやら阿呆臭い、無茶臭い男、物草とはよう附けたわいなア。
いと　なんと寄つて慰みに、嬲つて見やうではないかいなア。
皆々　そりや、よからうわいなア。
ト太郎をぐるりと取り巻き

きり　コレ／＼、物草どの、笠も滿足に着たがよい事を、ドレ／＼、わたしが直してやらう。
ト笠に手をかけうとする。太郎、腹立て、杖にて叩き廻す。
オヽ、怖、物草が怒つたわいなア。
いと　オヽ、怒つた／＼。
ト手を叩き、おだてる。太郎、杖にて追ひ廻す。
呼び　佐々木六角、社參。
トこれにて皆々、逃げて入る。太郎、又杖を突つ張り、立つて居る。眞の神樂になる。向うより義賢、衣裳、羽織、下袴、次ぎに名古屋將監、衣裳、上下にて、御朱印の箱を三寶に乘せ、松井左近、白川藤、同じく衣裳上下、後より團八、赤面、くり下げ、敵役の拵らへ、刀を持ち、出で來る。ト梅松院、緋の衣、花の帽子にて、出迎ひ
梅松　これは義賢公には今日の御社參、御苦勞千萬に存じまする。
義賢　別當梅松院、出迎ひ祝着。
梅松　先づ／＼これへお通りあられませう。
ト矢張り右の鳴り物にて、各々本舞臺へ來て、義賢、床几にかゝる。皆々、並よく並ぶ。
將監　イヤナニ、別當、今日主人義賢公、この所へ御入りありしは、武將の御曹子於次丸久春公を、饗應の御催し
左近　加茂川御遊覽の御歸るさ、直さま當所へおなりの筈。
藤　いまだ御參詣はなされぬか、いかがでござるな。
梅松　久春公には、早先達て御參詣、只今神前に御入りでござりまする。
團八　然らば主人義賢公、只今御參着の趣き申し上げてよからう。
梅松　畏まつてござりまする。
久春　於次丸、それへ參つて面談申さう。
ト久春、衣裳、羽織、下袴、藤太郎、軍藏、團右衛門、大助、道芝、大國、傾城、お桐、お澤、辰彌、文字野、附いて出る。
義賢　久春どのにはお早き御入來、サヽ、これへ／＼。
久春　然らば、
ト久春、同じく床几に腰かける。女形、並よく並ぶ。
いと　お桐どの、最前の物草が、矢ッ張り立つてゐるわいなア。

藤太　いかさま見苦しい非人體の奴。
軍藏　御兩君のお目觸り、ソレ、團八、ぼつ立て召され。
團八　畏まつてござりまする。
　ト立たうとする。
將監　イヤ／＼、團八、待ちやれ。先日身共社參の折柄、茶店の女が噂を聞けば、きやつなか／＼風流な奴。御兩君のお慰み、これへ召し寄せたがよくござらう。
團八　いかゞ計らひませう。
義賢　いかさま、それも一興ならん。ソレ、女ども。
道大　アイ／＼、合點でござんす。
　ト道芝、大國、太郎が側へ行て
道芝　コレ、物草さん、殿さんが召しまする。
大國　ちやつとお側へ
兩人　ござんせいなア。
　ト太郎、ぼか／＼と眞中へ出る。
左近　ソレ、お莨盆。
禿兩　アイ、。
　ト禿、久春、義賢へ、結構なる莨盆を持ち行く。遠山、福花、太郎が側へ行て
遠山　コレ、こなさんはいづくの人で
福花　なんのために其やうに、突ッ立つて
兩人　ゐさんすえ。
太郎　おらが生れは信濃の國、新の郷と云ふ所。
遠山　そんなら内がござんすかえ。
太郎　あるとも／＼。家造りは方八丁、四方四面に築地を築き、三方に門を立て
　ト誂らへの鳴り物になる。
東西に池を掘り、中に小高き島を築き、松竹數多植ゑ被ひ、九間の反り橋かけ、渡り廊下十八間、いらか並べし細殿に、釣殿高殿の檜肌葺き、錦を以て天井張り、組み子の角々金銀の、金物瓔珞眞紅の御簾、花見の殿、月見の亭、侍ひ所に至るまで、殘る方なく建て並べ、結構美麗を盡したり。
　トこれにて鳴り物止む。
遠山　そんな結構な内にありながら、なんで内には居さんせぬえ。
太郎　サア、さうせうと思ふたばかり、その才覺がならぬゆゑ、よう／＼竹の柱を立て、藁葺きの三枚敷き、雨露は凌げど困つたものは、すぎわひ。作りせうにも田地はなし、商ひせうにも錢持たねば、この天神の庭へ來て、

主取りせいと國許の、堅い人が教へたから、斯うしてゐたがなんとした。

福花　そんなら主取りするのに、その竹杖が要るかえ。

太郎　これは形がむさいに依つて、吠へつく犬をどづくのぢや。

遠山　さうしていつ迄其やうに、立ちはだかつてゐるのぢやえ。

太郎　でも、果報は立つて待てぢや。

福花　何お云ひぢややら、そりや寐て待てぢやわいな。

太郎　それはとつと昔の譬へ、今時べら〳〵寐てゐたら、病ひ者は不肖者、碌な奴ぢやあるまいと、人が見立てゝ抱へぬわい。

遠山　さう云はしやんす所を聞けば、どうやら尤もさうにもあり

福花　又顔附きなら風俗なら、むまくさい所もあり

太郎　コレ、佛も同じ人間を、むまさうなとは、よう畜生にし居つたな。ムウおのれを

ト杖振り上げる。遠山、福花、アレと逃げる。太郎、上座のはしへ行つて、又つゝくり立つてゐる。

義賢　久春どの、御覧なされしか。昔唐土江陽の市に、利元と云ふ風人あつて、瓢を叩いて笑ひをなすと、俗字傳は書き殘せしが、それに等しき物草が有様。なか〳〵一興。イヤ、ナニ、物草とやら、今聞けばそちや主取りを望む由、なんと、この義賢に奉公を致さぬか。

太郎　抱へて下さるなら奉公しませう。

義賢　スリヤ、承知ぢやよな。

太郎　子供の手遊び

團八　とはどうぢや。

太郎　承知々々あわゝ。

團八　イヤ〳〵、御主人様、あゝ云ふたわけをお抱へなさるゝは、誠に國土の費えと申すもの、ナア、藤太郎どの。

藤太　いかさま、こりやよしになされたがよくござりませう。

義賢　イヽヤ、さに非ず。近き例しは楠正成、笑ひ男泣き男なんど、今太平とは申せども、又役に立つべき折もあらう。

太郎　ムウ、さうとも〳〵。

ト橋がゝりより、侍ひ一人出て

侍ひ　西國の御陣中より、久春公のお見舞ひとして、岸田

民部さま、只今お着きでござりまする。
義賢　ナニ、民部どの御上京とな。早くこれへ。
侍ひ　イザ、お通りあられませう、
民部　ハア、。
ト太鼓謠ひになり、橋がゝりより民部、衣裳、上下にて出る。
久春　岸田民部、上京大儀。
民部　ハッ、久吉公の御意を蒙り、堀尾帶刀拙者兩人、京着仕りし所、帶刀儀は御名代として禁廷へ參內。拙者は御機嫌伺ひのため、これまで推參仕る。
將監　遠路の御使者御苦勞千萬。
左蔀　先づ／＼あれへ。
民部　然らば御免下さりませう。
ト上座へ通り、座に着く。
義賢　民部どの上京に就き、幸ひの折柄、撫子、妹をこれへ伴へ。
撫子　畏まりました。
ト三味線入りの神樂になり、撫子、衣裳裲襠、蘆屋、さゝぎ附き、姫の形に改め出る。
將監　久春公へ申し上げまする。先達てこれなる蘆屋姫樣と、御婚禮約諾の砌り、卽ち聟引出として千町の御朱印は、姫君の乳人たる拙者が受取り、只今これへ持參仕りしは、この御朱印を天滿宮の寶前に捧げ、御武運長久のお神樂を奏し、姫君と內々の御祝言を取り結ばんため、御朱印持參仕つてござりまする。
義賢　將監が申す如く、幸ひ最上吉日なれば、當社の別殿にて祝言の壽。撫子、早く用意申し附けよ。
久春　イヤ、その儀は暫らくお待ち下されませう。
左近　何ゆゑお留め遊ばしますな。
久春　一旦約束はいたしたれども、身共は
ト蘆屋を見る。蘆屋、恥かしきこなし。又遠山を見て、思ひ入れ。遠山、つんとする。
サア、何事も父大領、御歸陣あつて上の事、先づそれ迄は取り結び、御延引に預かりたい。
ト義賢、ムッとする思ひ入れ。蘆屋、こなしあつて
蘆屋　不束な自らゆゑ、お氣に染まぬも無理ならねど、言ひ號けのその日より、思ひ焦れし久春さま、見捨てられたら自らは、なんとせう、どうせうぞいなう。
義賢　ヤア、未練なる繰り言。何は格別、久春どの、妹蘆屋が氣に入りませぬか。

久春　アイヤ、全く。
義賢　御返答いかゞでござるな。
民部　アイヤ〳〵、義賢どの、全く左樣ではござらねども、今公達の仰せも一理。朝鮮國の合戰も、十分味方の勝利となり、渡唐の諸將長崎まで、引取り次第大領にも、桃山へ御凱陣。
團右　さすれば今暫しの儀でござれば。
大助　先づ今日のお取り結びは
官藏　御遠慮遊ばされ、然るべう
四人　存じまする。
義賢　默れ方々、元この婚姻を一應の事と思ふか。先年江州長濱に於て、大領とかく云ふ義賢、しのぎをけづり對陣の折柄、瀧川一益の媒介にて、和睦の印しはあいやけの結び、その婚禮をいなまるゝ久春の心底、ムウ。
　　トきつとこなし。
團八　イヤ、こりや斯うでござりませう。當時眞柴久吉公、四海に羽をのす武將の威勢、公家高位に至るまで、お髭の塵取るこの時節、いかなる清花攝家の姬君でも、貰ひ兼ねぬ武將の勢ひ、御主人は江州一圓の太守、位階四品に過ぎざる身の上、それゆゑ不足に思し召し、變改の下心。なんと各々、左樣には思はつしやれぬか、
藤太　いかさま團八どのゝ詞の如く、一旦約束はなされたれど、只今にては武將と大名、御主人を侮つての計らひかと存じられまする。
軍藏　この御緣組みに異變あつては、第一に當家の名折れ
團八　この座を去らず久春公の、御心底をお糺しあつて
三人　然るべう存じまする。
撫子　お三人とも、そりや何を仰しやる。たとへ御主人義賢公、兎やかう仰せあらうとも、お宥め申すが家來の役。それになんぞや、燃ゆる火に薪を添ゆる今の詞。久春公、御主人樣、確執の仲となれば、お家の大事となれますがや。
三人　ぢやと申して。
撫子　但し又各々樣には、お家お國の騷動を、お好みなさるゝ御所存か。
三人　イヤ、全く
撫子　左樣でならば、お扣へなされてござりませ。
團八　ムウ、流石は四の宮どのゝ、御內室ほどあつて、ハテ、御發明な事だなア。
　　ト鳴り物止む。

撫子　御主人へ申し上げまする。御父大領久吉さま、一旦の御契約、久春公に於きましても、何しに御異變の思し召しが、ナア、申し……サア、恐れ乍ら、あらう樣には存じませぬ。さり乍ら嚴命にも勅諚にも、及ばぬものは妹脊の道。打和いでの取り結びは、殿達の御存じない事。幸ひこれなる島原の、傾城達にも相談の上、風波もなう納める樣に、ナウ、お傾城達。

遠山　戀一通りはわたし等が商賣、閻魔さまでも釋迦さまでも、手練手管で揉み込んで、粹に仕立てる廓の諸譯。たとへあの久さんが、傾貲嫉ふてゐさんしても、ついづるづるべつたりに、取り持ちするはわたしが胸に、何も氣遣ひな事はござんせんわいなア。

ト義賢、少し和いだろ思ひ入れあつて

義賢　いかさま一双の玉臂千人の枕と、唐土人の賦したる如く、又傾城の情は格別、ハテ、和らかなものぢやなア。

民部　先刻より承れば、氣の毒なるこの場の體。昔唐土玄宗皇帝、虚氏揚貴妃の戀爭ひに、紅白の花を以て女を集め、花軍の催し。それに習ふ此度の御縁談は、幸ひ幸ひ。

ト木太刀の繪馬を下ろし、眞中へ直し置き奉納の木太刀を以て、久春公の御家來と、義賢どのゝ家來の面々、一勝負いたされてよからう。

義賢　面白い。今四海太平とは云ひながら、治に居て忘れぬ武士の嗜み。軍藏始め用意いたせ。

三人　畏まつてござりまする。

久春　近習の者、立合へ。

四人　ハツ。

左近　お茶の用意。

撫子　そのお茶辨當これへ。

ト白囃子になる。ト上下侍ひ、撫子が側へ茶辨當直す。撫子、出て、出すこなし。お桐、お澤、莨盆持ち行く。この間に大助、軍藏、用意する。兩人、前へ出て、辭儀する。木太刀を取り、双方きつと別れ、見得になる。ト白囃子うちかける。立ち廻りあつて、軍藏、打ち据ゑらるゝ。

久春　大助、出かした。

平左　ヤア、お手柄でござる／＼。

ト義賢、不興の體にて、莨のみゐる。此うち撫子、茶を立て、久春へ持ち行く。藤太郎、用意して、向うへ

出て
藤太　若輩なれど長谷部藤太郎、相手は選ばぬ。イザ、お
越しなされい。
ト團右衛門、出て
團右　熊井團右衛門、お相手になり申さう。
ト互ひに辭儀して、木太刀を取る。又白囃子になる。
立ち廻りあつて、藤太郎、打ち負ける。
民部　團右衛門どの、けうとい〳〵、驚き入りました。
ト義賢、愈々ムツとするこなし。
義賢　藤太郎、見苦しい負けざま、不覺千萬。團八、早く
用意せい。早く〳〵。
團八　ハツ。
ト團八、用意にかゝる。撫子、茶碗を義賢へ持ち行
く。義賢、茶碗引つたくる。撫子、憫り、こちらへ來
る。團八、用意して、ずつと前へ出て
團八　若輩の軍藏藤太郎を、相手にするとは又格別、この
團八は少しばかり骨がある。一人づゝは面倒だ。殘りの
人數は何人でも、一緒にからげて身が相手だ。きり〳〵
そこへ出さつしやい。
官藏　憎い廣言、その息の根

平内　この平内が留めて見せう。
官藏　この官藏が手のうちは
兩人　ヤア。
トつか〳〵と寄つて、双方より打つてかゝるを、よろ
しく留め
團八　どつこい。そんな事では行かぬわい。
兩人　所を斯う。
ト又立つて
團八　へ、、、、、お身達が相手にならうとは、蟷螂が
斧、富士山をせゝる蟻同然。
兩人　何を。
トなんの苦もなく、團八が木太刀叩き落として、双方
より散々に打ち据ゑる。
團八　アイタ、、、、手並は見えた。負けだ〳〵。
ト義賢、くわッと急き込み、刀引き提げ、つゝと立つ
を、左近、蔀、兩袖にすがつて
兩人　君、暫らく〳〵。
左近　ハツ、只今の立合ひは、申さば當座の慰み同然。
蔀　御家來の不覺も恥辱に似て恥辱にあらず。
左近　かゝる座興に御主人の手を下されんは匹夫の業、先

づ先づ。

兩人　お鎭まりあられませう。

ト左右より、無理に下に置く。義賢、吐息つく。ト音樂になり、梅松院、手をつき

梅松　早奉幣の舞樂の始まり、拜殿へお入りあつて、然るべう存じまする。

ト義賢、ついと入る。皆々、顏見合はせ、こなし。

久春　民部、皆の者。

民部　先づ

皆々　お入りあられませう。

ト唄になり、皆々、入る。ト引違へて、早枝、誰が袖の繪馬を持ち出て、こなし。

早枝　ほんに戀する身の上ほど、世に切ない者があらうか。どうした事の緣ぢややら、生駒歌之助さまを思ひ初め、人目を包む忍び逢ひ、末は夫婦になりたいと、心の願ひを神前へ、掛け奉る誰が袖のこの繪馬、どうぞよい所へかけたいものぢやが。

トいろ／＼見廻し、こなしあつて、床几を踏まへにして、よき所へ繪馬をかけ、こちらへ來て、いろ／＼見ろ。ト奥より、歌之助、出て

歌之　ヤレ／＼、怠屈や／＼。ドレ、ちつとそこ等を見廻して來うか。

ト云ひ／＼、出て來て、早枝を見て

誰れかと思へば早枝どの。

早枝　歌之助さま。

歌之　最前から見えぬと思ふたが、こなた爰に何してござつた。

早枝　アイ、わたしは、アノ、何して居りました。

歌之　何してゐた。ハア、聞こえた。扨ては今日のお供を幸ひに、この北野の境内へ必らず逢ひに來て下さんせなぞと約束した事があつて、それで爰に何してゐたのか。

早枝　アイ、お前樣の推量の通り、わたしや逢ひたい人があつて

歌之　そりやこそなア。して、その先の相手と云ふは

トつゝと側へ行つて

早枝　お前さんぢやわいなア。

ト縋り附くを、拂ひ除け

歌之　オツト、つまんで貰ふまい。今日の振り袖に油斷したら、どんな目に遭はうも知れぬ。オヽ、怖やの／＼。

早枝　エヽ、つゝともう、其やうな無理ばつかり。名古屋

將監と云ふ武士の娘、一旦云ひ交はしたお前を除け、外へ心を移さうか。コレ、疑ひ晴らして下さんせいなア。

歌之　なんぼうでもその手は食はぬ。十里結ばい、そつちでせ。

早枝　そんならどの樣に言ひ譯しても

歌之　脇をお尋ねなされませ。

早枝　エヽ、つゝともう、コレイナ、コレ。

トいろ〳〵あつて、太郎を見て、ちよつと來て下さんせと、眞中へ連れて來て

物草どの、こなさんはひよかすかと、人の心を慰めるが上手ぢやげな。どうぞ機嫌の直る樣に、詫び言をして下さんせいなア。

太郎　そりや坊主の褌ぢや。

早枝　エヽ。

太郎　ハテ、してもせいでもぢや。

早枝　何を云はしやんすやら。

遠山　アイ〳〵、そりや合點ぢやわいなア。

ト云ひ〳〵出て來て

歌さん、爰にかいなア。わたしやお前に

ト寄らうとするを、歌之助、ちやつと脇へ寄つて

歌之　これは〳〵遠山どの、今日は主人の饗應、御苦勞に存じまする。

ト慇懃に云ふ。遠山もこなしあつて

遠山　お前さんにも御苦勞に存じまするでござんすでござんすわいなア。

ト慇懃にする。ト寄らうとするを、歌之助、ちやつと外らして

歌之　結構な天氣さまでござりまする。

早枝　左樣でござりまする。結構な天氣でござりまする。

ト遠山、こなしあつて、太郎が側へ行つて

遠山　一寸來て下さんせ。

ト眞中へ連れて出て

コレ、お前はなんでも物によそへて云ふ事が上手ぢやさうな。わたしが問ふ事があるが、物によそへて

ト歌之助へかけて

云ふて聞かして下さんせえ。

太郎　生粹の鼻唄。

遠山　エヽ。

太郎　云ふて聞かさう〳〵。

遠山　わたしが深う二世までと云ひ交はしたお方がござん

すが、そのお方に馴れ初めは、去年の彌生の半ばの事。
　トこれより町盡しの三味線になる。
見上げるあなたに風ぞ吹く。
太郎　エ、、嵐山の花見に行たか。
　ト歌之助、前へ出て
歌之　その時わし等も一僕に、さゝへ盃取り持たせ、王と王との金勝負。
　ト床几へ腰かける。
太郎　王と王、金勝負。エ、、床几へかけたと云ふ事か。
　ト早枝、同じくこなしあつて
早枝　幕の隙洩る顔見れば
　ト歌之助を見て
さつてもけうとい好い殿御、おはぐろ嫌ふしたし物。
太郎　ほうれん草の事であらう。
遠山　ぞつとする程戀風に、心のうちは春の雪。
太郎　たまらぬ樣になつたか〳〵。
歌之　下地が好きの道なれば、在所の餅搗き見るやうに
太郎　ぬつと談合をおやしたか。
早枝　わたしが思ひは瀧川の、瀧に繪畫きし判じ物。
太郎　鯉は戀ぢやと云ふ事か。

　ト遠山、太郎が胸倉取る。太郎、悄りする。鳴り物止まる。
遠山　コレ、爰な惡性男、いかにわたしが樣な女房ぢやと思ふて、そなたより外に可愛い者はないと云ふて置いて、アノ
　ト早枝を見て
娘さんづらと、よう約束しやつたなう。あんまりぢや、あんまりぢやわいなう。
　トいろ〳〵振り廻す、ト歌之助、太郎をこちらへ引き廻して
歌之　イヤ、こいつが〳〵、云はして置けばさま〴〵の當て事。おのれ、重ね〴〵男に恥を與へるな。
太郎　そりや雨降りのひぜん病み、
歌之　とはどうぢや。
太郎　ハテ、掻いては掻き〳〵。
　ト早枝、太郎を突き退け、歌之助が手を取り
早枝　爰に置く事はならぬわいなア。
太郎　そりや請けの惡い質屋。
　ト遠山、又歌之助が手を取る。
遠山　オ、、厚釜しい、さうはわたしがさゝんわいなア。

早枝　こつちへござんせ。
遠山　イヤ、こつちへ。
ト歌之助を引張る。歌之助、そつと抜け、太郎を突き
つけ、逃げて入る。
太郎　てうさや、ようさや〳〵。
ト庭神樂になる。遠山、早枝、太郎を双方へいろ〳〵
引張り、ト〻兩人、心附き
兩人　エヽ、なんの事ぢやいなア。
ト突き飛ばし、奥へ入る。跡に太郎、ふら〳〵になつ
てゐる。奥より藤太郎、軍藏、侍ひ二人連れ出て
軍藏　ヤイ〳〵、物草、そちやまだこれに居るな。
太郎　オヽ、居るとも〳〵。
軍藏　主人義賢公の仰せには、これより直さま御本國、江
州表へ遣はせよとの御意。
藤太　さりながら、そちやなんぞ申し立てに相成る、藝能
でもあるかやい。
太郎　ある〳〵。俺一人大將になる藝がある。
軍藏　こいつ方途もない大言、大將とならんず者は、智仁
勇のうち一つ缺けても、大將とは云はれぬが、見事その
覺えがあるか。

太郎　今爰でして見せうか。
藤太　器量の程が見たい〳〵。
ト太郎、床几へ上がり、見得する。
軍藏　そりや何をする。
太郎　ハテ、お山の大將俺一人ぢや。
藤太　ハヽヽヽ、こいつ取り所もない狼藉者、併し御主
人の御意なれば、召し連れ本國へ遣はさずばなりますま
い。
軍藏　左樣でござる。コリヤ、物草、これより直さま御本
國へ參らば、其方が立身、悦べ〳〵。
太郎　悦ぶ〳〵。
藤太　ソレ、兩人、同道しやれ。
侍一　ハツ。物草どの
侍二　歩まつしやれ。
太郎　イヤ、歩るいて行くのはしんどい。
軍藏　こいつ樣々の勝手を云ひ居る。然らば駕籠でも
申し附けうか。
太郎　駕籠に乘るは冷たい。
軍藏　ハテ、よく小言をわかすわい。
太郎　駕籠乘り屋の商賣は冷たい商賣ぢや、

藤太　然らば馬がよいか。
太郎　馬は怖い。
藤太　然らば又何が望みぢや。
太郎　車に乘つて行きたい。
藤太　それが急に調ふものか。
太郎　こなた衆二人して、手車でやつてくれ。
軍藏　云はせて置けば樣々のたわ言。藤太郎どの、捨て置
きませうか。
藤太　イヤ〳〵、左樣でござらぬ。御主人の御懇望、彼れ
の望みの通り致して遣はさうではござらぬか。
軍藏　貴殿が左樣に御意あれば、是非に及ばぬ。兎も角も
ト侍ひ二人、手車して
侍一　サア、きり〳〵と
侍二　乘り居らう。
ト太郎、手車に乘る。庭神樂打ちかける。
太郎　こりや誰アれが手ェ車。
侍兩　エヽ、忌々しい。
太郎　物草太郎が手ェ車。
ト囃し立て、兩人、太郎を連れて入る。
藤太　世には稀有な奴もあればあるものでござる。

軍藏　左樣でござる。それは格別、民部さまへ彼の一儀を
いかやうとも申し談じませう。
藤太　軍藏どの、かうござれ。
ト唄になり、兩人、奧へ入る。トあと庭神樂。向うよ
り佐々木彈正、ぶつ裂き野袴、深編笠にて出て、本舞
臺へ來て、あたり見廻し
彈正　誠なるかな、この北野の社は、天滿御神の跡を垂
れ、在すが如き神威の榮え、森も樹立ちて神さびて、ハ
テ、神國の奇特ぢやよなア。
トこなしある。奧より民部、出る。
こなた樣は岸田民部どのではござりませぬか。
民部　さう云ふ貴殿は。
彈正　イヤ、佐々木彈正でござる。
民部　誠に彈正。一別以來うち絕え申した。先達てお身の
內通によつて、義賢を罪に落とさんと、內藏之助なぞと
云ひ合はせ、六角に外れ矢を與へ、かけ鳥も射損じさせ、
腹切らさんと思ひの外
彈正　恥も恥とも思はぬ義賢、今に於いて無事に存命。そ
れゆゑ拙者工夫の巡らし、領分の百姓に運上過役を云ひ
つけ、即ちこれ義賢が業なりと毒氣を吹き込み、一揆を

起させん我が計略。
民部　武將の御前は某が、惡しざまに言上したれば、久吉公の思し召しは散々。義賢自滅のその跡は、所領は我らへ彈正、お手前へ申し下して遣はさう。
彈正　大望だに成就いたさば、お禮はきつと申しませう。まだ何か手ぬかりなき樣。
民部　申し合はす仔細もあれど
彈正　爰は人立ち、委細の儀は
民部　別當方にて密かに内談。
彈正　然らば民部さま。
民部　彈正、來やれ。
彈正　先づござりませう。
ト唄になり、兩人、奧へ入る。ト神樂になり、奧より藤太郎、御朱印の袋を盜んで出て
藤太　神拜のどさくさ紛れ、してやつたこの朱印、兼ねて伯父貴の大望に、一味したこの藤太郎。これを彈正さまへ差上げて、立身出世忝い。
ト此うち團八、後へ出てゐて
團八　藤太郎どの〳〵。
藤太　ヤア、そちや團八。
團八　うまい事さつしやるなう。
藤太　スリヤ、今の樣子を
團八　とつくりと見て置いた。
藤太　それを知つたら
ト切つてかゝるを、よろしく留め
團八　コレ、氣遣ひせまい、同腹中。
藤太　ヤ、なんと。
團八　これを見やれ。
トそくたくを見せる。藤太郎讀んで
藤太　コリヤこれ彈正さまより一味の者へ下さるゝそくたく。そんならお身も
團八　一味連判。
藤太　ヤレ、嬉しや。
團八　今貴殿が物した物、所持召さるゝは危ない〳〵。
藤太　サア、身も左樣に思ふゆゑ、隱し所は
團八　幸ひの繪馬のうち。
藤太　いかさま、こりや氣附かぬ隱し所。
團八　拙者も共々にお手傳ひ申しませう。
ト兩人して武内の繪馬を下ろし、朱印を隱す。此うち上手より歌之助、下手より軍藏、覗き、兩人、顏見合

はせ、ちやつと引込む。團八、藤太郎、よろしくあつ
て

團八　して、朱印の詮議にならば、いかゞせうと思はつしやる。

藤太　それをぬかつてよいものか。兼ねて身共名古屋將監が娘、腰元の早枝に執心、さまざまに口說けども承知せぬ筈、生駒歌之助めとちよ〳〵くつて居る。それゆゑ先達て、これ見やれ、

ト印籠を見せ

この如く、歌之助が所持の印籠を、ちよびと上げて置いたれば

團八　それを證據に歌之助めを、仕舞うてとると云ふ計略か。

藤太　いかにも。それに就いて

ト云ひかける。ト内にて

軍藏　團八どの〳〵。

團八　オイ〳〵、それへ參る〳〵。

軍藏　藤太郎どの〳〵。

藤太　それへ參る〳〵。

軍藏　團八どの〳〵、藤太郎どの〳〵。

兩人　これは又忙しない。

ト奧へ入る。ト入違へて軍藏、出て、右の繪馬を下ろし、袋より朱印を出し、跡へ扇を入れ、朱印を取つてもとの樣にかける。この時、誰か袖の繪馬をふつと見て、こなしあつてはづし取り

軍藏　これを斯うして斯うやつて、チンチンチツチツンチチン。

ト拍子間づいて入る。ト在鄉唄になり、向うより雲助一、二、駕籠舁いて出る。門兵衞、博奕打ちの拵へ、これ荷うて出る。本舞臺にて、駕籠下ろし

雲一　サア、約束の所ぢや。親方、下りてやらんせ。これはしたり、よう寢入つてゐらるゝ。コレ、親方。

雲兩　起きんかいなう〳〵。

トやかましう云ふ。

門兵　エヽ、ぐつたりとやつてゐるものを、あた喧しい、何ぬかすのぢや。

雲一　でも、爰が極めの北野ぢやわいの。

門兵　もう來たか。でも、忌々しい、早い駕籠ぢや。俺やもつと寐にやならぬわい。

雲一　エヽ、じやら〳〵云はずと、早う下りて下んせ。戻り

を乘せにやならぬわい。
門兵　アダどんくさい。
　ト伸びしい／＼、駕籠より出て
　ドレ、目覺しに、豆腐で一杯ひつかけうか。皆大儀であつた。
　ト行かうとする。
雲二　コレ／＼、親方、駕籠賃はどうぢやいの。
門兵　ハアヽ、わいら駕籠賃取る積りか。
雲一　こな和郎は何を云ふぞい。駕籠賃貰はいで、こちとらは何で食ふぞい。
門兵　こりや尤もぢや。して、なんぼぢや。
雲二　ハテ、決めた通り三百かい。
門兵　錢があるなら釣り二百おこせ。
雲一　銀子で下んすか。忝い。ドレ／＼。
　ト合羽の莨入れより錢を二百出して、渡す。
門兵　よいワ。
　ト懐中して
　大儀であつた。休んでくれ。
　ト又行かうとする。
雲一　ア、コレ／＼、銀子はどうぢやぞい。

門兵　わい等最前蹴上げでなんと云ふた。やい親方、駕籠やろと云ふたぞよ。
雲二　アイ、云ひました。
門兵　ハテ、やらうと云ふたに依つて、駕籠は俺が貰ふたのぢや。
雲二　エヽ。
門兵　そんならこの駕籠は、マア、俺が物かい。
雲一　されば
門兵　なんぼ捨て賣りにしても、五百が物はあらうかい。
雲二　そんなものぢや。
門兵　所で三條から爰まで、俺を乘せて來た賃が三百ぢや。
雲二　三百ぢや。
門兵　駕籠代の五百のうちで、その三百を引くワ。
雲二　引くワ。
門兵　まだ後に二百殘らうがな。
雲一　さうかいの。
門兵　そこでこの二百の錢を俺が取る。
雲二　取るワ。
門兵　それでわれ等が帳は丁度一杯の算用で

雲一　いかさまさうかいの。そんなら相棒、もう去なうかい。
雲二　去なう〳〵。親方、段々忝なうごんす。
門兵　早う去ね〳〵。
ト駕籠をかたげ
雲一　どうやら算用が合はぬ様な。
トぼやき〳〵入る。
門兵　ハヽヽヽヽ、うまい奴ぢや。マア、酒だけちよろまかした。所で今日この北野の社へ、佐々木家の伯父彈正さまがござる筈、どうぞ逢ひたいものぢやが。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。ト合ひ方になり、お宮、世話形に改め、お桐つれ、出て
みや　この間から段々お世話さまでござんした。
きり　そんならもう去なしやんすかいなア。
みや　太夫さん方へ、よい様に仰しやつて下さりませ。
きり　どうぞ又廓へも遊びにござんせえ。ようお出でたえ。
トお桐入る。門兵衛、お宮を見て
門兵　ヤア、わりやお宮ぢやないか。
みや　オヽ、門兵衛さん、お前はマア、爰へ何しにござんしたぞいなア。
門兵　俺よりはおのれ、この間から內をほつたらかして置いて、京三界へ何しに來たのぢや。
みや　わたしかえ。わしやちつと叶はぬ事があつて、金八どのに譯云ふて、二三日の逗留。
門兵　どうで碌な事ではあるまいが、それは格別、よい所に逢ふた。用がある。マア、下に居い。
トお宮、下に居る。合ひ方。
みや　用とはなんでござんすえ。
門兵　イヤ。外の事でもないが、金八に貸した銀子、今入用な、今返せ。
みや　エヽモ、藪から棒な事云はしやんす。內でさへ調ひ兼ね、どうせう斯うせうと思ふてゐるもの、どうして爰で返されるものぞいなア。一體この銀子は、母さんが大病の時、藥代に遣ふた銀子。お前のためにも母さんは現在の伯母ではないかいなア。道を云はばお前の方からもう返さいでも大事ないと、云はんせにやならぬ所。金八どのは正直者、月々に高利を取り、借りてある金なれば、恩に着る事はない。お前もちつとは義理引きを思ふて見たがよいわいなア。

門兵　へ、、、、、ようべり／＼と喋るなア。親であらうが伯母であらうが、そんな見界がある門兵衞ぢやない。貸した物、取らいでわい。

みや　サイナア、返すまいと云ふにこそ。ハテ、才覺さへ出來れば、今でも銀子は返すわいなア。

門兵　阿呆つくせ。いつ工面が出來るやら、判りもせぬ雲を當、便々と待つてゐられうかい。

みや　でも、ないものを戻せと云はしやんすは、こりやこなさんの無理と云ふもの。

門兵　いかさま、ない物を返せはこつちが無理。こりや一番誤つた。そんなら金があつたらば

みや　そりや今でも戻すわいなア。

門兵　面白い。そこにある銀子、返せ。

みや　どこに銀子があるぞいなア。

門兵　オヽ、その金は、爰にあるわい。

ト抱きついて、こなし。

みや　アヽ、滅相な。何をするのぢやぞいなア。

門兵　何をせうぞ。おのれが金を受取るのぢや。丸が厭ならせめて半金、それもならずばつい一寸、手附けなりとも

ト又抱き附きに行く。お宮、拂ひのけ

みや　エヽ、あた不作法な。わたしには金八と云ふて、れつきとした、しかもよい男がござんす。てんごうして下さんすな。

門兵　男があらうが何があらうが、構ふ事はない。幸ひあたりに人もなし、俺が云ふ樣になれやい。

ト帶を解きにかゝる。

みや　惡い事しやんすないなア。

門兵　させやい。

みや　厭ぢやわいなア。

ト門兵衞、帶を持つて引張り廻す。此うち金八、返し前の形にて、橋がゝりより出て、眞中へずつと入る。

門兵　ヤア、わりや金八。

みや　こちの人、よう來て下さんしたなア。

金八　門兵衞どの、見りや女房どもを捕へて、コリヤ、なんとさつしやるのぢや。

門兵　イヤサ、これは、なんぢやわい。

金八　貸し借りは相對。京三界の人中で、手籠めにしても大事ないか。

みや　アイ、さうでござんす。くつと云ふて下さんせいな

ア。

金八　エヽ喧しい、默つてゐい。

門兵　惡けりや俺が謝るが、銀子のせりふはどうぞ。

金八　銀子返さう。

門兵　ヤ。

金八　五十匁釣りおこしや。

門兵　釣りとはなんの事ぢや。

金八　ハテ、間男代のお定まりは三百匁、貴樣に借りた二百五十匁、差引きをして算用すりやア、まだこつちへ五十匁の釣りを取らにやならぬのぢや。

門兵　うまい事ぬかすわい。間男した覺えがなけりや、なんの爲に三百出さう。馬鹿盡くせ。

金八　ムウ、その覺えがない者が、なんで又お宮が帶を解いたのぢや。

門兵　サアそれは

金八　サア〳〵〳〵、と取ッ詰め所なれど、借りた物を返さぬと云ふはこつちが無理。長うとは云ふまい、ちつと心當りの事もあれば、晦日には戻さう程に、どうぞそれ迄待つて下され。

門兵　若し晦日に出來ぬ時は、あのお宮を引張つて去ぬるが、その時必らずいざこざ云ふなよ。

金八　そりやその時の事よ。

門兵　そんなら金八。

金八　門兵衞どん。

門兵　きつと詞を番ふたぞよ。

ト唄になり、門兵衞、こなしあつて、奧へ入る。金八跡見送り

金八　ぬかす事なら、面附きなら、金輪際すね性根の惡い奴。

みや　金八どの、お前マア思ひがけもない、どうして上つてござんしたなア。

金八　我が身も知つてゐやる通り、後の月のもや〳〵、一揆の中へ取り込まれ、拔けうと云ふても拔けさせず、是非なう上つて來る事は來ても、どうぞ騒動にならぬやう、殿樣へ敵對せぬやうにと、色々心盡してゐるわい。

みや　わたしも歌之助さまのお目にかゝり、身の上の難儀申したれば、親旦那樣へ勘當の執成しをしてやらうと、それは〳〵御親切な、お情深いお詞。

金八　忝い〳〵。幸ひ此度の一揆の事、密かに申し上げたなら、それが功にならうかいなう。

みや　いかさまなア。いつそ歎之助さまを呼びまして、その事を申し上げて來うわいなア。

ト行かうとする。

金八　イヤ、待ちや〳〵、滅多には申されぬわいの。

みや　そりや又なんでえ。

金八　俺れが口から洩れた事が、一揆の中へ知れるが最後、在所にござる母者人、定めて生けては置き居るまい。義理ある大事の母者人、俺が舌三寸で若しもの事があつた時は、孝行の道も濟まず、ア、コレ、難儀な事ではあるわい。

みや　ほんにもう、お前の樣な孝行なお人が、廣い世界に又とあらうか。アノ、只わしは母さんを、常住機嫌を取りつけ、それに此やうな難儀な事の出來ると云ふは、勿體ない事乍ら、天神さまも聞こえぬわいなア。善いは善い、惡いは惡いと、なぜ筋道を分けては下さんせぬ。思へばあんまりお胴慾ぢや、胴慾でござりまするわいなア。

金八　これはしたり、勿體ない。いかに我が身が辛いとて天神さまの知らしやつた事か。皆先の世の因緣づく。必らず悔みに思はぬがよいわいの。

みや　それはさうと、お前マア小光や母さんは、どうして置かんした。

金八　どうと云ふたら、一揆の奴等が有無を云はさず、引立てゝ來居つたゆゑ、母者人についちよつと云ふたばかりぢや。

みや　可哀さうに、小光が嘸尋ねてゐるであらう。ちやつと去んでやらんせいなア。

金八　サア、去なうと云ふたて、滅多に去なしは居るまい。われ去んでくれ。

みや　そんならさうせうかいなア。

金八　早う去ね〳〵。

みや　アイ〳〵。

ト花道の附け際まで行く。

金八　コリヤ、隨分母者人に氣を附けよ。粗末にしたら聞かぬぞ。

みや　そりや合點ぢやが、こちの人

金八　なんぢや。

みや　お前ばかり京に殘つて、又買ひに行くのぢやないかえ。

金八　何をいやい。

みや　おやまさんを

金八　エヽ、何をぬかし居るやら。

みや　ホヽヽヽ、ドリヤ、去なうか。

ト唄になり、お宮、向うへ入る。金八、跡を見送り

金八　ヤイ／＼、コリヤ、母者人に土產買ふて去ねよ。エ

エ、とつくり云ひつけたらよかつたもの、大方氣が附かぬであらう。どんな事した。

ト云ふてゐるうち、橋がゝりより庄右衛門、出て

庄右　どこへうせた知らん。憎い奴ぢや。

ト云ひ／＼、金八を見附け

金八か、われは／＼、よう拔けそをして、一ぺんと尋ねさしたなア。一人でも缺けては外の奴等が合點せぬ。サア、來い／＼。

金八　なんの拔けたのではござりませぬが、ちつと爰に據ろない

庄右　命を捨てた今度の固め、外に用のあらう筈はない。來いやい。

金八　サア、參りまするは參りまするが。

庄右　ハテ、來いと云ふのに。

ト無理に引立て、橋がゝりへ入る。始終、庭神樂なり

ト少しバタ／＼にて、撫子、團八が手を捻ぢ上げ、出る。

團八　アイタヽヽヽ、これサ／＼、撫子どの、ちつとゆるめて下さい。手が折れるわい、腕がもげるわい。

撫子　左ほど苦しくば、なぜてんごうさつしやつたぞ。

團八　それはほんの座興でござる。誤りました／＼。

撫子　イヽヤ、座興でない。後家同然の撫子と侮つての仕業か。生死の程は知らねども、四の宮藏人と云ふ武士の妻でござるぞ。

團八　左樣でござる／＼。

撫子　この後不作法のない樣に、ちつと心に覺えてござれ。

ト取つて投げる。ト奧より、バタ／＼にて、遠山、逃げて出るを、義賢、拔身にて、追ひかけ出る。女形皆皆、留めて出る。

女皆　マア／＼、待たしやんせいなア。

義賢　妹、蘆屋が仇となる女め、ぶつ放す。爰放せ。

ト女形を千鳥に拂ひ、遠山を追ひつめる。撫子、向うへ立ち塞がり、キツと留め

撫子　御主人樣、こりや何ゆゑのお手討ちでござりまする

な。

義賢　撫子、久春が妹を忌み嫌ふ、元はと云へばその女に執心ゆゑ。ぶつ放して災ひの根を斷つ所存。爰放せ、

撫子　アイヤ、そりや御無體でござりまする。

義賢　なんと。

撫子　たとへあの傾城が、久春さまのお目に留まり、お手かけらるゝと申したとて、諸侯に七人許しの本文。殊に以て傾城は、一夜流れ一夜妻、これがあながち姫君の、御恥辱になるでもなし。先づ／＼お靜まり、あられませう、

ト義賢、じつと靜まり、床几へ腰かけ

義賢　杯持て。

きり　アイアイ。

ト大杯、銚子を持ち行く。トバタ／＼にて、軍藏、出て

軍藏　一大事でござります。神前に捧げありし一千町の御朱印が、紛失仕りましてござりまする。

撫子　ナニ、御朱印が紛失とや。

ト奥より、久春、民部、四人の諸士附き添ひ出る。將監も續いて出る。

民部　義賢どの、御引出たる御朱印の紛失、愈々以て久春公の御祝言は叶ふまい。御料簡いかゞでござるな。

ト義賢、構はず杯を受けて居る。

義賢　丁度注げやい。

トきつと云ふ。將監、こなしあつて

將監　朱印の紛失は、差當つて預かり奉る拙者が誤り、申譯には、ソレ。

ト腹切らうとする。

義賢　將監待て。私しに腹切つて、紛失した朱印が出るかたわけ者めが。

ト叱り附け、酒を呑む。

軍藏　御主人の御意なれど、科極まつた名古屋將監。手短かにいつそ

ト將監へ切りかけうとする。將監、キッと留め

將監　若輩者の分として、この將監を介錯とは、慮外千萬

軍藏　何を。

ト又かゝる。將監、首筋取つて引き附ける。ト將監、恐れ、身を慄はすこなし、軍藏も恟りの思ひ入れにて

ハテ、命冥加な將監ぢやアなア。

ト義賢、これにキッと目を附ける。トばた／＼にて、

ト藤太郎、歌之助を引立て、出る。

歌之　長谷部藤太郎、コリヤ、拙者をなんとなさるゝ。

藤太　御朱印紛失の場所に、落ち散りありしは其方が所持の印籠。さすれば盗人は歌之助、其方に相違ない。

歌之　スリヤ、印籠の證據を以て。ムウ、身に取つて覺えはなけれど。差當るこの場の虚名、晴らす仕樣は、幸ひ幸ひ。

ト繪馬に目を附け、取りに行かうとする。團八、周章て、留める。藤太郎、こなしある。

團八　ア、コレ〳〵、歌之助どの、その繪馬に手をかけてどうさつしやる。

歌之　只今聞かつしやる通り、身に覺えなき盗人の虚名、差當つて言譯なければ、幸ひのこの繪馬、傳へ聞く武内の神は、逆意ありとの虚名を受け、大小の神祇に誓ひを立てる。これ日本誓紙の始まり。この歌之助も身に取つて覺えなき申譯に、この繪馬を打割つて、神々へ誓ひを奉る。そこ退かれい。

ト突き退け、行かうとする。團八、周章て、留め

團八　アヽ、そりや惡い〳〵。ずんど惡い。

歌之　なぜ惡うござるな。

團八　ヤ、サヽ、その惡いはかうでござる。神に誓ひを立てるなぞとは、そりやずつと昔の事。當世その樣な甘茶な事で、扨てはさうかと誰れが得心するものがあらう益ない事ぢや、止しにさつしやい。

歌之　たとへ疑ひは晴れずとも、畢竟拙者が心を濟ますためでござるワ。

ト又行かうとする。

團八　これは又情ない。さりとては、それは古いと云ふに

撫子　コレ〳〵、團八どの、よしない事に差出ずと、扣へて捨てゝ置いたがよいわいなう。

團八　エ、滅相な。これ捨て置いてたまるものか。

歌之　是非とも拙者が

ト行かうとするゆゑ。團八、是非なう首筋取つて引き戻す。歌之助、引き附けられながら、エイと手裏劍打つ。繪馬、バツタリ落ちて。袋入りの朱印出る。

歌之　扨てこそ御朱印。

ト取りに行くを

團八　南無三、それを

トかゝらうとする。撫子、引き廻して、ポンと當てる歌之助、袋を取り上げ、改め見て

歌之　ヤア。こりや御朱印が
撫子　何とぞ致しましたか。
歌之　かやうな物に變つてござりまする。
ト藤太郎、團八も、恟りして
皆々　ヤア。
ト驚く。
民部　朱印紛失に極まれば、愈々婚儀は調ひませぬ。
藤太　サア、歌之助、お身が盜んだ朱印を出さつしやれ。
歌之　イヽヤ、盜人はそれなる團八。
ト撫子、團八を引き起こし
撫子　誠の御朱印はどこへやつた。
團八　物した物を物しられ、その行く先まで知らうかい。
藤撫　白狀せずば拷問せうか。
團八　サア、それは
藤撫　言譯あるか。
團八　サア、それは
四人　サア〳〵〳〵。
ト此うち始終、軍藏が肩へ、鶯とまる事度々あるべし
義賢、構はず酒呑んでゐて
義賢　ヤア、喧しいわい。

將監　でも、御朱印のあり所が知れねば
撫藤　御婚禮も叶はず
民部　武將への申譯、義賢、お腹召されずばなるまい。
義賢　佐々木六角が腹は一つほかござらぬ。滅多には切り
ますまい。
民部　して、武將への申譯は
義賢　軍藏、參れ。
軍藏　ハツ。
ト何心なく側へ行くを、義賢、拔き打ちにポンと切る
皆々、恟り。
皆々　ヤア、これは
ト義賢、物をも云はず立ち寄つて、死骸の懷中より、
誠の朱印を引き出し
義賢　妹蘆屋。
蘆屋　ハツ。
義賢　ソレ。
ト差し出す。蘆屋、取つて、とくと見て
蘆屋　疑ひもなき一千町の御朱印。
義賢　民部どの、朱印が出ても祝言は調ひませぬか。
民部　サ、それは

義賢　久春どの、なんとでござる
久春　此うへは兎も角も、お詞は背きますまい。
撫子　姫君様、お聞きあられましたか。
蘆屋　兄上様のお情ゆゑ、思ひが叶ふて、エエ、嬉しうござんすわいなア。
撫子　又もやお心の變らぬうち、早速のお取り結びは、別當どのゝ座敷に於いて。
歌之　待ち女郎は幸ひの島原の傾城どの。
義賢　乳人なれば名古屋將監、朱印の守護して何かの媒介
將監　畏まつてござりまする。
トちやん／＼にて、暮れ六つ鳴る。
歌之　最早黄昏。
民部　この民部は宿所へ歸り、何かは明日申し談じませう
歌之　久春公、姫君様。
撫子　傾城達も皆一緒に
遠山　お座敷へ連らなつて
福花　及ばずながら御祝言の
女皆　お取り持ちをせうわいなア。
民部　然らば此まゝ、義賢どの。
義賢　民部どの。

兩人　お別れ申す。
歌之　御兩所様には、先づ
皆々　お入りあられませう。
ト唄になり、一件皆々、奥へ入る。民部橋がゝりへ入る。義賢、團八、藤太郎、殘る。
義賢　誰れかある。乘り物引け。
左蔀　ハア。
ト左近、蔀、轡面取つて、出る。
蔀　して、團八が科の次第は
義賢　かれしきに何咎め。捨て置いても苦しうない。
團八　ア、嬉しや。
蔀　立たう。
義賢　筆持て。
左近　ハツ。
ト左近、矢立て差し出す。義賢、扇に歌を書き
義賢　霰散る、不破の關家に假寐して、長き夜すがらいねもやられず。左近。
左近　ハツ。
義賢　この扇面を國元の山三方へ。
ト差し出す。左近、取つて

左近　畏まつてござりまする。
ト義賢、ひらりと飛び乗り、靜々乗り出す。花道附け際にて、馬進まざる思ひ入れ。手綱をいろ／＼くれる
部　イヤ／＼、御主人様、しきりにお乗りかへの進まざるは、いかにしても心得ず。暫らくお止まりなられませう。
義賢　何を小癪な。ハイ。
ト鞭を入れ、一散に駈けり入る。皆々、續いて入る後より團八、こなしあつて
團八　何にもせよ、今一應、さうだ。
ト凛々しく向うへ入る。合ひ方になり、蘆屋、奥より出て
蘆屋　この將監はどこへ行きやつた。將監々々
ト門兵衛、窺ひ寄つて、なんの苦もなく後より、一刀に切る。蘆屋、ワツと反る。此うち後より彈正、窺ひ寄り
彈正　門兵衛、息は留まつたか。
門兵　今が極樂往生ぢや。
ト ふぐり、とつくりと止めを刺し、懐中より朱印を取り出し

ソレ、お頼みの御朱印。
彈正　出かした。これへ。
門兵　イヤ、褒美と引替への約束なれば、滅多に手放されぬ。
彈正　尤も。然らば大望成就までは
門兵　しつかりわたしが預かつて置きませう。
彈正　人の見ぬ間に、この場を早う。
門兵　合點ぢや。
彈正　行け。
門兵　おさらば。
ト凛々しく向うへ入る。奥より大助、團右衛門、友藏平内、出て
平内　伯父御様。
大助　兼ねてあなたに一味の我れ／＼。
友藏　あはよくば今宵のうちに
團右　久春ぐるめに
彈正　コリヤ、何かは木蔭で、來い。
ト唄になり、ついと橋がゝりへ入る。チョン／＼、返し

造り物、一面の練り壁、所々に本松、狼煙の仕掛けあり。禪のツトメの鳴り物、木魚入りにて、道具納まる。庄右衛門初め百姓ゐる。

庄右　コレ、皆の衆、義賢どのは今北野の神前を立つたとの知らせ、追つつけ爰へ見えるであらう。それに味方の惣大將、寺子屋どのゝ行くへが知れぬ。

ちよ　サレバイノ、こちらも最前から手を分けて探してゐれど、かいくれに見えませぬ。

庄右　肝心の時になり、あの和郎が居らいでは、座頭が杖失ふた樣なもの。皆手分けして、探しや／＼。

ちよ　合點ぢや／＼。

ト花道へ行かうとして、向うを見て

向ふから來るのが慥かに寺子屋どのぢや。オヽイ／＼。

ト神樂になり、向うより寺子屋當作、隨分山水なる浪人の拵らへ、法螺貝を腰に着け、出て來る。

庄右　こなたも滅相な、一大事の事を頼まれ乍ら、どこへ行つたのぢや。肝心の大將が、さうきよろ附いてくれては、後の士卒の氣がたまらぬ。

皆々　どうぢやぞいなう／＼。

當作　これはしたり、喧しい和郎達ぢや。軍の大事は地の理と云ふて、その所の勝手を知らねば、駈け引きの自由がならぬ。誠に相手は大々名、なんぼ同勢少なうても、皆陣馬に馴れた武士、一通りで掛合ふては、なか／＼勝つ事は思ひも寄らぬ。とつくりと地の理を見定め、手配りをせうと思ふて、それでうそ／＼歩るいてゐたのぢや。

庄右　なるほど又違ふたものぢやわい。さうしてこつちが勝つと云ふ、こなたの工夫が

皆々　あるか／＼。

當作　今指圖して聞かす。よう聞かしやれ。この人數が一つになつて、固まつてゐた時は、第一騒がしうて人目に立つて、却つて敵が用心する。頭分の者ばかりは、この所に陣を張り、跡は銘々云ひ合はせ、爰の藪蔭かしこの森、所々に隠れてゐる、これを埋伏と云ふわいの。

皆々　ハテナウ。

當作　それも一緒になつてゐては、軍が幾はなにもなつた時、味方を助ける勝手にならぬ。或は十人、又は二十人、皆別々に東西南北と、幾所にも別れてゐたがよい。合點か。

皆々　合點ぢや／＼。

ト向うバタ〳〵にて、金八、息を切つて走り出て

金八　サア〳〵、亂騒ぎぢや〳〵。

庄右　何が亂騒ぎぢやい。

金八　義賢どの、下向の道は、この北野と思ひの外、同勢を北へ向けて押し出したは、どうでも直ぐに雲母坂を、叡山へでも行くのぢやさうな。それに爰に待つてゐては思ふた事が鶍の嘴。皆云ひ合はして、北山へぼつかけうではあるまいか。

庄右　ヤア〳〵〳〵、そりや詰まらぬ。取り逃がしては詮がない、皆おぢや。

ト駆け出さうとする。

當作　庄右衛門、待ちや。金八が注進合點が行かぬ。今宵の分夜は

トちよつと星を繰り

義賢が辭星の方角、南にたんだくすれば、北へ行かう筈はない。そりや、なんぞの間違ひであらう。

金八　でも、たつた今北野を立つて、北向ひで行かれしをわしが直に見て來たわいなう、

當作　たとへ北へ行たにもせよ、追つゝけ見てゐよ、この道へ戻つて來る。

金八　なんぼ慥かに云はんしても、北へ行たに違ひはないわいの。

當作　イヤ、この事が間違ふたら、この當作二つとない首をやらう。周章てゝ北へ廻つてたら、跡へんになる事ぢや。必らず一人も周章てまい。

庄右　イヤモウ、貴樣がさう慥かに云へば、皆狼狽へな、狼狽へな。

當作　此うち氣の利いた者三人、そこへ出い。

トアイ〳〵と三人、向うへ出る。

今にもあれ義賢が來るなれば、コリヤ、この法螺貝を相圖に、伏勢が皆一手になつて猛勢で押し寄せたがよい。又この森の松の枝に狼煙が仕掛けてある。その狼煙から赤い絹が上がると見たらば、殘らず引いて取れ。寄せるは法螺貝、引くは狼煙、皆呑込んだか。

庄右　聞かしやつたか、法螺貝を吹くとどつと寄せるワ。

ちよ　狼煙が上がると引いて取るのぢや。

皆々　とつくりと呑込みました。

ト金八、前へ出て

金八　申しお頭、どうぞその狼煙の役を、わしに云ひつけて下さりませ。

當作　イヽヤ、そりやならぬ。
金八　とは又どうして
當作　われが云ふた今の注進、味方の心を迷はす金八、そんな者に大切な、相圖なぞとは思ひも寄らぬ。云ひつける事はならぬ。兎から云ふうち時刻が延びる。
庄右　兼ねて定め置いたる合ひ言葉は
ちよ　米。
皆々　麥。
當作　行きやれ。
皆々　ハア、。
ト東西の通路、橋がゝり、臆病口より、百姓皆々、別れ入る。當作、金八、庄右衞門、殘る。
庄右　さうして貴樣は、どうするのぢや。
當作　あの小高い岡へ上り、相圖を定め、諸方の手配り。こなたも一緒に。
庄右　そんなら大將。
當作　來やれ。
ト始終神樂にて、當作、庄右衞門を連れ、橋がゝりへ入る。跡に金八殘り
金八　お歸りの道を間違はせ、お助け申さうと思ひの外、寺小屋めが人數の手配り、なんとしたものであらうぞ。オヽ、さうぢや。寄せるは法螺貝、引いて取るは狼煙の網、約束の手筈を間違はすが、殿樣への奉公。狼煙の場所はあの森のうち、ムヽ、さうぢや。
トこなしあつて、ついと入る。ト神樂止んで、所知入りになる。向うより四つ目結ひの高提灯、中間、相印しのある法被を着て、持つて出る。義賢、馬上凜々しく、左近、蔀、附き添ひ出る。花道にて、又馬進まざる體、鞭を入れて、靜々と本舞臺へ來る。義賢、あたりを見て
義賢　この所は
左蔀　千本通りでござりまする。
義賢　北野に續く千本の松原、誠や松樹千歲の綠、槿花一日の榮え、動ずれば無常の世界。
左蔀　なんとやら忌まはしきお詞。
義賢　ハヽヽヽ、歸國を急がう。
ト欝面を立て直さんとする。橋がゝりにて、法螺の音する。臆病口より法螺の音を合はす。義賢、乘り止め、キツとこなし。
ハテ、心得ぬ。俄かに響く攻め貝は、この義賢に恨みあ

つて、不意を討たんと計る者か。方々油斷いたすな。
ト大バタ〳〵、早太鼓にて、四方より百姓皆々、出て

皆々　やらぬぞ。
ト取り卷く。

左京　ヤア、見れば賤しき土民衆。

藤太　御主人に敵たふとは

蔀　身の程知らぬ蛆虫めら。

藤太　生けては歸さぬ。

四人　覺悟ひろげ。

ちよ　こまごと云はず、ソリヤ。
ト太鼓けはしくなり、皆々、竹槍にて突いてかゝる。四人、切り立て、東西へ追うて入る。義賢、馬上の立ていろ〳〵ある。ト百姓皆々、段々に折り重なり、少しもてあぐんだろ立ての模樣。ト見附けの松の枝へ、狼煙上がる。この中へ赤絹を三筋ばかり引き上げる。

喜助　アレ〳〵〳〵、赤い絹の上がつたは

嘉助　お頭が引けとの相圖。

庄之　樣子があらう、皆引け〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。
ト太鼓うち上げ、皆々橋がゝりへ引いて取る。

義賢　既に危急の場所となつて、一揆殘らず引取りしは、ハテナア。
ト、ズドンと鐵砲の音して、これに中り、義賢、ウンと死ぬる。馬驚ろき、橋がゝりへ駈け入る。舞臺ひつそりとなる。ト當作、小筒を提げ、そろ〳〵戻つて來て、死骸を足にて蹴返し

當作　ハテ、脆う行たなア。
トこなしあつて、懷中を探し、袋入りの厨子を出してこれが佐々木の重寶大山府君の尊像。こいつが俺が立身の品玉。うまい〳〵。
ト尊像を見て、笑壺のこなし。ト方々にて、アリヤアリヤの聲する。當作、尊像を懷中して、行かうとする。左近、蔀、右の中間、東西より出て

左近 蔀　曲者。
ト皆々かゝる。當作、腰に着けし法螺貝にて、中間皆皆、頭を打割る。皆々、のめる。殘りの人數、かゝる、立てのうち、法螺貝落とす。當作、左近、蔀を取つて投げ、花道へツカ〳〵と行て、法螺貝の事を思ひ出し、跡へ戻らうとする。左近、蔀、起き上がる。當作、氣を替へ

當作　儘よ。

トつゐと向うへ入る。

左部　曲者、うぬ。

ト追つかけ入る。金八、走り出る。

金八　今の狼煙で一揆どもを引かしたれば、殿様のお身の上に、よもや過ちはあるまい。ア、、嬉しや。

ト云ふうち、死骸を見て

ヤア／＼、こりや殿様ぢや。

ト引き起こし、いろ／＼あつて

殿様いなア／＼。エ、コレ、斯う云ふ事をさすまいと、氣を揉んだ事も水の泡。どいつが仕業ぢや、何者が殺した。

トうろ／＼して、落ちてある法螺貝を取り

さつきの浪人が手筈の法螺貝。スリヤ、浪人めが

ト向うを見る。橋がゝりにて、エイ／＼オウと鬨の聲、ドンチヤン打ち、百姓の人數皆々、手筈が違うた、この筈ぢやないと云うて出る。金八、うろ／＼しながら、法螺貝を腰につける。のめつて居る中間皆々起きて、そりや曲者と云うて、金八へ、拔いて切りかかる。百姓皆々、そいつぢや／＼と云うて、侍ひも竹槍にて突いて廻る。金八、この中を逃げ廻る。皆々一群れになつて、混雜の模樣、よろしく、この人數一込めに、いろ／＼あつて、金八を引き包み、橋がゝりへ入る。チヨン／＼、返し

造り物、見附け黒幕、一面に柳の釣り枝、大木の深木、この際に辻堂あり、本釣り鐘、蟲の聲、忍び三重になる。ト前なる草井戸より、大助、黑裝束、龕燈持ち、出て、あたりを見て、驛路を出し、鳴らす。

ト見附けの辻堂を開き、しがらみ、順禮姿、杖、笠を持ち、出る。大助、狀箱を出し、渡す。しがらみ、封を切る。大助、龕燈を差し出す。しがらみ、讀み終り、龕燈の火にて、燒き捨て、それより旅硯を出し、返事を認め、狀箱へ入れ、大助へ渡す。

大助　直さま彼の地へ。

しが　早う。

大助　ハツ。

ト草井戸へ入る。

しが　兼ねての願ひ叶ひしとある、今の文體。先づ一つの

安堵。

トこなし。雨車になる。ト空を見て

コリヤぼろついて來た。ドレ、一時も早う。

ト菅笠にて、雨を凌ぐ見得にて、行きかける。ト向うに人影見ゆるゆゑ、小戻りして、木蔭へよる。矢張り本釣り鐘、常の合ひ方になる。ト向うより岡平、雨具の形、三本傘の紋の箱提灯持ち、葛城、屋敷風、下駄、傘にて、出る。

葛城　岡平、あの鐘は、二更であらう。

岡平　妙心寺の四つと見えまする。

葛城　夫は國詰めゆゑ、殿樣のお見舞ひとして、この葛城が、此度の上京。

岡平　この岡平も奥樣のお供を致し、御前のお見舞ひ。今日は北野の社へ御參籠とござるゆゑ、深更に及んではござれど、お迎ひのため

葛城　心も急けば、隨分急いだがよからう。

岡平　ネイ〱。

ト本舞臺へ來る。此うちしがらみ、思案する事あつて、よき所へ行つて、癪の起こりしこなし。兩人、行き過ぎるを

しが　イヤ〱、女中樣、暫らく。

葛城　此方の事かな。

しが　卒爾ながら、ちよつとお待ち下さりませ。

ト岡平、提灯差し出す。葛城、見て

葛城　見れば姿も賤しからず、非人體とも見えぬお女中、この雨夜に只お獨り

岡平　奥樣を呼びかけ召されたは、用事ばしあつてか。

しが　ハイ、私しは西國順禮でござりますが、連れにはぐれて難儀の上、路用とても遣ひ果たし、殊に持病の癪氣に惱み、御覽の通り難儀いたして居りまする。お藥がござりませうならば、お慈悲にどうぞお惠み下さりませう。

岡平　スリヤ、連れにはぐれ、持病の癪に惱むとな。

しが　左樣でござりまする。

岡平　奥樣、お聞きなされましたか。

葛城　嘸お難儀にござりませう。癪氣とあればお藥を進ぜませう。

ト矢張り雨車。葛城、鏡袋より藥を出し

これは靈丹と申して、此方の家に傳へし名方。岡平、その女中へ。

岡平　ヘイ。

ト取つて

サア、藥を進ぜませう。

トやらうとして、ちよつと思案して、一口呑み、

サア、前毒見いたしてござる。

トしがらみへやる。

しが　これは〳〵、有難う存じまする。

ト戴き、呑む樣な顏して、見物へ見える樣に捨てる。葛城、香包みより、一歩十ばかり出し、紙に乘せ、しがらみが側へ持ち行き

葛城　近頃侮りがましけれど、路用に盡きしとあれば、用立てると申すではない、この場の寸志、受けて下さんすか。

しが　これはマア、思ひも寄りませぬお情に預かりまして、有難う存じまする。

ト戴き、懷中して

重ねてお禮を申すため、苦しからずばあなた樣の、お名が承りたう存じまする。

葛城　江州觀音寺の領主、佐々木六角さまの家老、名古屋山三が妻葛城と申しまする。

岡平　あの地へ參られなば、お屋敷へ立ち寄らつしやれ。相應の助力もなさるゝであらう。

葛城　其方の名はわざと尋ねませぬ。して、連れ衆の行くへは、いづくと云ふ當てゞもあつて

しが　イヤ、思はず道で別れましたゆゑ、どこを當てどに知らぬ旅路。

トこなしあつて

イヤ、お影で癪も治まりましたれば、もうお別れ申しまする。

葛城　心急きにござんせう。サア、一時も早う。

しが　御緣もあらば

葛城　又重ねて

しが　おさらばでござりまする。

ト杖笠を持ち、ツカ〳〵と花道中程まで行つて、袂より右の手を出し、につたりと笑ひ、思はず葛城の方を見て、ちやつと氣を替へ、惱む體になり、杖を突き、向うへ入る。葛城、見送り、こなしあつて

葛城　よしありげなる褄はづれ、思へばいとしい

トほろりとする。

岡平　奧樣、お越しなされませぬか。

葛城　思はぬ暇入り。

岡平　サア。お越しあられませう。

ト行きかゝり、フト落ちてある簪を見て、拾ひ取り

こりや簪ださうな。聞こえた、今の女が落としたと見ゆる。シタガ、異風な簪。奥様、御覧じませ。

ト渡す。

葛城　灯。

岡平　ネイ。

ト提灯差し出す。葛城、見て

葛城　こりやこれ和國に稀なる祇爺蔓の浮き彫り、所持せし女は

ト向うを見る。

岡平　扨てこそ曲者。

ト提灯かゝげる。

葛城　ハテ、殘り多い。

ト御兩人、よろしく、こなし

幕

二段目

佐々木館の段
地獄越の段

役名——勅使、光若丸。佐々木義丸。腰元、早枝。同、柏木。同、浮舟。同、横笛。同、空蟬。同、常夏。同、朝顏。同、箒木。同、初音。同、梅ケ枝。同、手習。世繼瀬平。奴、岡平。長橋の局。お國御前。錦花皇女。伊吹藤次。三上十平。堅田伴藏。松井左近。局、若菜。奴、峰八。同、谷平。同、岨六。庄屋、庄右衞門。粟津主水。長谷部藤太郎。奴、藤助。守山宮内。佐々木彈正。犬上團八。生駒歌之助。不破伴左衞門。名古屋山三。物草太郎。

造り物、一面の大襖、四季の草花を描く。上手、瓦燈口あるべし。眞中に邯鄲の作り物屋體、飾りあり、歌之助、紙子姿、一文字の編み笠を持ち、立つてる。藤太郎、角前髮、衣裳、羽織にて、邯鄲の枕を持ち、下座に瀬平、衣裳、羽織、濡れ文を持ち、歌

之助は立ち身、兩人は左右に扣へる。トヨロ〱にて、幕明く。

歌之　これは島原のほとりに住居仕る、紙子大盡にて候ふ。我れ色道の悟りを開き、かかる身の上となり果て候へども、猶も諸譯のよしなし事を探らんため、江口神崎などと云ふ色里の、跡を尋ねばやと存じ候ふ。

〽浮き世の色に迷ひ來て〱、夢路をいつと定めん。

ト兩人、左右より向うて

藤太　いかに紙子大盡へ、申すべき事の候ふ。

瀬平　我れ等もお知らせ申すべき事の候ふ。

歌之　何事にて候ふぞ。

藤太　されば、色の諸譯を悟らんと思し召す、その志しが天に通じ、御覽候へ、この頃島原の全盛、春雨と云ふ太夫職が、手づから縫はれし邯鄲の括り枕。

瀬平　又この濡れ文は、秋篠と申す太夫職が、花の朝、雨の夕、忍ぶ深間へ手練手管を、白々の散らし書き。

藤太　年越しの夜に寶船を、枕の下へ敷いて寐る、その格で

瀬平　この文を枕の下へ敷かせ給ひ

藤太　一睡の夢のうちに、色の道を御悟り候へ。

兩人　御悟り候へや。

歌之　さては其方が心根を思ひやり、名に負ふ松の位より、邯鄲の括り枕、痴話文添へて賜はるよな。

瀬平　即ちお文を褥の上に

ト敷いて

藤太　その上にこの枕を

ト直して

イザ、設けの席へ

瀬平　とく〱御直り候へ。

〽一村雨の雨舎り、月はまだ殘る中宿に

ト歌之助、造り物屋體へ直り

歌之　暫し假寐のさむしろに、思ひの夢を見るやらんと

〽邯鄲の夢に臥しにけり〱。

トずつと行て、扇を額に當てゝ眠る。笛のひしぎ、鳴り物にかゝる。ト橋がゝりより、早枝、横笛、締木、廣袖、さゝぎ附き、文字の花笠、螢籠と銀の團扇を持ち出る。藤太郎、瀬平、扣へる。女形皆々、並ぶ。ト唄のかゝり、少し振りあつて、納まる。

藤太　出來た〱。夏の仕出しの螢籠、銀の團扇の手事品事、今を盛りの花揃へ、どの枝なりとも手折つて見た

い。
瀬平　落花狼藉、うまい物の摑み食ひ、ちよびと一口見知らさうかい。
早枝　イヽエ、この花は主ある花、仇な嵐に散らさるゝ事は厭ぢやわいなア。
篠木　折り取る事は禁制でござんす。
横笛　外の花を手折つたがよいわいなア。
篠木　ハテ、悪い請けぢやなア。
瀬平　花盗人も出かけが悪い。
藤太　ソレ〳〵、先づ扣へませう。
瀬平　なるほど左様仕りませう。
早枝　いかに紙子大盡へ申すべき事の候ふ。
歌之　そもいかなる人ぞ。
早枝　これは島原の春雨秋篠が妹女郎の、新造でござんす。
篠木　姉女郎の指圖に依り、傾城の口説のかんもん
横笛　嘘と誠の手管をば、あらましお話し申さんため
早枝　遙々これへ
皆々　参りましたのぢやわいなア。
歌之　こはそも何と夕顔の、玉を摸く美麗の君達、勸めに任す閨の友。
〽榮華の花も一時の、夢とはいざや白雲の
ト歌之助、向うへ出て
から見た所が、どれも〳〵、まだ廓馴れぬ新造太夫、粋の極意は至らぬ〳〵。
ト下にゐて、扇の手そゝぶりをする。
篠木　先くゞりな事云はずと、マア、太夫すの
横笛　諸譯手管を
皆々　聞かしやんせいなア。
ト早枝、蒔繪の莨盆持ち出で
早枝　これは太夫すの御紋附き、比翼の閨の莨盆。
ト歌之助が側へ置く。
歌之　聞こえたわいの。莨の後は火皿の灰、俺を吸ひからしぢやと云ふのであらう。
早枝　オヽ、しんき。
ト歌の地になる。
〽宵の口説のよい仲を、互ひに引き見ん悋氣酒、まだ醒めやらぬ閨莨、煙り較べん富士淺間、登りつめてはいとしさの
歌之　それは昔のたばこ曾我、祐成と虎御前は、深い縁に

し聞きたれど、そさまは淺い淺い淺黄染。
早枝　イヽエ、心は深い濃紫。
歌之　イヤ、淺い。
早枝　イヽエ、深い。
〽深き契りを幾千代も、双葉の松葉頁でと、誓ひし事も
嘘ならで、戀路の手本となりにけり
ト藤太郎、瀬平、向うへ出て
藤太　オツと、口説の仲直り
瀬平　銚子杯取り揃へ
横笛　汲めども盡きぬ
歌之　泉の酒盛り。
〽飲めば甘露もかくやらんと、心も晴れやかに飛び立
つばかり、夜晝となき樂しみの、榮華にも榮耀にも、猶
この上やあるべき
早枝　歌ひつ舞ひつ夜も遂に
歌之　日は又出でゝ明らけく
藤太　夜かと思へば
瀬平　晝飯もしてやり
藤太　晝かと思へば
瀬平　夜泣きの饂飩屋

箒木　春の花咲けば
横笛　紅葉も色濃く
早枝　夏かと思へば
瀬平　隣りの餅搗き。
箒木　冬にもあらで
藤太　西瓜の切り賣り。
横笛　春夏秋冬。
歌之　萬木千草。
早枝　一時に花盛り。
藤瀬　面白や。
皆々　不思議やなア。
〽かくて時過ぎ頃去れば、はや三千歳の榮華も盡きて、
誠は夢のうちなれば、皆消え〳〵と失せ果てゝ、ありつ
る邯鄲の枕の上に、眠りの夢は覺めにけり。
ト謠ひのうち、藤太郎、早枝へしなだれるを、横笛、
邪魔する。瀬平、横笛へ抱きつくを、歌之助、支へる。
この模樣にて、よろしく納まる。
呼び　御國御前さまのお入り。
ト云ふ。ト摺り鉦、三味線、賑やかなる鳴り物になる。
御國御前、伊達なる仲居姿、後家髷の拵らへ、少し醉

ひたろ見得。梅ヶ枝、手越、腰元にて、三寶、杯、長柄の銚子を持ち、朝顔、常夏、空蝉、柏木、皆々腰元にて、附き添ひ出る。

三人　これは御後室様。

御國　まだいの。その後室と云はるゝが厭さに、そなた衆へ言ひ附けた遊興。仲居の姿で廓の遊び、自らはきつう醉ふたさうなわいなう。

女皆　ほんに、きつうお醉ひ遊ばしたわいなア。

柏木　佐々木義賢さまの後室様ともあらうお身で、あられもない此お身持ち、氣の毒な事ではある。

瀬平　何は格別、設けの席へ。

三人　イザ、お越しあられませう。

御國　サア、皆もおぢや。

ト本舞臺へ來て、造り物の褥へ座る。女形は上座、立役皆々は下座へ並ぶ。鳴り物打ち上げる。

歌之助が紙子大盡、早枝が廓のしこなし、長谷部藤太郎、世繼瀬平、誰れ〳〵も隱し藝、驚き入りましたわいなう。

歌之　これは面目もない。殿様御在世の折柄、折々お供を仕り、その頃開き馴れし廓の風俗。

早枝　あられもない色里の手業も、お指圖ゆゑのこの姿。

柏木　廓とやらは繪で見たばかり

横笛　ほんに皆様の手前も

皆々　お恥かしう存じまする。

藤太　アイヤ〳〵、さうでござらぬ。いづれも御器用、取り分け早枝どのは物堅い、兄山三どのには似もつかず、色事の素早さ、歌之助どのに氣味合ひがあるかして、立ち舞ふうちも味いなそぶり、この藤太郎が三寸俎板、見拔いて置きましたぞ。

瀬平　歌之助どのは今の世の戀知り、近頃羨ましう存ずるてや。

歌之　それは粗忽千萬、生駒歌之助は武士でござる。御遊興とは申しながら、御前よりのお指圖、その中でみだらな事を仕らう様がござらぬ。

藤太　イヤ、さうは仰せられな。慥かに見附けた事があるに依つて

御國　藤太郎、控や。

藤太　でも、歌之助どのが

御國　ハテ、控やと云ふのに。遊興のこの場所で、家中の吟味聞からうとは云はぬ。故殿様に別れしより、うきを忘

る丶酒の醉ひ、そなた衆相手に迎ひ酒も又よからう。サア、酌をしや。

ト杯を取る。靜かに序の舞ひになる。手越、酌をする。

歌之　アイヤ／＼、殿樣には思はざる御逝去、いまだ御中陰もみてござるうち、かく大酒を遊ばされ、お身のおくづおれとなりましては

御國　聞きとむない。又意見かいなう。

ト云ひながら吞む。

歌之　唐土にては喪に籠ること三年、浴みせずくしけづらず。左程にはあらずとも、先御簾中樣お果て遊ばし、義丸さまの御養育を頼まんため、お部屋たりしこなた樣を御簾中と侍き申せし、先君の御計らひ。さすれば義理ある義丸さま、いまだ御幼稚と云ひ、當家の成り行きいかがあらんと思ふうち、御前には日夜の御酒宴、御遊興にお身持ち放埓。これを諫めんとすれば御前の出仕を止められ、閉門となる家中の方々。そこを存じて、かゝるいぶせき姿となり、御酒宴に交はり、共に亂るゝ本心は、お側にあつて御諫言を申さんため。近江源氏の嫡流たる家國も、今この時に亡ぶとは、お心が附きませぬか。エ、淺間しいお身持ちでござるなう。

柏木　歌之助さまの仰しやる通り、武將久吉さまへの聞えと云ひ、杖柱とも頼りに思し召す御前樣、國の治まる御評議を遊ばすが、憚りながら、よからうやうに存じまする。

瀨平　イヤ、その御意見、僻事でござらう。

歌之　御諫言を僻事とは。

瀨平　されば、義丸さまは御幼稚でも、伯父御彈正さまがござれば、御家中の仕置き萬端、表向きの政道は立つと云ふもの。御國御前は女儀の事なれば、これしきの御遊興、御酒をお過しなさるゝとて、誰れがなんと申さう。藤太郎どの、左樣なものではござらぬか。

藤太　なんぼう女儀でも、義丸さまの御母公、何これしきの御遊興、それを御意見なぞとは、これサ、胸中が狹い狹い。

歌之　イヤ、申し出すからは金輪際、御諫言を仕拔かにや置かぬ。

瀨平　見事こなたが

歌之　なんでもない事。

藤太　そりや及ぶまい。

歌之　及ばぬ所をやつて見せう。
兩人　何を小癪な。
柏木　申し御前様、何卒
女皆　御本心に
　ト御國御前、醉ひたろこなし。
御國　なるほど歌之助が申す通り、今と云ふ今、心を入れ
　替へて
歌之　スリヤ、御意見を聞き入れあつて
御國　人每に、一つの癖はあるものを、我れには免せ杯
の、數々巡る面白さ。意見をするとて、これがマア、止
められさうなものかいなう。
　ト歌之助、御國御前をヂッと見て
歌之　本心狂ふ氣違ひ水、かほど迄に申し上げても、ホ
イ。
　ト當惑のこなし。バタ／＼にて、關彌、小姓にて、走
　り出で
關彌　申し上げまする。都よりお勅使として、花園中納言
さまのお越し、只今大手先に御休息と、先觸れの知らせ
でござりまする。
御國　ナニ、都より勅使のお入り。

　トきつとこなし。
歌之　何にもせよ、路次までお出迎ひの役目、粗略なきや
う、侍ひ衆に申しつけ召され。
關彌　畏まりました。
　ト入る。
藤太　勅使のお入りは當家の安否。
瀬平　お跡目の綸命なるか。
歌之　但しは沒收の御沙汰なるか。
柏木　御前様の
皆々　思し召しは
御國　何事も自らが胸にある。方々はマア、奥へ。
皆々　でも、勅答の
御國　ハテ、よいと云ふのに。
　ト歌になり、御國御前、こなしあつて、皆々附添ひ、
　瓦燈口へ入る。歌之助、一人殘り、こなしあつて
歌之　殿樣横死の上、御妹君薦屋さまにも、その日を變
へず曲者のために、あへなき御最期。折も折とて御朱印
の紛失、敵の手懸り、詮議は一道。何を云ふても後室に
はあのお身持ち。お勅使お入りの今となつて、苧麻を亂
せし館の有樣。ハテ、なんとしたものであらう。

ト思案する。此うち合ひ方。早枝、出て、邊りを見て

早枝　申し歌之助さま。

歌之　オヽ、早枝どの、お上より御用でもあつてか。

早枝　アイ、御用がござんす。

歌之　スリヤ、お上より。

早枝　イヽエ、わたしが御用がたんとあるに依つて、人目を忍んで來ましたのぢやわいなア。

ト側へ坐る。藤太郎、出かけ、腹立てるこなし。歌之助、ずつと立つて行くを、早枝、留めて

申し、そりやお胴慾でござりまする。

歌之　サア、一圖に云へば胴慾とも思はれうが、北野の社でも申す通り、親々の許しを請けねば、堅いお屋敷の掟を背く、不義密通。

早枝　とても添はれぬ縁ならば、いつそ

ト歌之助が刀に手をかける。

歌之　待つた。縁を結ぶは時節があらう。

早枝　時節とはえ。

歌之　ハテ、先君の忌明けも過ぎて、お家の跡目が納まらば、兄御の山三どのへお頼み申して、二世の夫婦。

早枝　北野の社へ誓ひをかけたる、誰が袖の繪馬。願ひ叶ふて、早うこの袖をとめる樣に

歌之　ハテ、そなたの心さへ變らずば

早枝　必らず違へて下さんすなえ。

ト寄り添はうとする。藤太郎、いろ／＼、この時

藤太　歌之助どの／＼。

ト忙しう云ふて眞中へ出る。

歌之　これはけたゝましい、何事でござるぞ。

藤太　何事どころか。又そや奥で、ざゞんざア、この歌之助はどこに居る、早う呼べ、疾呼べと、いらだちの樣に云ふてござる。ちやつとござりませ。

ト云ふうち、兩人、いろ／＼仕方してゐる。藤太郎、同じ樣な身振りして

エヽ、なんの事ぢや、早うござらぬかいの。

歌之　悪い時に御前のお召し。

藤太　これはしたり、ござれと云ふのに。

歌之　ドレ、御用を承はらうか。

トこなしあつて、入る。早枝、續いて行くを、よろしく留め

藤太　イヤ、待たつしやい。こなたにはこの藤太郎が用がある。その用と云ふは

早枝　申し、淫らな事聞く耳は持ちませぬわいなア。
　ト又行かうとする。
藤太　それ程潔白なこなたが、あの歌之助どのと只今の仕儀は
早枝　エヽ。
藤太　何もかもとつくりと見て置いた。とても猥ら次手に、この藤太郎が心のたけを認めた、コレ〳〵、この痴話文、色よい返事を、早枝どの、コレ、頼むぞ〳〵。
　ト状を出し、懐へ入れうとする。早枝、この状を捨て
早枝　エヽ、穢らはしい、厭ぢやわいなア。
藤太　それは曲がないと云ふものぢや。
早枝　アレエ。
　ト逃げる。春日龍神の謠ひ。
〽龍女が立ち舞ふはらんの袖〳〵、白妙なれや和田の原の、拂ふは白玉たつは緑の移る海原や、沖行く年月の御船の相の、川面に浮び出づれば
　ト追ひ廻すうち、奥より横笛、逃げて出る。瀬平、追はへ出て、よき程に、捕へて
瀬平　ドッコイ、逃がす事はならぬ〳〵。
横笛　悪い事なされますないなア。

瀬平　なんの悪い事を致さう。よい事を仕る。
　ト追ひ廻す。四人ごつちやになり、いろ〳〵あつて、取り違へ、藤太郎、瀬平、抱き附く。この隙に、早枝、奥へ逃げて入る。横笛、橋がゝりへ逃げ込む。両人、顔見合はせ
藤太　これはお互ひに
瀬平　粗忽千萬
　トあたりを見て
藤太　南無三、早枝どのを
瀬平　どこへ取り逃がした。
　ト藤太郎は奥へ、瀬平は橋がゝりへ走り入る。始終舞ひの地を打つ。ト橋がゝりより、粟津主水、近習にて、着附け上下にて出る。若菜、局にて、出て
若菜　これは粟津主水さま、只今お上りでござりまするか。
主水　して、後室さまには
若菜　奥御殿にて御酒宴最中。
主水　然らば相詰めませう。
　ト落ちてある状を拾ひ取り
早枝どのへ、焦るゝ藤太郎より。ハテ。

トこなしあつて
サア、案内を召され。
ト主水に、若菜附き、奥へ入る。この始終、春日龍神の謠ひ。チョン〳〵、返し
大襖を左右へ引く。

造り物、三間、二重舞臺、向う金襖、臆病口、落間にて、奥庭を見込み、寶藏あるべし。橋がゝり、網代塀、右三間の屋體、少し上手に、物草太郎、衣裳上下にて、膝もとへ砥石と狀を並べ置き、居眠つて居る。右春日龍神。

〽池水を返して矢に替はり
トこの切れ一ぱいに、道具、向うへ突き出す。
呼び　伯父御樣のお入り。
向ふ　不破伴左衞門出仕。
ト序の舞ひになり、向うより不破伴左衞門、衣裳上下、橋がゝりより佐々木彈正、衣裳上下。伊吹藤治、堅田伴藏、三上十平、各々家中にて出る。奥より守山宮内、松井左近、衣裳上下にて、出迎ふ。
宮内　これは佐々木彈正さま。
彈正　不破伴左衞門。
伴左　ハツ、氏神へ參詣いたし、遲參の出仕、眞平御免下さりませう。
宮左　先づ〳〵。
ト彈正、二重舞臺眞中へ坐る。伴左衞門、下舞臺の上手、其ほか橋がゝりに並ぶ。
彈正　當觀音寺の城は、江州一國の礎。この彈正は伯父ながら、坂本の分地を持つて、表向きは臣下の列。それは格別、ナニ、伴左衞門、其方氏神とあつて、當山上にほこらをしつらひ、晝夜參籠をなすは、深き仔細ばしあつての事か。
伴左　御意でござりまする。某かねて北辰妙見を信じ、立身を願ひ望む。神は人の敬ふに依つて威を增すの道理。お家へ新參に召し出だされ、かく高祿を穢しまするは、これ偏へに神の威力を崇る所。さるに依つて北辰尊星をあがめまつり、猶も武運を祈らんがため、右の仕合せでござりまする。
ト瀬平上下に改め出て
瀬平　これは彈正さま、伴左衞門さま、只今御出仕でござりまするかな。

彈正　世繼瀬平。して、後室は

瀬平　なんとも氣の毒な儀でござる。御主人義賢さまには不慮の御逝去、跡目に立つべき義丸さまは、いまだ御幼稚。その中で酒宴に耽り、晝夜分たぬ後室様のお身持ち放埒。

藤治　殿樣御存生のうちは、天晴れ賢女の鑑とも云ふべき御國御前さま。

伴藏　この頃は打つて變りし御放埒、古狼野狐の見入れりでもござらうか。

十平　この上は伯父御樣の御諫言。

藤治　お跡目の御評議が

三人　肝要かと存じまする。

伴左　イヤ〱、猛火旺んなる時、水を以て消さんとすれば、焔は却つて逆立つの道理、亂酒と云ふ病ひの根ざし篤と考へ、お諫言の良薬は、この伴左衞門、配劑を仕るでござらう。

ト此うち太郎、居眠つてゐる。彈正、見て

彈正　ホヽ、誰れかと思へば物草太郎、いつ見ても馬鹿な面附き。宮内、目を覺まさせい。

宮内　なにさま、太郎どのは夜前より、寶藏を御番の役目。大切の儀を承りながら、さりとは悠長千萬。目を覺まされよ。コレサ、太郎どの〱。

ト太郎、しやんとなつて

太郎　イヤ〱、眠りは仕らぬ。見さつしやれ、兩眼は魚の如しぢや。

瀬平　太郎どの、彈正さまのお入り、性根を据ゑて御挨拶申さつしやれ。

太郎　これは〱、伯父御樣にはようこそお越し、御覽じ迷惑な役を受け取つた。

彈正　なにさま、藏の番とは相應な役目。眠らずと番を大切に仕れ。

太郎　ハテ、大切に思へばこそ、振舞ひに呼ばれた樣に、眼目も振らずしやき張つて居ります。なれども話しする相手はなし、一人はつこりとして居れば、時々は眠りが來る。これには困りまするぢや。

瀬平　愚鈍なわろに寶藏の御番とは、イヤ、心許ない。

藤治　眠つて居れば番をして居らぬも同然。

伴藏　悉皆土人形を据ゑた樣で

十平　なんの役にも立ちますまい。

太郎　イヤ〱、睡眠はいたしても、受取つた役目は忘れ

ぬ。その證據は、コレ〳〵、この狀と砥石ぢや。

彈正　その品がどういたした。

太郞　ハテ、狀と砥石を斯う前へ直して置く。錠前戶前の番をするのぢや。なんと才覺であらうがな。

伴左　ハヽヽヽ、人は萬物の靈長、本心を失ふ時は、うつけとなる。又は風狂して巷に迷ふ。愚鈍なる心を以て、物によそへて事を達す、却つて智の至る所、流石の物草、天晴れの頓智。

太郞　へヽヽ、さうもごんせぬ。

宮內　京都北野の社內、繪馬堂の邊りに彷徨ひし太郞どの、愚かにて正直なるが先君のお目に留まり、早速お抱へなされ、この本國へ遣はされしその後にて、計らずも曲者のためにあへなき御最期。我れ〳〵は元より、太郞どのは、取り分け力落としでござらう。

太郞　力落としの段か。折角お目見得申した殿樣は、その日に死なつしやる。されどもお抱へ下された大恩を忘れねばこそ、殿樣のお跡を弔ふ、忌日命日。

瀨平　その忌日も物によそへて

三人　覺えさつしやれたか。

太郞　唐人のお雜煮、小さい鼠。

瀨平　唐人のお雜煮とは。

太郞　唐の元日、これが霜月。

三人　小さい鼠とは。

太郞　二十日鼠。霜月二十日と覺えたてや。

彈正　それも尤も。

太郞　ドレ、目覺ましに、ちとお花を仕らう。

ト花生け花盆に水仙の載せしを取り、生けることなし。奧より關彌、出て

關彌　伴左衞門さま、義丸さまが召しませいとの儀でござります。

伴左　それへ參つて御機嫌を伺ひ申さう。彈正さま、いづれも

彈正　身も後より參るであらう。

伴左　後刻御意得ませう。

ト序の舞ひきつぱりと打つ。伴左衞門、皆へ目禮のこなしあつて、關彌連れ、入る。ト圓齋、茶道にて、紙包みの祕藥を持ち出で

圓齋　彈正さま、これにござりまするか。祕密の御意に依り、お手醫者法橋に申し附け、かの一藥を

彈正　コリヤ〳〵。

ト宮内、左近を教へ

ナ、つか／＼と粗相な坊主め。

聞齋　イザ、お渡し申しまする。

ト包みを目通りへ直し、扣へる。

彈正　身も奥へ參り、御國御前に對面いたさう。ナニ、瀬平、其方はこれに殘つて、この一品の試みを、な。

ト太郎を顏にて教へ

合點が行たか。よく計らへ。

ト祕藥を渡す。

瀬平　スリヤ、太郎どのに。

彈正　しかと申し附けたぞ。

瀬平　なるほど承知いたしした。

宮内　何とも心得ぬ。

彈正　ヤ、、なんと。

ト左近もこなし。宮内、氣を變へ

宮内　イザ、御案内仕りませう。

彈正　サア、皆も奥へ。

左近　何かに賢しき太郎どの、錠前戸前の役目を大事に

太郎　ヨシ、呑込んだ。

三人　彈正さま。

彈正　ドリヤ、參らうか。

ト唄になり、彈正、瀬平へ目まぜする。宮内、左近、こなし。藤治、伴藏、十平、聞齋、この人數奥へ入る。跡合ひ方、この間、太郎、花を生けて樂しんでゐる。瀬平、側へより銚子杯を取つて來て、右の祕藥を太郎が見ぬ樣に、そつと仕込み、側に置いて

瀬平　サア／＼、太郎どの、休息がてら、ちとお話しを仕らう。これへお越しなされ。

太郎　イヤ、それへ參るまい。

瀬平　なぜでござる。

太郎　ハテ、錠前戸前の御番を仕る。

瀬平　それはさうでもござらうが、暫時は苦しかるまい。動かれずば、ドレ／＼、拙者がそれへ參らう。

ト銚子杯を持ち、二重舞臺へ行く。

見さつしやれ、彈正さまより拙者へ御酒を下されてござる。只獨り呑むでもあるまい。貴公と酒盛りを仕らう。

太郎　いかさま退屈でならなんだ。然らば御馳走に預からうか。

瀬平　預からいでよい物か。サア／＼、一つ呑まつしやれ。身共がお酌を仕らう。

太郎　それは慮外ぢや。然らば戴からうか。

ト杯を取り上げる。瀬平、酌をせうとする。

イヤ〳〵、よしに致さう。

瀬平　なぜ呑まつしやれぬ。

太郎　よう思へば身共は下戸ぢや。物によそへて置かぬに依つて、はたと失念仕つた。

瀬平　イヤサ、たとへ日頃は下戸にせよ、徒然の折柄、一つ過ごした氣鹽梅、どうも云へたものではない。いつはたらずとも、平にお勸め申す。呑まつしやれ〳〵。

太郎　それもさうぢや。然らば一つ下されうか。

瀬平　呑まつしやれ〳〵。

太郎　先づ貴公からお始めなされ。

瀬平　御意に随ひ、亭主役に

ト杯を取らうとして

ア、滅相な。拙者が呑んでたまるものか。

太郎　さう云はずとも、お手許が見たい〳〵。

瀬平　でも、拙者は

太郎　ハテサテ、斟酌をする男ぢや。ドレ〳〵、お酌を仕らう。

ト銚子を取る。

瀬平　イヤサ〳〵、どうあつても貴公から始めさつしやれ。お酌を仕らう。

太郎　先づ其許から。

瀬平　是非に貴公から。

ト銚子を揉み合ひ、取り落とす。

太郎　ホイ、しもた。

瀬平　誠に大事の酒を

ト長柄を取り、いろ〳〵振つて見て

こりや一滴も、エヽ、忌々しい。

ト打ちつけ、ツイと奥へ入る。

太郎　コレ、酒はなくとも話しなと仕らう。待たつしやれ待たつしやれ。瀬平どの〳〵。

ト合ひ方。ト呼びながらあたりを見て、右の狀にてこぼれた酒を拭き、花生けの水仙を取り、しごく。仕掛けにて、花枯れ、こなしあつて

聞こえた、この理屈ぢや。

ト向うより

呼び　お上使のお入り。

ト云ふ。向ふを見て、こなしあつて、氣を變へる。

太郎　ドリヤ、お番を仕らう。

ト上の屋體へ行て、しやんと座る。綟子張りの障子さす。ト奥より御國御前、衣裳襠裲に改め、義丸、上下、彈正、伴左衛門、歌之助、藤太郎、この兩人、上下に改め、宮内、左近、主水、藤治、伴藏、十平、出る。

彈正　お上使には早お入りとある。

伴右　いづれもお出迎ひ

ト皆々、花道へ向ひ

歌之　お上使、此方へ

皆々　お通りあられませう。

ト三味線入りの樂になる。ト向うより、光若丸、勅使にて、長橋、さげ髮、襠裲、緋の袴、お局の拵らへ、子役の仕丁、沓持ちともに六人、この後より名古屋三三、衣裳長上下、三賓に箱載せしを持ち、附き出る。

御國　お勅使樣には遙々とのお下向、御苦勞に存じまする。

長橋　方々には出迎ひ大儀。

彈正　守護の役目は名古屋山三。

山三　お勅使下向の序でを以て、武將久吉公より嚴命の儀もござれば、それへ參つて演說に及びませう。

歌之　先づ〳〵あれへ。

ト勅使、二重舞臺の上、この次に長橋、義丸、御國御前、次ぎに山三、下舞臺上の方に彈正、藤太郎、藤治伴藏、十平、橋がゝりの上手に伴左衛門、次ぎに歌之助、宮内、主水、左近、各々この列に並ぶ。鳴り物打ち上げる。

伴左　名古屋氏は當家御譜代、此度跡目の願ひにより、在京を召さるゝ所、火急なる歸國と云ひ、見ればお勅使は御幼稚の御方、なんらの仔細、承つて安心が致したい。

山三　武將久吉公、西國表に御在陣の折柄、主人義賢武將の御祕藏たる、珪陽の鷹を過ち、御前の首尾以ての外、既に御改易にも及ばんず所、堀尾帶刀、福島淺野なんどその席にあつて、御前を繕ひ、事無難に御歸國はなされしかど、京都に於いて不慮の御逝去、跡目絕えなん事の歎かはしく、當時西國より御歸陣あつて、聚樂御殿にましますゆゑ、某上京して跡目の願ひ。武將の御舍弟於次丸久春さま、當家の御末子靡屋姫さまと、先達て御緣談。さすれば外ならぬ御家内の家柄、家督義丸幼稚たりとも、吉日を選び上洛させよ、跡目の評議に及ばんとあつて、下し給はるこの一品、有難く頂戴いたし歸國の折柄、お勅使のお成り、路次の警護のためお供に附添ひ、

宮内　かくの仕合はせでござりまする。
主水　スリヤ、お跡目を
山三　義丸さまに
只歎かはしきは御國御前さま、酒宴に耽り、晝夜を分たぬ御放埒と、都に於いても巷の風說。これお咎めの一つとなり、當惑仕つてござりまする。
御國　折に觸れこの酒宴は、家中の心を引き見んがため、遊興は遊興、政道は政道、それしきの事に辨へのない、自らではござらぬわいなう。
彈正　その儀は格別、先づお勅使の趣き、微細に承つてよからう。
御國　勅命の趣き、これなる義丸に仰せ下さりませうならば、有難う存じまする。
長橋　即ち花園宰相光忠卿の御公達、御幼稚ながら當今の勅命を蒙らせ給へば、取りも直さず今日の光忠卿、附添ひし妾は長橋の局、當今樣よりお勅使の趣き、方々、謹んで拜聽あられませう。
光若　勅使。
皆々　ハツ。
光若　宣命を蒙りし父君の御書、讀み上げてよからう。
長橋　ハツ。
ト御書を取つて、開き
當佐々木の館に傳はる湖月の一卷と申すは、往古紫式部石山に籠つて、觀世音の御示現を蒙り、作文なせし筆跡によつて、世にこれを湖月の一卷とも、又は十帳源氏の卷とも名附く。當今正親町の院樣、御叡覽ありたきとの綸命、宰相光忠承つて件の如し。勅命の趣き、誰れ誰れにも承知であらう、
ト御書を納め、光若に渡す。
御國　假初ならぬ帝さまの勅命、叡慮に任せ湖月の卷を差上げませうと、ソレ、義丸、お受けの勅答を
義丸　卷物を差上げませう。
長橋　ソレ、お勅使。
光若　急ぎ叡覽に備へてよからう。
御國　ソレ、義丸。
義丸　承知いたしましてござりまする。
宮内　隨身の方々は退屈にもあらう。お次ぎへ行ていしな事して遊び召され。
仕丁　ハア、。
ト橋がゝりへ入る。

歌之　今日より當家のお世繼ぎ、佐々木義丸さま、いづれも祝賀を申されてよからう。

彈正　イヤ、義丸を跡目とは存じも寄らず。そりや叶ふまい。

歌之　彈正さま、何ゆゑ左樣に仰せられまする。

彈正　義賢は相手知れざる闇討ちの最期、殊には佐々木代代軍神の守りとなるべき、太山府君の尊像まで奪ひ取られし不覺の段々、その曲者の吟味もなく、跡目の評議相叶ふまい。

伴左　曲者の詮議、この伴左衞門が、相糺してお目にかけう。

彈正　スリヤ、其方が

伴左　いかにも。侍ひども、その囚人をこれへ引け。

侍ひ　ハア、。

ト庄右衞門、口明の庄屋にて、百姓大勢皆々繩にかゝり、一人づゝ繩取りの侍ひ附き、出る。彈正驚ろきこなしある。

伴左　栗本郡十一ヶ村の庄屋百姓、郡代の下知用ひざりしを、國守の下知と恨みを含み、御法度の徒黨を企て、京都へ强訴の折も折、殿には落命。種ケ島を以て打ち留めし曲者、土民原の所爲ならん筈はなけれど、差當る詮議の手がゝり。ヤイ、百姓めら、覺えある儀は何に依らず眞直ぐに白狀いたせ。

庄右　これは又迷惑ぢや。殿樣を恨みましたは、そこにござる彈正さまが

彈正　ヤイ〳〵、血迷ふて何をぬかす。詮議に枝葉が咲くと、うぬらが身の上であらうぞ。

庄右　何をいつこさうに。正直なおい等をよう欺したなう。その僞りを誠に受けて、殿樣のお馬先へどつと押しかけて、エイ〳〵オウの眞最中、大將分から、マア、引けと云ふ、相圖の赤絹。何が彼のいきり切つた竹槍も、忽ちぐんにやりとなつて納まつた百姓一揆。よう聞けば殿樣は御存じない事。マア〳〵、在所へ去んで、改めて願ひ直すがよいと、皆が云ひ合はして引いて取つた、その池で殿がお果てなされた事は、おい等は知りませぬ。ナウ、皆の衆、さうぢやあるまいか。

百一　さうとも〳〵、ほんの無實の災難。その中でも一の瀨村の金八は、庄屋殿へ未進のたゝまり、家內の借錢に行き詰まつて、とう〳〵在所をぼつ立てられ

百五　親子連れでどこへ宿替へたやら、かいくれ行くへが

百四　知れぬ。その跡へ捕つた捕つたと、大勢の捕り手衆。借錢で繩目を助かつた金八は、何が仕合はせにならうやら知れぬ。

喜助　おい等は此やうに縛られて、女房子が泣くやら狼狽へるやら、引立てられたこの繩目。

百二　常から辯舌のよい庄屋殿

嘉助　どうぞ命を助かる樣に

百三　お願ひ申して

皆々　下されいなう。

庄右　それに如才があらうかいの。伴左衞門さまのお捌き、無成敗と云ふ國法には、ふるなが辯でも叶ひませぬわいの。

伴左　默り居らう。その金八とやらんも黨類の一人、追ツつけ召し捕り、うぬ等と同罪。一々拷問にかけなば、非道の根ざしが

ト彈正へ目をやり

あらかたは相解るでござらう。ナウ、彈正さま。

彈正　されば、なんとばしあらうぞ。

歌之　その金八と云ふは山三どの御家來、不義の落度を悔み、何卒勘當の詫びを賴むと、腰元の宮城野が心遣ひ、殊には金八が日頃の律義と云ひ、かゝる非道に一味せう筈がないが、時世につるゝ人の心

ト山三を見て、こなしあつて

何ともその意を得ぬ。

山三　百姓一揆の手筋より、曲者の詮議とは、伴左衞門どのには流石の計らひ、驚き入りましてござる。拙者愚案を以て察し見るに、此度の朝鮮征伐、この日の本へとりことなせし、大王の姬宮錦花皇女、まつた異國の產物とあつて、久吉公御祕藏の蘆屋の釜、皇女もろとも奪ひ取つて、立ち退きし曲者、御詮議も大方ならず、かく騷々しき折柄、主人義賢公の橫死と云ひ、方々以て、猶豫ならざる四海の騷動。

宮内　殊には蘆屋姬さまにも、その日を變へずあへなき御最期。武將より下し置かるゝ一千町の御朱印紛失。預かり主は名古屋將監どの。

山三　その申譯立たざるがゆゑ、親人は、久吉公よりお咎めの閉門。

歌之　スリヤ、將監どのには

伴左　閉門とな。

彈正　蘆屋姬が相果つれば、緣組みは破談となつて、久吉

公と當家の因みは、切れてあるぞよ。

御國　イヤ、蘆屋姫さまは御存命、恙なうこの館に、お渡りなされてでござります。

彈正　ナニ、蘆屋姫が在命し居るとな。

御國　誰ぞ腰元早枝をこれへ。

藤太　ハツ、早枝どの、御前よりお召しなさるゝ。早枝どの〳〵。

ト早枝、出て

早枝　お召しなされまするかな。

御國　義賢さま眞實の御妹御、蘆屋姫さまと申すは、即ちこの早枝が事。

早枝　ア、申し、あられもない、なんのマア私し風情が

御國　からばかりでは御合點が參りますまい。その譯と申すは、義賢さまの御父刑部さま、四十二のお厄年に、女子一人御誕生。厄の子は父母に祟ると、下世話の譬へも捨て難く、その節これなる山三が父、將監が妻も女子を設く。

山三　大殿にはこれ幸ひと思し召し、取り替へ子となし給ひ、蘆屋姫と名乘つて成長なせしは、父將監が胤、拙者が妹。今日の只今まで妹早枝と名附け、お手廻りに召し使はれしが誠の蘆屋姫。

御國　仔細と申すは、この通りでござりまする。

蘆屋　エヽ、そんなら今の今まで、お主樣ぢやと思ふてゐた義賢さまは、眞實の兄上であつたか。

歌之　さすれば我れ〳〵が爲には、大切な御主人。さうとも知らず

ト早枝と顏見合せ、こなしあつて

ハテ、お姫樣であつたよなア。

山三　右の段々久吉公へ申し上げ、無事に納まる兩國の御緣邊。

長橋　水魚の因みに禁廷の守護、怠りなきやう、忠勤勵まれてよからう。

宮内　お跡目は義丸さま。

主太　千鶴萬龜。

三人　只々

皆々　お目出度う存じまする。

庄右　なんと皆の衆、目出度いではないかいの。

百皆　鮒がごみに醉ふた樣な。

左近　姦しい、扣へて居らう。

庄右　ハイ〳〵〳〵。

彈正　たとへ跡目は立つにもせよ、一千町の朱印紛失し、預かり主は名古屋將監、親の罪子にかゝるの道理、山三この言譯はいかゞ仕る。
山三　その儀も疾くより工夫いたし罷りある。
彈正　スリヤ、其方が
山三　追つつけ相判るでござりませう。
彈正　イヤ、心許ない。
伴左　囚人は追つての拷問、獄屋へ引据ゑ、番卒嚴しく申しつけい。
侍皆　ハツ、立ちませい。
庄右　立てと仰しやる。皆立たつしやれ。
侍皆　きり／＼とうせう。
ト庄右衞門皆々を追ひ立て入る。瀨平、出て
瀨平　いづれも御免下されませ。
ト向うへ出て、繩捌きして
サア、歌之助どの、三寸繩に縛し上げる。それへ出さつしやれ。
歌之　瀨平どの、拙者には何科あつて。
瀨平　緣邊極まる芦屋姫さまと、不義の科で。
蘆屋　コレ、粗相云ふまい。歌之助さまになんの不義が
歌之　證據ばしあつての事か。粗忽云はつしやると免しませぬぞ。
瀨平　證據がある。慥かな證據と申すは
ト口明けの誰が袖を出し
この片袖、覺えがあらう。
ト歌之助、蘆屋、見て、こなしある。
なんと北野天滿宮の繪馬堂へ、かけ奉る誓ひの誰が袖、振りの方は裏櫻、早枝どの、こなたの紋。こちらは五七の桐。歌之助どの、こなたの紋だぞや。
ト山三へ持ち行く。
裏櫻に五七の桐でござる。
ト伴左衞門、長橋なぞへも持つて行き
なんといづれも御覽じたか。これでも兩人は不義密通ではござらぬかな。
ト歌之助、蘆屋、赤面のこなし。藤太郎いろ／＼あつて
藤太　オヽ、さうぢや。掟を背く不義の大罪、助けては政道が立ちますまい。二人とも覺悟して、待つてゐさつしやれ。
御國　その品これへ持て。

再演の

繪番附

瀨平　不義の證據、篤と御覽じ。
ト渡す。御國御前、見て、こなしあつて
御國　なるほど疑ひもなき證據の誰が袖。
瀨平　御政道は逆磔刑か。
藤太　但し牛裂きか八つ裂きか。
瀨平　この場の仕置きは
兩人　いかゞでござるな。
御國　藤太郎、それへ出い。
藤太　ハツ。
ト向うへ出て
御用でござりまするか。
御國　其方とても不義の科、牛裂きとも八つ裂きとも、覺悟は極めて居るであらう。
藤太　ア、イヤ〳〵、後室樣、この藤太郎を不義者とは。
主水　證據と云ふはこの艷書、早枝さま參る、焦るゝ藤太郎より。
藤太　それは
ト取りに行くを、宮內、留めて
宮內　人の七難その身の十難、立ち騷がずとも不義の落着濡れの文言、封じを切つて讀み上げうか。
藤太　サアそれは
主水　不義と云ふたが誤りか。
兩人　サア〳〵〳〵。
主水　なんとでござる。
御國　瀨平、そちとても不義のなかだち、吟味いたさば、どの樣な事が知れうも知れぬ。但し繩かけ詮議せうか。
瀨平　サ、それはな。
御國　この場で云はぬが詮議の祕密。お勅使の御前と云ひ立ち騷がずと、マア〳〵、扣へたがよからう。
瀨平　ムウ。
トこなしあつて
然らば扣へて居りませう。
長橋　先づ湖月の一卷をお勅使樣へ
御國　なるほど。寶藏の守護を申し附け置きし、物草太郎をこれへ。
太郎　イヤ、召すまでもない。太郎はこれに錠前戶前の、
ト此とき綟子張り障子引き拔く。
御番をして罷りある。
彈正　然らば寶藏を開き、湖月の一卷を持參いたせ。
太郎　イヤ、寶藏を見るに及ばぬ。その卷物は失ひました

彈正　なんと。

太郎　どうでも昨夜盗人が入つたかして、卷物は失ひました。

左近　イヤ、紛失とばかりでは、この場が濟みますまい。

歌之　御番の役目は太郎どの。

主水　盗賊の手掛りがござるか。

宮内　樣子を云はつしやれ。

歌之　太郎どの。

四人　なんとでござる。

太郎　イヤ、なんとでもない。錠前戸前の番はすれど、藏のうちの番はせぬ。失はうがすじらうが、拙者は存ぜぬ。盗人の隙はあれど、守り手の隙はないとはこの事でござらう。ハア、氣の毒千萬な。

長橋　一卷紛失とあつては、違勅のお咎め、家國にかゝわる一大事であらうぞや。

歌之　何にもせよ、盗賊の所爲とあれば、草を分つて、ソレ。

　ト花道へ駈け出す。

山三　歌之助どの。待つた。

歌之　イヤ、盗賊のあり所を

山三　かほどの曲者、其許が尋ね來うかと、よもやこの邊に狼狽へては居るまい。お勅使お成りの場席と云ひ、立ち騒いで尾籠千萬。

歌之　ぢやと申して

山三　ハテ、喧嘩過ぎての棒ちぎり、益ない事ぢや。ア、扣へ召され。

歌之　エヽ、殘念な。

　トこなしあつて、扣へる。

伴左　湖月の卷紛失とあつては、差當る違勅のお咎め、ハテなんとも早。

　トバタ／＼にて、股立ちの侍ひ、走り出て

侍ひ　申し上げます。夜前寶藏へ盗賊入り、湖月の一卷を奪ひ取つて立ち退く所、番人居り合ひ、搦めんと致すうち、夜も明け面を見れば、山三さまの御家來岡平、死物狂ひと相働き、我れ／＼が手には及びせぬ樣にござりまする。

彈正　につくい下郎め、踏附け繩打つて、これへ引摺ゑい

侍ひ　畏まつてござりまする。

　ト引返し入る。

彈正　盗賊と云ふは山三が家來。

山三　岡平は勘當いたした。
彈正　なんと。
山三　去秋祭禮の折柄、酒興の上口論を仕出だし、供先を騒がせし烏滸の奴、その場より暇をくれました。その岡平が、ハテ、盗賊ぢやよなア。
　トこなし。
彈正　して、不義者の落着はいかゞ致す。
歌之　この場の潔白。
蘆屋　この身の言譯。
　ト歌之助、腹切らうとする。蘆屋、懐劍にて、自害せうとする。左近、宮内、左右にて留める、
御國　イヤ、お勅使の目通り、血をあやす事は叶ふまい。
兩人　でも。
宮内　後室様がお留めなさるゝ。
左近　先づ〱。
　ト鎭める。
瀬平　して、不義の掟
藤太　お家の御政道は
兩人　いかゞなさるゝ。
御國　二人ともこの場より追放。

兩人　エヽ。
御國　とサア、この義丸が情の政道。
　ト義丸、うなづく。
追放の身は、心措きなう、ナ、二人とも合點が行たか。
　ト歌之助、こなしあつて、大小を義丸が側へ持ち行き蘆屋連れ、下へ下り
歌之　お情の御追放。
歌蘆　有難う存じまする。
山三　裁許次手に長谷部藤太郎、國境より阿呆拂ひ。
藤太　エヽ。
山三　とサア、これも卽ち若君の御政道。
　ト義丸、うなづく。
この場に叶はぬ。立つて失せう。
瀬平　藤太郎どの、其許もお情の御追放。
藤太　有難いと云ひたいが、一向やくたい、亂騷ぎぢや。
　トバタ〱にて、侍ひ、走り出で
侍ひ　岡平を召捕らんと致せど、一向我れ我れが手に余つて見えまする。
瀬平　高が一人の下郎、新手を入れ替へ、召捕らつしやれ
侍ひ　心得ました。

ト引き返し入る。

彈正　死物狂ひの岡平、並々では叶ふまい。犬上團八、參れ。

團八　ハア、。

ト橋がゝりより、團八、上下股立ちにてツカ／＼と出る。

彈正　岡平に繩打ち、湖月の一卷を取り返せ。

團八　畏まつてござりまする。

彈正　早く／＼。

團八　ハツ。

ト十手取り出し、凛々しき見得にて、向うへ走り入る此うち太郎、しびれの切れる見得にて、疊の藁しべを取り、額へ附けてゐる。御國御前、心遣ひいろ／＼あり、爰にて氣を替へるこなし。

御國　九獻を持て。

鷗彌　ハア。

ト三寶杯、長柄の銚子を持ち、出る。

宮内　アイヤ／＼、お勅使のお入りと云ひ、かゝる騷動の折柄、御酒宴はお抑へなさるがよからう樣に存じまする

御國　山三、伴左衞門、皆も免してたも。呑まねば命が續かぬわいなう。

ト杯受ける。近習、酌する。

彈正　そろ／＼と放埓の化の皮。侍ひどもは居らぬか。科人め等を早くぼッ拂へ。

中間　ハア、。

ト中間大勢、割竹持ち、出る。

お立ちなされい。

伴左　不義の仇名は、互ひに若氣の水の出ばな。歌之助どの、主人の片割れ蘆屋姫さま、隨分ともにお勞り申して

トこなしあつて

イヤ、用捨なく追ッ拂へ。

歌之　仇も情もこの身のさび。

蘆屋　野の末山の奧までも

藤太　死なば諸共、この藤太郎も

ト蘆屋が側へ寄るを

中間　こなたはこちらへ行かつしやれ。

ト首筋を持ち、西の方へ突きやる。

藤太　なんの事ぢや。

蘆屋　御前樣。

歌之　山三どの。

山三　錦を飾つて故郷へ歸りし、朱買臣が例もあれば、やがて吉左右
兩人　おさらばござりまする。
ト合ひ方になり、歌之助蘆屋は東の通ひ道、藤太郎は西の通ひ道へ行きかゝり、双方立ち留まる
歌之　とは云ふものゝ、いづくを當て
蘆屋　泊り定めぬ旅の空。
藤太　宿貸なしの一人旅。
歌之　サア、お姫樣。
藤太　思へば
彈正　ソレ、ほッ立てい。
中間　ござりませう。
ト追つ立て、東西の通ひ道、半ばへ行く時分に、向うバタ／＼にて、岡平、大童抜刀にて、捕り方の侍ひ四人、タテの見得にて出る。後より團八、附き出で、戸家際に扣へる。岡平、花道にて、立ち廻つて
皆々　動くな。
ト圍ふ。
彈正　下郎め、何ゆゑ湖月の一卷を盗み取つた。
岡平　主人山三に勘當受けたこの岡平、彈正さまがお家の伯父御を功に着て、江州一國を手に入れんと非義非道。當家の重寶湖月の一卷を盗み出して渡せよと、荷擔の者に密事の段々、この奴が聞き取つた地獄耳。先へ廻つて奪ひ取つたは、こなたの手筈を違へんため、主人へ勘氣の詫の種と、手に入れたこの一品。五りん五體は千切れ千切れ、ばら／＼になると云つても、いつかな一卷渡す事はならない。厭だ、何を馬鹿な。
彈正　引かれ者の小唄、聞くに及ばぬ。早く繩ぶて。
皆々　捕つた。
ト立ち廻りにて、本舞臺へ來る。太郎、これに目を留め、じつと見てゐる。岡平、切りまくる。皆々逃げ込む。彈正、諸士に目配せする。藤治、伴藏、十平、ずつと行つて、岡平を引き廻して、圍ひ
三人　動くな。
ト反り打つ。
岡平　なにを。
トキッと見得。團八、花道眞中へ出て
團八　イヤ、手前達の手にやア合ふまい。扣へさつしやれ
ト三人、扣へる。團八、本舞臺へ來て、繩捌きをして
サア、岡平、犬上團八が繩打つ。尋常に腕廻せ。

岡平　彈正さまのお鬚の塵を取つて、俄か立身のがらくた武士、うぬも命がねくさつたな。

團八　ハヽヽヽヽ、當時日の出の犬上團八さまが、お手づから繩を打たつしやる。善光寺の御印文より、まだ〳〵有難い事だと、お念佛でもこつき出せ。

岡平　犬侍ひに刀は穢れと思へど、死物狂ひに相手は嫌はぬ。

團八　お助けなされと、吠え面かわくを見る樣な。

岡平　見事捕るか。

團八　捕つて見せう。

岡平　何を小癪な。

團八　捕つた。

ト立つて段々ある。團八、十手落され、南無三と行くを、岡平、切つて行く。ト瀨平、ずつと行つて、岡平を支へる。この隙に團八、岡平が懷より、卷物の半分を引き出す。岡平、寄るを、瀨平、隔てる。

團八　一卷は奪ひ返しました。

彈正　相違ないか、改めい。

團八　ハツ。

ト開き

廻文を以て觸れ廻る條、此度一味の方々、大望成就の上美濃近江のうちにて、所領一圓恩賞として、望みたるべきものなり。こりやどうぢや。

ト岡平、瀨平を引き廻し、廻文を引取り、見て

岡平　湖月の一卷と思ひ、首尾よく奪ひ取り、お裏門で追手の者と爭ふうち、引裂かれた卷物のこの片割れ。

ト見て

所領一圓恩賞として、望みたるべきものなり。一味筆頭犬上團八。

ト團八、ぎつくり、瀨平、それをと寄るを、岡平、ちよつと當てる。岡平、こなし。

嬉しや、詮議の釣り緒に取り附いたわえ。

團八　イヽヤ、知らぬ、覺えない。

岡平　あつてもなくても詮議をし拔く。

團八　何を猪口才な。

山三　廻文の片割れ、これへ持て。

岡平　ハツ。

ト山三へ持ち行く。

お旦那、歸參の功にはなりますまいかな。

山三　半ば殘りしこの廻文、叛逆人の名が知れねば、あつ

て益ない反古同然。

岡平　御尤も。サア、團八、括し上げて拷問する。腕廻せ

團八　イヽヤ、犬上團八と云ふは身共ばかりぢやない。廣い世界に同じ苗字は澤山ある。

岡平　所を拷問して、何もかも云はして見せう。

團八　人の詮議よりうぬが詮議。湖月の巻のあり所、眞直ぐに白状いたせ。

岡平　腕廻せ。

團八　うぬ、繩かゝれ。

岡平　われから

團八　うぬから

ト立ち廻りにて、橋がゝりへ寄る見得にて留まる。

彈正　うぬ、下郎め。

ト刀取り、立ち上がる。

伴左　彈正さま、これは

彈正　イヤサ、これは……手ごわき岡平、この彈正が繩ぶたうと思ふて

伴左　ハヽヽヽ、今の廻文、心に覺えがあればこそ、俄かの轉動。

彈正　なんと。

伴左　非道にもせよお家の伯父御、指す者は一人もござらぬ。あはてずとも、マヽ、お下にござれ。

彈正　ムウ。

トこなしあつて

下郎めを早く

伴左　團八を召捕れ。

岡平　腕廻せ。

團八　何を。

ト立ち廻つて、團八、岡平を蹴やり、空井戸へ飛び込む。

岡平　南無三拔け道。

伴左　ぼッかけい。

岡平　ハッ。

ト續いて飛び込む。太郎、ツカ／＼と下りて、井戸を覗く。

彈正　馬鹿め、すッ込んで居らう。

ト太郎、悄りして、ちやつと下に居る。

長橋　折惡しき寶の紛失、方々にもさぞ當惑であらう。今宵は當所の一の宮を旅館とすれば、手懸りを求め後より吉左右。

山三　スリヤ、暫時の御用捨を

長橋　猶豫いたすも公の政道。お勅使樣には、先づお立ちあられませう。

ト合ひ方になり、光若を連れ、長橋、立たうとする。

トこの時

太郎　お勅使、待つた。

山三　物草太郎、お勅使を何ゆゑ。

太郎　されば、思ひ出した事がある。

宮内　思ひ出したとは、そりや何を。

太郎　湖月の卷物の事を。

主水　卷物はいかゞ致した。

太郎　その卷物失なひは致さぬ。あるぞ〳〵。

宮内　何を馬鹿な、紛失せし一卷がいづくにあつて。

太郎　イヤ〳〵、失なひはせぬ。昨夜から俺が持つてゐたのを、とんと忘れてのけた。あらう事か、今莨盆の火入れで、この袂を燒かうとした、既の事に焦げつかさうとした、所で思ひ出した湖月の卷物。

ト懷より出して

大方この事であらう。

ト下に置く。宮内、取つて

宮内　疑ひもなき湖月の一卷。

太郎　疾から出したらよかつたものを、とんと忘れてゐた。我が身ながらも阿呆かと思はれる。

ト宮内、長橋へ持ち行く。御國御前、こなしあつて、又酒呑んでゐる。

山三　スリヤ、廻文と入替へ置いたは。

太郎　それも身共ぢや。とんと忘れてゐました。

山三　一卷と廻文を入替へ置き、非道の根ざしを告げ知らせし、物草太郎が頓智、ハテナア。

太郎　疾から思ひ出したらよかつたもの。何もかも濟んで仕舞ふて、後の祭りで思ひ出した。とんと阿呆かと思はれる。ハヽヽヽ。

長橋　物草が計らひ、帝樣の叡聞に達し、恩賞は後日の沙汰に及ぶであらう。一卷慥かに落手しました。

彈正　して、御朱印の落着は、山三、なんとぢや。

山三　今ぞ開く武將の賜物、いづれも御覽なされ。

ト箱を拳にて打つ。四方開きにて、中に短刀ある。

皆々　これは。

山三　親の罪子にかゝるの本文。言譯なくば某切腹いたせよとある、久吉公よりの謎の短刀。御朱印破却の申し

譯は、名古屋山三、切腹仕る。
彈正　イヽヤ、そりや叶はぬ。斷罪又は縛り首だ。者共、山三に繩打て。
　ト太郎、怖りして、片隅へ引き込む。
御國　イヤ、斷罪に及ぶまい。
彈正　斷罪に及ばぬとは
御國　ハテ、今山三を手にかけて、御朱印のありかゞ知らるゝでもあるまい。とあつて目前落度ある山三なれば、此まゝにしては掟が立たぬ。もと父の將監は、尾張の國名古屋の生れ、山平と名乘り小田家へ下部奉公。春永公逝去の後、當家に仕へ次第に立身。倅山三と二代續きし忠臣も、水の泡なる今日のしだら。只今より祿を召し上げ、將監が以前の如く、下郎となして召し使ふが、卽ち仕置き。この短刀は義丸が預かり置いて、サア、酒には醉ふても心は狂はぬ、この場の政道。
宮內　スリヤ、山三どのを
主水　下郎となして
御國　御家老の奴姿も、又氣が變つてよからうぞや。
山三　ハツ。
彈正　盛切り奴となり下れば、座席に不都合な名古屋山三、ソレ、白洲へ引き下げい。
三人　山三どの、お白洲へ下がらつしやれ。
　ト山三、こなしあつて、差添へを取り、義丸が側へ置き、下舞臺橋がゝりの末座へ行く。
山三　下郎となるも政道の一助、承知仕つてござりまする。
伴左　朱印の日延べ百日のお願ひは、この伴左衞門が命に代へて、御赦免を蒙り、心靜かに詮議いたす。山三どの、貴殿の胸中、伴左衞門推察仕る。佞人忠臣に似るとは、亂れかゝりし世の有樣。月を覆ふ村雲も、時至れば風又これを拂ふのことわり。ハテ、あたら侍ひを
　トこなしあつて
世の盛衰ぢやよなア。
義丸　お母樣、あのお勅使樣と、奥へ行て遊びたい。
光若　某も義丸と遊びたい、
長橋　ほんにこれはよいお友達。妾も暫らく休息しませう。
宮內　お勅使樣の饗應は、觀世四座の猿樂より、でん〳〵太鼓　笙の笛。
左近　そのお相手は御家中の童達。

主水　我れ〳〵は宿直の御番。
彈正　名古屋山三は下郎の役目。
三人　奴[illegible]屋にて何かの指圖。
山三　お庭の箒目、切り水の打ち様まで、篤と傳授を承はらう。
御國　自らは座を替へて、又改むるこの杯。
彈正　底の心を聞かぬも祕密。
宮内　今の廻文。
主水　伯父御の底意。
左近　善惡二つを
伴左　相糺さぬがこれも祕密。
御國　山三は次へ
三人　立たつしやれ。
山三　ドリヤ、參らうか。
彈正　イザ、お勅使様。
長橋　方々、案内。
伴左　若君、御前。
御國　皆の者。
皆々　先づお入りあられませう。
ト唄になり、長橋、一卷を持ち、勅使に附き添ひ、義丸、御國御前、少し醉ひたる體、腰元、介抱して、伴左衛門、山三へ心を殘して、宮内、主水、左近、奥へ入る。山三を、藤治、伴藏、十平、取り卷き橋がゝりへ入る。跡合ひ方。彈正、思案をしてゐる。太郎、小隅より向うへ出で伸びをして
太郎　ヤレ〳〵、退屈や〳〵。なんぢやゝら寶があるわのないわの、ひくの山のどつたらくつたら、ほつこりと退屈いたした。伯父御様、ア、、お前は根のよいお人ぢや。サア〳〵、ちと打ちくつろいで、これから又四方山のお話しを仕らう。
ト彈正が側へ座る。
その話しと云ふは、さる座敷で、尾の二つある猫めか、夜になると眞白な手拭をかづき居つて
彈正　ヤイ〳〵、馬鹿盡さずとすッ込んでゐ居らう。
太郎　イヽヤ馬鹿ではない、化けの話しぢや。
彈正　まだ〳〵此奴、すつ込んでゐ居らう。
ト睨む。
太郎　オットモウ。
トこちらへ來て
ても、澁い顏ぢや。イヤ〳〵、化けの話しをしかゝると、

えて厠に行くのを案じる。化けの話しはやめにしませう。
果報は寐て待てぢや。ドレ〳〵。
ト二重舞臺へ行く。
伯父御樣、お前も寐やしやりませぬか。
彈正　ハヽヽヽ、かやうな呆氣を武士に取立て、知行を
下されし義賢の呆氣者。
太郎　及ばぬ事に近江一國、存まうとするもいかい呆氣。
彈正　なんと。
太郎　世の中に、寐るほど樂はなきものを、知らぬ阿呆が
起きて働く。ハヽヽヽ、ドリヤ、一睡と出かけうか。
ト三寶を枕として寢る。始終合ひ方。彈正、あたりを
見て、のめつてゐる瀬平を引き起こし、息を入れる。
橋がゝりより岡平、出て、この體を見て、窺ふ。
瀬平　彈正さま、團八が召捕られて白狀いたさば、こなた
を始め我れ〳〵が身の上。この仕舞ひはどうせうと思し
召す。
彈正　山三めを遠ざけたれば、先づ一つの安堵。御國御前
が酒興を幸ひ、最前の一品。
瀬平　先刻物草めに鼻を明かされ、旣の事に毒の手盛りを、
食らはうと致した。

彈正　大事ない。法橋に申し附け、今一藥調へ置いた。そ
の銚子を持て。
ト瀬平、長柄の銚子を持つて來る。彈正、毒を仕込む。
瀬平、あたりを窺うてゐる。しか〴〵あつて、彈正、
銚子を持つて、立ち上がる。
太郎　見附けたぞ〳〵。
トこの聲に恟りして、長柄を下に置く。太郎、無駄事
を云うて、寢返る。
瀬平　よくどぶさつて居ります。
彈正　誠々。
ト落着くこなし。
瀬平　今一應毒味を。
彈正　されば、何者にぞ試みをさせたいものぢやが。
岡平　その毒味、拙者仕らう。
ト向うへ出る。
瀬平　わりや岡平。
彈正　空井戸の拔け道は大手の松原。詮議の手がゝり、團
八は取り逃がしたれど、彼れは枝葉。謀叛の根ざしは伯
父御樣。
瀬平　すりや。

ト瀬平を引き退け、彈正へ詰めかけ

岡平　エヽ、こなた樣はなう。坂本に在城あつて、何暗からぬお身を以て、榮耀に誇る御謀叛の覺し立ち。コレサ、異國本朝、昔が今に至るまで、道ならぬ事を企み、本意を達した者は一人もござらぬわいなう。こなた樣を本心に導きなば、義丸さまのお身の上も恙なく、お家は長久。下郎風情が慮外無禮の御意見も、何卒一つの功にして、お旦那の勘當が赦されたいばつかり、一大事を懺悔なされ、若し下郎めが他言いたすと、思し召す心があれば、コレ、この毒をうち食らつて、奴が命は伯父御樣へ進上申す。どうぞお心を飜して下され。瀬平どの、お身も御意見を頼み申す。伯父御樣、彈正さま、善惡の御返答、承はりたうござりまする。

彈正　ハテ、ごくにも立たぬ事を。無駄言吐かずと、毒味いたせ。

瀬平　この場へ出たはうぬが不運、毒味せずば生けては置かぬ。どちらの道にも死ぬる命、早く食らへ。

岡平　イヤ、本心を聞かぬうちは、毒と知つて毒味はせぬ。

彈正　スリヤ、在命して、身共が企みを訴人するのか。

岡平　イヤ、全く。

瀬平　然らば食らふか。

岡平　サ、その儀は

彈正　下知を背くか。

岡平　サア

瀬平　毒を呑むか。

岡平　サア

彈瀬　サア〱〱、岡平、どうぢや。

ト岡平、いろ〱あつて

岡平　スリヤ、いかやうに云ふても、所存を改め善心になる心はござらぬよな。

彈正　くどい事を。

岡平　ホイ。

トこなしあつて

さうだ。

ト長柄を取り、銚子の口よりぐつと呑み乾す。彈正、二重舞臺へ行く。

瀬平　ハテ、思ひ切つた事をひろいだ。

岡平　伯父御樣、持悶の通り毒味したぞや。毒藥を食らひましてござるぞや。こなたの非道を挫かんため、手に入

れんとした一卷は、早先達て盜み取られ、摺り變つた廻文の、宛名はなくて證據にならず。なす事する事、鶍の嘴と食ひ違つては、よく〳〵神にも佛にも見放された、岡平が一生の浮沈。勘當詫びの綱も切れて、所詮くたばるこの命、武士らしく腹かッ捌くも存じたれど、毒を食らふて相果てるは、こなたの非道を訴人せまじと云ふ下郎が潔白。とは云へなんの功もなく、犬死する岡平が無念さ。本意なさ、御推量を下されい。

瀬平　もうよいか、それでもうぬかす事はないか、今が最期だ。

ト切らうとする。

彈正　待て〳〵。とてもくたばる奴、語り聞かす身共が存念。先頃義賢在京の砌り、土民原に一揆を起させ、その騷動の紛れ、一揆の頭たる浪人に云ひつけ、義賢を殺させたは、この彈正が指圖だわい。

岡平　ナニ、スリヤ、御主君義賢公を殺させたは、こなたの指圖であつたよな。

瀬平　麻杵、鐵像、一千町の御朱印を盜ませたも、伯父御の計らひ。

岡平　ムウ、シテ、その二品は

彈正　腹心の味方に云ひつけ、破却させた。

瀬平　追つゝけ國は伯父御の押領。草葉の蔭から眺めてゐ居らう。

岡平　エヽ。

彈正　もうそろ〳〵と廻りさうなものぢやが

岡平　アイタヽヽヽ。

ト胸を撫で、苦しむ。

瀬平　ソリヤ、廻つて來たぞ。

彈瀬　うまい〳〵。

ト岡平、苦しむ。兩人、見て、笑壺のこなし。岡平、いろ〳〵あつて、大きな針を出し

岡平　こいつぢや。襟の中に木綿針がけつかつた。

ト兩人、顏見合はせ

彈正　目前で食らふた毒酒。

瀬平　効き目のないは

兩人　ハテ、心得ぬ。

ト太郎、起き直つて

太郎　その筈ぢや。そりや毒ではない。

兩人　なんと。

太郎　さつきに奥で醫者坊主が持つてゐた、砒霜石斑猫、

目ふる間に摺り替へて置いたは、わしが手合はせの不換
金酒、呑んだる奴どの、悦ばつしやれ、三年の風もさめ
るであらう。
岡平　お庇で大分心よくなりました。
ト彈正、瀬平、悸り。
兩人　スリヤ、毒藥と思ふたは
太郎　忽ち變じて壽命の藥。
瀬平　うぬ。
ト行くを、岡平、引き廻して
岡平　その計らひを醫者どのに聞いたゆゑ、この岡平がな
んの苦もなう、呑み乾した酒よりは、伯父御樣、一杯參
つて
ト瀬平を取つて投げ
お目出度う存じまする。
彈正　阿呆め、うぬ、たばかつたな。
太郎　イヤ、たばかりはせぬ。欺したのぢや。俺を阿呆ぢ
やと云ふ伯父御樣、こなさんもいかい阿呆ぢや。
ト彈正、ぎしむ。
ハヽヽヽ、ひもじうなつた。奥へ行て茶づつて參らう。
ト早き序の舞ひ、太郎、ついと入る。

岡平　サア、伯父御樣と尊敬はこれ迄。覺悟さつしやれ。
彈正　大事を聞いた下郎め、瀬平、ソリヤ。
瀬平　くたばつて仕舞へ。
ト反り打つて行くを、引き廻し、彈正へ詰めかける。
彈正　下郎め、手向ひか。
岡平　オヽ、手向ひぢや。お家の滅亡を好む伯父御、それ
に荷擔人の世繼瀬平、どいつもこいつも纏打つて、主人
の目通りへ引く。腕廻せ。
瀬平　につくい下郎め、うぬ。
ト反り打つて、かゝる。この時、伴左衞門、ずつと出
て、彈正を下舞臺へ蹴落とし
伴左　彈正どのを圍へ。
ト庄右衞門、百姓皆々、竹槍を持ち、出て
皆々　動くな。
ト圍ふ。
彈正　うぬ蟲めら、寄りやアがるな。
岡平　伴左衞門さま。
伴左　非道の段々白狀させしは岡平が手柄。山三どのより
勘當受けしと僞りしも、まツかうなさん手段であらう。
岡平　科ない科を拵へて、主人の不興と僞つたも、この坪

へやらんが爲。萬事首尾よう

伴左　百姓を虐げ、義賢公に罪を負はせし非道の報ゐ。忽ち巡る竹槍の刑罰、

庄右　大勢が命に及んだ、惡者の根元。竹槍で芋刺しにしてしまへ。

皆々　突き殺せ〳〵。

伴左　待て〳〵。大事の囚人、山館へ押籠めて、後日の裁許。

庄右　そんなら山館へ

百皆　ほひまくれ〳〵。

彈正　エ、、殘念な。千丈の堤も蟻の一つ孔。顯はるゝからは絕體絕命。瀨平、ぬかるな。

瀨平　心得ました。

ト序の舞ひになり、彈正、瀨平、百姓を切り立て、入る。

岡平　伴左衞門さま。

伴左　この樣子をお勅使へ申し上げん。其方は一家中へ告げ知らせよ。

岡平　畏まつてござりまする。

伴左　早く行け。

岡平　ハッ。

ト向うへ、走り入る。伴左衞門、こなしあつて

伴左　先づ一人は片附いた。

ト笑壺のこなし。この時西の柴垣より

團八　伴左衞門どの、待つた。

ト向うへ出る。合ひ方になる。

伴左　其方は

團八　本國より內通あつて、卽ち割符。

ト印鑑を出し、下座へ行く。改め見て

伴左　こりやこれ大明遼東の守道官、荊州が自筆の割符。所持せし汝は

團八　此度久吉が異國追討、朝鮮國危ふきに依つて、大明へ加勢を乞ひ望む。某は荊州が腹心、祖承訓と申す者、この日本へ間者となつて押渡り、かく姿を替へ、當家へ入り込み窺ふうち、不破伴左衞門へその割符を以て合體せよと、本國より知らせの內通。

伴左　扨ては荊州が臣下祖承訓でありしよな。この割符を所持すれば疑ふに非ず。併しながら本國より渡海の航程、存じて居らば承はらう。

團八　もとより委しき土地の案內。大明より朝鮮の都まで、

一千二百里の道を隔て、國境に鴨緑江の大河あつて、これを渡り、平安道の巷に出づる。

伴左　龍川の港を過ぎ、牡丹臺の構へはなんと。

團八　三重に櫓を築き、後は高山峨々とそびえ、貝水の流れを引いて、要害正に嚴然たり。

伴左　して、鳥嶺の砦には

團八　二十萬の勢を集む。

伴左　洞水の關所は

團八　警固きびしく、その割符を以て軍事の往來、同志討ちせざる味方の手筈、かくの通りでござりまする。

伴左　ムウ、地の理に詳しく、殊にはこの割符。

ト思案して

大事の役目云ひつけくれう。近う。

團八　ハツ。

伴左　祖承訓、よく計らへ。

ト書物を渡す。

團八　ムウ、密事の文體、悉く朝鮮の文字。

伴左　和訓に直せば三十一字。

團八　故里の、思ひ出にせん時鳥

伴左　老曾の森の夜半の一聲。

團八　時刻を計つて

伴左　萬事首尾よく

團八　拙者はかしこへ

伴左　早く。

團八　ハツ。おさらば。

ト向うへ走り入る。伴左衞門、見送りながら、立ち上がり、こなしあつて

伴左　四の宮藏人、名古屋山三は、佐々木の館に雨の翼藏人は異國にて討ち死、山三は改易、伯父彈正を押籠めたれば、何もかも思ふた壺。只心がゝりは、尋ね求むる古主の公達、巡り逢ふべき時節もあらうか。

ト刀の鐺をとんと突いて

ハテ、なんとがな。

ト思案する。序の舞ひ打ち込む。チヨン〳〵にて、道具廻る。

造り物、總網代塀、上手に切り戸、眞中に櫻の幹、破風より一面に糸櫻の釣り枝、橋がゝり、數寄屋々體、この取り附け、よろしくあり。山三、剃り下げ頭、奴の形にて、竹箒を持ち、敷石に腰かけ、花を

見てゐる。道具納まる。

ト合ひ方になる。

山三　頃は二月の、氣候に先立つ花の盛り。それには引替へ、今も降り來ん雪の空。寒暖の定めなきも、人氣につるゝ世上の有様、お家の成行き、ハテ、なんとがな。

トこなし、序の舞ひになり、向うより、巖助、峰八、谷平、岨六、右四人、菖蒲革の揃ひの奴にて竹箒、水手桶など持ち出る。

巖助　サア〳〵、來い〳〵。なんとお上から、變つた事を仰せられたではないか。

峰八　されば、御家老の山三さまを、奴仲間へ入れいとの事だ。

谷平　なんぞ過怠でもあるべいか。氣の毒な事ではないかい。

岨六　どう云ふ縮尻をしられた事だな。

谷平　それはどうか知らないわい。

峰八　時に御家老はどれにござる。

岨六　お白洲へ廻られた筈だが

巖助　そりやこそ爰にござる。ネイ〳〵〳〵。

ト辭儀して

御家老へ申し上げます。あなた樣は下郎めらに、仲間入りをなさるゝさうな。近頃以て御苦勞千萬な儀でごわります。

岨六　何をぬかすやら。仲間入りを召さるゝからは今までとは違ふ。御家老職でも五文と五文だわい。

峰谷　さうだ。向後は朋輩だわい。

巖助　ほんにさうだ。ハ、、、、。

山三　なるほど向後はそち達とも朋輩。部屋頭の佐五平が世話で、この如く剃り下げ頭、お仕着せの臺無しまで、すつぱりと出來上がつた。イヤモウ、窮屈な家老より、奴の所在は氣散じで百貫增し。今からわれ達も懇ろに賴むぞよ。

峰八　えらいワ。なんと奴仲間が華やかになつたぞよ。

谷平　さうだわい。イヤ、お掃除を仕舞つたれば、ちと呑氣をやるべい。

岨六　一服吸ふべいわい。

ト皆々、下にゐる。山三も畏まり、下にゐる。

巖助　時に奴一卷きの事を、あらかた數へずばなるまい。

山三　イヤモウ、萬事指南を受けねばならぬ。よろしう賴む。

峰八　待てよ、奴になつて名古屋山三でもあるまいかい。
山三　いかさま、名を變へずばなるまい。
谷平　カウツ、なんと附けたがよからう。
山三　なんぞよい名がありさうなものぢやが。
岨六　からはどうだ。山三の三の字を取つて、三吉とはどうあらう。
巖助　どうやら馬方の樣なぞよ。
峰八　三九郎では稻荷さまと紛れうし
谷平　三五郎は色事師の樣なり
岨六　三助、三藏、三平。
峰八　待て〳〵。三平がよからう。
山三　ナニ、三平、三平、これは覺えようてよい名ぢやわい。サテ、これからが箒の持ちやう、水の打ちやう、お草履の摑みやうなどは、いかう祕密のある事さうな。
岨六　さうだわい。先づ式日の御登城、或は御社參御佛參など、その時に依つて眞行草と、振り分ける事だわい。
山三　なるほど平常見覺えてはゐれど、手に持つて見ねば甚だ心許ない。
巖助　先づ常のお草履は、どう構へてどう振つて行て、主人のお側へどう直す分の事だわい。

ト居ながら、草履摑きをする。山三、不器用に眞似をする。
峰八　夜が明けるとお庭の掃除だ。竹箒をかう目八分に構へて、お白洲を鍵の手に取つて、とう〳〵掃いて廻るぢや。
ト掃く眞似する。山三、その通りする。
谷平　その後が切り水手桶をかう持つて、隨分手輕くばしり〳〵、早う打つて廻るぢやわい。
ト右の通り眞似する
岨六　先づそこ等が一通りの役目だ。跡は追ひ〳〵に指南をすべい。
山三　何さま一應で覺えらるゝ事ではない。兎角われ達を賴むぞ〳〵。
巖助　それはさうと、仲間入りの酒を出さぬかい。
山三　そこは拔からず、見てたもれ、瓢簞酒を求めて置いた。
ト腰に附けし瓢を出す。
峰八　えらいワ、呑めると云ふものだワ。
谷平　寐轉べ〳〵。
ト皆々寢腹這ふ。トこの時、切り戸口より、若菜、出

て

若菜　コレ〳〵、御前樣がお陽をお引きなさる。其まゝで
これへお出で遊ばす。そなた衆は扣や〳〵。

岨六　御前樣がお越しなさるゝ。皆退れ〳〵。

ト橋がゝりの方へ、皆々扣へる。ト三味線入りの下り葉になる。ト切り戸より御國御前、浴衣にひつしごき、湯上がりの拵らへ、駒下駄にて、柏木、棒鞘を持ち、浮舟、横笛、朝顔、空蟬、常夏、箒木、初音、梅ケ枝、手習、附き出る。

柏木　仰せに任せ、切柄はめし棒鞘の刀、持參いたしましてござりまする。

ト御國御前へ渡す。

女皆　御前樣、何ゆゑお刀を

御國　女ながらも、武道を捨てざる國の政道。昨日求めしこの新身の刀、切れ味の程を思ふがゆゑ、下樣のうち誰れにもあれ、手討ちにして刀の切れ味を試みやうと思ふて。

皆々　エヽヽ。

ト奴皆々、顏見合はせ、震ふ。御國御前、刀を拔いて、差し出し

御國　柏木、水。

柏木　ハイ。

御國　早う持ちや。

柏木　ハイ。

ト水手桶を持ち出で、柄杓を取り、刀を洗ふこなし。御國御前、取り直す。ト空蟬、手拭ひを取り、拭ふこなし。奴皆々、震うてゐる。

御國　あの者共を目通りへ呼びや。

若菜　皆召しまする。お目通りへ出や。

ト皆々、尻込みするこなし。

ハテサテ、出やと云ふのに。

ト怖々向うへ出て

岨六　へイ、奧樣へ申し上げまする。何を隱しませう。下郎めには七十になる悴もあり、三つになる母がごわります。奴めがくたばりまするると、母や悴が路頭に立つでごわります。どうぞ下郎めはお除け下されて、お試し者はこの奴めがようごわりませう。

峰八　何をぬかすぞい。イヤ、申し上げます。下郎めはどうでも不死身か致して、切つても突いても根つから血が滴りませぬ。お試し遊ばされても血が出ないでは、張合

ひがごわりますまい。外の者に遊ばされたがよくごわりませう。

谷平　イヤ奥様、恥を云はねば理が聞こえないでごわります。下郎めはさる人にうつ惚れまして、その花代が出來ないから、着替への黒どんに髭抜き鏡を添へまして、質屋へばらしたでごわります。この質受けを致した上で、お役にも立ちませうから、只今の所は御用捨に預かりませう。

巖助　ハテ、なんとせう。斯う並んだうち、是非一人はお試しなさるゝ。せう事がない、おらがお手討ちに遭ふべい。

三人　それはよい覺悟だわい。

巖助　ドレ〳〵、お手討ちに遭ふべい。

　ト向うへ出て、うじ〳〵して

鈍な事だわい。今日は余り日和がよかつたから、おらが肝を洗濯して、竹竿に干して置いた。鳶めが引つかけ居らねばよいが、ドレ、一寸行て生き肝を取つて來べい。

　ト逃げうとするを、皆々留め

岨六　待て〳〵。逃げうとは太い奴だわい。

峰八　いつそわれ行けいやい。

谷平　おのれ失せいやい。

　トしか〳〵セリ合ふ。

若菜　コレ〳〵、騒がしい。靜まつたがよいわいなう。

四人　ヘイ〳〵〳〵。

　ト下にゐる。御國御前、皆を見て

御國　骨組みと云ひ、試し物には不都合な者共。そち達は行かす。そちらに扣へた新參の下郎、この場に殘して皆は立て。

三人　ヤア、スリヤ、おら共ではないか。

岨六　コリヤ、なんにも云はずと、來らう來らう。

山三　ハヽヽヽ、ハテ、卑怯な奴等。

　トこなしあり、御國御前が目先へ行つて、どつかと座つて

お指圖の試しなら、サア、すつぱりと遊ばせい。

御國　死罪極まる科人にもあらず、新身の刀の試しにかけるは、自らが無成敗と、さぞ蔑すむであらうな。

山三　今までの名古屋山三でござらうならば、あくまでも御諫言を申し上げる。かく下郎となり下れば、申して詮ない雉子と鷹、只今お手討ちになさるゝとて、何しにお蔑すみ申しませう。

御國　さうありさうな事。若菜、そなたは奥へ行て、誰れもこの所へ參らぬやう、申しつけてよからう。
若菜　畏まりましてござりまする。
御國　腰元ども、次へ行きや。
皆々　それでもどうやら。
御國　ハテ、行きやと云ふのに。
女皆　ハイ。
ト山三を見て、氣の毒なこなし、是非なく皆々入る。
御國御前、あたりを見て、歩み寄り
御國　愈々覺悟は極めたであらう。
山三　拙者相果てゝもあらうならば、遂には亂るゝ館の騷動、これとても詮ない悔み。最前お勅使の目通りで死すべき一命、今となつて未練はござらぬ。お手討ちは御勝手次第。
ト御國御前、白刃を目先へ差し附ける。山三、こなし。其まゝ振り上げる。ト山三、首を差し延べる、御國御前、こなしあつて
御國　手討ちに及ばぬ。
山三　ナニ、お手討ちに及ばぬとは。
御國　自らが手討ちにするは、

ト下にゐて、飛び石の上にて、小指をポンと切る。山三、驚ろき
山三　これは
ト鳴り物止めて、和らかな合ひ方になり、下座の柴垣より、巖助、覗く。御國御前、延べ紙を出し、小指を乘せ、山三が側に置き
御國　山三、それを取つて置いてたも。
山三　なんと仰しやる。
御國　見ぬ唐土の昔は知らず、この日の本で往古から、貞女々々と云ひ傳へる、姫御前も數多ある、中にも誰れが貞女であらう。ナウ、山三。
山三　されば、夫を戀ひ石となつたる、松浦佐用姫、これらを貞女と申すであらう。
御國　イヤ、さうではあるまい。源氏の家を立てんため、平家の大將清盛に肌を觸れ、貞女を破つた常磐御前、これより上の貞女と云ふはあるまいと、サア、自らは思ふわいの。
山三　ムウ、スリヤ、常磐に習ひ、貞女を破るお心か。
御國　生さぬ仲の義丸が可愛さに
山三　して、又貞女を破る、相手は何者。

御國　自らが貞女を破るは、山三、そなたに。
山三　ヤ、、なんと。
御國　疾から惚れてゐやうがの。學問せねば、仁義五常は知らねども、色一通りは女子の得物、常からの心遣ひ、目使ひの可愛らしさ、なんと違ひはあるまいがの。
山三　ムウ、スリヤ拙者が惚れたと申さば、貞女を破るお心でござるか。
御國　オヽ、くど。
ト山三、御國御前か襟もとを取つて詰めかけ
山三　エヽ、こなたはなう。酒に耽り色に亂れ、妲妃褒似に等しき身持ち。この期に及び諫言ずるとて用ひはあるまい。穢れ汚れし淫婦の性根に引き較べ、共に魔道へ引き入れんなどゝは、流石女の鼻の先。その手では參るまい。
ト突き放す。
御國　アノ、これ程までに心の底を打明けても
山三　名古屋山三は武士でござる
ト御國御前、山三をじつと見詰め
御國　ハア、。
ト泣き落とし、こなしあつて
さうぢや。
ト自害せうとする。よろしく留めて
山三　待つた。スリヤ一命に替へても、拙者めに執心とな。
御國　姫御前の恥かしい、殿御に惚れたと云ふ事は、草双紙や繪双紙に書いてはあれど、打附けに云ふたは、よくよくに思へばこそ。最前お勅使の目通りで、死なうと覺悟極みやつたをば、無理に止めて下ざまへ押し下げしは、誰れ憚らず添ひ寐がしたいばつかり。その心を無足にして、胴慾な今の詞。そなたの手前、どうも生きては
山三　コレ、早まるまい。
御國　イヽヤ、死ぬる。
山三　待つた。
トいろ／＼留めながら、兩人、下にじつとゐて
コレ、戀が叶ふても、そなたは死ぬるか。
御國　なんのマア
山三　叶へて進ぜう。
御國　ヤア。
ト白刃を引き取り、御國が兩手を取り、じつと見て
山三　御前樣、何を隱しませう。山三めは疾から惚れて居

りました。

ト合ひ方きつぱりとなる。

去年殿樣御落命をなされてより、かくやごとなき上﨟の、憫ませ給ふお姿に、我れを忘るゝ戀慕の闇。されども一家中の人目を憚り、我れは包むと存じながらも、穗に顯れてござるか、面目次第もない。わざと情なく申せしは、御心底を引き見んため。お志しのこの小指、ぞつこん骨身に浸み渡つて、有難う頂戴仕るでござりまする。

御國　其やうに云やつても、自らはまだ疑ひが晴れぬわいなう。

山三　お疑ひが晴れませぬと

御國　サア、そなたには葛城と云ふ、內室があるぞや。

山三　ハ、、、、、着類小袖も古くなれば、取り捨てる。世界にはまゝある事。それは格別、そなた樣には、先君義賢さまの事を

御國　去る者は日々に疎しとやら。眞實そなたに

山三　スリヤ、先君のお名を穢して

御國　幼馴染みの妻を捨てゝも

山三　侍ひ冥利

御國　二世も三世も

山三　變らぬ妹と背。

御國　山三。

山三　御前樣。

御國　嬉しいわいなう。

ト抱きつく。ヂヤン／＼と暮れ六ツ鳴る。うちにて

〽千秋萬歲の千箱の玉を奉る。

ト最前の女形皆々、手燭を持ち、出て

柏木　樣子はあれから聞きました。お手討ちと思ひの外、打つて變つた戀話し。御前樣の思し召しに、あつちからも御持參とは、伽羅で作つた佛も同然。

空蟬　さうでござんす。こんな事には寸善尺魔。義賢さまへ泣き余りのお淚を、こぼし所は、アレ／＼、あの離れ座敷。

朝顏　お湯上がりのお小袖も召し替へて

横笛　互ひの固めは枕が媒介。

常夏　お床もちやんとしつらへて置きました。

柏木　山三さまを連れまして

皆々　早うお越し遊ばせいなア。

御國　なるほど、爰で話すも面伏せ、あれへおぢや。

山三　ト手を取る。

山三　スリヤ、寐ますのでござるかな。

皆々　さうぢやわいなア。

山三　それは余りに急な事でござりまする。

柏木　又もや御意の變らぬうちに

山三　寐る事は又折もござりませう。

ト震ふ。

御國　ツツとあう、おぢやいなう。

ト名古屋帶の獨吟になり、柏木、手燭を持つて、先に立ち、御國御前、山三を連れ、女形皆々、手燭をかゝげ、靜かに西の方へ歩みかゝる。チヨン〳〵、引き道具

〽逢ふて立つ名が立つ名のうちか、逢はで焦れて立つ名こそ、誠立つ名のうちなれや。

ト唄のうち、西の方より

三間の屋體、見附け金襖、前側、半御簾下ろし、眞中に夜着蒲團、枕屏風を立て、銀燈臺ともす。網代、橋がゝりにて殘る。上より御簾下ろしある高殿を引き出す。御國御前、二重へ行き、山三、緣側に、しよんぼりと居る。

朝顔　マア、お小袖を召さしませ。

ト御國御前、寢間着姿になる。皆々、手傳ひ着せる。此うち

〽思ふ中にも隔ての襖、あるに甲斐なき捨小舟。

ト此うち浮舟、枕を直す。横笛、香爐を持ち出て、香をつぐ。御國御前、しか〳〵あつて、蒲團の上へ座る。

柏木　サア、ちやつとござりませいなア。

ト空蟬、常夏、三人して、無理に御國御前が側へ連れ行く。

御國　今宵こそ日頃の思ひ

山三　先君御在世の折柄は、丁度此やうに

御國　過ぎし夜遊のさゝめ事、閨洩る月に差向ひ

山三　可愛可愛の睦言も

御國　そなたに見替へた今宵の首尾。

山三　左樣なら御赦免を蒙りまして

御國　オヽ、固。

ト手を持つて引き寄せる。

柏木　所で閉帳。

ト屏風を引き廻す。
ヘしめて名古屋の二重帶が、三重廻る、みやま鶯啼く音に細る。
ト皆々、向うへ出て、御簾下りる。
空蟬　どうやら斯うやら片附いたわいなア。
柏木　こちらも味な氣になつたではないかいなア。
横笛　なんと、お睦言を聞かうではあるまいか。
皆々　こりやよからうわいなア。
空蟬　これはしたり、騒がしい。ドレ〳〵、わしが、マア聞いて來う。
ト差し足にて、屏風のきわへ耳を寄せ、こちらへ來る
皆々　どうぢやえ〳〵。
空蟬　サア、お話しをなさるゝやうにもあり、しく〳〵泣いてござるわいなう。
横笛　何を其やうにお歎きなさるゝのぢやぞいなア。
空蟬　オヽ、辛氣。その泣く所が違ふわいなア。
柏木　コリヤモウ、上氣して、どうもならぬわいなア。どうで今宵は夜の目も合ふまいに依つて、奥へ行て夜と共に、ついまつか貝覆ひ。
常夏　ほんにその貝合はせが、いつちよからうわいなア。

皆々　何を阿呆らしい。
柏木　サア、皆ござんせいなア。
ヘ我れは君ゆゑ焦れて細る、ア、浮世、昔忍ぶの戀衣。
ト皆々入る。とバタ〳〵にて、屏風引き取り、うちに御國御前、山三が懷中より卷き物引き出し、兩人、キツと見得。
山三　理不盡な、なんとなさるゝ。
御國　疑ひもなき湖月の一卷、此方へ渡せ。
山三　イヤ、先刻物草より受取つて、勅使へ捧げし一卷が二つあるべきいわれはない。
御國　愚か〳〵。贋物と知つてその場を納めしそちが底意心得ずと思ひしゆゑ、色を以て計り負ふせ、ありかを見附けた誠の一卷。義賢さまの敵も外ではあるまい。先づこの一品。
山三　待つた。
ト立ち廻つて、下舞臺へ下り、山三、一卷を引き取つて、すさる。御國御前、短刀構へて
御國　動くな。
山三　仔細あつて一卷は、奪ひ取つて所持いたす。義賢公を殺めしなぞとは、跡形もないたわ言、存ぜぬ。知らぬ。

御國　この期に及び卑怯の振舞ひ。最前預かりしこの短刀を以て、そちが成敗。

トかゝる。山三、刃物を落とし、御國御前を引き附けんとする。トこの時、伴左衛門、ずつと出て、山三を引き廻し、一卷を引き取り、山三、これをと寄るを

伴左　山三を圍へ。

ト巖助、出て、山三を引き廻す。峰八、谷平、岨六、種ケ島を持ち、出て

三人　動いたら二つ玉だぞ。

ト筒先向けろ。山三、こなし。

御國　伴左衛門、最前よりの樣子は

伴左　殘らず承はつた。肌を穢して玉を穢さぬ天晴れの貞節、女儀の發明。ホヽ、おでかしなされた。その功に依つて手に入りし誠の一卷。

ト御國御前へ渡す。山三、おこつくを

三人　動くな。

ト圍ふ。

巖助　お家の寶を盗み置きしは、疑ひもなき謀叛の證據。何もかも白狀ひろげ。

岨六　言譯なくば目通りで切腹するか。

峰谷　但し火蓋を切らうか。

四人　山三どうぢや。

山三　お國御前が色香に迷ひ、包むべき本心を見顯はされたか。エヽ、。

トいろ〳〵あつて、伴左衛門目がけ、行くを筒先を構へる。山三、どつかとゐて

エヽ、殘念な。

トこの時、長橋、光若を連れ、出て

長橋　御國御前、伴左衛門。

御國　お勅使樣。

伴左　お局、先刻よりの樣子を

長橋　殘らず聞き屆けました。家のために心を碎く御國御前の貞節、伴左衛門が忠義の心底、感心をしましてござる。先づ一卷をお勅使樣へ。

御國　心を盡せし湖月の卷、今こそ御叡覽に供へまする。

ト一卷を渡す。

伴左　禁廷の御沙汰よろしく御披露の段。希ひ上げまする

ト此うち長橋、卷物の小口を少し開き見て、こなしあつて、卷き納め

長橋　なるほど上樣の事は、よきに奏聞をいたすであらう

倂しながら義賢横死の砌り、太山府君の尊像、殊には一千町の御朱印紛失、この在所が知れざれば、久吉が四海の政道も立つまい。この申譯を伴左衞門、とくと工夫を致されてよからう。

御國　スリヤ、府君の尊像、御朱印が手に入りませねば、

伴左　イヤ、その二品も不日に詮議し出だし、お家萬歳を唱へるでござりませう。

御國　一つ叶へば又一つ、思ふに任せぬ世の中ぢやなア。

ト　しをりとなる。

伴左　お勅使の目通り、山三めを

ト　反り打つて、立つ。

長橋　伴左衞門、待て。今山三を殺めては、二品の行き端詮議の種を失ふ道理。流石のそなたも、コリヤ、ちと粗忽かと思もまする。

伴左　御尤も。

ト　こなしあつて

山三に繩打て。

巖谷　腕廻せ。

ト　かゝる。

山三　何を。

ト　取つて投げる。峰八、岨六、かゝるを、一々投げる

ト　折り重なつて

四人　捕つた。

ト　繩かける。山三、無念のこなし。

山三　伴左衞門、其方をまッかくなさんと思ひしに、繩目となりしは天命の歸する所。責めば責め、殺さば殺せ。本心はいつかな云はぬ、白狀せぬ。

伴左　この期に及び無益な舌の根。

四人　火水の責めを待つて居らう。

伴左　お勅使樣へ一つのお願ひ。

長橋　ナニ、願ひとは。

伴左　御覽の如く手懸りを取り得てござれども、一應では白狀は致すまい。二品の詮議百日の日延べを、武將より御赦免あるやう、大內のお沙汰を以て、偏へによろしく

長橋　尤もの願ひ。伴左衞門が國を思ふ忠義に愛でゝ、記錄所より武將久吉へ申し下だし、百日の用捨は推擧いたすであらう。其うちに敵を尋ね、二品の寶も事無難に納まりなば、その時にこそ義丸に國の跡目。それ迄は政道萬事、伴左衞門に預け遣はす間、家國の政務心任せに取り行うてよからう。とサア、これも卽ち此お勅使の計ら

ひ、お受け致されてよからう。
伴左　残る方なき御仁心、有難く承知仕つてござりまする。
山三　エヽ、。
　ト無念なこなし。
長橋　これより一の宮旅館へ參り、御歸洛は明日早天。日延べ願ひに義丸を召連れ、共に上京。今宵亥の上刻、旅館へ伴ひ來たられてよからう。
伴左　畏まつてござりまする。
巖助　して、この繩附きは
伴左　拷問なして底の底まで、云はせて見る。われ達は爰構はずと、お勅使のお見送り仕れ。
四人　ハツ。
　ト巖助、山三を、櫻の木へ括りつける。御國御前、始終思案のこなし。
長橋　然らば此まゝ。
伴左　お役目御苦勞。
長橋　イザ、お越しあられませう。
伴左　勅使のお立ち。
仕丁　ハア、。

　ト管絃になり、勅使、花道へ行きかゝる。長橋、三寶に一卷を載せ、持ち、下へ下り、御國御前を見て、こなしあり、それより花道へ行きかゝり、山三を見て、こなしあり
長橋　植木に住んでその植木を枯らす、人面獸心とや云はん、ハテ。
　トこなしあつて、氣を替へ
イザ、お越しあられませう。
　ト始終管絃、勅使に引き添ひ、長橋、仕丁の子供皆々續いて、巖助、峰八、谷平、岨六、この人數向うへ入る。山三、無念のこなし。御國御前は俯向き、思案してゐる。伴左衞門、向うを見送つて居る。合ひ方、きつぱりとなる。
伴左　これもよし。
　ト笑壺のこなし。
御國　さうぢや。
　ト自害せうとする。よろしく留めて
伴左　待つた。そりや何ゆゑ。
御國　伴左衞門、義理ある我が子義丸を、世に立てたいばつかりに、口惜しい肌身を汚し、粧ひ飾る僞りは、君傾

城にも劣りしかと、胸までせき來る猛火の涙、蒲團の上は劍の山、枕は呵責のしもとにて、その苦しみも家のため、我が子のため。その甲斐もなう二品の寳が手に入らねば、我が子は埋れ木。せめて死ぬるが、先奥樣への申し譯ぢやわいなう。

伴左　イヤ、死ぬるに及ばぬ。生け置いて、この伴左衞門が抱いて寐る。

ト懷劍を引き取る。御國御前、山三、こなし。

山三、某が本心も探り得ず、繼目となつてさぞ無念であらうな。

御國　心得ぬ一言。

山三　忠義と見せしは

御國　野心あつてか。

兩人　ハテ、訝しい。

ト合ひ方。

伴左　當時戰國の時に臨み、出世を望むは武士たるの本懷當館へ新參となつて仕官を求め、何卒義賢を失ひ、御國御前を手に入れなば、義丸をひねり殺し、江州一國、掌のうちにせんと、大義の企て胸に含んで、色目にも顯はさず、時がな折がなと思ふ矢先、伯父彈正が謀叛の結構、荷擔の者に申しつけ、義賢を殺させ府君の尊像、まつた御朱印を奪ひ取らせしは、これぞ屈竟。我が手を下ろさず人手を借つて計り負ふせ、我れは忠義の武士と思はせ彈正を罪に落とし、山館へ押籠めとなしたるは、彈正が自業自滅。執權四の宮藏人は異國にて討ち死、名古屋山三はかく縛つて、籠中の鳥。伴左衞門が多年の大望、時至つたる今月今宵。山三、某に一味なさば、一命は助けくれる。さなくば目前首を刎ねる。御國御前、心に隨へばその通り、じたばた云はば義丸を刺し殺し、佐々木の一族根を斷つて葉を枯らす。兩人とも返答なせ、どうぢや。

山三　スリヤ、反逆の萠しであつたか。

御國　とくにもそれと知るならば、助けては置くまいものを、エヽ。

山三　斯程の事を企てながら、湖月の一卷お勅使へ渡せしは、所存あつてか、仔細はなんと。

伴左　持ち歸りし一卷は、まつかいな贋物サ。

御國　スリヤ、今の一卷も

兩人　贋物とな。

伴左　某が摺り替へ置きしとも知らず、盜み取りしはう

大馬鹿。然るに最前、物草太郎が贋物を拵へその場を納めしは、不審晴れざる彼が底意。何は格別、誠の湖月の一卷は、身が手に入つて、當觀音寺山の谷底、土中を穿つて埋み置いた。

御國　スリヤ、一卷は、當山館の谷底。

山三　土中を掘つて隱せしとな。

伴左　おんでもない事。

御國　山三。

山三　御臺樣。

御國　今こそ本望。

山三　伴左衞門を圍へ。

ト繩を引き切る。橋がゝりより瀨平、組子大勢連れ、臆病口より、宮内、主水、左近、股立ちにて出て

皆々　動くな。

ト伴左衞門を圍ふ。ト奥より若菜、義丸を抱き、女形皆々、襷、鉢卷き、一腰にて出る。御國御前、二重舞臺へ行き、薙刀構へろ。伴左衞門、驚ろいて

伴左　ヤ、、、コリヤ、どうぢや。

山三　愚かや伴左衞門、其方當家新參となつて、あり附き始めより、主君におもねり辯舌を以て家中をなづく。合點行かずと思ひしゆゑ、御國御前と心を合はせ、野心と見せかけ、不義の證と見せたればこそ、却て現はす汝が不義。これこそ漢の王允が、呂布を欺く苦肉の計略。今こそ思ひ知つたであらう。

御國　裏の裏行く計略をなしたればこそ、湖月の一卷のありかと云ひ、二品詮議百日の日延べまで願ひしは、當家の吉左右、そちが不吉、巡る因果と知らざるよな。

瀨平　伯父御の非道に一味と見せ、山三さまに刃向ひしも底の底まで探らんため、忠義は變らぬ世繼瀨平。

宮内　かくなる上は遁れぬ天命。

主水　尋常に切腹するか。

左近　但し押へて鎌首にせうか。

山三　伴左衞門。

皆々　サア〱、なんとぢや。

ト此うち伴左衞門、無念のこなしいろ〱あつて

伴左　計る〱と思ひしに、却つて手段の網に入つたか。エ、、此うへは切つて切つて切り死。うぬ、山三。

ト山三へ切つて行く。立ち廻つて、右の短刀を伴左衞門が腹へ突つ込む。伴左衞門、山三が髻を掴んで

鼠輩づれの手にかゝつて、やみ〱と相果てるか。エ、

ト無念のこなし。バタ〳〵にて、岡平、拔刀、切り首を持ち、走り出で

岡平　お勅使お立ちの途中に於て、不時の狼藉。折よくも參り合はせ、雜人原を追ひ散らし、頭分と覺しき奴、かく首を刎ね、立ち歸つてござりまする。

山三　して、お勅使に凶事はないか。

岡平　直さま一の宮のお旅館へ、お供仕つてござりまする。

山三　出かした。コリヤ、心盡しの甲斐あつて、伴左衛門が惡事現はれ、只今成敗。お家の怨敵、今こそ亡びたわやい。

岡平　スリヤ、お眼鏡の如く、叛逆人であつたよな。

山三　今突込みし短刀こそ、久吉公より下し置かれし降魔の利劍。伴左衛門、かく迄企みし年來の大望、遂には本意も達せず相果てるは、さぞ心外にあらうな。

伴左　返す〳〵も殘念なわやい。

トヂヤン〳〵と四つの鐘鳴る。

御國　最早亥の刻。義丸を伴ひ一の宮のお旅館へ

山三　山三もお供仕りませう。ソレ、腰元衆。

女皆　私しども、お供いたしませう。

岡平　お乘り物。

侍ひ　ハア、。

ト所知入りになり、侍ひ大勢、箱提灯二張、鋲乘り物舁ぎ、出る。

立皆　イザ、お召しあられませう。

ト御國御前、義丸、乘り物へ乘る。女形、皆々、引き添ふ。

立皆　イデ、我れ〳〵が

ト伴左衛門方へ寄るを

山三　イヤ、介錯するは誠の武士。かく裏を掻いて突込みし短刀。存命せん事思ひも寄らず。此まゝ差置き苦痛をさせるが即ち刑罰。伴左衛門、俗性とても正しからず、江州一國を傾けんなぞとは、蟷螂の斧とや云はん。及ばぬ事にその身を果たすは、無念なか、口惜しいか。已れを責める天の御罰、巡る因果を、篤と骨身に覺えたであらう。

ト鍔にて眉間を割り

ハ、、、、イザ、

岡平　お供揃へ。

内方　ハア、。

伴左　ト所知入りきつばりとなつて、この人數乗り物に引き添ひ、殘ちず向うへ入ろ。所知入りかすめて、殘ろ。伴左衛門、見送り、無念のこなしいろ／＼あつて
思ひ廻せば今の奇ッ怪、運は天なり、なす事は人にあり。當の敵は名古屋山三、恨みを報ふは眞柴大領。魂は冥途に赴くとも、魄はこの地に止まつて、一天下をくつがへし、佐々木一族根を絶つて葉を枯らし、今の遺恨を晴らさいで置かうか。思へば／＼、エヽエヽ。
ト いろ／＼あつて、どうと下に居ろ。とバタ／＼にて向うより、團八組子と切り結び、出て
團八　早御生害を遂げられしか。
ト本舞臺へ來て、組子を切り倒し
今一足遲かりしか。エヽ、殘念な。
伴左　祖承訓、逢ひたかつたに、よく來たりし。近う／＼
團八　ハツ／＼。
伴左　かくなり果てたるは天命の至る所、歎くにあらず、悔むに及ばぬ。今は何をか包まん、我れこそ朝鮮の莫勇たる、備倭將軍、龍が臣下、沈惟敬と云ひし者。
團八　ムウ、本國の割符を以て、合體したる御邊の俗姓、扨ては聞き及ぶ沈惟敬どのでありしよな。

伴左　先年小田春永の代に當つて、主君伯龍この日の本へ襲ひ來たり、博多の浦にて無念の御最期。今また久吉が武威を以て、我が本國を攻め平らぐ。おのれ久吉近寄つて討ち取らんと、心ひそかにこの土地へ押し渡り、不破伴左衛門と改名して、當家へありつき、佐々木一家を亡ぼし、當國を根絶となして、旗色を現はさんと、折を窺ふそのうちにも、博多の浦にて生ひ立ち給ふ、主人の公達この地にあらうと、御ありかを尋ね求むるこの年月、本懐空しくかゝる有様。我が鬱憤を、祖承訓、推量いたせ。
團八　スリヤ、伯龍公の御公達、この日の本にましますとな。して、巡り逢ふべき印しばしござるかな。
伴左　御主君の自筆を以て、讓り置かれし五言の絶句、去國三巴遠、登樓萬里春にあらず。
ト西高殿のうちより
太郎　傷心江上客、不是故郷人にあらず。
伴左　なんと。
太郎　朝鮮の武臣備倭將軍、伯龍が一子伯莫、改めて沈惟敬に見參々々。
ト唐樂を打ち込む。御簾一面に巻き上げろ。ト物草太

郎、唐仕立て軍立ての拵らへ、團扇を持ち、相引きにかゝる。兩人、驚ろき

伴左　其方は物草太郎。

團八　朝鮮流の鎧直垂れを着せしと云ひ

伴左　五言の絶句を合はせしは、ハテ、心得ぬ。

太郎　ハテ、問はずとも語つて聞かせん。汝が主たる伯龍どの、この地へ渡つて、筑前博多に世を忍び、物草新左衞門と假名を呼ぶ。その頃彼國の女に契りを求め、出生せしはかく云ふ某。日の本にて成人なしたれば、面體知らざるもことわり。年月立つて小田春永、新左衞門こそ唐土の伯龍と、事顯はれて、討手に向ひし佐々木義賢。續く味方も不勢にて、口惜しや親人は無念の御最期。我れも共に討ち死をすべかりしを、汝生きながらへてこの仇を晴らせよと、御遺言も默し難く、その場を立ち退き、假の苗字を其まゝに、物草太郎と變名し、都へ立ち越え北野の社、繪馬堂に彷徨ひて、わざと呆氣と見せかけしを、義賢に抱へられ、當國へ立ち越えし其あとにて、伯父彈正が非道に依つて、義賢は不慮の最期。父が鬱憤、先づ二つの望みは足りぬ。猶も呆氣と見せかけて、當館を窺ふうち、心得ぬは伴左衞門、こやつ曲者、試して見んと窺へば、この觀音寺山に祠をしつらひ、氏神なりと晝夜の渇仰。此うちに物こそあれと、あばき見れば、コレ、この鎧直垂れ兜、添へ置く一書は父が自筆。扨てこそ腹心たる沈惟敬と、初めて悟りし汝が俗性。運命拙くこの場にて死する共、祖承訓は我が片腕、時節を待つて本國に牒し合はせ、眞柴の四海はこツ灰微塵。猿冠者が素頭を、引摑まんは瞬くうち。ハヽヽヽヽ、ハテ、心地よや、悦ばしやなア。

伴左　ハヽア、天晴れ備後將軍の御公達、今はの際に對面を遂げたれば、沈惟敬がこの世の安堵、ハテ、悦ばしい。

團八　此うへは時刻を移さず、最前受取りし朝鮮文字の屯の伏勢。

伴左　一手になつて主君のお味方。

團八　然らば拙者は屯の場所へ。

伴左　早く行け。

團八　ハツ。

　ト向うへ走り入る。始終唐樂、かすめて打つ。太郎、下へ下りて

太郎　心がゝりは朝鮮王の姫宮錦花皇女、久吉が手に虜と

ならせ給ふと聞く。沈惟敬、この儀はなんと。
伴左　氣遣ひあるな。姫宮は先達て奪ひ取り、當觀音寺山の谷底に、人知れず守り奉れば、それと知る者更になし。
太郎　スリヤ、谷底にお匿ひ申せしとな。
伴左　まつた御父伯龍公、御祕藏ありし蘆屋釜、久吉が手に入りしを奪ひ取り、當家の重寶湖月の一卷、二品とも姫宮へ相渡し置きたれば、かしこへ參つて御對面を遂げさせられ、やがて旗擧げ、朝鮮國の勝鬨を、草葉の蔭より待つてゐまする。
太郎　云ふにや及ぶ。追つつけ四海を覆し、念願を晴らしてくれる。心置きなく成佛いたせ。
伴左　イ、ヤ、成佛せぬ。魂魄この土に止まつて、主君の御先途見屆けいで置かうか。サ、、御介錯。
ト引き廻す。太郎、こなしあつて、帶劍を拔き、介錯する。ト合ひ方きつばりとなり、靜かに白刄を納め、伴左衞門が切り首を取り上げ、ちよつと愁ひの心意氣あつて、側への捨て井戸へ投げ込み、あたりを見廻し、花道へかゝり、笑壺のこなしあつて、行きかける。ト遠責めの頭をドンと打ち込む。ちよつとこなしあり、又氣を替へ、行きかける。靜かに遠責めを打つ。花道にとまり、こなしあつて
太郎　幽かに聞こゆる貝鉦太鼓。祖承訓が手筈に依つて、味方の者の集まるなれば、潔く聞こゆべきに、我が心魂を貫き、自然と殺伐を現はすは、我が大望久吉へ洩れ聞こえ、討手來たりしあの遠責めか、ハテ、訝しい。
トきつとこなし。向うより岡平、槍を持ち、出で、搆へる。太郎、ぢろりと見ながら、附け廻す見得にて、本舞臺へ戻る。臆病口より瀬平、槍を持ち、出で、搆へる。立ち廻りあつて、二人を蹴やる。
兩人　動くな。
太郎　何を小癪な。
ト三方にてキッと見得。正面御簾のうちより
團八　夫國三巴遠。登樓萬里春。
長橋　傷心江上客。不是故鄕人にあらず。
太郎　なんと。
團八　伯龍が一子伯莫。
長橋　そこ動くな。
トドンチヤン打ち込み、御簾卷く。ト長橋、床几にかかり、團八、陣裝束に改め、釆配を持ち、宮內、主水、

軍立ての形、左右に隨ふ。東西より巖助、峰八、谷平、岨六、左京、皆々凜々しき形、組み子大勢、四つ目結ひの提灯を持ち、取り卷く。

太郎　ヤア、われ達は

團八　ホヽ、不審は尤も。大明より加勢に來たりし、祖承訓を、釜山浦にて討ち取り、所持せし割符を奪ひ取り、我が相好を變へて祖承訓と名乘りしは、汝が俗性を見出ださんため。某こそ朝鮮國にて、討ち死をせしと流布させし、當家譜代四の宮藏人なるわやい。

長橋　最前捧げし一卷は悉く贋せ物。合點行かずと、歸りし體にもてなし、窺ひ開けば案に違はず寶のありか、伴左衞門が俗性、物草太郎は朝鮮國の殘黨にてありしよな。

岡平　其方呆氣者となつて仕官せし始めより、仔細があらんと心を附ける主人山三、最前沈惟敬が責め口をゆるめ、その場を去りしも、かく見現はさん主人の計略。まつた朝鮮文字の手管を以て、老曾の森に屯の伏勢、藏人さまの御意を受け、殘らず討取り立ち歸つたこの岡平。

瀬平　毛唐人の手段を以て、この神國を傾けんとは、及ばぬ〳〵。

巖峰　下郎となつて入込みし我れ〳〵は

岨谷　久吉公の隱し目附け。

團八　先非を悔み降參なさば、助命させよとある武將の嚴命。

長橋　永く日の本に仕へ、忠勤を勵んでよからう。

宮内　但し押へて召捕らうか。

岡平　伯莫、返答は

皆々　サア〳〵〳〵、なんとぢや。

太郎　雀めらが、ちやわ〳〵と姦しい。素頭ひツちぎるは易けれど、今は免す。伯莫が旗擧げを致せし時、一つになつて寄せてうせい。蹄にかけて蹴殺してくれん。屍になるを待つて居らう。

皆々　その廣言を

　ト皆々ぎせいする。バタ〳〵にて、軍兵走り出で

軍兵　申し上げます。彈正どの上館を拔け出で、味方と覺しく數多の軍卒、當所を目がけ責め寄する樣にござります。

　ト云ひ捨て入る。

團八　扨てこそ、義丸君に凶事あつては一大事。

長橋　そち達は伯莫を召捕れ。

皆々　心得ました。
ト藏人、長橋、宮内、主水、奥へ入る。ドンチヤンきびしく打つ。太郎、皆々を相手に、大タテさま〴〵あつて、引き續いてこの人數、橋がゝりへ入る。始終ドンチヤン、左近、巖助、藤治、伴藏、十平を相手に、切り結び出て、タテあつて、ポン〳〵と切り倒す。
巖助　して、伯莫は
左近　多勢を以て麓の方へおびいたれば、死地に入りたる彼れが一命。
巖助　我れ〳〵も麓へ參つて
十平　加勢いたさう。ござれ。
ト兩人、橋がゝりへ走り入る。ト岡平、組み子六人、槍襖にて圍ひ出る。大タテ段々あつて、トゞ二重舞臺へ上がり
組皆　動くな。
ト槍を構へる。
岡平　何を。
トキツと見得、チヨン〳〵にて、道具一面にセリ上げる。雪降り出す。よき所に蹴込みを返す。霞になる。下より雪の山をセリ上げる。凡そ五尺ばかり上げる時、

霞にて、タテの人數を隱す。遠攻め段々にかすめ、爰にて靜かになる。ト橋がゝりより太郎、右陣立ての形に、小さき簑を着て、竹の子笠にて面を隱し出る。始終雪降る。コイヤイ打ちかける。よき所にて、ほつと息を繼ぎ、こなしあつて
太郎　聞き及ぶ地獄越えの絶所。
ト空を見て
一聲の鳥だにも通はず、貝鉦太鼓の音もうすろぎ、追手の者も道を失ふ。
ト思ひ入れあつて
日本の奴原は、アヽ、手ぬるい〳〵。かやうの所に伏勢を致し置いて、伯莫逃がさぬなぞと、大勢折り重なつて參るならば、さしもの某も余程の難儀。そこへ心のつかざると云ふは、我が朝鮮國の軍慮とは、遙か劣つた日本の智慧なしども、笑ふにも絶えた事ぢや。フヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽヽヽ。
ト高笑ひする。とこれを相圖に、足もとの岩の狹間より狼煙上がる。ドンチヤンきびしく打つて、鬨の聲を上げる。太郎、恟りする。ト臆病口より、藏人、右軍立ての上に簑笠、龕燈を持ち、左近、其ほか組子大勢

附き、出る。太郎が目先へ龕燈を差しつける。

藏人　四の宮藏人、埋伏して通路を立て切る。者ども、ソリヤ。

皆々　動くな。

ト取り卷く。

太郎　こりや味をやつたな。悪く寄つたら撫で斬りだぞ。

左近　踏みつけて召捕れ。

ト組子皆々かゝる。藏人、わざと龕燈を隱し、窺ふ。少し暗き心のタテ。始終雪降る。太郎、皆々を蹴飛ばし、竹の子笠を取つて雪を拂ふこなしにて、向うへ走り入る。藏人、龕燈をかゝげ、見送る。組子皆々起きて

左近　藏人さま。

藏人　行く先は思ふた壺。者ども、續け。

ト組子連れ、向うへ走り入る。チョン〳〵にて、中段の霞晴れる。ト峨々たる山の景色、段々麓へ近くなりし心。始終雪降る。ト東の通ひ道より、太郎、雪を拂ふ見得にて、出て、本舞臺へ來る。コイヤイになる。

太郎　ハレ、ひやいな事。最早追手も來たらず

トあたりを見て、こなしあつて

大功は細瑾を顧ず。彼れら風情は取るに足らず。

トあたりを見廻し

手ぬるい〳〵。伏勢を置かうならばこの所ぢや。足場は悪し、道は細し、かう云ふ所で前後より引ッ包み、伯莫遁さぬなぞと打つてかゝる程ならば、爰でこそ絶體絶命。そこへ手の屆かぬと云ふは、さりとては笑止千萬、フ、、ハ、、、、ハ、、、、、、ハ、、、、。

ト高笑ひする。足もとより狼煙上がる。ドンチャンきびしく、鬨の聲上がる。太郎、恟りする。ト橋がゝりより岡平、龕燈持ち、巖助、峰八、谷平、雌六、其ほか組子大勢連れ、岡平、龕燈さしつけ

岡平　この所は岡平が受取つて、通路を立て切る。いづれも、ソリヤ。

四人　動くな。

太郎　コリヤ、出かし居つた。うぬら、ひねり殺してくれう。

岡平　ソレ、召捕らつしやれ。

トタテ段々あつて、組子逃げ込む。四人を取つて投げる。岡平、かゝるを、ちよつと當て、又笠を取り、西の通ひ路へ走る。四人、起きて

四人　伯莫は
ト岡平、龕燈をかゝげて、見送り
岡平　迷ひ路の岨を傳ふて、慥かに谷底へ。ムウ、これで
よし、いづれもござれ。
トこの人數、西の通ひ路の跡を慕ひ、入る。ト一聲に
なり、チョン〳〵にて、見附けの山段々に上げる。こ
れに沿うて眞中へ、綺麗なる藁葺きの一つ家。この軒
端に雪の桁をせり上げる。始終雪降る。すべて谷間の
景色、取り合はせよろしくあつて、道具納まる。
ト小鳥笛、誂らへの合ひ方に合はせ、藁屋のうちにて
琴を彈ずる體。ト向うより太郎、矢張り簑笠にて、つ
かつかと出で、花道に留まる。琴の合ひ方、この中へ
コイヤイ打つなり。
太郎　最早谷間とは見ゆれど、雪に埋もれ、方角とても定
かならず。ムウ、扨ては伏勢を以ておびやかし、行く先
を遮り、迷はさんと云ふ手段であつたか。ハテ、小賢し
くも謀つたよな。併しながら道を求むべき、木樵り山賤
も來たらず、ハテ、どうがな。
ト思案する。此うち琴の合ひの手あり。思案のうち、
ふと聞き取る事あつて、本舞臺を見やり

心憎き巖下の一つ家。殊には優しき琴の調べ。何にもせ
よ、案內して、暫時疲れを晴らさう。
ト本舞臺へ來て、軒に佇み
卒爾ながら、この家の主に對面が致したい。
トこの時チョン〳〵にて、藁家の上障子を開く。トう
ちに錦花皇女、廣振り袖、唐裝束、唐冠、皇女の拵
へにて、琴を調べ居る。側に閑爐裏、自在に蘆屋釜か
けあり。いさゝめを唄ひ、琴を調べ、直ぐに合ひの手
を彈く。太郎、こなしあつて
雪の谷間に道を失ひ、殊の外難儀に及ぶ。この家を目が
け一宿が頼みたい。
ト皇女、琴をやめて
皇女　世に交はるもむづかしく、惑ひを晴らす谷の住居。
して、そもじはいづくの誰れ。
太郎　門に入つてはその諱を問ふ。先づ主の姓名が聞きた
い。
皇女　唐土の、山のあなたに立つ雲は、爰に焚く火の煙り
なりけり。
太郎　なんと。
皇女　三千餘里の波濤を越え、この日の本へ捕はれし、朝

鮮王の娘錦花女とは、自らぢやわいなう。

太郎　ナニ、錦花皇女にて渡らせ給ふとな。

トずつと入り、皇女をいろ／＼見て

誠にお姿と云ひ、天性備はる王位の姫宮。沈惟敬が詞の賴存、死したる魂魄、我れをこの所へ導きしものならん。何をか包まん。某は御身の臣下、備後將軍伯龍が一子伯莫。不思議の御對顏、いかばかり、ハ、ア、悦ばしう存じまする。

皇女　扨ては聞き及ぶ伯莫。そんなら沈惟敬は死にやつたかいなう。

太郎　お氣遣ひなさるゝな。彼れ相果つるとも、伯莫かくてあるうちは、やがて歸國を致させまする。

皇女　エ、、つッと國へ去ぬる事は、自らは厭ぢやわいなう。

太郎　然らば御本國の御父大王は、お懐しうはござらぬか。

皇女　サア、自らはこの日の本で、見染めた人があるに依つて、ならう事なら此お髮も日本風に結び直して、その戀人に連添ひたいわいなう。コレ、伯莫、そなたを頼むに依つて、どうぞ日本の殿御と、女夫にしてたもいなう。

太郎　これは興がる。して、見染めさつしやれたは、そりや何者。

皇女　それはあの、當國佐々木の家中、生駒歌之助ぢやわいなう。

太郎　スリヤ、歌之助。

ト思ひ入れあつて

よくござる。左程に思し召すなら、歌之助に添はせて進ぜませう。

皇女　ヤア、そんなら添はしてたもるかや。エ、、忝ない。家來とは思はぬ。結ぶの神の伯莫さま。サア／＼、ちやつと連れて行て、女夫にしてたもいなう。

ト太郎、思案して

太郎　一先づこの所を立ち退き、知るべの方へお忍ばせ申し置き、某は諸國を經巡り、時節を待つて多年の本懐。イザ、姫君樣。

皇女　願ひさへ叶ふ事なら、いづくへなりとも行きます。サア／＼、ちやつと連れて行てたもいなう。

ト下へ下りて來て、そわ／＼する。

太郎　して、沈惟敬がお渡し申せし、湖月の一卷は

皇女　爰に持つてゐるわいなう。
ト巻物を出して、渡す。太郎、開き見る。
この衣裳も日本風に、着替へずばなるまいし、此お髪も
亦
トいろ〳〵あつて
伯莫、どうせうぞいなう。
太郎　誠に相違なき湖月の一巻。
ト巻き納め、懐へ入れる。
して、父伯龍の形見なる、蘆屋釜は
皇女　これも朝夕側を放さず、あそこにあるわいなう。
ト圍爐裏を教へる。
太郎　誠に。
ト取りに行く。
皇女　早う女夫にしてたもらぬかいなう。
太郎　サヽ、よくござる〳〵。
ト云ひ〳〵、釜の湯を捨て、水巻しを取り、釜をしめすこなし。此うち皇女、表へ出たり入つたり、そわつく。太郎、しか〴〵あつて、釜を持ち、下へ下り、皇女を見て、思案して、我が着てゐたる小袋を取り
これを召されませう。
ト皇女へ着せ、又笠を取り、皇女に持たせ、蘆屋釜の環に佩劍の劍を結び、これをかたげ、こなしあつて
サヽ、お越しあられませう。
皇女　もう行くのかや。
ト表へ出る。太郎も續いて簀戸を出る。ト西手の岩石より、吹雪ぱつと散つて、小鳥すさまじく立つ。こなしあつて
太郎　ハテ、心得ぬ。いまだ東雲にあらずして、塒を離れ群れ立つ小鳥、野に伏勢ある時は歸雁つらを亂すとは、兵書の面。ハテ、審しい。
皇女　なんぞ氣遣ひな事ではないかや。
太郎　苦しうござらぬ。サヽ、お越しあられませう。
ト本釣り鐘にて、明け六つを打ち出す。凄き合ひ方、雪降り出す。皇女を先に、太郎附き添ひ、花道へかゝる。皇女は、女夫にしてたもや、違ひはないかやと、これを口癖に云ひ、なまめいたるこなし。太郎、サアサア、よくござると、納得させる心の捨てぜりふにて、附き添ひ行く。始終本釣り鐘、雪しきりに降る。ト向うより山三、雪の夜の忍び裝束、好みの形にて、龕燈を持ち、靜かに歩み出る。よき程に行き合ひ、龕燈に

て皇女を見ようとする。太郎、驚ろき、皇女を引き廻し、後へ囲ふ。山三、龕燈をそむけ、双方窺ふ見得にて、本舞臺へ押し戻す。トこの時臆病口より、御國御前、簑笠にて、出かけ、窺ふこなし。太郎、山三を引き退け、皇女を連れ行かんとする。山三、御國御前、左右より龕燈を差出し、行く先を遮る。太郎、皇女を後に囲ひ、釜を懷劍と共に小脇に搔い込み、キツとこなし。

山三　物草と云ひしは朝鮮の伯莫。

御國　虜にしたる錦花皇女。

山三　湖月の一卷

兩人　こつちへ渡せ。

太郎　伯莫が手に入りし品、うぬ等に渡さうか、馬鹿な事を．

山三　その一卷

ト太郎が懷中へかゝる。御國御前は皇女を捕へんとする。立ち廻つて、御國御前、皇女を押へる。太郎、山三を蹴やり、皇女を囲ふ。兩人、又一時に龕燈を差出す。とドロ〳〵、寢鳥にて、穴へ魂出る。仕掛けにて、龕燈、ぱつたりと消え、兩人、跡すざりしていそぐこなし。ト魂、皇女を導く心にて、花道へ行く。太郎、これに目を附けながら、皇女を連れ、釜を小脇にして、靜かに花道へ行く。山三、御國御前、暗き心にて、探り寄つて、行き合ひ

御國　山三。

山三　奧樣。

御國　思はずも五體を絡み

山三　風も吹かぬに明しの消えしは

兩人　ハテ、心得ぬ。

ト此うち太郎、空を見詰めてゐて

太郎　扨ては沈惟敬が死したる魂魄、皇女に附き添ひ導くよな。

皇女　そんなら。

ト空を見る。御國御前、この聲を知るべに、行かんとするを、山三、ちよつと留める。太郎、皇女を引き廻し、先へやつて

太郎　構はずと、イザ。

ト御國御前、おこつくを、山三、押へて、窺ふ。太郎、釜をしやんとかたげ、肩にて笑ふ。此とたん、舞臺も一時にて、各々よろしく

幕

二段目切

近江湖水の場

「道行。春霞湖面」

太夫　宮古路世里太夫
三絃　竹澤卯藏
淨瑠璃　竹本富太郎
ワキ　竹本辰太夫
三絃　鶴澤源次郎

役名——蘆屋姫。生駒歌之助。船頭、梶藏。傾城遠山。錦花皇女。

造り物、平舞臺、見附け淺黃幕、板松、一聲、コイヤイにて、幕明く。

ト仕丁七人、竝よく並び居る。

仕一　皆の者、今日記錄所の云ひ附け。殘らず聞いて居るであらう。

仕二　なる程、いつぞや名古屋の陣中にて

仕三　囚はれを遁れたる、唐土の大王の姫宮

仕四　錦花皇女と云ふ女、和國の官女に姿をやつし。

仕五　都の近國を徘徊する由、久吉公よりの奏聞。

仕六　なんでも唐臭い女と見れば

仕七　何がなしに搦め捕り、銘々の手柄にせん。

仕一　皆必らず油斷いたすな。

皆々　合點ぢや／＼。

仕一　これから石山の方を尋ねて見よう。皆來やれ／＼。

ト皆々、橋がゝりの方へ入る。ト口上出て、道行きの觸れあつて、直ぐに音樂にて返し。板松引いて取り、淺黃幕切つて落とす。

造り物、見附け奧深に浪幕、二段手摺り、金隈の岩組み、臆病口、かけ作りの本御簾、かゝりの結構なる御殿。この樓より筋違ひ、高欄附きの廊を見る。舞臺前、花道兩側とも浪手摺り。但し花道より西手は打ち寄せの書き割りにて、セリ上げる。音樂にて、道具留まる。

よき所へ、絹張り手習の卷下がる。

〽石山や、鳰の海照る月影も、朧々に照り添ふて、時に近江の絕景は、八つある中に分けて猶、赦世の誓ひをか

け作り、五十四帖の源氏殿、いとやごとなき上臈の、式部が例し紫の、硯に向ひ摺り流す、月住の江も更科も、及びあらざる風情なり。

ト この浄瑠璃、よき所にて、御簾巻き上げる。ト 錦花皇女、緋の袴、官女の形、机にかゝり、栞に観音の御名を書いては戴き〳〵して

皇女　げにや女と生れし身は、罪障の雲深うして、眞如の月を見る事能はず。さるにても大慈の誓ひ空しからずば心に深き我が願ひ、叶はせ給へ〳〵。

ト 一聲打ちかける。破風へ絹張りの月出る。花道中程より丸物漁船に、蘆屋姫、着附け、上張り、練りの鉢巻きにて、篝火の差出して居る。歌之助、同じく世話形、持さでにて、蜆取る見得。梶蔵、褞袍、啣へ煙管にて、櫓を押してゐる。いづれもこの見得にて、セリ上げる。同じく、 浮舟の巻と書きたる行燈を下げる。一聲打ち上げる。

〽世の中に、とわたる浪に梶枕、浮かれ寄る邊の浮舟に、野も淵も瀬も勢田蜆、お舟梶蔵合點か、合點ぢや、エイシッシ、サッサ押せ〳〵エイ〳〵〳〵、あなたへぐらりこなたへぐらり、オッと危ない蜑小舟。

歌之　待て〳〵。勢田へ去ぬると思ひの外、こりや石山の麓ぢやさうな。

ト 蘆屋姫、本舞臺を見て

蘆屋　アレ〳〵、あの高殿に誰れぢやゐるさうなぞえ。

歌之　ドレ。ほんになア、あの高殿はその昔紫式部と云ふ粋な女が、物語を書いた源氏殿。そこへ上つて何やら書いてゐるは

梶蔵　エヽ、聞こえた〳〵。頭が黒うて形が白うて、腰から下はまつ赤いな、あいつ慥かに船女ぢやわい。

蘆屋　エヽ。

ト 怖がる。

歌之　何にもせよ、舟を寄せて正體を、見屆けうではあるまいか。

梶蔵　よからう〳〵。サア、やるぞ。

〽いで〳〵舟を進めんと、誓ひも堅き石山の、麓にこそは着きにける

ト 三人、本舞臺へ上がる。梶蔵。舟を松へ繋ぐ。浪手摺りせり下げる。

蘆屋　時に、なんと云ふて問ふたものであらうなア。

歌之　されば、マア、俺が行て見るワ。コレコレ、そこな

赤白染め分けの女中さん。
ト皇女、矢張り書いてゐる。
梶蔵　イヤ、それぢやいかん〳〵。オ、イ、女丸によヲイ。
ト舟を呼ぶ様に云ふ。
蘆屋　エヽ、何云ひぢや。わたしが呼んで見せるわいなア。ナウ〳〵、それならお方にそれなるお方に物問はうなう。
ト皇女、仰向く。
歌之　ソリヤ、仰向き居つたぞ。
皇女　何事にて候ふぞや。
梶蔵　ソリヤ、物云ひ居つたぞ。
蘆屋　見れば女中の只一人、何をしてゐやしやんすえ。
皇女　さればとよ、自らは、心に願ひ有明けの
〽月も眞如の水の面、澄ませど立つや煩惱の、涙に幾夜明け兼ねて、まどろむうちの夢にだに、見ぬ人を戀ふ小雄鹿の、筆に書くともなか〳〵に、盡きせぬ思ひうば玉の、闇に迷ふぞ恨みなる。聞くにおふねも氣の毒の、さはさりながら、我れらが如き、蜑の笘屋に洩る影は佛と申すも菩提と云ふも、もと皆一如戀の道。綱手にかけて曳く綱の、目で知らせ合ふ好いた同志、手鍋提げても心よう、暮らすがほんの樂しみと、思ふがよいぢやないかいなア。オヽサ、さうぢや〳〵その事よ、辛氣々々でゐやうより、可愛々々で長の夜を、明かすがほんの樂しみと語るを聞いて上臈も、よう慰めて呉竹の、臥しどにいざと招かれて、おづ〳〵登る階の
ト梶蔵、此うち石臺に靠れ、居眠つてゐる。兩人、これを見て、蘆屋、フツと吹き出す。歌之助、捨て置けと云ふ振りにて
〽打連れてこそ
ト送りにて、兩人、御殿へ入る。御簾さら〳〵と下りる。
〽入りにける。折からこなたの岨道より、仕丁の又六先に立ち、大勢引連れどつと駈け寄せ
仕一　コリヤ〳〵、船頭、物問はう。
トノリ地になる。
〽朝鮮國の錦花皇女、和國の女に姿をやつし、この邊りを徘徊する由、注進あつて慥かに聞く。其方これに居るからは、定めて在所は知りつらん、いかに〳〵と呼ばはつたり。

梶藏　オヽ、その錦花とやら金吾とやら、在所は俺が知つて居る。
仕一　して〳〵、行くへは
皆々　なんと〳〵。
梶藏　待たんせや。
〽それつら〳〵唐の女の行くへを見れば、雪に名高き比良の峯、こけなまろぶな危ない〳〵。勢田のなア、唐橋ナアエ、唐金擬寶珠ナアエ、雨の降る夜は唐崎の、松の木蔭に明かしかね、つく三井寺の坊主の鉢巻き、もたへがない。締めても締めてももたへがない。泣いて口說いて尋ねても、粟津の森の村鳥、可愛とは憎いの裏よ。泣いて落とすは、ソレ、裏の裏。
皆々　ヤアトコセ、ヨイヤア。
梶藏　おじやれ買ふなら八丁が名所。
皆々　ヤアトコセ、ヨイヤア。
〽浮かれるうちに手ばしかく、とも綱解いて飛び乘る梶藏、南無三寶とあせれども、櫓を押し切つて雲の浪。跡をくらまし
ト三重にて
皆々　舟待ち居れやい。

梶藏　阿呆よ。
ト梶藏舟を押し、橋がゝりへ入る。皆々、上の岨道より追つかけ入る。ト音樂になり、御所車、仕丁二人して押して出る。跡より遠山、仕丁形にて、やない臺を持ち出る。よき所に車留め
遠山　イヤナウ、いづれも、お車を爰に留め、皆休息をさつしやれ。
仕兩　ハアヽ。
ト兩人、橋がゝりへ入る。遠山、御簾の側へ行き、何か聞き取るこなしあつて
遠山　畏まりましてござりまする。
ト始終音樂にて、遠山、車の後ろへ入る。この車引き出る時、絹張り、關屋の卷と書いたる行燈出す。音樂打ち上げ、前彈きにかゝる。返し。
御簾御殿廻る。糸櫻の棚、これに世里太夫、脇三味線並ぶ。二段手摺り、花道兩側、舞臺前、殘らず菜種の盛りになる。浪幕切つて落とす。遠見に絹張りの霞火入りにて、見事にある。よき所へ案山子を出す。道具留まる。

此里〽引はえし、霞が春を知らせ初め、雁の名殘りも假初に、桃の唇紅附けて、誰れに見しよとの優姿、野路山路も一樣に、織りなす姿襠褊に、錦の花の俤も、夢に夢見る夢の間に、松と變つてめかれせぬ、敷島原の歌之助。

ト花道よき所へ、歌之助、大盡姿、皇女、傾城の形。歌之助、花傘をさしかけてゐる見得にて、せり上げる。この時、花の宴と書きたる行燈下りる。

〽花に胡蝶の飛び交ふは、離れぬ筈の譯ぢやと云ふて、野暮な客でも附合ふて、二世も三世も變らじと、野邊の千草の露をだに、引く手にかゝる細蟹の、糸に寄るてふ短夜は、明けて甲斐なき寐覺めの夢は、一人かこたん仇枕、變るまいぞや變らじと、誓ひし仲を疑ふて、昨夜の床の夜すがらや、背中を向けて物云はず、しゞまの鉦の莨盆、煙管に科があらうかいなア。煙の末は白雲の、棚曳く野邊の春霞、露を含みし秋棠の、花に寄り添ふ風情なり。

ト音樂になる。歌之助、皇女が手を引き、御所車を覗かうと云うこなしにて、側へ行く。ト遠山、出て、見る事はならぬと叱るこなし。ト眞の音樂になり、歌之助、皇女、上座へ來て、床几へかける。遠山、扣へる

ト唄になり、蘆屋姫、出る。

唄〽長生殿のうちには秋深く、不老門の前には日も向かず。月は猶、小池の亭の春風、月よりも花よりも紅葉よりも、戀しき人の閨のうち、見たいものぢや、閨の扇子の繪そら事かえ、思ひの增すわいなア、扇子の繪そら事かえ、思ひの增すわいなア。たまに逢ふ夜の言の葉ゆかし。

トよろしく振りあつて、終はる。

遠山　イヤ、申しお姫樣、から見晴らした景色は、お屋敷とは事替り、又格別ではござりませぬかいなア。

蘆屋　歌之助、から見晴らした野邊の景色、氣が替つてよいではないかいなう。

歌之　左樣でござりまする。誠にげんげ草とや毛氈の、ちよいと姿らで吸附け莨と云ふ樣な所なれど、わつさりと摘み草はどうでござりませう。

皆々　こりやよからうわいなア。

トかゝり、摺り鉦入りにて、篠入りの唄になる。

唄〽草の數々摘み持ち見れば、思ひ土筆や勾ひ草、けはい粧ふ眉作り草、心菫や鼓草、由緣の色は若紫の、桂

男の桂草、じつと握つた蕨手に、顔は上氣の美人草、裏山吹の恨めしい、悋氣の花や咲いた妻。

ト始終この振りのうち、蝶々飛び交ふ見得、よろしくあつて、留まる。

歌之　イヤ、申し、いつまで歩るいてばつかりもゐられまい。いつそ宿巡りの藝者はどうござりませう。

皆々　よからう〱。

〽幸ひ爰に一筋の、下げ緒を取つて當座の襷、かけて結んだ濯ぎ手拭ひに、馴れぬ所在の水仕業、姫も側から共共に、小褄とり〱

ト引き取りにて、あと大小入り面白き合ひ方になり、皇女、遠山、提げ緒を襷にして、遠山は案山子の笠にて矢を持ち味噌を摺る振り、皇女は目籠にて米をかす。仕丁烏帽子にて水を汲む振り、蘆屋姫はやない臺を俎板にて、菜種を取り花を刻む振り、歌之助、いづれもを世話してやる事、よろしくある。

〽汲み取る水の濡れた仲、こなたはちやんと摺り鉢の、底の心は白米の、洗ひ上げたる眞實の、おぼつかなます疑ふて、刻む拍子に指切らば、起請を書いてやり梅の、粋で仕かけた水加減、竹の火箸に世をこめて、幾世添はうと思ふても、胸のほむらが焚附けて、仇いやらしいなんぢやいな、あんまり側へ引附けて、おくれなんすな男づら、ヤイ、爰なそげめ、山の神、消し炭鼻めがはしたない、惣じて悋氣と云ふ事は、野暮な世界の戀知らず、廓の諸譯や傾城の、手管の文で氣を持たせ、嘘と誠の數數を、舟に積み上げ櫓拍子で、灘の濱邊に立つ浪の、どつと打ちてはさつと引く、さらり〱さらさらさつと、戀路々々の山々や、都に名にし比叡山、登りつめてはいとしさが、増さるさる〱猿智惠め、傾城と火桶とは抱いて寐ながら油斷がならぬぢやないかいなア。悋氣も少しは愛想ぢやが、あんまり口が過ぎるかな、嗜みくされとやり込めたり。その胸倉をしつかと取り、云ふたらお前どうしてぢや、オヽ、かう仕ると三人が、やわ腹立ちの摑み合ひ、喧嘩に花をぞ咲かせけり。折から來かゝる梶藏が、これと見るより割つて入り、あなたを押へこなたを押へ、お前も尤もぢやそもじも尤もぢや、尤も〱尤もぢやが、さりながら、ゆうべの床の別れ路に、云ふた詞を忘れてか。なんのかのといちやつけば、それは浮氣の水淺黃、派手な浮名が嬉しうて、らつちもない事なさんすと、人の聞こえも世の義理も、つい無茶苦茶にして仕

舞ひ、やけの勘八、勘定の、合はぬやうな事さつしやるなと、いと懇ろの挨拶に、四人も共に打ち和らぐ、濡れのしよざいかいつとても
ト梶藏、よき所へ出て、皆々仲直りして、よろしく留まる。直ぐに手踊りにかゝる。
唄〽履いた足駄のぎつくりがつくりと、折れた破れ傘、しぼ〳〵雨ならこらへもしよ、つん摑まへてのぼる樣な雨が降りや、ひつたり〳〵と濡れぢやいな。好きなよい日は傘の柄、ゑい〳〵〳〵。
ト手踊り返しあつて、留まる。
〽唄ひかなづる折こそあれ、又六先に以前の仕丁、手ん手に篝うち振り〳〵
トノリ地。
仕一　コリヤ〳〵、梶藏、悦べ〳〵。
仕二　一旦敵たふ我れ〳〵も
仕三　久吉公の下知により
仕四　味方となつて云ひ合はせ
仕五　皇女を始め蘆屋姬
仕六　歌之助も諸共に
仕七　佐々木の館へ送りの人數。
仕六　衞士の焚く火の夜のうちに
〽いざ御立ちと居並んだり。梶藏勇んで
梶藏　御苦勞々々、とてもの事にこの人數、神事の心で千歲樂でやるまいか。
皆々　よからう〳〵。
梶藏　イザ、お姬樣、いづれも樣。
〽競ひかゝつて梶藏が、いざと祝する姬君の、御運開くる歸國の首途、善は急げぢや。
やつてくれ〳〵。
皆々　ヨウサぢやチヨウサぢや。
〽勇み進んで
皆々　千歲樂ぢや。萬歲樂ぢや。
〽出でゝ行く。
ト三重、檀尻太皷うち混ぜにて、皆々向うへ入る。

幕

三段目　祇園揚弓屋の段

役名——堀尾帶刀。黑鐵鐵右衞門。石ヶ坂勘兵衞。生駒歌之助。藝子、小市。同、鹿路。同、三

代野。仲居、お吟。腰元・横笛。同、朝顔。傾城、遠山。下人、與九郎。錦花皇女、好閑坊。日小屋のおこほ 實ハ平部。下女、お芳 實ハ薦舟。薦屋姫。井筒屋長三郎。山三妻、葛城。揚弓屋小蝶 實ハ物草女房柵。物草太郎 實ハ備倭將軍伯莫。

造り物、祇園下河原、揚弓屋の體、奥うち拔きに的場、左右櫺子窓、揚弓の看板、右入り口の際に小蝶、好みの形、桔梗の前垂れ、紋箱の側に座り、莨呑みながら、なまめいた風にて、往來を呼び込んでゐる。好閑、坊主の拵らへ、勘兵衛、なまこ袴、江戸者、鐵右衛門、侍ひにて、三人とも後ろ向き、揚弓を射る。お芳、下女の形、矢を運んでゐる。神樂にて、簾明く。

ト仕出し大勢出て

仕一　ドレ／＼、揚弓を見ようか。

皆々　よからう／＼。

小蝶　お入りなされませ。あちらが明いてござりまする。

仕二　見たか、美しいものぢやぞよ。

仕三　この下河原で、いつち玉ぢやわい。

皆々　玉ぢや／＼。

ト射前の人數は揚弓すべてほんまに射るなり。始終神樂打つ。ト向うより客一、鹿路。小市、三代野、藝子、お吟、仲居、庄八、幇間にて、出る。

客一　藝子達を連れて、から出かけた所は、どうも云へたものではない。

皆々　モシ、揚弓を射なさらんか。

ぎん　小蝶さんの店がよからうわいな。

庄八　那須の與市が末孫、手のうちをお目にかけうか。

客一　こいつ、大を云ふ奴ぢや。

皆々　サア、行きなされいなア。

ト本舞臺へ來る。

小蝶　里曉さん。よう當りますぞえ。

好閑　當る／＼。きほひ口が向いて來たのぢや。

勘兵　ろくな矢は一つもない。歪まぬをくれないか。

よし　これがようござります。

ト矢を當てがふ。

鐵右　ま一遍きりをしたいものぢやが。

ト皆々、揚弓を射る。

女三　小蝶さん、この間は。

小蝶　アイ。お客樣なら連れましてお入りなア。
ぎん　モシ、マア、お入りなされ。
　ト皆々入る。
客一　ドレ〱、ちと手際を見せうか。
庄八　一膳おくれんか。
よし　アイ〱。
　ト客一、庄八、射前にかゝる。女皆々、捨ぜりふにて見て居る。
仕一　なんと揚弓屋も多いが、皆この店へ集まるぞよ。
仕二　よう飼ひ入れたものぢや。
仕皆　それいやい〱。
小蝶　モシ、どなたもお入りなさらんか。入つてお莨でもお上がりなされませ。
仕三　なんと北さのへ行て、五目飯はどうあらう。
皆々　それもよからう。
仕三　サア、皆ござれ〱。
　トわや〱云うて入る。皆々揚弓のうち、女形、捨ぜりふさま〲あるべし。
よし　どなたもよう出來ますぞえ。
　ト矢をあてがうて廻る。

鐵右　又すゝめるかいやい。
好開　勸める功德、共に成佛ぢや。
勘兵　坊さん、妙でごんす。
ぎん　伊洲さんは太鼓にあたる事が上手ぢやわいなア。
女皆　ヨウ、太鼓さま〱。
客一　コリヤ、惡口云ふまい。顏が見えるぞ。
女皆　オヽ、可笑し。
　ト笑ふ。ト臆病口より、客二、三、四、五、山行戻りの形にて、長三郎、袴、羽織、茶屋息子の形、丁稚。箱提灯の疊みしを持ち、皆々醉うた體、謠ひ、淨瑠璃など、思ひ〱に云うて出る。
小蝶　お入りなさらんか。お茶でも上がりませぬか。
長三　モシ、揚弓はどうでござります。
客三　美人の御意が忝ない。一寸入らうかい。
　ト皆々、入る。
客四　これは首達が揃ふた。
客三　又山猫とは違ふたものぢや。
客二　左樣々々。
　ト皆々めれんの體にて、藝子へしなだれかゝる。庄八、分け入つて

庄八　一遍ぞめいて來う。皆お出で〳〵。

ト藝子仲居連れ、臆病口へ入る。

客一　コリヤ〳〵、身共を捨て置くかいやい。

ト跡より入る。

長三　小蝶さん、いつでも店は御繁昌ぢや。

小蝶　井筒の若旦那様、きついお見限り

長三　これは術ないぞ。ドレ〳〵、ちと當てませうか。

ト射前にかゝり、揚弓射る。

客五　我れ等は、ほんまと出かけう。

三人　ほんまなら出かけて見ませう。

ト此一群、橋がゝりの方へ行く。此うち皆々、一心不亂に揚弓射る。お芳、せんぐりに矢を取つて來て、皆皆へあてがふ。此うち好開、じり〳〵と小蝶が側へ寄り、矢張り後ろ向き、揚弓を射ながら

好開　小蝶坊、愚僧は揚弓のきりよりは、そさまのきりがしたいわい。

ト膝へ手をやる。

小蝶　申し、皆さんが見てござるわいな。

好開　見てゐたら大事か。色事は坊主の習ひぢや。

ト勘兵衛、腹立てるこなし。

勘兵　坊さん、場を替つてくんな。

ト好開を引き退け、小蝶が側へ行つて、射前にかゝる。好開、ぼやき〳〵、揚弓に射る。

姐さん、どうだえ。わつちやア江戸の人だから、馴染みになつて可愛がつてくんな。

小蝶　がらいでかいな、大事のお客様ぢやもの。

勘兵　かいやい、有難いと來てゐる。

ト抱き附かうとする。鐵右衛門、腹立てる。好開が頭を乗り越え、勘兵衛を引退けて

鐵右　ドレ〳〵、ちと射前を替らうか。

ト小蝶が側へ座り、揚弓を射る。勘兵衛、腹立て、無茶に揚弓射る。小蝶、烟草をつけて、鐵右衛門へやる。嬉しがり、取つて呑む。

好開　燃えるわいやい〳〵。

ト二人を乗り越え、小蝶が側へ行つて

兼ね〳〵愚僧と云ふた事は、嘘かいやい〳〵。

小蝶　ナンノマア、お出家を欺してよいものかいなア。お芳、爰へおぢや。

ト お芳を呼び、囁く。

よし　ハイ〳〵、合點でござります。モシ、好開さん、ち

つとお出でなされませ。

ト表へ連れて出る。

好開　なんぢや〳〵。

よし　モシ、手前のお家さんは、常住あなたの事を云ひ出して、大てい憧れてござる事ぢやござんせぬ。

好開　ヤア、ほんかいやい〳〵。

よし　ハイ、どう云ふ事やら、お出家様がお愛しいと云ふてゞござんす。

好開　サア〳〵、常からの目使ひが、さう云ふ氣味合ひに見える。どうぞして比翼連理の契りを結ぶと云ふ様な、よい首尾はあるまいか。

よし　サア、それもどうなりとなります。爰は出店の事なり、マア、安井前の内へござんせいなア。

好開　さうぢやなア。爰は往來、人目の關も數多あれば、内へ仕かけて參らう。これから五條の壇那方へ非時に參れば、お布施をしこためて戻り道から、内へ仕掛けう。

よし　さうなされいなア。

好開　必らず違へぬ様に云ふて下され。追つつけ行くぞや。ア、、なんまみだ〳〵。

ト嬉しがり、橋がゝりへ入る。ト山行の手合ひ戻つて來る。客一、女形皆々、庄八も出る。

客五　息子々々、よい加減に置かぬかい。

長三　これは揚弓に根が附きました。

客一　これから柏宗へ行て、鰻飯と出かけう。

庄八　池淵とはようござりませう。

山行　直ぐに井筒へ鳴り込みませう。

長三　小蝶さん、店仕舞ふてお歸りなさらんか。

小蝶　左様いたしませう。コレ、芳や、わしや先へ去ぬるに依つて、店も片附けて、さうして今の云ひ附けた事を、ノ、よいかや。

よし　ハイ、呑込んで居ります。

女皆　小蝶さん、道まで

小蝶　ハイ、お供いたしませうわいな。

ト小褄からげ、塗り下駄を穿いて、下へ下りる。

長三　皆さん、華やかな連れが出來ました。

山行　これはもてると云ふものぢや。

小蝶　庄八さん。

庄八　エ、。

小蝶　道行ぢやわいな。

客一　ハヽヽヽヽ、これは出來た。
長三　ざつと騷いで貰ひませう。
　ト揩り鉦、囃子になり、小蝶、女形皆々の中へ混り、
　この一群、各々捨ぜりふ隨分賑はしう云うて、向うへ
　連れ立ち入る。この間にお芳、紋箱を片附け、店戸を
　さいてゐる。勘兵衛、鐵右衛門、照らされた見得に
　て、ほつかりしてゐる。右の囃子、かすめて殘る。
勘兵　お侍ひ。
鐵右　江戸のお客。
勘兵　振り殘された八重が身は
鐵右　仕舞ひつけねば去なれもせず。
よし　モシ、あなた、ちよつとお目にかゝりませう。
　ト鐵右衛門を上の方へ連れて行く。
鐵右　身共に用とは
よし　されば、一兩日以前から、この店へお出でなさるゝ
　あなた、見れば見る程侍ひらしい、立派さうなよい殿御
　ぢやと、手前のお家さんが、こればつかりを云ふてゞあ
　つたわいな。
鐵右　それ程にえい男かいなア。
勘兵　コリヤ〳〵、姉よ、一寸來な。
　トお芳を下の方へ連れて行て
　最前わつちがこの門を通つたれば、主の女が千年も馴染
　んだ樣に、入れ〳〵と云つたワ。そこでわつちも亭主の
　樣子を見て心が惚れ〴〵となつて、揚弓さへ、八十六文
　と云ふもの張込んでつけたは、どうぞおぬしの才覺で、
　御亭主がかの件の的へ、わつちがこの揚弓を、はめる事
　は出來まいかの。
よし　ハイ、そりやもう隨分、談合の出來る事ぢやわい
　な。
鐵右　女中々々。
　ト引つ張つて行つて
　して〳〵、どうぢや。
よし　サア、手前のお家さんは、もと武家方であつたに依
　つて、云ふた事は變ぜぬ。大ていや大方の堅造ではない
　ぞいな。
鐵右　その堅い所が見込みだわい。
勘兵　姉々。
　ト引ッ張つて行て
　今の談合を、おぬし、きまつてくれねえか。
よし　聞きなされ、手前のお家さんはもと江戸のお生れ。

故郷が懐しうもあり、あなたの様な江戸のお客様と懇ろになつて、朝から晩まで江戸の話しがしたいと、これぱつかりを云ふてぢやわいなア。

勘兵　實かいやい〳〵。

ト嬉しがる。

よし　嘘か誠は安井前の内へお出でなされたら、様子が知れますわいなア。

鐵右　女中々々。

ト連れて行て

身共元來石部金吉かなさい棒、堅い同志とは逢うたり叶二人ぢや。

よし　さうでござんす。マア、安井前の内へお越しなされいなア。

鐵右　行かうとも〳〵。

勘兵　姉々。

ト連れて行つて

今の詞に違ひはないね。

よし　疑い深いお方ぢやわいな。

鐵右　コリヤ〳〵、ちよつと來い〳〵。追ツつけ安井前へ參るから、何か首尾よう。

勘兵　姉々、おぬしに任すから、チヨン〳〵幕切れ

よし　取つてゐるわいなア。

鐵右　コリヤ〳〵、其方が骨は盜まぬ。簪なりともポペンなりとも

よし　アイ〳〵。

勘兵　コリヤ〳〵、路考が錦繪を買つてやるべい。

よし　アイ〳〵。

勘兵　よいか、頼んだぞよ。

よし　合點ぢやわいなア。

勘兵　きまつてくれいよ。

よし　サア、よいわいな。

ト引つ張り合ひ、三人とも草臥れたこなし。

兩人　違ひはないかよ。

よし　ほんまぢやわいなア。

三人　ア、、しんど。

ト下にゐて、吐息つく。石橋の唄、囃子、チヨン〳〵にて、道具廻る。

造り物、平舞臺、見附け障子の一間、この脇、納戸口、西、中二階、橋がゝり、塀、切り戸、この前、

藤の棚、いつもの所に門口、よき所に長持ち直しあり、與九郎、下人にて、飯食ふて居る。おこぼ、雇ひ女にて、身仕舞ひをしてゐる。右石橋の切れにて、道具留まる。

こぼ　嬉しや、マア、身仕舞ひは仕舞うた。

ト鏡立てを片附ける。

與九　先づ雜用は片附けたぞ。

ト膳を附ける。

こぼ　與九郎どの、小蝶さんも今店から戻つてゞあつたではないか。奥へ行て小用聞かんせ。

與九　けつかるワ。貴樣は雇ひ人、俺は又お家譜代ぢやに依つて、これしきの事を貴樣達に習はうかい。

こぼ　こりや尤もぢや。わしも日小家のおこぼと云はれては名うての女子。小蝶さんが客を釣つて、かの今の段になると難所の替り役。うきふし繁き身の上ぢやわいなう。

與九　うきふし繁きと云ふ樣な面かい。シタガ、緣は異なものぢや。おこぼ、貴樣にゑらう惚れて居る者があるが、なんと叶へてやる氣はないか。

こぼ　なんと云はんす。わしが樣な者にも惚れてくれる者があるかえ。

與九　ある段ぢやない。云ふて聞かさう。ちつとそこへ出やんせ。

ト向うへ出て、つくまふ。

こぼ　そしてその惚れてくれた者は。

與九　貴樣に惚れたは

こぼ　わしに惚れたは

與九　横町のむく犬ぢや。

こぼ　なんぢや、むく犬ぢや。そりやあんまりであらうがな。

ト與九郎、逃げて

與九　ソリヤ、猫股が荒れ出したぞ。

こぼ　こなさんを。

ト棕櫚箒にて追ひ廻す。與九郎、箒を引き取り、おこほを踏みのめす。アイタ〳〵と云ふうち、逃げて入る。納戸の暖簾より首出して

與九　バア、。

こぼ　その頬がまちを。

ト箒を取り、追つかけ入る。鉢叩きの唄になる。

〽佛も元は凡夫なり、浮世の垢を脱ぎ捨てゝ、眞如の月

迎へつゝ、涅槃の雲に入り給ふ。
ト此うち向うより物草太郎、着附けの上、白の上張り、前帶、黑衣、淺黃頭巾、茶筌竿をかたげ、瓢を叩き出る。ト橋がゝりより往來の町人、大勢出る。太郎、花道に留まつて

太郎　サア〱、茶筌を買はつしやりませぬか。
町一　茶筌賣りに一不審持つて參らう。頭は俗體、からだは出家の境界はこれいかに。
太郎　ハテ、空也上人の寺に住んで、心の角を頭ゆゑに包み、形を染める墨の衣、取りも直さず出家にあらずや。
町二　坊主の身で女房を持ち、子を孕ますはいかに。
太郎　子孫に傳へて念佛繁昌、悟つて見れば男女別なし、一佛一體。
町三　すぎわひに茶筌を賣るも、佛の敎へか。
太郎　茶を立てゝ世に交はり、知らぬ爺樣や婆々樣の、口から導く佛方便、なんと因緣が解つたら、理詰めで茶筌を貰はずばなるまい。
町一　何を云ふても負けてゐる奴ぢやない。
町二　茶筌より祇園の香煎。
町三　土産に求めませう。サア、ござれ〱。

ト橋がゝりへ入る。
太郎　コレ〱、茶筌を買はぬかいの。口を叩いて茶筌の食ひ逃げに逢ふた。ハヽヽヽ。今日も東山で一日暮らした。これから五條通りへ參らう。
ト在鄕唄。
〽獅々吼菩薩の笛の音は、三千世界に響きつゝ。
ト此うち本舞臺へ來てあたり見廻し
この間は便りをせねば、定めて案じて居らう。幸ひの折柄。
ト表に佇み、うちを窺ひながら、入らうとする。うちにて
こぼ　イヤ〱、もう料簡がならぬのぢや。
よし　マア、待つたがよいわいな。
ト太郎、折が惡いと云ふこなしにて、隣りの切り戸へ入る。與九郎、逃げて出る。おこぼ、箒にて追はへるを、お芳、留めながら出る。
與九　ヤレ、人殺しぢや。出合へ〱。
こぼ　どこの國にか人を、猫股ぢやと云ふわいな。
よし　サア、あの人の口だんばくは、今に始まつた事ぢやない。もう〱料簡したがよいわいな。

こぼ　聞いて居れば、あんまりぢやわいな。
ト幕を打ちつけ、腹立てる。納戸より小蝶、莨盆提げ、出て
よし　これはしたり、何を其やうにせり合ふのぢやぞいの。
こぼ　せり合ひはしませぬが、アノ、與九郎どのが
與九　コリヤ〳〵、又諜をたかうと思ふて。高で貴様は雇人、俺は譜代の御家來ぢやに依つて
小蝶　これはしたり、二人とも、もうよいぢやないか。お芳、さつきの衆はまだ見えぬかや。
よし　もう追ツつけ見えるでござりませう。
與九　ヤア、そんなら今日もかのを釣つてござんしたか。そして、どんな客を釣らんした。
よし　今日は二人。侍ひの堅造と、江戸の町人衆。一人は御出家樣ぢやわいなう。
與九　侍ひの堅造に、江戸ッ子と坊さま、ゑワわ、この坪へ持つて行くぞ。
こぼ　コリヤわしにも役が廻つたわいな。
小蝶　いつもの通り、合點かや。
こぼ　呑込んでゐる。さすものぢやないわいな。

よし　もう見えさうなものぢやが
與九　約束ひろいだら失せさうなものぢやが
ト橋がゝりより鐵右衞門、上下に改め、出て
鐵右　誰ぞ取次ぎを頼みたい。
ト與九郎、そりやこそと云ふこなし。お芳、おこぼ囁き合ひ、納戸へ入る。與九郎、表へ出て、仔細らしう咳拂ひして
與九　取次ぎと仰せ候ふ程に、取次ぎの役に罷り出て候ふ。
鐵右　御苦勞に候ふ。シテ、小蝶どのは御在宿でござるかの。
與九　イヤ、在宿はいたさねど、宿に居られまする。イザ、先づあれへ、お通りあられませう。
鐵右　然らば罷り通る。
ト仔細らしく上へ通る。小蝶、こなしあつて
小蝶　これは先刻は、ちよと御意得ましてござりまする。
鐵右　これは小蝶どの、店にござる時はさうも見えぬが、うちでは一向堅苦しいお人さうな。
小蝶　御意でござります。太郎冠者、お茶を持たぬかいやい。

與九　ハア、、お茶を進ぜませう。
鐵右　これは〳〵、先づ婚禮同樣の儀なれば、かく上下を着し、推參仕つてござる。
小蝶　これは御丁寧な儀でござりまする。先刻はわざとお名も尋ねませなんだ。其許のお假名は如何申しまする。
鐵右　拙者事は黑鐵鐵右衞門と申しまする。
小蝶　それは固いお名でござります。
鐵右　互ひに以後は
兩人　別懇に申し談じませう。
ト與九郎、向うへ出て
與九　憚りながらちよと言上仕りまする。物語は後へ廻して、御寢所へお入りあつて然るべう存じまする。
小蝶　某も左樣には思へど、賴うだ人は如何であらう。
鐵右　イヤ、此方とても同腹中、甚だ閨を急ぐ儀でござりまする。
與九　然らば黑鐵鐵右衞門どの、席銭をこれにて申し受けませう。
鐵右　誠にその儀を失念いたした。
ト紙入れより金二兩出し、扇に載せ、出し
些少ながら御受納下されう。

與九　金子二兩、如何仕りませう。
小蝶　安い物ぢやが、時節柄ぢや、先づ納めてよからう。
與九　心得て候ふ。仲人の儀なれば先づ表の戸を、疾う差し寄せて、サア〳〵、嫁御寮。
ト小蝶が手を取り、鐵右衞門が側へ連れて行て
イザ、閨中へ。
鐵右　然らば女中。
小蝶　太郎冠者。
與九　先づお入りあられませう。
ト唄になり、鐵右衞門、小蝶を連れ、中二階へ入る。
お芳、出て
よし　どうぢやあつたえ。
與九　どうのからのと、さすもんぢやないわい。
ト小蝶、納戸へ廻り、出て
小蝶　お芳、寐間はよいかや。
よし　アイ、おこぼ女郎を、そつとやつて置きましたわいなア。
てふ　よし〳〵。
ト江戸騷ぎにて、勘兵衞、出て
勘兵　おかッさん、宿にか、どうだえ。

與九　江戸ぢや〳〵。
小蝶　お芳、そなたは侍ひの方を首尾して、おこぼを外の間へ
よし　アイ〳〵、合點でござんす。
ト入る。
勘兵　誰れもゐねえか。爰明けないか。どうだえ。
ト表を明けて
與九　遠慮はないから、入りねえ〳〵。
ト詫つて云ふ。
勘兵　入つてもえいか。許してくんな。
トうちへ入る。小蝶、手拭ひを取り、肩にかけ
小蝶　オヽ、よく來てくんなんしたの。
勘兵　芳坊への言傳てが屆いたに依つて、出て來るとは馬鹿な奴サ。
小蝶　とんだ遲かつたねえ。大方膳所裏か八軒でもそゝつてゐなさつたね。あて事もねえ、なんのこつた。
勘兵　おいらは三條へ行つて宿を取つて、直ぐにお神輿を持ちかけたから、遲かァねえ筈だ。
小蝶　そな野郎は遲いの早いのと、時切りの飛脚ぢやアあるめえし、とんだ事を吠え出したの。

勘兵　ぬしやアとんだぢくねるの。色にかゝつちやア、恐らく親の田地を賣り拂ひ、高天ケ原まで通り拔けて來た手合ひだ。そんな甘口な野郎ぢやねえぞえ。つがもねえ。
小蝶　なんだお前は、甘くつて砂糖屋の息子にもせよ、辛くつて唐辛子屋の息子にもせよ、雁鴨白鳥鯉小鳥、酢や醬油の甘口な女でもねえのサ。
勘兵　おぬしやアでえぶ話せるもんだ。恐らく石ケ坂の勘兵衛と云つちやア、笠森のお仙でも、淺草のお龜でも、色にかけちやアひけ取らない積りだ。色をすると云つても、只はせない。これ見ねえ、小判三兩だ。お前にほつかりとやるがどうだ。
小蝶　エヽ、置きねえ。わつちも下河原の小蝶だ。金づくではせまいわい。つがもない野郎だ。
勘兵　要らねえ金なら爰らへ捨てるのサ。
與九　捨てたらおらが拾つて置きの石サ。
勘兵　どうだ。きまつてくれる氣はねえか。
小蝶　なんだ、きまるのきまらねえのと、お臺所のお蛸ぢやあるめえし。自體わつちやァ江戸生れだから、江戸ッ子が好きサ。隨分承知の筋サ。

勘兵　こいつァ有り難い。承知なら、ちよつときまりの筋と出かけうか。

小蝶　なんにも云ひな。お若様、來な。

勘兵　こいつは有り難い。

ト頭へ手を上げる。唄になり、小蝶、勘兵衞を連れ、中二階へ入る。與九郎、初手の金と一緒にして、巾着へ入れてゐる。納戸より、小蝶、出て

小蝶　首尾はよかつたぞや。

與九　とん／＼拍子ぢや。うまい／＼。

ト此うち好開、出て來て、門口にて

好開　オ、イ／＼。

ト長う云ふ。

與九　通らしやれ／＼。

好開　差合ひはないか。通るぞや／＼。

トずつとうちへ入る。

與九　坊主か。ソレ、愁ひの段ぢや。

ト小蝶、好開を見て

小蝶　里曉さん。

トしいほりとなる。好開、側へ座り

好開　サア、小蝶師、貴公の愛執にほだされて、佛事作善の讀經も、心爰にあらざれば、そこ／＼に致して早々參詣仕つた。此うへは未來永劫の契りを結ばん。どうかどうか。これはしたり、なぜ物を云はぬ。アヽ、聞こえた。扨ては方便の嘘をついたのぢやな。アヽ、誠や外面如菩薩内心如夜叉、恐るべし／＼。ドレ、お暇申さうか。

與九　とずんと立つを

ト好開、留めろかと思ふことなし。小蝶、留めぬゆゑ

好開　イヤ、から歸つては方角が惡い。こつちやから廻つて歸らう。

ト小蝶の前を摺りつけて通る。小蝶、構はぬゆゑ

イヤ、マア、一服のんでから。

ト莨盆提げ、下にゐる。

與九　ソリヤ、ござつた／＼。

ト好開、小蝶をいろ／＼見て

好開　歸るぞや。その心なき所には居るべからずとの經說、さらばお暇申さう。

與九　とずんと立つを

ト小蝶を見る。小蝶、留めぬゆゑ、又下にゐて

好開　カウツ、ア、、山城屋の祠堂がこの月一貫目、オヽ、

思ひ出した。吉野屋から上がつた金を五百目と云ふもの、つい韋駄天の臺座の下へ入れて置いた。ドレ〳〵、歸つて。

與九　とずんと立つを

ト矢つ張り留めぬゆゑ

コレ、待たしやんせ。

好開　イヤ〳〵〳〵、留めな〳〵〳〵。

トだゞける。

與九　イヤ〳〵、コレ〳〵、お家さん、五百目ぢや、韋駄天ぢや〳〵。

好開　イヤ、去ぬる〳〵。

ト小蝶、つゝと立ち寄つて

小蝶　なんの事ぢやいなア。

ト引き据ゑる。好開、ぐにやとなり、下に居る。

ほんに人の思ふ樣にもない。申し、好開さん、わたしやお前に問ふ事があるわいなア。

好開　ヤア〳〵。

小蝶　人間は老少不常、葉末の雫花の露、今日あつて明日ない儚い人の命、お前と夫婦になつたならば、いつまで草の萬年も、添ひたいと思ふてゐれど、儘ならぬが無常の嵐、申し、わたしが先へ死んだら、お前はマアどうさしやんす。

好開　ハテ、知れた事、還俗々々。

小蝶　エヽ、アノ、そりや眞實。

好開　報恩射德と置くわいなう。

小蝶　オヽ、忝ない、有り難うござんすわいなア。

ト取りつき泣く。好開も、しく〳〵泣き出す。

好開　そなたが其やうに泣いてたもるので、俺もどうやら悲しうなつたわい。伏してつらつら思ん見れば、汝元來竹の如し、愚僧は又雀の如し。竹に雀は品よく留めて留まらぬ色なりと、大聲のお念佛。

與九　冥加錢々々。

トいかきを突きつける。

好開　モウ、取りかけるかい。

與九　こちの談議は先取りぢや。

好開　てもさても。

ト云ひ〳〵、包み銀子を出し

ソレ、一封。

ト與九郎、ひねつて見て

與九　たつた銀一つか。

好開　只今貰ふて來たぬく／＼ぢや。
與九　ても、薄い物ぢやなう。
好開　イヤ、又後は段々箔代、奉加を廻し追ひ／＼旦方を
　取りたくつて、寄進するわい。
與九　錢に直して四百余り、ないよりは增しぢや。ソレ、
　行てやらんせ。
小蝶　エヽ、つゝともう。
　ト好開、小蝶が手を取り
好開　小蝶さん、奧へごんせ。桶屋事せまいか。
　トしなだれる。
小蝶　せう事がない。そんなら坊さん
好開　エヽ、有り難い。
與九　入れて底突く眞似せまいか。
小蝶　二階へござんせ。
好開　ハアチリンチチン／＼テチチリチン／＼。
　トこの合ひ方にて、小蝶、好開連れ、中二階へ入る。
　與九郎、巾着へ金を入れて、居る。ト納戸より小蝶、
　お芳を連れ、出る。
小蝶　二人ながら大儀ぢやあつたなう。
よし　代りをやる迄は、大抵の氣兼ねぢやござんせぬ。

與九　小判五兩に小粒二つ、大事もない仕事ぢや。ソレ、
　取つて置かんせ。
　ト巾着を小蝶へ渡す。とバタ／＼にて、勘兵衛、好
　開、鐵右衛門、じだらくな形、おこぼ、長襦袢のな
　り、鐵右衛門、好開を引き立て、勘兵衛、おこぼを引
　き摺り出る。表のあき家より、太郎、出て聞いてゐ
　る。
勘兵　うせう／＼。とんだ胴脈を摑ましやがつた。
鐵右　ヤイ、坊主め、どこの國にか武士が寐て居る口中へ、
　とんでもない物を頰張らせ居つた。
好開　道理ぢや／＼。珍事ちうよう間違ひでござるわい
　の。
勘兵　吹替へと知つたら、口中までを行かないわい。
與九　仕舞ひ／＼。おこぼ、なんで縮尻つたぞい。
こぼ　なんぼうわしぢやて、たまるものではごんせぬわ
　いの。
好開　なんでも此まゝでは濟まさぬ。
勘兵　さうだ／＼。金も取返へして、存分にすべい。
鐵右　女郎め、うせやがれ。
　ト三人、小蝶へかゝるを、與九郎、留める。おこぼ、

お芳、奥へ逃げ込む。與九郎を三人して踏みのめし、小蝶へかゝる。この時、太郎、ずつと入り、三人を引き廻し、取つて投げる。

小蝶　ヤア、お前は

與九　こちの旦那様。

太郎　コリヤ〳〵、云ふては悪い、なんにも云ふな。

鐵右　ヤイ、うぬはどこの牛の骨で、武士たる者をなんで投げた。

勘兵　大騙りの腰押しにうせたのか。

好開　出家の俺を、なぜ手籠めにひろいだのぢや。

太郎　イヤ、手籠めばかりぢやない。三人とも首の用心して、待つていゝ。

三人　そりや又なんで。

太郎　爰に居る小蝶は俺が妾ぢや。ナ、わりや妾であらうがな。

小蝶　アイ〳〵、わしや妾ぢやわいなア。

好開　云ふな〳〵、見ればからだには三衣を纏ひ、出家の身で妾狂ひをなんでするぞ。

太郎　さう云ふうぬは出家でないか。

好開　ヤア。

太郎　生臭坊主めが。

勘兵　妾であらうが足かけであらうが、投げられちやア面が立たない。

鐵右　オヽ、身も武士が立たないぞ。

太郎　空也坊は肉食妻帯、妾と云へど女房も同然。密男をひろいだからは、マア、女の成敗は後へ廻して、三人とも重ねて置いて六つにする。覚悟してそこへ出い。

三人　ヤアヽ。

太郎　から云ふた所は俗體。又出家の行作には、殺すと云ふが見目でもあるまい。

與九　さうぢや〳〵。爰は俺が挨拶で、一人前に三百目づつ首代ぢや。きり〳〵出せ。

三人　サア、その金は

與九　金がなくば着てゐる物を、脱いでうせい。

三人　そりや又あんまり

太郎　成敗に行はうか。

三郎　ア、脱ぎます〳〵。

ト三人、丸裸になり

ハイ〳〵、脱ぎましてござりまする。

與九　ハヽヽヽヽ、悉皆庚申さまへ裸参りぢや。

鐵右　なんにも見猿、
　ト立つて目を塞ぐ。
捌兵　おらは聞か猿。
　トつくばうて耳を塞ぐ。
好開　愚僧は云は猿。
　トつくばひ、口を塞ぐ。
太郎　猿松めら、うせやがれ。
三人　キヽヽヽ。
　ト橋がゝりへ逃げて入る。
與九　さるとは逃げ足の早い奴ぢや。イヤ、これもなんぞの足しぢや。片附けて置かう。
　ト着物を一つにして、片脇へやる。
小蝶　こちの人、物草どの。
太郎　コリヤ。
　ト押へ、あたりを見る。合ひ方になる。與九郎、表をさす。太郎、頭巾を取り、上張りを脱ぐ。下、浪人の形。小蝶、大小を取つて來て、渡す。太郎、たばさみ、よき所へ座る。
小蝶　この間は音信を聞かねば、若しなんぞ氣遣ひな事でも起りはせぬかと、案じてばかり居りましたわいなア。
太郎　されば、この頃は津の國へ立ち越え、世の成行きを窺ふ所、未だ事を發すべき時節に非ず。一先づこの地へ立ち歸つたのサ。
小蝶　お前の大望、せめては一方の力にもと、思ふに任せぬ女子の身、及ばぬ事で多くの金銀をむさぼるのも、まさかの軍用の助けにもならうかと思ふて
與九　積り積つて小判千兩、奧の佛壇の下へ籠めてある。これ程にせうと思はんす、お家さんの心遣ひ、大ていの辛抱ではないぞいな。
太郎　さぞあらう。シテ、預け置きし大切のお方は、御機嫌ようお渡りなさるゝか。
小蝶　アイ、日のうちは人目もあれば、奧の別間に
與九　お姫さんも尋ねてゐやんした。呼んで來て逢はしたがよい。
小蝶　さうせうわいの。與九郎、ぬしも時分であらう。御膳を拵や。ドレ、お姫樣を呼びまして來うか。
　ト納戸へ入る。始終合ひ方。
與九　旦那さん、飯食はんすか。ドレ、膳取つて來う。
太郎　イヤ〳〵、まだ欲しくはない。構ふな〳〵。
與九　飯は厭か。そんなら莨のまんせ。

ト莨盆持ち行き、こなしあつて

イヤ、旦那さんえ、改めて云ふではないが、俺が親父さんはもと侍ひでごんした。様子あつて在所へ養子に行きましたが、十五の時ふつと人買ひに欺され、西國へ賣り渡され、山稼ぎの奉公、責め使はるゝが悲しさに、親方のうちを抜けて出て、そこ爰と徘徊うてゐたれば、その時お前は博多の里で浪人の身の上。縁でがな主従の約束をして、それからの奉公。それからお前は身に望みがあると云うて、お家さんを置き去りにして、上方へ登らんす。それから三年と云ふもの便りがないゆゑ、この與九郎を供に連れて、跡を慕うてこの上方へ上らんしたお家さん。お前に巡り逢ふて、ヤレ、嬉しやと思ふに引替へ、よう聞けば謀叛とやら云ふ商賣。悪い事ぢや、そりややめにさんせと、サア、俺が人並の者ならば意見もせうけれど、口不調法なさかいでそれも叶はぬ。今にもお前やお家さんの身の上に、ひよつとした憂き目もあらうかと、俺やそれが案じられて、夜の目さへ合ひやんせぬわいの。

ト泣く。此うち太郎、莨のみ、思案してゐる。與九郎、氣を替へて

ハ、、、、、俺とした事が、誰れが問ひもせぬ問はず語り。コレ、俺や奥へ行て風呂を焚くに依つて、その間にお姫さんに逢はんせ。

トこなしあつて

ドリヤ、風呂の水を汲んで來うか。

ト唄になり、與九郎、入る。此うち太郎、懐中より連判状を出し

太郎　先刻箱崎の間者より、送り越せしこの連判、途中ゆゑ披見もせなんだ。ドレ。

ト開き見て

九州表は大半味方。よし〳〵。

ト三味線入り、唐樂になる。ト中二階より皇女、出る。

皇女　伯莫、そこにゐやるかや。

太郎　姫宮様、ハッ〳〵。

ト下座へ行く。この時、勘兵衛、出て、門口に聞いてゐる。

先づは御機嫌の體、いかばかりか悦ばしう存じまする。

皇女　そなたも無事で嬉しいわいなう。シタガ、伯莫、自らが願ひは、いつ叶へてたもるぞいなう。

岩井紫若の葛城

太郎　そりや叶ひますまい。こなた様は忝なくも、朝鮮國の王位の姫宮。歌之助づれと御縁を結ぶ事、御先祖のお名の穢れ、叶はぬ縁と思ひ諦め、歌之助は思ひ切らつしやれ。

小蝶　それでも女夫にしてやらうと、云やつたぢやないかいなう。

太郎　そりや僞りサ。

皇女　イヤ／＼、噓つきやつたら自らは聞かぬ。どうあつても歌之助と、夫婦にならにや置かぬわいなう。

太郎　女儀乍らも父御の怨敵、久吉を恨みんと云ふ御所存はござりませぬか。

皇女　何より彼より、戀しい人に逢ひたいわいなう。

太郎　イヤ、どうござつても叶ひ申さぬ。兼ねての大望大事調ふたれば、今宵北山の砦へお伴ひ申す。サ、御用意あつて然るべう存じまする。

ト此うち皇女、丸鏡を出し、顔形を寫して見て

皇女　和國に見馴れぬ髪形、この姿では所詮願ひも叶ふまい。コレ、伯莫、どうぞ自らを傾城とやら云ふものに、賣つてやつてたもいなう。

太郎　なんと御意なさるゝ。

皇女　サア、傾城とやらは廓に育つて、逢ひたい人にも心安う逢はれるさうな。傾城になつて戀しい歌之助に逢ひたい。どうぞ自らを傾城にしてたもいなう。

太郎　スリヤ、傾城になつてなりとも、歌之助に添ひたいとな。

皇女　傾城になりたい。傾城になりたいわいなう。

太郎　ムウ。

ト手を組み、思案する。トこの時、勘兵衛、表の戸を細目に明け、覗く。鏡に顔寫るを、太郎、ふつと見て

これは

ト表を見る。勘兵衛、隠れる。

皇女　なんとぞしたかや。

ト太郎、皇女を引き廻し、表へこなしあつて

太郎　お姫様、ござれ。

ト唄になり、皇女連れ、ツイと中二階へ入る。勘兵衛しめたと云うこなしにて、呼子を吹く。ト鐵右衛門、奴の形になり出る。

鐵右　土手助、首尾は。

土手　主人岸田さまの仰せに依つて、其方、身共、馬鹿を

盡して窺ふ所、最前參つた空也坊と云ふは、疑ひもなき
朝鮮國の伯莫。
鐵右　然らば主人岸田さまへ訴へて、召捕りの手當てを
土手　イヤ／＼、多勢でかゝらば風を食らふは知れた事。
角助、お身は。コレ。
ト　さゝやく。
角助　なるほど兩人のうちへ召捕らば、褒美はずつしり。
土手　出世の足代。
角助　うまい／＼。
土手　コリヤ。
ト押へ、顔にて行けとする。
角助　合點ぢや。
ト橋がゝりへ入る。土手助、うちへ入り、二階を目
がけ、行く。トうちにて、鼓を調ぶる、折が惡いと云
ふこなしにて、下の屋體へ忍び込む。ト中二階のうち
にて
〽唐船の梶枕、夢路ほどなき名殘りかな。
ト此うち向うより、堀尾帶刀、野袴、ぶつ裂き羽織の
形、高札を持ち出る。花道にて、こなしあつて
帶刀　唐土の素郷官人、この日の本に渡りしを、謠ひに綴
りしあの唐船。鼓の調べは聞き及ぶ小蝶が住家。何にも
せよ、ソレ。
〽箱崎に早着きにけり／＼。
ト本舞臺へ來て
誰そゐぬか。頼まうぞよ。
ト納戸より、小蝶、出て
小蝶　どなたでござります。御用ならお通りなされませ。
帶刀　然らば許し召され。
トうちへ入り、家内を見廻すこなしあつて上へ座る。
始終鼓の調べ、コイヤイ打つ。
小蝶　見ればお歷々樣、お供も連れず只お一人、この小蝶
に御用ばしあつて。
帶刀　いかにも、某は眞柴久吉公の昵近、堀尾帶刀と申
す者、主人より承りし内意あつて、忍び／＼に巷を徘
徊。この家の主小蝶とやらんに、尋ねたき仔細あつて、
わざわざと伺候いたした。
小蝶　スリヤ、堀尾帶刀さま。
トこなしあつて
シテ、私しにお尋ねなされたいとは。
帶刀　小蝶、これを見やれ。

ト高札を取り直し、立てる。

小蝶　これは。

ト合ひ方になり、土手助、そろ／＼出て、立ち聞きする。帶刀、高札を讀む。

帶刀　朝鮮の武官伯莫と云ふ者、錦花皇女を守り立て、この日の本にて逆意を發す。この曲者、又は從類たりとも討取るに於いては、恩賞望みたるべきものなり。

小蝶　スリヤ、その伯莫どの。

帶刀　假の仇名は物草太郎。

小蝶　エヽ。

帶刀　呆氣となつて佐々木六角へ入り込み、事顯はれしゆゑその場の囲みを切り拔け、湖月の一卷、まつた武將久吉御秘藏の蘆屋釜を手に入れ、皇女諸共その場を立ち退き、猶も異國の殘黨を語らひ、謀叛の旗を固むるとの風聞。なんと彼の者共の行くへは、小蝶、其方はよく存じてゐやうがな。

ト小蝶こなしあつて

小蝶　ホヽヽヽ、其やうなマアむつかしい、名さへ覺えぬ唐人のお尋ね者、近附きでなければ行くへを存じませう筈もなし。コリヤ、てつきりと、御詮議の門違へかと存じまする。

土手　イヤ、門違ひではない。毛唐人の隱れ家は、爰な内ぢや。

ト向うへ出る。

小蝶　こなさんはさつきの

土手　江戸者になつて入込んだは、家内の樣子を窺はんがため。岸田民部どのゝ、下郎土手助と云ふ者。匿ひ者の泊め所は、慥かにあの

ト二階目がけ行くを、小蝶、留めて

小蝶　イヤ、女子でこそあれ、家捜しさす事はならぬわいなア。

ト帶刀、側なる延べ鏡を取り上げ、見て

帶刀　こりやこれ朝鮮流の丸鏡。裏に鑄附けし萬歷の年號扨ては

トこなし、下げ緒を取り、繩捌きして、ずつと立ち上がる。

小蝶　スリヤ、どうあつても

帶刀　猶豫ならざる詮議の一條。

小蝶　待つた。

ト裾を持つて、留める。

土手　そんなら俺が
　ト行くを、同じく留めて
小蝶　ハテ、家捜しさゝぬと云ふのに。
帶刀　叛逆人を匿ふからは、そち達も遁れぬ同罪。
小蝶　サア、それはな。
土手　家捜しは、なんでさゝぬ。
小蝶　サア、それは
帶刀　其方にも繩打たうか。
小蝶　サア
土手　家捜しさすか。
小蝶　サア。
兩人　サア／＼、小蝶、なんとぢや。
　ト小蝶、二階を見たり、兩人を見たり、いろ／＼こなあつて
小蝶　コリヤマア、ひよんな事になつて來ましたわいなア。
　ト下にゐて、泣く。ト相の山になろ。
〽夕べあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし。
　ト向うより歌之助、蘆屋、遠山、朝顔、横笛、右各々相の山の形、一文字の編み笠、さゝらを帶に差し、唄に合はせ、五人とも三味線、胡弓を彈き、出て、門口に留まり、合の手彈く。
小蝶　この取込みの中へ、聞きとむない相の山、通らしやれ通らしやれ。イヤ、帶刀さま、かうなるからは包みはいたしませぬ。なるほど其お二人は所緣があるゆゑ、匿ひましてござりまする。
帶刀　扨てこそ。
　トキツとなる。
小蝶　サア、召捕らうと仰しやるは武士のお役目。併しながら昔からの譬へにも、窮鳥懷に入る時は、獵人さへこれを助けると、申すではござりませぬか。
帶刀　イ、ヤ、雀小鳥は世のわざくれ、四海を騷がす惡鳥は、いつかなゆるめぬ。
土手　押へて置いた寐鳥羽子
帶刀　空しく見遁す
兩人　法はない。
小蝶　そんならどうでも
兩人　くどい。
小蝶　ハア、。

ト泣く。
ヘ野邊よりあなたの友とては、血脈一つに珠數一連、これが冥途の友となる。
これは又心もない相の山。手の隙がない、通らしやれ通らしやれ。
帶刀　通れとあらば罷り通る。
ト又行くを、小蝶、向うへ廻り、二階の覆ひになり
小蝶　アヽ申し、今の通れは、門口の相の山。
土手　寂滅爲樂、金の蔓に
ト行くを、帶刀、留めて
帶刀　イヤ、大切な四海の科人、われ達に繩打たせ、帶刀の役目が立たうと思ふか。
土手　イヤ、此方も、岸田さまの下知を請けて
帶刀　岸田が重いか武將が重いか。
土手　ヤ。
帶刀　久吉公の嚴命を蒙りし堀尾帶刀、下郎風情の助力は頼まぬ。扣へて居らう。
土手　ムウ。
トこなしあつて
面白い。詮議の仕樣を高見から見ようわい。

小蝶　帶刀さま、申し、どうぞ。
ト手を合はせ、こなし。
帶刀　かばかりの科人、この家に匿ひ、助命を願ふ女が俗性、ハテナア。
ト思案する。
ヘ獨り寐覺めの友とては、夢に見た夜の俤が、これが寐覺めの友となる。
土手　これは又どひつこい。米など錢などこまして、きりきり去なしたがよいわい。
ト表より
歌之　イヤ、亭主の報謝。
皆々　無用でござんす。
帶刀　報謝を受けぬ相の山、何ゆゑこれへ。
歌之　主小蝶に用事あつて。
ト編み笠を取つて、うちへ入る。
帶刀　お身は生駒歌之助。
歌之　帶刀さまには不思議の對面。
小蝶　スリヤ、聞き及んだ歌之助さま。
薗屋　自らは薗屋姫。
遠山　傾城遠山。

横笛　腰元横笛。
朝顔　同じく朝顔。
土手　五人とも、何の用で
歌之　匿はれたい。
小蝶　なんと。
歌之　追放の身の寄るべなう、歸參の功にはこの家の
　ト こなしあつて
蘆屋　サア、小蝶と云ふ名を見込みに、匿ふて貰ひたい。
蘆屋　一樹の蔭、一河の流れ。
遠山　他生の縁と思し召し
蘆屋　歌之助諸共
遠山　どうぞこの家に
小蝶　一人ならず大勢さま
皆々　匿ふて貰ひたい。
小蝶　ハテナア。
土手　イヤ、それよりは奥に居る匿ひ者を
　ト 又行くを、帶刀、引き廻して
帶刀　詮議の猶豫いたしくれう。
小蝶　スリヤ、お聞き入れ遊ばして
帶刀　某存ずる旨あれば、暫時の用捨。最早日影も
　ト 空を見て
黄昏を告ぐる迄、四海の囚人、小蝶、其方へ預けくれう。
小蝶　スリヤ、暮六つを打つ迄は
帶刀　手ざし致さぬと云ふ誓ひの高札。
　ト 渡す。小蝶、取つて
小蝶　エヽ、忝い。
土手　若しそれ迄に高ふけりした時は、
帶刀　武將の下知は千筋の繩目、六十餘州が牢屋同然。
土手　ハテ、應揚な事ぢやなア。
歌皆　シテ、我れ〳〵は
小蝶　匿ひませう。
歌之　先づ以て忝い。
土手　大勢の居候、いつそ俺も匿はれやう。
小蝶　そりやどうなりと勝手次第。
　ト 帶刀、中二階を尻目にかけて
帶刀　久吉公の武威に恐れ、逃げかゞむ卑怯の伯莫、今召捕るは安けれど、小蝶が願ひ默し難く、一旦は助け歸る。黄昏までにも、その高札の返答を
　ト 云ひ〳〵表へ行く

小蝶　しつかりとお聞かせ申しませう。
歌皆　愈々この家に
土手　見附けた二階の
ト行くを、小蝶、立ち塞がつて
小蝶　サア、皆さん、奥へ
帯刀　小蝶、しかと詞を番ふたぞよ。
小蝶　ハイ。
ト唄になり。小蝶、土手助に立ち塞がりながら、高札を傍へに立て置き、兩人、納戸へ入る。帯刀は橋がゝりへ入る。歌之助、蘆屋、遠山、殘る。合ひ方、三人あたり見廻し、
蘆屋　歌之助さま。
遠山　どうやら斯うやら
歌之　かく入り込みしも曲者の行くへ、又湖月の一卷を手に入れ、歸參の功に立てんがため。
蘆屋　歸參が叶へば添はれぬ自ら。
遠山　ハテ、添はれずば又駈落ちして、野の末山の奥までも、ナア、お二人さん。
横笛　さうでござんす。江戸長崎へもお供して
朝顔　この先途を見屆けますわいなア。

遠山　歌さん、お前もその心であらうがな。
歌之　さうとも／＼、憂いつらい目も五人一緒。
蘆屋　水も汲まうし
遠山　手鍋も提げう。
歌之　夏も炬燵へ當るわいなう。
蘆屋　それ聞いて自らも
遠山　この遠山も
横朝　私しども、
皆々　落着きましたわいなア。
ト納戸より、おこぼ、お芳、出て
兩人　歌之助さま。
歌之　半蔀どの、浮舟どの、して、家内の實否は、
半蔀　疾くより入り込んで氣を附けますれど、
浮舟　今におきまして
兩人　なんの手がゝりも
歌之　さうあらう。半蔀どの、コレ。
ト半蔀に囁く。
半蔀　スリヤ、葛城さまに
歌之　何かの手筈、三人の女中諸共
半蔀　心得ました。

浮舟　そんなら此まゝ

横朝　葛城さまへ

半部　皆樣、ござんせ。

　ト四人橋がゝりへ入る。

蘆遠　奥の樣子を

歌之　二人とも早う。

遠山　お姬樣。

蘆屋　遠山どの。

遠山　お越し遊ばせ。

　ト二人納戸へ忍び込む。始終合び方、歌之助、こなしあつて

歌之　知らぬ昔と云ひながら、早枝と思ふて云ひ交はしたは現在のお主。今となつては切るに切られぬ妹脊の惡緣。又遠山は追放の身の跡を慕ひ、かゝる落ち目を見捨てもせず、共に繫がる憂き艱難。傾城に誠なしとはいつの世の空言、ならう事ならお姬樣を、本妻、遠山を妾にして、月よ花よと樂しまうに、思ふに任せぬ世の中ぢやなア。

　トいつてんしやんの合ひ方になり、二階のうちにて

皇女　イヤ〳〵、どうあつても自らは、國へ去ぬ事は厭ぢやわいなう。

　ト皇女、二階の障子明け、出かける。歌之助、この聲に二階を見やる。皇女も見て

ヤア、そなたは歌之助。

　トつか〳〵と側へ寄つて

逢ひたかつた〳〵わいなう。

歌之　こりやなんぢや。衣裳つきと云ひ、髮の結ひ樣。聞こえた。唐人の迷ひ子ぢや。

　ト皇女、我が姿を見て、恥かしきこなしあつて、顏隱し、俯向く。

何は兎もあれ、遂にこれまで唐へ行て見ねば、近附きであらう筈もなし。ハア、扨てはこれが彼の譬へに云ふ唐人の寐言であらう。

皇女　そなたの方に覺えはない筈。何を隱さう、過ぎし彌生の始め頃、聚樂の御所の花の宴、お能の中へ交はつたそなたの面影。

歌之　なるほど、その頃主人の御能とあつて、小鼓の役を仕れと、召し出だされしこの歌之助、設けの棧敷が久吉公、かたへの御簾は大勢の女中達。

皇女　サア、自らも垣間見に、てもマア、可愛らしい、い

としらしい殿御ぢやと、思ひ初めても云ひ寄るべきよすがもなう、朝夕焦れてゐましたわいなう。

歌之　ムウ、聚樂の館にゐたると云ひ

ト皇女を見て

扨ては日の本へ捕虜となりし、異國の姫宮錦花皇女。

ト皇女、俯向く。歌之助、キッとこなし、それより思案をして、氣を替へ、側へ座り

惚れたと云ふても唐の色事、嘘ぢやゝらほんまぢやゝら、どうも呑込めぬ。

ト氣を持たす様に云ふ。皇女、こなしあつて

皇女　この日の本の誓言には、指を切るとやら、お髮を挾むとやら。

歌之　イヤ／＼、それはとつと昔の事、今時は手ッ取り早う、から手を取つて仕掛けるが色事の近道。

ト手を持つて引き寄せる。遠山、出かけ、腹立てるこなし。

皇女　自らが願ひを叶へてたもるかや。

歌之　唐の据ゑ膳も亦珍らしい。

ト引き寄せ、抱き附く。遠山、ずつと出て、引き分ける。

遠山　さうはさすまいわいな。

歌之　ヤア、遠山か。

遠山　コレ、女中さん、唐三界から來て人の大事の殿御に惚れると云ふ様な、仇不敵な事があるものかいなア。

ト疊叩いて云ふ。廬屋、見てゐる。

皇女　さう云ふそもじは

遠山　アイ、慮外乍ら歌之助さまの

ト歌之助遠山を引き廻して

歌之　これはしたり、そちは傾城。ナ、傾城の口説手管、爰で云ふのは惡い／＼。

遠山　何をよい口な。

歌之　ハテ、悋氣するのも時に寄る。

廬屋　イヤ、自らは悋氣する。

ト向うへ出る。

歌之　サア、やくたいぢやぞ。

廬屋　歌之助が妻と云ふは、自らより外にはない。コレ、唐の女中、叶はぬ戀ぢやと、思ひ切つたがよいわいなア。

皇女　イヤ／＼、唐も大和も、戀と云ふ字は二つはない。命に替へても歌之助に連添ふて見せるわいなう。

遠山　オヽいしこ。命捨てる事を、唐人に習はうかいなア。

蘆屋　髭だらけなちんぷんかんと、女夫になりやるが相應ぢやわいなア。

皇女　それをそもじに習はうかいなア。サア、歌之助、奥へおぢや。

蘆屋　イヤ、奥へはやらぬ。

遠山　爰には置かれぬ。こりやもう連れまして去なにやアならぬ。

蘆屋　さうぢやわいなア。サア、歌之助。

ト引ッ張る。

皇女　イヤ、返す事はならぬ。

遠蘆　イヤ、連れまして去ぬる。

ト左右へ引つ張る。歌之助、捨ぜりふにて、双方を宥めるこなし。この模樣いろ〳〵ある所へ、土手助、出て

土手　コリヤ、してやつた。

ト皇女を引つ立てる。歌之助、蘆屋、遠山を圍ふ。

唐の衒妻、岸田さまへ引立てる。うせう。

歌之　イヽヤ、その女は、こつちに詮議がある。

土手　何を猪口才な。

ト引つ立てる。歌之助、支へる。皇女、振り切つて逃げる。土手助、うぬをと行くを、蘆屋、遠山、立ち塞がる。この間に歌之助、皇女を長持ちへ打ち込む。土手助、蘆屋、遠山を蹴据ゑ、長持ちへかゝる。歌之助、留める。立ち廻りあつて、土手助、三人を引き退け、長持ちへかゝる。この時納戸口より、小蝶、すつと出で、土手助を引き廻し、長持ちへしやんと乘る。

歌之　御亭主。

土手　小蝶。

三人　今の樣子は

小蝶　殘らず聞きました。

四人　その長持ちは。

小蝶　こりやわたしが大切にせねばならぬお人から、預かつた衣裳、お前の儘にさしては、その預かり主へ言ひ譯がござんせぬ。申し歌之助さま、お前へは戀と云ふ字を縫ひ込んだこの衣裳、無事に渡さば、肌に着けるお心か。但しは仇な縫ひ模樣、引裂いて捨てる心か。

歌之　和國に見馴れぬ唐織のその衣裳、この歌之助がしつかりと、肌に添へやうと思ふて

小蝶　岸田の御家來、あなたの心は
土手　唐渡りの縫ひ模樣、其まゝにして持つて行くか、但し、ばら／＼に切りほどいても天晴れ大金。
小蝶　お二人の女中樣はえ。
蘆屋　縁の糸筋
遠山　結び合はして
兩人　取り持つ心。
小蝶　嬉しうござんす。それでわたしも落着きましたわいなア。
歌土　然らばこの
ト左右より寄るを、小蝶、留めて
小蝶　ハテ、一重の衣裳、此まゝに渡すとも
歌之　縫ひをほどいて
土手　切り碎くとも
遠蘆　二つの返事は
小蝶　後までに
四人　そんなら此まゝ
小蝶　御一緒に、マア、奧へ。
ト歌之助、土手助、又寄るを、小蝶、じつと押へて
ござんせいなア。

ト唄になり、歌之助、蘆屋、遠山を連れ、土手助と兩方へ別れ入る。後に小蝶、いろ／＼思案をして
小蝶　夫から預かつた、大切なお姫樣、堀尾帶刀が詮議と云ひ、今の大勢、こりやもう、この家には置きまされぬわいの。
トこなし。うちより
與九　お家さん／＼。
小蝶　そこへ行くわいなう。
ト長持ちへ錠を下ろし、しか／＼ある。此うち
與九　お家さん、何をしてゐやんすぞいの。
小蝶　ドレ、一寸行て來うか。
ト唄になり、小蝶、納戸へ入る。ト向うより葛城、屋敷風、帽子、抱へ帶、一腰、家來一人附き出る。
家來　奧樣、あれに目印しの蔴の暖簾、小蝶が宅と見えまする。
小蝶　案內しや。
家來　ハツ。
ト本舞臺へ來て
誰そゐぬか。頼みたい。頼まうぞよ。
トうちより

與九　オイ〳〵、今日ほど頼まんしよの流行る日はない。
　ト云ひ〳〵出る。
葛城　誰れぢや〳〵、用があるなら入らんせ〳〵。
葛城　其方は旅宿へ歸り、暮に及はゞ迎ひに參れ。
家來　ネイ〳〵、然らば後刻參りませう。
　ト橋がゝりへ入る。
葛城　左樣なら御免下され。
　トうちへ入る。
　シテ、御亭主小蝶どのは。
與九　お家さんは奥にぢやが、なんの用で、どこからごんした。
　ト云ふうち、顏見合はせ
　ヤア、お前は姉貴ぢやないか。
葛城　そなたは弟の與九郎。
與九　姉貴。
葛城　思ひがけない
與九　變つた所で
兩人　逢ひましたなう。
與九　マア〳〵、坐らんせ。何から云はうやら彼から云はうやら、お前に別れた年を數へて見れば、丁度四年、不沙汰な者ぢやと、必らず叱つて下んすなや。そなたは幼少より劍難の相があると易者の考へ。それゆゑ武家奉公の望みも絕ち、山科の百姓へ不通の養子。その後父さんの御大病、人參の價にこの葛城は廓の勤め。その甲斐もなう父さんは、遂に御養生も叶はず、一昨年の春お果て遊ばしたわいなう。
與九　ヤア、そんなら親父樣は死なしやつたか、ワア、
　トほろ亂して泣く。
葛城　悲しいは道理〳〵。勤めのうちに緣でがな、佐々木の御家老名古屋山三どのに請出され、武家方のおかもじ樣と、侍らるゝこの身の仕合はせ。それは格別、弟、そなたはどうして爰にゐやるぞいなう。
與九　サア、この譯も話せば長い事ぢやが、姉貴、お前の連合ひは佐々木の御家老ぢやと云はんすが、コレ、その佐々木どのゝ娘蘆屋姬と云ふが、こちのうちへ來て居やつしやるぞや。
葛城　ナニ、お姬樣がこの家に
與九　それにまだ生駒歌之助と云ふ侍ひ、遠山とやら云ふけいせんを連れて、こちのうちへ居候ぢや。

葛城　行くへを求むるお姫様、歌之助どの諸共この所へ、ハテナア。

トこなしある。

與九　時に又、俺が奉公してゐるその譯と云ふは

トうちより

小蝶　與九郎々々、どこにゐやるぞいなう。

ト呼びながら出る。

與九　お家さん、コレ、お前に逢ひたいと云ふての。

小蝶　わしに逢はうと仰しやるは

葛城　イヤ、苦しからぬ者。主の小蝶どのと申すは

小蝶　わたしでござんす。

葛城　ちと折入つて尋ねたい事もあり

小蝶　何かは存じませぬが

葛城　近附きになりました共うへで

小蝶　お尋ねなさるゝ御用の儀を

ト云ふうちに、顔見合はせ、兩人とも恟り。

葛城　こなさんは

小蝶　あなたは

葛城　北野の邊り、双ケ岡の柳原

小蝶　ほんにその時の

葛城　順禮の女中。

小蝶　武家の奥様。

葛城　さうとも知らず

小蝶　廻り廻つて

葛城　變つた所で

小ふ　不思議な出合ひ

葛城　ハテ、その時の

兩人　女中様であつたよなア。

與九　ヤア、そんならお家さんも近附きか。コレ、常々話した俺が姉貴と云ふは、あの人でごんすわいの。

小ふ　なんと云やる。常々そなたの話しやつた、姉御様と云ふは

葛城　弟が今の主人と云ふは

與九　こちのお家さん。

小ふ　これも因緣。

葛城　廻り廻つて

與九　一家の端くれ

兩人　不思議の緣で

三人　あつたよなア。

ト葛城、キッと思案のこなし、小蝶も思案する事あつ

て

小ふ　與九郎、そなたは奧へ行て、大切なお方のお側にの、ちやつと行きや。

與九　イヤ〳〵、まだ姉貴に話さねばならぬ事が

小ふ　ハテマア、行きやと云ふのに。

與九　アイ。

　ト葛城方へこなしあり、是非なく奧へ入る。跡合ひ方。小蝶、莨盆を葛城が側へ持ち行き、下座へ行つて

小ふ　ほんにもう何から申し上げませうやら、その時は樣樣の御親切、葛城さまと云ふお名まで聞いて置きましたれば、今日はお屋敷へお禮に上がらうか、明日は便りをいたしませうと、思ひ乍らも過ぎ行く年月、御無沙汰の段は幾重にも、お免し遊ばして下さりませ。

葛城　なんのマア、禮を受けうとてお世話は申さぬ。よしありげなる順禮の一人旅、病むは誰れしも難儀なものと、心ばかりの介抱。連れの衆にはぐれしと、噂ばかりでいづくのお人と名も聞かねば、行く先とても定かならず、案じながらも今日と過ぎ明日と暮らし、仇に月日も過ぎ行くうち、ちと樣子あつてこの頃は都に滯留。今日祇園へ參詣の折柄、下河原にて楊弓を渡世とする小蝶どの身に應ぜぬ黄金を集め、何か樣子のある體と、密かに知らせし者あるゆゑ、若しや手懸り、サア、手筋を求めて、知る人にもなつたならば、土地を案内の杖柱にもならうかと、わざ〳〵尋ねて來て見れば、思ひがけないその夜の女中。世に落ちぶれし順禮には引替へて、家造りと云ひ暮らしも相應。思ひ廻せば

　ト小蝶を見て、こなしあつて

小蝶どのであつたよなア。

　ト小蝶はこなしあつて

小ふ　お合力に預かりました、黄金の光りは尊といもの。其お情を足代に、やう〳〵この地の侘び住居、あられもない世渡りをお目にかけまして、近頃お恥かしう存じまする。

葛城　シテ、その節より尋ねてゐさつしやる、連れ衆の行くへは知れましてござんすか。

小ふ　イヤ、只今に於きまして

葛城　巡り逢はぬとな。

小ふ　ハイ。

葛城　ハテ、逢はつしやれぬぢやよなア。

　トこなしあつて

小蝶どの、こなさんの生れ故郷、又旅の辛苦を重ねて、尋ねさつしやる連れ衆と云ふは

小蝶　わたしが夫でござりまする。

葛城　さうあらうと思ひました。其お連合ひは、定めし由緒ある武士であらう。

てふ　何を隠しませう。わたしはもと筑前博多の傾城。憂き川竹の寄るべなき其うちにも、この人ならではと云ひ交はした、その殿御の、身請けも済んで、嬉しや夫婦にと思ふうちに、望みがあるとて國を出やしやんして、わたしは置き去り。その望みの叶ふ迄は、誰れにもあれ實名を明かすなと、堅い云ひつけ。それゆゑどうも、名は云はれませぬわいなア。

葛城　なる程お連合ひの實名、迂濶に云はしやれぬも道理。何は兎もあれ、始めて聞いた小蝶どのゝ身の上。わたしとてもこの都の島原で、憂きを重ねし苦界の身の上。夜毎に變る手枕の、中に一つを仇にはせじと、願うた念が通じたやら、身まゝになつて名古屋山三が妻の葛城。縁は異なもの、そもじは博多の

小蝶　あなたは島原の

葛城　ハテ

兩人　お傾城であつたよなア。

ト葛城、あたりを見廻し、フト高札を見て、こなしあつて

葛城　小蝶どのゝお連合ひの本名、隠し負ふせうと思はつしやれても、天知る地知るこの葛城は、よう知つて居りまする。

小蝶　ムウ、スリヤ、夫の本名を

葛城　筑紫の浪人物草太郎。

小蝶　エヽ。

葛城　こなさんは女房櫛と云はうがの。

ト小蝶、ぎつくりする。

ホヽヽヽ、夫の仇名、こなさんの實名まで、とつくりと聞き届けて來ましたわいなう。

小蝶　シテ、又わたしが今仰しやつた、太郎どのゝ女房櫛ならば

ト葛城、簪を出して

葛城　この簪の出所を尋ねうと思うて。

小蝶　これは。

トこなし

葛城　旅疲れの體と見せ、黄金を貪る非道の仕業、立ち退

く跡に落ち散つたこの簪。
ト小蝶、こなしあつて

小蝶　別れた夫が形見にせいと、下さんしたその簪、その場所に落ちてあつたと云うて、ホヽヽヽ、仰山な仰しやりやう。

葛城　イヤ、世の常ならぬギヤマンの浮き彫り、この日の本に用ひぬ品を所持するは、疑ひもなき異國の殘黨。
ト小蝶、こなしあつて

小蝶　スリヤ、その簪が

葛城　紛はぬ合ひ紋。

小蝶　物草どのゝ俗性を

葛城　聞くまでもない朝鮮の伯莫。慥かにこの家へ
トずつと立つて行くを小蝶、留めて

小蝶　推量の上は包むに及ばぬ。併し女中の手際では、伯莫どのを搦めんとは、及ばぬ及ばぬ。

葛城　及ばぬ所をこの葛城が
ト振り切り、小蝶、葛城を引き廻し、手早く一腰を取つてたばさみ

小蝶　柵が隱れ家、一足でも踏み込むと、浪人の錆刀、切れ味を試しますぞ。

葛城　謀叛人の余類、女とて用捨はない。妨げいたすと斬つて捨てる。

柵　さう云ふそなたを

葛城　いゝやそなたを

兩人　生けては置かぬ。
ト拔き合はせ、切り結ぶ。いろ〳〵ある所へ與九郎、出て、これは危ないと留める。引き退けて、立ち廻り。與九郎、うろ〳〵して、前垂れを取り、打ち合はす刀を包んで

與九　待つた〳〵。
ト留めながら、三人、下にゐて
姉貴、お家さん、待たんせと云ふたら
ト二人おこづくを、しつかりと止めて
エヽ、とつともう、待たんせいなう。
ト合ひ方。

葛城　弟。

柵　與九郎。

兩人　今の樣子は。

與九　殘らず聞きました。旦那さんが謀叛と云ふ商賣は、そしりはしり知つてはゐれど、唐のお人と云ふ素性を聞

いたは今が始めて。天下にかゝる科人なら、縄かけうと云はんす姉貴も尤も。たとへ悪人にもせよ夫と云ふ名があれば、命にかけて助けうとさんすお家さんも尤も。兩方の尤も聞いてゐる伜が術なさ。さつきの話しに、親父様も死なしやつたとの噂。なりや、親とも姉とも、杖柱に思ふ大事の姉貴、又旦那さんやお家さんは、十五の年からお世話になつて、假染めの煩ひにも、薬よ醫者よと手づからの看病、この大恩をいつの世に報じませうぞ。それほど大事の旦那さんやお家さんに、若しもの事があらうかと、俺やそれが悲しい。姉貴、お前の身にもひよつとした怪我でもあつたら、俺やなんとしませう。どちらの味方と云はうにも、一人は姉貴一人はお主、孝を盡せば義理を缺き、義理を立てれば孝に背く。この與九郎が苦しさは、どの様にあらうと思ふてくだんす。この道理を聞き分けて、姉貴、お家さん、どうぞこの場を無事に納めて下んせいの。

ト泣いて云ふ。葛城、柵、こなしある

葛城　柵さま、

柵　葛城さま

葛城　この場は無事に、

兩人　納めてやらう。

與九　エヽ、忝い。

ト二人、白刃を引かうとする。與九郎、押へて

ドツコイ、違ひはないかえ。

兩人　ハテ、念に及ばぬ。

ト三方へ別れて、葛城、柵、刀を納める。

與九　アヽ、嬉しや。よう聞き入れて下さんしたなう。

葛城　最前弟が噂を聞けば、蘆屋姫さまもこの家に

柵　なんの所縁はなけれども

葛城　匿うてござんすか。

柵　ハイ。

ト葛城こなしあつて

葛城　この葛城も今宵は爰に

柵　お泊め申して、夜と共にお話しを

與九　この簪は

ト簪を取り上げる

葛城　一夜の價。

柵　主に忠義を盡すとも

葛城　姉親にちなむとも

與九　善悪二つ

柵　有無の返事を
葛城　弟
柵　與九郎
兩人　待つてゐるぞや。
ト唄になり、葛城、柵、東西の障子へ別れ入る。與九郎、いろ〳〵あつて
與九　久し振りで逢うた姉者人に手柄もさせたし、お主達も助けたし、こりやマアどうしたらよからう。エヽ、とつと、ひよんな難儀が湧いて來た事ぢやなア。
ト泣き落とし、フト簪を見て
この簪の納まり、足が折れるか耳掻きが折れるか、是非一方は損ねる道理。それも又細工人の手際で、繼ぎ合はすと云ふ工夫もあるもの。その細工の仕上げと云ふは俺が
ト死ぬると云ふこなしをして
こりや壽命が縮まつたわいの。この思案がいつちよい。
ムウ、さうぢや。
ト脇差しを取つて來て、襦袢を脱ぎかけ、腹切らうとして、又思案をして
イヤ〳〵、滅多には死なれぬ。マア、旦那樣やお家樣や、お姫樣もひツ浚つて、この場を落とした其うへで、姉者人への言譯に、腹を切るが分別の天上ぢや。
ト一腰をさして
マア、お姫樣を
ト長持ち明けうとする。土手助、ずつと出て、引き廻し
土手　さうはさゝん。片ッ端から引括つて、岸田さまへ引立てる。マア、この女郎から
ト長持ちへかゝる。よろしく留めて
與九　ドッコイ、さうはさゝんわい。
土手　何を
ト立ち廻り、與九郎を蹴飛ばし、長持ちを明けて見て、恟り。
南無三、コリヤ、底を切り拔いて
與九　脫けさんしたか。もう、占めたワ。
土手　そんなら二階の
ト行くを、與九郎、立ち塞がつて
與九　脇切り込むと、素ッ首ちよ〳〵切つてたやすぞ。
土手　猿松め。
與九　なんぢや。

土手　邪魔ひろぐと、息の根を留めうぞよ。
與九　おのれ、ぶち斬るぞよ。
土手　エ、、面倒な。
ト抜き打ちに切つて行く。抜き合はせ、切り結ぶ。與九郎、一かせ切られ、ウンとのろ。土手助、のろ。これより兩人、切りつ切られつ、手負ひのタテいろ〳〵あつて、トゞ土手助を切り倒し、與九郎は乘りかゝつて止めを刺す。暮六ツの鐘チヤン〳〵と鳴る。帶刀、組み子大勢連れ出て
帶刀　今こそ召捕る四海の科人。
トずつと入る。與九郎、向うへ廻つて
與九　コレ、お主と云ふ名はどうも
ト拜む。
帶刀　下郎作らも忠義の最期。不便と思へど猶豫は叶はぬ。者ども、家内を圍へ。
皆々　ハア、。
ト納戸へ込み入る。
帶刀　伯莫は慥かに
ト與九郎を引き退け、二階目がけ行く。裾に取りついて
與九　待つた。
帶刀　面倒な。
ト蹴据ゑ、二階を目がけ行く。ト二階のうちにて
柵　朝鮮の伯莫、今こそ討ち死。
ト障子へ血煙り立つ。
帶刀　これは。
ト障子引き抜く。柵、自害してゐる。
與九　ヤア、お家さん、そんならお前も夫の命が助けたいばつかり、共に繫がる謀叛の余
柵　類、この場の圍みを帶刀さま、どうぞお願ひ申しまする。
與九　コレ、一人で足らずばこの與九郎も、から
ト腹へ突つ込む。
帶刀　ム、。
トこなし。奧より葛城、出かけ
葛城　敵ながらも貞女の操、弟が最期まで、思ひ廻して帶刀さま。
ト高札を取り、立て、
この高札の表を立てる、四海の政道。
ト帶刀、高札を見て

坂東しうかの遠山太夫

帯刀　従類たりとも討ち取るに於いては、恩賞望みたるべ
　きものなり。
與九　その従類はこの與九郎。
　ト柵、下舞臺へ下りて
柵　夫婦の縁を柵が、身のなる果て。
與九　コレ、歌之助さま。二人の女中も
柵　裏道から落としました。
葛城　スリヤ、お三人とも
柵　せめての功に。
葛城　天晴れ
帯刀　忠臣貞女の最期にめでゝ
葛城　この場は無事に
帯刀　納めてくれう。
柵　エ、、忝い。
　ト柵がゝりの切り戸より、太郎、皇女を背負ひ、出か
　け、門口に立つて
太郎　錦花皇女も御安泰の、柵が集めたる軍用金、落手い
　たして只今歸る。
帯刀　扨ては皇女も
　ト表を見る。

葛城　コレ。
　ト高札を立て、隔てる。角助、窺ひ出て
角助　伯莫、うぬ。
　ト太郎へかゝるを、ぐつと捻ぢ上げ
太郎　ひそまる時は蟆と云ふ蟲ともなり、時到つては九
　萬里に羽をのす大鵬、この日の本は父の仇、國の仇、追
　つゝけ四海をくつがへし、猿冠者が首を刎ねて、父伯龍
　が塚に手向くる。覺悟して待つてゐよと、久吉野郎に傳
　へ居らう。伯莫は只今歸る。止むるならば
　ト角助を見事に返して
　止めて見居らう。
　ト納戸より、組み子バラ／＼と出て
組皆　扨ては伯莫。
　ト表へ行く
葛城　謀叛人はこれに。
　ト高札差し出す。帯刀、高札を切り破つて
帯刀　成敗濟んだ。
柵　こちの人。
與九　姉貴。
兩人　冥途で逢はう。

ト柵、笛を搔く。與九郎、引き廻す。角助起きて

角助　うぬ。

トかゝる。太郎、首筋を持つて、引き附ける。柵、與九郎、ばつたり俯向く。葛城心意氣。

太郎　可愛や。

トうちを見込む。組み子、おこづくを、帶刀、葛城、押へる。太郎、氣を替へて

さらば。

ト云ひながら、角助が腕を引き拔く。

よろしく幕

四段目　大津の段

役名――長谷部雲谷 實ハ藤太郎。鐵てこの源太。大津繪師喜兵衞。奴、丹平。松井左近。紅屋嘉兵衞。下女、お今。茶屋娘、お床 實ハ撫子。猪熊門兵衞。金魚屋金八。

造り物、見附け淺黄幕、二間の二重舞臺、眞中にて仕切り、兩方とも大津繪の店、大津繪師、同じく喜兵衞、繪を書いてゐる。仕出し、これを見て居る。橋がゝり手綺麗なる葭簀圍ひの茶店、お今、下女の形、茶を汲んでゐる。よき所に茶屋床几を並べ、嘉兵衞、半合羽、町人の形にて、丹平、こちらの床几に飛脚の形、狀箱を首にかけ、休んで居る。其ほか仕出し、莨のみ居る。兩方の店、取り合はせ臆病口とも板松の間に、大般若經眞讀、三井寺知事と書いたる立て提燈あり、淸搔にて、幕開く。

仕一　姉さん、三井寺の御法事は、いつから始まつてごんすえ。

いま　後の月のさし入りから、百日が間の御供養でござんすわいなア。

嘉兵　今度の御法事に附いて、奥の院までも女子が參られると聞きましたが、愈々さうかな。

いま　アイ、御法事の間女子の參詣がお許しゆゑ、參りは七分女中さん方、大てい賑はしい事ではござんせぬ。

仕二　どうぞこちらの嚊や娘も、連れて參りたいものぢやなア。

仕三　商賣とは云ひながら、よう畫いたものぢやなア。

仕四　サレバイヤイ、御亭主、その大きい方は、なんぼづ

つぢやな。
喜兵　これは十八文、これが十二文、又望みなら外に色々のがござりまする。
仕三　安いものぢや。
喜兵　隨分と値段は安うして上げます。お土產に買うて下さりませ。
仕四　イヤ／＼、戻りにでも買ひませう。サア、佐介、參つてこうか。
仕三　サア、來い／＼。
ト始終清搔にて、仕出し皆々、臆病口へ入る。
喜兵　値を問ふたゆゑ買ふのかと思へば、ぞめいてうせた。忌々しい。喜兵衞さん、喜兵衞さん、商ひはどうぢやな。
嘉兵　イヤモウ、賑はしい參詣ぢやが、とんと錢にはなりませぬわい。
ト云ひ／＼繪を畫いて居る。ト又清搔になる。ト雲谷、按摩醫者の拵らへ、八德を着て出て
雲谷　それは珍らしい、紅屋の嘉兵衞さんか。
嘉兵　オヽ、雲谷どの、久しう逢はぬが、マア／＼、爰へかけさつしやれ。
雲谷　お前はどつちへござりました。三井寺へでも御參詣かな。
嘉兵　イヤ、そんな事ではない。今度わしが出入りの旦那どのが、五百坪ほどの泉水を拵へ、緋鯉ぢやの金魚ぢやのと云ふものを買ひ上げるのぢや。それで値段に構はず京中の金魚は大方に買ひ盡して、今日は卽ち大津邊へ出かけて來ました。
雲谷　金持ちのする事と云ふものは、わつけもないものぢやなア。
嘉兵　貴公の懇意うちに、金魚を飼ふてゐる人があるならば、なんぼでも大事ない程に、値に構はずと買ふて下され。
雲谷　心得ました。どこぞ聞き出して置きませうわい。
丹平　最前から誰れかと思へば、長谷部藤太郎さまではござりませぬか。
雲谷　さう云ふは岸田どのゝ御家來、丹平か。こりや今日は知つた人だらけぢや。
丹平　先づは御健勝で、とは申すものゝ、ハテ、山水な形におなりなされましたな。
雲谷　家沒落の後は、寄る邊定めぬ天竺浪人、是非に及ば

ず按摩鍼を表に立て、今の名は長谷部雲谷。

丹平　それはお氣の毒千萬。拙者も主人のお使ひ、即ち彈正さまへ

雲谷　ア、イヤ、委細は爰で聞くに及ばぬ。マア何事も道道話さう。來い。

嘉兵　わしは柴屋町の方へ廻つて來うわいの。

丹平　拙者も御一緒に參りませう。

雲谷　同道いたして參らうわい。

仕一　ドレ〳〵、こちらも參つて下向に休まう。ナウ、太郎兵衞。

仕二　さうせう〳〵。コレ、姐、茶の錢は爰にあるぞや。

いま　マア、もそつと休んでお出でなされませ。

嘉兵　イヤ、もうゆるりとしました。サア、雲谷どの。

雲谷　サア、ござりませ。

ト管絃になり、雲谷、丹平、嘉兵衞、橋がゝりへ、仕出し、東西へ別れ入る。ト引き違へて、左近、ぶつ裂き股引にて出て

左近　ヤレ〳〵、急いだ〳〵。ドレ〳〵、一服いたして參らう。女、茶を一つくりやれ。

いま　アイ〳〵。

ト茶を酌んで行く。

左近　女中、この店の主お床どのは

いま　お家樣はつい向ふまで、水を汲みに行てゞござんした。なんぞ御用でござんすかえ。

左近　ちよつと急に逢ひたいが、もう歸らるゝであらうか。

いま　そんならわたしが、ちよつと呼んで來て上げませう。

ト向うへ行かうとして

アレ〳〵、もう戻つてゞござんすわいなア。

ト渡り拍子になる。ト向うよりお床、前垂れ、襷にて、手桶を提げ、戻つて來る。

ゆか　お今、さぞせわしかつたであらう。早う戻らうと思ふた所へ、お隣りのお里さんに逢ふて、つい話しが長うなつて、今になつたわいなう。

いま　店の事は其やうにもござんせぬが、最前からお侍ひ樣が見えて、あなたに逢ひたいと云ふて、待つてゞござんす。

ゆか　なんぢや、お侍ひ樣が見えて。どなたぢや知らぬ。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。

左近　イヤ、お目にかゝりたいと申すは、拙者でござる。
ゆか　オヽ、こなたは
　ト云はうとして、こなしあつて
お今、わしや井戸端に手拭ひを落として來たさうな。大儀ながら、ちよつと見て來てたもらぬか。
いま　お前さまもマア滅相な、やう／＼昨日下ろしなされた、ま新らしな物を、誰れも拾はにやよいが。
　ト云ひ／＼、向うへ入る。始終清搔なり。お床、跡さき見廻し
ゆか　松井左近どの。
　ト合ひ方になる。
シテ、夫藏人どのより、用事の次第は。
左近　イヤ、さして別儀でもござりませぬが、第一は若殿義丸君、並びに御國御前にも、愈々御無難にお渡りなさるゝや、御安否を承つて歸れとの儀でござりまする。
ゆか　御大儀々々々。一昨年義賢さま御最期のその後、お家の沒落、寶詮議、百日の日延べも切れたれば、山三どのゝ行くへも知れず、それゆゑ武將のお怒り強く、佐々木の居城、所領殘らず改易となつたるも、一つは岸田が讒言ゆゑ。寶紛失の科に依つて、義丸さま御親子のお行くへを詮議最中。當所三井寺の別院清淨院の住僧は、この撫子が爲には肉身の兄上樣、ひたすらに頼み、御兩所を忍ばせ置き、藏人どのは都に徘徊、妾は又この所に、この如くの茶店を構へ、往來の噂を聞き合はすも、余所ながら守護のため。今も今とて密かに御機嫌を伺ひしが、お二方とも隨分御無事に御座なさるゝ由、夫へよきに傳へて下され。
左近　その儀承はつて拙者に於いても、安心仕りましてござりまする。
　ト懐中の打ちがへより、百兩包みを出し
即ちこの金子は藏人さまより、慥かにあなたへお手渡し申せとの儀。御兩所のお貢ぎ旁々、猶この上にも入用の事ござらば、何程にても仰せ遣はされよとの御口上。イザお受け取り下さりませう。
　ト渡す。お床、取つて
ゆか　何から何まで、心をつけし藏人どのゝ計らひ、まだ用意は盡きねども、何時知れぬお二方のお身の上。此ままに預かり置きませう。まだ外に委細の樣子、話したうは思へども、何を云ふても爰は往還。
左近　委細はとくと文に認め置かれませう。その間これに

あつては、人目にも立ちますれば、拙者は三井寺へ參詣いたして參らう。

ゆか　なるほど幸ひなれば、コレ。

　ト囁く。

左近　畏まつてござりまする。然らば清淨院さまとお尋ね申しませうな。

ゆか　隨分人に悟られぬやう。

左近　承知いたし居りまする。左樣ならば撫子さま。

ゆか　後に逢ひませう。

　ト清搔になり、左近、臆病口へ入る。お床、こなしあつて

忠義ゆゑとは云ひながら、夫婦の者がこれ程までに、樣樣心を盡せども、今に寶のありかも知れず、殿樣を討つて立ち退きし、その敵の手懸りとても、暮れ行く月日隙行く駒、早一歳にも余るうち、お二方のお身の上に、若しもの事のあつた時は、アヽ、辛氣な事ではある程にの。

　トこなしあつて

イヤ〳〵、案じてばかりゐても詰らぬ。幸ひ店の隙なうち、ドリヤ、髮でも撫でつけうか。

　ト唄になり、お床、葭簀のうちへ入る。ト在鄕唄になり、向ふより金八、金魚の荷を荷ひ、出て

金八　よつぽど日足も下つたわい。併し一服して去なう。

　ト本舞臺へ來て、喜兵衛が店の前へ荷を下ろし

　喜兵衛さん、御供養で店がせわしからうなア。

喜兵　オヽ、四の宮の金魚屋どの、サア、一服のんで行かんせ。

　ト莨盆を差出す。

金八　イヤ、構ふて下んすな。通る度に常住店の邪魔をいたしまする。

喜兵　ナンノイノ、兎角店先には人の溜るが賑やかでようこんす。

金八　時に幸ひぢや。その繪を一二枚賣つて下さりませ。

喜兵　サア〳〵、どれなりと、氣に入つたを撰り取りにさつしやれ。

　ト箱ごと差出す。

金八　どれにせうぞ。茶の花もぬかつた奴なり、鬼の念佛は陰氣に見えるし。

喜兵　うちの子供への土產なら、鷹持ちがよいかして、いつちよう賣れるぞいの。

金八　イヤ、わしが所の奴は女郎の忰、殊にこの所に住めば珍らしからぬが、京の得意衆の坊さまに、ちよつと愛想にやるのぢやに依つて、ちやりな奴がよいぢやわい。
喜兵　そんならこの座頭にさんせぬかいの。
金八　オヽ、コレ〳〵。マア、一枚はこれに世間の請けがよいとあれば、この帳持ちと二枚、なんぼぢやなア。
喜兵　十二文に賣るのぢやけれど、八文づゝに負けて進ぜる。
金八　有り難い。錢があればよいが。
ト腰提げの貫入れより、はした錢を出し
あるぞ〳〵。
ト錢を讀んで、拂ひ
危ない加減、二文殘つてけつかる。
ト此うち臆病口より、雲谷、戻つて來て
雲谷　なんでも買ひ出して儲けたいものぢやが。
ト金八を見て
オヽ、幸ひぢや。金魚屋、よい魚があるか。
金八　ござりますとも、見て下さりませ。
雲谷　ドレ〳〵。
ト金八、手桶を持つて出て

金八　サア、これでござりまする。
雲谷　こりや金魚は一匹もなうて、なんぢや丸い樣な、尾のびら〳〵した、コリヤ、なんぢや。
金八　ハア、お前、魚の事は素人ぢやな。
雲谷　なんぼ素人でも、金魚は知つて居るわい。
金八　こりや朝鮮の子でござりまする。
雲谷　アノ、これが。ハテ、けたいな物ぢやなア。
金八　けたいなとはどうぢやいな。今見ると此やうに煤黒いが、これが秋頃からそろそろと尺が伸びると、段々に色が附いて、來年の今頃は、もう一疋賣りになる結構な朝鮮種。太平樂ぢやないが、滅多にある代物ぢやござりませんわい。
雲谷　さうして値はなんぼぢや。
金八　マア、お前から値を附けて見て下さりませ。
雲谷　されば、これがさつぱり金魚になつてあればよけれど、マア、解らぬ物ぢやよつて、百かい。
金八　エヽ、百とは、どう百ぢやな。
雲谷　錢でころり。
ト金八、雲谷が顔を眺め、ムツとしたこなしにて、荷を片附ける。

雲谷　コリヤ〳〵、金魚屋、さりとては短氣な商人ぢやわい。一貫目の物を三兩に附けるのも商ひぢやないかい。

金八　ぢやてゝ大概程らいのあるものぢや。捨て賣りにしても金で十五兩もするものを、百につけるとは、そりや人を騙ると云ふもの。

雲谷　アノ、其やうな高い物か。

金八　來年の今頃まで圍ふたら、一匹が銀一兩づゝになる子が、いくつもあるぞいな。凡そ二百兩近いものなれど、そこが貧乏商人の悲しさ、米や木に追はるゝに依つて、せう事なしに持つて歩くのぢや。いかに人を騙ると云ふて、大概な事云ふたがよいわい。

ト云ひ〳〵、又荷を片附ける。

雲谷　待て〳〵。サア、そんなら斯うぢや。すつぱりと一歩に買はうぞ。

ト金八、默つて荷を片附けうとする。

待て〳〵。一歩二朱ぢや。

ト又荷を眺め、直さうとする。

待て〳〵。思ひ切つて一兩ぢや。

ト金八、こなしあつて

金八　所詮そんな事でまかりはせねど、一兩と云はんすりやア、マア、腹は立たぬと云ふ樣なものぢや。

雲谷　大體マアなんぼなら負かるぞ。

金八　今云ふ通り十五兩ばかりが物はあれど、レソに追はるゝ悲しさ。五兩なら手を打ちませう。

雲谷　せう事がない。こつちもしかかつた商ひ、五兩に買はうと云ひたいが、ありやうは見る通りの按摩痃癖。今追分で片側組んで、三兩だけは持つてゐる。これでさつぱり負けてくれ。

ト金を出す。

金八　面白い。これぎりぢやと云はんすりやア、念が殘らぬ。まけてやらう。

雲谷　まけるか。

金八　ヤヽヨイ〳〵。

ト手を打つ。

雲谷　そんならこの樽ぐち貸して貰はう。

金八　そりやどうなりと。安い物ぢや。

ト樽を渡し

とかう云ふうてもう日暮れ前、母者が待つてゐられう。

ト荷をかたげ

そんなら別れまする。よう買ふて下んした。

雲谷　又よいのがあつたら見せてたもれ。
金八　アイ〳〵。
ト花道へ行て、ちよつと立ち留まり、こなしあつて
金魚々々。
ト唄になり、ツイと向うへ入る。
繪師　もう商ひもあるまいし、喜兵衛さん、仕舞はうぢや
あるまいか。
喜兵　さう致しませう。今夜はちつと叶はぬ用事もある。
ちつと早く仕舞ひませう。
ト上げ店を下ろし、よろしくあつて
繪師　サア、歸りませう。
ト清掻になり、兩人、臆病口へ入る。ト猪熊門兵衛、
博奕打ちの形にて、出る。
門兵　オヽ、雲谷か。貴樣そこに何してゐた。
雲谷　門兵衛、ぐわゑんの八がてらしてくれと云ふて、貴
樣を尋ねてゐたぞや。
門兵　イヤ、この頃は人の事所ではない。こつちがてらし
て貰はにやならぬ。忌々しい拍子まんの惡い事ぢや。な
んぞうまい錢儲けはないかい。
雲谷　滿更ない事もないぢやてや。

門兵　これは耳寄りぢや。シテ、そのもくろみ筋は
雲谷　高でかうぢや。
ト云ひかける所へ、嘉兵衛、出て
嘉兵　雲谷どの、もう京へ去ぬが、何も用はないか。
雲谷　オヽ、ある段ぢやない。貴公が注文の金魚、朝鮮が
手に入つた。
嘉兵　そりやけうとい。さうしてその金魚は
ト門兵衛、雲谷を引つ張つて來て
門兵　どうぢや、その仕事が早う聞きたい。
雲谷　その種と云ふは、これぢや。
ト懷より繪姿を出し、見せる。門兵衛、取つて見て
嘉兵　コレ、日が暮れて來る。早う見せんかいの。
ト雲谷、こちらへ來て
雲谷　サア〳〵、朝鮮の子が凡そこの桶に半分から上ある
が、なんぼに買ふて下さるぞ。
嘉兵　この桶に半分から上、カウツ。
門兵　コリヤ〳〵、雲谷々々。この繪姿がもくろみの筋と
は、どう云ふ物ぢや。
雲谷　そりや貴樣も知つてゐる。佐々木の後室御國御前と、
義丸が繪姿。その繪圖に引合はせ、兩人の者を搦め來た

らば、褒美は望み次第との配符。なんと巧い代物であらうが。

嘉兵　雲谷々々、かうぢや。四の五の云はうより、百に買はうかい。

雲谷　貴樣もいかに俺が素人ぢやと思ふて、胴慾な事云ぶものぢや。

門兵　雲谷々々。

雲谷　オイ〳〵。

門兵　この繪圖、俺に賣つてくれぬか。

雲谷　値さへよけりやア賣るまいものでもない。

門兵　一體和御寮、御國御前義丸は、主從であつたゆゑ面を知つてゐる。スリヤ、この繪姿はあつてもなうても、捨て賣りにしたがよい。

雲谷　シテ、なんぼに買ふてくれる。

門兵　錢百かい。

雲谷　情ない。こりや百の延べがうせた。貴樣も亦あんまりな事云ふものぢや。引捕へて行きさへすりやア、百兩が二百兩になる繪姿を、阿呆らしい事云へやい。

門兵　そんならかうぢや。すつぱり一兩ぢや。

雲谷　滅法な。捨て賣りにしても十四五兩の物を、きつい見倒し。

門兵　マア、我れもよう思ふて見い。捕まへさへすりやア褒美になれど、ひよつと外から手が廻つたら、この繪姿は買ひ損。

雲谷　サア、そこが貴樣も勝負でないかい。青い行を行く氣で、目一ぱいに附けて見い。

門兵　待てよ。

ト思案する。

嘉兵　貴樣朝鮮の筋知つてゐるな。

雲谷　知らいでたまるものかい。來年まで圍ふて置くと、一疋が銀一兩づゝになる子が五六千もあるもの。

嘉兵　せう事がない。そんならすつぱり拾兩に買はう。

雲谷　負けもせい。

兩人　ヤヨイ〳〵。

門兵　雲谷々々。

雲谷　どうぢや〳〵。

門兵　俺も賽づかも握る者ぢや。素人らしう云はれもせまい。さつぱりと三兩ぢや。

雲谷　三兩が氣負ひ口ぢや。まけもせい。

兩人　ヤヨイ〳〵。

トこちらも手を打つ。
嘉兵　金ぢや〳〵。
雲谷　サア、魚を受け取らうかい。
嘉兵　合點ぢや〳〵。
　ト財布を出し、小判を讀んで居る、雲谷、桶を持つて
行て
雲谷　ソレ。
　ト嘉兵衛、蓋を明け、見て
嘉兵　ヤア、われが朝鮮の子ぢやと云ふのはこれか。
雲谷　なんと、すつきりとした代物であらうが。
嘉兵　貴様も惡いぞや〳〵。俺が見ずに持つて行つたら十
兩騙らうと思ふて。こんな事するとわれ首がないぞよ。
雲谷　そりや何云ふのぢや。
嘉兵　とぼけない。コリヤコレ、がいるごろぢやわい。
雲谷　ヤア、。
　トびつくりして、へたる。
嘉兵　合點の行かぬ事ぢや。朝鮮の子、其やうに澤山にあ
らう筈がないと思ふた。ヤレ〳〵、すんでの事に拾兩し
よなめられうとした。恐ろしや〳〵。
　ト金を懷中して、雲谷を見て

一體惡い人相ぢや。
　ト唄になり、嘉兵衛、こなしあつて入る。雲谷は呆れ
てゐる。
門兵　雲谷、どうするのぢやい。
雲谷　どうしたのぢや。俺も合點が行かぬわい。くらざい
でも見拔く程の俺を、ぬつくりと三金やりやアがつた。
エヽ、忌々しい。
門兵　ハア、わりや騙りにかゝつたな。いかい野呂間では
あるわい。
雲谷　この入れ合はせぢや。門兵衛、せめて我れが三金の
金なとくれ。
門兵　いんまの先、八丁の佐野七が銅で二十七兩くさつて、
爰には一文もない。
雲谷　ハア、しもた。又こいつも小田原ぢや。
門兵　氣遣ひすな。コリヤ。
　ト腰下げを見せ。
煙管の目が七十貫、金物に五十五貫、捨てても五兩は慥
か。これをわれに渡して置いて、明日金と引替へにせう。
雲谷　さう云ふ慥かな形がありやア、どうなりとせうわ
い。

ト引替へうとする所へ、バタ〳〵にて、町人一、鉢巻き、片肌脱ぎにて、息を切つて走り出て

町一　門兵衛さん、喧嘩ぢや〳〵。

門兵　ヤア、どいつぢや。

町一　こなんの幕下の鐵挺子めが、札の辻でどす開いて暴れてゐるわいの。

ト息切れのこなし。

門兵　ヤア〳〵、して、先の相手は。

町一　大坂屋の衒妻ぢや。

門兵　南無三、ばらし居つたら俺が身の上。

ト行かうとする。帶に取りつき。

雲谷　コリヤ、その腰下げを。

門兵　そこ所かい。

ト後ろざまに蹴飛ばし

ソレ。

ト一散に向うへ走り入る。町人一、すた〳〵して、附いて入る。

雲谷　なんの事ぢや。最前長の延びて青い所から三兩引いたは、拾兩にせうと思ふて、がいるごろを三兩に買ふたワ。その入合はせに三兩に繪姿を賣つたワ。五兩の腰提げ取らうと云ふ間に手に殘つたは繪姿ばかり、矢ツ張り元の木阿彌ぢや、忌々しい。イヤ〳〵、なんでも札の辻へ行て、門兵衛めに逢ふて、三兩の入合はせをせにやならぬ。さうぢや。

ト行かうとして

此がいるごろも物云ひの種、斯うしては置かれぬわい。

ト手桶を提げ、又行かうとして

アイタヽヽヽ、門兵衛めがえらう蹴りくさつた。エヽ、忌々しい。

ト渡り拍子になる。これに合はせ、ちんば引き〳〵、向うへ走り入る。とバタ〳〵、左近、丹平を追つかけ出て

左近　合點の行かぬその密書、こつちへ渡せ。

丹平　イヽヤ、ならぬ。

左近　取らいでならうか。

ト清搔になる。兩人、狀箱を奪ひ合ふうち、箱割れて中より狀落ちる。兩人、これを知らず、立ち廻りて、丹平、空がらを持つて逃げる。左近、追つかけ入る。

清搔やんで、合ひ方になる。ト葭簀のうちより

ゆか　跡を味よう仕舞ふて戻りや。火の用心が危ないぞ

や。
ト云ひ〳〵出て
この左近は、もう戻つて來さうなものぢやが。
ト右の落ちてある狀をフッと見て、拾ひ上げ
佐々木彈正どの、岸田民部。
トこなしあつて、封を切り、心にて讀み下し、少し驚
いたるこなしあつて。
敵の手懸り、さうぢや。
トこなしあつて、ツイと向うへ走り入る。チョン〳〵
返し。
茶店、板松、引いて取る。淺黃幕切つて落す。向う
黑幕、眞中に制札場、番所行燈あり、暮れ六ツの半
鐘にて、道具留まる。
ト源太、大童、丸裸にて、出刃を提げ、暴れて居るを、
大勢棒づくめにして、エイヤ〳〵と云うて出る。
町人　どづき伏せて出刃をたくれ。
皆々　どづけ〳〵。
ト向うバタ〳〵にて、門兵衞、走り出て、皆々を引分
け

門兵　待つて貰はうぞ〳〵。
町人　門兵衞か。コレ、貴様の幕下鐵てこめが、ゑらい事
をしたわいの。
皆々　ゑらい事ぢや〳〵。
門兵　サア〳〵、何も其やうに騷ぐ事はない。俺がゐるか
らは町所へ難儀はかけぬ。鎭まつてゐやつしやれ〳〵。
町人　門兵衞があゝ云ふなら、鎭まれ〳〵。
ト皆々、鎭まる。
門兵　ドレ、その提灯。
ト取つて、源太を引起し
源太〳〵、こりや何さらしたのぢや。
源太　親父どの、傾妻めが玉がかへつたに依つて、俺や口
惜しいわい〳〵。
門兵　さうして傾妻はどうした。
源太　すつぱりとやつてこました。
門兵　出かした。
ト源太を出刃にて咽喉をゑぐる。
町人　コレ〳〵、門兵衞、どうするぞい〳〵。
門兵　喧しいわい。相手が死んでこいつが生きて居ると、
吟味に枝葉が咲いて町所の難儀、かうして仕舞へば相た

い死、檢死さへ受けりやア、つい濟んで仕舞ふぢやないか。

町皆　ぢやて、滅相な。

門兵　ハテ、ざわつかずと此奴が死骸を、大坂屋のうちへソツと持ち込んで、コリヤ。

ト囁く。

町人　ヨシ〳〵、合點ぢや〳〵。サア、皆、死骸を大坂屋へやつてくれ。

皆々　合點ぢや。

門兵　これはしたり、隨分密かにせうてや。

町人　靜かにしいと。靜かに〳〵。

ト皆々ひそ〳〵、源太を引つ立てる。

町人　そんなら後から來てたもや。

門兵　そこへ行く。目立たぬ樣に、早う〳〵。

ト皆々、ひそ〳〵して、橋がゝりへ入る。

先づはあれで、やば拔けはするワ。

ト向うより雲谷、出て

雲谷　どうぞ門兵衞に逢ひたいものぢやが。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。この時、金八、後ろへ出かけゐる。

そこにゐるは門兵衞ぢやないか。

門兵　雲谷か。

雲谷　今の三兩はどうしてくれるぞい。

門兵　サア、えいわい。コリヤ、晝見た義丸や御國御前の繪姿、そこに持つてゐるか、

ト金八、聞いて恟りのこなし。

雲谷　オヽ、持つてゐる。われも引替へにせうと云ふた腰提げ、持つてゐるか。

門兵　爰にある。そんなら約束の通り引替へにせうかい。

雲谷　明日金おこさにやア、直ぐにばらすぞよ。

門兵　ハテ、そりやどうなりとせいやい。

ト此うち金八、こなしあつて、番所の行燈の火を、フツと吹き消す。

雲谷　南無三、えらい風ぢや。

門兵　まつ暗がりにし居つた。

ト兩人、探り寄る。金八も探り寄り、眞中へ入る。

雲谷　ソリヤ、繪姿ぢや。

ト出す。金八、最前の大津繪と摺り替へ、門兵衞に渡す。

門兵　ソレ、腰提げぢや。

ト金八、取つて我が腰下げと摺り替へ雲谷に渡す。兩人、双方にて戴き

雲谷 入合はせのこの腰提げ。

門兵 褒美の種のこの繪姿。

雲谷 拍子まんが直つて來た。

門兵 福德の三年目。

雲谷 門兵衞。

門兵 雲谷。

ト此うち金八、うまいと云ふこなし、いろ〳〵あつて、思はず𛀁ゝ忝ないと云はうとするを、雲谷はこの聲を門兵衞と思ひ、門兵衞は雲谷と思ふ心にて

兩人 シイ。

ト兩人、あたりすかす。金八、ちやつと口塞ぐ。

幕

五段目　金魚屋の段

六段目　三井寺の段

役名――津田外記之進。長谷部雲谷。播磨屋喜右衛門、藻子、せんよ。同、小梅。同、みすゑ。手枕の小吟。宿老、三九郎。あるき太助。仲買ひ藤八。金魚屋善八。座頭、糟市。同、ちよぼ市。同、四歩市。下女、お里。賣人蘆屋姫。奴、岡平。藏人妻、撫子。金八女房、お宮。同娘、小光。同母、お種。猪熊門兵衞。金魚屋金八。

造り物、平舞臺、赤壁、納戸口、よき所にへつゝい、棚廻しを飾る。西、折り廻し反古障子、床の下へ筋違ひに塀、切り戸あり、見越しに隣りの二階、植え込みなぞ見ゆる。橋がゝり切り幕の所、塀、隣りの二階、これにも切り戸あり、この續き、山吹の流れ板橋をかける。東西は柴屋町糸屋裏座敷の模樣。藁葺の門口、舞臺先西手に金魚の泉水、この脇に鉢植ゑ數多あり、右の取り合はせよろしく、幕のうちより、お里、振り袖のやつし、前垂れにて、鍮を拵へ居る。泉水の際にみすゑ、小むめ、せんよ、藝子にて、金魚を見てゐる。東の二階にて、八島の端唄歌ふ體にて、幕明く。

みす 小むめさん、あのらんちゆうは餘ッ程いつからなつたぞえ。

小む　どうでも金八さんの餌飼ひがよいと見えるわいな。
せん　お里さん、金八さんは留守かえ。
さと　アイ、今朝から婆樣のお供をして、出られましたわいな。
藝皆　さうかえ。
ト二階にて、高砂やを歌ふ。板橋の方より、藤八、金魚の仲買ひにて荷をかたげ、出て
藤八　うち方にござりますか。金魚を持つて參りました。
さと　アイ／＼。モシ、姉さん、いつもの仲買ひさんが見えましたぞえ。
ト納戸より、お宮、世話女房、襷、前垂れにて、神酒三寶を持ち、出で
みや　オヽ、藤八さん、昨日から待ち兼ねてゐるわいな。
藤八　サア、問屋に取込んだ事があつて、思はしい魚が手に入らなんだ。安う買ひ廻して來ぬと、仲買ひの俺も損なり、受け賣りにする爰も惡いぢや。
みや　さうでござんす。さうして今日は持つてござんしたかえ。
藤八　見やんせ、こんな物ぢや。
ト荷桶を見せる。

みや　わしが見たとて、どれがよいのやら分らぬわいな。
ト云ひながら、神棚へ神酒を供へる。
藤八　これは尤もぢや。跡の月この四の宮へ宿替へてごんした、取り附きの金魚屋。俺も仲買ひをするからは、粗相な物は買ふて來ぬ。よいのを見分けて置いて去にませう。ホヽ、こりや柴屋町の君達が揃ふてぢや。
ト云ひ／＼、泉水へ金魚を入れる。
藝皆　お宮さん、お精が出るなア。
みや　オヽ、子達、皆ようお出でたなア。
みす　アイ、今日は表の花形屋へ、屋敷のお客で。
小む　後には淨瑠璃がある程に、聞きにお出でな。
みや　そりや聞かして貰はざならぬわいな。シタガ、今日は娘の小光が誕生日、うちにはゐやらねど心祝ひ、皆後に遊びにきておくれえ。
藤八　うまいワ。俺も後に來るぞ。
みや　一つ呑みに來て下さんせ。お里、おなまはわしがする程に、ちつと休んだがよいわいの。
さと　イエ／＼、片附けて置きませぬと、又婆樣の御機嫌が惡いわいな。
藤八　なるほど爰な婆樣は、名うての意地惡。見る／＼か

ら面癖の悪い。

　ト お宮を見て

八　ハヽヽヽ、イヤ、もう去にませうわいの。

みや　去んでならおあし上げませう。

藤八　イヤ／＼、明日一緒に貰ひませう。これから石部まで行かにやアならぬ。ドリヤ、出直して來うか。

　ト東二階にて、踊り三味線になる。藤八、荷をかたげ、入る。ト向うより、三九郎、宿老の息の拵らへ、門兵衞、連れ立ち出て來る。

三九　見やしやれ。晝から騷ぎかける。賑はしいではないか。

門兵　あいつ等は病なほしの勢揃へぢや。

三九　その差別に加りたいわい。

　ト本舞臺へ來て。

ものも。

　ト兩人、入る。

みや　オヽ、お宿老の若旦那樣、門兵衞さんと連れ立つて、なんぞ御用でもござりますかえ。

さと　氣遣ひな事ではござりませぬかえ。

三九　サア、氣遣ひがあるでもなし、又なしでもなしぢや。

門兵　エヽ、何を云はるゝぞいの。コリヤ、お里よ、莨盆おこせ。茶も汲んでうせい。

さと　ハイ／＼。

　ト莨盆持ち行く。門兵衞、胡座かいて座ろ。藝子、囃き合ふ。門兵衞を叩く眞似する。振り返り見て

門兵　何さらすのぢや。

藝皆　オヽ、怖。

　ト西の切り戸へ逃げて入る。

門兵　ハヽヽヽ、イヤ、お宮、お宿老を同道して來た譯聞かさう。必らず恟りするなよ。

みや　なんぢややら氣にかゝる物の云ひやう。サア、樣子を聞かして下さんせいなア。

門兵　高はからぢや。我れがいとし可愛いと思ひ込んだ、關の同行金八は、大盜人ぢやぞよ。

みや　エヽ。

　ト お里もこなし。

門兵　その譯を宿老の息子に聞いたに依つて、女房のわれが知らぬ事はあるまいと思ふて、根ざらへに來たのぢや。

ト　お宮、帶引き締め、三九郎が側へつッかけて

みや　モシ、お宿老さま。

三九　なんでえす。

みや　お前も御存じの通り、手前の金八どのは生れ附いて正直一遍な人でござりますぞえ。

三九　いかにも正直一遍、横着百遍と見える。

みや　其うへこの御近所で隱れのない、母御に孝行なお人、盜みする樣な、さもしい心のある人ではござりませぬぞえ。

三九　尤も。

みや　サア、それにはなんぞ、慥かな證據でもごごりますか。

三九　サア、それは。

ト　後へ寄る。

みや　サア、證據があるなら見ませう。

三九　ヤア。

ト　後へ寄る。

みや　サア、出して下さんせ。サア〳〵〳〵。

ト　段々突つ込んで云ふ。

三九　ア、コレ〳〵、あんまり進ましやんすな。門口へ出ますわいの。いかにもこなたの云ふ通り、金八は正直者ぢやと思ふてゐる。なれども爰へ宿替へして見えたは、やうやう後の月。馴染みが淺いに依つて、底の底までは知れにくいぢや。所に金八が盜みした證據を以て、お願ひ申すと云ふに町内の五人組み、俺がうちまで斷つて去にましたわいの。

ト　お宮、こなし。

門兵　たとへ又金八が身に覺えはないにもせよ、あつちにも慥かな證據を所持してゐればこそ、恐れ乍らとくらはすではないか、これが卽ち災難と云ふもので、金八は獄門磔刑にかゝらうも知れぬ。さうなつた時は俺が貸して置いた金が、砂になるのは術ないぢや。なんぼ上べは正直に見えても、皮一重うちは知れぬ。お宮、胸に手を置いて思案したがよい。

みや　なるほど覺えはなうても、どう云ふ間違ひで、證據があつた時には言譯も立つまいし。

三九　事に及んだ時、跡で悔むは、饂飩屋の食ひ逃げ同然。

門兵　その難儀を遁れうと思へば、地獄の沙汰も金次第。ナ、なんと金で扱ふて見る氣はないか。

みや　シテ、その金はなんぼ程でござんす。

門兵　五十兩ぢや。
みや　エヽ。
門兵　宿老どのと、この門兵衛が先へ廻つて、五十兩にき
　まつて置いた。
みや　さうぢやと云ふて、大枚五十兩と云ふ金が。
門兵　出來ぬか。
みや　サア、それはな。
門兵　出來ざア金八は牢舍、獄門にかゝるぞよ。
みや　エヽ。
門兵　男が首になつても構はぬ氣か。
みや　サア、それはな。
門兵　金を拵へるか。
みや　サア。
門兵　死んでも構はぬか。
兩人　サア〳〵〳〵。
門兵　どうぢやぞい。
三九　ア、コレ〳〵、其やうにとつ詰めて、蟲が出たら惡
　いわいの。內儀、金さへ出來たら納得をさゝうと思ふが、
　なんと才覺して見さつしやれぬか。
みや　ハイ、どの様になりとも致しまして

三九　よいか。よくばようござる。
門兵　そりやさうと、伯母貴や金八はどこぞへ行たか。
みや　アイ、知つての通りの御病氣、お氣晴らしをさせま
　せうと、金八どのが負ひまして、野を見せましに行てゞ
　あつたわいな。
門兵　さう云ふものぢや。伯母貴は近眼で、野を見せたて、
　なんの氣が晴れるもので。金八がさらす事に、氣轉と云
　ふ物はひとつもない。
三九　イヤ、門兵衛、俺やもう去にませうわいの。
門兵　さうさつしやれ。俺は伯母貴に逢ふて用もあり、戻
　らるゝまで奧へ行て、待つてゐやうかい。
三九　我れらは古巣へ歸ろやれぢや。
門兵　一寐入りやつてくりよ。お宮、われも奧へ來て、足
　など揉み居れ。
みや　マア、行かしやんせいなア。
三九　シタガ、內儀、今の金の事を
みや　今夜中に是非お返事いたしませう。
門兵　そんならお宿老
三九　門兵衛、明日逢ひませう。
門兵　ドリヤ、奧へ行てせぶらうか。

ト唄になり、門兵衛、納戸へ入る。三九郎、捨せりふ
云うて、向うへ入る。

さと　姉さん、今お宿老の仰しやつたは、ほんまの事かい
なア。

みや　サア、わしも

トこなしあつて

イヤ〳〵、こりやなんぞの間違ひであらう。主が戻られ
たら、解りさうなものぢやわいなう。

さと　さうでござんす。申し、わたしや夕飯のおみを拵へ
て置きませう。

ト行かうとするを、留めて

みや　ア、コレ。

ト納戸へ氣を附け、又表を見て、戸をしめる。合ひ方
になり、お里を上座へ直し

誰れあらう佐々木義賢さまのお妹御齋屋姫さま、時世と
は云ひながら、いかい御苦勞遊ばすなア。

さと　いつぞや都にて、伯父御よりの追手に出逢ひ、その
場は無事に遁れたれど、歌之助とも引別かれ、彷徨うて
居る折も折、そなたに出合ふて、その場より伴ひ歸り、
夫婦の衆が親切の數々、今の情を忘れは措きませぬぞ
や。

みや　勿體ない事を仰せられますする。一昨年の冬、都の北
野でお目にかゝりまして、其後樣子を承はりますれば、
早枝さまとのお取替へ子、いづれの道にも變らぬお主。
變りしものはお國の成行き、義賢さまには不慮の御最期、
寶の紛失日延べのお願ひ、百日の日數も切れて、お家は
退轉、譜代の武士も散り〳〵ばら〳〵。夫婦の者が御勘
氣お詫びの願ひも絶えて、あるに甲斐なき今の世渡り。
それに附けても一千町の御朱印を尋ね出し、再び御代に
出しませうと、夫婦の者が朝夕に、こればつかりの願ひ。
命長き龜は蓬莱山にも逢ふとやら、兎角時節を待つがよ
いと、必らずきな〳〵お案じ遊ばさぬがよいぞえ。

さと　そりや、よう合點してゐますわいなう。

みや　マア、それ迄は、お身の上を包むが肝心。

トお里、下座へ行く。

さと　姉さん、サア、お味の拵へをしませう。

みや　さうせうわいなう。ドレ〳〵、出してやりませう。

ト蓮葉に包みし味噌を、擂り鉢へ入れて

サア、わしが擂る程に、持つてたも。

さと　アイ〳〵。

ト お宮、れん木、お里、擂り鉢を持つ。ト在郷唄になり、向うより金八、商人の形、お種、婆にて、負はれ出る。

金八　母者人、足は痛みはいたしませんか。

たれ　長々の腰抜けで足の痛い上を、厭ぢや〳〵と思ひながら負ふによつて、ぶら〳〵して足が、アイタ、、、。こりやもう負はれん方がやつと増しぢや。

金八　ハテ、そないに云はぬものでごんすわいの。わしが負ひ様が悪いか知りませぬけれど、久しう立ち居をさせぬさかいで、そこで足が痛むのでごんす。なんでわしが痛めもする物の様に、氣の悪いお人ぢやわいの。

たれ　ムウ、氣が悪いと云ふのは、性根が悪いと云ふのか。

金八　なんのマア、さうぢやごんせぬ。

たれ　イヤ、さうぢや〳〵。

金八　まだいの。そんな愛想づかしは云はぬものでごんすわいの。

たれ　云ふたらどうする。なんと又親が子にねすり事云ふのは法度か。

金八　なんのお前。

たれ　無法云ふは親の高下ぢやぞよ。

金八　アイ。

たれ　聞くのが子の役ぢやぞよ。

金八　さうでごんすとも。

たれ　俺に愛想づかしとぬかす、おどれが愛想づかしぢやわい。

金八　サア〳〵、尤もぢや。もう堪忍して下さんせ。

たれ　今のは出損ひか。

金八　アイ。

たれ　誤つたか。

金八　誤りました。

たれ　えいワ、料簡してこますぞ。

金八　忝なうごんす。

ト 泣き聲にて云ふ。

たれ　なんぢや、泣くか。我れや親に誤るが口惜しいか。

金八　なんのお前。

たれ　そんなら、なんで泣き聲さらすのぢや。

金八　なんの泣き聲をしませう。

たれ　せざえいワ。サア、去なう。きり〳〵歩るけやい。

金八　アイ〳〵。

ト本舞臺へ來て
コリヤ、晝中に戸をさいてどうするのぢや。女房ども、戻つたぞよ。
みや　アイ〳〵。
ト戸を明け
オヽ、こちの人、母さんもよう戻らしやんしたなア。
ト金八、負ふたなりに入ろ。お里、蒲團を敷く。この上へお種を下ろし、手の痛いこなし。
さと　思ひの外早うござりました。
ト金八が側へ煙盆持ち行く。
みや　今日は、さぞよいお慰みでござりませう。
たれ　ナンノイノ、野へ行たとて遠目はきかず、そこらばかり見てゐるさかいで、なんの氣晴らしにならう。うちにゐる方がやつとましぢや。
ト金八、煙吸はうとして、腰提げがないゆゑ、こなし。
みや　こちの人、お前も野へ連れまして行かうよりは、三井寺の方へ行て、花でもお目にかけさんすとよいのに。
金八　サア、俺もさうは思ふたれど、長々の御大病、一の瀨村にゐた時は、相應の田地を持つた百姓なれど、母者人の病氣に內證のかいは廻らず、田地田畑も段々賣り食ひにして、遂には在所の住居さへ叶はず、是非なら美濃の奧山家へ引込んだれば、こんな淋しい所にゐらるゝものか、京近くへ連れて行けと、迫り立てる樣に云はんすも尤も。色々としてどうやらかうやら後の月、この大津へ宿を替へて、しつけもせぬ取り附きの金魚屋。商ひの隙には母者人の氣晴らしをさゝうと、連れまして外へは出ても、兎角足の痛いのを苦にさんすに依つて、遠くへはよう行かなんだのぢや。
みや　それは道理ぢやわいな。明日は大儀にあらうとも、どこぞ花の澤山に咲いた所へ
たれ　コレ、花々と、花が何になるもので。譬へにさへ花より團子と云ふわいの。
みや　それもさうなれど、エヽ、コレ、娘の小光がゐやるなら、お辦でも拵らへて持たしてやりませうもの。又孫を側に置いて、三井寺か觀音の邊りの花を御覽じましたら、それこそお氣が晴れませうものを。
たれ　アヽ、措けやいの。花見たり孫が顏を見たとて、なんの氣が晴れうぞ。そりやさうと、孫の小光はどこへやつたのぢや。

みや　サア、娘は奉公にやつたとばかり。コレ、こちの人、いよ〳〵小光は奉公にやらんしたが定かえ。
金八　なんの嘘をつこぞいの。京では歴々の身代。しかも情深い結構な親方。急な談合でわが身へ知らす間もなかつた。母者人、お前へちよこ〳〵と進ぜます金は、皆その旦那から貰ふて來る金でごんす。あんなよい所へ奉公に行て、娘はいつち仕合せ者ぢや。
みや　アイ、そりや談合さんせいでも、結構な親方さんとあれば、あの子も仕合はせ。殊に家内のお貢ぎに預かると思へば、願ふてもない奉公でござんす。シタガ、小光が居やらんので、母さんが淋しからうと思ふてな。
たれ　コレ〳〵、そりや何を云ふのぢや。俺や小光めがゐ居らんのがいつち嬉しい。うちにゐたとてのら附くばかりで、役に立つ餓鬼ぢやない。譬へのふしに、孫を飼はうより犬ころを飼へぢや。シタガ、犬ころはまだ、時々に尾を振るわいの。
みや　母さん、そりや又あんまり
たれ　何があんまりぢや。
みや　サア、それはな。
金八　これはしたり、そりや何を云ふのぢや。

みや　でも、母さんが今の樣な事を云ふのか。
金八　まだいの、母者人がどうした。エ、、御酒機嫌ぢやと云ふのか。その筈ぢや、お氣を晴らさゝうと思ふてコレ、見や、この吉野樽へ銘酒を詰めてゐた。何が親子差向ひ、さいつさゝれつ、ざゝんざをやつた事ぢや。
たれ　コリヤ〳〵、金八、なんぢや、ざゞんざをやつた。アタぜいらしい、措いてくれよ。嚙み割るやうな小さい樽に一杯や二杯で、ざゞんざをやつたとは人聞きのよい。なんぞ俺に酒の二三升も呑ました樣に、あれ位の酒は俺がためには、酒しほにも足らんわい。
さと　ほんに、かみさんはよう酒を上がりまする。
たれ　なんと云やる。俺を食らひ拔きぢやと云ふのか。
あと　左樣ではござんせぬ。
たれ　イヤ〳〵、さうぬかすのぢや。コレ、嫁女、あのお里はわがみの妹なれど、下女にして置くからは、俺は主ぢやぞよ。その主に家來の分として、つべこべとぬかすのを、なんで我が身達はだまつてゐるのぢや。一體和御寮たちが影になると俺を蔑るに依つて、あいつ等までがおとがひを開くわいの。重ねてぬかさんやうに、きつと云ひつけて置きや。

金八　ハイ〳〵、心得ました。これ嬶、お腹もすいたであらう。なんでもよい菜を拵へてお飯を上げましたがよい。
みや　アイ〳〵、飯も温かに焚いてあるし、おつけも今仕かけうと思ふた所。ドレ〳〵
　トくどを焚き附けながら
　ほんに忘れてゐる。いつもの仲買ひどのが金魚を持つて見えましたぞえ。
金八　持つて見えたか。御意衆から受取りもある。ドレドレ、ちよつと見分けて置かう。
　ト合ひ方になり、泉水の際へ行て、さでにて見分け、桶へすくひ上げてゐる。お種、伸びして
たれ　ヤレ〳〵、退屈や〳〵、ほつと精が盡きた。
みや　ハイ〳〵、もう夕飯を上げますぞえ。
たれ　飯々と、どうで食らはれる物ぢやあるまい。
みや　お好きぢやと存じまして、近江米におかべのおつけを致しました。
たれ　何を好き〳〵と、好きごかしに豆腐汁とは、精進物が食らはれますか。そんな味噌汁が行けるもんかいの。
みや　それでも今日は二十三夜さまぢやに依つて、お精進ぢやござりませぬか。
たれ　なんの爲に二十三夜に、錢の借りはあるまいし、なんの餅のあたいに精進をすると精が落ちます。せめてまア生鰯のぬたでもすればよいのに。
金八　なるほど、こりや母者人の云はんす通りぢや。
　ト桶を直し、こちらへ來て
　精進をするは達者な時の事、病み上がりぢやないか。なんなと生物を進ぜうとはせいで、エヽ、氣の附かぬ、どうした事ぢやぞい。
たれ　性根の附く樣に云ひつけて置きやいの。
金八　きつと云ひ附けます程に、もう〳〵腹立てゝ下んすなえ。
たれ　いかさまなら、食ひ物の事で腹立てるは、どうやらさもしい樣なものぢや。ドレ〳〵、機嫌を直しませうか。
金八　それは嬉しうごんす。
たれ　コリヤ、お里よ。
さと　ハイ〳〵。
たれ　飯は焚いてあると云ふが、定めし我が身が焚きやつたであらうの。

みや　オヽわたしが妹ぢやと云ふて、下女分にするからは、飯も焚きませいでは。取り分け今日はよう出來た事いな。
たれ　アヽ措きや〳〵。なんぼ取りなしを云やつても俺や心元ない。ぢやがマア食ふて見やう。膳持つておぢや。
さと　ハイ〳〵。
　ト お宮、手傳ひ、お里、膳を持つて行く。
たれ　ドレ〳〵。
　ト 櫃の蓋を取つて見て
こりやなんぢや。この焚きやうはなんのざまぢや。めろ才め。
　ト お里を引き附ける。金八、お宮、こなし。
見され。ぼた餅と云はうか、悉皆糊ぢやぞよ。おどれもコレ、オヽこの頤を養ふてこます代りに、せめて飯なとまんぞくに焚くがおどれが役ぢやぞよ。たま〳〵焚けば粥の樣にさらす。粥を焚かしやア强飯にひろぐ。アノ、愛ふんばり女郎めが。
　ト 櫃の蓋にて叩くを、お宮、隔て、お里をあちらへやり

みや　どうした事ぢやぞいなう。アタ自墮落な。
　ト お種へ隱し、お里を拜み、こちらへ向うて
もう〳〵、御堪忍なされて下さりませ。
さと　わたしが不調法でござんす。お腹が立つならどの樣になりとも。
たれ　せいでワ。主の高下ぢやわい。
　ト 又及び腰に叩かうとするを
みや　アヽコレ、申し、こりやあの子の仕損ひではない。わたしが不調法でござんす。
たれ　なぜさう云やるぞ。
みや　よう思へば飯焚いたは、わたしでござんす。そなたもそなたぢや、わたしや焚きは致しませんと、つい云やればよい事を。皆わたしが誤り、モシ、堪忍して
　ト お里へ云うて
堪忍して下さんせいなア。
たれ　なんと云やる。この飯は我が身が焚いたか。
みや　アイ。
たれ　それを又なんで妹が、飯をよう焚いたと褒めそやした。
みや　ハイ。

たれ　親を欺したぞよ。不孝者め、おどれを

　ト又お宮を叩く。金八、分けて

金八　エヽ、おのれがなんの嘘をつかいでもよい事を、嘘をつき廻つて

　ト云ひ〳〵あちらへやり

口不調法なさかいで、どうもなるもんぢやない。

たれ　さうぢや、初手からさうぬかしやア、腹は立たぬわいの。近江米は厭ぢや、焚き直せ。

金八　ハイ〳〵。我れも又なぜ加賀の古米を焚いて進ぜぬぞい。マア〳〵、なんぢやあらうと、お口に合ふ樣に焚き直すがよい。母者人、旅籠町の旦那から金魚の註文、ちよつと持つて行きたうごんすが

たれ　そりや錢儲けぢや、行て來たがよい。

みや　お前も草臥れてゞあらうに、明日の事にさしやんせ。

金八　イヤ〳〵、商用をはづしてはならぬ。一走り行て來う。

　ト泉水へ行き、金魚を捕へ、入れる。この時、太助、あるきにて、向うより出て

太助　隱居さん、うちにかな。

たれ　誰れぢや。

太助　イヤ、歩るきの太助でござります。

たれ　オヽ、太助どのか。遠目がきかんさかいで誰れぢやと思ふた。何ぞ用かの。

太助　オヽ、その用と云ふは、オヽ、金八さんも内にぢや。お年寄りから、お前を連れまして來いとの、云ひつけにござりまする。

金八　宿老どのが呼ばしやるは、なんであらうな。

　トお宮、最前の事を氣にかけるこなし。

太助　アヽ、イヤ〳〵、案じる事ではござりませぬ。何やら觸れ狀があるけれど、お前は無筆ぢやに依つて、ちよつと呼びまして來い、直きに讀んで聞かすとの事ぢや。

金八　そんなら連れ立ちませう。序でに旅籠町へ廻つて來う。母者人、往て來る程に、お前は一寐入りさんせ。

たれ　オヽ、寐たけりや寐るわい。

金八　女房ども、母者人に氣をつきや。

みや　アイ〳〵。

金八　里よ、飯を味よう焚き直して置けよ。

さと　アイ〳〵。

太助　サア、ござりませ。

金八　ドリヤ、行て來うか。
ト唄になり、金八、金魚の桶を持ち、太助と連れ立ち、向うへ入る。
さと　お宿老から呼びに來たは、若しや最前の
みや　サア、その事が氣にかゝつて
トこなし。
たれ　嫁女、その氣の休まる思案を、聟の門兵衛と談合して置いた。今朝呼びにやつたが、聟の殿はまだわせぬか。
みや　アイ、さつきにござんして、奥に寐てぢやわいなア。
たれ　そんなら又さつきにから云ふたがよい。行て逢はう。二人して蒲團ともに引摺つてくれ。
兩人　アイ〳〵。
ト蒲團の端を引く。トお種、仰のけにこけて
たれ　アイタ、、、、。コリヤ、二人して、さつきの意趣晴らしをするのか。
みや　なんのマア勿體ない。
たれ　そんなら靜かに引けやい。
兩人　アイ〳〵。

たれ　エヽ、不器用な奴等ぢや。ア、、人を使へば苦を使ふぢやなア。
ト唄になり、お宮、お里、蒲團にお種乘つたまゝ、引つ張つて障子屋體へ入る。あと合ひ方。ト向うより津田外記之進、野袴ぶツ裂ぎ、旅形にて、家來連れ、出で
外記　案内いたせ。
家來　ハツ。
ト門口へ來て
ちと頼みたい。この家へ猪熊門兵衛と云ふは參つては居らぬか。
ト納戸より
門兵　オイ〳〵、伯母貴、ちよつとそこまで行て來ますぞや。
ト云ひ〳〵出て
俺を呼ぶは誰れでえすぞ。
外記　イヤ、苦しうない、身共サ。
門兵　ヤア、あなたは
ト奥を見込み、こなし。手にてそちらへと敎へ、そろそろ表へ出る。始終合ひ方。

外記　民部さまの御家來、津田外記之進さま。門兵衛、其方が手に入りし一千町の朱印、主人岸田さまへ差上げうとあるが、相違はないか。

門兵　されば、日外佐々木彈正どのに賴まれ、盜み出した御朱印、褒美の金と引替への約束で、その場を別れましたが、後で聞けば佐々木家の騷動、彈正どのもどうなられたやら、俺も亦御朱印を盜んだ杢割れがせうかと思ふて、今日までは鼻ふでゐたが、かうして持つてゐりやアほんの寶の持ち腐り。そこで俺が一思案、岸田民部さまへ差上げて、あなたの手から詮議したと云ふて、久吉さまへお渡しなさるゝと、御奉公になりませうし、又この門兵衛も民部さまから、御褒美を戴くと云ふもの、取次ぎは外記之進さま、そこへよろしう賴みまする。

外記　尤も。それにつき御主人岸田どのゝ讒言を以て、佐佐木一家を武將へ惡ざまに申し上げ、久吉公にはお怒り深く、從類を絕やせとの嚴命。それゆゑ所緣の者を尋ぬる所、義賢が後室御國御前、忰義丸諸共、當所三井寺に忍び居る由。首打つて久吉公の實檢に入れんがため、主人民部どの、粟津の旅館まで入來あれば、其方もかしこへ參つて、御朱印をお渡し申したがよい。

門兵　モシ、御朱印の値段は小判百兩、引替へでござりますぞえ。

外記　金子はいかほどでも遣はさるゝであらう。

門兵　太平樂吞込んだわい。なんでも右から左へぢや。時にその御國御前と義丸が繪姿を

外記　其方が所持して居るか。

門兵　イヤ、手に入れうと思ふたばかり、えらい銅脈を摑みました。

外記　なんの事ぢや。

門兵　時に大事ないぢや。廻りくどい繪姿より、三井寺の坊主どもに譯を話して、二枚乍ら首にして渡しますワ。云はん事は聞こえぬ、こいつも金ぢやぞえ。

外記　ハテ、よく欲しがる奴ぢや。

門兵　首の相場を五十兩に立て、二枚で百兩、ようござりますか。

外記　よいワ、承知いたした。

門兵　まだあるワ。伯母貴の所に下女分にしてある女郎。こいつ慥かにお尋ねの薗屋姫。

外記　ムウ、これとても詮議最中、召捕つて相渡せ。これも大方褒美を下されと申すであらう。

門兵　こいつは生物で相場が百兩。朱印で百兩、首で百兩、〆て三百兩。コレ、梅が枝もどきぢやが、合點かえ。
外記　よいワ。承知いたした。
門兵　ようごんすか。そんならマア蘆屋姫、手元から片附けう。
外記　抜かりなきやう。何かは後刻。
門兵　首尾した上で、粟津まで知らしませう。
外記　然らば門兵衛。
門兵　外記之進さま。
外記　後刻逢ひ申さう。
　ト唄になり、外記之進、家來連れ、向うへ入る。
門兵　うまいワ〳〵。女郎をとぐつて、若し白狀ひろがぬ時は、こちらへ持ち込んで廓へやつても金ぢや。えらいワ、金儲けの花盛りと來てゐるワ。
　ト笑坪のこなし。東の切り戸より、料理人、出て
料理　オヽ、門兵衛さん、爰にござりまするか。
門兵　板元、なんの用ぢや。
料理　サア、どうでも祇園町邊の肝煎り衆と見えますが、手前へ見えてお前さんをちよつと呼んで來いと仰しやつてゞござります。

門兵　ムウ、そりや大方京の播喜であらう。これも儲け口ぢや。ドレ、行て逢はう。
料理　モシ、今夜は二十三夜待ち。
門兵　コリヤ、精進はいけんぞよ。
料理　所を魚類で
門兵　夜通しに呑みかけるワ。サア、行け行け。
　ト唄になり、門兵衛、料理人を連れ、東の切り戸へ入る。ト暮れ六ツの鐘鳴る。東西の二階へ灯ともる。西二階のうちにて
大勢　サア、一曲所望ぢや〳〵。
　ト淨瑠璃
〽たゞさへ曇る雪空に、心の闇の暮れ近く、一間に直す白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは血筋の緣、不便やお袖はとぼ〳〵と、親の大事と聞く辛さ。娘お君に手を引かれ、親は子を杖子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〳〵たどり來て
　ト合ひ方、トこの淨瑠璃をかつて、向うより小光、小比丘尼の拵らへ、菅笠、杓を腰に提げ、文庫を持ち、泣く〳〵出て來て、門口に立つてゐる。納戸よりお宮、行燈を持ち出で、よき所に置いて、又納戸の內より、

米の入りし桶を持ち出し

みや　折角焚いた飯を又焚き直せとは、胴慾な……イヤイヤ、恨みるは勿體ない。ドレドレ、焚き直してあげませうか。

ト竈の側へ、しかけ行く。

小光　ちとくわん。

みや　オヽ、日が暮れてあるのに、通りや通りや。

小光　母さん、米を下さんせいなア。

みや　ヤア、母さんとは

ト表を見て

ヤア、小光ぢやないか。

小光　アイ。

ト泣いてゐる。心得ぬこなしにて、表へ出で、見て

みや　オヽ、矢ツ張り小光ぢや。マア〳〵、入りや〳〵。

ト連れて入る。

小光　母さん、逢ひたかつたわいなア。

ト縋りつき、泣く。

みや　小光、どう云ふ事で此やうな形になつてゐやるぞいなう。

小光　それでも父さんが、奉公にやらんしたもの。

みや　なんと云やる、父さんが

ト思ひ入れあつて

京のよい衆へ奉公にやつたと云はんしたは、そんなら嘘であつたか。わしに隱して可哀さうに、比丘尼の所へ奉公にやるとは、小光、そなたはわしに逢はうと思ふて、戻つておぢやつたのかや。

小光　アイ、お前にも逢ひたし、又この杓に米が一杯ないと、なぜ貰ふて來居らなんだと、飯も食はさずに抓つたり叩いたりして、縛られるのが怖いに依つて、今までは來なんだけれど、今日はあんまり貰ひがないに依つて、米を貰ひに來ましたのぢやわいなア。

ト泣く。

みや　そんならこの杓に米が一杯ないと、抓つたり叩いたり

小光　アイ。

みや　可哀や。

ト抱き締め、はら〳〵と泣く。

〽泣く聲さへも憚りて、簀戸に喰ひ附き泣きゐたり。

小光　母さん、ひもじいわいなう。

みや　オヽ、ひもじかろ、飯もたべさしませう、幸ひ焚い

てもあるし、ドレ／＼。
ト膳を拵らへ
茶々漬けにしてよう食べや。
小光　アイ／＼。
ト飯を食ひ／＼、あたりを見て
父さんはどこへぢやえ。
みや　用があつて出やしやんしたが、もう戻つてゞあらう。婆さんに逢ひたくば、奥にぢやわいなう。
小光　イヤ、婆さんは怖いわいなう。
みや　ア、コレ、そんな事、いかつい聲で云やんないなう。
小光　コレ、母さん、わしやほん／＼の爺さまや婆さんに逢ひたい。今の婆さんは怖いわいなう。
みや　そのほんの爺さまや婆さまは、疾うにお果てなされたわいなう。思へば子供は正直なもの、あの樣にまゝしい母御の機嫌を取つて、辛抱する切なさも、親子三人暮らすので、せめてもの樂しみと、思ふてゐる娘をば、連添ふ女房に隱し包み、比丘尼の所へ、貰らんした金八どの、お宿老樣の噂と云ひ、よもやとは思へど、この樣子では底意の程も、どうやら合點の行かぬ。コレ、小光、たとへ今父さんが戻つてゞあらうとも、わしが逢はすまで、必らず物を云やんなや。
ト此うち小光、居眠つてゐる。
オヽ、この子は、眠たいさうな。コレ、寢さしてやらうかや。
小光　アイ、眠たけれど、毎晩歌をさらへぬと、又叱られるわいなア。
みや　なんと云やる。毎晩歌をさらはぬと
小光　アイ、和尚樣に叩かれるわいなア。
みや　可哀や。
ト締め泣き。小光、ちやんと畏まつて、歌ひかける。
〽久しぶりの母の前、琴の組みとは引替へて、露命を繋ぐ古糸に、皮も破れし三味線の
小光　京の水色よい染め色の、とのちや小紋に見そめて染めて、そつちもこつちも思ひやるのが、けなり小紋よの、ちとくわん。
みや　モウ／＼／＼、そんな情ない歌は措いてたも。わしや聞きとむない／＼わいなう。
ト抱き上げ、わつと泣かうとして、奧へ氣兼ねのこなし。門兵衛出かけ、立ち聞きする。

これ程までに美しう育て上げ、琴の組みでも習はして、よい縁附きをさせませうと、思ふた事も水の泡。流れの里の端唄にも、劣つた今の比丘尼唄。こんな事云はさうとて、此やうにまで育てはせん、育て上げはしませぬわいなう。

ト大泣き

これも何ゆゑ、お主様の目を掠め、道に背いた不義いたづら、思ひ廻せば廻すほど

〽今の憂き身の恥かしさ、父上や母様の、お氣に背きし報いにて

辛い辛苦のやせ世帯、それも厭はぬ二人が仲の

〽これ此お君とて、明けてやう／＼十一の、子を持つて知る親の恩。知らぬ爺様婆様を、慕ふこの子がいぢらしさ。いつそ片輪に生れはせいで、滿足に生れやつたがそなたも因果、母も因果。

〽これも因果のうちかとて、抱き締め抱き締め泣く涙、堪えかねて垣越しに

門兵　なんとお宮、今と云ふ今金八が根性、合點が行たか。

トずつと入る。又お宮、小光に奥へと云ふこなしあつて、小光、納戸へ入る。

〽見返り／＼奥へ行く。

ト二階にて、ヨウ／＼と褒める聲する。下の合ひ方になる。

コリヤ、金八が根性は今の通りぢや。ナ、われが可愛がる小光を、僅かのつまみ錢で比丘尼奉公に、賣つてやる無得心。一事が萬事と博奕を打つか、但しは色狂ひか、どうで碌ではあるまい。さつきにどこからやら宿老の所へ、盗人のつけ屆けしたも、まんざら嘘ではあるまいぞよ。

トお宮、こなし。奥より

たれ　門兵衞、そこにゐやるか。

ト障子明ける。お里、お種の肩揉んでゐる。

門兵　オヽ、伯母貴、爰へ出やんすか。

たれ　邪魔ながら、蒲團ぐち引いてたも。

門兵　オツトセウ。

ト蒲團を引き、連れ出る。

たれ　オヽ、よし／＼。嫁女、我が身はこの辛い時節に似合はぬ甘いわろぢやたう。門兵衞、最前の談合。云ふて聞かしやいの。

門兵　コリヤ、お宮、何も俯向いて思案する事はない。ちよつと來い。

ト こなしあつて

わいら女夫が因緣、云はいでも知れてはあれど、金八は親代々一の瀬村の百姓。あれは幼少の時から、近江の屋敷へ中間奉公に行て、その後で親仁の内儀も死にやる。あの伯母貴はもと飯焚きであつたを、ちよいとつまゝれたが緣の端ぢや。遂に引上げて後妻に直り、何が伯母貴の根のよいに任せ、とつかけ〳〵あやなしたゆゑ、遂に親仁は腎虚してごねた。

たれ　オヽ、門兵衞、そりや何を云やるぞいの。

門兵　イヤ〳〵、云ふ事は云ふがよい。所へ屋敷を縮尻つて、女夫連れて戻つて、來て程なうへり出したはあの小光。伯母貴は入家でも、改めて戻つて來たれば、マア、姪子も同然ぢや。時にこの門兵衞は、京の衞の態で名うての粋方、近年仕合はせが悪いから、伯母貴の世話で同じ在所へ、逼塞のお身の上。その時分からそさまを見染めて、どうぞ抱いて寐てこましたいと思ふても、金八と云ふ男があれば、これとても思ふに任せず。時に一昨年の冬、未進のたゝまりから在所にもゐられず、悉皆夜抜けも同然、南無三寶二百五十兩貸した金を棒に振らし居るか、どこへ失せた知らんと尋ねるうちに、日數も立つて後の月から、この四の宮へ來て金魚屋が取り附き商人、早速伯母貴からの手紙を見て、この門兵衞も盆をめぐり、大津へ直ぐに盆替へ。附いて廻るその下心は、お宮、われと云ふ美し者の色に引かれて北山時雨。コリヤ、濡れてくれる氣はないかいやい。

ト 靠れかゝつて云ふを、突き退けて

みや　門兵衞さん、お前は酒を呑んでゐやしやんすか。

門兵　隣りの板元でぐつと一丁、入れしめたのぢや。

みや　コレ、わしには金八どのと云ふ男があるぞえ。

たれ　その男と緣を切らして、甥の門兵衞と女夫にするのぢや。

みや　エヽ。

門兵　但し伯母貴の言ひ附けを背く心か。

みや　なんのマア心は背かねど、現在子までなした女夫の緣を切らさうとは、あんまりな仰しやりやう。母さん、そりや胴慾でござります。

ト 泣く。

門兵　その胴慾と云ふはわれが事ぢやわい。

伯母貴や俺がこれ程までに因果を說いても、金八と腐れ
合うてゐたいのぢやな。エヽ、いけしぶとい、とち女郎
め、よいワ、仕樣がある。
ト片腕に居るお里が首筋を持つて、引き附ける。
みや　コレ、妹をどうするのぢやぞいなア。
さと　仕落ちがあるなら、赦して下さんせいなア。
門兵　この女郎をわれが妹と云ふは、噓であらうがな。
みや　エヽ。
門兵　コリヤ、うぬは佐々木義賢が妹、蘆屋姫であらうが
な。
さと　サア、それはな。
たれ　さうぢや。苛なんでほざかしたがよいわいの。
みや　イヽエ、京から呼び寄せた妹に違ひはござりませ
ぬ。
門兵　イヽヤ、呑込めぬ。
たれ　ぶちのめして云はしたがよい。
門兵　サア、えいてや。默つてゐやんせ。いよいよ妹に
違ひはないか。
みや　アイ。
門兵　よいワ。そんなら又思案がある。

トお里を突き退け、門口の際へ行つて、手を叩き
喜右衞門どの〳〵。
喜右　アイ〳〵。
ト東の切り戶より、肝煎りの形にて出て
どうぢや、埒は明きましたかの。
門兵　明いた〳〵。證文は金と引替へ。マア、代物を渡す。
ソレ、受取らんせ。
トお里を突き出す。
喜右　ドレ〳〵、えらいワ。祇園町へ突き出したら、初手
から鱗の玉ぢや。サア。直ぐに連れ立ちませう。
ト引き立てるを、お宮、引き退け。
みや　オヽ、此お人は仇不作法な、人の妹を斷りなしに、
どこへ連れて行くのぢやぞいなア。
門兵　勤め奉公にやるのぢや。
みや　エヽ、そりや又なんの爲にえ。
門兵　われが男の金八が爲に。
みや　エヽ。
門兵　さつきに我れが宿老に請合ふた五十兩、その金を渡
さぬ時は、金八は盜人に極まつて、獄門にかゝるぞよ。
たれ　不孝な子が可愛いと、金八が獄門にかゝるを、滿更

見てもゐられぬから、門兵衛との談合。
門兵　讐への通り寶は身の差合はせ。小の虫を殺して大の虫を助けると云ふ、俺が思案。
たれ　どうぞそいつを賣つてやつて、金八が難儀を助けてやつて下されいなう。
ト空泣きする。
門兵　サア〳〵、えいてや。お前の氣を休める様にして進ぜます。お宮、四の五の云はずと、女郎を勤め奉公にやらいでな。
みや　たとへどの樣な事があつても、この妹ばかりには
門兵　賣られぬか。ハア〻、聞こえたわいやい。賣られぬと云ふからは、蘆屋姫ぢやな。
みや　なんのマア。
門兵　姫でなくば勤めをさすか。コリヤ、蘆屋姫なら、首切つて褒美にする。姫でなくば祇園町の首にする。どちらの首ぢや、きり〳〵と返事せいやい。
ト お宮、當惑のこなし。
返事せぬはどちらもならんか。コリヤ又、髪を飾り替へずばなるまいわい。
喜右　どうぢや。埒は明かんかな。更けぬうちに去にたいわい。
ト下にゐて、煙草のむ。この時向うより、岡平、旅の形にて、出かけ、本舞臺を見込み、爰ぢやと云ふこなしにて、門口の方へ來る。門兵衛、釜の下の燃え杭を取つて來て
門兵　お里よ、我れが蘆屋姫でなくば、この燃え杭を握れ、
さと　エ、。
ト震ふ。
みや　コレ、そんなマア胴慾な。
たれ　但し、ありやうに云ふか。
さと　イ、エ、そんな覺えはございませぬ。
門兵　覺えがなくば勤めに行くか。
みや　イ、ヤ、わたしがやらぬ。
門兵　金が出來ぬと金八は、獄門ぢやぞよ。
みや　サア、それはな。
たれ　主の娘か。
みや　イヤ、わたしが妹。
門兵　覺えがなくば、鐵火を握るか。
さも　サア、それはな。
門兵　勤めにやるか。

宮里　サア

門兵　蔦屋姫か。

宮里　サア

門種　サア〳〵〳〵どうぢや。

みや　ハア、。

　ト大泣き。

門兵　面倒な、いつそ、うぬ。

　トお里を引き附け、燃え杭を掴まさうとする。お宮、
　立ち廻りにて、お里を引き退け、燃え杭を掴む。皆々
　驚ろく。お宮、こたへながら、じつと下に居る。小
　光、出て、お里と兩方より取りつき

さと　姉さん、喉苦しからう、苦しうござんせうなア。

小光　母さん、熱からうなア。

　ト泣く。門兵衛、お種と顔見合はせ、思ひ入れ、岡
　平、こなしある。お宮、苦しみながらこらへ

みや　母さん。

たれ　ヤナ。

みや　門兵衛さん。

門兵　なんぢや。

みや　疑はれても詮議に遭ふても、知らぬ事は知らぬと云
ふ言譯の誓。又妹はどうも賣られぬ義理がござんす。
金八どのより外に男は持たぬと云ふ、何かの誓ひに、苦
しい鐵火を掴みましたぞえ。これで何もかも料簡して、
疑ひを晴らして下さんせいなア。

たれ　イヤ、料簡ならぬ。疑ひはまだ晴れぬ。

みや　そんならこれ程に云ふても。

門兵　千も萬もない。喜右衛門、引摺つて去にや。

喜右　こんな時甘茶ではいかぬ。サア、うせやがれ。

　トお里を引つ立てる。小光、取り縋くを、エヽ、邪魔
　なと、首筋持つて退ける。お宮も留めるを、門兵衛、
　蹴飛ばし、お里を引き附け

門兵　勤めにうせにやアこの燃え杭で、頬をさすつてやら
　うわい。

　トお里を打ち据ゑんとするを、お宮、支へるを、喜右
　衛門、留める。トこの時、岡平、ずつと入り、門兵衛
　を蹴退け、燃え杭を引つたくり、顔へあてる。喜右衛
　門、かゝるを、取つて投げる。

アツ、、、、ヤレ、熱いワ、熱いぞ〳〵。

　トじり〳〵舞ふ。此うちお宮、お里、岡平を見て

みや　ヤア、こなさんは

ト驚ろく

岡平　アヽ、コレ〳〵、知らぬぞ。遂に見た事もないお女中。拙者は往來の者なれど、余りざわ〳〵と騷ぐゆゑ、見兼ねて一寸さへ人に出たのぢや。必らず人違ひして、粗相を云はつしやるな。

ト兩人、こなし。

門兵　サア〳〵、どえらい事をひろいだぞよ。ヤイ、毛才六め、往來の者がかけも構はぬ所へ出しやばつて、この面體へ燒き印は、なんで當てた。

岡平　猿松め、なんで又女童を捕へて打擲をひろいだ。

門兵　云ふないやい。爰な金八に大それた科があるに依つて、その詮議をし抜かうと思ふて、女郎を打つたが、これがどうした。

岡平　詮議とは、わりや所の代官か。

門兵　ヤ。

岡平　役目も受けず、どこからの下知を以て詮議するのぢや。

門兵　サア、ソリヤ、アノ……云ふないやい。どこからも下知は受けねど、詮議するはお上への奉公ぢや。なんと又町人はこんな事吟味する事はならぬものか。あんだら盡すと、おとがいを引裂いてたやすぞよ。

岡平　イヤ、詮議してよくば、うぬ等は頼まぬ。身が詮議する。

門兵　なんと。

岡平　桃山の執權より下知を蒙り、徘徊いたす隱し目附け。

門兵　ヤア、。

トお種と顏見合はせ、こなしある。喜右衞門、後へ寄る。

岡平　自己の料簡を以て詮議いたすは、お上を輕しむると云ひ胡亂な奴ら。一々括し上げて役所へ引渡し、拷問にかくる。腕廻せ。

ト此うち門兵衞、膝を直し、まじ〳〵して

門兵　エヽ、ソリヤ、アノ、なんでござりますわいな。アノ、ソレ、何やらが、どうやら。

トいろ〳〵術ながり

コレ〳〵、伯母貴、ちやつと言譯をさんせいの。

たれ　俺ぢやて、言ひ樣がないわいの。

ト喜右衞門、逃げうとする。

岡平　ヤイ、待ちやアがれ。

喜右　ハイ、、、、。
岡平　わりや何者ぢや。
喜右　私しは肝煎りでござりまする。
岡平　その肝煎りが何ゆゑ打擲を手傳ふた。
喜右　サア、そりやあの、オヽ、根ざらへをせうと思ふて。コリヤ、この捕手も、肝煎の役でござりまする。
岡平　ムウ、シテ、奉公に取りし上、金子はいか程遣はした。
喜右　イヤ、まだ金は出しませぬ。證文もせねど、マア、入り込んでからと存じまして。
岡平　金子も渡さず證文も致さず、無體に連れ歸らうとは人商人め、云はゞおこせだぞよ。
喜右　サヽ、それはな。
岡平　大騙りめが
ト喜右衛門、恟りして、すつ込む。
門兵　もうやけぢや。うぬ、いつそ。
ト外の燃え杭を取つて來て、叩きかゝるを、岡平、立ち廻つて、燃え杭を引つ取り、薙ぎ倒して
岡平　うぬが樣な無法は奴は、身共が折檻。
ト門兵衛、起きんとするを

かうする／＼。
トりう／＼と打ち据ゑ
胴腰にこたへたか。
門兵　こたへた／＼。えらうこたへた。エヽ、思へば、うぬ。
ト起きんとして
アイタ、、、、、。
ト腰を抱へ、痛がるこなし。
岡平　これから婆ぢや。爰へ出され。
たれ　わたしや腰が立たん、赦しておくれな。
岡平　立たれずば、ドレ。
トつか／＼と行く、引き摺り出す。
たれ　コレ、姫御前ぢや、手荒になさんな。
岡平　どこへ姫御前。この詮議はうぬが案じ附きであらう。これから又身共が思ひ附きで、コレ／＼、この燃え杭ぢや。サア、これを摑め。
ト鼻の先へ突きつける。
たれ　ア、滅相な。
岡平　摑めやい。
たれ　ぢやて、これがマア。

岡平　摑まれずば、よいワ。うぬもしやつ面へ、この
　ト燃え杭を當てうとする。お宮、留めて
みや　ア、コレ、待つて下さんせ。大事の大事の姑御、お
　怪我をさせましてはわたしが不孝になります。もう〳〵
　御料簡なされて下さんせいなア。
岡平　エヽ、仕合はせな狸婆め。
　ト突き飛ばす。
喜右　とは云ふものゝ。
　ト向うへ出るを、岡平、首筋を引つ摑み
岡平　足もとのあかいうち、とつとゝ失せう。
　ト突き飛ばす。門口の方へひよろ〳〵と行つて、立ち
　戻らうとして、岡平を見て
喜右　折が惡い。出直して來う。
　ト逃げて入る。此うち門兵衞、片息になつて居る。
たれ　門兵衞、ちやつと負ふてたも。奧へ行きたいわいな
　う。
門兵　何云はんす。俺も腰拔け同樣ぢや、
　トいざりまうて側へ行く。
　ソレ、蒲團へ乘らんせ。
　ト突きこかす。お種、それなりに蒲團の上へ寢る。門
　兵衞、端を持ちながら、岡平を見て
　エヽ、思へば
岡平　燃え杭が食ひ足らぬか。
門兵　イヤ、十分に食べました、伯母貴、引くぞや。
たれ　門兵衞、頼むぞ。
　ト寢ながら云ふ。
門兵　ひんよい〳〵。
　ト蒲團引く。
たれ　もちつと頼むぞ。
門兵　ひんよい〳〵。
　ト云ひながら、蒲團の端を引つ張つて、納戸へ入る。
　あと合ひ方になり、お宮、お里あたりを見て
みや　岡平どの。
さと　よい所へよう來てたもつたなう。
岡平　折よく參りかゝり、都よりの隱し目附けと僞つて、
　當座の御難儀はお救ひ申したれど、この家には置かれま
　せぬ。サア、直さまお越しあられませう。
　トお里を連れんとする。お宮、留めて
みや　マア、待つて下さんせ、
岡平　宮城野どの、なぜ留めさつしやる。

みや　お前のお主ならわたしが爲にも、御主人のお姫様、この家にお匿ひ申すを。心許なう思ふてかえ。

岡平　お家沒落の後、御國御前、義丸さまにもお行くへ知れず。さるに依つて主人山三とも引別れ、所々方々を尋ぬる所、御親子とも當所三井寺に御座あると、撫子さまより密かのお知らせ。早速參つて御安否を聞かんがため、この道を通り合はせ、札の辻にて休らふ折柄、金八夫婦この四の宮に住居いたすと、沙汰を聞きしも時の幸ひ、參つて見れば蘆屋姫さま。扨てはこの家にお匿ひ申されしと、感心はいたしながら。この所に御座ある事、いかにしても危ない危ない。

みや　イヽヤ、そりやお前の勝手料簡。世間があるゆゑ妹にして置いて、夫婦の者が心一杯御介抱。今にもあれ金八どのが戻られて、お姫様はと問はれし時、岡平どのが見えてお連れ申して歸られたと、云はれさうなものか。金八どのが得心をしられませうか。よう思ふて見て下さんせ。

岡平　身共がためにも以前は朋輩、心もすなをに實義の金八。

みや　それぢやに依つて

岡平　夫婦とも魂を見違へた。

　ト　お宮、兩の手を見せて

みや　お主を大事と思へばこそ、この通りの鐵火の誓ひ。この辛抱が並や大抵の事と思ふて下さんすか。

　ト　泣いて云ふ

岡平　サア、その心は潔白でも、非道の縁に繋がれば、共に非道の名は遁れぬ。

　ト　お宮、思案して

みや　スリヤ、母さんと云ひ甥の門兵衞、惡黨者が居るに依つて。

岡平　イヤ、そればかりでない。

みや　まだ外に心許ない事が

岡平　連添ふ夫金八が心許ない。

みや　生さぬ仲の母御へ孝行、お主樣ゆゑ心遣ひの數々は、云ふに云はれぬ夫の心勞。

さと　夫婦に如才のない事は、自らがよう知つてゐますわいなう。

岡平　さほど忠孝全き者が、盜賊は何ゆゑ致す。

みや　エヽ。

岡平　この大津にて盜賊を所業となし、金銀を掠むると、

街道にての噂と云ひ、今門兵衛が詞の割符、善悪を糺すうちに、凶事あつては一大事、お供申すに如くはない。

ト又連れうとするを、向うへ廻つて

みや　マア、待つて下さんせ。

岡平　言ひ譯あつてか。

みや　サア、よもやとは思へど、心の變るも皆慾から。とつくりと糺した上、非道と見たらば、子までなした夫なれど、御恩のお主には替へませぬ。忠義ゆゑには親夫でも見捨てる習ひ。

岡平　ムウ。シテ、盗賊に極まつたらば

みや　暇を取つてこの身の潔白。

岡平　さほど魂を据ゆる上は

みや　どうぞ預けて下さんすか。

岡平　いかにも……とは云ふものゝ、長うはならぬ。

みや　どうぞ暫らくあの一間で

岡平　休息のうち、金八が歸りを待つて

みや　忠義一途に違ひがなくば

岡平　云ふ迄もない、預け遣はす。

みや　千に一つも

岡平　惡心に極まらば

みや　直ぐにわたしも縁を切つて

岡平　その身の潔白。

みや　忠か不忠か

岡平　善悪邪正

みや　分けるも追つゝけ。

岡平　それ迄はあの一間で

みや　旅の疲れを

岡平　サア、お姫樣。

ト姫を上へやる

みや　コレ。

ト寄るを、隔てゝ

岡平　宮城野どの、お返事を相待ち申す。

ト唄になり、岡平、お里に附き添ひ、上の一間へ入る。あと合ひ方。お宮、いろ／＼思案のこなし。

小光　母さん、眠たいわいなう。

みや　ほんにそなたは眠たい筈。ドレ／＼、寐させてやりませう。それはさうとこちの人は、もう戻られさうなものぢや。但しはお宿老から呼びに來たお觸れと云ふも、矢ツ張り

トこなし。

ドレ、寐させてやりませうか。
ト東二階にて、うらはやよ垣の合ひ方になる。お宮、小光を片脇へ寢かせ、添乳することなし。ト向ふより金八、岡桶を提げ、戻つて來る。

金八　あの旦那は、余ッ程金魚に凝つたわろぢや。商ひにする俺よりは、買ひ手の方がやつと玄人ぢや。ハ、、、ハ。
ト云ひ／＼戻つて來て
女房ども、戻つたぞや。定めし遲いと云ふて、母者人が叱つてゞあらう。

みや　こちの人、戻らんしたか。
ト武者振り附かうとする。

金八　コリヤ、何するのぢや、さうして見りやア兩手ともまつ黑になつてあるが、何とぞしたか。

みや　サア、これはな。聞いて下さんせ。飯焚くのにあんまり氣を急いたれば、燃え杭が飛んださかいで、それを取らうとしたので、此やうに燒けどをしたのぢやかいな。

金八　我れも嗜め。ドレ／＼、オヽ、こりやよつぼどの事ぢや。なんぞ藥でも附けたか。

みや　イヽエ。

金八　さう云ふものぢや。アヽ、なんぞよい藥が。オヽ、おはぐろがいつちよい。待て待て。
ト鐵漿壺を取つて來て、附けてやることなし。
これでツイひりつきは治る。シタガマア、當分水使ひをせんがよいぞよ。

みや　アイ／＼、お前も草臥れてござんせう。莨でものんで休まんせ。
ト莨盆持ち行く。

金八　イヤ／＼、莨はのむまい。

みや　莨をのむまいとは。お前腰提げをどうさんしたえ。

金八　サア、あつたら物を落としてのけた。

みや　お前も氣を附けたがよいわいな。シタガ、惜しうもない腰提げぢや。さうしてお前は旅籠町へ寄つてござんしたかえ。

金八　オヽ、寄つて來た。これ見や、金魚が忽ち二百銅に生を替へた。母者人が寐酒の肴に、なんぞ買ふて進ぜたいものぢやが。
ト始終やよ垣の合ひ方。お宮、思案をして、

みや　こちの人、そしてあのお宿老樣から呼びに來たは、

なんの用でござんしたえ。
金八　サア、呼びに來たは
みや　呼びに來たのは
金八　サア、これはな。
みや　なんでござんしたえ。
ト突かけて問ふ。
金八　エヽ、嗜め。びく／＼するわえ。
みや　アイ、ちつと愕りでござんせう。こなさんよりわしが愕り
金八　ヤ。
みや　サア、わしや、とつと合點の行かぬ事があるわいなア。
金八　合點が行かぬとは、そりや何が
みや　娘の小光が
金八　ヤア。
みや　歷々の旦那衆へ、奉公にやつたと云はんしたが、そりやどこの旦那衆ぢやえ。
金八　サア、そりやなんぢや、アノ、ソレ、オヽ、京の兩替町ぢや。
みよ　兩替町のどこらぢやえ。

金八　サア、寳町筋の
みや　寳町の
金八　烏丸
みや　烏丸を
金八　西へ入つて
みや　西へ入つて
金八　南へ行きあたる東側の北隣りぢや。
みや　家名はなんと云ふえ。
金八　家名は、なんぢやわい。
みや　なんと云ふえ。
金八　そりや、アノ、大身代の山家屋の向ひの、オヽ、帶屋の長右衛門どのゝ弟の半右衛門どのと云ふ大金持ちぢや。
みや　ハテ、それはよい所へやらしやんしたなう。
金八　あいつは仕合はせな奴ぢや。
みや　仕合はせな娘でござんす。
金八　イヤモウ、傳手に傳手を求めて、大抵の事かいの。
みや　さうでござんせうとも。
金八　我が身も俺も追つゝけ左團扇で養はるゝワ。悦んだがよいぞや。

みや　悦ばいでなりませうか。ようマアあんな所へ、サア、あんな所へ行くは、あの子も出世。
金八　よく種を蒔いたのであらう。
みや　あの子も嬉しいかして、さつきに小光が所から便りがあつたぞえ。
金八　ヤ。
　ト恟りする。
みや　オヽ、なんぢやぞいな。仰山さうな。
金八　小光が所から誰れが來たぞ。
みや　トガ／＼しい、その顔はなんぢやぞいな。狀が來ましたわいなア。
金八　なんぢや。狀が來た。
みや　ほんに人中へは出さうもの。あの子も賢うなつて、わたしが方へ、見ん事文をおこしやつたわいなア。
金八　その狀はどこになる。
みや　爰に
　ト杓を差し出す。
金八　ヤア、これは
　トぎつくりする。
みや　なんぼ無筆なお前でも、この狀ばかりは讀めませうがな。コレ、この杓に米を一杯貰ふて去なねば、抓つたり叩かれたり、縛られたりするといな。
金八　スリヤ、小光を奉公にやつた所を
みや　わしに隱して、よう比丘尼の所へ賣らんしたなう。まだこればかりぢやござんせぬ。こなさんの隱してゐやしやんす、心の底も
金八　この金八が隱してゐるとは
　トお宮、あたりを見廻し、小聲になつて
みや　盜みさんす事を
金八　なんと。
みや　エヽ、こなさんはなう。
　ト胸倉を取つて、泣き落とす。橋がゝりにて
皆々　サア、ござれ／＼。
　ト善八、金魚屋の親方にて、四歩市、ちよぼ市、糟市、座頭の形。小吟、比丘尼頭にて、出る。
座三　金八、うちに居るか。金戻せ／＼。
　トわや／＼云うて、善八も入る。
金八　これは姦しい、なんでござります。
四歩　さう云ふ聲は金八ぢやな。こちらが聲を聞いて隱れうとしやつても、どつこへもやる樣な四歩市ぢやないぞ

や。
ちよ　オヽ、滅多に壺をかつぐ、ちよぼ市ぢやないぞ。
糟市　オヽ、こそげ取りにする糟市ぢやわいの。
四歩　よう謀判をして金を騙つたなア。外の金とは違ふぞ
よ。
ちよ　大事の官金ぢやぞ。
三人　今戻せ／＼。
　ト喚き、杖にて叩き廻す。
善八　マア／＼、待たつしやれ。俺も云はにやアならぬ。
後月から金魚を仕込つた代物、よう銅脈を摑ましたな
ア。
みや　マア／＼、お待ちなされませ。其やうに口々に云は
ずとも、若し、法師様方、外の事とは違ひます。謀判と
はなんの事でござります。
四歩　ハテ、その謀判は、サア、女子の傍で謀判と云へば、
どうやら氣にもかけうけれど
ちよ　ハテ、くど／＼と云ふ事はない。コレ、この證文を
見やいの。
　ト一札を出して
爰の金八に官金二十兩貸した時に、取つて置いた證文ぢ
やわいの。
糟市　おい等は見えんけれど、その判を見る人に見て貰ふ
たれば、煙管の雁首に墨を附けて、捺したのぢやといな
う。
四歩　いかに、こちらが目かいの見えぬ者ぢやと云ふて、
ほんのこれが座頭にあつかい、紙に捺しある慥かな證據、
代官所へ持つて行くと、爰な金八は磔刑にかゝるぞや。
　トお宮、いろ／＼あつて
みや　コレ、こちの人、お前あんな事さんした覺えがある
かえ。
　ト金八、じつと俯向く。
コレイナア、俯向いてゐては濟まんわいなア。エヽ、コレ、
物を云はんせいなア。
　ト顔を見て、こなしあつて
そんな覺えがあるに依つて
　トうろ／＼する。
善八　コレ／＼、內儀、貴樣達が口を過ぎる商賣の元手、
金魚の代を銀で取つた八十兩、兩替見世にやつたら、
見やしやれ、この通りの銅脈ぢや。素人の癖にこんな事
をひろぐ金八の大騙りめ。

ちよ　所詮願はにや埒は明くまい。

四歩　ソレ〳〵、宿老へは日のうちに断つて置いた。直ぐに仕掛けませう。サア、皆ござれ〳〵

　ト皆々行かうとする。小吟、ずつと入り

小吟　コレ、皆待つて下さんせ。

三人　待てとは

善八　わり様は誰れぢや。

小吟　わしや手枕の小吟と云ふて、比丘尼仲間のお頭でござんす。金八どのが牢へ入ると家内はお預け。それ迄にマアこちの代物、取返さにやアなりませぬ。どこにゐ居る。オヽ、あそこに寐てゐ居るさうな。

　ト行くを、お宮、留めて

みや　待たんせ。大事の娘、やる事はならぬわいなア。

小吟　ホヽヽヽ、こりや可笑しいわいな。十年切つて大枚一貫文と云ふ錢を出して、買ふて置いた代物、連れて去ぬのぢや。邪魔しやんないの。

　ト立ち廻り

みや　イヽエ、どの様に云はんしても、やる事はならぬわいなア。

小吟　何を面倒な。

　ト爭ふ。この時、向うより雲谷、提げ桶を持ち、走り出て

雲谷　爰ぢや〳〵

　トずつと入り、小吟を引き退け、金八へ突かゝつて

金魚屋め、おのれに逢ひたかつたわい〳〵。

金八　こなさんは一昨日のお醫者。

雲谷　オヽ、長谷部の雲谷ぢや。

みや　ヤア、お前は

雲谷　われは宮城野。

　ト兩人、驚きながら

見てくれ、長谷部藤太郎がなれの果てぢや。

金八　スリヤ、藤太郎どの。

　トこなし。

雲谷　コリヤ、とぼけないやい〳〵。一昨日うぬに買ふた金魚、その時ぬかすには、これは朝鮮と云ふて、捨て賣りにしても十兩にはなると云ふ。そこで俺もこいつはうまい堀出しを致さうと思ふて、金子三兩に値を附けたれば、直ぐに負けた。負けた筈ぢや、よく〳〵見れば朝鮮ではなうて、この通りのがいるごろぢやわい。途方もない物を摑まし居つた。いきずりの大騙りめ。

三人　サア、おい等はどうする。
小吟　奉公人を渡すか。
皆々　どうするのぢやぞい。
　ト門兵衛、出かけ
門兵　イヤ、わい等がせりふは後へ廻せ。マア、俺が達引きをせにやならぬ。
雲谷　ヤア、わりや門兵衛でないか。うぬにも逢ひたかつた。コリヤ、ちよつとうせい。
　トあちらへ引つ張つて行て
　おのれは〳〵、途方もない騙りをひろいだぞよ。
門兵　黙りやアがれ、生馬の目を抜く門兵衛を、ようかけやがつたな。銀金物を戻しやがれ。
雲谷　こつちの繪姿を戻せ。
門兵　オヽ、戻す。ソリヤ、受取れ。
　ト大津繪を投げやる。
雲谷　戻さいでは。
　ト取つて見て
　ヤア、コリヤ、なんぢや。座頭の褌を犬が啣へてけつかる。これではない、繪姿を戻せ。
門兵　受取つたはそればかりぢや。頤叩かずと銀金物を戻しやがれ。
雲谷　オヽ、戻さう。
　ト腰提げを出して
　これがどこに銀金物。煙管と一つにして五本が値打ちはあるまい。おのれが渡したはこれぢやわい。
　ト打ちつける。
門兵　あんだら盡すな。コリヤ、うぬ、見知り越しに騙りやがつたのぢやな。
雲谷　おのれが騙りをひろぐわい。
門兵　よいワ。さうぬかしやア、この腰提げをでんどへ持つて出て
　ト云ひながら、取り上げ見て
　こりや見知りのある。
　ト金八を見る。金八、俯向く。門兵衛、こなしあつて
　ハヽア、聞えたわいやい。
雲谷　われは聞えても、俺は根つから聞こえぬわい。
門兵　もうよい。樣子は分つた。
雲谷　イヤ、解らんぞよ。繪姿を戻せ。
　ト無者振りつくを、突き退けて
門兵　エヽ、こいつが、よいと云ふなら默つてゐろ。白い

も黒いもたつた今、分けて見せるわい。
雲谷　解る事なら控へてゐやうわい。
　ト片脇へ寄る。門兵衛、金八が傍へ行て
衛兵　金八、わりや素早い事をするなア。マア、此せりふは後へ廻して、おれが貸した金はいつ戻すのぢや。
金八　なるほど、その日暮しの金八が借銭を、せたら負ふてあなたこなたへ、義理の缺ける事ばつかり、分けてこなさんに貸して貰ふた、二百五十匁の金ばかりは
門兵　コリヤ〳〵、金八、俺が貸したは、二百五十匁やそこらの端下金ぢやないぞよ。
金八　でも、二百五十文より外には
門兵　サイヤイ、一昨年の冬京の北野で、めつきしやつきした時には、いかにも二百五十匁ぢや。その晦日に濟まさうと云ふたぢやないか。男づくで切刃を仕ながら、わりや一の瀬村を夜抜けひろいだぞよ。どこやら奥山家へふけつて行て、跡の月この四の宮へ宿替へて來た所を、さゝんわい、猪熊門兵衛、そんな事にぬかりはないわい。今日まで延び〳〵になつた二百五十匁の日合、カウツ、待てよ、一昨年の師走から二年越しに、この三月まで丁度六ケ月、利銀を隨分安う積つて、一日が二朱一本、こいつを八匁に立て、三十日で三八二百四十目、これを十六ケ月元利合はして四貫九十目、今戻せ、今受取らう。
金八　門兵衛どの、こりやこなた無法と云ふものぢや。
門兵　無法とは何が無法ぢや。貸した金を乞ふが無法か。横に出るうぬが無法か。そればかりぢやない。見たか。
　ト腰提げを突きつけ
この腰提げと掏り替へて、うぬ、銀金物はどこへはかした。きり〳〵出せ。
雲谷　扨ては繪姿を掏り替へたも、うぬであらうな。三兩の金子をくすねると云ひ
三人　うちでは謀判。
善八　外では盗人。
小吟　奉公人まで引上げるとは
皆々　ても、恐ろしい
雲谷　コナ、はつゝけめが。
　ト蹴る。
門兵　存分さいなめ。俺や後へ廻らうわい。
　ト莨盆引き寄せる。
座三　おい等にもさいなまして貰はう。
　ト探りもうて武者振りつく。雲谷、善八、小吟、皆々、

大盗人め、大ずりめと口々に云ふて、踏んだり蹴つたりする。一間よりお里、出やうとするを、岡平、留めてゐる。お宮、あちらを宥めこちらを支へ、我が身をしづになつて、皆々を留め

みや　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。こちの人、たつた今わたしが云ふたのも、妾の事でござんすわいなア。コレ、お前は、あの小光は可愛うはござんせぬか。盗み騙りをする様な、さもしい心をさげる様なお前ではなかつたが、どう云ふ天魔が入替つて、非道な心になり下つては下さんしたぞいなア。よく〳〵の義理詰めで、金のしがくをさしやんすと、推量はしてゐれど、なぜ女房のわしには隠して下さんす。七人の子はなすとも、女に肌を許すなと云ふ譬へはあれど、そりや人にもよりますわいなア。悲しみあれば共に悲しみ、悦びあれば共に悦ぶ夫婦の中、隔てゝ下さんすは、金八どの、エヽ、お前は水臭いお人ぢやなう。

ト泣いて云ふ。金八、面目ないこなし。合ひ方。

金八　女房ども、こらへてたも。そなたに打明けなんだは俺が悪かつた。料簡してたも〳〵。モシ、どなたにも、お腹の立ちますは重々御尤もでござります。これには段段の様子のある事。何を隠しませう私しには、腰膝の抜けました、獨りの母がござります。生さぬ仲ではござりますれど、随分不便がつてくれられます。これは冥加ない、忝ない事ぢやと存じまして、もうもう心一杯に孝行をと、サア、私しが口から申すも異なもの。妾にゐやつしやる門兵衛どのは、母者人の甥でござります。甥子と申して寵愛も格別。今の様に貸した〳〵と云はつしやれど、借つた金は二百五十文。これとても母が病氣の藥代に、お醫者様へのつけ屆け。七の廻らぬおどもりが、腰膝抜けた鋤鍬の百姓を嫌はしやる、商賣替へて美濃の國、山家の奥は淋しいといぢらるる。イヤ〳〵、もどかうではあるまいと、又宿替へて大津道、この四の宮で後月から、その日を渡る金魚の受け賣り。金魚はあつても金氣はなく、切ないなかで何に要るかに要ると、榮耀に余つた氣儘八百。八十匁の官金も、アヽ、まゝよ、一寸先は闇の夜の、座頭衆の目をくらまして、謀判して取込んだ官金も、つい消えて行く淵へ鹽。濡れ手で掴むがいるごろ、金魚の子とはまつかいな嘘。きたない腰提げを銀金物と掏り替へて、品玉使ふやり繰りの、工面になろかと繪姿を、取つたもその場の出來心。それもこれも人手に

やつて、もう爰にはござりませぬ。非道で溜める錢金は、なんの溜まらう。足らぬ〳〵と母にはせがまれ、これがほんの比丘尼に出す一人の娘、蝶よ花よと育てたものを、十匁には足る足らず、たつた一貫に賣つてやる不仕合はせ。いかに孝行がしたいとて、盗み騙りする事は、女房でも云ひかねて、隱したは俺が惡い、こらへてたも。皆様、料簡して下さりませ。何をおのれが貧乏人のざまで、孝行とはしやらくさい。土用干しと孝行は、貧乏人にはない事ぢやと、思し召しもなされうが、今日を照らしやつしやる天道様かけましてと、サア、云ふもどうやら勿體ない。罰が當つて針の先、巡り巡つた今日の今、一つに迫る金の切端。牢へも入らう、首切らるるも合點なれど、せめて母者人を目出度う見送るまで、御料簡が頼みたい。モシ、皆さん、慈悲でござります。お情でござります。女房ども、何事も料簡して、皆様へよいやうに、お詫びを申してたもいなう。

ト泣いて云ふ。岡平、こなしあつて、障子をさす。

みや　勿體ない。女房に詫び言どころかいなア。その心とは夢にも知らず、毎日々々母御様へ渡さしやんす金を見てゐながら、心の附かぬは女子だけ、結句恨んだはわたしが惡い。申し皆さん、今こちの人が申されます通り、これ程も身の慾ではござりませぬ。この譯がお袋様へ知れましては、心盡しも水の泡。申し、どうぞ御料簡を頼みまするわいなア。

ト右のうち門兵衛、莨のんでゐて

門矢　金八、われが口車であいらは得心しても、俺は厭ぢや。サア、金濟ませ。戻さんか。コナ、いきずりめが。

ト引き附ける。お宮、寄るを

踏ん張りめ、寄りやアがるな。ヤイ、掏摸よ、金が出來ずばあのお家を去つて、俺が女房におこすか。

金八　サア、それはな。

門兵　それはとは、金も濟まさず、女房も去らず、横倒しに出りやア俺も百年目ぢや、金の利銀だけしやつ面をカウ

ト火入れにて、眉間を割る。

みや　ヤア、こりや面體に

門兵　疵ばかりぢやない。息の根を留めるのぢや。

雲谷　イヤ、息の通ふうちに、取る物を取らにやアならぬ。

門兵　此まゝ引張つて行け。

皆々　合點ぢや。
小吟　俺や奉公人を
ト皆々、金八を引つ立てる。小吟は小光へかゝる。お宮、双方を留める事、いろ／＼あつて
みや　そんならどうあつても
門兵　知れた事、代官所へ
皆々　引立てるのぢや。
ト此とき西の切り戸のうちより
撫子　待つた。双方の立つ扱ひをしませう。
皆々　なんと。
ト撫子、屋敷風、着流し、抱へ帶にて、侍ひ連れ、出る。
金宮　ヤア、あなたは
撫子　四の宮殿人が妻撫子、金八夫婦、一別以來不思議な所で逢ひまするなう。
金八　撫子さまが
みや　何ゆゑこの所へ。
撫子　ちと仔細あつて柴屋町、花形屋が亭座敷、休息の折も折、襖を隔てゝ騷がしい物音、あらまし樣子は聞き屆けました。余り氣の毒に思ふゆゑ、及ばずながら挨拶を致さうと存じて
門兵　イヤ／＼、女中樣、憚りながらちと差出ませう。惣別挨拶と申すは、辻かい元の喧嘩口論、或は侍ひ衆の鐺咎め、これを五分五分に扱ふ、これが挨拶。それとこれとは譯が違ふて、金八は大騙り、大盗人でござります。御國御前
雲谷　俺でさへ小判三兩。そればかりぢやない。義丸が繪姿を横取りひろいだ金八なれば
撫子　長谷部藤太郎どの、お家追放の身を以て、配符の繪姿は何ゆゑ所持なさるゝ。
雲谷　イヤサ、これはな。
撫子　吟味を糺さば立ち歸りの科人、繩かけて役所へ引かうか。
雲谷　サアそれは
撫子　その身の悪黨、心が問はゞなんと答へん。ホヽヽヽ。藤太郎どの、なんと左樣ではござんせぬか。
雲谷　ムウ、御尤もな儀でござる。
四歩　何はともあれ、こちらの臺詞
三人　官金の二十兩。
善八　金魚の代が八十匁。
小布　比丘尼の代がおあしで一貫。

門兵　この門兵衞は四貫九十目、逆さにしてふるふても、
三文も出來ぬによつて
皆々　そこで金八を代官所へ
撫子　イヤ、連れるに及ばぬ。その金を辨へませう。
門兵　女中樣、そんならあなたが
皆々　大枚の金を
ト撫子、侍ひに持たせし財布を取り
撫子　持合はせし百金、ソレ、配分をいたしてよからう。
ト財布を拋る。
門兵　ヤア、そんなら小判百兩。
皆々　忝ないワ。
ト皆々立ちかゝるを、門兵衞、財布を押へて
門兵　待て。俺がばんとうして、殘つたゞけは銀金物のう
ち入れぢや。
皆々　ても、横着な。
ト門兵衞、金財布を袂へ入れて
門兵　コリヤ、なんにも云はずと、マア、行けやい。
雲谷　サア、來い〳〵。
トこの人數皆々入る。門兵衞、雲谷、門口にて囁き合
ひ、雲谷は橋がゝりへ、門兵衞は藪垣より忍び込む。

撫子　其方はあれへ。
侍ひ　ハツ。
ト元の切り戸へ入る。合ひ方になり、此うちお宮、金
八、悦ぶこなし。
みや　ほんに思ひがけないと云はうか、なんとお禮を申し
ませうやら、ナウ、こちの人。
金八　ソレ〳〵、あんまり思ひがけがないので、お禮を申
してよいやら惡いやら。
みや　何かは差措き、大枚のお金
金八　お取替へ下された今の御恩
みや　忘れは置きませぬ。
兩人　エヽ、有り難う存じまする。
トこの時、岡平、出かけ
岡平　撫子さま。
金八　其許は古朋輩
岡平　如何にも岡平サ。
撫子　金八が行跡は殘らず聞き屆けたであらう。
岡平　ハツ。
ト表の戸をばつたりとさし、腰に附けし捕繩をしごい
て

サア、金八、三寸縄に括し上げ、聚樂の御殿へ引渡す。胸廻せ。

ト立ちかゝる。お宮、これと留めるを、引き廻し、金八へかゝる。よろしく留めて

金八　待て岡平、仔細も語らず狼藉であらう。

みや　最前の疑ひも、今の懺悔で心は潔白。お前はなんにも聞かずかいなア。

岡平　盗賊騙りの惡名は遁れても、拔き差しならぬ科がある。

金八　ナニ、この金八に科があるとは

撫子　御主君義賢さまは、闇討ちに依つて不慮の御最期。家の重寶府君の尊像、又は湖月の一卷紛失、御本國は沒收となり、御閨御前さま義丸さま、お二方の首討つて、渡せよと武將の嚴命。岸田民部が讒言ゆゑとは云ひながら、さばかりの御怒り、たとへ寶は手に入るとも、敵が知れねば佐々木の家國、再興せん事思ひも寄らず。その頃栗本郡の百姓一揆、詮議の種と殘らず召捕りし所、身に覺えなき言譯立つて、百姓は皆歸りしが、人數に加はる金八一人、住家を立ち退き行くへとても知れざる由。以前は名古屋山三どの、家來なれば、若しや野心の萌しあつて、義賢さまを討ち取りしやも相知れずと、一家中の評議により、密かに樣子を探り見よと、夫藏人が指圖に依り、花形屋が亭座敷、障子一重を詮議の一條。

岡平　主君を殺めし科人に極まらば、繩を打つて相渡せ、それを功に寶の詮議、又ぞろや日延べ願ひを致しくれんと、聚樂の執權堀尾帶刀さまより、主人山三へ内意のお指圖。

撫子　町人どもに黄金を與へ、當座の難を救ひしも、科を一擧に定めんため。

岡平　言譯なくば主君の敵、繩打つて引渡す。

撫子　但し潔白の言譯あるか。

岡平　只一言が生死の境。

撫子　善か

岡平　惡か

撫子　金八

兩人　なんとぢや。

みや　こちの人、言譯がござんすかえ。

金八　撫子さま、岡平、この金八が言譯の一品、只今お目にかけませう。

ト行かうとする。撫子、岡平、キッと身構へる。

聊爾なされな、暫らく。

ト合ひ方。トゝなしあつて、佛檀の際へ行き、板敷を上げ、口明けの法螺貝を出し、持つて出て

即ちこれでござりまする。

撫子　この法螺貝を

岡平　申し譯の

兩人　種とは。

金八　女房ども、あらましは話しもしたれど、この法螺貝の事は俺が胸一つに包んで、今日までは云はなんだ。皆も聞いて下さりませ。その時の一揆は伯父御樣の惡巧み。元より正直一遍に百姓の固まつた、宥めてもすかしても、よう得心をすればこそ、目ざす恨みは殿樣と、竹槍やら鐵砲やら、上を下へともて返す、頭分は寺子屋の浪人者、駈引きの謀ちに法螺を吹いたら押し寄せい、狼煙を上げたら引くのぢやと、敎へたからの思ひ附き、森の中へ駈け込んで、引けと相圖の狼煙をば、上げると其まゝ猛勢が、一人も殘らず引いて取つた。ア、、嬉しやこれで殿樣にお怪我はない、首尾ようやつたと安堵して戻り道、悲しや殿樣は飛び道具に命中つて、これはマアなんたる事ぢや、殺したは何奴と、尋ねても知れゝばこそ、手懸りはあるまいかと、見廻すうちにこの法螺貝。持ち主は彼の寺子屋、扨てはと思ふその中へ、盛り返した百姓と、殿樣の御家來と、一つになつてもいやもや、もやつく中でも法螺貝を、これ大事と腰に引きつけ、マア、在所へと戻つて來れば、未進のたゝまり借錢の荷を負ふて、爰の住まひもなり難く、立ち退くうちにも母の大病、その日の事も氣にかゝれど、義理ある母の煩ひを、捨てゝも出られず暮れ行く月日も、二年越しの今日の今、殿樣の御最期を、思ひ出すさへ涙の種。樣子と云ふは右の通り、詮議の種はこの法螺貝。撫子さま、岡平、これでさつぱり疑ひは、晴れましたでござりませう。

みや　スリヤ、殿樣の敵と云ふは、その法螺貝を所持せし者。

撫子　寺子屋とあるその者の、實名は

岡平　其方とくと存じ居るか。

金八　固つたは十一ケ村、どれがどれやら覺えねど、大將分は隱れもなら、一癖あるその人品、竹原村で寺子屋を業とする、名は慥かに當作とやら云ひました。

撫子　ナニ、竹原村の寺小屋當作。アノ、當作。

トきつとこなしある。

みや　そいつゆゑにお國の騒動、切り刻んでも飽きたらぬ奴。敵をそれと聞き出した、こちの人は天晴れ手柄。

岡平　して、當作はいづくに居る。

金八　その夜の騒動。行く先の儀は

岡平　相知れぬか。

金八　雲の裏まで尋ね出して

岡平　イヤ、行く先の當てもなく、便々と尋ねるうち、日數立つては愈々募る、武將の怒り。

金八　證據の品は手に入つても

みや　當作が行くへ知れねば

岡平　無證據同然。あつて益なきその一品。

金八　ホイ。

ト當惑のこなし、思案する事あつて

女房ども、定めし母者人の御用があらう。わが身は奥へ行きや。

みや　それでもこの場の

金八　ハテサテ、行きやと云ふたら、マア、行たがよいわいの。

みや　アイ。

ト氣の濟まぬこなし。是非なく納戸へ入る。合ひ方替る。ト金八、繪姿を出し、首桶に貼り、上手に置く。

岡平　これは

金八　仔細あつて手に入つたこの繪姿。御國御前さま義丸さまのお目通りに於きまして、サア、この金八に縄を打たつしやりませ。

岡平　なんと。

金八　目當ての知れぬ法界の詮議より、この金八が義賢さまの殺し人になつて、お仕置に逢ふたならば、武將久吉さまへ一旦の申し譯。撫子さま、罪を引受け主殺しになつて、相果てるわたしが口惜しさ、御推量下さりませ。

岡平　ムウ、尤も。

サア、岡平、立ち寄つて縄を打て。

ト立ちかゝる。

撫子　岡平、待て。罪の疑はしきは輕く行ふの政道。自身の白狀、縄目までには及ぶまい。

岡平　スリヤ、此まゝに。

撫子　金八、この繪姿が求めたい。

ト繪姿を取る。

金八　スリヤ、その繪姿。

撫子　當座の價。

ト小幕の密書、封の切れしを抛る。金八、取り、讀めぬこなしにて、下に置く。此うち一間より、お宮、覗く。岡平、取つて讀む。

岡平　兼ねて密談の如く佐々木義賢を討ち取り、泰山府君の尊像手に入れ候ふは、江州竹原村寺子屋當作、元は和州筒井の浪人、嶋次郎左衞門悴左近と申す者。此方客分に召抱へ、近々久吉公へ目見得致させ候ふ手筈に御座候ふ。猶追ひ〳〵申し入れべく候ふ。佐々木彈正どのへ、岸田民部。

ト讀むうち、金八、こなし、一間よりお宮、聞いて、驚ろく。

金八　スリヤ、寺子屋當作と云ふは、和州の浪人嶋左近。

撫子　岸田民部が推擧に依つて、近々武將へ仕官とある。

岡平　主君の敵は聚樂御殿、扨てこそ。

ト向うを見て、キッとこなし。

金八　嶋次郎左衞門が悴左近。その左近と云ふは

ト一間を見る。お宮と顏見合はせ、障子ぴつたりさす。金八、こなしあつて

ハテ、味な血筋に絡んだわいやい。

ト思案する。

撫子　して、お姫樣はいづれに。

トお里、ずつと出て

さと　夫婦の介抱、禮は未來で云ひませう。さらぢや。

ト懐劍にて、死なうとする。

岡平　待つた。こりや何ゆゑ。

さと　久春さまへ言ひ號けの緣あれば、この世で添はれぬ歌之助、それぢやによつて

岡平　待つた。

撫子　蘆屋姫さまは先達て御最期、ハテ、北野の社で人手にかゝり、お果てなされし蘆屋姫さま、御朱印の在所を求め、久吉公へ差上げなば、御緣は切れて元の白地、腰元早枝と歌之助、夫婦の緣は似合ひ相應。

さと　スリヤ、腰元の早枝にして

岡平　御緣を結ぶは、撫子さまのお媒ち。

さと　エ、忝ない。

撫子　分けて難儀はこの繪姿。三井寺にましますと、久吉公の聞きに達し、今宵八聲の鷄を相圖に、御親子ともお首を討つて渡せよと、役目を蒙る岸田民部。

金八　スリヤ、お二方のお首を打てよと、久吉公の嚴命とな。

岡平　御親子とも恙なく、お助け申す工夫は金八、ソレ、
密書、御朱印の詮議とともに
撫子　一つに絡む役目は金八。
ト金八、こなしあつて
金八　お家の怨敵、お二方のお身の上、御朱印の詮議まで、
粉骨砕身仕り、功だに立てば
撫子　云ふ迄もない歸参の取次ぎ。
金八　偏へにお頼み申しまする。お姫様は岡平へ、相渡せ
ば夫婦も安堵。
岡平　お姫様、イザ、お越しあられませう。
ト此の時、空へ月出る。
西階　サア〳〵、子別れが聞きたい〳〵。
東階　法師さんが來てなら、長唄を聞かうかい。
東西　所望ぢや〳〵。
ト撫子、空を見て
撫子　二十三夜の最早月魄。まだ外に用事もあれば、今宵
一夜は花形屋に
岡平　拙者は旅宿へ
さと　とは云へ、ちよつと宮城野に
岡平　ハア。
ト留めながら、お里を連れ、表へ出る。
撫子　金八は大事の役目。
岡平　仕損じなきやう。
金八　追つつけ吉左右。
撫子　必らず共に
岡平　旅宿に於いて
兩人　待つてゐるぞや。
ト淨瑠璃。
〽あやぶ心に物置きの
ト撫子、岡平、顔見合はせ、こなしあつて、撫子は西
の切り戸へ、岡平はお里に附き、花道へ別れ入る。
〽簾を上げて忍ばるゝ、保名事なき風情にて
ト床の合ひ方。金八、こなしあつて
金八　當作が本名は嶋左近、その左近と云ふは女房どもが
實の兄。現在敵の妹とは、今の今まで知らぬが凡夫。
但し又女房どもは知つてゐながら、今まで俺に隱してゐ
たのか。何にもせよ、様子を……イヤ〳〵、差當つてお
二方の御難儀。検使の立たぬ其うちに、奪ひ出して立ち
退くに如くはない。さうぢや。マア、三井寺へ
ト駈け出さうとして、法螺貝と狀を取り上げ

この詮議も捨てゝは置かれず。何から片附けたがよからうぞ。

トうろ／＼する。と奥より

たね　金八はどこへ行た。どこにゐ居るぞいやい。

金八　アイ／＼、エヽ、時も時と母者人の御用、とつとモウ、氣がわく／＼となつて來た。

たね　金八はどこに居るぞ。來ぬかいやい。

金八　アイ／＼、モウ、そこへ行きやんす。どうしたものであらうぞ。

たね　さりとては來ぬかいやい。

金八　アイ／＼。

ト思案する。

たね　きり／＼うせぬかい。

金八　アイ／＼、行きますと云ふのに。

〽迷ふ心の奥の間に、忍びて事を窺ひける。

ト此うち、こなしあつて、法螺貝と狀を持ち、納戸へ入る。ト東の二階にて、唄。

〽世は定めなやうつゝなや、ア、移り變るや死出の旅。これ幽靈と二人連れ。〽二世とかねにし睦言を、仇にはなさじ二つ瀬川。

ト唄のうち、お宮出て、覺悟を極めし心、爰で死ぬるは惡いと云ふこなしをして、硯箱を取り思案をして、硯箱を捨て、奥の方を見やり、泣き入るこなし。それより氣を替へ、思ひ切りし體にて、行かうとする。小光、目を覺まして、取り附き

小光　母さん、どこへ行かしやんすぞいなア。

みや　オヽ、小光、目が覺めましたか。顏を見てはどうも

トこなしあり、下にゐて

コレ、小光、今わしが云ふ事を、よう覺えて金八どのへ云ふてたもや。わしが父樣と云ふは、もと近江の鄕侍ひ。この宮城野は十四の時から、お屋敷の御奉公。その後文の便りを聞けば、兄左近どのは大和の筒井順慶どのへ仕官あり、その筒井も沒落して、浪人の身の上と聞いたばかりで、音信も絕えたりしが、金八どのと云ひ交はし、そなたと云ふ娘を儲け

〽比翼の契り連理の枝、何不足なき我が戀路、とは思へども

お主をあやめし當作が、兄左近どのであつたとは、始めて聞いて驚くまいか、悲しうはあるまいか。敵に緣を引きたれば、添ひ果てる氣でもあるまいと、この身一つを

ト こなしあつて
思ひ廻せばこの小光。
〽母に縁なき不便さに、さりながら、親はなけれど子は
育つ。
大人しうなつて、手習ひ縫ひ物精出して、殿御を持つた
ら貞節の、操を守り父御へ孝行。この母が亡き跡の香花
を手向けるは、そなたより外にはない。とは云ふものゝ、
振り捨てゝ、これがなんの出て行かれう。
浄瑠璃 〽名殘り惜しやいとほしや、離れがたなやこち寄
れと、抱き上げ抱き附き抱き締めて、思はずわつと泣く
聲に
小光 母さん、そんならお前は
みや アゝコレ、案じる事ではない。三井寺まで用があつ
て、つい行つて來る程に、待つてゐや。こちの人は無筆
なれば
ト 衝立を見て、こなしあつて
さうぢや〳〵。
〽小唄交りのお念佛、好いた男や好いた妻、好かいで
これが死なれうか。アゝくだばかりくだかけの、泣け
ば浮世の夢さめて、西の國にぞ着きにけり。

ト 衝立へ菊を描く。唄一ぱいに納まる。
小光、父さんへお目にかけてたも。
小光 アイ、早う戻つて下さんせい。
ト お宮、泣かうとして、氣を替へ
みや 行て來るぞや。
浄瑠璃 〽尋ねて來ませ和泉なる、信田の森へ
ト 此うちいろ〳〵あり、向うへ走り入る。トうちより
金八 女房ども〳〵。
ト 呼び〳〵、一腰差し、出る、小光、うろ〳〵してゐ
る。
オゝ小光か。コリヤ、母はどこへ行た。
小光 アイ、三井寺まで行くと云ふて、いから泣いてゐや
しやんしたわいなア。
金八 三井寺へ行く。そして泣いてゐたとは。
小光 お前に見せいとてあの衝立。
金八 衝立がどうした。
ト 見て
こりや菊の墨書。
小光 それが形見ぢやといなア。
金八 ナニ、形見とは。

ト思案して

當作が本名は鳴左近、血筋の兄と樣子を菊のこの墨繪。夫婦の仲も木枯に、散り失せて身は殘菊の、捨てからを形見に見よとは、この金八が無筆ぢやに依つて、物によそへた繪文の書置き。死ぬる心であつたかいやい。

小光　ヤア、、母さんは何故死なしやんすぞいなア。

トうろ〳〵する。チャン〳〵と七つの鐘鳴る。

金八　ヤア、ありやもう七つ。夜が明けるとお二方のお身の上。こりや斯うしてはゐられぬ。

ト駈け出すを、小光、取り附いて

小光　コレ、母さんを尋ねて下されいなう。

金八　サア、それも氣がゝり、どちらの用も目當ては三井寺、さうぢや。

ト小光を連れ、行かうとする。納戸より門兵衞、出て、立ち塞がり

門兵　金八、待て。われをやつては、金儲けが後手になる。三井寺へは俺が行く。

ト駈け出す。よろしく留めて

金八　スリヤ、敵に馴れ合ふて

門兵　親子とも殺らすのぢや。

金八　さう聞いたら、ちよつともやらぬ。

門兵　ト出刃を取つてかゝる。金八、打ち落とし、立ち廻つて、脇坪を當てる。門兵衞、たぢ〳〵となつて、苦しむ。

金八　小光、來い。

ト駈け出す。障子をさつと明けて

たれ　金八待て。

金八　イヤ、ちよつと三井寺へ

たれ　おのれが用は調へて、親は捨て置くか。

金八　エ、。

たれ　罰當りめが。

トキッと云ふ。うろ〳〵して、戻り

金八　用がごんすか。

たれ　そこへ連れて出い。

金八　アイ〳〵。

ト蒲團の端を持ち、向うへ出して

これでようごんずか。

ト又行くを

たれ　コリヤ、待て。三井寺へ行くなら、俺を負ふて連れ

て行け。
金八　サア、マア、ちよつと。
たれ　待て、待ち居らぬか。
金八　エ、。
　トうろ〳〵する。
たれ　用がある。爰へ來い。
金八　サア
たれ　うせ居れと云ふのに
金八　アイ〳〵。
　ト是非なく傍へ行く。其まゝ首筋を持つて、引き附け
たれ　親の詞をもじからうとひろぐ、アノ爰な、どうばり者めが。
　ト平手にて、金八が顔を喰らはす。
金八　サア〳〵、用があるなら聞きます。なんなと聞きやんすわいなう。
　ト此うち門兵衛、脾腹を抱へ、氣の附くこなし
たれ　門兵衛、氣が附いたか。
門兵　伯母貴か。
たれ　この女郎めは死にゝうせた。
門兵　殺しては物がない俺が戀人。

　ト金八、起きるを、ぐつと引き附け
たれ　こいつは俺に任して置きや。ソレ。
　ト蒲團の間より一腰を出して、抛り出す。
門兵　合點ぢや。
　トぼつ込んで、行くを、金八、お種を振り切り
金八　さうはさゝぬ。
　ト引き戻す。
門兵　何を
　ト立ち廻りにて、駈け出す。門兵衛、留める。小光、門兵衛が足に取り附く。面倒なと蹴飛ばす。其まゝお種、小光を引き伏せ
ため　ばりめ、うぬもくたばれ。
　ト出刄を取り、咽喉笛へ突つ込む。ワツと云うて苦しむ。金八、恟りして
金八　ヤア、こりや小光を
たれ　殺したらどうする。
　トこの隙に
門兵　してやつた。
　ト向うへ走り入る。
金八　それやつては

ト追つかけんとする。

たれ　待て。

ト金八、戻つて

金八　母者人。

たれ　なんぢや。

金八　エ、、、、

ト突かゝりながら

なんにも云ひませぬ。小光、堪忍してくれ。

ト云ひ捨て、駈け出す。

たれ　コリヤ、待て。

ト取りつくを

金八　エ、放さんせ。

ト云ひながら、表へ出る。お種、足首に取り附きながら、門口まで附いて行き

たれ　コリヤ、待ち居らぬか。不孝者めが。

ト金八、いろ〳〵あつて

金八　エ、、とつとお免されませ。

トうちへ蹴込む。お種、おのれをと、出やうとする。金八、向うを見ながら、戸をばつたりとさす。お種が首、戸に詰つて苦しむ。金八、これを知らず

うぬ、門兵衛め。

ト一散に向うへ入る。早幕引く。

ト直ぐに音樂になり、道具、手番ひよきほどに、幕明く。

造り物、正面、幅二間の石段、西へ筋違ひにあり、眞中に足溜りありて、東天井まで、坂を高くする。上は霞にて見切る。石段の左右、山の景色、櫻の大木、所々にあり、すべて三井寺坂口の體、隨分花澤山に取り合はせよろしくあるべし。始終音樂。

ト向うよりお宮、走り出で、花道にて、躓くこなしあつて

みや　勸行の聞こゆるは、最早三井寺の坂口。死なうと覺悟は極めても、子に引かさるゝ後ろ髪、思へば名殘りが

ト見返り、こなしあつて

イヤ〳〵、未練を殘す場所ではない。勸行の音樂はこの身の佛果。堂といいお寺の土となるが、せめてこの世の罪障消滅。さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來て、小石を拾うて袂へ入れ、小池へ身を沈めんとする。この時向うより、門兵衛、走り出で、

お宮を留めて

門兵　ドッコイ〳〵、大事の戀人、死んでばし賜はるな。

みや　見遁して死なして下さんせいなア。

門兵　イヽヤ、殺さぬ。あんな泥棒に心底を立てゝ死なうよりは、コリヤ、牛を馬に乘りかへる氣はないかいやい。

ト抱き附く。

みや　穢らはしい、厭ぢや〳〵、厭ぢやわいなう。

門兵　所へ連れて行く抱いて寐る。うせう。

ト引つ立てる。お宮、引き退ける。この時門兵衞、朱印を落とす。お宮、目を附ける。ちやつと取つて、懐へ入れる。

みや　今のは慥かに

門兵　一千町の朱印ぢや。

みや　なんと。

門兵　これが欲しくば抱かれて寐い。まだ大分用もあれど、マア、ちよつと、手附けを渡して置かう。

ト又じなつく。よろしく摺り拔けて

みや　大悪人、いつそ。

ト門兵衞が刀を拔いて切つてかゝる。門兵衞、腕首を留めて

門兵　踏ん張りめ、ごりやモウ、甘茶では行かぬわいやい。

みや　御朱印の盗賊、生けては置かぬ。

門兵　なにを。

ト立ち廻り、門兵衞、拔刀を引き取つて、お宮へ切りつける。ウンとのる。始終音樂。かすめてあるべし。お宮、苦しみ

みや　死ぬる命は覺悟なれど、御朱印を取返さいで、口惜いわいなう。

門兵　云ふ樣になり居ると、こんな酷い目は見ぬわい。

トお宮、這ひ寄るを、拔き身を肩先へ突つ立てる。お宮、苦しむ。

この朱印はいつぞや北野で、ふりそめを殺らして俺が手に入れたのぢや。そのふりそはわい等が主ぢやげな。俺は敵ぢや。コリヤ、敵討ちをひろがぬかいやい。

みや　エヽヽヽ。

門兵　これから寺へ行て、御國御前義丸二枚ともばらして仕舞ふて、打ち留めが金八を往生安樂。うぬはそこで、狂ひ死にくたばれ。

再演の繪番附

ト引抜いて、蹴倒し、坂へ登らうとする。お宮、取り
附き
みや　お二方は殺さぬ。なんぼうでも、やらぬ〳〵。
門兵　なにを。
ト突飛ばし、坂を二三段上がる。續いて行き、留める
な
エヽ、面倒な。
ト蹴る。お宮。轉び落ちて、苦しむ。門兵衛、坂を登
り、入る。
みや　この様子をこちの人へ知らせたい。申し、御朱印の
ありかゞ知れましたわいなう。斯う云ふうちもお二方が
心元ない。この事知らすまで命が惜しい。死にともない。
死にともないわいなア。
ト苦しむ。ト坂の上にて、ばつたりと打つ音する。
お宮、ぎつくりする。ト坂の上より、外記之進、兜頭
巾にて、下りて來る。橋がゝりより侍ひ大勢出て
侍皆　外記之進さま。
外記　門兵衛が働きに依つて、義丸が首只今見届けた。殘
念なは御國御前、風を喰らふて行くへが知れぬ。
侍皆　然らば我々が

外記　イヤ、尋ねるに及ばぬ。案内を知つたる門兵衛が、
捜し出して討ち取る筈。八聲の鷄を合圖、主人民部、
檢使として、この所へ御入來あれば、途中へ出迎ひ、吉
左右をお知らせ申さう。皆の者、續け。
ト侍ひ皆々、橋がゝりへ入る。
みや　そんなら義丸さまのお首を打つたか。ハアヽ。
ト泣き、手疵に苦しむ事あつて、ばつたりこける。と
バタ〳〵にて、向うより金八、走り出る。跡より雲谷、
追はへ出て、花道にて
雲谷　コリヤ、待て。
ト武者振り附く。
金八　放せ〳〵。
雲谷　イヤ、放さぬ。門兵衛に頼まれて、行く先の邪魔を
するのぢや。待て。
金八　エヽ、面倒な。
ト揉み合ひながら、本舞臺へ來て、立ち廻り、お宮、
苦しむ聲を聞きつけ、月影にて、これを見て
ヤア、女房ども、コリヤ、手を負ふたか。
ト立ち廻つて、雲谷を當て殺し、側へ行つて引き起し
性根を附けい。コリヤ、女房ども、お宮やアい。

ト呼び生け、介抱する。

みや　金八どのか、遲かつた、遲かつたわいなア。

金八　遲かつたとは、何がどうした。

みや　コレ、早枝さまを殺めたも門兵衞が仕業、一千町の御朱印も、あいつが持つて居るわいなア。

金八　スリヤ、盜賊は門兵衞であつたか。

みや　わたしにも手を負はせ、お二方を殺すと云ふて、あの寺中へ行き、義丸さまのお首を討つたと今の噂。

金八　ヤア〳〵、スリヤ、遲かつたか、エヽ。

みや　されども御國御前さまは、お在所が知れぬさうな。八聲の鷄を合圖にして、岸田民部が檢使として來ますさうな。この事をお前に知らせたいばつかり、こちの人、小光が事を

金八　コリヤ、その小光もな

ト云ふうち、お宮、のる。金八、いろ〳〵あつて

ヤア、こりや息が絶えたか。可哀や。

ト泣き、氣を替へ

切り刻んでも飽き足らぬ、うぬ、門兵衞。

ト坂を見上げ、扨てこそと云ふこなしにて、これより身構へする事あつて、鯉口をしめし、木の根にどつかと腰かける。ト合ひ方。この中へ樂の音きつばりと打ち込む。ト坂の上より門兵衞、首桶を持ち、石段を半ば下りかゝり

門兵　先づ小ざへは片附けた。御國御前はいづくへふけつた。よもや高飛びはひろぐまい。夜通しに搜してくれう。

ト云ひながら、下へ下りて、行きかける。

金八　門兵衞、待て。

門兵　待てとは俺か、留めたはどいつぢや。

金八　イヤ、俺ぢや。金八ぢや。

門兵　オヽ、金八、わりや伯母貴を捨て置いたか。不孝な奴ぢやわい。

金八　早枝さまと云ひ義丸さま、女房が恨みまで、一つに晴らすうぬが絶命、マア、盜んだ御朱印からそこへ出せ。

門兵　スリヤ、朱印の事を

金八　殘らず聞いた。

門兵　こりや、うぬが命も、ねぐさつたわえ。

ト云ひながら、首桶を傍へに置く。

金八　マア、御朱印を

ト懐へかゝる。

門兵　なにを。

ト振り切り、立ち廻りのうち、金八、朱印を引き出す。門兵衛、取つて、櫻の木へ抛る。遙か木末に留まる。金八、南無三と行くを、門兵衛、引き戻し、立ち廻りあつて、兩人、左右へ別れ、尻をからげる。とタテの合ひ方になり、門兵衛、拔いて切つて行く。金八、拔き合はせ、切り結ぶ。兩人とも朱印を目がける心にて、坂へ登る。タテのうち、櫻の花すさまじく散る。絶頂にて、門兵衛、一かせ切られ、石段五つ六つトン〳〵と落ちる。金八、續いて切つて行く。門兵衛、及び腰に、金八が股へ斬り込む。金八も亦トン〳〵と五六段落ちる。門兵衛、續いて斬つて行く。すべてこの心のタテ段々あつて、兩人、斬り結びながら平舞臺へ下り、トゞ金八、たゝみかけて門兵衛を斬り倒し

金八　非道の報い、思ひ知つたか。

ト乘りかゝつて抉る。この時坂の上より、撫子、出かけ、橋がゝりより岡平、出る。

撫子　門兵衛は御朱印の盜賊、討ち止めしは天晴れ手柄。

金八　さうぢや。

ト切腹するを、岡平、留め

岡平　早まるな、金八、待て。

撫子　死ぬるに及ばぬ。義丸さまは御安泰。

岡平　御親子諸共奪ひ出し、唐崎までお供申した。

金八　して、門兵衛が討ち取りしは

ト側の首桶を取り、蓋を明け見て

ヤア、こりや娘小光の首。

撫子　非道の母が手にかけし死骸、若様の小袖を着せて、臥しどに置きしを誠の義丸さまと心得、門兵衛が討ち取りしは、却つて忠義のお身替りに

金八　娘、出かした、出かし居つたなア。

ト首を見て、泣く。お宮、息を返し

みや　そんなら小光は死にやつたかいなう。シタガ、娘は忠義の最期。惡縁にからまれて、わたしは犬死するのかいなう。

撫子　イヤ、犬死でない。御國御前のお身替りに

金八　スリヤ、宮城野を

岡平　兄に繋がる惡縁も、これでさつぱり消えるの道理。

みや　エヽ、嬉しうござんす。この世の安堵、サア、お身替りに

金八　ト覺悟のこなし。出かした女房。
撫子　金八は敵の詮議。その手疵では
金八　大事の役目、なにこれしきに。
ト手拭ひにて疵口を包む。
岡平　天晴れ。
ト鷄笛吹く。
撫子　最早曉。
岡平　シテ、御朱印は。
金八　即ちこれに。
ト櫻の梢へ小石を打つ。朱印、落ちる。撫子、取つて、
撫子　武將の御前へ。
ト金八へ渡す。雲谷、起きて
雲谷　その朱印を
トかゝるを、金八、引き廻す。
みや　こちの人、未來は必らず
金八　二世の約束。
ト雲谷を投げ起す。岡平、足下に踏へて
岡平　一世の親子。
ト切り首を見せる。金八、お宮、ちよつと愁ひ。ト橋
がゝりより
呼び　御檢使のお入り。
ト皆々こなし。雲谷、起き返つて、かゝる。
撫子　成佛得脫。
ト撫子はお宮を介錯、岡平は雲谷をポンと斬り倒す。
金八、心意氣。
早う。
金八　ハツ。
ト本釣り鐘ゴンと打ち込む。金八は向うへ、兩人こな
し、よろしく　幕

切　幕

島原揚屋の段
北山巖窟の段

役名――石塚玄蕃 實ハ鳥左近。佐々木義丸、撫子、千代野。同、梢。同、伏家。仲居、お崎。同、お梅。同、お鶴。同、お夏。同、お仙。同、お吟。林山城之助。仲居、お柳。同、お浪 實ハ蘆屋姫。岸田民部、料理人彈助 實ハ岡平。仲居、お春 實ハ

撫子。雲津新吾。奴、權內。同、角助。熊井門右衛門。唐崎修理。白川蔀。松井左近。伊吹藤治。薩摩軍治。唐崎主水。大谷式部。仲居お花 實ハ遠山。堀尾帶刀。生駒歌之助。お國御前。錦花皇女草履取り、袖助 實ハ四の宮小太郎。金魚屋金八。名古屋山三。物草太郎 實ハ備後將軍伯莫。

造り物、奥深に金襖、東西筋違ひに長暖簾、揚げ屋大座敷の體。幕のうちよりお春、お浪、お花、お柳、お吟、お鶴、お梅、お仙、お夏、右の人數、仲居の形。伏家、楷、蕙子。主税、主水、蔀、幇間の形、喜助、料理人の形、山城之助、軍治、修理、團右衛門大盡の形、其ほか子供、右の人數、鈴の入りし綾を持ち、枕合はせの心、新作の綾取り唄、鳴り物入りにて唄ふ。各々差し向ひ、一連づゝ綾を取り合ふ。この見得にて、幕明く。

ト 右の模樣いろ／＼あるべし。よき程に、向うより民部、衣裳、羽織。權內、角助、奴にて、附き出る。

權內　お旦那、面白さうな儀でござりまする。

民部　仲居どもを呼んで參れ。

角助　ネイ／＼。

ト本舞臺へ來て

コリヤ／＼、ちよつと來らう。

ト お春を花道へ引つ張つて來る。

はる　民部さまぢやござりませぬか。

民部　お春、なか／＼賑はしい事ぢやな。

はる　申し、帶刀さまが疾うからお越しなされて、今も今とてあなたのお噂。

民部　さうあらうとも。時にあれが島原で流行る、綾結びとやらぢやな。

はる　この里の太夫さん方の、あなたもあの中へ

民部　交つても苦しうないか。

奴兩　旦那、私しどもゝ

民部　やつて見い／＼。

はる　サア／＼、お越しなされませ。

ト この人數、綾合はせに交る。ト 向うより御國御前、田舍者の形。お崎、仲居にて、引つ張つて出る。

さき　サア／＼、ござんせ。見た所がお前は伊勢參りと見えるわいな。

御國　ハイ、北國者でござりますが、お伊勢さまの下向次

手ながらの京參り。
さき　この島原をそめかうと、上の町から仲の町、下の町で見附けたゆゑ、何かなしにこの座敷へ。
御國　厭ぢや〳〵と云ふものを、無理矢理にそやされて
さき　面白い綾結び、マア、座敷へござんせいなア。
御國　イエ〳〵、どうあつても去なして下さんせ。
ト逃げうとする。
さき　ハテマア、ござんせいなア。
ト喜助花道へ行き
喜助　女中さん、マア、縁のものぢや。お出で〳〵。
ト御國御前を無理に引つ張つて來て、座敷へ交ぜる。すべて敵役は、女形を相手にせうとする。これを厭がり、摺り拔ける。民部、不器用に綾を持つを、お春、さうぢやないと敎へるこなし。御國御前、うろ〳〵するを、喜助、無理に綾を持たせ、相手にする。この模樣いろ〳〵あるべし。トゞ山城之助、女形皆々が相手にせぬゆゑ、腹立て、綾を拍子木にして、手打ちの眞似する。
女皆　そりや、なんの眞似ぢやぞいなア。
ト唄、鳴り物、留まる。
山城　大阪の顏見世に、ソレ〳〵、チョンチョン、よいチョン〳〵、手打ちの眞似をするのぢや。
三人　これは當りました、ハ、、、、。
ト皆々笑ふ。
向う　お客人のお歸り。
ト云ふ。
三人　石塚氏のお入りとござる。
民部　仲居ども、お出迎ひ申せ。
仲皆　アイ〳〵。
トこの人數、花道へ行く。
部　これから奧でこの女中に馴染舞ひ。
ト御國御前を突き出す。逃げうとするを皆々取り廻し
喜助　拍子にかゝつてやつてくれう。
ト檀尻太鼓になり、喜助、主稅、主水、部、やつてくれ〳〵、おたちや〳〵と云うて、御國御前を引き包み、一件殘らず奧へ入る。ト三味線入り壬生の囃子になり、向うより、お鶴、お梅、手燭を持ち、石塚玄蕃、衣裳、羽織、長煙管を持ち、小姓、蒔繪の莨盆を持ち、袖助、繻子奴にて、櫻の枝を持ち、侍ひ大勢、茶、辨當、持ち、附き出る。

玄蕃　春の日永に嵐山の櫻狩り、なか〳〵一興であつた。
袖助　よいお慰みでござりましたなア。
ト玄蕃烟管を取り直す。小姓、煙草盆を差し出す。民部、山城之助、軍治、團右衛門、お柳、お夏、お仙、お崎、この人數、出て、
民部　客人には只今
皆々　お歸りでござるかな。
玄蕃　これは岸田氏、いづれも。
民部　先づ〳〵あれへ。
ト各々本舞臺へ來る。お崎、上の口へ毛氈を敷く。玄蕃、直る。皆々、並よく、供廻り、入る。
山城　今日は天氣も快晴。
軍治　御酒宴も嘸かし
修理　冴えましたでござりませう。
玄蕃　左樣でござる。何が彼の嵐山の宿坊へ、幕を打廻して、まばゆい程に咲いた櫻。折節風に散りかゝり、大井川の花筏も又一入、ナア、袖助。
袖助　御意でござりまする。主人帶刀さまの仰せに依り、今日のお供に廻り、この程の憂さを晴らしましてござりまする。

玄蕃　その一枝、これへ持て。
袖助　ハッ。
ト椽先の手桶へ入れ、目通りへ持ち行く。
りう　皆見やしやんせ。御室の花も及びないあの一枝。
つる　壬生寺の花とは違ふて
柳　山櫻は又格別ぢやわいなア。
さき　今日の花見にお供をせうと、樂しんでゐたものを
なつ　お供は皆殿達ばかり。
せん　聞こえぬなされ方、こればかりはキッと
女皆　お恨みに存じまする。
玄蕃　これは迷惑。イヤ、近々東山の花見か、或は又四條の芝居なと見物に參らうから、その節はわれ達も召し連れるであらう。
りう　左樣なら違ひなう。
女皆　お約束をいたしましたぞえ。
民部　元來某が推擧を以て、久吉公へお客分のお大名。
山城　文武兩道、和漢の才智に秀でし石塚氏。
軍治　さるに依つて、久吉公の用ひも重く
修理　昵近の諸侯方より、毎日々々馳走奔走。
團右　今宵は民部どの、帶刀どのゝもてなし。

民部　池中の龍も時至つて、上天の氣を發す。
山城　當時の英雄。
軍治　人中の龍と申すは
修理　石塚氏。
皆々　其許の事かと存じまする。
玄蕃　これは挨拶でござる。併し云はつしやればそんなものだ。劍術は元より射藝馬術、手跡算勘、何一つ知らぬと云ふ事のない、萬能に拔け切つた身共だから、久吉公が客分に抱へさつしやれた。そこで彼の昵近の大名方より、今日は手前へ、茶の會で御招待が申したいの、明日はかしこの大名より、御酒が差上げたうござるわのと、門前に市を立てまして、イヤモ、大名附き合ひに殆ど草臥れました、ハヽヽヽ。イヤ、各々方も、隨分と親しくさつし。やれ身が申す事を一つ聞かつしやれても、その身一生の德を得ると申すものぢや。岸田氏、なんと左樣ではござらぬか。
民部　なか〳〵御尤もに存ずる。ナニ、袖助、玄蕃どのお歸りの儀を、帶刀どのへ傳へてよからう。
袖助　畏まつてござりまする。
　ト入る

山城　座が滅入つて惡い。御酒を持て。
女形　アイ〳〵。
玄蕃　ア、イヤ〳〵、明日は岩淸水八幡宮へ、武將より御代參の役目、繁多にござるから宵のうちに、少しまどろんで置きませう。
民部　左樣ならば兎も角も、
山城　仲居ども、御案内。
女皆　サア、お座敷へ。
玄蕃　岩田氏、いづれも。
皆々　然らば御一緖に。
玄蕃　ドリヤ、とろ〳〵とやりかけうか。
　ト唄になり、玄蕃、皆々附き添ひ、奧へ入る。民部、殘る。權内、角助、出て
權内　お旦那、只今參つた
角助　伊勢參りの女は
民部　コリヤ
　ト兩人へ囁く。
兩人　心得ました。
　ト窺ひ入る。
民部　智勇勝れし石塚玄蕃、腹心の味方となせしは、大望

成就の心地。何かの手段は今宵の一擧。ムウよし〳〵。
ト序の舞ひになり、こなしあつて、行かうとする。お
浪、杯を持ち、出て、立ち塞がる。引き廻し行く。
トお花、杯を持ち出て、立ち塞がり、よろしく後へ
戻る。二人を見て、こなしあつて
民部　義賢が妹蘆屋姫、傾城遠山。
なみ　昔は昔
はな　今は廓で
兩人　仲居の奉公。
民部　ハテナア。
なみ　奥で縺れたこの杯、合ひを頼まうと思ふて
はな　お心には染むまいけれど、わたしもこの杯を
民部　奥座敷で縺れたを、わざ〳〵爰まで
なみ　アイ。
はな　マア、下に
兩人　ゐやしやんせいなア。
民部　何さま女の縺れる黑髮には、大象も繫ぐとやら。合
ひも押へも色ある杯、打ち置かずと賞翫いたさう。
なみ　下戸ならぬこそ殿御はよけれ。
はな　どこやらがキッとして

なみ　眞實のありさうな
はな　面白さうな
兩人　お大盡さま。
ト兩方よりもたれかゝるを、突き退けて
民部　ハ、、、、色で仕掛けて本心を探らうとは、古手
な仕掛け。その手ぢや行かぬ。
なみ　疑ひ深いお方ぢやわいな。
はな　心中さへ屆いたら
兩人　叶へる氣かえ。
民部　その時の仕儀にもよらう。
なみ　そんなら心中に、かう
ト懷劍にてかゝる。
はな　この場の誓ひ。
ト同じく突きかゝる。よろしく留めて
民部　及ばぬてんごう。まツかうせいと、帶刀が云ひ附け
たか。
ト引き廻す。
兩人　エ、。
民部　わいらが手に合ふ民部でない。
兩人　そなたを

ト突きかゝる。二人が白刃を落とし、お花を蹴据ゑ、お浪を切らうとする。喜助、つか／＼と出て、よろしく引き分け

喜助　ア、イヤ、旦那、女中を相手に近頃御短慮。

民部　下郎め、なぜ留める。

喜助　イヤ、留めは致さぬ。仲居衆の色事は早急過ぎて、濡れぬ先から早口舌。爰はこの喜助に任して、二人は奥へ

兩人　それでも。

喜助　ハテマア。

ト目まぜして

暫時引き陣。

なみ　色よい返事を

はな　喜助さま。

兩人　頼んだぞえ。

ト合ひ方になり、お浪、お花、奥へ入る。民部、こなしあつて

民部　扨てはうぬも、佐々木義賢に所縁の者ぢやな。

喜助　なんのお前、後の月から新米の料理人、名は喜助と申しまする。

民部　ム、よいワ。然らばこれで一献汲まう。その銚子を持て。

喜助　心得ました。

ト立たうとする。民部、そり打つ。喜助、ちやつと座つて

どうやら勝手が悪い。オ、お銚子なら、仲居衆を呼びませう。

ト手を叩かうとする。

民部　待て／＼、最早酒はよしに致さう。あの莨盆を取つて参れ。

喜助　ハイ。

ト氣を配りながら、民部が前を通り、上の方へ行きかける。又反り打つゆゑ、ちやつと留まる。

民部　早く持て。

喜助　心得ました。

ト氣を附けながら、程よく莨盆を取つて

さらばお莨盆。

民部　なか／＼氣の利いた奴ぢや。出かした、褒美くれう。

喜助　これは有難い。紙花よりは兎角當世、右から左

民部　金が欲しいか。
喜助　大好物でござりまする。
民部　望みとあらば、かう。
ト切りかゝる。よろしく留めて
喜助　イヤ、此お金は大禁物。
民部　なにを
ト立ち廻り、拔いて、切つて行く。喜助、莨盆にて留め
喜助　民部さま、コリヤ、なんとなされまする。
民部　下郎に似合はぬ、ハテ、よい心掛け。
ト立ち廻つて
喜助　四匁三分はり込んで置きました。
民部　所を又から。
ト切つて行く。立ち廻りにて、拔刀を叩き落とす。驚ろき、取らうとする。引き廻し、手早く取つて、民部へ差しつける。
待て〳〵。コリヤ、うぬ、某に手向ひひろぐか。
喜助　手向ひの段ぢやない。じたばたさつしやると肝先をぐつしやり
民部　ムウ。

喜助　トぎしむ。
と云ふもこつちの命が惜しさ。
ト拔刀を下に置いて
ハ、、、、料理人を相手にして、惡洒落な事なされますな。
ト民部、こなし拔刀を取つて、納め
民部　下郎と侮り只今の不覺。窮鼠却つて猫を食むと、當時四海の執權たる岸田民部、今の手向ひ、うい奴だ、出かす〳〵。
喜助　イヤモウ、何も知らねど、これがほんの闇の夜の礫打ち。
民部　正しく佐々木、イヤサ、些細な事はうつちやつて
喜助　玄蕃さまにもお待ち兼ね。
民部　堀尾氏にも對面いたさう。
喜助　左樣ならお座敷へ案内いたせ。
民部　かうござりませ。
喜助　ト唄になり、喜助、先に立ち、入る。民部、ちよつと思案して、氣を替へ、後より入る。うちにて
はる　サア〳〵、藝子さん達、彈いておくれえ。

幇三　伊勢音頭がよかろかい。
　トうちにて云ふ。いなば橋までを、摺り鉦三味線にて
　歌ふ。此うち御國御前、出て
御國　もう／＼免しておくれ。田舎者を嬲られうと思ふ
て、ほんに色里の衆は惡洒落なものではある。
　ト云ひながら、あたりを見て居る。トお春、主水、
　蔀、主税、窺ひ出る。鳴り物かすめて殘る。皆々、あ
　たりを見て
皆々　奥様。
　ト合ひ方になる。
御國　撫子、皆の衆始め我れ／＼が、かくまでに苦勞を
するも、敵を討つて家國安堵、義丸を世に立てたいばつ
かり。
はる　それに附け、この廓に居續けする、石塚玄蕃と云ふ
者、本名は嶋左近。先達て手に入りし密書に依つて、お
主の敵と事明白。
主水　殊には岸田民部、伯父御彈正どのと心を合はせ、逆
意のきざし。
主税　朝鮮の伯莫は、北山に於いて從黨を集め、聚樂御殿
の不意を窺ふ。

蔀　先づ差當る石塚玄蕃、花見より立歸り、奥にて熟
睡。
主税　玄蕃に近寄り
三人　篤と實否を
　ト行かうとする。
御國　待て方々、これぞと云ふ證據もなく、仕損じあつて
は萬事の妨げ。名古屋山三は伯莫を討手のため北山へ遣
はし、四の宮藏人は久吉さまへ跡目の願ひ。何かに附け
て不愍なは、自らと義丸が身替りとなつて相果てし、宮
城野小光親子の者。
はる　その宮城野は左近が妹。金八が身の潔白を立てさせ
んと、敵の詮議を云ひ附けしが、これも追つヽけこの廓
へ
主水　スリヤ、金八もこの所へ
御國　マア、それまでは廓の附き合ひ。
はる　お前たちは藝者さん。
主水　仲居のお春。
主税　田舎のお女中。
蔀　奥でわつさり吞みかけう。
　ト踊り三味線になり、御國御前、マア奥へと、額にて

する。主税、主水、部、奥へ入る。

はる　サア、お前も奥へ。

御國　案内を頼みます。

ト權内、角助、窺ひ出て

兩人　扨てこそ御國御前。

ト御國御前へかゝる。お春、支へる。兩人、拔いて、切つてかゝるを、立ち廻りにて、刃物を引き取り、御國御前は權内、お春は角助を、ポン〳〵と切り倒し

はる　これも敵の

御國　コレ、靜かに。

トお春、死骸の止め刺す。御國御前は立ち身にて、血を拭ふ。早き序の舞ひになる。この見得、チョン〳〵にて、道具廻る。

三間二重舞臺、塗り骨障子、西、中二階、橋がゝり落間、植ゑ込み、前一面の清水流の體、二重舞臺に民部、帶刀、式部、各々衣裳羽織にて、並ぶ。燭臺數多ともしあり、序の舞ひ、鎮めて打つ。

民部　堀尾帶刀どの、大谷式部どの。

帶刀　岸田氏には客人饗應のお役目。

式部　この式部も御馳走のため、やう〳〵只今

民部　お役目お互ひに

三人　御苦勞に存じまする。

ト臆病口より山城之助、橋がゝりより軍治、修理、團右衞門、出る。向うより侍ひ、走り出で

侍ひ　申し上げます。大津の里、金魚屋金八と申す者、帶刀さまへ何かお願ひとあつて、理不盡に通りまするが、いかゞ計らひませう。

帶刀　仔細ぞあらう。先づ召し出してよからう。

侍ひ　ハツ。

ト入る。

山城　素町人の分際で、願ひとは、心得ぬ。

軍治　披露に及ばぬ。

修理　追つ立てませうか。

式部　イヤ〳〵、一應聞き屆けし上の事。先づ〳〵控へ召され。

皆々　然らば兎も角も。

ト下にゐる。向うバタ〳〵にて、金八、麻の上下、法螺貝を腰に附け、股立ちの侍ひ四人、取り卷き、出る。

四人　動くな。
金八　堀尾帶刀さまへ訴訟あつて、推して推參。善惡も糺さず理不盡の狼藉。ハテ、粗忽千萬。
山城　訟訴とあらば地頭代官、それ〴〵の役目がある。諸侯列座の場席とも憚らず、直訴せんとは無禮であらう。
軍治　是非願ひとあらば訴人の大法
修理　繩打つて引据ゑい。
四人　腕廻せ。
帶刀　イヤ、繩目に及ばぬ。堀尾帶刀聞き屆けてくれう。
金八　スリヤ、あなたが帶刀さま。
帶刀　近う。
金八　ハツ。
トツカ〳〵と本舞臺へ來る。侍ひ、附いて來て
侍四　動くな。
ト十手振り上げる。金八、こなしめり、ハツと平伏する。
式部　聊爾いたすな。皆引け
侍四　ハツ。
式部　訴訟の趣き申し上げてよからう。
金八　拙者事　江州佐々木の家中、名古屋山三が家來、いさゝか落度あつて主人より不興を蒙り、或は土民、又は商人となりまして、その日を送る煙りにも、只忘れざるは古主の御恩。一つの功ともなるべき品、恐れ乍ら
ト白木の箱を、帶刀へ持ち行く。
御披露なし下されう。
帶刀　この一品を
ト箱を開き、出し、讀む。
民部　佐々木六角滅亡以來、家中下ざまに至るまで行くへを失ひ　正眞の天竺浪人、風來者の身を以て、訴訟とはなんの訴訟だ。
ト帶刀　讀み終り、箱より朱印を取り出だし
帶刀　こりや一千町の御朱印。
金八　篤とお改め下さりませう。
ト改め見
帶刀　武將の御判、確かに落手いたした。
民部　スリヤ、御朱印
トこなしあつて
ハテ、手に入れたぢやよなア。
帶刀　これを功に佐々木の家國、取り立てくれよと訴狀の表。

金八　推してのお願ひ　右の仕合はせでござりまする。
民部　そりや叶ふまい。よし日延べの義を御赦免あるにもせよ、家國を立つべき義賢が伜義丸、御國御前諸共三井寺に於いて、首を刎ね、かく云ふ民部、首實檢をいたしたれば、佐々木の血筋は絶えてあるぞよ。
山城　折角手に入れた御朱印も、なんの詮なき後の祭り。
軍治　闇討ちに遭ふて相果てゝ、主が主なれば家來までが、呆氣の寄合ひ。
修理　家國斷絶の今となつて、狼狽へ眼。
關右　跡目の願ひより合力の願ひが、身分相應。
山城　馬鹿な面ではござらぬか。
三人　左樣でござる。
皆々　ハヽヽヽ。
帶刀　傳へ聞く淨藏貴所は、修驗の法力を以て、死したる者を蘇生さする。金八、かの招魂の法は、其方よく存じてゐやうがな。
金八　なるほど、出家沙門の行力は存ぜずとも、一心忠義の念力を以て　御國御前、義丸さま、この世に迎ふる魂よばひ、再び蘇生ましまして、佐々木の家國、無事に納めてお目にかけう。

民部　フヽハヽヽヽ　淨藏は聞こゆる智識。うぬら如きが、いかやうにすればとて、死したる者が蘇生へる例しがあらうか　馬鹿な事を。
式部　敵の行くへ寶のありか、全うすき手段があるか。
金八　聚樂の館へ新參たる石塚玄蕃どの、數日この廓に御滯留と承る。お國の浮沈は玄蕃どのに直談いたし、落着をいたすでござらう。
帶刀　岸田民部の推擧を以て、お取立ての玄蕃どの、臥龍、孫呉が兵書に詳しく、君の用ひも大方ならず、當時お客分とあつて、出仕登城も氣まゝの仕官。
民部　殊には明日岩清水八幡宮へ、御代參の役目。シテ、石塚氏に對面いたさば
金八　持參いたしたこの一品、お目にかくるが詮議の糸口。
民部　默り居らう。玄蕃どのを詮議とは、場所を恐れぬ不敵の願ひ。是非對面が致したくば、その一品を吟味の上で、取次ぎを致しくれう。
金八　イヤ、大切の品、露顯にかくる目當ては一人。
民部　スリヤ、直談をいたした上で
金八　自然と解る善惡邪正。

民部　他見を憚るその一品。ハテナア。
　ト こなし。
山城　是非咎人のお目にかゝり
軍治　證據の品で
團右　敵の行くへ
修理　寶のありかも
金八　分け登る、麓の道は變るとも、同じ高嶺の月を見る
　かな。
山城　實正詮議を
金八　相糺してお目にかけう、
城皆　イヤ、心元ない。
民部　無禮の金八、うぬ、眞二つに
　ト 刀取り立ち上がる。帶刀、留めて
帶刀　民部どの、何ゆゑ。
民部　我が君よりお咎めを蒙る、佐々木の從類、金八とて
　も科人同然。
帶刀　たとへ罪科極まる科人にもせよ、死期に臨んで一つ
　の願ひは、叶へる掟。
民部　なんと。
帶刀　帶刀が釆配、批判がなくば控へてござれ。

民部　ムウ。
　ト こなしあつて
帶刀　遲いか早いか、どうで遁れぬ刀の錆。
　石塚氏を馳走の役目、金八、其方へ申し附けう。
金八　スリヤ、拙者に。承知仕つてござりまする。
　ト 小姓、出て
小姓　玄蕃さまには只今お目覺め、この席へお越しとの儀
　でござりまする。
　ト 金八、こなし。
民部　金八は次ぎへ參つて、役目の用意。
金八　ハツ。
帶刀　我れ〳〵は席を替へて、お取り持ちは矢張り女ど
　も。
民部　山海の珍物より、髮の梅花の馳走が第一。
式部　サア、いづれも。
山城　民部さま。
三人　帶刀さま。
帶民　イザ
侍皆　立ちませい。
民帶　御同道仕らう。

ト唄になり、皆々奥へ入る。金八、侍ひ附いて、橋がかりへ入る。三味線、下り葉になり、お鶴、褥を持ち出で、敷く。お梅、莨盆、お夏、最前の花桶、お仙、火鉢、皆々よき所へ直す。玄蕃、刀提げ、寝起きの體にて、お花、お浪、お柳、お吟、附き出る。玄蕃、褥へ座る。下舞臺西手にお浪、お柳、お鶴、お夏、東の方にお花、お吟、お梅、お仙、この列に並ぶ。

玄蕃　とろ／＼とまどろむ様に覺えたが、餘程寝入つたさうな。

りう　花見のお勞れで前後も知らず

浪皆　よう御寝なつたわいなア。

玄蕃　寝るばかりも草臥れるものぢや。ホヽ、こりや最前の一枝。目覺しに花見と出かけう。ドレ／＼。

ト横になる。

ぎん　おみ足をさすりませう。

ト側に行き、足をさする。

玄蕃　これは大儀ぢや。先刻より帯刀どのに逢はぬが、どれに居召さる。

はな　物堅い屋敷の挨拶は結句お氣が詰つて、御遊興の妨げにならうと、わざと座をおよけなされて

なみ　酒のお相手、何かの御用を承はる様にと、これも帯刀さまのお指圖。

そま　シタガ、今宵までお相手が定まらぬゆゑ

はな　お床のうちが淋しからうと

皆々　辛氣でなりませぬわいなア。

玄蕃　ハヽヽヽ、イヤ、是非今宵は相方を定むるであらう。イヤ、又から美なる女を數多集めて、コレ／＼、この如く柔らかな手で足をさすらせた所は、どうも云へたものではない。お吟よ、われも余程色附いて參つたぞよ。

ト足にててんごうする。

ぎん　ア、申し、惡い事なされますないなア。

玄蕃　ハヽヽヽヽ、イヤ、もうよい。休め／＼。

ト起き直り

ハア、、どうか醉ひ醒めで心惡い。迎ひ酒をいたさう。仲居ども、銚子杯を持て。

女皆　畏まりました。

ト立たうとする。ト内より

金八　イヤ、御酒宴の杯、用意仕る。

ト合ひ方になり、金八、右の法螺貝を持ち出で、目通

りに置き、よき所に座ろ。玄蕃、法螺を見て、恟り、
又金八を見て

玄蕃　われは
金八　寺子屋當作どの。
玄蕃　百姓金八。
金八　その頃は一揆の大將。
玄蕃　思ひがけない。
金八　水の流れと
玄蕃　人の行く末。
金八　變つた所で
玄蕃　不思議の出合ひ。
金八　當作どの。
玄蕃　金八。
兩人　ハテ、命あればぢやよなア。
玄蕃　シテ、これへは何用あつて
金八　その以前は名古屋山三が家來たるこの金八。不興を蒙り斯く流浪を仕る。これは格別、御主君義賢公を殺め、太山府君の尊像を奪ひ取つて立ち退く曲者、詮議の種はこの法螺貝。
玄蕃　なんと。
金八　その場所に落としありし、持ち主は當作どの、酒宴の座敷へ金八が、思ひ差しのお杯、お口に合はゞ押へて酌を仕らうかな。
玄蕃　ムウ。
　トこなしあつて
ハテ、持ち溜めのよい奴だな。スリヤ、何か。この法螺貝が落としあつたに依つて、義賢を殺し尊像を奪ひ取つたは、身共だと云ふのか。
金八　慥かな證據、遁れはあるまい。
玄蕃　イヤ、證據になるまい。
金八　なぜならぬ。
玄蕃　その夜の騒動、大勢の百姓が、竹槍、鎌、鐵砲の類ひなぞ、その場所に落とし置けば、義賢を殺したはこれが證據だなぞと、一々引ッ捕へて科人にするか。義賢を殺したる曲者は曲者、法螺貝は法螺貝。身共は知らぬ。存ぜぬ、覺えない。馬鹿盡すな。何を猪口才な。
金八　ハヽヽヽヽ、かほどの曲者、一應では白状もせまい。烏を鷺とあらがふても、遁れぬ罪は逆意の殘黨。
玄蕃　默れ金八。片田舎に住居して、手跡指南を渡世とする、寺子屋當作。

金八　當作は假の呼び名。大和の國筒井順慶、反逆あつて家國滅亡、その殘黨たる嶋治郎左衞門が忰、同苗左近。
玄蕃　スリヤ、身共を、島左近と
金八　詳しく記せし密書の文言。民部どのゝ自筆を以て、即ちこれに。
ト披げ、見せる。玄蕃、ぎつくりして
玄蕃　スリヤ、その密書を
金八　なんと相違はあるまいがな。
玄蕃　ムウ、ハテ、よく聞き合はせて參つたな。推量の通り和州筒井家の浪人、嶋左近とは身共が事サ。
金八　汝がためには骨肉同胞、現在敵の妹とも露知らず、夫婦となりしも宿世の因緣。
左近　スリヤ、妹と緣を組んだか。
金八　惡緣に繋がりし、血筋の緣は切つても切られず、その身を悔み夫への貞女の道を立て、遂に儚なく不愍の最期。
左近　ナニ、妹はくたばつたとな。ホイ、なむあみだ。
金八　元は近江の鄕士、順慶に仕へながら主家の滅亡を余所に見做し、辯舌巧みに岸田へ賴り、久吉公へ取り入つて、二君に仕ゆる不義不忠の犬侍ひ。愚盲短才の身を以て、四海の補佐たる久吉公の、お客分なんどゝは、正眞の山猿に冠、似合はぬ〳〵。
左近　一旦順慶と主從の約をなす。然れども彼れ愚將にして、國を保つべき器量に非ず。さるに依つて主從の因みを破り、久吉公の幕下に屬し、時節を待つて一國一城は愚か、日本半國手に入るゝは瞬く內。妹が緣もあれば、左近さまがお馬の口取りに召使ふてくれう。樂しみに待つて居らう。
金八　ハヽヽヽ、鳥類のうちに梟と云ふ奴、夜のうちは眼を光らせ、夜が明けたらば野も山も飛び廻り、諸鳥を引摑んで餌食にせんと、樣々の非道を巧み、夜が明けると忽ち眼眩んで、宵の思案はどこへやら、鷹に追はれてそこ爰と逃げひそむ。遂には鷹の餌食となつて、その身を果たす。これを梟の宵巧みと云ふ。口先の大言、イヤ、心元ない。
左近　井のうちの蛙大海を知らずと、その小さい根性で、左近が胸中はえゝ知るまい。一國一城は些細な事、いでと思はゞ六十余州、大千世界の日月でも、引摑んで見せうわサ。
金八　孫呉が秘術も、智仁勇の三つによる。三德兼備の器

量あらば、この場に於いて見聞いたさう。
左近　望みなら見せてくれう。ハテ、何をがな。
ト大小入りの合ひ方になり、左近、庭の植ゑ込みに目を附け、こなしあつて
松に塒の村雀。
ト拳を固め、遠當ての心にて、きめる。ト茂みより、小鳥ばつたりと落ちて、死ぬる。
金八　天晴れ智術。
左近　ざつと、かやうなものかい。
金八　名將勇士は科なきを罰せず。塒の鳥の命を絶つは、時に取つての無成敗。コリヤ、仁の道が缺けたかと思はるゝ。
左近　これへ持て。
小姓　ハツ。
ト落ちたる小鳥を取りて渡す。手のうちにて溫めるこなしあつて
左近　智術を持つて呼吸をとゞめ、たちどころに殺害なす。それ卽ち無慙の殺生。それも亦からすれば、仁の形。
ト拳を開く。本雀、立つ。
金八　智を以て殺し、仁を以てこれを助く。取りも直さず智仁の二つ、流石の手のうち。
左近　驚き入つたか。
金八　イヤ、かやうな事は辻放下の戲れ同然。子供たらしの業くれで、天地四海を計らんとは、蟷螂が斧。イヤ、それでは行くまい。
左近　こいつ延べ過ぎた野郞め。嶋左近が智仁の手のうち、非言ぶつ器量があらば、心掛けがなくては叶はぬ。陳の小口も通るべき術があるか。ちよつと試みに
ト火箸を手裏劍に打つ。よろしく留めて
金八　イヤ、料理のはねばし、下戸の口には、ちと合ひ難う存ずる。
女皆　その馳走の品を替へて
ト左近目がけ、懷劍構へろ。金八、左右を留めて
金八　コレ、女中の酌はまだ／＼早い。
女皆　でも。
金八　ハテ、とくと獻立て出來るまでは、後段のひらじひ、ひやし物の用意に及ばぬ。立ち騷がずとも、マア／＼、扣へさつしやれ。
ト皆々懷劍を隱し、じつと納まる。左近、じろ／＼見て

左近　ハア、扨ては蜆貝も身共を狙ふか。なかなかしほらしい奴等だ。ヤイ、とつぱなに居る仲居め、うぬは佐々木義賢が妹、蘆屋姫であらうがな。
なみ　エヽ。
左近　隠すな。よく存じて居る。この左近を兄義賢が敵なぞと、帯刀が数へて目通りへ出したか。女郎の分際で身に刃向はんなぞとは、太い奴の。
　ト　お浪、キッとなるを、金八、押へる。
残りの女郎どもゝ義賢が家來、加勢でもひろぐ心か。
　ト　皆々ぎせい。金八、宥めるこなし。
なんだ、何をびこつく。ヤイ、金八、わりや身共を主人の敵、寶の盗賊なぞと云つて打たうと思ふか。イヤサ、この蜆貝めらを加勢にして、嶋左近に手向ひを致さうと思ふか。よしにせい。いかぬ事だ。叶はぬ事だぞ。その叶はぬと云ふは、この法螺貝だ。詮議の種とわざ／＼持ち参つたれど、證據にならねばなんの益なく、これを彼の無駄骨と云ふ。元より身共が所持の法螺貝。今爰でこの法螺を吹きそらさば、すはお客分の玄蕃さまに大事ありと、岸田堀尾が警固の力者。ソリヤ、鐵砲よ鎗よ熊手よとひしめいて、慮外ひろぐうぬめらが生首は、片ッ端からころり／＼。なんと、よくした細工であらうがな。疑はしく思ふなら、法螺を吹いて力者を集め、息の根を留めてくれうか。
金八　サ、それは
左近　但し敵たふか。
金八　サア
左近　法螺を吹かうか。
兩人　サア／＼／＼
左近　面倒な。いつそ法螺を吹いて
　ト　法螺を吹かうとする。
金八　待つた。早まるまい。今こそ屈服。
左近　あやまつたか。
金八　雉子と鷹とは爭ふには及ばぬ道理。
女皆　それでは
金八　ハテ、手向ひすれば合圖の法螺貝。大勢の侍ひが、弓よ槍よとひしめいて、この場を去らず命の寂滅。これがほんの持つた刀で首切らるゝ譬への通り。叶はぬ事をぎしや張つて、あたら命を失ふは、一生の損。向後は所存を改め、御奉公が申したい。
左近　そりやなるまい。なぜと云へ。義賢を打ち放し、太

山府君の尊像を、盗み取つたは斯く云ふ左近だぞよ。なりやわれがためには、現在主君の敵たる身共に奉公するか。

金八　二君に仕へて一生を安んずる、其許様がよい手本でござる。

左近　こいつ少々は智惠があるな。よいワ、抱へてくれう。

金八　先づ以て忝ない。

左近　主從の杯くれう。近う參れ。

金八　ハッ。

左近　ハテ、苦しうない。これへ參れ。

金八　然らば御免下されう。

ト二重舞臺へ行く。

左近　許す／＼。イヤモウ、箸と主人は、隨分ともに太いがよいと、下世話の譬へ。わりや、なか／＼仕合はせな奴だわい。

金八　御意の通り、智術に於きましては古今獨歩。詮議の種と持つて參つた法螺貝を、却て相圖の手配りに用ゆるとは、即智と云はうか、御發明と申さうか、天晴れの聰明頓智、計略の程驚き入りましてござりまする。

トそやす樣に云ふ。左近、にた／＼笑ひ、笑壺のこなし。

左近　まだ／＼こんな事ぢやない。凡そ身共が智を以て計るならば、千石船を取り寄せて、釣り花生けにせうがや。大佛の釣り鐘を緣先の風鈴に吊らうがや。いでと思はゞ自由にする、智はこれ萬代の寶。大日本の寶と云ふは身共ぢや、鼻さまぢや、ハヽヽヽ。きようといものか。智惠文殊の再來と云ふは、身共が事だわい。

金八　なるほど智に於いては文殊菩薩もこれ程にはござるまい。併し智仁の二つは秀でても、勇なき時は、すは合戰に及ばん時、諸卒侮つて從はず、絶所の戰ひ、一騎打ちの人礫、目を覺まさす程の力量がなうては、智仁勇の名將とは云はれぬ。とてもの事に力量が承はりたう存じまする。

左近　我れ幼少の頃より角力を取らず、力持ち腕押しなどの戲れを致さねば、力のあるないを試して見た事がない。今爰で力量の程を試して見やうならば

ト法螺貝を摑み、微塵に碎いて

見たか。大概この位の物ぢや。これでも力量のうちであらうがな。

金八　天晴れ思慮と云ひ、業と云ひ、それでこそ三德兼備。
左近　主に致して不足はあるまい。
金八　イヤ、不足にござる。ずんど主人に致し難い。
左近　こいつ不呑込みな奴だわい。
　ト金八、松ケ枝へ目をやつて
金八　扨てこそ曲者。
　ト左近、驚ろき、松ケ枝へ目をやる。金八、櫻の枝を取つて、左近が首筋を打つ。これはと、刀に手をかける。枝にて肘を押へる。左近、身動きならぬゆゑ、いろ／＼もがく。
ハ、、、、、松ケ枝には物もなく、虚空に驚くうろたへ眼。思慮もなく勇もなく、ほうから侍ひとは汝が事。
左近　何がなんと。
金八　僕かこれしきに一心動ずる愚盲短才、殊にはこの金八が本心、一應も再應も、とくと試した其うへで、明かすべき一大事。主君を殺め、尊像を盜みしまで、我れを忘れて口走る、コレ、智なきの一つ。愚將なりとも筒井順慶、一旦主人と頼みながら、これを捨つるは仁に背く。表裏を以て三德兼備の侍ひと、褒めそやす口先に乘せられて、まさかの時に味方を集めんと、手筈を定むる法螺貝を、力に誇つて摑み碎く。今にもあれ、狼藉をなす者あらば、何を以て人數を集むる。相圖の法螺貝は碎けて散つたぞよ。
　ト左近、法螺貝を見て、ぎつくりする。
殊に打ちかけしこの一枝が眞劍ならば、汝が首は今の時、落ちてあるぞよ。
　ト左近、首を引つ込める。
サア、かく手向ひをする金八、力者を集めて繩を打たぬか。
左近　オヽ、望みなら、この
　ト法螺貝を取らうとして、もがく。
金八　サア、吹かぬか。弓鐵砲で取り卷かさぬか。智もなく勇もなく、愚痴文盲の腰拔け侍ひ、知行盜人、國賊ではあるまいか。
左近　ムウ、サヽ、その儀は
金八　法螺貝を吹かぬか。
左近　サア、それは
金八　力者を集めぬか。
左近　サア

金八　縄を打たぬか。
兩人　サア〳〵〳〵。
左近　寶の盗賊、主君の鬱憤、一分試しに切り刻む。覺悟
してそれへ直れ。
ト突き放す。左近、身をもがいて、無念がり
左近　出るまゝの過言、うぬ。
ト法螺貝を取らうとして、げんなりとなり、いろ〳〵
あつて
絶體絶命だ。うぬ。
ト反り打つて行く。この時、帶刀、出て押し隔て
帶刀　イヤ〳〵、玄蕃どの、暫らく。
金八　帶刀さま。
ト下舞臺へ下りろ。
左近　無禮なる野郎めを打ち放すを、なぜ止めさつしや
る。
帶刀　申さば下郎、其許は御大身、殊には御代參のお役目
と申し、かた〳〵以て血をあやさるゝは、神への恐れ。
左近　誠にさうぢや。
帶刀　先づ〳〵お鎭まりあられませう。
ト合ひ方、左近、こなしあつて、座る。

金八　帶刀さま、逆意の族お庇ひあるは、御所存ばしあつ
ての事かな。
帶刀　逆意の族とは
金八　慥かな證據、これを御覽下さりませう。
ト最前の密書を持ち行く。帶刀、見て
帶刀　佐々木彈正へ送りし密書。岸田の手跡に相違なけれ
ば慥かな證據。
金八　曇りなき四海の政道。御裁許はいかゞでござるな。
帶刀　俗性は何者にもあれ、一旦お取立てありし武將久吉
公の嚴命、反古にはならぬ。
金八　スリヤ、左近に敵たへば
帶刀　久吉公に刃向ふ同然。忠義は却つて不忠になると心
が附かぬか。イヤ、うろたへ者。
金八　ムウ。
トこなし。
はな　目前敵に出合ひながら
なみ　本意も空しく
女皆　思ひ廻せば
浪皆　エヽ、。
左近　ヤイ、野郎め、敵を討たぬか。寶の盗賊だが、縄打

つて詮議せぬか。叶はぬか。及ばぬか。イヤ、滅多には及ぶまい。帶刀どの、そな女郎は義賢が妹、蘆屋姫だぞや。其ほか佐々木家に所縁ある女郎、馳走役に出さつしやれたは、貴殿とてもきやつ等が肩を持つて、身に刃向はうと召さるゝのか。

帶刀　ハヽヽヽ、これは迷惑。御馳走役がお氣に召されずば、殘らず遠ざけませうか。

左近　イヤ、それにも及びませぬ。併しその野郎めは目前に置かつしやれな。早々ぼつ立てさつしやれ。

帶刀　兎も角も仕りませう。

左近　ヤイ〱、女郎ども、その面はなんだ。ぴこ〱ひろがずと、大切なお客様だ。御酒宴の座に連なり、取り持ちをひろぎ居らう。金八、うぬ、命冥加な野郎だわい。明朝御代參の役目を請けずば、腦天から補据ゑまで、ばらりずんと切り下げてくれうものを、帶刀どの、なんと仕合はせな野郎めではござらぬか。

帶刀　かけ替へのない命一つ拾ふたと申すもの、仕合はせな奴でござる。

左近　左様でござる。なんと血をあやさぬ様に、ひねり殺してはいかゞござらう。

帶刀　それとても無益の殺生。然らばうッちやつて置きませう。

左近　そこもござる。

金八　一旦武將のお心に叶ふとも、曇りなき四海の名君、帶刀さまの推擧を以て、何卒左近を佐々木一家の者へ下し置かれ、主君の敵、寶の詮議。

帶刀　必らず仕負せ、名古屋山三へ勘當の詫びの功にするか。

金八　先非を悔む忠義の潔白。

帶刀　その本心は曇らずとも、連添ひし宮城野は、左近どのゝ妹。柵む縁は切つても切れまい。

金八　スリヤ、女房が縁に依つて

帶刀　功は立てゝも功になるまい。

金八　ホイ。

ト當惑のこなし。左近、櫻の枝を取つて

左近　帶刀どの、これを見さつしやれ。盛りの花も風と云ふ大敵あつて、遂にはばらばらと散つて仕舞ふ。人に譬へて見やうならば、義賢はこの櫻木、その櫻を咲き散らした、風と云ふは身共だ。ハヽヽヽ、強い奴の。枯木となつたその果ては、柴薪となつて朽ち果てる佐々木一家。なんと脆いものではござらぬか。

ト枝を抛る。帶刀、取つて

帶刀　花は散つて根に歸る。根に歸る花、ムウ

トちよつと思案して

金八、これをくれう。

ト金八へやる。

金八　この一枝を

帶刀　櫻町の中納言、この花久しかれと、泰山府君を祈らせ給ふ。取りも直さず佐々木の重寶。花は散つても根に歸る。ナ、根に歸るべきその一枝。

金八　紛失いたせし主君の尊像。

帶刀　目當ては岸田、イヤサ、謎の心を、民部どのに

金八　スリヤ、岸田民部に、ムウ。

トこなし

左近　離れ座敷で夜と共に呑み明かさう。女郎ども、奥へ參れ。

ト女形皆々、氣色する。

帶刀　コリヤ〳〵、大事の客人、粗略なき樣に、ナ、お取り持ちを致してよからう。

女皆　畏まりましてござりまする。

金八　とは云へ左近

トおこづくを

帶刀　コリヤ。

ト押へる。

左近　びくしやくひろぐと打ち放すぞ。

金八　民部どの、底意を探り、謎が解けなば

帶刀　功にもならう。

浪皆　花は散るとも

花皆　又來る春の

左近　イヤ、薪となれば一生埋れ木。

金八　篤と試して、有無のお返事。

帶刀　相待ち居るぞよ。

金八　ハッ。

女皆　サア、お客人樣。

左近　帶刀どの。

帶刀　イザ、奥座敷へ

左近　案内さつしやれ。

ト唄になり、左近、こなし。女形、おこづくを、帶刀顏にて押へる。帶刀に附き添ひ、この人數各々奥へ入る。金八、殘る。あと合ひ方。

金八　御代參の役目と云ひ、敵を討てば武將のお怒り。家

國ともに埋れ木となつて相果てられた目前主君の敵、討てば不忠、討たねば不忠。四鳥に搦みしこの場のせつぱ。帶刀さまより下されしこの一枝、岸田民部に判斷を頼めよとは、府君の尊像、若しや彼れが所持する事もあらんかと、花によそへし今のお詞。さは云へ迂濶に詮議もならず、思ひ廻せば身のなる果て。

ト櫻の枝をじつと見て

散ればこそ、いとゞ櫻は目出度けれ、何か浮世に久しかるべき。

ト思案する。人音するゆゑ、柴垣へ隱れる。序の舞ひになる。民部、山城之助、出て

山城　民部さま。

民部　山城どの、延び〳〵ならぬ兼ねての密計。

山城　田舍者となつて入込みし女、疑ひもなき御國御前、存命へて居るも不審の一つ。

民部　察する所身替りを以て、欺きしかと相見ゆる。たとへいかやうに致すとも、大山府君の尊像、きやつ等が手に渡らねば、自然と自滅は見え透いてある。

山城　シテ、府君の尊像は。

民部　左近より受取つて即ちこれに。兼ねて合體したる與國の伯莫、謗を固むる異國の割符、持參の役目、其許を頼み申す。

山城　スリヤ、北山の隱れ家。

民部　大事の役目、ぬかりなきやう。

ト尊像を渡す。

山城　心得ました。

民部　早く。

ト山城行かうとする。金八、すつと出て、尊像を引取り、山城之助を取つて投げる。

うぬは金八。

金八　この尊像を手に入れんがため、種々に心を砕いたわいやい。サア、民部、繩打つて久吉公へ相渡す。腕廻せ。

民部　小癪な下郎め、山城之助どの、息の根を留めさつしやれ。

山城　合點ぢや。先づこの

ト尊像を取りにかゝる。立廻り。所へ修理、出て、支へる。民部も切つて行く。立てあつて、山城之助、奥へ逃げ込む、修理、支へるうちに、民部、空井戸へ飛び込む。金八、修理を投げて

金八　南無三、うぬ。

ト追ひかけんとする。この時、中二階の障子明けて

帯刀　金八、待て。

ト合ひ方。

金八　帯刀さま。府君の尊像、イザ、お改め下されう。

ト渡す。改め見て

帯刀　黄金を以て鑄つけたれど、その體拙く、こりやこれ贋物。

金八　ナニ、贋物とは

帯刀　扨ては邪智深き島左近、僞物を以て岸田民部を欺きしよな。

金八　スリヤ、誠の尊像は、矢張り左近。ソレ。

ト奥を目がけ、行かうとする。

帯刀　待て。左近を荒だて、若しや尊像を破却いたさば、心盡しも水の泡。其方ばかりか主家の滅亡。

金八　主君の敵、寶の盗賊、目前に置きながら

帯刀　敵對ならぬ四海の客人。殊には敵に因みあれば、忠義を立てる時節はあるまい。

金八　御尤も。

ト修理、起きて

修理　うぬ。

ト切つて行く。立廻つて

金八　花の判斷、一つの功も立たざれば、この身は落花、冥途の道連れ。

修理　なにを。

ト立ち廻りあつて、修理を切り倒し、乘りかゝつて、止めを刺す。トこの血汐、やり水へしたふ。少しドロドロはげしく、合ひ方になり、水氣を吹く。蛙すさまじく啼き出す。兩人、きつと見て

帯刀　したゝる血汐、水面に注ぐと等しく

金八　水氣を誘ひ、蛙の聲もかまびすしく

帯刀　この水府を守護なすは

金八　凶事か吉事か。

兩人　ハテ、心得ぬ。

トばた／＼にて、見附けの障子引拔く。御國御前、襷、鉢卷きにて、左近と立廻りの見得にて、二重の正面へ出て、左近、蹴やる。御國御前、反り打つて、左近は立ち身、兩人、きつと見得。

左近　扨ては義賢が妻、御國御前であつたよな。

御國　殿樣の仇、討たう／＼と附け狙ひしこの年月、遁れはあるまい島左近、サア、尋常に勝負／＼。

左近　何を小癪な。

帯刀　義賢が父義鄕、觀世音の示現に依つて、庭前の櫻の枝に止まりし黄金の尊像。

金八　子孫に傳へて軍神の守りとなし、櫻木に舍らせ給ふ緣を以て、大山府君とこれを名附く。

御國　御本城を觀音寺と名附けしもかゝる因緣。

左近　武將の守り、何卒手に入れんと思ふがゆゑ、百姓一揆に紛れ込んで、義賢を打ち放し、まんまと手に入る府君の尊像。

帯刀　金生水に不淨を洗ひ

金八　蛙集つて守護なすは

御國　疑ひもなき寶の奇瑞。

左近　女郎め、くたばれ。

　ト切つて行く、立廻り。

帯刀　金八、早く。

金八　ハツ。

　ト石を取り除けて、尊像を取り出し

　扨てこそ尊像。

左近　南無三。

　ト云ひながら、御國御前を引附ける。帯刀、左近を支へろ。式部、出て、御國御前を下舞臺へ落とし、兩人、左近を圍ひながら

兩人　方々參れ。

　ト喜助、義丸を抱き、お春、お浪、お花、お柳、お吟お鶴、お梅、お仙、お夏、皆々脱ぎかけ、襷、鉢巻き、主税、主水、蔀、この人數、出て

皆々　動くな。

　ト左近を圍ふ。

金八　府君の尊像、イザ。

　ト御國御前へ渡し、切腹せうとする。

御國　ヤレ、待て。死ぬるに及ばぬ。宮城野が忠義の最期に、敵の緣を斷ち切る上、尊像を奪ひ返せし功に愛で、山三に代りもとの如く、主從三世。

金八　スリヤ、勘當御赦免、エヽ、忝い。

帯刀　北山に屯する名古屋山三に、この場の樣子告げ知らせよ。

金八　然らば直さま。

喜助　金八、早く。

金八　心得ました。

帯刀　行け〳〵

金八　ハッ。
　ト向ふへ走り入る。
喜助　サア、左近、尋常に
皆々　勝負々々。
左近　慮外な奴め。コレサ、帶刀どの、式部どの、きやつめらは格別、御兩人ともどうでござる。貴人の前とも憚らず、ぞんざいながらくためら、家來に云ひつけ片ッ端から、ぼつ立てさつしやれ。
帶刀　イヤ、佐々木一家の者共へ、この帶刀助力いたして、義賢が敵を討たすのサ。
左近　何がなんと。
御國　殿樣の敵。
はる　寶の盜賊。
喜助　遁れはあるまい。
皆々　覺悟々々。
右近　默り居らう。以前は以前、當時久吉どのゝお客大名、岩淸水八幡宮へ御代參の役目を蒙る石塚玄蕃。假初ならぬ久吉どのゝ名代、ちよつとでも指すがいなや、うぬら一々身の上であらうぞよ。
式部　愚か〳〵。汝が積惡露顯の上、役目を取り上げ御代參は、かく云ふ大谷式部へ仰せ附けられた。
左近　ヤア〳〵、スリヤ、代參の役目を替へたか。
式部　おんでもない事。
左近　ハテ、惡い工面ぢやなア。
御國　遁れはあるまい、尋常に
皆々　勝負々々。
左近　待て。聊爾ひろぐな。待ち居らうぞ。たとへ代參は替るとも、孔明孫吳が、兵書を空んじ、文武兩道劍術、射術、萬能とも拔け切つた身共。さればこそ久吉どの、見出しに預かり、聚樂御殿のお客大名。その身共に凶事があると、天下の寶を失ふと云ふもの、この日本は暗闇になるぞよ。なんとうぬら、手向ひはなるまいがな。
帶刀　我が君は智仁の名將、非道と知つてお抱へあらんや。最前岡平を以て、評定所へ相達し、刑罪は勝手次第と、五奉行所の評議一決。
岡平　うぬが命は、佐々木一家へ預つて置いた。
左近　仕舞うた。これも脈が上つたか。
主税　最早遁れぬ。
皆々　觀念々々。
左近　待て〳〵。待ち居らうぞ、よいワ、その儀ならば尋

常の勝負致してくれう。併し爰は遊所だから、場所が悪い。近々敵討ちの場所を定めて、尋常の勝負いたしてくれう。

帶刀　イヽヤ、田口の四門を、第八丁の行馬に准へ

式部　限りの太鼓は勝負の刻限。

帶刀　某は檢死の役目。

左近　ハテ、手番ひよう拵へたなア。

はる　最早遁れぬ。

皆々　勝負々々。

左近　待て/\。待ち居らうぞ。もう百年目だ、勝負は致してくれうが、かやうの拮抗加勢すべき岸田民部はどれに居召さる。民部どの/\。

帶刀　岸田とても悪事露顯の上、組子の者に聞はせ置いた。

左近　ヤア/\、然らば加勢する者は一人もないか。

式部　この期に及び未練千萬。

帶刀　尋常に勝負いたすか。

左近　サア、これは

帶刀　召捕つて縛り首にかけうか。

左近　サア、それは

皆々　サア/\/\、なんとおや。

左近　よくやり居つたな、今と云ふ今、島左近が絶體絶命。ならうものなら討ち留めて見居らう。

御國　我が君の敵。

蘆屋　兄上の仇。

岡平　主人の恨み。

撫子　島左近。

皆々　覺悟せい。

左近　うぬら一々返り討ちだぞ。

ト拔きかけして、構へる。

皆々　サア/\/\。

ト立ての合ひ方になり、左近、女形を相手に切り結ぶ。立役皆々は警護する。御國御前、蘆屋姫、危ふくなる。ト岡平、加勢する。トゞ皆々立ちかゝり、切り倒して

御國　年來の仇。

皆々　思ひ知つたか。

ト岡平は義丸に刀を持ち添へ、一時に止め刺す。

帶式　ホヽ、天晴れ、出來た/\。

帶刀　跡目の願ひ、義丸を誘ひ、武將の御前へ

式部　某が誘引いたさう。
御國　おさらば。
帶刀　早う〳〵。
岡平　イザ、お越しあられませう。
　ト式部に引添ふて、敵討ちの人數皆々、橋がゝり入る。早太鼓になり、山城之助、伺ひ出て
山城　帶刀、うぬ。
　ト切つて行く。立廻りあつて
帶刀　其方とても逆意の類族。
山城　こまごと云はずとくたばれ。
　ト立廻り、ばた〳〵にて、袖助、凛々しき形にて、出て
袖助　帶刀さま。
　ト帶刀、山城之助をポンと當て
帶刀　藏人が弟小太郎。
小太　ハッ、御意に隨ひ組子を以て、四つ塚に埋伏の者共、殘らず討ち留めてござりまする。
帶刀　手柄々々。直さま藏人が陣へ加はつてよからう。
小太　心得ました。
帶刀　早う〳〵。

小太　ハッ。
　ト向うへ走り入る。山城之助、起きて、かゝり、立廻り。ばた〳〵にて、組子、走り出て
組子　岸田民部、大宮の鹿野に於いて手いたく働き、なかなか手に余つて見えまする。
帶刀　多勢を以て召捕れ。早く〳〵。
組子　畏まつてござりまする。
　ト引返す、帶刀、立廻つて
帶刀　捕つた。
　ト山城之助を押へる。チョン〳〵、返し。
　淺黄幕、一面の松原になり、早太鼓きびしく鳴る。
　ト橋がゝりより民部、大童、組子二人と斬り結び、出て、ポン〳〵と切り倒す。ト東西より大勢組子出て
大勢　動くな。
民部　岸田民部が死物狂ひ、一々に斬り捨てだぞ。
　ト大タテさま〴〵あり、トゞ皆々、逃げ込む。東西の松蔭より、主税、蔀、出て
兩人　反逆人、胸廻せ。
民部　何を小癪な。

兩人　捕つた。

ト捕り方のタテ段々あり、よき程に、軍治、團右衛門、出て、二人を支へて

軍團　委構はずと、北山へ

民部　さうだ。

ト行かうとする。組子、引返し、かゝる。民部、切りまくる。各々入り亂れ、組子向ふへ逃げるを、民部、追はへ入る。主税、蔀、二人を切り倒し

主税　目當ては北山。

蔀　東西の道を別れて

主税　行きやれ。

蔀　合點ぢや。

ト蔀は向ふへ、主税は橋がゝりへ、別れ入る。返し。

松原引分け、淺黄幕切り落とす。一面北北の景色、臆病口に洞口あり、柳の古木吊り枝、山彥の音、コイヤイ打つ。

ト橋がゝりより、忍び一、二、三、錦花皇女を、一、二、引立て、三、龕燈提灯持ち、出る。

皇女　どうぞ情に見遁してたもいなう。

忍三　ならぬ〳〵。伯莫公の隱れ家を拔け出でし皇女様。

忍一　我れ〳〵がお跡を慕ひ

忍二　連れ歸つたのサ。

皇女　イヤ、歌之助に逢はぬうちは、なんぼうでも去なぬ去なぬ。

三人　こまごと云はずと、ござれ〳〵。

ト無理に引立て、洞の口へ入る。本釣り鐘、凄き合ひ方になる。ト向ふより歌之助、着流し、大小、左に鷹の下皮、房ばかりをかけ、石にて火繩を振り、出る。

歌之　市原野の小鳥狩り、道に迷ふて思はずも深更に及ぶ。

ト火繩を振り、本舞臺へ來て

この所は僧正が谷の巖窟、山三どのより仰せありし、若しや敵の

トこなしあつて、又火繩振る。

山路に殘る大勢の足跡、ハテ、訝しい。

ト思案する所へ、皇女、走り出て、行き當り

皇女　アレエ。

ト逃げ退き、震ふ。歌之助、火繩を振り、顏見合はせ

る。

歌之　ヤア、そなたは歌之助。

皇女　懐しかつたわいなう。

ト縋り附く。

歌之　コリヤ、この所は伯莫が隠れ家。

ト洞口を見込み、こなしある。

皇女　日外小蝶が住居にて別れしより、晝はひねもす、夜もすがら、逢ひたい懐しいと思ひ寐の夢のうち、傾城の姿となり、比翼の閨のさゝめ言、それも仇夢、さめては元のこの姿、あるにもあられず隠れ家を脱け出でたれば追手かゝつて今の難儀。歌之助、どうぞ自らを連れて退いて、夫婦になつてたもいなう。

歌之　品に寄り、夫婦の縁は結びもせうが、功がなうては相叶はぬ。何は格別、先づ伯莫を

ト行かうとする。よろしく留めて

皇女　コレ、待つてたも、功を立てう。

歌之　功を立てうとは、

皇女　サア。その功と云ふは、これぢやわいなう。

ト一巻を出し、渡す。開き、見て

歌之　こりやコレ、疑ひもなき湖月の一巻。

皇女　取返したを手柄にして、夫婦になつてたもいなう。

歌之　おでかしなされた。盡未來まで連添ひませう。

皇女　エ、忝い。

ト忍び三人、出て

三人　さうはさゝぬ。

ト忍び三は一巻へかゝる。両人は皇女を引立てる。所へ主水、出て、両人を支へる。小太郎、乗り物を吊らせ、引添ひ出る。

小太　歌之助どの。

歌之　今ぞ手に入る湖月の一巻。

皇女　早う連れて退いてたもらぬかいなう。

歌之　承知いたしました。

小太　用意のお乗物、イザ、お召しあられませう。

皇女　歌之助と一緒に行くのかや。

ト乗り物へ乗る。

歌之　小太郎は皇女に引添ひ、味方の假家へ早う〳〵。

小太　心得ました。急げ〳〵。

ト乗り物に附添ひ、向ふへ入る。

主水　シテ〳〵伯莫は

歌之　巌窟へ忍び入つて不意を討たん。この一巻を山三どのへ。

主水　心得ました。

ト一巻を受取り、龕燈を歌之助へ渡す。三人起きて、切つてかゝる。歌之助、主水、抜刀を引取り、左右にてポン／＼と切り倒し。

歌之　行きやれ。

主水　お別れ申す。

ト一聲になり、主水は橋がゝり、歌之助は龕燈をかゝげ、洞の口へ忍び入る。返し

造り物、唐作りの屋體、向ふ紙張りの襖、朱塗りの高欄、兩方の柱に萠黄地暖簾をかけ、國を去つての詩を唐樣にて書きつけある。東西、落間、唐作りの塀、隱元燈籠數多ともす。西の方に桃の立ち木、花盛りの體、この幹を削り、朝鮮大王宗烈の廟と記す、右二重の上に伯英、唐裝束にて、爐にかゝり、茶を立つてゐる。蘆屋釜、かけあり、この傍へ、卓の上に位牌、朝鮮の忠臣伯龍の靈とゑり附けあり、左右に隱元燈籠一對ともす。道具納まる。

ト一聲打ち上げる。笙入りの合ひ方に、鞨鼓打ち交ぜる。こなしあつて

伯英　誠に今宵は父伯龍が祥月命日。日の本に唐土の禮樂なし、傳ふる物只茶道のみなり。

ト茶を供へるこなし。

牛をひさぐの祭りに引替へ、一服の茶も禪味の手向け。猶この上は久吉を攻め討ち、朝鮮の屬國となさんこと、我が掌のうちにあり。主君大王、父伯龍にも、草葉の蔭よりお悦び下され。

トばた／＼にて、向ふより、藤太、忍び、軍立の形にて出る。

藤太　伯英公へ御注進。

伯英　計らひ置きし手段はなんと。

藤太　御計略の圖を外さず、聚樂の館へ忍び入り、悉く地雷火を伏せ置きたれば、今宵寅の一天、君にも討入りあつて然るべう存じまする。

伯英　ホ、ウ、さうぞあらん。猶も味方に牒し合はせ、油斷なきやう、早う／＼。

藤太　畏まつてござりまする。

ト引返す。伯英、見送り

伯莫　大望成就の時節到來。ハテ、心地よい。
ト笑坪のこなし、柄杓を取り、爐前にかゝる。トチン
トチンの釜の煮え音。これに耳を寄せ、キッとこなし
あつて
ムウ、時は今暮春の始め、陽氣發して呂の音に進むべき
に、釜のたぎり律に沈み、自然と殺伐を現はすは、ム
ウ、ハテ、心得ぬ。
トきつとこなし。此うち歌之助、窺ひ出て
歌之　扨てこそ伯莫、そちを
ト反り打つて行くを、よろしく留めて
伯莫　青蠅め、うぬ等が手に合ふ伯莫でない。
歌之　腕廻せ。
ト寄るを、引き廻し、ポンと當てる。トこれを切つか
けに、雷の音、雨車になる。仕掛けにて、膝元の燭、
東西庭先の燈籠、一時に消える。伯莫、空を見上げ、
こなしあつて
伯莫　ハテ、訝しや。我れ鬼克子が術を傳へ、風雨の氣節
を考ふるに、一つとして當らずと云ふ事なし。この頃雨
なきと見て、調へし地雷の手段、今正に雨を起し、時な
らぬいかづちの發聲、扨ては地雷の計略、たちどころに
空しくなつたか。ハテ、殘念やなア。
トキッとこなし。雨雷やむ。凄き合ひ方、又空を見
廻し
雷雨はやんで、衆星八方にたんだくなす。
ト指を繰り
我が尊とむ宿星、みんなみに飛び去りしは、扨ては皇女
の手より事顯れしか、ホ、ホイ。
ト大きに驚く。此うち歌之助、氣を附け、懷の松明を照
らし
歌之　その蘆屋釜を
ト行くを。引き廻はして
伯莫　異國の重寶、日の本に傳へんよりは、から
ト飛び石に打ちつける。歌之助、松明を捨てゝかゝ
る。立ち廻つて、下へ蹴落とす。トこの時、エイと絃
音する。身をよける。ト桃の木の大の字の肩にかつき
と立つ。
これは。
ト向ふ戸屋のうちより
山三　春の野に、あさる雉子の妻戀ひに、おのがありかを
人に知れつゝ。

伯英　ヤ、なんと。
山三　備後將軍伯英に、和國の武將豐臣久吉見參せん。そこ動くな。
　ト鬨の聲、ドンチャン打込む。軍兵二人、五三の桐の高提灯を先に持ち、出る。山三、長上下にて、弓を持ち、軍兵大勢附き出る。東西より主水、主税、部組子大勢、桐の薹の弓張りを持ち出で、歌之助も一手になつて、鬪ふ。
伯英　其方は名古屋山三、烏滸がましく久吉と名乘りし、仔細はなんと。
山三　オ、、不審な尤も。汝四海の逆賊たれども、元は佐佐木一家の仇。我れに代りて事を糺さば、山三が忠義も空しからずと、久吉公の御仁心。卽ち御紋の禮服を拜領なし、かく着すれば、恐れ多くも武將の假官。射かけし一矢は神國のいさほし。
伯英　なんと。
山三　昔時神宮皇后、三韓征伐の砌り、弓杖を以て石面にえり附け給ふ例しに習ひ、汝が崇むる宗烈大王の大の字に、矢尻を以て一點を加へ、犬と云ふ字になしたるは、山三にあらぬ眞柴大領、汝が心魂を貫く弓勢、肝先にこたへたであらう。
　ト伯英、碑の方を見やり
伯英　エ、、。
　ト無念のこなし。
歌之　殊には錦花皇女我れを慕ふ。これを幸ひと色を以て欺き、湖月の一卷を手に入れ、皇女を擒虜となし、武將の館へ送つたわやい。
　ト伯英驚き、こなし。
山三　歌之助が勘氣の虚名も、今ぞ忽ち春の野に、錦花皇女の夫戀ひゆゑ、おのがありかはこの巖窟、人に知れつつ逆意の張本。
主部　最早遁れぬ朝鮮の伯英。
歌之　尋常に
皆々　覺悟々々。
伯英　多年の本懷、水の泡と消え失せたか。エ、〳〵、奇怪やな。よし〳〵此うへは、聚樂の館へ切り入つて、皇女を奪ひ、久吉冠者が首捻ぢ切つてくれん。道を開いて通し居らう。
山三　いづれも、ソリヤ。
　トドンチャン烈しく、組子皆々、かゝるを、一々取つ

て投げる。蔀、主税、兩方よりかゝる。二人とも蹴落
とし、廻り襖にて、伯莫入る、

歌之　南無三、拔け道。

ト山三、本舞臺へ來て

山三　間道は雲母の坂口、至つて險しき絶所なれば、諸卒
を下知して過ちなきやう。

歌之　毘沙門堂の後ろより

三人　先へ廻つて

山三　行きやれ〳〵。

四人　ハツ。

ト組子連れ、橋がゝりへ走り入る。山三、二重へ上が
る。向ふより岡平、藤太と切り結び、出る。

山三　岡平、都の安否は

岡平　ハツ。

ト切り結びながら本舞臺へ來て

萬事首尾よくお跡目相續。こやつ伯莫が味方の曲者、出
ツくわせてござるゆゑ

藤太　なにを

ト切つて行くを、立ち廻つて、切り倒し

岡平　かくの仕合はせでござりまする。

山三　出かした。此うへは四海の逆賊、伯莫一人。

岡平　聚樂御殿へ、切り入りしは

山三　網代のうろくづ。

岡平　番手を定めて

山三　早く召捕れ。

岡平　然らば此まゝ。

山三　急げ〳〵。

岡平　ハツ。

ト橋がゝりへ走り入る。山三、こなしある。返し。

向ふ一面に聚樂の城、外廓の體。民部、拔刀構へ、組
子、取卷き、遠攻めきびしく打ち、タテあつて、追ひ
込む。返し。

外廓、觀音開きになる。一面築山の體、提灯、旗、
指し物を立て、伯莫、大童、組子大勢、熊手琴柱に
て鬪ふ。大篝を焚き、ドンチヤンきびしく、タテさ
ま〳〵あつて、皆々を切り倒し、キツと見得。

ト帶刀、山三、歌之助、蔀、主水、主税、岡平、小太
郎、組子、提灯持ち、取卷く。

皆々　伯莫、動くな。

伯英　寄りやアがつたら撫で斬りだぞ。
山三　民部を討ち取り、伯父彈正どのにも切腹。逆意ながらも忠義の伯英。
帶刀　錦花皇女を歎之助が妻となし、異國本朝水魚の因み。
歎之　神力擁護の日本へ、刃向ふ刃はあるまい〳〵。
岡平　先非を悔いて降參するか。
三人　但し押へて討ち取らうか。
皆々　サア〳〵〳〵、なんとおや。
伯英　降參などゝは慮外千萬、運は天なり、勝負は戰場。
皆々　その廣言を
山帶　コリヤ、重ねて再會。
伯英　先づそれまでは
皆々　さらば。
　トロ上出て、打出し　　　　　　ひやうし幕

けいせい廓源氏（終り）

けいせい花繪(はなのゑ)合(あはせ)

再演の繪番附

けいせい花繪合

口　明

島原揚屋の場
金閣寺の場
櫻の馬場の場

役名——高島狩野之助。名古屋山三。家杉大領。菊地多門。瀨川主水。伊賀平馬。大道寺主税。石堂帶刀。都築監物。松川采女。鬼塚玄蕃。比良大角。紀伊國屋才兵衞。仲居、おらい。藝子、かの。非人の三。天王寺屋助九郎。舟屋德兵衞。藝子、お傳。傾城、遠山。同、卷絹。同、吳竹。妻、關の戶。奴、又平。小栗宗丹。

大幕の外にて、口上云ひ、いよ〳〵この所けいせい花の繪合、大序の始まり左樣に御覽じませと、幕のうちへ入る。幕明ける。うちに、舞臺一面に紫の幕張りあり。この幕に藤竹座と書きあり。幕のうちより口上云ひの人形、出る。附け聲にて、操りの通り

口上　東西々々、御退屈にござりませう所、御神妙に御一覽下されまする段、座本藤竹たつ坊儀は申すに及ばず、總座中ともに何程か大慶に存じ奉ります。さて淨瑠璃も語り詰め、末一段にござります。お宿元へお歸りの節は、評判よろしく仰せられ、又參會にお出での程願ひ奉りまする。先づは末の太鼓が、さうやら樣へのお暇乞ひ。左樣に御覽下さりませう。

ト幕のうちへ入る。幕明く。道具建て、總一面の操り舞臺へ、淨瑠璃語り出る。爰にて、高島狩野之助、家杉大領、菊地多門、紀伊國屋才兵衞は黑子にて、右四人は出使ひにて、何なと思ひ附き、人形使ふ。段切れになり、淨瑠璃仕舞ふ。ト果て太鼓打つ。幕しめる。

狩大　打つて置く、シヤン〳〵、祝ふて三度シヤン〳〵のシヤン

ト幕のうちにて手を打つ。遠山、卷絹、吳竹、太夫の形。かのお傳、藝子の形、狩野之助は人形を持ち、大領、多門も、使ふた人形を持ち、幕のうちにて

かの　その人形、わしにおくれいなア。
でん　イヤ、わしに貸しておくれ、あんまり可愛らしい、欲しいわいなア。
大領　イヤ／＼、滅多に貸されぬ／＼。
狩野　さうぢや、云ふ事聞くまでは貸しやんな／＼。
ト面々に云ひ／＼出る。
遠山　其やうに大人氣ない事云はずとも、かのさんに人形貸さしやんせいなア。
狩野　イヤサ、俺や貸す氣ぢやけれど、ナウ、御兩所。
多門　イヤ／＼、かのめは川作の方ばかり引いて居つて、おい等が云ふ事は取り合はぬ。たつ坊、滅多に貸しやんな。
大領　貸さぬ／＼。一體俺がする芝居がよいか、川作の芝居がよいか、人形が欲しくば、川作のお客に借れ／＼。
かの　エヽ、何云ひぢやいなう。惡い事ばかり。こちや川作へ行くのも勤めぢやわえ。そんな惡ちやり云はずと、貸しておくれいなア。
でん　ちつとの間使ふて見たい、ちよつと貸しいなア。
卷絹　ほんに大人氣ない事云はずと、貸してやらんせいなア。

吳竹　ソレ／＼、わし等も挨拶ぢや。貸して上げましいなア。
大領　イヤ／＼、俺が伊豆勘でした時も、あのかのめが、場へ向つて惡口云ひ居つた。まだこんな事ぢやない、禮をキッと云はうぞ。
かの　さう云はしやんすと、無理に借らにや置かぬ。お侍ひさま、二人してあの人形、こちへ取らうぢやあるまいか。
でん　さうぢや／＼、口で云ふては借られぬ。いつそこつちへ取つてこまさう。
大領　滅多に取られうかい。
多門　餓鬼も人數ぢや。油斷すな。
かで　お前方は
ト二人、追はへかける、兩人。逃げる。
卷絹　危ないぞえ。怪我しいなえ。
ト追はへ歩るく所へ、花道より、松川采女、衣裳上下にて、侍ひ連れ、出て來たる。
狩野　コリヤ面白い。大領、必らず渡さぬ樣に、合點か。拍子にかゝつて逃げ負せ。みな囃せ／＼。
ト面白き合ひ方になる。

狩大　サア、この人形取つて見や。
かで　オヽ、好かん、取つて見せう。
ト釆女、花道の角にて、手をつかへ
釆女　主人狩野之助さまへ、どなたぞお取り次ぎ頼みませう。
ト此うち、構はず立ち廻り。うち、摺れ違ひ、かの、お傳、釆女に取り附き、兩方へ引張り
兩人　貸さにやア聞きやせぬ／＼。
ト兩方へ引つ張る。釆女、恂り、兩人を突き倒し
釆女　取り次ぎを頼みゐるに、尾籠千萬。
遠山　コレ。粗相さしやんな。コレ、釆女さまぢやわいなア。
狩野　うねでもあぜでも大事ない。面白い／＼。
ト氣の附かぬこなし、矢張り華やかな三味線。
釆女　これは殿樣でござりまするか。
ト多門、大領が方を見て
どなたかと存じましたら、大領さま、多門之頭さま、興がつた、コリヤ、何事でござりまする。
多門　こりやどいつぢや、惡洒落すな。
大領　樂しみの妨げすると、後で何杯も呑ますぞ。
女皆　オヽ、笑止、措かしやんせいなア。
釆女　殿樣、名古屋山三が參りまする。この形でお逢ひなされまするか。山三が見附けましたら、こは意見でござりませう。
ト狩野之助、氣の附くこなし。
狩野　ヤア／＼、あの短氣者が來るか。そんならこりや芝居の體は、見せられぬわいやい。コリヤ／＼、皆道具を片附けてくれ。仕舞へ／＼。
おく　ハイ、畏まりました。
ト男ども、出て、道具建てを片附け、花屋の道具建てになる。
狩野　大領、多門、堅藏の短氣者、山三が爰へ來るといなう。
大領　ヤア、名古屋の堅造がわせるか。
多門　短氣者の山三が來るとは、そりやマア誰れが云ふた。
釆女　山三參ります樣子は、私しが申しました。
多門　さう云ふは松川釆女か。
釆女　家杉大領さま、菊地多門さま、最前より餘所ながら、參りかゝつて拜見いたしましたが、天晴れお隱し藝の人

形の一曲、山三見ましたら、定めし賞美の強意見、無褒
めますでござりませう。

多門　エヽ情ない。堅造がらせてはたまらぬわい。

大領　なる程さうぢや／＼、堅造が來居らぬうち、しかつ
ぺらしい先生のもてなしの、前酒なと食らはしかけう。
酒持て來い／＼。

らい　アイ／＼。

ト仲居、禿、酒銚子杯、持ち出づる。

狩野　アア／＼、息安めに酒にせう。皆も下にゐい／＼。

ト皆々、並よく並ぶ。

なんと大領も多門之頭も、今日の操りは近年の出來ぢ
や。なんと面白うなかつたか。

多門　近年の大出來ぢやあつた。狩野之助、この趣向は出
來たわいの。

狩野　まだ狩野之助と見知らすかい。なぜ俳名を云はんぞ
いの。

大領　さう云ふわれから猶せいやい。

多門　さうぢや、こりやわれが誤りぢやぞよ。

狩野　さうぢや、一番誤つた。然らば大名附合ひ取り措い
て、大領は馬物、多門之頭は辰坊。

多門　高島狩野之助は英子。

狩野　太夫は里に擬して云ひ流行らす心を取つて里擬。

多門　ヤイ／＼、この辰坊をさし置いて、人形の名人とは
どうぢやいやい。今操りで日の才治を押し倒す程の藤川
辰坊、誠に俺はよい男の司と見える。伊豆樹へ行く度に、
今歌舞伎芝居で、ひん拔きの大立者、藤川八藏によう似
たと、云ひ居るてや。

才兵　さう仰しやれば、このえんそくも思ひ當たります。
わたしはどうでも三五郎に似たやら、どこへ行ても雷子
雷子と申します。

多門　イヤ／＼、わい等がなんぼ人形の自慢しても、丁南
めには叶はぬ。そしてあいつは作もやり居るげなてや。

大領　時に初午の晩は俺が當てた。コリヤ、若者、われが
名はなんと云ふ。

釆女　拙者松川釆女と申す者、二つ名は附けませぬ。

多門　さつても堅うやり居つた。コリヤ、主の英子を見習
ふて、碎け居れ／＼。

大領　さうぢや／＼、おいらがこの闇から、人形芝居をす
るは、我れ／＼が先生、大内守護の武家預かりは、小栗
宗丹さま、忝なくも當今の御師範、その先生を御馳走の

下稽古。一國一城の主が人形使ひの眞似から碎けねば、粹ではないてや。

狩野　ソレ〳〵、よい事云ふてたもつた。俺が太夫と出使ひするも、皆宗丹さまを御馳走役の下稽古ぢや。おい等ばかりの樂しみぢやと思ふな。ナウ、太夫。

遠山　何云はんすやら、わしは厭ぢやと云ふものを、無理矢理に連れて出て、あられもない人形使ひ。よう出られた事ぢや。オヽ笑止。

多門　なんの笑止。嘘云ふまい。俺と出使ひせうと云ふたら、英子めがムツとし居つた。大分役揉めがしたてや。

才兵　そこでわたしが挨拶しても、ぐわんの御意ぢやに依つて、先づ出使ひの役儀、無理に貰ふて、我れ等がための福の神、夫婦連れの出使ひ、エヽ、浦山しいなア。

狩野　コリヤ〳〵、余り浦山しがつてくれな。わい等が皆知つてゐる通り、東山どの繪をお好きなされて、諸大名に預け置かるゝ、和漢の繪を取り寄せらるゝ。俺が家の血の達摩も差上げる筈ぢや。その改め役は宗丹さま。先生をもてなすと云つて、何か諸國の大名、毎日々々の振舞ひあつて、俺も負けまいと思ふてするもてなし。マア、先生めが機嫌がようて嬉しいが、ちつと氣に食はぬ事があるてや。

才兵　何がお氣に入りませぬ。

狩野　俺が氣にかゝると云ふは、なんであらうぞ。爰に居る遠山が事ぢや。先生づらが酒の相手にする、座敷へ貸せと云ふたに依つて、外の太夫も行く事ぢやと思ふて、一緒に座敷へやつたれば、それからうせる度毎に、とつと側へ引寄せて置いて、根つから俺を寄せつけ居らぬ。そこで先生が來ぬうちに、盜み食ひの樣な樂しみ、俺が揚げ詰めにして、俺がまゝにならぬと云ふは、稻荷山の松茸、稻荷福をしてやらうと、先生めが罠を強ると思へば、我れ等はきつとお戒めぢやて。

遠山　何云はんすぞいなア。先生さまがござんすれば、あなたの相方さんが、一緒に座敷へ行くぢやアないかえ。堅い座敷の附合ひ、お前もよう知つてゐて、そんな事云はんすと、わしや今夜から先生さまの座敷へは、とんと出やせんぞえ。

多門　イヤ〳〵、それではおい等が濟まぬ。先生の機嫌損ふては、明日金閣寺に於いて繪合はせの下見分、どこへとばしりがかゝらうも知れぬ。おいらが合方奘竹も、卷絹も一緒ぢやないか。英子、よい加減に悋氣せいやい。

呉竹　イエ〳〵、そりや氣遣ひさしやんすな。わし等も一緒に傍に居るが、先生さまは堅いお方、色がましい氣は放れた座敷、氣遣ひな事はないわいなア。

卷絹　呉竹どのゝ云はんす通り、風雅ばかりで持つた座敷、酒で無理云はんすが先生さま、惡いが粹ぢやわいなア。

狩野　サア、その粹が氣にかゝるてや。危ふい事の極意と云ふは、物數云はず粹と見せるが第一。きやつが人物しこなしの無術、どうも氣が濟まぬわい。エヽ、山三が云附けぢやなければ、貸す事ぢやないのに。

大領　これはしつこい、先生めは酒好きの女好き。かの物好きとは譯が違ふ。きやつは女子好きと云ふものぢや。かの所は念がけはせぬ。太夫、氣遣ひしやんな。

狩野　辰坊、何を云やるぞい。その女好きと云ふが、即ちかの物を好く看板ぢや。一體あの遠山が大黑ぢやに依つて、氣のすまぬ大黑ぢやて。

遠山　殿さん、可笑しい事を云はしやんす。わたしがなんで大黑ぢやえ。

才兵　太夫さんのお色は白し、大黑とはどうした事ぢや。

多門　コリヤ〳〵、才兵衞、默つてゐい。きやつが太夫を大黑と云ふのは、味がよいとの自慢ぢやな。

狩野　イヤ〳〵、そんな事ぢやない。きつと大黑ぢや。

遠山　こりや聞かにやアならぬわいな。殿さん、なんでわたしが大黑ぢや。サア、大黑の譯云はんせ、云はしやんせ。

ト振り廻す。

狩野　コリヤ、其やうに振廻すと、大黑の譯云ふぞよ。

遠山　アイ、云はしやんせ、聞かうわいなア。

狩野　そんなら云ふぞよ。

遠山　云はしやんせ。

狩野　コレ、皆も聞いてたも。きやつを大黑と云ふ因緣は

大多　大黑と云ふ因緣は

狩野　大黑々々、大黑と云ふ人は、一に一體お好きで二ににつこり目附きで、三に酒すごすと、四つ余念もない顏で、五つ色やらお客やら、六つ無性にふるまふて

ト多門、大領、才兵衞、これより大黑舞ひ囃す。

ト此うち、遠山、狩野之助を摑まへにかゝる。狩野之助、逃げる。多門、大領、才兵衞、狩野之助を庇ふてやる。卷絹、呉竹、かの、お傳、摑まへてやらうとする。最前より釆女は、片脇へ寄り、手を組んで、氣の毒なるこなしあり、思案してゐる。矢張り大黑舞ひの

囃子にて
七つなんにも構はずに、八つ矢ツ張りお好きで、九つ戀でも情でも、十で兎角お好きぢや。

四人　色大黒は見さいなア。

ト四人、囃し立てる。

遠山　エヽ、腹の立つ。聞きやせぬ〳〵。わしが其やうな自堕落な事、いつしたえ。サア、それ云はんせ〳〵。

ト取り附き、振り廻す。

狩野　マア、そんなら先生が來ても、色大黒の覺えはないか。

遠山　なんのあらうぞいなア。

狩野　手を握つた事もないな。

遠山　ないわいなア。

狩野　そんなら文で口說いた事もないか。

ト遠山、思ひ入れあつて

遠山　イヽエ、ないわいなア。

狩野　とんとないな。なけりや堪忍してやるワ。サア、もう堪忍してやるわいやい。

ト寄る。遠山、びんとする。

なんぢや、堪忍してやるが腹が立つか。腹が立つなら、せう事がない。去んでこまさう、去ぬるぞ〳〵。

ト立つ。遠山、留めぬゆゑ、狩野之助、思ひ入れあつて

イヤ〳〵、留めな。去ぬる〳〵。留めなと云ふに。

ト才兵衞が手を無理に取つて、留めいと云ふ事を、顏でして見せろ。

才兵　イヤ、留めはいたしませぬ。

トきよろ〳〵するを、狩野之助、うち消し

狩野　ハテサテ、留めなと云ふのに。もう今去んだら、一生廓へ足踏みはせんぞ。そこ放せ。

ト才兵衞が手を取る。才兵衞は留めぬと云ふこなし。

エヽ、留めな。

ト才兵衞を向ふへ廻し、才兵衞が手にて無理に帶を捕まへさせ

もう去ぬるが一生の別れぢや。留めな〳〵。走つて去んでこます。俺が走り出したら留めどがあるまい。走り出さぬ先がまだ花ぢや。

ト又遠山が方を見て、おちよぼからげしたり、いろいろ身拵らへ。遠山、留めぬゆゑ

もうこれ迄ぢや。走るぞ。

ト才兵衛を無理に摑まへさせ、段々走る樣に後へ寄つ
て、遠山がわきへ寄る。
遠山　エヽ、つッともう。
ト褄を摑まへる。狩野之助、ぐつと強うなる。
狩野　ヤア、放せ／＼、去ぬる／＼。
遠山　なぜ。留めずば、義理にも去なんせずばなるまいが
なア。
狩野　そんなら誤つた。
遠山　なんにも誤ることはなけれど
狩野　誤らにや去ぬるぞ。
遠山　無理ばつかりを、誤つたわいなア。
狩野　誤つたが定なら、爰へ來て抱きつけ。
遠山　阿呆らしい、皆さんも見ておやわいなア。
狩野　だんない／＼。誰れが見てゐても大事ない。抱きつ
く事が厭ならば、矢ッ張り去ぬるぞ／＼。
遠山　サア、抱きつくわいなア。
狩野　遲いと去ぬるぞ。
卷絹　エヽ、辛氣な。太夫主、ソレ、抱きつかんせいな
ア。
ト突きやる。

遠山　そんなら斯うかえ。
狩野　イヤ／＼、そんな事では堪忍ならぬ。きつと抱き締
めい。
遠山　そんなら斯うかえ。
狩野　エヽ、可愛い奴ぢやなア。
ト抱き締める。
多大　こりやたまらぬワ。
ト卷絹、呉竹に抱きつく。
才兵　さうぢや／＼。酒にせい／＼。
ト騷ぎ唄になり、皆々、寢ころびゐる。酒盛りよろし
くあるべし。最前より釆女、始終氣の毒のこなしあつ
て、狩野之助が袖を扣へ
釆女　申し／＼、若殿樣、明日は大切な繪合はせ。それゆ
ゑ山三どのも、追つゝけこれへお迎ひに見えまする。拙
者には先へ參つて、御酒過ごされませぬ樣に、心を附け
ませいとあつて、それゆゑ伺候いたしてござりまする。
余り御酒を過ごされましては、明日大切なお役目
狩野　アヽ、コリヤ／＼、碎けいやい／＼。明日の所は氣
遣ひない。こちの寶を持つて行て見せるのに、奇ッ怪が
あつてたまるものかいやい。殊にこの間から先生を、振

舞ひつゞけてゐれば、きやつも惡うする事もない。しゆつとも云ふて見い。

大領　其やうにがいを云ふても、先生の機嫌を損ふたら、明日の繪合はせが濟むまい。今宵兼ねて云ひ合はした通り、奧の間で石橋させい。

狩野　俺や昨日返事をやつたが。

大領　返事來たれど、根つから讀めぬわい。

多門　何を云ふてもかを云ふても、先生の氣に入らねばならぬ。もそつと馳走せい〳〵。

狩野　その馳走の天井と云ふは、太夫を俺が揚げ詰めにして、酒相手に貸すぢやないか。一體狩野古法眼が弟子で、あの和郎は繪は習はず、先生々々と云ふが阿呆らしい。

大領　英子、默れ。おいらが大事の先生を、阿呆ぢやと云ふたぞよ。

狩野　云つたら大事か。貴公達や先生の樂しみを重ねるも、俺が家來の山三が金を續ける依つてぢや。わが身達みな借りやるぢやないか。

多門　コレ、それを爰で云ふ事か。おい等は借る氣はないけれど、山三が貸したがる心根が不愍なに依つて、慈悲ぢやと思ふて借つてやるのぢや。

大領　なんの、あいつが癇癪持ち、大てい氣の永いべら坊ぢやない。

狩野　ヤア、俺が家來をべら坊にしたぞよ。辨慶だてらゝあんまり我強からうがな。

多門　ヤア〳〵、われは〳〵、おい等を辨慶ぢや。辨慶と云ふたらなんとする。

狩野　あんまり違ふた事はない。辨慶ぢや。

大多　おい等を辨慶にすりやア、われを

狩野　なんとする。

ト叩きかける。これより酒の醉ひのこなしにて、叩き合ひになる。ト釆女、中へ入り、腰かゞめ、段々詫びしい〳〵、留める。此うち名古屋山三、よき時分より、衣裳麻上下。又平、若黨の形、又平に用を云ひ付け云ひ付け出て來る。右の喧嘩を見附け、山三、むつとしたる體にて、つか〳〵と寄り、多門、大領を取つて退け、狩野之助を圍ふて立つ。釆女、悅ぶ。

狩野　山三か、よう來てたもつたなう。

山三　何か樣子は知らねども、余りと云へば法外なる振舞ひ。主人を脛にかけて、料簡が

トかゝらうとする。又平、つか〳〵と寄り、山三をじ

つと留め

又平　コレ、兄御様の鮫鞘、山左衛門さまの魂、左文字の刀、コレ、鮫鞘でござるかや。

ト刀を敎へ、しつかりと云ふ。山三、心を取り直す事あつて

山三　又平、卒爾はない、退れ。

又平　納まりましたか。

山三　殿の御前、退れ。

又平　ハア、。

トこなしあつて

山三　ハ、、、、これはあなた方の御酔興に浮かされ、無禮の推參、御兩所ともに、サア〳〵、先づ〳〵これへこれへ。憚りながらお手取りまする。ホ、、大領さま、お腰が痛みはいたしませぬか。恐れながら、イザイザ。

ト兩人を、大切に上座へ直す。兩人、氣味惡さうなこなしあつて、極々と上座へ直る。

イヤモ、茶屋と申すものは、貴賤上下の分たず。無禮も遺恨も酒に預けて、打ち混じまするが德。コリヤ〳〵、お銚子持て來い。早う〳〵。若殿もこれへお越しなされ。

ト狩野之助、むつとしたる體にて、遠山にもたれ、あちら向いてゐる。山三、こなしあつて

イヤナニ、多門之頭さま、先日仰せつけられし珊瑚珠の硯箱、やうやく買ひつけ置きましてござりまする。折を見合はせお差上げ下さりませう。大領さま、かの桔梗が本の一卷、よろしう計らひ置きましてござりまする。もうこの節は何なりとも、御入用の品ござりませうならば、なん時なりとも掛け屋方へ申し遣はし、お手づかへしませぬ樣、御遠慮なう仰せつけられ下されませう。

多門　イヤモ、段々貴樣のお世話、過分に存ずる。

大領　イヤモ、お世話甲斐があつて、腰骨によくこたへました。

山三　お腰が痛みますか。導引どもに申しつけませうか。先づそれまで、拙者がちと柔らげませう。

ト立ちかゝる。

多門　イヤ〳〵、もうそれには及ばぬ。よいよい。

山三　申し〳〵、殿樣、そりやどうしたお附合ひでござります。こりや又酒論が出來ましたな。そこを知らぬが遊所の德。多門さま、大領さま、何事もこの山三が、なり替はりお詫び申しまする。殿樣お若い儀でござれば、若

し誤りもござらば、幾重にも御高免下さりまし。若殿様、お詫びなされ。イヤ、惡からう、惡いであらう、兎角お詫びがよい、ハ、、、。憚りながらお一つ召し上がられ、殿へお差し下さりませうならば、拙者までもいかばかりか、大慶に存じ奉りまする。

大領　イヤ／＼、呑まぬ／＼。余り過ごして今の體裁。こつちに何も根を持つ事はない。多門之頭どの、さうではないか。

多門　貴様の仰せの通り、こつちに何も根を持つ事はない。狩野之助、そつちに別心さへない事なら、こつちに何も別心、ないぞや。

山三　サ、、殿様。

ト狩野之助、こちら向く。

あなた方に御別心ないとの御意、御前にも御別心はござりますまいな。

狩野　イヤモウ、さう云ふてたもれば、こちにも別心も何もないてや。

山三　左樣々々、それでこそ御親友と申すもの、サア／＼、御機嫌直しにお酒がよからう。

遠山　イエ／＼、酒は止しにさしやんせい。酒から起こつた今の爭ひ、マア／＼、酒はやめにして、圍ひへ行て茶でも遊ばうかいなア。

呉竹　いかさま、それがよからうかいなア。遠山さんの手前で濃茶でも廻すか、いつそ花月もよからうかいなア。

山三　イカサマ、左樣もようござりませう。コレ、釆女、最前申しつけた通り、明日は大切な日ぢや。委細申しつけた通り、先へ歸つてお迎ひの用意しやれ。

釆女　ハア、畏まりました。然らばお先へ參りまする。

ト走り入る。

狩野　サア／＼、そんなら花月にせう。皆々奥へおぢや。

多門　ア、待ちや／＼。山三がおぢやつたこそ幸ひ、今のを云ふて置きやらぬか。

狩野　今のとはなんぢや。

多門　ハテ、先生を今宵のもてなし、石橋の牡丹の事を。

狩野　ほんに、今宵泊らしやらば、奥にては石橋するのぢや。ほんにそれを云ふて置かう。コレ、山三、先生お出でなされて、今宵若し夜が更ければ、舞ひ子どもに石橋をさしてお目にかける筈ぢや。牡丹は小判でする積もりぢや。高でなんぼほど要るの。

多門　カウツト、二千兩ほど要らうかい。

狩野　そんなら二千兩おこしや。石臺のも、それであるかの。
大領　イヤ〳〵、石臺のは足るまい。石臺植ゑの牡丹は、黄金を五六百枚取りにやりや。
狩野　なるほど黄金もよいわいの。コレ、黄金も五六百枚、小判を二千兩、我が身去んで持たしておこしや。
ト此うち、山三、又平、ぎよつとしたこなし。
山三　なるほど〳〵、畏まりましてござりますれども、云はゞ牡丹はあしらひ物の儀、左樣に大金を費やさずとも
多門　ア、コレ、山三、先生は大寛濶人ぢや。かびた事をして見せては、ア、、機嫌が惡からうわいの。
大領　ひよつと機嫌が損ねては、繪合はせの下見の障りにならぬとよいが。
山三　アイヤ〳〵、畏まり奉りまする。先生さまの御機嫌を損じましてはなりませぬ。追つ付け取り寄せますでござりませう。兎角先生さまの御機嫌よきよう、萬端お指圖下さりませう。
大領　イヤモ、貴樣がおいらが事を、如才なうしてたもるに依つて、よかれかしと思ふて云ふのぢや。
多門　實はおいらも贔屓の余りで、そこで物を入れさすのぢや。
山三　お志し忝う存じまする。
狩野　これも埒が明いた。奧へ行て花月にせう。わが身もおぢやらぬか。
山三　イヤ〳〵、拙者はこれに殘り、萬端手當て仕りませう。太夫どの、いづれも、奧へお供さつしやれ。
狩野　これからは酒を止めて、仲直りの茶か盛りにせう。
多大　サア、奧へ行かう〳〵。
遠山　そんならお後からござんせい。皆さん、奧へ行かうかいなア。
ト いづれもわや〳〵云ひ〳〵、唄になり、この一件奧へ入る。山三、又平、殘り、山三、思案のこなし。又平、始終目を放さず、こなしあつて
又平　お旦那山三さま、繪合はせの內見分も明日に迫りました。お手當てはよくござりますかな。
山三　お家の重寶血達磨の一軸、明日の內見分、目利きは小栗宗丹どの、それゆゑ心遣ひをするてや。
ト此うち、質屋升屋手代德兵衛、出る。
德兵　山三さま、これにござりまするか。

山三　オヽ、升屋德兵衞、よく來やつた。サア〳〵近う近う。扨て賴み置いたる質屋の分、詮議してくりやつたか、どうぢや。

德兵　ハイ、お賴みでござりますゆゑ、質屋仲間は云ふに及ばず、古手買ひに至りますまで、一々吟味いたしましたれども、血で書いた掛地の繪は

山三　コリヤ〳〵、聲が高い。入込み所ぢや、靜かに云やれ。スリヤ、血で書いた掛地の樣なものは

德兵　とんといづれにも、見當りませぬ樣にござりまする。

山三　ハテ、なんともはや。

ト此うち、非人の三、出て、又平を見て

三　親方、お前を一遍尋ねました。

又平　オヽ、ひぬかの三とやら、此あいだ賴み置いた彼の手筋は、知れたか。

三　こなんが五百張込んで賴まんした彼の物、知れたら褒美やらうとの約束、なんでもよい錢儲けぢやと、小屋小屋はし〴〵、川原も引つくりかへして、仲間中吟味しても、血で書いた人形と云ふては

又平　シイ、聲が高い。靜かに云へ。スリヤ、手懸りは知れぬか。

三　アイ、とんと知れやんせぬ。

又平　お旦那、お聞きなされましたか。

山三　スリヤ、きやつ等が手筋も……人目に立つてはいかが。褒美をくれて早く歸せ。

又平　ハアヽ。

ト懷より、錢を百文出して

折角骨折つてくれたに、知れいで殘念。骨折り代ぢや、取つて置け。

三　アイ、忝うごんす。今でも知れたら、お前を尋ねて參りませう。

又平　隨分精出して尋ねい。褒美は望み次第、早く行け早へ行け。

三　アイ、忝うごんす。

ト三は橋がゝりへ入る。

山三　ナニ、德兵衞、心遣ひであつた。

ト紙入れより包み金を出し

些少乍ら取つて置きやれ。

德兵　イエ〳〵、それには及びませぬ。止しになされて下されませ。

山三　イヤ〳〵、辭儀には及ばぬ。寸志ばかり、是非〳〵納めてたもれ。此方へ乍ら似寄りの物あらば、早々知らせて下りやれ、頼んだぞや。

徳兵　ハイ〳〵、畏まりました。左樣ならお受け申しませう。私しも宿へ歸り、此方へながら隨分吟味仕りませう。お志しお受け申しまする。

山三　隨分〳〵精出してくりやれ。早く行きやれ。

徳兵　ハイ、忝うござりまする。

ト橋がゝりへ入る。メリヤスになる。

山三　繪合はせの内見分、金閣寺に於いて、諸大名家々の晴れわざ、明六つに迫りし手詰め、ムウ。

ト思案する。又平、色目見い〳〵

又平　お旦那、御持病は起こりはいたしませぬか。たとへどの樣な儀があらうとも、ソレ、その兄御の魂、鮫鞘左文字の刀、こりや兄山左衞門さま、いまだ山三と申す時、相家老不破道犬親子が讒言、思はず御浪人なされ、色々御艱難のうちにも、親御より重代とあつて、身を離されぬ一腰、何かの譯は御存じの通り、その後お國へ歸參なされた、その時分はお前さまは、まだ御幼少、御成人なさるゝに附け、兄御樣は山左衞門と云ふ名、お前樣は山平といふ名を改め、山三と讓られて別に高祿をお受けなさるゝ。全く兄御樣のお庇、又は主人の厚恩、然るに此度の御用、折惡しく兄御の御病氣、若殿のお供にお附けなされた、お前樣は御持病の短氣に兄御樣が殊の外のお案じ。それゆゑにその左文字の刀、お前へお添へなさるゝは、山左衞門さまが附添ふてござるも同然、必らず兄御の魂に、疵を附けられませぬ樣に、御堪忍でござるぞや。

山三　血の滝磨の一轆、事なら納まる樣に、篤と仕負せ參れと、兄山左衞門どのゝ御意、預かり置いたこの一腰、山三が短慮を鎭める賜物、堪忍の二字をよく守り居る。又平、心遣ひ過分なぞよ。

又平　ハアヽ、御厚恩の受けた拙者めが、お國を出走の砌り山左衞門さまが、頼むとある一言が、この又平めが心魂に徹し、冥加に余るお詞、何卒首尾よく事納まり、若殿樣、旦那樣も、御歸國あるやう、朝夕祈らぬ神も佛もなく、氣遣ひで〳〵、氣遣ひが余つてのこの過言、申し過ごしは、眞平眞平御免下さりませう。

山三　短氣は未練、心で心は押ゆれども、持病も起こらば又平、遠慮なく異見をたのむ。

又平　ハア、、

ト此うち、天王寺屋助九郎、出る。

山三　ホ、、殿のお掛屋天王寺屋助九郎、大儀〳〵。時に申し遣はした金子は調ふたか。どうぢや〳〵。

助九　ハイ、あなたの御意でござりますゆゑ、早速三百兩調へ參りました。併し昨日も申す通り、兄御山左衛門さまのお知行、あなた樣のお知行、兩方合はし七萬石のお知行、米もこれで引當て濟みまする。勝手にお米、賣り拂ひましても苦しうござりませぬか。

山三　兄弟が身の上を引當て、これまで段々滯り込んだ金子、何しに相違あらう。勝手次第に賣り拂やれ。

助九　イヤモ、これまで違ひました儀もござりませぬゆゑ、わたしも精一杯働きましてござりまする。左樣ならば勝手に賣り拂ひませう。もうお暇申しまする。

山三　酒でも呑んで歸りやれ。

助九　イヤ、此まゝお暇申しませう。

山三　大儀であつた、休みやれ〳〵。

又平　申しお旦那、スリヤ、兄御のお知行、お前樣のお知行、七萬石を引當てになされて

山三　主人左京太夫どのは、四國一圓の大名、それゆゑ我れ〳〵兄弟も、大祿を賜はる厚恩、此度の御用、首尾よく萬事調ふ樣に、小栗宗丹へ饗應、若殿の放埓の入用、凡そ十萬兩余りの借用。

又平　スリヤ、明日の內見分、萬事首尾よく調ふ樣にと、

山三　金銀は湧き物、心命までも擲つて居る。

又平　天晴れお出かしなされたなア。

山三　まだ密かに聞かする仔細がある。又平

又平　ハアツ。

山三　奧へ來い。

ト唄になり、兩人、奧へ入る。夜の景色になる。禿大勢、燭臺を持ち、出て、入る。奧より、多門、大領、醉ふたる體にて出て

大領　多門之頭どの、明日の繪合せは、首尾よう參りさうにござるか。

多門　先生のお頼み、狩野之助めを隨分とおだて、身上をはり込ませた。時にかの高島の內通、丹藏よりの便りはないか。

大領　拙者もそれを待つて居るてや。

ト橋がゝりより、奴、狀箱持ち出て

奴　ハア、お旦那、四國よりのお飛脚、長谷部丹藏さま

よりの御狀。
多門　その狀を待ち兼ねて居つた。
ト狀箱より、二通出し
貴樣の名宛、御覽なされい。
ト兩人、狀を讀む。
大領　あの方も手當てはよい。禁延の手當ては宗丹どの、大角どの。
多門　いかにもこの書面の趣き、篤と謀し合はせませう。
呼び　お客のお入り。
多門　先生のお入りとござる。ござれ。
ト奥へ入る。柔らかなる唄になる。向ふより擔ひ臺にて、酒樽大分、茶壺、水桶、煙草盆、脇息、褥、その外榮耀なる物大分、結構にして、上下の侍ひ四人、荷ふて出る。後より小姓、附き出で、褥をよき所へ敷き脇息を直す。右四人の上下侍ひ、大はんどうを其まへへ直す。下座へ下がり、並よく並ぶ。奥より狩野之助、羽織袴、遠山、卷絹、吳竹、かの、お傳、禿大勢、仲居五六人して、皆々出迎ふ。此うち向ふより、提灯二張り灯し、小栗宗丹、羽織袴にて出る。後より鬼塚玄蕃、比良大角、都築監物、石堂帶刀、大堂寺主税、いづれも羽織袴にて、附き出で、よき所へ並よく並ぶ。
大角　先生、君達の出迎ひでござる。お通りあられませう。
皆々　先生、お通りあられませう。
狩野　宗丹さま、サア〳〵、お通り下さりませう。
女皆　宗さん、ござんしたかえ。
宗丹　長生殿、四季の本も、吉野龍田は繪空事。斯う並んだ花の粧ひ、なか〳〵筆にも及ばぬ景色、いづれも見事ぢやぞや。
吳竹　オヽ笑止。宗さん、其やうにのぼしておくれたな。顏に紅葉するわいなア。
皆女　ほんに上手ばつかり、あんまりのぼしておくれなえ。
玄蕃　先生、お通りあられませう。
宗丹　御免なれ。
ト宗丹、上座へ直る。多門、大領、羽織袴にて出て
多門　これは〳〵、先生、先程よりお待ち申した。
大領　遲い御來臨でござる。お上の御用でもござつたかな。
宗丹　イヤ〳〵、さして御用もござらねども、御殿々々に

このお話し、お歌の相手、茶の湯の碁のと、何が上樣の
お暇に飽かして、お留めなさるゝゆゑの遲參、イヤモ、
上つ方のおもてなし、ほつと困りましたてや。

皆々　左樣でござりませう。太夫衆、なぜ先生の

多門　コリヤ、座並びが惡い。なぜお側へ行かぬ。サアサ
ア、いつもの樣にお側へ〳〵。

宗丹　ア、コレ〳〵、多門どの、其やうにお世話燒かれ
な。野邊に千草の花咲く。さう變屈に云ふては片寄つて
惡い。矢張り其まゝ〳〵。

多門　イヤ〳〵、左樣では興がござらぬ。ナウ、いづれも
左樣ではござらぬか。

大領　いかにも、座敷が濟みませぬ。サアサア、太夫衆、
手を取りませうか。

皆々　左樣がようござりませう。

ト多門、大領、玄蕃、大角、巻絹、呉竹、かの、お傳
側へ直し、遠里、厭がるを無理に宗丹が側へ出す。狩
野之助、むつとすることなし。この模樣よろしくあつて

多門　からなければ座席が濟まぬ。お銚子々々。

大領　イヤ〳〵、先生は外の御酒は上がらぬ。ソレ〳〵、
御持參の〳〵

大角　さうぢや〳〵、早う燗せい。

禿皆　アイ〳〵、

ト酒になり、提げ重を持ち運ぶ模樣、よろしくあつ
て、禿、酒を注ぐ。宗丹、杯取上げ、酒を受け

宗丹　慮外ながら狩野之助どの、持合ひました、差しませ
うかい。

狩野　お頂き申しませう。

宗丹　然らば慮外ながら。

ト差す。狩野之助、酒を受ける。

大領　先生の杯を直さまお頂戴は、お羨ましう存じます
る。

多門　この間より御馳走だけ、お悅びなされたがよい。

皆々　悅ばつしやれ〳〵。

狩野　悅ばいでなんといたしませう。オヽ、こりやきつい
大盃に、きつい注ぎ樣いたしました。

遠山　助さん、半ば食べなされ。わしが助るわいなア。

ト宗丹、氣味合ひあり

狩野　そんなら後を、わが身

ト云はうとして

イヤ〳〵、こりや先生のお盃、一つ食べずばなるまい。

ト酒を呑む。

憚りながら御返盃申しませう。

宗丹　所を押へませう。

遠山　助さん、相せうかいな。

狩野　ちよつとこゝ、相

ト宗丹氣味合ひ。

イヤ〳〵、相も賴まれまい。イヤ、帶刀どの、ちよつとお相を

帶刀　押へませう。

狩野　然らば大角どの。

大角　拙者も見ませう。

宗丹　ハテサテ、其やうに押へては却て興が醒めるわい。狩野之助どの、もう〳〵押へませぬ。お杯これへお遣はされ。

狩野　ハアヽ、然らば改めまして。

宗丹　ハテサテ、改めるには及ばぬ。酒に滾つてゐる貴殿おや、呑みたからう筈がない。サヽ、これへ遣はされい。

狩野　これは有難いお詞。然らばお許されませう。

宗丹　なんの許されどころかい。この間より毎度々々御馳走、その段きつと祝着に存ずる。

ト酒を受ける事あつて

オヽ、一つある〳〵。さて〳〵、きつい注ぎやう。なんと遠山どの、半斎助る氣はないか。

遠山　そんな未練な事云はずと、一つお上がり。

多門　ハテサテ、先生のお賴み、助さつしやれい〳〵。

皆々　サア〳〵、太夫どの、助た〳〵。

ト口々に云ふ。

遠山　オヽ、姦しい。助さん、どうせうぞいなア。

狩野　あの樣に仰しやる。俺が一つ助かつた手前もあり、助てあぎや〳〵。

遠山　アイ、そんなら助るぞえ。

ト杯を取る。

宗丹　半分でもよいぞや、ちよつとでも有難い。

ト此うち遠山、酒を殘らず呑み、杯を宗丹へ戻さうとする。

これはきつい呑みやう、半分でよいと云ふに。

遠山　呑み樣が氣に入らざア、助さん、相しておくれんか。

宗丹　ハラテテ、狩野之助どのは、酒に困つてゐるわい

の。ドレ〱、折角お助くだされたお盃、余人に相も頼まれまい。食べやう〱。

ト杯を取り、酒を見て

サア、門弟中、御存じの通り拙者も禁廷のお覺えよく、東山どのにも直きにお詞を下され、此度武將家に於いて帝のお慰みのため、古筆の繪合はせあるべきとの御意、それゆゑ明日金閣寺に於いて、諸大名家へ預け置かるゝ寶の名畫目利きの役目を、苦勞なとあつて銘々方のおもてなし。殊に狩野之助どのの御馳走、お心遣ひに預かりましたも、拙者が繪の道に秀でたるゆゑ。これを思へば一藝に達せねば、人に用ひらるゝものではござらぬ。隨分いづれも出精召され。末代までも名を殘す程の、名畫にならつしやれたがよいぞや。

玄蕃　左樣でござりまする。此度のお役目お羨ましう存じこの頃は繪に凝つて居りまする。何もお慰みぢや、この座敷で席畫きをいたし、太夫どもが目を驚かさうではござるまいか。

大角　こりやよい思ひ附きでござる。先生がござるこそ幸ひ、席畫きを仕らう。いづれも紙筆を取り寄さつしやれ。

監物　これはよい御趣向、サア、唐紙を持て。

秃　アイ〱。

ト眞中へ毛氈敷き、大きなる硯筆色々、唐紙持ち出る。これより席畫きになる。

大角　先づ拙者から致さう。蘭を書かうか、菊にせうか、但し風竹にしやうか、イヤイヤ、思ひ附きがある。

ト大頭口上云ひの人形を畫き

秃　オヽ、可笑し、こりやなんの繪ぢや。

大角　こりやこれ今專ら流行る、河内屋福助と云ふ、大頭の繪圖ぢやて。

秃　オヽ、可笑し。

玄蕃　ドレ、退かつしやれ。

ト唐紙に風竹を畫く。

なんと君達、欲しうはないか、なんと見事か〱。

巻絹　オヽ、笑止。鐘馗さんの髯見るやうに、無性にはね散らさんしたが、それはマア、なんの繪ぢやいなア。

玄蕃　これは風に笹の揉まるゝ所、この勢ひ、どうも云へぬ、可愛らしいが、欲しいか欲しいか。

巻絹　なんの欲しかろ、いらんわいなア。

大領　エヽ、退かつしやれ。拙者仕らう。

ト丸い物に、端へちよつと墨附けた様な物を書き
なんと氣が放れて、粋な繪ぢや。こればつかりは欲しか
らう。

吳竹　オヽ、可笑し。そりやまア、根つから解らぬ。何を
畫かしやんしたぞいなア。

大領　いづれも差して御覽うじ。この繪はなんと、見えま
す。

大角　ハア、聞こえた。こりや玉……とも見えぬ。

大領　イヤ〳〵、左樣ではござらぬ。こればかりは先生も
及ばぬ。拙者が一流。鍋蓋で鼠を押へたのでござる。

宗丹　ハテサテ、譯もない。其やうなばさら事を畫かつし
やると、師匠の名まで出ます。嗜まつしやれ。
ト見物の方へ見せる。

多門　イヤ、モいづれもかゝつた事ではござらぬ。これか
ら拙者が筆力をお目にかけう。唐紙も古し、幸ひ〳〵、
拙者が筆力をお目にかけう。禿ども、その衝立、爰へお
こせ。

禿　アイ……。
ト大勢、衝立を舁き出づる。

大領　馬物公、貴樣は衝立へ畫くか。

多門　拙者東表にて、慶子が打ちつけ書きの馬を見たが、
大分よい姿であつた。それを只今書きまする。
ト多門、衝立の前へ直り、仔細らしい顏にて、隨分大
きなる墨繪のもゝつき馬を書き、櫻の花をおかし氣に
畫く。皆々、見て、笑ふ。

玄蕃　ハアヽ、天晴れ、流石は馬物公、高弟ほどあつて、
イヤモ、根つから見られた馬ではない、ハヽヽヽ。

多門　イヤ〳〵、笑はつしやるな。コリヤコレ、一しきり
流行つた、駒が勇めば花が散る圖でござるてや。先生、
大分上達いたしませうが。

宗丹　イヤも、大名衆を弟子に持てば、色々の繪を見る事
でござる。ハアヽ、取り分け多門之頭どのには、替へ名
を馬物公と申すな。

多門　左樣でござる。文字では馬の物と書きます。

宗丹　いかさま馬の物と書いて馬物。なるほど馬物公と云
ふ程あつて、見どころがある馬でござる。併しよい加減
に措かつしやれ。餘り繪をなぶらつしやると、段々大き
うなるでござらう。ハヽヽヽ。

狩野　イヤモ、どなたも、驚き入つた儀でござります。

宗丹　イヤ〳〵、さう仰しやるな。其許にも繪をなさるゝ

と開いた。サア〳〵、一筆所望〳〵。
皆々　これはようござらう。畫かつしやれ畫かつしやれ。
狩野　イヤ、その儀はお免されませい。
宗丹　ハテヤテ、辭儀する場席ではない。古人法眼の弟子と聞き及んだ。さすれば拙者も筆懷しい。是非とも一筆所望〳〵。
狩野　左樣に御意なされまするに、辭退いたすも却つて不調法、お笑ひ草を仕りませう。
　ト見得よく、梅を畫く。
呉竹　この梅は可愛らしい。この繪はわしにおくれえ。
卷絹　エヽ、まん勝ちなお方ぢや。わしが貰はうと思ふてゐたに。助さん、わしに菊畫いておくれ。
狩野　菊はどうあらうか知らぬ。
　ト菊を畫く。
卷絹　オヽ、嬉し。可愛らしい繪ぢや。貰ふたぞえ。
かの　助さん、わしにも何なりとも、可愛らしい物畫いておくれ。
でん　まんがちな、助さん、わしから先へ書いておくれ。
狩野　これは又迷惑な事ではあるぞ。ヨシ〳〵、杜若を畫いてやらう。
　ト遠山、むつとする事あり、書き了ふと
卷傳　イヤ、わしが貰ふた。
　ト取らうとする。
呉竹　イヤ、わしが
　ト迫り合ふ。遠山、むつとして、中へ出て、繪を取り
遠山　なんぢや、ならんぞえ〳〵。この繪は一枚もやる事はならぬ。アタ厭らしい、主の畫かゝんした繪を一枚でも、そないに嬉しがつておくれな。お前もゝう畫かしやんすな。わしが留め筆ぢや、ならぬ〳〵。
　ト狩野之助が膝の上へ腰かけて、坐る。
女皆　わし等が貰ふた繪ぢや。返し〳〵。
遠山　ならぬ〳〵。
　トせり合ふ。
皆々　これは立ち騷いで、不行儀な。狩野之助も元の座へ直つた〳〵。
　ト口々に云ふ。傾城皆々、元の通り並よく並ぶ。
宗丹　イヤ〳〵、からしどけなら他愛のないが、なか〳〵千金にも替へられぬ所ぢや。シタガ、どうやら外の者には嬉しがらしもせず、わしばつかりとは情を知る勤めには似合はぬ、あんまりな詞ではないか。

遠山　アイ、情を知る勤めのうちに、思ひ込んだがわたしが因果。可愛い〳〵、きつい可愛い仲ぢやわいなア。

宗丹　スリヤ、どの樣に口說いても。

遠山　外へ心は變りもせぬ、命に替へた仲ぢやわいなア。

　ト宗丹、むつとするこなしあつて、氣を替へ

宗丹　見事さうあらう。さう云ふ深い仲と見えた。エヽ、狩野之助どのにはあやかり者、隨分可愛がつたがよいてや。アヽ、浦山しい仲ぢやなア。

　ト玄蕃、硯箱、紙を持つて、狩野之助が前に直し

玄蕃　狩野之助、お身は大分器用な者ぢや。お身がよく書いたに依つて、身共らが繪を阿呆らしいの可笑しいのと嘲笑する。サア、今一度繪を書き直さつしやれ。身共が一分がすたると筆先で、物は云はぬ、此方の者ども、顏の立つ樣工夫して、繪を書かつしやれ。書き樣が惡いと許さぬぞ。

皆々　よい所へ氣が附いた。早く書き直せ。

　ト皆々、おつ取り刀にて立ちかゝる。

宗丹　ハテサテ、ざわ〳〵となんでござる。鎭まらつしやれ。

皆々　餘りと云へば

宗丹　ハテサテ、控へさつしやれ。

　ト皆々、不承々々に鎭まる。

サテ〳〵、尾籠千萬な席書きの、出來不出來は銘々身を恨んだがよい。狩野之助どの、必らず氣にさへて下さるな。弟子の恥は師匠の恥。イヤモ、面目ない藝道、もうもうこの儀はとんと止めにして、仲直りの酒にいたさう。時に、拙者望みがある。貴樣御亭主役に、御苦勞ながら酌をなされて下され。

狩野　何が扨てお酌いたしませいで。

　ト酒を注ぐ。宗丹、受けて、呑んで見て

宗丹　コリヤモウ、一向呑めぬ。とんと水でござる。酌に立つたお手前、こりや又氣の附かぬ事ぢやの。

狩野　ほんに氣が附きませなんだ。誰そ來て燗せい。

宗丹　アヽコレ〳〵、人に云ひつける事は嫌ひぢや。こなた御苦勞ながら、臺所へ往て燗をしてござれ。

　ト狩野之助、ぎよつとする。

イヤ、行く事は厭か。燗しに行く事は厭なら苦しうござらぬ。厭かどうぢや。

狩野　イヤ、厭ではござりせぬ。そんなら燗を

　ト立たうとする。

宗丹　イヤ〱、止しにさつしやれ。ぬるいがよい。ずん
とぬるがよい。併し餘り受け過ぎた程に、拙者が口添へ
た杯、コレ、貴殿すけて下されい。大内守護の官、それ
に天子へ繪を指南する某、東山とのゝお眼鏡を以て、明
日名畫を改めの役人、當時出頭の宗丹、高位高官に交は
るこの杯を、すけるは厭か。
　ト遠山を尻目にかけ
すべて已れが器量發明にうつ惚れ居れば、かうした物ぢ
や。肝心の所を忘れ、情といふ字を忘れてもよいか。イ
ヤ、情と云ふ字を知るも酒ぢや。すける事は厭か。睦ま
じうなる事は厭か。ちよつと口添へる事もならぬか。
　ト遠山を當てつけて云ふ。
狩野　イヤモウ、厭ではござりませぬ。あんまり冷えたと
仰しやるゆゑ
多門　イヤサ、先生の杯をすけるは、有り難い事ぢやと
思ふて、こま事云はずとおすけ申さつしやれ。
大角　天子武將の御意を受けた、明日のお役目、其お杯
をすける事は厭か。
玄蕃　イヤア、まじ〱埒の明かぬ。先生の呑みさし、有
り難く頂戴せい。

　ト杯持ち替へ、狩野之助が顔へざんぶり浴びせる。
狩野　コリヤ、あんまり
玄蕃　先生の盃、汚いと云ふのか。
狩野　サア。
　ト橋がゝり障子のうちより、最前より息を詰めて聞い
てゐる。つか〱と出やうとする。又平、とめて
又平　コレ。
　ト刀を見せ、障子ぴつしやり閉め、入る。
玄蕃　狩野之助。
多門　この杯が
皆々　汚ないのか。
狩野　有り難うござりまする。
　ト泣く。遠山も悲しき心意氣、泣かずに、じつとして
ゐる。
宗丹　狩野之助どの、よくすけさつしやつた。お肴仕ら
う。コレ、爰に見事な卵がある。こりや鶏の卵ではある
まい。阿呆鳥の卵ぢや。貴樣には相應な肴、お受けなさ
れい。
　ト狩野之助、無念のこなし、泣き〱、不承々々に手
を出だす。

ハテサテ、不承な受けやうな。凡そ宗丹が挾む肴、頭を上げて受けた者がない。いかにしても頭が高い。門弟衆、狩野之助どのには肴の受けやう知らぬさうな。すべて高位貴人より下さるゝ肴は、手を頭より上へ上げて、額を疊にすり附けるものぢや。重ねての爲ぢや、狩野之助どのに敎へてやつて下されい。

大角　畏まりました。コレ、肴は斯う受けるものぢや。

多門　手はかう上げるものぢや。

玄蕃　頭はかう下げて

皆々　ハテ、下げうてや。

ト口々に云つて、狩野之助が手を引き延ばし、頭を押へ、無理に辭儀さす。ト遠山、こらへる、うれひ。山三、たまらず障子明けて出やうとする。又平、立廻り、留めるこなしあつて、又刀に指し、目の先へつき附ける。山三、エゝと、又平が肩先を持ち、へし附きなりにべつたりと坐る。右途端の立廻り、よろしくあつて

宗丹　オヽ、さうぢや〳〵、そこでその手へこの肴をかう置くぢや。門弟衆、もうよい〳〵、覺えられたであらう。

ト狩野之助、遠山を見て、口惜しい思ひ入れ、子供の樣に泣く。

狩野どのには小人の樣に泣かつしやる。腹でも痛むと見える。ハア、冷酒を參つたに寄つてゞあらう。燗を直してござれ。熱いがよからう。天子武將の御意を受け、大切な客は身共ぢや。

ト遠山が方へ當てつけて云ふ。

サア〳〵、身共が機嫌に入る樣に、早う燗を直してござれ。

玄蕃　ぐじ〳〵せずと、早う行かうてや。

と首筋持つて引き倒す。

大角　この燗鍋をかう持つて、かう行かうてや。

ト蹴る。

皆々　かう行かうてや。

ト皆々、寄つて踏み倒し、蹴倒し、無理に橋がゝりへ突きやり、入らす。ト山三、こらへかね、行かうとする。又平、無理に突き込み、襖を明ける。立廻りよろしく、宗丹とちよつと顏見合はす。又平、無理に襖を閉めて入る。合ひ方にて、遠山は始終身を震はせ、心にて泣いてゐるこなし。隨分大事に思ひ入れあるべし。大名殘らずハヽヽ、と笑ふ。

玄蕃　先生、今のざまを見て胸がさつぱりといたした。

宗丹　イヤモウ、阿呆と云ふ者も利口に使へば、ずんとよい慰みになるものぢや。拙者も今から無益の金を費やさずとも、あの様な阿呆を幾人も抱へて、氣まゝに仕らう。ハ、、、、。

遠山　文字野、わしが御前文庫持つておぢや。

禿　アイ、〳〵。

呉竹　遠山さん、最前からの様子、氣の毒な事ぢやわいなア。

卷絹　お前の心を察して、わたしや癪が痛むわいなア。

禿　アイ、御前文庫取つて來たぞえ。

ト遠山、文庫より、色紙、短册、文、大分出だし、此うち宗丹、氣味合ひあつて

宗丹　太夫どの、情を立てる身ぢやが、情と云ふ事は知らぬか。

遠山　宗さん、お前は情と云ふ事知つてかえ。

宗丹　天子の師範、草花を書けば草花にうつり、楊貴妃李夫人など、繪を書く時は、戀も情も知らねばならぬ。名畫と人に知られた宗丹、情を知らいでよいものか。

遠山　ほんに情知りぢやわいなア。多門さん、帶刀さん、見なされ、可愛らしい物見せやんせう。これ見やしやんせいなア。

ト色紙、短册出だし、皆々、色紙を取り上げ見る。

多門　なんぢや、我が戀は細谷川の丸木橋、思ひ渡らで文返すかな。ハア、、こいつ振られたな、振られ居つたわい。

大角　さうでござる。そいつ振られたのぢや。振られた上の狀に見えた。太夫、コリヤマア、どの客から來たぞ。

遠山　アイ、厭な客ぢやに依つて振つたりや、それからなんべんも狀が來て、その歌ぢやわいなア。

多門　さうあらう〳〵。我が戀は細谷川の丸木橋、思ひ渡らで文返すかな。エ、、殊の外述懷歎いた奴の。こりやマアどいつからおこした歌ぢや。

遠山　アイ、その歌は

多門　この歌は

遠山　爰にゐさんす先生さんから、わしにおこさんした歌ぢやわいなア。

ト多門、ぎよつとして

多門　ハア、、見事な手跡ぢやなア。

ト氣の毒さうに云ふ。宗丹、火鉢にあたり、氣味合ひ

あり

遠山　オヽ、笑止、差合ひの歌を出した。よいよい、その替りにこれ見さしやんせ。これは餘所の野暮な客がおこした歌ぢや。先生さまへの慰みに、讀んで見やしやんせいなア。

大領　そんならこれは餘人の歌か。ドレ〳〵、先生へお聞かせ申さう。なんぢや、長い前書きが。戀知らぬ情なき君に憧れて、獨り寢の夢に逢ふと見て、覺めて口惜しき思ひを送る。獨り寢の夢に逢ふと見て、ハアヽ、こいつ妄想を見たのぢやわい。こりや慥かに妄想を見て讀んだ歌ぢや。

玄蕃　ドレ〳〵、歌は拙者が見ませう。戀知らぬ情なき君にあこがれて、獨り寢の夢に逢ふと見て、覺めて口惜しき思ひを送る。誠に妄想ぢやの。戀の海

皆々　戀の海

玄蕃　沈み果てにし沖の石

皆々　沈み果てにし沖の石

玄蕃　我れのみ濡るゝ閨のつれなさ。

皆々　我れのみ濡るゝ閨のつれなさ。

玄蕃　ハアヽ、ひつこい人體な奴ぢや。

ト此うち宗丹、火鉢に當り、術なき思ひ入れ。

多門　沈み果てにし沖の石とは、どうもたまらぬと云ふ事ぢやわいなう。

大角　我れのみ濡るゝ閨のつれなさ、人體な事をし居つたわいやい。扨て〳〵面の皮の厚い奴。こんな歌を讀んでおこしたは、太夫、どこの奴めぢや。

遠山　アイ、その歌はな、爰にゐさんす先生さまから。

ト皆々、ぎよつとして、不首尾の體にて、各々顏を見合はして、そつと下に置き

多門　さて〳〵、今夜はきつう冷えるの。

大領　もうこんな時ぢや知らぬ。

多門　湯漬けが一杯食ひたいものぢやが。

遠山　コレ、爰によそ〳〵のお方から來た文があるわいなア。これ見やしやんせいなア。

皆々　イヤ〳〵、歌はもう止しに仕らう。

遠山　イエ〳〵、歌ぢやない。先生さんの歌ばつかりで、わたしも氣の毒なに依つて、それで見せるのぢや。先生さまの機嫌直しに、これ讀んで下さんせ。

多門　アヽ、そんなら餘所々々の文か。

遠山　アイ、状ぢやわいなア。

帶刀　ドレ〳〵、さつきにから、あんなちやりな歌とは違ふて、狀とあらば、初手の縮尻を取返すものぢや。お慰みにお讀みなされ。

大角　なるほど先生のお氣慰みのため。ドレ〳〵、餘り思ひに堪へ兼ね、又もや筆に云はせ候ふ。情なきはかうじて深き情もあるものにて、くどうも送る千束の文、一度の返事もなきは、さりとは〳〵情ない心。

宗丹　ア、コレ〳〵、人の馬鹿を聞く事はない。止しにさつしやれ。

大領　イエ〳〵、此度は歌ではござりませぬ。僻目か狀でござりまする。

玄蕃　ドレ〳〵、拙者に見せさつしやれいの。さりとはさりとは情ない心、その情ないぴんとした女が、必らず寢間ではべつたりとするものと、戀する人が詞を聞けば、夜に三度、日に三度、火焔の如く我が思ひ、胸を焦せるほむらにてとは、ハ、、、、、手ひどうはんべり居るわい。

ト宗丹、術なきこなし。

多門　時に、後は拙者が讀む。胸を焦せるほむらにてと、二度とは云はぬたつた一度、ついちよこ〳〵とのお情は、神の憎みもあるまい。あんまり酷い胴慾な、情ない心にてござんすに候ふ。ハ、、、、コリヤ、舌たるい事やり居つた。

皆々　イヤ〳〵、この後は、我れ〳〵どもが讀みませう。

宗丹　ア、コレ〳〵、姦しい、讀まずと止しにさつしやれ。

皆々　イヤモウ、舌たるい文句ぢや。

遠山　その舌たるい文句は、爰にゐさんす先生さんから、わしへおこさんした文ぢやわいなア。

ト皆々、顏見合はせ、不首尾なる體、咳拂ひして紛らかし居る。

宗丹さん、まだ爰にたんと來た狀もあるぞえ。去年の彌生、桔梗屋から呼び出さしやんして、助さんの譯は知つて居る、忍んで逢ふてくれいとのお頼み。わしやそんな事は厭ぢやと云ふて、戻つたぞえ。そしたら今度は思ひがけなう、山左衛門さまが云はんすには、先生樣の御機嫌に背くと、助さんが爲にならぬ、家の大事になる程に、先生樣の機嫌を取つて、殿さんのためになつてくれいと、何やかや大事の事を打明けて、頼ましやんす。殿樣の爲になる事なら、隨分先生樣の機嫌を、取りませうと思ふ

てゐたら、お前、はつと思ふてその夜から、仲居や禿を頼んでおこさんした、この數々。今日が日まで人には愚か、助さんにさへ隱して留めて置いた心は、お前に恥を搔かしたりや、助さんの爲にならぬ、爰は大事ぢやと、この狀や歌を溜めて置いて、濟ます氣は殿樣のため、一つにはお前に恥を搔かすまいため心で立てた情。戀が叶はぬと云ふて、よういとしほなげに、恥を搔かさしやんしたなら。明日の役目を功に着て、わしを抱いて寢やうとは、そりやさもしい汚ない、エヽ、憎てらしい、腹が立つ、腹が立つわいなア。

ト右の色紙短册を、宗丹に打ちつける。方々へ散る。うちより才兵衞、走り出て

才兵　申し〳〵、遠山さま、助さんの癪が起こつた。のりつ反りつしてござりまする。ちやつとお出でなされませ。

ト入る。

遠山　エヽ、助さんの癪が起こつた。

ト行かうとする。宗丹、襠裲の裾を捕へ

宗丹　太夫、愛想が盡きたと云ふのか。

遠山　情知らずに物云ふ事は、厭ぢやわいなア。

ト振り切つて、ついと入る。宗丹、思ひ入れ。奥より仲居、出て

らい　サア〳〵、大事ぢや〳〵、助さんの大病、太夫さん方、皆介抱に來ておくれいなア。

ト云ふて入る。

女皆　そりや行かにやアならぬわいなア。

ト行かうとする。皆々、留めて

皆々　座敷が滅入る、爰にゐい。

呉竹　イヤ、エヽ、先生さんの仕方で、この連中に愛想が盡きた。お目にかゝるも今日限り。

巻絹　誰れなと勝手に逢はしやんせ。

か保　わし等も呼んでおくれなえ。

皆々　助さんが心許ない、放しておくれ。

ト振り切り、ついと入る。宗丹、むつとしたるになし。これよりメリヤスになり、宗丹、始終火に當り、面目なき思ひ入れ、皆々、氣の毒なるこなし、よろしくあつて、方々にありたる狀、短册を拾ひ集め、物云はずに頷き合ひ、丁寧に重ねて、宗丹が前へ直し、並よく並ぶ。仔細らしく手をつかへ

皆々　先生。

ト顔にて右の狀を敎へ、いかゞ計らひませうとする。

宗丹、思ひ入れあつて、右の状を二つに握り、火鉢へ突つ込む、扇を擴げ、靜かに煽ぐ。

宗丹　ハヽヽヽヽ、さて〳〵、面目ない。門弟衆の手前、恥を忍び、からした戀は曲者、面目次第もない。

ト扇子にて、顏を隱す。皆々、氣の毒なるこなし。橋がゝりより、伊賀の平馬、浪人の形にて出て

平馬　小栗宗丹どのはこれにか。お目にかゝらう。

ト喧しう云ふ。

多門　こいつかさ高に、慮外な奴の。先生に何用がある。早く云へ、取次いでくれう。

平馬　直に逢はねば濟まぬものぢや。

多門　こいつ慮外な奴の。

宗丹　イヤ〳〵、存じて居るものぢや。拙者直に逢ひませう。いづれも一間へござつて、誰れもこちらへ參らぬ樣に、人をお留め下されい。拙者も追つゝけ歸ります。その心でお控へ下されい。

多門　畏まりました。いづれもお出でなされい。

ト皆々、入る。宗丹、平馬、殘り

宗丹　伊賀の平馬、無事で居つたなア。

平馬　宗丹どの、こなたは胴慾な人ぢや。伊賀流の忍びの術を、鍛練したるこの平馬、其許よりの頼みにて、四國の大守高島の、左京太夫が家の重寶、血の達磨の一軸を盜み

宗丹　コリヤ、廓は入り込み、低う云へ〳〵。

平馬　イヤサ、盜んでやつた褒美には、禁廷の武士に取り立てゝ、立身させうと云ふて、コリヤ、いつまで引延ばす。百兩や二百兩の目腐れ金では濟まぬぞよ。

宗丹　ハテ、性急な男ぢや。その儀に就いて悅ばす仔細もある。近う〳〵。

平馬　そりや耳寄り。して、悅ばす仔細とはな。

宗丹　そちは仕合せ者、その仔細は

ト拔き打ちに斬る。皆々、出て

皆々　先生、これは

宗丹　大切な役目を勤める、我れへ無禮したゆゑ、見せしめのため斬り捨て。

玄蕃　御尤も、亭主、參れ。

ト才兵衛、ハイ〳〵と出る。

才兵　ヤア、これは。

玄蕃　驚く事はない。宗丹どのゝお手討ち。

多門　そち達に難儀はかけぬ。死骸片附けい。

才兵　畏まりました。男ども〳〵。
ト男大勢出て、死骸片附ける。
多門　先生、四國よりの御狀。
ト狀を出す。
宗丹　兼ね〳〵遺恨ある高島左京太夫、家斷絶は明日。
ト云はうとして、氣を替へ
イヤ、明日が大事ぢやから、今宵はお暇申しませう。
皆々　お供いたしませう。
宗丹　御同道申さうか。
玄蕃　家來、提灯。
家來　ハア、。
ト銘々の紋附きの提灯を持ち、各々花道へ並よく並ぶ。ト奥の座敷のうちにて
遠山　殿さん、心持ちはよいかえ。
狩野　我が身の肌で暖めてたもつたに依つて、さつぱりとよいわいなう。
遠山　オ、、嬉し。
宗丹　戀ゆゑにこそ今宵の恥辱、遺恨重なる高島家、ムウ。
ト氣を替へ、唄になると、皆々、一樣に向ふへ入る。

奥より、狩野之助、杯持ち出て、山三銚子持ち、遠山、其ほか傾城、藝子、禿、仲居、殘らず附き出で
狩野　ヤア、もう呑めん〳〵。
山三　ハテサテ、今一盞召し上がられい。
狩野　山三が始めて酒を强ひるけれど、もうもう醉ふ〳〵た。なんぼう醉ふても、最前の無念が忘られぬ。思案極めて居るぞ。
山三　ハテサテ、惡い御料簡、憂ひを拂ふは玉箒、今一つ今一つ。
遠山　それがよござんす。わしが酌をするわいなア。
狩野　そもじの酌ならも一つ呑むワ。おのれ宗丹め、謝らさにやア置かぬぞ。
遠山　腹立てずと、マア、呑ましやんせいなア。
ト山三、狩野之助を醉はせと云ふ事を、遠山に敎へる仕方。遠山、呑み込み、無理に酒を勸める模樣あり。
橋がゝりより采女、走り出で
采女　山三さま、最前の紙面の通り、お迎ひの用意いたしましてござりまする。
山三　大儀々々、イヤナニ、殿樣、今宵遠山どの諸共、お屋敷へお歸りなさるゝがよろしうござりまする。殘りの

女中も大門口まで、送りやれ〳〵。

皆々　ハイ〳〵、送るわいなア。

狩野　太夫と一緒になら去ぬるワ。サア太夫、來い。

遠山　オヽ、危な。

　ト肩にかゝり、根つから足の立たぬこなし。

山三　太夫どの、萬事は合點か。皆も心を附けて、サア、わつさりと唄でも唄ふて、送りやれ〳〵。

狩野　唄よからう。唄へ〳〵。

皆々　送り返せば日枝の山風、身にしみて

　トこの唄、唄ひ〳〵、花道へ、右の模樣よろしく、入る。ト山三、心遣ひあつて跡見送り

山三　采女、大門口よりお駕籠に召させ、伏見までぼツついて、お船に召させ、お國元までお供の用意揃ふたか。

采女　お國へお供いたし、お船の用意、迎ひのお供、大門口に控へて居りまする。

山三　出かした。行きやれ。

采女　ハア、。

　ト向ふへ、走り入る。メリヤスになり、山三、跡を見送り、又平、最前より出かけ、見てゐる。跡を見送り、これも始終案じるこなし。

山三　氣丈なれども夜道と云ひ、年若なる采女一人では、お供が心元ない。と云ふて身共が行かれもせず。

又平　先も氣遣ひ、爰も氣遣ひ。

山三　船場までは凡そ三四里。

又平　最早今宵も八つ過ぎ。

山三　繪合はせは明け六つ。

又平　一時三里。

山三　又平、船場まで

又平　お供仕らう。

　ト又平、尻からげ、向ふへ入る。山三、跡見送り

山三　家來、提灯。

　ト家來出て、草履を直し、向ふへ來る。

　この明け六つがお家の善惡。

　トこなしあつて、氣を替へ

家來、供せい。

　ト唄になり、靜かに向ふへ入る。返し

　造り物、茶屋の道具を東へ引込み、西の方より、金閣寺の體、廊下、結構なる襖あり、見得よく突出し、この間始終唐樂。

ト向ふより、多門、大角、大領、監物、帶刀、橋がゝりより玄蕃、主税、いづれも素袍、立て烏帽子にて、各々掛け地の箱を持ち、出る。双方より、本舞臺へ、並よく並ぶ。向ふより、關の戸、衣裳襠褊、大小を差し、花道よき所にて留まる。

玄蕃　これは〳〵執權桃の井造酒之頭どの御病氣に附き、御内室關の戸どの、今日のお役目、御苦勞に存じまする。

關の　これは〳〵鬼塚玄蕃さま、結構なる御挨拶、夫造酒之頭どの病氣に附き、御内意を以て私しに名代勤める樣にとある、我が君よりの御上意。女の身の不相應な役目勤めまするも公用。無禮の段は偏平お免し下されませう。いづれも樣、御苦勞に存じまする。

皆々　イザ、先づお通りなされませう。

關の　然らば御免下さりませう。

ト關の戸、二重舞臺へ上がる。その外は皆々平舞臺へ、並よく並ぶ。

執權の名代たる私し、過言はお免し下さりませう。して、いづれも樣の家の名畫、御持參なされたかな。

皆々　持參いたしてござりまする。

玄蕃　我れ〳〵兩人先達て、宗丹公へ御覽に入れましてござりまする。

關の　スリヤ、御兩所は、宗丹さまの見極めは濟みましたかな。

玄蕃　左樣でござりまする。

關の　それは重疊の儀でござりまする。武將東山どのゝ、畫工を好ませ給ふにつけ、帝おいさめの爲、名畫を御上覽に備へよとの御上意、今日この金閣寺に於て内見分の役、直き〳〵粗忽のなき樣に、見屆けて參れとの御意に依つて、罷り越しましてござりまする。して、お目利きの宗丹どのはな。

宗丹　宗丹これに控へ居りまする。

ト宗丹、衣裳、長上下にて出て、よき所に來る。

執權桃の井造酒之頭どのゝ御内室、御内見分の横目役、御苦勞千萬に存じまする。

關の　小栗宗丹どの、名畫改めのお役目、未明よりの御出勤、御苦勞に存じまする。して、今朝よりの御内見分は、少々相濟みましてござりますかな。

宗丹　なるほど未明より、段々御内見分仕りましたれども、何か諸大名、家毎に持參なれば、仲々一時には相濟

みませぬ。併し追ひ〳〵持參次第見分いたし、只今まで暫らく休息仕つてござりまする。

關の　御苦勞千萬に存じまする。いかさま大名數多の儀でござりますれば、少々は御休息をなされずば、御苦勞にござりませう。

宗丹　イヤモ、さのみ苦勞には存じませぬ。幸ひ只今持參の人もあり、これでいたしませう。多門どの、いづれも、御持參の掛け地、これへお出しなされい。

多門　ハア、。

ト掛け地の箱を、宗丹が前に置き

拙者家の重寶、龍門の瀧に鯉の勢ひ、吳道子の筆、お改め下されい。

時豹　拙者が持參は雪舟の東方朔、御覽下されませう。

ト同じく宗丹が前に直す。此うち山三、衣裳上下にて、掛け地の箱を小姓に持たせ、橋がゝりより出て、よろしき所に控へる。

帶刀　墨繪の雲龍は漢の武帝のお筆、先祖よりの重寶でござります。

主税　手前が重寶は布袋唐子遊び、古法眼の筆でござります。

大領　拙者が重寶は千種の常信が鶯宿梅の圖、御覽下さりませう。

ト銘々よき所へ、箱を出す。山三、小姓に囁き、小姓入る。

宗丹　見ませう。

ト掛け地の箱出だし

ハア、見事々々。吳道子の鯉の勢ひ、イヤハア、別の事でござる。惣じて繪は墨色勢ひが肝心。此また瀧の墨色、鯉の勢ひと云ふものは、どうもたまつたものではござらぬ。只一目見ましても、正筆に紛ひござらぬ。納めさつしやれ。

多門　ハア、。

ト右の掛け地を取り納める。

宗丹　ハア、、こりや東方朔の圖、珍しい。なるほど雪舟の筆。見事でござる。關の戶どの、御覽なされい。

關の　いかさま見事さうに存じまする。併し私しどもは女子の事、ほんの盲人の垣覗き、何んと見ましても見事なと存じまするばかり。

宗丹　イヤ〳〵、左樣でござらぬ。下手の書いた筆と、上手の書いた繪は、素人目にも見え分るものでござる。雪

冊の筆に相違ない。サア〳〵、納めなされい。

監物　ハア、。

ト掛け地を納める。宗丹、次ぎを出し

宗丹　さて、この掛け地は古法眼が筆、布袋の唐子遊び、ア、、よう驚きました。名筆名筆。相違ござらぬ。納めさつしやれ。

主税　ハア、。

ト掛け物を納める。宗丹、次ぎの掛け地を出す。

宗丹　漢の武帝の御筆、墨繪の雲龍。見事。この墨色と云ひ、筆勢の鋭さ。イヤモウ、〳〵、言語に絶した儀でござる。關の戸どの、いづれも御覽なされい。からぢやぞや、から驚きたいものぢや。誠に雲を起し雨を催す勢ひ、イヤ〳〵、もう〳〵紛ひもない正筆。納めなされい〳〵。

ト次ぎの掛け地の箱にかゝる。此うち帶刀、掛け地仕舞ひ

千種の常信が鶯宿梅の圖、ア、、麗はしい物ぢやわいなう。かうは書かれるものぢやない。誠に倭繪の名畫、常信に相違ござらぬ。納めさつしやれ。

ト大領、掛け地を仕舞ふ。

から見ますれば、高島狩野之助が見えぬ。なぜ遲參するな。

山三　アイヤ〳〵、恐れながら主人狩野之助儀は、今朝より急病、醫療に手を盡くしますれども、未だ快氣仕らぬ。刻限延引仕りまするゆゑ、恐れながら名代として、名古屋山三春行、血の達磨の一軸持參仕りましてござりまする。

宗丹　ハア、、狩野之助どのは急病。それゆゑ名代山三とやら、持參したか。

山三　左樣でござりまする。

宗丹　關の戸どの、名代が持參の掛け物、いかゞいたしたものでござりませう。

關の　疾くより日限極まりし今日、急病とござりますれば、よく〳〵の事でがなござりませう。名古屋山三とやらが持參の掛け物、苦しからずばお改めて遣はされませぬか。

宗丹　横目役名代の其許の御意、なるほど改めませう。山三とやら、掛け地をこれへ持て。

山三　ハア、。

ト掛け地箱を、宗丹が前に出し、よき所に扣へる。宗

丹、書附けを見て

宗丹　血の達磨は惠恩禪師が筆。關の戸どの。いづれも、只今惠恩と申すは、唐土の人でござる。親子の鶴を討ちまして悟道いたし、出家となり、朝暮に繪を樂しみ、禪律の奥儀を開き、眉間の血汐を以て、繪を書いたる血の達磨。唐土日本に只一軸、ずんと見分け難い繪でござる。併し宗丹、ゆゑあつてよく見覺え居る。ずんと見覺え居る。篤と改めませう。

ト山三、氣味合ひ。ト宗丹、掛け地を箱より出だし、改める。山三、思ひ入れ。

山三とやら、これが高島家の家に傳はる、惠恩禪師が血の達磨か。

山三　左樣でござりまする。

宗丹　なるほど禪師が筆さうなが、併し見分け難いこの繪、篤と改めねばならぬ。關の戸どの、いづれも、この血の達磨の掛け地については、篤と見極めまする儀もござれば、各々には御休息に、暫らく一間へお引き下さりませう。

關の　內見相濟みました上にて、其許樣へ御馳走を申せとあつて、銘々寺內へ、宿坊を極め置きました。併し御馳走は後程。暫らく一間へ控へませう。

宗丹　先づ〳〵お控へ下されい。

關の　いづれも、お出であられませう。

宗丹　先づお出であられませう。

ト關の戸、皆々、奥へ入る。此うち唐樂。皆々入ると唐樂止む。宗丹、思ひ入れあつて

宗丹　名古屋山三、話したい事がある。近う近う。

ト恐れ入りたる體にて、にじり寄り

山三　ハツ〳〵。

宗丹　ハテサテ、遠慮はない。高うは話されぬ事ぢや、近う〳〵。

山三　ハツ〳〵。眞平御免下されませう。

ト側へ寄る。宗丹は二重舞臺、山三は平舞臺

宗丹　さて、かうぢや。貴樣は近頃まで山平と云ふて部屋住み、兄山三が山左衞門と名を替へ、貴樣に山三を讓つたのか。

山三　これは〳〵、よく御存じでござりまする。兄山三が山左衞門と改めましてより、私しが讓り受けましてござりまする。

宗丹　さう聞き及んだ。兄山三が持つてゐらるゝ內室、葛

城は無事なか、どうぢや。
山三　これは思ひ寄りませぬお尋ね、葛城儀は二ヶ年以前、相果てましてござりまする。
宗丹　死なれたか。ハテ、惜しい事をしたなア。その葛城が事に就いて、貴樣の同家中不破伴作は、廓に於いて討たれた。こりや先の山三が討つたとある。親道犬儀は、主人を恨むる事あつて、禁牢のうへ切腹した。それゆゑ不破の家斷絶。貴樣それ聞き及んでゐるか。
山三　なるほど不破親子が滅亡、聞き及び居りまする。
宗丹　その伴作は身共が兄、道犬は身共が親ぢや。
山三　エ、、なんと御意なさるゝ。スリヤ、道犬老の御子息とな。
宗丹　身共は妾腹の生れ。ゆゑあつて藁の上より小栗の家へ養子。それゆゑ道犬滅亡の時、人知れず難を遁れ、當時畫道にて出世し、殊に武官禁廷守護の武士の司、大内の師範、東山どのゝ御意に叶ふ小栗宗丹。なんと味な因緣であらうがな。
山三　小栗宗丹どのは不破道犬どのゝ妾腹、ホイ。
宗丹　爰が相談ぢや／＼。遺恨ある高島の家、殊に遺恨ある名古屋の家、その意趣深き宗丹に、この血の達磨を目利きにして、正眞として事を納めてくれいか。イヤサ、これを正眞と見極めてくれいか。
山三　宗丹さまの御厚情で、正筆に極まりますれば、高島の家は安堵。
宗丹　正眞ぢやと云ふてやらう、正眞と見極めてやらうが、山三、禮をする氣か、どうぢや。
山三　正眞にさへ極まりますれば、いかやうのお禮なりとも、お指圖に任せませう。何卒血の達磨、相違なきとのお詞を
宗丹　見極めてやらうが、ちと禮が六つかしい。金銀衣服の禮ではない。その禮と云ふは
山三　ハツ／＼。
　トにじり寄る。宗丹、思ひ入れ。
宗丹　あの物よ、近頃恥かしい事ながら、島原の傾城遠山に戀衣ぢや。狩野之助が邪魔になつて、身が心に隨はぬ。そこをそちが働きで、狩野之助が手を切らして、口說き落として宗丹が、女房に持たしてくれい。
　ト山三、當惑の體。
ムウ、當惑するは、この返答はならぬか。ならずばまだある。これはからぢや。左京太夫は病身、狩野之助はあ

の通りの泥坊。さるに依つて狩野之助を押し込め、桃の井造酒之頭の妹、胡蝶の前と縁邊あるこそ幸ひ、この宗丹を聟に取り、胡蝶の前と娶合はせ、高島の家の世繼ぎにするか。今その願ひをすれば、天子武將への取り次ぎはこの宗丹がする。この禮の相談はどうぢや。

ト山三、せき上げ

山三　思ひがけなき非道のお詞。左樣な願ひを家來の身として、なりませうか。

トよろしく詰め寄り、刀を見て、氣を替へ

サア、から申せばお氣に障りませうが、思ひがけなきお詞ゆゑ、返答に當惑仕る。

宗丹　ならぬか。なりそむない事ぢや。然らば傾城遠山を、今口說き落として、女房に持たすか。

山三　サア、それは

宗丹　それもならぬか。コリヤ、この宗丹が二つの眼は、淨玻璃の鏡。この血の達磨を贋物と見極めて、武將を欺く大罪、高島の家は滅亡。又正眞の掛け地とござると、僅か舌三寸を以て家督は安穩。コリヤ、この眼と舌で高島の家督、善惡生死の境。左京太夫も狩野之助も吠え面構へても、厭ながら、コリヤ、これ〳〵。

ト腹切る眞似して

痛い目をするばかりではない、そち達始め一家中、天竺浪人、破れたる衣を着し、野垂れ死を見るやうな。

ト扇にて山三が額を突く。山三、無念の體、刀に反り打つ。

なんぢや、斬るか、斬らば斬れ。

トにじり寄る。山三、刀を見て、拔かれぬ心意氣、じつと戴き、ばつたりと下に居る。

無念なら斬つたがよい。天子武將の仰せを受け、役目を勤めるこの宗丹でも大事なくば斬れ。遠慮なく拔いて斬れサ。エヽ、斬らぬは、無位無官の鳥羽繪侍ひの刀、宗丹が身に立たうか、と云ふは戯れ言ぢや。誠は遠山が手に入れたさぢや。遠山さへ手に入れば、達磨の目利きはこの宗丹が心にある。山三、この返答はどうぢや。

ト山三、いろ〳〵思ひ入れあつて

山三　なるほど承知仕りました。遠山どのをきつとお手に入れませう。血の達磨のお目利き、事なら納め下さりまして、三日の日延べ下さりませうならば

ト宗丹、襟を繕ひ、掛け地の箱を持ち、静かに向ふへ行かうとする。山三、つかつかと寄り、袖に取り附き

先づ／＼お控へ下さりませう。こりや、いづくへお出でなさる、な。

宗丹　東山どのゝ御前へ參り、血の達磨の目利き申し上げる分の事サ。

山三　サヽヽ、そこをお情でござる。三日と申すがなりませずば、二日の日延べ。

宗丹　ならぬ。

山三　然らば一日。

宗丹　ならぬ。

山三　然らば半日。

宗丹　イヽヤ、ならぬ。

山三　只一時の御容赦。

宗丹　ならぬ／＼、とばかり云ふても濟むまいな。それほど願ふ事ぢや。えいワ、半時待つてくれうほどに、この掛け地に傾城葛城山を添へ、身が休息所、乾の坊まで持參せい。

山三　スリヤ、半時の其うちに

宗丹　掛け地の目利き

山三　太夫が身請け

宗丹　極まる善惡

山三　お家お國の

宗丹　生死の境

山三　スリヤ、どうあつても

宗丹　山三、待つて居るぞよ。

ト掛け地を打ちつけ、靜々と向ふへ入る。山三、いろいろあつて、思案する。これよりメリヤスになり、奥より玄蕃、出る。向ふへ行かうとする。山三、袖扣へ

山三　先づ／＼お待ち下さりませう。玄蕃さま、定めし御樣子はお聞きなされたでござりませう。宗丹公には御入魂のあなたでござりますれば、血の達磨をお改めの樣子、武將へ仰せ上げらるゝを、今日中の所を御延引下さるやうに

玄蕃　山三、挨拶は厭ぢや。

ト きつと云ふ。山三、無念のこなし。玄蕃、靜かに向ふへ入る。監物、帶刀、主稅、奥より出て來る。

山三　イヤ、恐れながら、先づ／＼お待ち下されませう。萬事の樣子はお聞き下されましたでござりませう。內見分の儀、今日中延引下さる樣

帶刀　挨拶せいか。

山三　どうぞその儀を

皆々　厭ぢや。
ト三人、花道へ入る。山三、無念のこなし、きつと向ふを睨み附ける。奥より大角、出て、向ふへ行かうとする。花道にて、山三、留め
山三　暫らく／＼、お扣へ下さりませう。比良大角公、別してあなたは宗丹さまと御懇意にござれば
大角　挨拶せいか。
山三　生々世々の御厚恩。
大角　厭ぢや。
トすれ違ふて行く。素袍の裾に取りつき
山三　恐らながら幾重にも。
大角　知らぬ。
ト裾蹴飛ばし、靜かに向ふへ入る。奥より多門、大領、出る。山三、兩人の中へ入る。
山三　多門さま、大領さま、御兩所には逢ひたかつた。サア、取り分け主人狩野之助に御懇意のお仲でござれば、内見の樣子
多門　東山どのへ申し上げるを、延引して遣はされいと挨拶せいか。
山三　何卒その儀を
大領　頼んでやるまいものでもないが、山三、持つて來た血の達磨は、贋物か。
ト山三、思ひ入れ。
多門　イヤ、正眞の血の達磨は盜まれたか。但し狩野之助が放埓に、賣り拂ふて仕舞ふたか。
山三　イヤ、その儀は
多門　その譯立てのせぬ挨拶は
大領　兩人とも厭ぢや。
山三　御尤もでござれども、私しが目で見分け難き血の達磨、それゆゑのお願ひ。
大領　刻限延引して欲しくば、遠山を請け出して來い。
多門　太夫を宗丹どのへやれば、目利きはどうなりとも濟むわい。
山三　サア、その事を調へる、日延べのうちを
多門　陪臣の分として
大領　推しての願ひ
兩人　慮外な奴の。
ト山三を一時に蹴る。
山三　ムウ。
兩人　後刻御意得させう。

ト花道と橋がゝりへ、別れ入る。山三、どうも堪らへられぬと云ふこなし、刀を見て、いろ／＼こなしあつて

主水來い。

主水　ハア、。

ト瀬川主水、出る。

山三　用意の料紙。

主水　ハア、。

ト硯箱を持ち出る。これより山三、何本も狀を書く事あり、書き仕舞ひ

山三　この狀をいづれもの休息所へ、コリヤ

ト嘯く。

主水　畏まりました。

山三　早う。

主水　ハア、。

ト狀を持ち、走り入る。奧より關の戸、襠裲衣裳にて、大小を差し、靜かに出て、花道へ行かうとする。山三、つか／＼と寄り

山三　恐れながら、造酒之頭さまの奧方關の戸さま、暫らくお扣へ下さりませう。

關の　名古屋山三、夫造酒之頭どの妹胡蝶の前は、そちが主人狩野之助どのへ、東山どのよりの言ひ號け、その胡蝶どのゝ緣組みを嫌ひ、傾城遠山とやらに迷ひ、身持ち放埓。嫌はるゝ妹よりは、婚禮の延引、恥辱の夫造酒之頭どの、それゆゑ左京太夫どのとも、おのづと不仲の夫婦の非、造酒之頭どのに連れ添ふ自らを呼びかけ、願ひとは何事ぢや。

山三　狩野之助が放埓ゆゑ、御祝言延引、御懇意の仲もなんとなく隔たる疎略。恐れながら、女儀には稀なる關の戸さまの御賢慮、御名代は即ち造酒之頭さま、願ひと申すはこの一腰、山三が短氣を意見のため、兄山左衞門が魂、この魂を、憚りながらお預かりなされて、高島の家相立ちまする、御賢慮願ひ上げまする。

關の　スリヤ、名代のこの造酒之頭に、山左衞門が魂を預けたいとな。

山三　手詰めになつた今日只今、お預かり下さりませうか。

關の　山左衞門が魂、造酒之頭が預かつた。

ト刀に手をかけ、兩人、顏見合はせ

山三　スリヤ、御得心下されて

闇の　山三、腰が明いて見苦しい。

　ト刀を投げ出す。

闇の　手前の刀、家の大事、仕損じた。

山三　スリヤ、この一腰を

山三　ハツ。

　ト戴く。唄になり、闇の戸、悠々と向ふへ入る。山三、
　思ひ入れある所へ、又平、向ふより戻りかゝり

又平　お旦那、首尾よくお供いたしてござる。もう若殿に
　氣遣ひはない。して、あなたの御首尾は

山三　首尾は上々。この書状を宗丹どのへ、休息所は乾の
　坊で

　ト囁く。

又平　ハツ、畏まりました。

山三　早う。

又平　ハツ。

　ト又平、向ふへ走り入る。山三、跡見送り、思案して、
　ついと向ふへ入る。
　舞臺の道具建て、一面に引取る。

　ト向ふより一面の櫻の馬場になり、双方より花道へ櫻
　を突き出す。ト山三、花道より引返して出て來る。此
　うち向ふ、場の通ひ道、東道より多門、大領、玄蕃、
　大角、帯刀、監物、主税、いづれも袴にて、出て

多玄　櫻の馬場へ來てくれとは、何の用があるぞい。

大大　櫻の馬場にて相談とは、何事ぢや知らぬ。

　ト兩方より、こんなせりふ云ひながら、本舞臺へ來る。
　よき所にて、山三を見て

多門　山三、宗丹どのへ働きになる相談がある程に

玄蕃　櫻の馬場へ來てくれとの手紙

大領　働きになる相談とは

皆々　どうぢや。

山三　イヤ、別の儀でもござりませぬ。最前も申し上げた
　通り、宗丹さまへどうぞ延引のお執成しを

皆々　そりやならぬ事ぢや。

山三　そこをどうぞ。

皆々　ならぬ。

山三　スリヤ、千萬申し上げましても

皆々　くどい奴の。

山三　なりませぬな。

皆々　ヤア、くどい。

山三　措きやアがれ。もう頼まぬからは、お身達が工み、云ふて仕舞はつしやれ。

皆々　云へとは、何を。

山三、宗丹に頼まれ、狩野之助を放埓者に仕上げた事を。

皆々　なんと。

山三　ヤア、そればかりぢやない。主人左京太夫が重寶血の達磨の一軸も、宗丹に頼まれどこへ隠した。さつぱりと云はつしやれ。

皆々　こいつが様々の事をぬかす。どうでも氣が違ふたさうな。いづれも、構はずとござれ。

ト行かうとする。山三、引戻し

山三　一人でも動かさぬ。じたばた身動きしやると、腕を突込み、詮議の種を引出すぞ。

多門　こいつ重々の過言、うぬ。

トかゝる。立廻りにて、當てる。これより皆々、段々かゝるを、一人々々當てる。殘らず倒れる。山三、皆の懐へ手を入れ、狀を出し

山三　先達て申し上げ候ふ通り、明日は太夫を連れ……エエ、埓もない。

ト又狀を出し

奥庭にて石橋の趣向、黄金七百枚入り申し候ふ。

ト又狀を懐へ入れ、又狀を出し

兼ね〲頼み入り候ふ通り、高島の家督の儀、此方の首尾いたしたく、禁庭への仰せ上げられ、よろしく頼み入り候ふ。これこそ詮議の手懸り、忝い。

ト頂く。此うち又平、向うより出て

又平　お旦那、宗丹さまがこれに見えまする。即ち御返事。

山三　スリヤ、宗丹がこれへ來るとの返事か。

ト狀を開き

仰せの通りそれへ參り、御意候ふと、奴めに云ふたは嘘ぢや。俺をそこへ呼び出し、日延べ得心せぬ時は、我れを斬り死ぬる覺悟、さううまうは食べまい。贋物の血の達磨、差上げうとした段、東山どのへ申し上げる。大馬鹿野郎め。ヤア〱〱、スリヤ、この山三が所存を悟り

又平　風を食らうて出し拔いたか。

山三　東山どのへ言上せば、主人の身の上、うぬ。

ト最前當てられし人數、殘らず起き上がり、窺ひ寄り、どつこいと留める。又平、走らうとするを、大領、留

める。取つて投げる。走らうとする。これより山三、皆々と大ダテになる。ト皆々　追はへ入る。ト金閣寺の釣り鐘を撞く。早鐘に撞く。多門、大領、玄蕃、大角、出て

多門　ヤア／＼、短氣者めが暴れ出した。

大領　どうでも彼奴めが悟つた五晉ぢや。油斷さつしやるな。

大角　さうぢや／＼。若し知れては此方どもの身の上ぢや。皆手を揃へて討ち取らつしやれ。

皆々　合點ぢや。

多門　ござれ。

ト皆々、入る。トこれより、槍持ち、挾み箱持ち、大名の供廻り大勢、手を負ふてゐるもあり、顱へ面にて、額の斬られてあるもあり、手を打ち落とされてゐるもあり、右模樣の人數、橋がゝりより出て、臆病口へ繰り出して、逃げて入る事あり、段々よろしくあるべし。山三出る。後より大領、多門、玄蕃、大角、長柄にて取り卷き出で、タテあつて、皆々を追ひ込み、息をつく所へ、又平、走り出て

又平　お旦那。手を負はつしやつたか。

山三　宗丹めにぼツ附いたか。

又平　道筋が知れませぬゆゑ、旦那の身の上氣遣はしさに、引返しました。

山三　エヽ、本街道松原を

ト行かうとする。捕り手大勢、最前より窺ひゐて、山三にかゝらうとする。又平、一々引き退ける。山三、走り入る。これより又平、花々しき大ダテになり、このタテより、花道の櫻の馬場を、又舞臺へ段々引戻す。向ふより金閣寺にて、タテの人數を包む。ト舞臺一面の練り塀になる。宗丹、花道の眞中程へ出て、長上下の裾を斬り、股立ち取り、槍を構へ、門の片脇へひそむ所へ、山三、多門、大領とタテしい／＼、門のうちより出て、砂舞臺にて、兩人を倒し、止め刺す。宗丹、窺ひ寄り、山三を突き留める。山三、ウンと反りながら、槍を切る。宗丹、花道へ行く。山三、槍を手裡劍に打つ。中にて宗丹、留めて、山三に打ち返す。山三、死骸にて留める。宗丹、走り入る。山三、ウンとうける。又平、門のうちより、捕り手を投げ倒し、斬り拂ひ、出る。捕り手、逃げ込む。又平、山三を見て、抱き起こし

再演の

繪番附

又平　コレ、お旦那。
　ト呼び生ける。山三、氣の附くこなし。
山三　又平か。
又平　お旦那、宗丹を討たつしやつたか。
山三　宗丹めに出ツくわし、一刀と思ひしに、却つて突き
　留められ、討ち洩らしたわやい。
又平　スリヤ、宗丹めは
　ト行かうとする。
山三　待て〳〵。
又平　御用か。
山三　深手を負ふたこの山三、縫目の恥辱を受けんより、
　又平、介錯。
　ト腹へ突ッ込む。又平、うろたへ
又平　エヽ、腑甲斐ない、なんで腹切るのぢや。
山三　又平、大事のお供を仕負せず、宗丹めを討ち洩らし、
　無念なわやい。
又平　道理じや、尤もぢや。コレ、死なずともこの言譯、
　ナヽ、なんでして下されぬ。
山三　血の達磨紛失の言譯も、高島家の大事、この書狀を
　持ち歸り、兄山左衞門にお渡し申せ。深傷を負ふた山三、
　縛り首打たれんより、早く首打つて國元へ持參せい。頼
　むは、コリヤ、そち一人ぢやわいやい。
又平　スリヤ、この書狀が詮議の手懸り。お氣遣ひなさる
　るな。たとへ身を粉に碎いても、山左衞門さまにお渡し
　申しませう。が、ふち切り米を打ち込んで、心覺えのこ
　の一腰も、主人の首を切らうとて、切れ味吟味はいたさぬ
　わいの。こればかりは旦那樣、御料簡なされて下されい。
　ト泣く。
山三　コリヤ、そちが刀にて討たれずば、今突込んだ刀は
　造酒之頭さまの魂、關の戶さまより下されしこの刀、兄
　山左衞門の刀は關の戶さまへお預け申す。始終の事も頼
　み置いた。兄者人に右の樣子を申し傳へて、サア、大勢
　圍まぬうち、この魂で介錯せい。
　ト刀を拋りやる。
又平　スリヤ、どうあつても介錯を
山三　詞を背かば勘當せうか。
又平　ぢやと申して。
山三　犬死さすか。
又平　サア、それは。
山三　サア

又平　サア
兩人　サア〳〵
山三　未練な奴の。
ト又平、心意氣あつて
又平　さうぢや。餘人の手にかけんより……お免されませ。
山三　南無阿彌陀佛。
又平　南無阿彌陀佛。
ト切り兼ねる事あつて
こりやマア、なんたる因果ぢやぞいやい。
ト大泣き。
山三　未練な。
ト立つて、刀を首へ當て、掻き首にする。首、前へ出す。山三、こける。又平、愕りして、手を合はす。拍子木チョン〳〵。思ひ入れあつて、拜む。チョン〳〵
チョン
ひやうし幕

二段目　高島館の場

役名　高島狩野之助。若殿、國丸、長谷部兵庫。長谷部丹藏。秋塚萬之助。松川采女。銀杏の前。胡蝶の前。腰元、早枝。同、撫子。奴、又平。同女房お百。妻、關の戸。腰元、千枝。名古屋山左衞門。

造り物、二重舞臺、結構なる屋敷の體、西の方に中二階、塗り骨の障子入れある。此うち金襖、前に綺麗なる花毛氈、四季咲きの牡丹咲きあり。蝶飛ぶ仕かけあり。幕のうちより狩野之助、衣裳羽織にて、右花毛氈に水かけ居る。二重舞臺眞中に山左衞門、兵庫と一座に、銀杏の前、國丸、側に居る。丹藏、前髪にて、東の下座に居る。右双方せり合ひ身。幕のうちより
兵庫　イヤ、通る。
山左　イヤ、お待ちなされい。
トせり合ひにて、幕明ける。

銀杏　伯父御樣、理不盡を遊ばしませずと、マア〳〵、お待ちなされませ。

國丸　長谷部兵庫さま、其やうにお腹をお立てなされまするな。四季咲きの牡丹の盛り、御覽なされ、マア〳〵、お心をお鎭めなされませい。

狩野　國丸が申す通り、其やうにお腹をお立てなされまするは、殿の命の大きなお爲ぢや。兎角お心長う、マア、この毛氈の麗はしさを御覽じて、お慰み遊ばしませいなア。

兵庫　默り召され。なに慰み所か。左京太夫は病氣とあつて引籠り、山左衞門、そちが介抱。病體氣遣はしく思ふゆゑ、見廻りに參つたこの兵庫。身は誰れぢや、家國の伯父ぢやぞよ。その身共に逢はさぬは、家の家老職と誇り、蔑ろにするか。無禮なすと所存があるぞ。

山左　御意でござりますれども、人に逢ひなされぬが即ち殿の御病氣でござりまする。

丹藏　人に逢はれぬ病氣とは

銀杏　殿樣この度の御病氣、人にお逢ひなされば、誰れ彼れとなく拔刀にて、御亂心のお手討ち。それゆゑ男たいせし者は、御病床へは叶はず、女中ばかりの御介抱。お逢ひなされぬが、結句あなたのお爲でござりまする。

狩野　弟の私しさへお逢ひなされぬ御病氣。マア〳〵、お氣を鎭められて、折を伺ひ御對面あられませい。

銀杏　併し今日は少々お心よいとあつて、腰元どもへ御酒を下され、御保養の最中。理不盡にお通りなされたらば又もや御病氣さし起こり、あなたのお身に凶事でもあれば、却て騷動。マア〳〵、お待ち下されませい。

丹藏　スリヤ、いよ〳〵御病氣に逢ひござらぬか。

山左　御病氣に相違ござらぬ。

兵庫　然らば改めて問はう。此たび東山どのの繪合はせ。その安否も知れざるうち、狩野之助はなぜ歸つた。

山左　弟山三を差添へ、血の達磨持參の所、折惡しく殿の御病氣。それゆゑ山三名代を勤め、狩野之助儀は執權桃の井さまへお願ひを立てられ、御歸國なされたのでござりまする。

狩野　ア、コレ、その桃の井さまへは

兵庫　イヤサ、御内意のお願ひお聞き屆けあつての御歸國ハテサテ、お隱しなさるゝに及ばぬ。叔父樣にも御安心下されませう。

兵庫　イ、ヤ、いかやうに云ひ廻しても、この病氣ばかり

は呑込まぬ。なんと悴、さらではないか。

丹藏　親人、なに長々と長談議、構はず病床へ推參。

ト行かうとする。山左衛門、引廻し

山左　慮外でござらう。

丹藏　イヤ、病床へ。

ト行かうとする。銀杏の前、立廻り、留め

銀杏　介抱は女ばかり、叔父御樣でも叶ひませぬ。

兵庫　その亂心の病氣の本體、見屆け見せう。

銀杏　イヽヤ、なりませぬ。

丹藏　イヽヤ、行て見せう。

銀杏　イヽヤ、叶はぬ。

トきつとなる。奥より撫子、腰元の形にて、切り柄はめたる刀を持ち、出て

撫子　御前樣、山左衛門さまへ申し上げまする。只今殿樣一間のうちより、樣子ほのかにお聞き遊ばし、病床へたつて踏ん込まうと云ふ者あらば、俺が手を下ろすに及ばぬ、誰れ彼れの遠慮なく、斬り捨てにせいとの御意。それは御短氣でござりませうと、お留め申しましたれば、お聞き入れなく、行かうと仰しやる方は、御苦勞ながら山左衛門さま、殿樣の御意でござりまする。

山左　スリヤ、殿のお代りに

撫子　斬り捨ていとの御意でござりまする。

山左　畏まつてござる。

ト此うち丹藏、びく〳〵氣味惡いこなし。

銀杏　いかさま殿の御亂心、御病氣なれば是非がない。斬り捨ての用意しや。

山左　畏まつてござりまする。

ト刀を拔き放す。

サア、御兩所、お通りあられませう。殿の御意なれば是非に及ばぬ。眞二つに斬り捨てる。叔父御樣、お通りなされませぬか。丹藏どの、どうぢや、通らぬか。

ト刀を突きつける。丹藏、兵庫と顏見合はせ、氣味合ひあつて

丹藏　コレ〳〵、親人、病氣見舞ひ止しにさつしやれい。何を云ふても病氣とあれば主と病氣には勝たれぬ。折が惡い。マアマア、今日は止しにしたがよい。

ト早枝、腰元の形にて、走り出て

早枝　御前樣へ申し上げます。殿樣急に御用ござりまする間、若殿樣、山左衛門、國丸を同道あつて、お次ぎまで早々お越しなされませ。其ほか男たいした者、お次ぎま

でも參らうと申さば、斬り捨てになされとの御意。只今お出で遊ばされませ。

銀杏　殿樣の御意なれば、御病床へは叶ふまいが、狩野之助さま、山左衛門、お次ぎまで同道せう。マア、ナニ、丹藏どの、主と病ひには勝たれぬと得心あるは、その身の德。兵庫どのにもゆる／＼御休息なされ、御勝手にお歸り下さりませう。

ト兵庫、丹藏、むつとする。

小左　折惡い殿のお召し、切り柄のこの刀。

狩野　憎てらしう云ふ奴等の、ア、、切れ味が見せたいなア。

銀杏　狩野之助さま、山左衛門、皆も一緒に。

山左　先づお入りなされませう。

ト唄になり、殘らず入る。兵庫、丹藏、後に殘り、合ひ方。

兵庫　丹藏、左京太夫の病氣とは、心得ぬ。

丹藏　こなたと云ひ合はせ、一の宮の歸るさ、拙者が慥かに手應へ。それに存命なる樣子は、心得ぬ。

兵庫　かの下馬札の儀。

丹藏　兩頭のくちなはを取り、拙者がよろしう致し置いた。その手當てはようござる。

兵庫　東山どのへ拙者方より、左京太夫兄弟の儀、詳しう注進いたした。

丹藏　血達磨は先だつて宗丹どのへ

兵庫　我れ等が願ひの通り。して、萬端の手當てはよいか。

丹藏　その手當て、お目にかけう。

ト椽の上より、鯉口ちやんと鳴らす。下家より、忍び、出る。兵庫、井桁へかゝり、鯉口鳴らす。井戸より、忍び、出る。

忍兩　相圖の知らせ、御用は。

丹藏　シイ、。

ト邊りを見て

コリヤ、申し附けた樣子はどうぢや。

忍一　殿の病氣、下家より窺ひましたれども、舞ひ謠ひ琴三味線にて、生死の程も知れません。

ト采女、出かけ、ちよつと見る事あつて、隱れる。

丹藏　矢張り其方は下家へ忍び、コリヤ

ト囁き、忍び、椽の下へ入る。

兵庫　コリヤ、申し附けた用意は。

ト撫子ちよつと出かけ、見て、隠れる。

忍二　一味の者を語らひ、用意いたして、ござりまする。

兵庫　相圖の狼烟に、萬事拔かるな。

忍び　ハア。

兵庫　早く。

ト忍び、又井戸へ入る。

丹蔵　親人、手當てはようござらうがの、

兵庫　これ程にまで手當てをしたれば、今日中に大望成就

丹蔵　萬事首尾よう參つたらば

兵庫　西三十三國は我が手の裡。

丹蔵　大願成就、忝い。

兵庫　シイ、聲が高い。

ト橋がゝりより、侍ひ一人出て

侍ひ　兵庫さまへ申し上げまする。東山どの執權桃の井造酒之頭さまより火急のお使者、只今御歸館あられませう。

兵庫　都より火急の使者、此方より手當ての通り、うまいうまい。

丹蔵　萬事首尾よう、親人。

兵庫　悴、丹蔵。

丹蔵　後刻御意得ませう。

ト兵庫、橋がゝりへ入る。丹蔵は奥へ入る。ト釆女、出て、縁の上にて、ちやんと鯉口鳴らす。忍び、出て

忍び　丹蔵さま、御用でござりまするか。

ト尋ねる。釆女やり過ごし、捕つたとかゝる。忍び、斬りかゝる。立廻りよろしくあつて、當て

釆女　うせう。

ト引立て、橋がゝりへ入る。始終メリヤス。奥より撫子、一腰を持ち出て、井戸の上にて、鯉口鳴らす。井戸より、最前の忍び、出る。

忍び　兵庫さま〳〵。

ト撫子と顔見合はせ、愕りして、切りかける。立廻り見得よくあつて、撫子、忍びを一かせ切る。忍び、撫子にちよいと當て、直ぐに井戸へ飛び込む。山左衛門きつと見る。撫子、起き返り、山左衛門と顔見合はせ、山左衛門、行けと云ふ事を、顔でする。井戸へ飛び込む。山左衛門、跡をきつと見て

山左　ハテナア。

ト唄になり、向ふより、萬之助、着流し、大小、浪人の形にて、顔を隠し出る。後より奴大勢、附き出る。

大勢　退り居らう〳〵。

山左　コリヤ、騒がしい、何事ぢや。

奴一　ハア、これなる者が山左衛門さまに、願ひの筋ありと申して、御門まで理不盡に通りますゆゑ、かくの仕合せでござりまする。

山左　ムウ、そな者、笠を取れ。

萬之　ハア。

ト笠を取る。兩人、氣味合ひあつて

山左　よい〳〵、この者は見知り居る者、苦しうない。この者は此まゝにして、我れ達は引け。

大勢　ハア、。

ト皆々、橋がゝりへ入る。

山左　秋塚源五郎が弟萬之助、無事にあつたな。

萬三　山左衛門さま、御健勝の體、悦ばしう存じまする。

山左　其方兄弟、殿様より御勘氣、その御勘氣お赦され下されいと、身共へ願ひの取り次ぎせいか。

萬三　兄源五郎儀、御用金千兩引負ひ、御勘氣を蒙りまして、何卒金子調達いたして、御赦免を願はんと、兄弟心を盡くしまして、やう〳〵半金。

ト懐より五百兩、財布入りの金を出す、

何卒あなたの御推擧を以て、この半金五百兩をお詫びの種。

山左　殿へ差上げる事罷りならん。其方たち兄弟が勘當は、金子ばかりの科ではないぞよ。アレ、あの園に戯れ遊ぶ蝶々に、過ちせしゆゑ御勘當。

萬之　スリヤ、蝶々に過ちせしゆゑの御勘當とな。ハアア。

山左　仔細篤と云ひ聞かす。

ト合ひ方になり、蝶々花壇に群れ遊ぶ。山左衛門、蝶蝶に手をつき

御先祖大和中納言助國卿御夫婦、明け暮れ草花を愛し給ひ、福壽の花の雪を分け、咲き初めしより水仙の、霜を戴き匂ふまで、根に土かひ、花に水うち、御夫婦ともに相病みの、同じ枕に去り給ふ。

ト此うち、銀杏の前、中二階の障子明け、立ち聞きする

その夜の夢に助國夫婦、花園に來たり給ひ、遊び給ふと見給ひし明けの日より、花園に戯むれ遊ぶ二つ蝶、扨てこそ助國御夫婦は、二世の契りの睦まじく、蝶々になり給ひしかと、大内までも隱れなく、男蝶女蝶を象どりて

祝ひ詩ふく蝶花形。かほど目出度きお國の血脈、いかなれば闇々と、飛び道具にて人知れず、サア、人も多きにそち達が、花園御番の折から計らずも、蝶々の死せしは、時の不肖とは云ひながら、そち達が不忠と云ふのか、御先祖を重んじ、御用金の沙汰もなく、科を輕んじ御勘當、サア、一大事の咎めあれば、御勘當赦免は叶はぬ。

萬之　スリヤ、御先祖に過ちせしゆゑ

ト思案して、腹切らうとする。山左衞門、留めて

山左　コリヤ、待て、なんで腹切る。

萬之　兄源五郎が若氣の至り、御用金の不足せしを、蝶々ゆゑの御勘當と命を助けて、お慈悲深さ殿のお情、その蝶々の過ちは、この萬之助一人の科。腹切つて相果てます。何卒兄源五郎儀を

山左　一つの功が立つたらば、卽ち殿になり代り、勘當は赦してくれう。コリヤ、命を捨てゝ功を立てい。

萬之　命を捨てゝ功を立ていとはな。

山左　年は行かねど忠孝に、命を捨てる志し、見所あるゆゑ教へてくれる。功を立てるはこの一卷。

ト一卷を出して見せる。

萬之　こりや忠臣を集むる連判、

山三　シイ。

ト銀杏と顔見合はせ、障子びつしやりさす。山左衞門、思ひ入れあつて

命を捨て、功の立てやう、山左衞門が教へてくれう。身が部屋へ行て待つてゐよ。

萬三　ハア。

ト老いせぬやと猩々の謠ひ、囃子になる。萬之助、奥へ入る。山左衞門、思ひ入れあつて、靜かに奥へ行かうとする。銀杏、長枕を顔にあて、酒機嫌の心にて、向ふへ立ち塞がり、厭らしくする。山左衞門、奥へ行かうとする。あちこち、模様よろしくあつて

山左　銀杏の前さま、御病床へ御用事でござります、お退き下さりませう。

銀杏　山左衞門、わしやそなたに云ひたい事がある。返事してたもるかや。

山左　これは又改めました御意、何事でござるな。

銀杏　そなたがたんと可愛がりやつた、女房の葛城は死にやつてから、もう何年になる。

山左　もう三年になりまする。

銀杏　嘸戀しかろ、寢間が淋しかろ。
山左　拙者心が急きまする。お免されませう。
銀杏　山左衛門、待ちや。返事してたも。
山左　返事とはなんの返事。
銀杏　惚れた。
山左　何がなんと。
銀杏　どうもならん程いとしぼいわいなう。
　ト抱きつく。振り放し、行かうとする。銀杏の前、留めて
銀杏　待ちや。人に大事を云はして置いて。
山左　コレ、殿の病氣、實を知つたはお前ばかり。
銀杏　大事ない。昨日別れたも後家、言號ばかりで死んだも後家、後家と云ふ字は二つない。どうもならんわいなう。
　ト抱きつく。
山左　コリヤ、こなた醉ひ狂ひか。
銀杏　醉ふたとも〱。醉はいでこれが云はれうかいの。山左衛門、情ぢや、どうぢやぞいなう〱。
山左　こなた山左衛門が心を疑ひ、殿の横死を
　ト云はうとして、邊り睨め
お心遣ひなさるゝな。
銀杏　イヤ、さうぢやない。コレ、色よい返事をしてたもいなう。
山左　スリヤ、どうあつても
銀杏　オヽ、いとし。
　ト抱きつく。山左衛門、氣色して、引附け
銀杏　こなたわいなう、此度お家の大事、お腹は變れど國丸さまと云ふ、お世繼ぎがござるぞや。重ねて淫ら仰しやると、手は見せん、打ち放す。退かつしやれ。
　ト行かうとする。銀杏の前、立廻りにて懐へ手を入れ、連判を出す。
これは。
　ト銀杏の前、懐劍にて指切り、血判して
銀杏　コレ、この男に惚れたゆゑ、心中に指切つたぞや。
山左　スリヤ、この男に惚れたゆゑ。
銀杏　近頃押しつけがましいが
山左　國丸さまを世に立てゝ
銀杏　肌を合はしてしづぼりと
山左　殿の敵が討ちたいか。
銀杏　胸に迫りしこの思ひ。

山左　叶へて進ぜう。
銀杏　必らず誓ひは
山左　刀にかけて
銀杏　エヽ、忝い。
山左　コレ、御病體を悟られぬ樣。
　ト銀杏の前、氣を替へ
銀杏　山左衞門、休息。
山左　ハア。
　ト唄になる。銀杏の前、一間へ入る。山左衞門、連判狀を戴き、靜かに一間へ入る。ト奧より千枝、腰元の形にて出で、物案じの體
千枝　まゝならぬこそ浮世なれと、よう云ふたものぢや。わたしが此やうに思ひ暮らして居る事を、殿樣はなんとも思し召すまい。
　ト懐より雛を出し
わたしがこの心のうち、推量なされて下さりませ。とんと辛氣な事ではあるわいなう。
　ト俯向き、しつぼり泣いてゐる。ト花道よりお百、木綿やつし、又平女房の形、錢差しを肩に持ち、急がしさうに出て

お百　ハテ、今日は思ひの外早う仕舞ふた。もう都の便りがありさうなものぢや。
　トこんな事云ひ〳〵出る。ト千枝を見て
コリヤ、お千枝さん、お前そこに何してゐやんす。
　ト云ふうち、千枝、最前の雛を向ふへ立て、殿と話してゐる心にて、雛に物云ひ〳〵、お百に氣の附かぬこなし
お百　お千枝さん〳〵。
　ト大きな聲して云ふ。千枝、恂りして、雛をちやつと隱す。
千枝　誰れぢやと思ふたらお百さん、よう戻らしやんしたなア。
お百　わしやよう戻つたが、さつきから人に物云はして置いて、立ち雛さんに話しゝてゝばつかりゐやしやんす。ありやなんぢやえ。
千枝　あれはナア、あれは、サア、ほんに今日は、わしが痞へが起つて心惡いによつて、雛さんを出して、わたしや痞へを治さうと思ふて
お百　ハア、痞への藥は雛がよう効くかえ。ホヽヽヽヽ可笑しい藥もあればあるものぢやなア。さうしてマア、

顔の色もきつう悪し、きつう心悪いかえ。

千枝　わたしや思ふ様にならん事ばかり、いつそ死んでしまいたうござんすわいなア。

ト泣く。

お百　がそれ、どうしてもこりや……痞へぢやあらう、もの痞の起こる時分ぢやて。この間からの形素振り、慥かに……お千枝さん、悪いぞえ。よう物を思ふて見やしやんせ。お前はわたしが連合ひ、又平どのゝ妹ぢやないかえ。人も多いに若殿様、サア、いかに若いと云ふて、見附けて置いたぞや。お主様が大切と、思ふ心からであらうけれど、大切がり様が悪い。なんぼ若殿様が大切がらさうと仰しやらうとも、マア、幾度も辭儀をさしやんすりや、こんな痞へは起らぬけれど、何が若うはあり、大切がりたい／＼と思ふ矢先、若殿様が、コリヤ、お千枝、大切がらさうかと仰しやつたを、おつとまかせと大切がらしやんした物でがなあらう。同じ大切に思ふと云ふても、随分目立たぬ様に大切がりましたがよいぞえ。殊にお言ひ號けの祝言と云ふて居る中、ひよつと大切がり過ぎると、どんな事があらうも知れん。嗜ましやんせ嗜ましやんせ。わしや又マア、大殿様御病氣の祈りのため、又二つにはわたしの御主人山三さま、都の首尾のよい様に、次手に夫又平どの、無事でお國へ戻らしやる様にと、三つ四つ兼ねてお百度参り、毎日々々参る度、この錢差しの藁すべに、しびれ切らして都の便り、早う下向と氣は急けど、女の足の爪先から、きり／＼しやんと鈴戴き、笠かたむけて入相の、花見遊山と事變り、心ばつかり、世界に神佛さまない時は、どこへ参つてこのお願を、かつけにも足の底豆も、苦になる物はお主や夫。今日や御歸國、明日は戻りやござるかと、毎日々々門口の、土踏まずの痛むほど、待つてばかり居るわいなア、ア、しんど。あんまり物云ふたので咽喉がひつ附いた。

千枝　茶々でも汲んで來て上げうかえ。

ひや　イエ／＼、わしが云ふ事ばつかり云ふてゐて、まだ今日の御機嫌伺ひに上がらん。お千枝さん、わしが御機嫌伺ひに上がつたら、お腰元の早枝さんを頼んで、お前の痞のお薬を拵へおこす程に、あんまり服ましてぶらつきの來ぬ様に、コレ、わしが今云ふたうち、大切がりが大事ぢやぞえ。ドリヤ、御機嫌を伺ひに上がらうか。

ト入る。合ひ方になる。

千枝　今のお百さんのお詞、そんならわしと殿さんとの譯

を知つて今の意見。エヽ、どうぞ首尾ようお目にかゝりたい事ぢやなア。

トうちより、狩野之助

狩野　花壇から俺を呼ばふは。

ト云ひ〳〵出て、千枝を見て、嬉しいこなし。

千枝　殿様、よい所へ、ようお出でなされて下さりましたなア。

ト抱きつきさうにして、もじ〳〵する。

狩野　ムウ、俺を呼んだは、お千枝、われか。家來の身として主を呼びつける慮外者め。

トむつとした體にて、煙草盆ひき寄せ、煙草のまうとして、火のないこなしにて、狩野之助、手を叩く。千枝、思ひ入れあつて

千枝　ハイ〳〵、これはしたり、誰れもゐさんせぬか。

ト云ひ〳〵、そつと火入れを取る。狩野之助、わざと見ぬ顔してゐる。千枝、思ひ入れあつて、煙草盆の火入れに火のあるを見て、取つて來て、そつと煙草盆に入れる。狩野之助、さあらぬ體にて、煙草吸ひ附ける。雁首の方を口へ入れる。狩野之助、むせる。千枝、思ひ入れあつて、茶を汲み

お茶上げませう。

ト差出す。狩野之助、何心なく取つて、吞まうとして、こなしあつて

狩野　ムウ、この茶、俺に吞めか。

ト千枝、あいと云ふこなし。

コリヤ、俺にぢやあるまい。へエ、この茶は、誰れぞ外に吞みたがる者もあらうし、ナア、外の人に吞ますのであらうがな。

ト千枝、少しむつとする思ひ入れあつて、泣かうとして、氣を替へ、最前の雛を出し

千枝　殿さん、これお覺えなされてゞござりまするか。

狩野　その雛がなんとした。

千枝　よもや忘れはなさるまい。過ぎしお雛祭りの時なア、お酒の上でツイ

ト思ひ入れあつて

その時お別れしなに、この雛様を俺ぢやと思ふて持つてゐいてゝ、おくれなされたこの雛様、ほんに御勿體ない、有難いお情も、このお雛様のお形ぢやと思ふて、肌身も離さず持つて居りまするわいなア。わたしや嬉しう思ふて居りますに、いかにお主様ぢやて、ちつとは又思

ひやつてくれなされたてゝ、罰も當りますまいぞいな
ア。
　ト恨み泣く。
狩野　ムウ泣くか。こりや可笑しい。そんなら又あの丹藏
とは、なぜじや〳〵云ふぞ。
千枝　ナンノイナ、わたしや構や致しませんけれど。とつ
とあの丹藏さまめづらが、どうも斯うもならん所へ、お
前樣がお出でなさつたによつて
狩野　エ、、惡い所へ、あた邪魔なと思ふたであらう。
千枝　オ、、憎くらしい、なんのマア、あの楊枝屋の看板
見るやうな丹藏づらに
狩野　イヤ〳〵、可愛らしい前髮、隨分可愛がつたがよい
てや。
千枝　ナアニ、わたしやあなたを退けて、外に人を可愛が
る心は、微塵もございませんけれど
狩野　けれどなら、なんであの樣にじなつくぞ。
千枝　さうもう無理仰しやれ。わたしが方から相手になり
は致しませんわいな。お前樣こそ傾城を可愛がりなさ
れ、わたしや誰アれも、外の人の事は思ひはいたしませ
んわいな。

狩野　こいつが〳〵、傾城々々と澤山さうに、云ひ居るが
な。
千枝　アイ、ちつと澤山にござりまする。ナア、言ひ號け
のお姫樣と云ひ、澤山にあるに依つて、澤山に申すので
ござりまするわいなア。
狩野　ハテ、お悋をやるな。こりや面白いわい。都で太夫
に別れてからこの方、少し口舌氣がなうて淋しかつた。
さらば少し口舌さして樂しまうか。
千枝　ムウ、そんなら太夫さまの代りに、わたしと口舌と
やらをして御覽じやるかえ。
　ト嬉しさうに云ふ。
狩野　致さう〳〵。少し徒然な。サア、そろ〳〵口舌をか
けるぞ。
　ト千枝、少し困つた心意氣あつて
千枝　そんなら憚りながら、口舌をいたしかけまするぞ
え。
狩野　これは〳〵、御慇懃な挨拶、痛み入る仕合はせでご
ざりまする。
千枝　オ、、御勿體ない、そないに仰しやると、とんとど
うも云ひ樣がござりませんわいなア。

狩野　ハヽヽヽ、蔭裏の豆もはぢけ時とやら、花の口切り、紅梅の蕾、少しありついてはあれども、流石外見ずの生娘、手入らずの屋敷育ち、洒落れた樣でもまだ野暮なものぢやわい。
千枝　その野暮と云ふのは、なんの事でござりまするえ。
狩野　サヽ、その野暮と云ふのはな
千枝　野暮と申しまするは
ト狩野之助、思ひ入れあつて
狩野　ハテ、可愛いと云ふ事ぢやわい。
ト千枝、嬉しいこなし。
千枝　へエ、そんなら野暮と申しまするのは
狩野　可愛いと云ふ事ぢやわい。
千枝　アノ、ほんまに野暮でござりますかえ。
狩野　オヽ、野暮々々、ほんまぜうなしの野暮野暮。
千枝　オヽ、嬉し。
ト抱きつく所へ、乘り物、出る。ト此うち橋がゝりより、大勢、ぬれの眞中へこむ。狩野之助、千枝、行き當たり、恟り。
千枝　此お乘り物は
狩野　無禮千萬、花壇まで乘り打ち、マア、何者ぢや。

ト戸を明ける。うちより關の戸、衣裳裲襠にて出る。
關の　桃の井造酒之頭が妻、關の戸でござりまする。狩野之助どの、無事にお暮らしなされたな。
ト狩野之助、恟り。
狩野　誠に關の戸さま。山左衛門、關の戸さまのお出でぢや、早うおぢや／＼。
ト山左衛門、うろたへ、提げ刀にて走り出る。關の戸、二重舞臺よき所へ居り
山左　これは／＼、思ひがけない御入來ゆゑ、略衣の出迎ひ、恐れ入りましてござりまする。
關の　これは／＼山左衛門、禮服を着するに及ばぬ。自らが參つたは、夫の內用。此方へ案內もなく、無禮の推參。矢張り其まゝ／＼。
狩野　ほんに思ひがけない、輕々しいお入り、シテ、御內意の御用とは
關の　今朝この地へ入津いたし、密かにこれへ參つたは、祝言の事ぢやて。
ト狩野之助、千枝、氣味合ひあり
狩野　ハア／＼、御尤もに存じます。造酒之頭さま御妹君、胡蝶の前さま、御祝言延引、東山どのへの聞こえ、

彼れこれ思し召されて

關の　イヤ〳〵、姫の祝言ではない。そりや表だつての祝言。今日密かに參つたは、狩野之助と內祝言がして欲しい。

山左　內祝言とはな

關の　島原の傾城遠山と云ふ太夫と、內祝言がして欲しい。

ト狩野之助、悔り。山左衞門、思ひ入れあり

コリヤ、その乘り物の傾城遠山を、女中、これへ伴ふてたも。

ト千枝、度の立つこなし。狩野之助をぐつと睨む。

狩野　こちや知らぬ。關の戸さまの御意ぢや。千枝、太夫を早う連れて來い。

ト嬉しさうに云ふ。

關の　ソレ〳〵、千枝とやら、大儀ながら遠山を、早う早う。

ト千枝、悲しきこなし、立ち兼ねる事なんべんもあつて

狩野　エヽ、埒の明かぬ。千枝、早う連れて來ぬか。主の詞を背くか。

千枝　ハイ〳〵。

ト悲しさうに、びん〳〵として、乘り物の側へ寄り、かうお出でなされませうと泣き〳〵云ふ。ト乘り物のうちより、胡蝶の前、白小袖、衣裳裲襠、綿帽子にて顏隱し、二重舞臺よき所へ直る。狩野之助、他愛もなう悅ぶこなし。

狩野　そんなら太夫はあなた樣か

關の　身請けして伴ふた。悔りであらう、合點が行くまい。夫の妹胡蝶の前と、狩野之助どのと祝言延引、その元を篤と聞けば、この遠山どのとの事。傾城に見替へられては、夫の武士が立たぬと云ふ所を、とんと取り置き、夫も粹とやら、自らも粹とやらになつて廓へ行て、この內祝言を取り急ぐも、此のち表立つての祝言、急ぎたいばつかり。サア、狩野之助どのにも、身請けはしたからうけれども、緣を結んだ夫の手前を憚り、山左衞門などが自由にさせんと推したゆゑ、執權職を取り措いて、仲人やら、名代の婿入りとやら、極く內々の內祝言、狩野之助どの、イヤ、どうでござるぞ。

狩野　イヽエ、もう〳〵內祝言は捨て置き、外祝言でもいたします。サア、祝言ぢや祝言ぢや。千枝、早う杯の

用意云ひ附けい。

ト千枝、ピンとする、

サア、祝言ぢや／＼。

ト滅多無性に悦ぶ。山左衛門方を見て、心意氣あり

山左衛門、折角連れてお出でなされたもの、祝言しても大事ないか。

山三　御賢慮の内祝言、背くは却つて無禮、先づ先づお受けあられませう。女ども、長柄三寶の用意々々。

ト腰元大勢、銚子三寶持ち出る。此うち奥にて、目出度く謠ひ囃子になる。

關の　山左衛門、あのうち囃子は。

山三　主人左京の太夫が、病中の慰みの打ち囃子でござりまする。

關の　祝儀の謠ひ、自然と陰を司る、愁ひの音聲、スリヤ、噂の通りか。

ト心意氣あつて

一人目出度い／＼。サア、杯は遠山から、一つ吞んで狩野之助どのへ。腰元の千枝とやら、酌を頼む。

ト千枝、むつとするこなし。

狩野　主の詞を背くか、早う／＼。

千枝　ハイ／＼。

ト泣き／＼、酌に立つ。狩野之助、滅多無性嬉しきこなし。小蝶の前、杯取り上げる。千枝、こつゝり云はして、根つから酒つげぬ思ひ入れ。右の模様よろしくあつて、納まる。

關の　内祝言の杯、千秋萬歳、目出度い／＼。

山左　家の吉例、蝶花形の御祝言、千秋萬歳、お目出度うござりまする。

關の　サア、杯も納まつたれば、狩野之助どの、嫁御の顏、早う／＼。

狩野　イヤモウ、始めて逢ふた者の樣に、初心な所が可笑しうござりまする。關の戸さま、御免されませ。ドレ、綿帽子は俺が取つてやらう。

ト綿帽子を取る。顏見て、恟り。

ヤア、こなたは胡蝶の前どの。

胡蝶　狩野之助ざま、お嬉しうござりまするわいなア。

狩野　スリヤ、遠山ぢやと仰しやつたは

關の　夫の妹胡蝶の前、傾城の名を借つて、祝言の杯は、一家の緣を結ばんため。

山左　スリヤ、御一家の因みを結び

團の　東山どのより高島家へ御不審、因みを結めば夫の仁儀、乘り物持て。
乘り　ハア、
　ト乘り物舁き出る。乘らうとする。山左衞門、つかつかと寄つて、よろしく留め
山左　恐れながら、御祝言の極意はな。
　ト團の片、乘り物より刀を出だし
團の　當にて山三より預かりたるそちが魂。
　ト山左衞門が前へ抛る。
山左　山三が短氣を鎭めよと、出だし置きたる左文字の鞘。
團の　その左文字の、サア、その身、ナア、その身となつたる上は祝言、善悪は後刻。乘り物やれ。
乘り　ハア、。
　ト乘り物舁き上げ、忙しうあちへ入る。
狩野　なんの事ぢや。一つも合點が行かぬ。
胡蝶　申し狩野之助さま、清水寺花見の折柄、思ひ染めたわたしが願ひ、東山より有り難い御上意で、言ひ號けも名ばかり、焦れ〳〵た今日の今、遠山どのの名を借つて、祝言のお杯、嘸お腹が立ちませう。これも添ひたいゆゑ。堪忍して下さりませ。
　ト取り縋き、泣く。
狩野　胡蝶の前どのを遠山にして、なんの事ぢややら合點が行かぬ。
　ト向ふバタ〳〵にて、又平、尻からげ、大肌脱ぎ、泥だらけ、疵だらけ、首を背負ひ、三尺手拭ひを腹に卷き、花道よりこけ出で、足の立たぬこなしにて、大勢の中へこけ込み、うんと悶絶して、目を廻す。皆々、吃驚り。
山左　又平が歸つた。
狩野　サア、又平が戻つた〳〵。
千枝　兄さん、戻らしやんしたか。コレ、お百さん、兄さんが戻らしやんしたわいなア、お百さん〳〵。
　ト呼び立てる。早替りにて、お百、走り出で
お百　嬉しやこちの人、戻らしやんしたか。
　ト口喧しう云ふ。山三、又平を引起こし
山左　又平、コリヤ、氣を附けい。
　ト大きな聲で呼び生ける。又平、氣の附いたるこなし。
お百　こちの人、氣が附いたかえ。

千枝　兄さん、戻らしやんしたか。
狩野　目出度い〳〵。都の首尾を云ふて聞かせい。
お百　ハイ〳〵、あんまり目出度い都の様子を、申し上げうと氣が急いて、それでどんな事でござります。コレ、こちの人いなア。
ト口々に目出度い事を云ふて、介抱して呼び活ける。
山左　どうぢや、又平、氣が附いたか。
ト又平、山左が手をじつと握り
又平　山左衛門さま。
ト震ひ、しめ泣き
お百　エヽ、この人はいたう、とつとあんまり嬉しがつて、嬉し泣きでござりますわいな。
千枝　大事のお供、首尾よう戻らしやんした事ぢやに依つて、嬉し泣きは尤もぢやわいなア。
狩野　尤もぢや〳〵、こちら向け
ト引起す。
又平　若殿。
狩野　太夫は無事なか、まめでゐるか。
山左　ハテ、譯もない。又平、詰合はせの様子は
ト又平、俯向く。

お百　この人、若旦那山三さまわいなア。
千枝　兄さん、都の様子わいなア。
ト又平、うろ〳〵して
又平　山左衛門さま、女房、妹、すりやもう爰は
山左　御本國中屋敷。
又平　アヽ、嬉しや。
トうんと目を廻す。口々に呼び活ける。
山左　若旦那様、拙者が思ふ仔細がござれば、胡蝶さま諸共、皆を召し連れられ一間へ御入來。必らずこの所へは、何者も参らんやうに、千枝、腰元どもへも篤と申し附けやれ。
千枝　ハイ〳〵、畏まりました。サア〳〵、お出でなされませ。
山左　ハテサテ、ござれと申せば、早うござりませう。
胡蝶　そんなら奥で、殿様。
千枝　勝手次第に御樂なりませ。
皆々　サア〳〵、お出でなされませう。
ト皆々、よろしくあつて、殘らず入る。
山左　お百、水持て。
お百　ハイ〳〵、畏まりました。

山左　ト手水鉢の水を掬ひ、又平に呑ませ、呼び生ける。
又平、氣が附いたか、どうぢや。
ト又平、思ひ入れあつて
又平　女房ども、お旦那、此お屋敷は
山左　御本國中屋敷。コリヤ〳〵、うろたへずと氣を附けい。氣が附いたか。
お百　こちの人、よう戻らしやんしたなう。大てい待つた事ぢやない。繪合はせの首尾もよう、山三さまも御息災で、お前も御息災で、よう戻らしやんしたなう。目出度い。都の樣子、早う云はうと餘り氣をせかんすに依つて、それでこんな事ぢやわいなア。エヽ、つツときよろ〳〵、なんぢやいなア。若殿さまわいなう。
又平　サア、その若旦那山三さまは
トうろ〳〵する。
お百　若旦那はどうぢやぞいなう。
又平　ワ、若旦那の事は
山左　繪合はせの樣子は
又平　繪合はせの樣子は
山左　どうぢや、又平。
ト又平を引起こす。二人が顏を見て、どうも云はれぬ思ひ入れ、こりや狀を出さうとして、出されぬこなし、我が手に身を搔きむしり、舞臺を叩き、拳を握り、無念泣きに泣く。兩人、恟り。
お百　オヽ、きやうと。恟りするわいなア。なんで泣くのぢや。蟲が出りや惡い。
ト手水鉢の水を酌み
この水呑まんせ。サア、樣子はどうぢや。若旦那はどうぢやぞいなう。
ト山左衞門、又平を引附け
山左　ヤイ、奴のおのれ、大切な供をしながら、この態は何事ぢや。此方にも氣がゝりの數々。サア、ぬかせ、樣子はどうぢや。
ト氣をせいて云ふ。又平、きつとなり、首の風呂敷を前に置き、明けうとして、山左衞門が顏を見て、どうも明けられぬ思ひ入れ、身を揉み、エヽと無念泣きに、俯向く。
お百　オヽ、辛氣、なんぢやぞいなう。エヽ、そりや土產買ふてござんしたか。その土產がどうぞしたので、その言譯がないと思ふて、それで泣かんすのか。エヽ、子供かなんぞの樣に。お詫び申し、泣かんすな。マア、風呂

敷なお土産を
ト明けうとする。又平、酷う叩きのけ、取つて抛り
又平　構ひ居るな〳〵。
ト山左衛門が顔を見て、うんと無念の大泣き。
山左　又平、その風呂敷のうちなは、弟名古屋山三が首か。
トお百、恟り。又平、ぎつくりして
又平　スリヤ、山三さまの御生害を
ト山左衛門、刀を見て
山左　山三が短氣を納めうため、遣はし置いたる左文字の刀、關の戸さまより、この鮫鞘は手に入つた。
又平　スリヤ、繪合はせの、その仔細は
山左　イヽヤ、その様子は聞かねども、無念徹せし山三が最期。又平、殘念な死を遂げさしたなア。
ト又平、横投げにこけ、大泣き。
お百　そんならこの風呂敷のうちなは
ト風呂敷を明ける。中より首出る。
こりや山三さまのお首、モシ、山三さまでござりますわいなア。
ト首を持ち、うろ〳〵する事あつて、よき所へ直し、

又平を引起こし、いろ〳〵思ひ入れあつて
コレ、こちの人、又平どの、腰拔けどの、大腰拔けどの、よう戻らしやんしたなう。こなさん都へ何しに行かんした。ヤア、山三さまのお供ぢやないか。御主人のお詞はどこへ入れさんした。勿體ないお主さまが頼むと仰しやつたお詞は、コレ、この耳へは入らなんだかいなア入らなんだかいなア。又その上に、行かしやんす宵の晩の寐間で、なんと云ふたぞ、首尾ようお供して戻らしやんせえと口の酸うなる程云ふたら、氣遣ひすな、俺がお供するからは、大船に乘つた樣に思つてゐい、氣遣ひのキの字もないと、高言は八げん話して置いて、こりやなんぢや、此やうにお首ばかりのお供して戻らしやんせとは、わしや云はぬわい。エヽ、穢な大腰拔け、こなたはなう〳〵。
ト又平の胸倉を持ち、振り廻す。又平、向ふへ突き退け
又平　嬶め。
ひや　なんぢや。
又平　若旦那の御切腹は、高島の家を立てるため、狩野之助さまに成り替はり、小栗宗丹に斬りつけ、一味の奴等

を打ち放し、科を身に引受けて

　トお百、悔り。

山左　シテ、宗丹めは、仕止めたか。

又平　組み子の多勢が取りこめ、無念や討ち洩らさつしやつたわいの。

お百　コレ、そんならお前なり代り、宗丹とやら瓢箪とやら、斬りちや〳〵くつてはしまはつしやれぬ。

　トお百を向ふへ振り廻し

又平　嬶め。

お百　なんぢや。

又平　それをおのれに習はうか。主人に代つて死なれうものならば、死にたいわいやいやい。

　ト泣く。お百、引起こし、胸倉取つて振り廻し

お百　こちの人。

又平　なんぢや。

お百　それほど無念口惜しくば、なぜ山三さまと一緒に死なしやれぬぞ。

　ト又平、お百を振り廻し、髪もわけも引きしやなぐり

又平　嬶め。

お百　なんぢや。

又平　それもおのれに習はうか。腹かッさばからうとしたれば、山三さまの仰しやるには、コリヤ、この首を敵に渡すか、お家の大事ぢや、この書き物、この書状を持ち歸り、山左衛門さまへ渡せ、背かば勘當と、のつぴきならぬ御遺言。多勢をやう〳〵追ひまくり、晝は山中森の蔭、追つ手を忍び夜道ばかり、この胸のうちは眞の闇、お首のお供して戻つた心は、どの様にあらうと思ふぞいやい。詮議の書状ないならば、おめ〳〵と生きては歸らぬ。口惜しい。無念な〳〵。

お百　そんなら大事の状があるゆゑ、無念なお首をお供して。道理ぢや〳〵、尤もぢや、道理ぢや〳〵。

　ト大泣き。

山左　又平、詮議ある書状は。

又平　書状はこれに。

　ト腰に巻いたる三尺手拭ひより、状を出す。

山左　スリヤ、この書状か

　ト一通を取り上げる。残りの状を、お百、皺を伸ばす。

　奥庭にて石橋の所作事、黄金七百兩入用。

　ト山左衛門、口明の書状を、段々讀むことあつて

高島家督、我れ〳〵へ仰せ附けられ候ふ樣に
　ト これより、心にて讀むこなし。
扨てこそお家の一大事、詮議の手懸り手に入つたは
又平　お旦那、さらば。
　ト 腹切らうとする。お百、留め
山左　待て、コリヤ、又平、血迷ふたか又平。
又平　血迷ひはいたしませぬ。山三さまへぽッ附きます。
山左　生き殘つたら敵宗丹、一太刀なりとも討つ氣はない
か。
お百　腹切れば忠義になるか。
又平　でも、生き殘つては
山左　又平、出かした。よく書狀持ち歸つた。それほど逞しい忠臣の其方を、天晴に武士に取り上げぬは、眼あつて眼なき、我れ〳〵兄弟が誤り。今日よりお知行も一百石、この山左衞門とも同役同格。死は一旦にして易し、生は難し、大切の役目よく仕負せた。よく存命で歸られたなう。
　ト 此うち、嬉し泣きにて、冥加なりと云ふ心にて、頭をすりつけ
又平　冥加に餘るお詞、千萬石の御加增より、出かしたとの御一言が、骨身に徹つて、エヽ。
　ト 手を合はす。
山左　お百、これへ。
お百　スリヤ、萬事の手筈を
山左　猶豫はならぬ、早う。
お百　ハアヽ。
　ト 又平に心殘りに心意氣、山左衞門を見てツイと入る。山左衞門、首を取り上げ
山左　山三、よく死んだなア。そちが忠死を遂げしゆゑ、桃の井家の縁組みも調ひ、證據の書狀、左文字の刀も受取つた。兄には生まれ勝つた忠死。宗丹を討ち洩らせし、無念は追つゝけ晴らしてくれる。潔い、出かした〳〵。
又平　スリヤ、鮫鞘のお刀は
山左　闇の戸さまより受取つた。
又平　この一腰が闇の戸さまより、山三さまへの賜物。
山左　これゆゑにこそ内祝言。
又平　どうも生きては
山左　死ぬるばかりが忠ではない。
又平　スリヤ、生き殘つて旦那の敵
山左　宗丹が意趣遺恨は、遠山を戀ひ慕ふてか。

又平　イヤ、それはかりぢやござりません。宗丹が俗性は、
不破道犬が聟の子。
山左　スリヤ、この山左が手にかけた
又平　伴作が血脈。
山左　扨てこそお家に仇ある曲者、ハテナア。
呼び　御上使。
又平　あの御上使に
山左　又平、牒し合はす仔細がある。奥へ
ト又平、山左衞門、奥へ入る。萬事氣の靜かなる樂になる。向ふより侍ひ四人、槍にて兵庫を巻き、出る。後より關の戸、衣裳襠裲、下馬札を持ち、侍ひ大勢連れ出る。うちより狩野之助、衣裳上下、銀杏の前も出迎ふ。
狩銀　仰々しい、この有樣は
兵庫　桃の井造酒之頭どの、奥方、御名代の御上使、なぜ拙者を取り巻かつしやつた。
關の　罪の疑はしきは、共に疑ふ血脈の訴人、身動きはなりません。銀杏の前どの、狩野之助どの、上意の趣き云ひ聞かす。家來ども、退け。
家來　ハア。

ト侍ひ、退く。
銀杏　造酒之頭どの、御名代、關の戸さまは即ち造酒之頭さま。
狩野　最前の樣子、只今のこの仕儀。
銀杏　憚りながら御上使さま、先づ〳〵お通り下さりませ。
關の　上使でござれば上座は御免。
ト上座へ通り、床几にかゝる。皆々、並よく並ぶ。
銀杏　シテ、御上使の趣きはな。
關の　狩野之助どの、此度繪合はせ内見分、差上げられる血の達磨は、贋物か正眞か。
狩野　サア、その掛け物は
關の　こなた病氣とあつて、名代の名古屋山三、その場にて口論、大名に傷を負はせ、切腹したを御存じか。
銀狩　スリヤ、名古屋山三は切腹か。ハア、。
關の　狩野之助、家の重寶蝶花形の色紙は、家の繼ぎ目、綸旨も同然、帝の宸筆、色紙はなんとした。
狩野　サア、その色紙は
兵庫　盗み取られたか、紛失したか。言譯せい。なんと。
關の　まだ第一の咎めがある。

銀杏　まだ第一の咎めとはな。
關の　咎めと云ふはこの下馬札、中をくつて入れ置いたは、これ見よ、この人形。
ト中より藁人形を出し
中の歳の男絶命を書き現はせし、願主の姓名はなけれども、其方兄弟東山どのを調伏の人形、訴人あつてお聞きに達した。
狩野　全く左樣の科は
關の　覺えないとは云はれまい。東山どのゝ年度を現はし、調伏の人形、訴人は卽ちこれなる兵庫。
銀杏　スリヤ、叔父御樣の訴へ。
兵庫　この兵庫が訴人いたした。病氣と僞り引込み居る、左京の太夫、言譯あらば、これへ出せ。
山左　その申し譯、名古屋山左衞門仕らう。
ト酒の醉ひの體、大盃を持ち、よたぼうにて出で、べつたり坐る。
兵庫　山左衞門、この言譯をそちが
山左　御上使、一つ上がりませんか。叔父御樣、相する氣か。血の達磨、蝶花形の色紙、殿の御病氣、下馬札の言譯、すつぺらぽんとこの山左衞門が、言譯はあるけれども、醉ふたぢや、面白うて／＼ひどう醉ふたぢや。醉ふたに依つて云はぬぢや。云はぬに依つて醉ふたぢや。なんとけうといか。
トこける。
兵庫　上使の前とも憚らず、無禮の法外、うぬ。
ト斬らうとする。關の戶、寄つて、留め
關の　待つた。國家老の山左衞門、言譯立つまでは大切の科人。イヤ、滅多に聊爾はさせられぬ。
兵庫　餘りの無禮、うぬ、眞二つに
關の　イヤ、山左衞門を手にかけ、左京太夫の病氣と云ひ、萬事の言譯、國の納まり、誰れが引受け面晴れするぞ。
兵庫　サア、それは
關の　名代は女と侮り、踏みつけての仕業か。
兵庫　イヤ、全く。
關の　慮外であらう、扣へてゐやれ。
丹藏　イヤ、家國の申し譯は、拙者がいたしませう。
ト丹藏、上下にて、三寶に腹切り刀を載せ、出る。
關の　この申し譯を、そちがするか。
丹藏　拙者は長谷部丹藏と申し、卽ち兵庫が伜、國の納まりお目にかけませう。

ト三寶を、山左衛門へつきつけ
山左衛門、言譯なくば腹を切れ。
山左　もう吞めぬ〳〵。御免され〳〵。
ト丹藏、山左衛門を引附け
丹藏　ヤイ、狡た犬侍ひめ。血達磨、蝶花形、下馬札、調伏の言譯なさに、コリヤ、醉たんぼうで濟まさうと思ふか。醉ひどれに紛らすのか。言譯のある事なら、なんぼう食らひ醉ふても、言譯し兼ねるおのれぢやない。こんな甘い事せずと、言譯なくば腹を切れ。これでも家老職と云ふざまか。盗人め、人畜生め。
ト山左衛門を蹈々に踏みのめす。山左衛門、醉ふたる體にて、やくたい。
銀杏　そりやあんまり。
兵庫　ひこ〳〵おしやるな。詮議し拔いて云はさにや置かぬ。
丹藏　但し貴樣が言譯するか。言譯えゝせずば、マア、貴樣から死んでしまやれ。同じ穴の畜生仲間、早く腹切れ。
ト三寶を、狩野之助へ突きつけ
但し言譯あるか、返答なんと。

狩野　さうぢや。
ト腹切らうとする。銀杏、留めて
銀杏　詮議の筋も知れざるに、必らずお早まりなさるゝな。
關の　腹切れば調伏の申し譯が立つか。
狩野　サア、それは
關の　急いては事を仕損じる。大事の場ぢや。早まるまい。
兵庫　なぜ腹切るをお留めなさるゝ。腹切らして國家の納まり、跡目は餘人へ願ひまする。
關の　イヤ、本人左京太夫、國家老山左衛門、罪を糺したその上で、狩野之助には、外に糺す罪がある。
兵庫　外に糺す罪があるとは。
關の　此度の繪合はせ、上京を幸ひに、廓へ通ひ、酒色に耽る放埓惰弱。それゆゑ家來山三も狼藉。この儀御上聞に達し、狩野之助は今日より追放。
兵庫　血達磨蝶花形
丹藏　下馬札の誤り
兩人　この言譯の立たざるうち
關の　イ、ヤ、その言譯は國の主左京太夫、國家老山左衛

門、兩人にキッと糺す。

兵丹　ハテナア。

銀杏　スリヤ、どうあつても、狩野之助さまは御追放。ハア、。

兵庫　追放の狩野之助、眞裸にして叩き出せ。

關の　イヽヤ、右詮議のうち、家中の者の出入りは此方、切手なくては叶はぬ。申しつけた家來參れ。

家來　ハア。

ト最前の侍ひ、殘らず出る、

關の　追放の狩野之助、早々追ひ拂へ。

ト胡蝶の前、奥より走り出て

胡蝶　申し殿樣、御追放にならしやんしたか。わたしも一緒に行きたうござんすわいなア。

關の　祝言濟んだ胡蝶の前、夫に代つて自らが勘當。用捨はない。打連れて國を追放。

胡蝶　エヽ、忝ない。

銀杏　重々厚き關の戸さまの御賢慮なれども調伏の申し譯

關の　山左衞門が醉狂の、醒むるまでの一時勝負、申の刻まで暫しの猶豫。

兵庫　山左衞門が醉狂の醒むるまで

丹藏　御猶豫とは、ハレ、結構な御上使さま。

ト山左衞門を踏みつけ

畜生め、醉を醒ませ。

ト踏みにじり

親人、御覽じ、死人同然。コナ、犬馬鹿め。

ト蹴倒す。山左衞門、始終やくたいにて、又こける。

狩野　そりや又あんまり

關の　コレ、長居すると爲にならん。ソレ、追つ拂へ。

家來　お立ちなされい。

狩野　銀杏の前さま。

銀杏　隨分御息もじで。

胡蝶　關の戸さま、兄造酒之頭さまへ、どうぞ

關の　勘當の妹に、夫がなんの對面があらう。

胡蝶　ハア。

ト泣く。

銀杏　關の戸さま、萬事の儀を

關の　用捨はならぬ、上使の役目。

ト下馬札をよき所へ立て

コレ、この下馬札の言譯たち、血の達勞の詮議を仕出し、夫婦日出度き蝶花形ナ。

狩胡　段々のお情け。

關の　用捨はない、追つ拂へ。

家先　お立ちなされい。

丹藏　この醉ひどれめを

ト斬らうとする。關の戸、立廻り、兩人を見得よく戸めろ、ト唄になり、關の戸、兵庫、丹藏、銀杏の前、思ひ入れあつて奧へ入る。狩野之助、胡蝶の前を、割り竹にて、右の家來、連れて入る。山左衞門、他愛なき體にて、一人後に殘り、よき所へ下馬札を立てあり。奧より千枝、走り出て

千枝　殿樣、樣子は聞いて居りました。なんぼ言ひ號けでも、胡蝶さまには添はしませぬ。

ト行かうとする。山左衞門、悔り、起き、引廻し、戸める。千枝、倒れる。山左衞門、邊りを見廻して、ころりこけ、醉ふたる體。メリヤスになり、又平、奧より出る。この間より、中二階の障子を明け、上使の關の戸、出て居る。奧の襖明け、丹藏、見る。又平、思ひ入れあつて

又平　山左衞門さま、申し合はせし通り、國丸さまを密かに拔け道より、女房百

ト關の戸と顏見合はす。關の戸、障子をしめる。又平、悔り、こちら向き、丹藏と顏見合はす。丹藏、襖をしめる。又平、思ひ入れあつて

山左衞門どの、お國も、サア、丸う納まる料簡はせず、この態は何事ぢや。無念にはないか。口惜しうはないか、

ト關の戸、丹藏にして見せる心もちにて、振廻す。山左衞門、始終やくたいなる體。

エ、見下げ果てた畜生同然のこなた、家來達から勘當ぢや。勘當するからは俺やこの屋敷を立ち退く。俺が立ち退く所は、即ち親元大津の追分。

ト國丸を連れて退く所ぢやと云ふ事をかけて云ふ。

家來に勘當しられても、無念にはないか、どう畜生め。

ト引廻し、心で拜むしうち。此うち關の戸、障子を明けて、見て居る。

隙取つては、ソレ。

ト花道へ行かうとして、又後へ戻り

必らず

ト云はうとして、又關の戸と顏見合はせ、障子ぴつしやり。

さうぢや。

ト尻からげ、走り入る。ト千枝、起きて、息切れたる思ひ入れ、手水鉢の水を呑み、思ひ入れあつて

千枝　申し殿樣。

ト行かうとする。山左衞門、引廻し

山左　お千枝、そちやどこへ行く。

千枝　お前の樣な醉ひどれに、相手になつてゐる暇がない。

ト行かうとする。引廻し、立廻り、引戻し

山左　桃の井造酒之頭さまの妹君、胡蝶の前さまの御緣組みは、當家を立てる國の柱、そちに妨げさす事ならぬ。

ト醉ひの醒めたる臺詞にて云ふ。

千枝　コリヤ、お前、御本性か。

山左　醉ひが醒むれば家は斷絶、今一時は醉ふて居るわい。

千枝　エヽ、お前の相手にやなつてゐぬ。そこ退かしやんせ。

山左　コリヤ〳〵〳〵、御上使のお入り詮議落着までは、切手なくては御門の出入叶はぬ。千枝、思案せにや、われ行かれまいぞよ。

ト又元の酒の醉ひにて云ふ。ト千枝、色々思ひ入れして

千枝　スリヤ、御門の出入りも叶はず

ト山左衞門が側へ戻り

スリヤ、どうあつても殿樣に、添ひとげる事は

山左　ならん〳〵。たつて云へばお家のため手は見せぬ、たつた一打ち。

千枝　スリヤ、どうあつても殿樣は

ト山左衞門が顏見る。山左衞門、刀を突き出して見せる。ト千枝、色々思ひ入れあつて

サア、斬らしやんせ、殺して下さんせ。所詮殿樣に添はれねば、生きて詮ないわたしが身、斬らしやんせ斬らしやんせ〳〵。殿樣も聞こえませぬ。それほど厭なわたしなら、始めから可愛のなんのと、嬉しい事を仰しやつて、恥かしい事のありたけ

ト泣き

二世の固めと、この雛夫婦ぢやと、よう欺さしやんしたなア。

ト山左衞門が顏をキッと見て

この世でこそ添はれずとも、未來は誰れにも添はしやせ

ぬ。今こゝで死んだらば、お姫様も傾城も取り殺して、殿様のお側には、わし一人、死んでもお側を離れうか。

ト山左衛門をじり〳〵附け廻し

サア、斬らしやんせ〳〵、斬つた〳〵。

ト詰めかける。

山左　未練な女、妨げすりやア

ト投げる。斬りかける。薄ドロ〳〵にてくちなは、數多出る。千枝に這ひかゝる。千枝、恐れる身の立廻り、見得よく

ハテ、心得ぬ。我が先祖より傳はりし、左文字の名作、なかごには倶梨伽羅龍の梵字あつて、邪氣を拂ふ事神靈の如し。一つの不思議は、巳の年巳の月巳の日巳の刻誕生の女は、蛇鱗三十三枚あつて、嫉妬深く、人を呪咀するに成就す。この女この刀に向へば、忽ち小蛇集まると聞く。今蛇の集まりしは、扨ては、千枝、そちや巳の年の誕生であらうがな。

ト刀を鞘に納める。蛇消える。

千枝　エヽ、恥かしい、いかにもわたしや巳年度の生れでござんす。お果てなされた母様の、今際の時、そちや嫉妬ゆゑ身を果たす、必らず〳〵嗜めとのお詞。

ト泣く

母さん、免して下さんせ。わたしやどうも、何も申しませぬ、一時も早う斬らしやんせ。

山左　命助けて添はしてやらう。

千枝　エヽ。

ト山左衛門、千枝に繩かけ、右の下馬札へ括り附ける。

山左　一つの功に嫉妬せい。

千枝　エヽ、なんと。

山左　調伏の下馬札、申の年の人形、きづなを繋ぐ意馬心猿の女の念力岩をも通す。誠を見せい。

千枝　スリヤ、添ひたいと云ふわたしが念力、嫉妬心が屆いたりや

山左　その時こそ醉ひも醒め、醉ひが醒めれば家も納まる。お千枝、大切な殿には添はるゝ。嫉妬せい。

ト唄になり、山左衛門、思ひ入れあつて、奥へ入る。千枝、殘り、思ひ入れあつて

千枝　エヽ、なんの事ぢや。添はしてくれるものか、なんで縛つたのぢや。申し、殿樣。

ト行かうとして、繩にて行かれぬ事あり

いかに言ひ號けと云ふて、女夫連れで追放になると云ふ樣な、あた脈らしい事があるものか。エヽ、羨ましい胡蝶の前さま、胡蝶づら、胡蝶め、エヽ、腹が立つ、腹が立つわいな。

ト此うち合ひ方にて、牡丹に蝶々飛びかかる景色、千枝、よろしくあつて

御先祖中納言相國さま御夫婦、二世の契り淺からず、蝶蝶となり給ひしとて、花に水打ち露を受け、お家に尊ぶ蝶花形。今の思ひは胡蝶の前、番ひ放れぬ妬ましや、添はしやせぬ、なんぼでも添はさぬ〳〵。

ト烈しき合ひ方になり、千枝、蝶を附け廻すこなし。蝶々、飛び去る樣、花々しくあるべし。

エヽ、どこへやら蝶めが行き居つた。エヽ、この繩が解いて欲しい。この繩が。

ト身を揉み、色々あり。ト下馬札を見て、きつとなり

一の宮へ調伏の下馬札、道は遙かに隔つるとも、神に祈りの一念力、心は花の時參り、釘はなくとも刃金の刃、繩食ひ切つて胡蝶の前、傾城もろとも、呪ひ殺さで置くべきか。惜い〳〵。

ト烈しき合ひ方になる。爰にて、かけ焔硝にて、蝶消える。此うち中二階より、關の戸、始終を見てゐる。千枝、色々こなしあつて、繩を食ひ切り、下馬札をきつとねめつけ

神木ならねど調伏の下馬札の人形、戀の敵は胡蝶の前、たちどころに命を絶ち、我が念願を叶へたび候へ。思ひ込んだる誓ひのごんずい。

ト肩先を食ひ切り下馬札へ吹きかける。少しドロ〳〵にて、燒酎火にて、下馬札燃え、人形落ちる。跡に殘る板、血汐に染まり、白に文字現はれる。

ヤア、この文字の現はれしは

ト關の戸、つか〳〵と下り、下馬札を取つて

關の　謹みて祈願し奉る。我が先祖相馬の何某、高島のために滅ぶ。この仇を報はんため

千枝　さうぢや。

ト行かうとする。關の戸、立廻り、留め、兩人見得よく留まり

關の　近寄つて縁を結び、この時仇を報はんとす。左京太夫が命を斷ち、四國を領地なさしめ給へ。願主長谷部何某。

千枝　エヽ、そんならこの調伏は

關の　嫉妬の念に思はずも、家の大事を現はせしか。ハテ、念力深い女ぢやなア。

ト山左衞門、白無垢、麻上下、腹切り刀三寶に乘せ、出て

山左　お千枝、出かした。嫉妬の不忠は却て忠義、褒美は殿の隱れ家へ。

ト錢包み、ほかしやる。

千枝　エ、、殿樣のお隱れ家。

ト金を取り、讀む。

伊豫の松山御祈願所。

關の　門内出入りの往來切手。

ト抛つてやる。

山左　路銀大事に、早う行け。

千枝　忝い。伊豫の松山御祈願所。

ト右のせりふ云ひ〳〵、走り入る。チヤンチヤンと半鐘、打つ。奧より兵庫、出て

兵庫　申の上刻、山左衞門を圍へ。

ト侍ひ出て、取卷く。

山左衞門、所詮言譯はあるまい。左京太夫を引出し、目通りで腹切らせい。但し左京太夫は病氣と僞り、先達て相果てたか。スリヤ、上を僞るそちも大罪、遁れぬ所ぢや、腹切つてそちもくたばれ。

山左　イ、ヤ、先づ拙者が腹より、第一番には叔父御樣、お腹を召されずばなりますまい。

兵庫　默り居らう。この兵庫には何科あつて腹切らす。

山左　調伏の科人は、これ見よ、長谷部の何某。

ト下馬札を突きつける。

兵庫　ヤア、この文字の現はれたは

山左　謹みて祈願し奉る。我が祖先相馬の何某、高島のために亡ぶ。この仇を報はんため、近寄つて緣を結び、この時仇を報はんとす。左京太夫が命を斷ち、四國押領なさしめ給へ。願主長谷部何某。この呪咀の文、なんと遁れはあるまいがや。

兵庫　イ、ヤ、知らぬ。木に文字が現れたとて、身共が存じやうか。馬鹿な事を。

山左　角のある兩頭のくちなはは、怨念深く呪咀の氣あり。このくちなはを灰となし、水にひたして文字を書けば字形は消えて呪咀の祕文。この文字を現はすには、已の年度の女、極めて嫉妬の念深く、この血汐を呪咀にかくれば、忽ち呪咀の文を現はし、その年月に生れし女、

嫉妬の念は忠義となり、血汐に文字を現はせしは、唐土晉の大領公、嫉妬に耽りし呪咀の祕事。

兵庫　スリヤ、呪咀の祕事を知つて

山左　お千枝が年度の合ふたるは、お家の武運盡きざる印し、言ひ譯はあるまいかや。

兵庫　いゝや、知らぬ。この兵庫、覺えがない。

山左　その證據はこの書狀。

ト最前又平が持ち歸りし狀を出し

高島の家押領いたしと云ふ文言は、讀むに及ばず長谷部兵庫、在判とあるこの手跡と、下馬札の

關の　呪咀の手跡は同筆同跡、申の年の男絶命と書きたるは

山左　即ち左京太夫の年度。東山どのゝ御年申の年とあるを幸ひ、武將調伏の人形と訴人せしは、長谷部兵庫。

關の　願主の文字は長谷部何某。呪咀を嫉妬に現はせしは、自然と同氣相求める、血で血を洗ふ訴人の天命。火水の責めに拷問させ、手跡の實否を糺さうか。

兵庫　サア、これは

兩人　サア

兵庫　サア

兩人　サア〳〵〳〵、なんと。

兵庫　エヽ。

トばたに〳〵にて、銀杏、奥より、薙刀持ち出て

銀杏　今御寢所へ、忍び入らんとする長谷部丹藏、斬り拂ふうち殘念や、拔け道へ取り逃がしたわいなう。

關の　サア、調伏の科は兵庫に極まる。山左衞門、サア、二色の返答は。

萬之　その二色の御返答、私し申し上げませう。

ト萬之助、出る、

銀杏　こちや勘當受けた源五郎が、弟萬之助、大切な二色の返答を、申し上げやうとは

萬之　血の達磨の一軸、蝶花形の色紙、二色の行くへは、この萬之助が、よく存じ居りまする。

銀關　シテ、二色の行くへは

萬之　その二色の行くへは、かう。

ト腹へ突込む。

山左　出かした。最前から申し合はせし通り

ト云はうとして

イヤ、最前こり窺ひ居る、勘當の萬之助、シテ、二色の在所は。

萬之　あれなる叔父御兵庫どのに頼まれ、血の達磨は摺り替へ、蝶花形の色紙も拙者奪ひ取りました。
兵庫　ヤイ〳〵、血迷ふて何ぬかす。うぬ等を頼み、寶を奪ふた覺えはないぞ。
山左　ハテ、さつぱりとよく云つた。この功に依つて勘當は赦し、源五郎もろとも勘當のおのれ。シテ、二色の行くへは
萬之　兵庫どのに頼まれ、盗み取つた二色の行くへは、かう。
ト笛を掻き切り、死ぬる。皆々、恟り。
山左　手懸りになるべき萬之助は相果てた。
關の　兵庫が仕業と萬之助が白狀。二色渡して繩かゝれ。
兵庫　イヽヤ、二色盗んだ覺えがない。
關の　この調伏の言ひ譯あるか。
兵庫　サア、それは
關の　拷問せうか。
兵庫　サア
兩人　サア〳〵〳〵。どうぢや。
兵庫　その言ひ譯は、かう。
ト狼煙を、手水鉢へ打ちつける。かけ焔硝、狼煙上がる。ト采女、撫子、首を持ち出で
采女　忍びの者を拷問し、何もかも白狀させて
撫子　そつちの味方は皆生捕り
兵庫　スリヤ、此方の忍びの者は
采撫　逢ひたくばこの通り。
ト首を抛り出す。
兵庫　スリヤ、おのれ等が討ち取つたか。ヤア〳〵〳〵ヤア。
銀杏　計略の裏を掻かれ、無念なか。
采撫　最早遁れぬ。繩かゝれ。
兵庫　もうこれまでぢや。
ト腹へ突込む。
三人　大切なる詮議の手懸り。
山左　アイヤ、大殿樣の血を分けられし、國家の叔父君、ナ、この切腹にて調伏の申し譯。
采女　寶の詮議
山銀　日延べのお願ひ。
關の　及ばずながらいたして見よう。
皆々　エヽ、忝い。
銀杏　現在お果てなされた殿樣

闇の　コレ、四國一國の大名が、闇討ちにせられては、家は斷絶。
山左　事納まるまで矢疵り御病氣。
闇の　日延べの願ひ叶はぬ時は
山左　この姿にて直ぐに切腹。
銀撫　どうぞよろしく
闇の　命に替へて願つて見よう。
ト花道の角へ行く
兵庫　冥途の魁。
ト刀を抜き、手裏劍に打つ。山左衛門、叩き落とす。
銀杏　エイ。
ト薙刀にて、兵庫が首討つ。
闇の　天晴れ手のうち。
皆々　御前よろしう。
闇の　いづれも、おさらば。
山左　御上使、御苦勞千萬に存じます。

幕

三つ目　栗田口の場

役名——松川兵部。非人、權。同、八。同、六。傾城、遠山。非人、鷲の三之助。松川采女。腰元、千枝。奴、又平。飛脚、梶之助。

幕のうちより、非人鷲の三、サア、老耄め、この金を渡せと云ふ。松川兵部、年寄つたれど松川兵部、狼藉すると許さぬぞと、ばた〳〵にて、幕明ける。造り物、見附け黒幕、一面に上手にて、並木の松、三之助、兵部を斬り殺す。止め刺して居る。合ひ方。
ト橋がゝりより、權、八、六、同じく非人の形にて出て
三人　お頭、仕事はまぶか。
三之　おいぼれぢやけれど路銀はずつしり、ひんかまりぢや。
三人　そりや、うまい〳〵。
三之　やう〳〵今取つた。ドレ、一服せうか。

ト三之助、土手に腰かける。皆々、側へ寄り

權　どうでもお頭ほどの事がある。

八　草臥れてごんせう。

三之　あの位の事で、滅多に草臥れはせぬ。さうしてわいら、今日はどこを働いた。

權　今日はけたいな事、四の宮で僕の大きい男めがうせたな。なんでもえらいひんかまりぢやと思ふて、とんと當つて明けて見たれば、醫者めかして、コレ、見い、藥箱であつた。

八　イヤ、われはかりぢやない。俺も八丁の同者めらを、いかめてこまさうと思ふて、御堂の門に錠がますがあつたに依つて、ちよいとひつかけ、片蔭で明けて見たれば、錢ではなうて、糠混りの酒の糟であつたわいの。

三之　ほんに、いつでも碌な仕事はし居らぬ。不器用な奴等ではあるわい。

ト向ふより釆女、旅の姿にて、飛脚提灯持ち出で、本舞臺へ來たり、兵部が死骸に躓き

釆女　お免されませ〳〵。この氣の急くまゝに粗相でごんす。滅相な。街道の眞中に寢て居ると云ふ樣な、エヽ、大方酒に醉ふてゐらるゝのであらう。コレ、ちやつと起きてゐたがよいわいなう。

ト云ひ〳〵、右の提灯で死骸を見て

ヤア、こりや血まぶれ。

ト段々顏を見て、慟り。

ヤア、親人兵部さま。ヤア〳〵。

ト色々ある。ト此うち、三之助、莨のみゐる。

ニヽ、殘念な、國を出る時は御一緒、若殿樣や姫君樣の、お行くへを尋ねんため、五日以前に伏見の船場でお別れ申したがお暇乞ひ。矢張り其方附添ひ居らば、闇々と御生害はあるまいもの。エヽ、是非もなき

ト死骸に取り附き、泣く。三之助、三人に行けと云ふ仕方、三人、出て、釆女を挾み

三人　親方、酒手下あれ。

ト釆女、きつとなり

釆女　ムウ、酒手を下されと云ふからは、扨てはうぬ等は

三人　ハテ、素人らしい。知れたものぢや。

釆女　スリヤ、路銀を奪はんため、親人を手にかけしも、うぬ等が仕業ぢやなア。

ト身拵へする。此うち、三之助、片脇から見てゐる。

乃　こまごと云はずと、きり〳〵出せい。

ト八、かゝるを、見事に投げる。權・六、兩方よりかかる。

權　この褞袍脱げ。

ト見事に投げる。ト三人、一緒にかゝる。

三人　いつそうぬを

トこれより立廻りになり、采女、皆々を投げる。三之助、出て

三之　ハテ、甲斐性のない奴等ではある。ア、、不憫ながらも、俺が手を下ろさずばなるまい。

采女　ムウ、扨てはうぬは、この盗賊の張本。

三之　鷲の三と云ふて、この栗田口での大將ぢや。われが親も俺が片附けた。コリヤ、路銀を出せ。出さぬとわれも殺らして、親の供さすぞよ。

采女　スリヤ、うぬが親人を、手にかけたな。エ、、武士の手にてもある事か。人外の盜賊の手にかゝりお果てなされ、嘸御無念にござりませ。うぬを一分だめしに。

ト斬りかゝる。三、留めて

三之　ハテ、親子ともに俺が手にかゝるとは、これも因緣ぢやなア。

ト附け廻し、これより立廻り、三人の者も起き、段々とかゝる。采女、片ツ端より切り殺す事よろしくあつて、三之助と立廻りになり

こりやもう叶はぬ／＼。

ト逃げる。

采女　おのれ、いづく迄も

ト追つかける。トこれより段々に松原を引き、采女、三之助を捕へ、立廻りよろしくあつて、三之助、逃げるを、采女、三之助がつゞれの片袖を引ちぎる。この間始終萬才の合ひ方ありて、松原引き、タデしい／＼逃げる。この模樣あつて、橋がゝりへ、兩人、入る。ト矢張り道具引く。采女、三之助、あとぜゝりして出る。又立廻りあつて、三之助、向ふへ逃げて入る。采女も追つかけ入る。道具留まる。いつもの合ひ方になる。ト向ふより、千枝二つ目の形にて、後れ髮にて、しどけなき形にて出て

千枝　申し殿樣、狩野之助さまいなア。

トうろ／＼本舞臺へ來る。橋がゝりより、飛脚、出る。

飛脚　エイサツサ／＼。

ト向ふへ行くを

千枝　申し／＼殿樣。

ト留める。

飛脚　ア、コレ〳〵、俺は大事の時切りの飛脚、時が切れるとお手討ちに遭ふ。爰放して貰はう。エイサツサ〳〵。

ト向ふへ走り入る。

千枝　ほんにこの殿様狩野之助さまは、どこにゐやしやんす事ぢややら。お國で山左衞門さまの仰しやるには、伊豫の松山と云はしやんしたゆゑ、尋ねて行てもお目にかかれず、わしや此やうにうろ〳〵して、尋ねてばつかりゐるのに、大方殿様はお姫様としつぼりと、抱かれて寐てゐやしやんすであらう。どうぞ早う殿様に、巡り逢ひたいものぢやなア。

ト色々あつて、又橋がゝりより、梶之助、出て

コレ、申し、狩野之助さまぢやないかいなア。

梶之　イヤ〳〵、狩野之助ではない、梶之助と云ふ一人角力、大津の向から去にがけぢや。これから三條の橋詰めで、御前角力を始めねばならぬ。爰放して貰はう。

ト振り切り、向ふへ入る。謠うたひ、きたなき形にて、破れ扇を提げ、笠着て出て

謠ひ　高砂や、この浦船に帆を上げて

トうたふて出る。千枝、取りつき

千枝　コレ、申し殿さん。

ト編笠取る。

オヽ、辛氣。お前ぢやない。

謠ひ　間違ひぢや、ほやれれほ。

ト合ひ方になる。ト向ふへ出る。千枝、こなしあつて、かすかに鐘鳴る。

千枝　アレ、もう段々夜も更けて來る。殿様の行くへ、どこをせうどに尋ねる先も知れず、ほんに神さんも佛さんも、一體聞こえぬ。これまで朝夕願ふはなんのため、殿さんに逢はして下さんせと、頼むぢやござんせぬか。それに根つから今まで逢はして下さんせぬ。かう云ふが腹が立つなら、ついどこそこに居る、ちやつと行て逢へと知らして下さんせ。わしや殿さんに逢ひたうござんすわいなア〳〵。

ト色々あり、よき所にて、向ふバタ〳〵にて、遠山、傾城の形にて、走り出て、千枝に行き當たり、ウンとこける。千枝、恟りして

オヽ、怖。誰れさんぢやぞいなア。

ト見て

見れば女中さん、氣を取り失はしやんしたさうな。女子

は相身互ひ。コレ、申し、女中さん〳〵。

　ト色々介抱する。遠山、心附く。

どうでござんす、女中さん、心が附きましたかえ。

遠山　アイ、氣が附きました。どなたか存じませねども、思はぬ御介抱、忝うござんす。わたしや都の者、ちと人を尋ねる者で、心の急いて今の樣に、氣を取り失ひましたのでござんす。

千枝　人を尋ねると云はしやんすれば、我が身につまされ

遠山　見ればお前も、女中さんの只一人、あのお前も人を尋ねさんすお身かえ。

千枝　アイ、今日で大方二十日ほど、晝はひねもす夜もすがら、尋ね迷ふてゐます。

遠山　そんなら大方云ひ交さしやんした、いとしいと思はしやんすお方でござんすかえ。

千枝　マア、そんなものでござんすが、お前も女中の只一人、尋ねさしやんすは、深う馴染ましやんした殿御かえ。

遠山　アイ、さうでござんすわいなア。

千枝　何を隱さう、わたしも殿御を尋ねる者でござんすわいなア。

遠山　そんならお前も

兩人　オヽ、恥かし。

千枝　さうしてマア、お前の云ひ交はさしやんした、殿御のお名は、なんと云ふぞいなア。

遠山　サア、わたしが云ひ交はしたお方の名は、高島狩野之助さまと云ふて、西國方のれつきとした、お侍ひさんでござんす。

千枝　エヽ。

　ト大きに愕りする。

なんと云はしやんす。そんなら、アノ、高島狩野之助さまに

遠山　アイ、二世も三世も神かけて、云ひ交はした殿御でござすわいなア。

千枝　ムウ、いつぞや殿樣、都で繪合はせの折柄、云ひ交はさしやんした、お前は傾城遠山どのぢやなア。

遠山　それを知つてゐやしやんすお前は

千枝　狩野之助さまと二世三世も、神かけて云ひ交はしたわたしやお國でお側仕への、千枝と云ふ者でござんす。

遠山　そんならお前も、狩野之助さまに云ひ交はさしやんしたか。エヽ、ほんに惡性な殿さん。わたしが此やうに

思ふてゐるものを、外の女中と云ひ交はすと云ふ事が、あるものかいなア。

千枝　コレ、申し遠山さん、お前は殿さんの行くへ、知つて尋ねに行かしやんすのであらう。どうぞお行くへを、わたしに云ふて下さんせいなア。

遠山　イエ〳〵、わたしやどうぞ逢ひたさに、家を駈落ちしたも、狩野之助さんの行くへ尋ねたさ。国から跡を慕ふて来たお前、定めて知つてゐやしやんせう。どうぞ教へて下さんせえ。

千枝　イエ、、わたしや知らぬ。お前教へて下さんせ。懐しい逢ひたいは互ひ、コレ、拝みます〳〵。

遠山　イ、エ、わたしが拝む。教へて下さんせ。

千枝　拝みます。

遠山　拝みます。

ト両人、同じ事を両方より云ふ。此うち又平、後ろより見てゐる。

イヤ〳〵、斯うしてゐる所ぢやない。早う殿さんに、さうぢや。

ト遠山行かうとする。千枝、留めて

千枝　コレ、待つた、遠山さん、コリヤ、お前どこへ行かしやんす。

遠山　知れたこと、殿さんの行くへ尋ねて、抱かれて寝るわいなア。

千枝　イヤ、お前より先にわたしが尋ねて抱かれて寝るわいなア。イエ〳〵、放す事はならぬ。そこ退かしやんせわたしが行く。

ト両人、せり合ふ。よき所へ、又平、出て、千枝を留め

又平　妹、待て。

遠山　ヤア、お前は又平さん。

千枝　ヤア、お前は兄さん、お前がこの辺りにゐやしやんすれば、ハア、狩野之助さまも

又平　オ、、俺がお匿ひ申して居る。所は大津追分、土佐の又平。遠山どの、早う。

遠山　エ、、そんならそこへ。

又平　ちやつと行て殿さんに逢はんせ。

遠山　イヤ、お前よりわたしが先へ。

ト引退け、行く。又平、留めて

又平　待て、妹。そちには用がある。遠山どの、早う早う。

遠山　アイ〳〵。

　トいそ〳〵走り入る。千枝、行かうとする。又平、留めて

又平　コリヤ、妹、たとへばどの樣に思ふても、狩野之助さまとは添はれぬ。思ひ切れ。

千枝　イヽエ、たとへ添はれうが添はれまいが、一旦思ひ込んだ戀路、愛放して下さんせいなア。

又平　イヤ、ならぬ。コリヤ、妹、殿樣のことたつて思ひ切らぬと、兄が手にかけ殺さにやならぬ。

千枝　たとへ死んでも思ひ切らぬ。殊に今の傾城づら、殿樣に逢ふのがむやくしい。放して〳〵。

又平　スリヤ、どの樣に云ふても、思ひ切らぬか。

千枝　つい思ひ切れるものぢやないわいなア。

　ト又行く。留める。少々立廻りあつて

又平　もう是非に及ばぬ。

　ト脇差しを拔き、千枝を殺す。

千枝　コリヤ、兄さん、なんでわたしを殺さしやんすのぢや。

又平　コリヤ、そちを手にかけ今殺すは、お家のため、この兄が忠義のため、とつくりと聞いてくれ。天にも地にもたつた二人の、はしをり鏡兄弟の、そちは若殿狩野之助さまに、云ひ交はした身の破滅。お國の騷動より家中は散り〳〵。御主人山三さまの御意を受け、若殿樣を預かり、寶の詮議して世に出さん存念。所にそちが狩野之助さまと云ひ交はし居れば、妹の緣に取り入つて、一國の小舅と家中の思惑口惜しく、殊にそちは齒數三十三枚の生れにて嫉妬深く、コレ、若殿のお身の妨け。すべて我が家に育つ娘には、幼ない時より女庭訓、今川なぞよく習はせ、貞女兩夫に見ゆるなと聞いて、一筋に思ひ込んだ若殿を、思ひ切れとは無得心。コリヤ、何事もお家のために死ぬると思ひ、未來は成佛してくれいよ。

千枝　エヽ、死にともない。殿樣に逢ひたい逢ひたい〳〵。

又平　苦痛をさすより早う最期、南無阿彌陀佛。

　ト刳る。半鐘鳴る。こなしあつて、刀を拔き、血を拭き、千枝を見る。じつとしてゐる。

又平　せめて死骸を

　ト抱へ、井戸へ入れ、色々ある。

　妹、免してくれ。嘸死にともなからう。何事も兄のためと思ひ、成佛せい。南無阿彌陀佛々々々々々。

　トこちらへ千枝、すつくと立ちゐる。

ヤア、妹、まだ成佛せぬか。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト睨め、又こちらへ來る。又平、こなしあつて

ア、、有難や、お念佛の功德にて、妹は

ト又こちらを見て、慎りして

ヤア、まだ消えぬか。ムウ。扨ては、まいしさせねんいかりう〳〵衆生得入無常道見身成佛。

トあちらへ行き、こなしあつて

ア、、讀や法華經の功德は、八才の龍女も成佛すると、有難いお經。

ト云ひ〳〵行く。花道より、千枝、出る。ふつと見て

ヤア、妹、ハテ、ひつこい。もうよい加減に消えいやい。どうでもお念佛。南無阿彌陀佛々々々々々々。

トじつと顏を上げ、千枝を見て

エ、、勝手にせい。

ト向ふへ入る、千枝も入る。

幕

四段目　大津又平内の場

役名――高島狩野之助。長谷部雲谷。胡蝶の前。杁川采女。揚屋才兵衞。緋屋尙七。弟、才助。婆、お熊。鶯の三之助。高島國丸。女房、お百。奴、又平。

造り物、平舞臺、見附け、壁、納戸口、よき所に戸棚、上下開けたて、人の出入りあり、西の方、障子屋體、椽がゝり、ぬりたれ揚げ店、大津繪並べ、よき所に門口、すべて盆屋の體なり。幕のうちより、お熊、婆の形にて、大津繪を拵げ、並べ居る。店の片脇に、六十六部、笈を背負ひ、腰かけ、莨のみ居る。在鄕唄にて、幕開く。

ト東西より、仕出し、出て

くまし〳〵、名物の大津繪、買ふて行かしやんせぬか。

仕一　ほんに爰は大津の追分、名物の繪を在所へ土產に買ふて行きませうか。

仕二　これはよう氣が附いた。孫めが土産に二三枚買ふて行きませう。その鬼の繪と、外方の繪がよからう。
仕三　孫めが達者な樣に鬼の念佛、婆樣、なんぼでござる。
くま　一枚六文づゝでござりまする。子達へのお土産には、いつちよい物ぢや。買ふてお出でなされませ。
ト銘々繪を取り、錢を拂ふ。
くま　休んでござりませぬか。
仕一　一番船に乘らにやアならぬ。早う行きませう。
くま　ようござりました。
ト皆々、わや〳〵云ふて入る。六部、矢張り莨のみ居る。お熊、見て
六部どの、休んだらよい加減に行かしやらぬか。
六部　イヤ、行くと云ふたとて、當てどのない旅、とつくりと休んでから行きます。
くま　そなたがそこに居ると、商ひ店がふさがる。早う行て下されいなう。
六部　イヤ、コレ、婆さん、煙草の火を借るも他生の緣、いつそ物は談合、暮れに間もあるまい、今宵は爰に泊めて下されぬか。
ト此うち、始終うちを、うそ〳〵と見る。
くま　エヽ、滅相な。こちらは宿屋はせず、殊に一人旅は宿屋でさへ泊めませぬ。早うどこへなりと行かしやれいの。
六部　コレ、婆さん、全體俺はこの邊りで、人を尋ねる者ぢや。俺が云ふ者を尋ね出すと、大枚の金になるが、こなた若しさう云ふ者を、心當たりはないか。
くま　なんぢや知らぬが、金儲けとあれば耳寄りなが、さうしてこなたが尋ねさつしやるのは、男か女か。
六部　サア、十六七な女子、卽ちこれ。
ト囁く。
ナウ、これおやが、こなたは知らぬか。
くま　その女なら、どうやらこちらに心當たりがあるが、尋ね出してこなたに渡したら
六部　褒美の金は望み次第。
くま　そんならどうぞ、こちのうちに泊らしやらぬか。
六部　そりや俺が望む所、泊めて下さるか。
くま　あんまり泊めたい事はなけれど、若し今のが手に廻つたら、直ぐに渡す手廻しに
六部　それが肝心。金の蔓に取り附いた。随分抜からぬ樣

に
くま　盗人の詮議も六部を泊めるも、當てがなければせぬ。奥の離れ座敷へ行かつしやれ。
六部　そんなら婆様、この笈を爰に置かう。風呂はあるまいの。
くま　なんのあらう。コレ、云はぬ事は悪い。旅籠は二百、菜はないぞや。その代りに晩には蒲團は着せぬぞや。
六部　こりやきつい、錢出して野宿するのぢや。婆様、後に逢ひませう。
ト唄になる。六部、うち中を見廻り、奥へ入る。お熊、笈を納戸の片脇へ片附ける。ト奥より、お百、又市を連れ出る。
お百　申し母さん、お飯が出來た。上がりませぬか。
くま　飯が出來たら食はうわいの。コレ、最前から聟の又平が見えぬが、どこぞへ行きやつたか。
お百　アイ、今さき風呂へ行かれました。
くま　なんぢや、風呂へ行た。よう出て歩るく聟ぢや。一體そなたは俺が娘なれど、小さい時から奉公に出して置いたれば、親の方へはかつふつ便りもせず、所へ後の月、聟の又平にその又市を連れて、親子三人連れのかゝり人食ひ潰されるのでホッとする。ちとわが身も又平に意見して、なんなりと金儲けさしや。
お百　サア、こちの人も、どうぞ金儲けがしたいと、この間から方々と頼んでゐられます。追つゝけお前も樂させて、わしが養ひまするわいなア。
くま　又口先でちよぼくさ。コレ、娘、聟やそなたの飯代も餘程重なつてあるぞ。又平が戻つたらさう云ふて、せいらくさしや。ほんに親子の縁で倒れる。ドリヤ、奥へ行て飯食はうか。
ト唄になり、お熊、奥へ入る。跡にお百、こなしあつて
お百　ほんにわたしが母さんほど、慾の深い者はない。又平どのへわしが氣嫌ね。
又市　コレ、母さん、婆様が叱らしやる。わしや父さんを呼んで來うか。
お百　イヤ〳〵、大事ない。よう云やつた。ほんに御勿體ない。
ト表を見廻し、表を締め、思ひ入れあつて、又市を上座へ直し、障子のうちより胡蝶を連れ出し、兩人に手をつかへ

申し胡蝶さま、國丸さま、いつぞやお國の騷動より、御主人狩野之助さま諸共に、お滯ひ申し、又平どのもこの在所住居、心に任せぬお介抱、さぞ御不自由にござりませう。殊に國丸さま、狩野之助さまのお別腹の弟御、大切な若殿樣、私しと又平どのゝ、仲の子にして置きますも、世を忍ぶ手段。夫又平がゐますれば、追つゝけ紛失の寶の詮議し出だし、御代に出されませうほどに、今暫らくの御辛抱遊ばせや。

胡蝶　これは内儀、改まつた、たとへ埴生の住居でも、狩野之助さまと一緒に暮らせば本望。そなた衆の志し、忝ならござるぞや。

國丸　わしも矢ッ張りそなた衆の子にして、早う兄樣を世に出す樣にしてたもいなう。

お百　ほんにしほらしい、流石一國の若君、よう仰しやりました。イヤ、申しお姫樣、今日は狩野之助さまはお墓參り、さぞお淋しうござりませう。

胡蝶　さればいなう、殿樣はお墓參り、お大切のお身ゆゑ、早う御下向なさればよいがと、案じてゐるわいなう。

お百　追つゝけお下向でござります。お案じなされまするな。

ト云ふうち、向ふバタ〳〵にて、遠山、しどけない形にて、走り出て、門口へ來て、戸を叩き

遠山　申し〳〵、ちよつと爰を明けて下さんせいなア。

トけはしく叩く。慟りして、胡蝶をちやつと一間へ入れ、思ひ入れあつて、國丸を連れ

お百　アイ〳〵、誰れさんぢや、忙しない。

ト云ひ〳〵、表の戸を明ける。遠山、うちへこけ込む。

目を廻す。お百、又慟り。

エヽ、滅相な、見れば派手な形な女中さん、なんで、マア、又市、ソレ、水おこしや。

國丸　アイ〳〵。

ト國丸、茶碗に水を入れ、持つて來る。お百、水を呑ましこなしあつて、介抱し

お百　エヽ、コレ、呼び活けうにも名は知らず、エヽ、どんな。コレ、女中さんいなう〳〵。

トいろ〳〵ある。此うち遠山、氣附いたるこなし

どうぞや女中さん、氣が附いたかえ。

遠山　アヽ、嬉しや、氣が附きましてござんす。

お百　滅相な、人のうちへお前も、目を遁し込むと云ふやうな事があるものか。さうしてお前はなんの用があつて、

こちのうちへござんした。
遠山　アイ、モウ、跡から追つ手はかゝるし、道は知らず心は急く、それで氣を取り失ふたさうにござんす。わたしは京の者、この大津追分にて、又平どのと云ふ所へ、尋ねて行く者でござんす。
お百　コレ、女中さん、その又平はこちのうち、卽ち爰でござんすわいなア。
遠山　エヽ、又平どのゝ所は爰かえ。エヽ、嬉しや。そんなら爰に狩野之助さまが
お百　コレ、其お方を尋ねさしやんすお前、風俗と云ひ物ごし、都島原の、もしや、お前は
遠山　アイ、狩野之助さまと云ひ交はした、遠山と云ふ者でござんす。
お百　それ聞いたらもうよい。コレ
　ト囁く。
遠山　そんなら殿さんに
お百　逢はせませうが、何かの事は、後にとつくり聞いた上。
遠山　わたしが身の上、爰へ來た樣子も
お百　コレ、人が聞けば惡い。マア、此うちへ。

　ト戸棚のうちへ遠山を入れ、國丸を連れ奥へ入る。ト袴の三之助、乞食の形にて出で、碗を箸にて叩き、啞の眞似する。
三之　オン／＼。
　ト碗を叩き、うちを見る。
お百　コレ、何もない程に、通りや／＼。
三之　オン／＼。
　ト矢ッ張り碗を叩く。
お百　これはしたり、何もないと云ふに、しつこい、通りやいの。
三之　ハテ、乞食ぢやと思ふて、澤山さうにぬかす荊妻め、餘り物がなけりやア、餘らぬ物をくれ居れやい。ひだるい／＼。
お百　ヤア、そなたは碗を叩いて、啞ごろぢやないか。
三之　オヽ、啞ぢやが、なんとした。
お百　その啞ごろが物云ふは
三之　啞ぢやと云ふて物云はいでは。キリ／＼なんなりと食はし居れ。
　ト　お熊、奥より出て
くま　娘々、何を云やるぞいの。

お百　申し母さん、この乞食が、どうもなる事ぢやござんせぬ。
三之　ひだるうてどうもならぬ。キリ〳〵となんなりと食はし居れ。食はにや去なぬのぢや。
　ト段々、うちへ入る。お熊、キッとして
くま　エヽ、仇きたない乞食め、おのれ出居らんと、いつそ
　ト箒にて叩きにかゝる。
三之　かま婆め、何ひろぐのぢや。
　ト兩人、顔見合はせて
ヤア　こなたは母者人ぢやないか。
くま　ヤア、わりや俺が子の三之助か。
三之　母者人。
くま　三之助。
お百　エヽ、そんならこれが
くま　わが身の兄ぢやわいの。
お百　エヽ。
三之　逢ひたかつた〳〵、逢ひたかつたわいなう。
　ト取り附き、泣く。
くま　オヽ、道理ぢや〳〵。俺もこの年月、明けて三十になる三之助、どこにどうして暮らしてゐるぞと、案じてゐたわいなう。
三之　もう俺も小さい時こなたに別れ、方々流浪をし廻つて、小盗み博奕の報いにて、世過ぎは、マアすれど、埒が明かぬゆゑ、よい所へぐづりに行たり、摑み歩るくゆゑ、わしよりは三之助を怖がつて、それでとうとう此やうに、乞食になつてふらつく。どうぞなんぞ食はして下され。ひたるうござるわいなう。
　ト泣く。
くま　オヽ、さうであらう、可愛や〳〵。俺もそなたを奉公に出してから、この追分へ宿がへして來た所。コレ、親父どのは三年後、死なしやつたぞや。
三之　そんなら親父はごねたか。
くま　オイヤイ。
三之　生きてゐたとて吝い親父、その時知つたらぐづりに來うもの、殘り多い事したなう。
くま　オヽ、さうであらう〳〵。
お百　申し母さん、そんなら愈々この乞食さんが、お前の子の三之助さん、わたしが兄さんかえ。
三之　母者人、これが妹のお百か。
くま　なんと大きうならうがの。

三之　どうも云へぬ食ひ加減ぢや。
お百　ても、お前が兄さんかいなう。わたしは小さい時から遠い所へ奉公に行たに依つて覺えぬが、母さん、あの乞食がわたしが兄さんかえ。
くま　イヤ、前はれつきとしたお屋敷へ、奉公にやつたのに、今落ちぶれてあの姿ぢやわいなう。
三之　コレ、妹、俺が戻るからは、兄妹のよしみ、隨分いぢつて、博奕の資本を取つてやる。イヤ、母者人、見れば大分よい縹緻、他人に添はさうより、いつそ妹と俺と女夫になつて、この跡式を丸呑みにせうかい。
くま　何を云ふぞい。妹には又平と云ふ、子までなした仲がある。
三之　そんなら男持つてゐるかえ。殘り多い。俺が女房にせうと思ふたに。
お百　コレ、申し母さん、兄さんを奥へ連れて行て、風呂へでも入れ、着る物も着替へさせ、あの姿では物も云ひ難いわいな。
くま　ほんに髮も結ふたり湯も使はし、又平と近附きにせう。
三之　俺やなんぞ早う食ひたいわいの。

お百　サア、マア、兄さん、奥へ行かしやんせいなア。
三之　そんなら奥へ行て、飯も食ふたり酒も呑みませう。サア、母者人、ござれ。
くま　サア〳〵、行きやいなう。
ト唄になり、皆々奥へ入る。向ふより才兵衞、才助、男二三人、狩野之助、笠、着物破れ、取卷かれ出る。
才兵　サア、狩野之助、どうするのぢや。われを方々尋ねてゐた。揚げ代の殘り受取らう。サア、渡せ。受取らう。
才助　エヽ、兄貴、手ぬるい、ぐつと苛なんだがよいわいなう。
狩野　コリヤ、兄弟ともに料簡のない。最前から段々と斷りを云ふのに、聞き入れのない。よう此やうに打擲したなア。
才兵　コリヤ、今までは金遣ふたゆゑ、わつぱさつぱと敬ふたれど、いま素寒貧の狩野之助、揚げ代の算用せいらくせにやア措かぬぞ。
狩野　コリヤヤイ、人は落ち目と云ふ、今流浪の狩野之助、其やうに云はずとも
才兵　そんなら揚げ代の算用するか。

狩野　サア、その金があればそち達に、無心事は開かねども

才兵　けち太い大騙りめ。

ト両人して蹴る。狩野之助、きつとなり

狩野　コリヤ、わい等あんまりぢやぞよ。

才助　何があんまりぢや。盗人同然の猿松め。

才兵　俺等がお騙を戴き居れやい。

ト両人、蹴倒し、いろ／＼打擲する。狩野之助、いろいろ無念のこなしあつて

狩野　エ、コレ、最前から事を分けて云ふを、聞き入れず、武士を捕へてこの打擲。

才助　なんぢや、大騙りめ。

ト唾きはきする。

狩野　もう免されぬわい。

ト脇差しを抜き、才助を斬る。

才兵　ヤア、うぬは弟を斬つたな。ソレ、男ども、ひつ縛れ。

ト男ども、かゝる。少々立廻りあり、又平、湯上がりの體、頭に手拭ひを置き、駒下駄にて、男どもを投げ退け、眞中に立つ。

才兵　コリヤ、なんとするのぢや。

又平　イヤ、なんともしやせぬ。裁人ぢや。

才兵　ヤ、なんと。

又平　爰は俺が門口。風呂屋から戻りかゝつて見ればこの喧嘩、若し事になりやア尻がやかましい。それで挨拶せうと思ふて。

才兵　挨拶するに、なんでこちとらを投げたのぢや。

又平　イヤ、投げはせぬ。コリヤ、お侍ひ一人を、多勢寄つての打擲、それでちよつとあしらふたのぢや。

才兵　イヤ、コリヤ、こつちには手負ひがあるぞ。人死のあるに依つて、あいつを下手人にするのぢや。

又平　なんぢや、手負ひがある。

ト才助を見て

ホイ。

ト思案する。

狩野　斬り損ふて殘り多い。相手の俺が腹切るからは、言分はあるまい。

ト死なうとする。又平、留めて

又平　コレ、待つた。こなさんはどこの人やら知らぬが、俺が斯う出るからは、金輪際挨拶して、その納まる様に

する。コレ、お前は大切な、サア、いや誰れぢや知らぬが三條小橋、出會ふた不肖、わしが挨拶する。氣遣ひな事はない。マアマア、待つたがようござりまする。

狩野　餘の人の千人萬人より、見ず知らずのこなたに顔合はするが、面目ないわいなう。

才兵　コレ、こちらには手負ひがある。今死なうも知れぬものを捕へて、挨拶に出たお前は、マア、誰れぢや。

又平　イヤ、俺や又平と云ふて安な亭主、挨拶に出たからは俺がせりふする。マア、この喧嘩の樣子は。

才兵　高が斯うぢや。あのお侍ひはこちらの客ぢや。揚げ代が百兩ほど滯つてあるに依つて

又平　それで晝中にあの樣に、打擲したのか。

才兵　イヤ、さうではないけれど

又平　今逢ふたものを濟まさぬと云ふては打ち打擲をするなら、當世の人間は皆打擲せねばならぬ。殊に相手はお侍ひ、慮外な云へば斬り捨てにしても大事ない。畢竟云はば斬られ損。

才兵　ヤア。

又平　サア、そこが挨拶どころ。なんと少々の膏藥代で、料簡さつしやれぬか。

才兵　なる程そなたが挨拶、膏藥代で料簡せいとあれば料簡せうが、思ひ廻せば生きてゐて、もつちやくした弟、幸ひの事ぢや、こりや相談しませう。

又平　さう料簡が附けばよい。シテ、命代りの金はなんぼ程欲しいぞ。

才兵　されば、五十兩位では高うはあるまいかい。

又平　なるほど俺が出す物ではなし、お侍ひに云ふて見て

　ト狩野之助の側へ行き

申し、料簡がならぬと云ふて、あの樣な事なさるゝと云ふ事が、ある事でござりますか。お前のお身は大切なお身でござりまするぞえ。

狩野　サア、それでもあんまりあいつ等が

又平　いかに慮外を申せばとて、お前のお身に若しもの事があつては、御主人山左さまへ私しが、サア、何もかもわたしが埒明けます程に、案じる事はござりませぬ。

　ト才兵衛が側へ行き

コレ、俺が挨拶で、五十兩の養生代が出る程に、それで埒を明けて仕舞ふがよい。

才兵　シテ、揚げ代の二百兩は

又平　兩方合はして二百五十兩、受取り證文書いたがよ

い。

才兵　古借錢まで取るとは忝ない。硯をちよつと借して下さりませ。

ト又平、店の硯を渡し、狩野之助が側へ行き

又平　申し〳〵、こちらはさらりと埒明けました。お氣遣ひな事はござりませぬ。

トこの間、才兵衞、證文認め

才兵　これでよいか、見て下さりませ。

ト又平へ渡す。

又平　揚げ代二百兩、慥かに受取り、出入り御座無く候ふ。一札の事、疵養生代、金子五十兩、受取り申す所實正なり。然る上は弟才助相果て候ふとも、我れ等一門親類、脇より申し分御座無く、依つて一札件の如し。これでよし。コレ、今金渡すがよいけれど、途中の事なり。才覺が出來ぬ。後までに俺が受取つて置かう。若し出來ずば俺が拵へてやらう。後に取りに來たがよい。

才兵　大方そんな事であらうと思ふた。あの人は當てにはならぬ。こなたから受取るが合點か。

又平　ハテ、又平が請合ふからは、あの人には構はさぬ。俺が濟ます。コレ、又平は男ぢやわいなう。

才兵　サア、それぢやに依つてこなたに預ける。俺や大津には近附きがあるゆゑ、連れて行て膏藥でも打つてやる。コレ、必らず後に取りに來るぞや。

又平　ハテ、氣遣ひな事はない。金拵へて待つてゐる。

才兵　そんなら後に來う。弟を連れて來い。

男　畏まりました。

ト才兵衞、才助を介抱し、男を連れ入る。跡に又平、こなしあつて、狩野之助をうち連れて入り

又平　殿樣、かやうな事があらうと思ふて、出さつしやりますなと云ふて置きましたのに、大切なお身を持ちながら、どこへお出でなされました。

狩野　サア、俺もそなたの言附けなれば、今日は親父樣の祥月命日、せめて三井寺の觀音さまへと、參詣の戻りがけ、廓の者に逢ふて今のしだら、どうも堪忍がならぬゆゑ。

又平　サア、口惜しいのはお道理でござりますれど、寶の詮議の手懸りが出來るまで、お前のお身に凶事があらば、預かつたお主山左さまに、わたしが申譯がござりませぬ。よう御合點なされい。今暫らくのお辛抱。ほんに最前から、定めてお姫樣にもお待ち兼ね。

ト此うち障子を明け、胡蝶、出て

胡蝶　殿さん、お歸りなされたか。お暇が入つたゆゑ。わたしは案じて居りましたわいなア。

狩野　イヤ、暇が入つた筈ぢや。道でなう。

又平　ハテ、もうようござります。此やうに端近う出でゝ、人目にかゝればお爲にならぬ。ちやつと奥へお出でなされませ。

狩野　そりや合點ぢや。今そなたの受合ふた金の事を

又平　お氣遣ひなされますな。わたしが埒明けまする。マア、この大小もわたしが取つて置きますものを、いつの間にやら

ト此うち、三之助、出かけ、ちやつと見て、入る。又平、狩野之助の大小取つて、下の戸棚へ入れ、

サア、お二人とも、奥へお出でなされませ。

胡蝶　そんなら又平どの後に。サア、殿さん。

狩野　コレ、又平、兎角氣にかゝるは、今の

又平　大事ござりませぬ。マア、奥へお出でなされませ。

ト兩人を奥へやり、こちらへ來て

ほんに云ひは云ふものゝ、最前請合ふた揚げ代と養生代、兩方合はして二百五十兩、この金が、アヽ、その時の事、どうなりと。

ト唄になり、又平、奥へ入る。ト三之助、出て、こなしあつて、戸棚へかゝらうとする、お百、出て

お百　兄さん、コリヤ、何さしやんす。

三之　イヤ、なんにもしやせねど、ちよつとこの戸棚を

お百　此うちには夫の着替へ、人に見せる事はならぬわいなア。

三之　サア、その見せともながる着替へが、猶見たい。

ト少々立廻りになる。この前より長谷部雲谷、旅虚無僧の形にて、出て、門口に立つて居て、よき所にてうちへ入り、三之助が首筋捕へ、見事に投げる。

アイタヽヽヽ、どいつぢやい。うぬ、物貰ひの虚無僧、圖々しくうちへ入つて、なんで俺を投げたのぢや。

ト雲谷、騒がず

雲谷　なる程お見立ての修行者、様子は知らねど御兩所の爭ひ、女中の難儀、見兼ねて入つた梵論字。

三之　ハテ、滅相な事を云ふ。俺がうちで俺が明ける戸棚、かけ構はぬ所へ出た虚無僧、人のうちへ入るに笠を着乍ら、横柄な、マア、笠を取つてこの面を

雲谷　六部が笠、虚無僧が天蓋、取らぬが禮儀、知らずば

篤と數へてくれう。
ト見事に投げる。お百、出て
お百　わたしが難儀、よい所へお入りなされ、忝うござりまする。わたしが爲には兄さんの事、御料簡なされ、お歸りなされて下さりませ。
雲谷　なるほど、拙者は西國方の修行者、こなたに尋ねたい儀があつて、參りかゝつてこのしだら。
お百　ムウ、西國方から、わたしを尋ねたいと仰しやるは
三之　うぬ。
ト三之助、起き上がり、かゝる。尺八にて當てる。三之助、うんとこける。
お百　申し、これは
雲谷　苦しうない、身が家の半時殺し。ナニ、女中、こなたは又平の御内室な。
お百　アイ。
ト合點の行かぬこなし。
雲谷　又平御夫婦、此度のお世話、千萬忝う存じまする。愈々この家に狩野之助さま、胡蝶の前さま、お匿ひ置かれしな。
お百　イヤ、左樣な覺えはござりませぬ。
雲谷　なるほど死中に劍を振ふ時節、隙間の風も厭ふとやら、お隱しなさるは御尤も。拙者事は名古屋山三が家來、松川采女と申すもの、御主人の安否承らんため、遙々と參つた。何卒々々御兩所に、お世話下さらば忝う存ずる。御内室、偏へに頼み存じまする。
お百　なるほどお二方樣をお匿ひ申されし、又平どのに申し上げて、お逢はせ申さいでなんと致しませう、と云ひたいが、こなたは怖い人ぢやなう。
雲谷　ヤア、なんと。
お百　コレ、松川采女さまとこちの人は朋輩、よう知つてござるわいなう。元より御兩所を匿ふた覺えはなけれども、そんな事では行かぬわいなう。
雲谷　そんなら身共を
お百　騙りの仕様が淺はかな。出直してござんせ。
雲谷　ヤア。
ト三之助、起き、こなしあつて
お百　折角云ひ合はしてござんしたのに、オヽ、笑止。
トこなしある。お熊、奥より出て
くま　コレ、又平どの、兄が戻つて居る。近附きになつて下され。

ト云ひ〳〵、お熊、又平、出る。三之助、お百、雲谷、こなし。

コレ、兄、一遍尋ねてゐた。筆殿に近附きになりやいなう

三之　ムウ、扨てはこなさんが、妹聟の又平どのでごんすか。俺や三之助と云ふて、お百が兄。これから妹と仲ようして、母者には構はずと、随分俺に孝行して下され、頼みやんすぞえ。

又平　イヤモウ、頼むの頼まれるのと云ふ事はごんせぬ。互ひの事でごんすてや。

くま　コレ、兄、遂に見た事もない御仁ぢやが、ありや誰れぢや。

ト三之助、雲谷、色々あつて

三之　イヤ、ありやわしが懇ろにする、虚無僧殿ぢや。

お百　ほんにお前は最前の

ト云はうとする。雲谷、こなしあつて

ハテ、其やうに云はんすなら、虚無僧さんでござんすわいなア。

又平　コレ、兄貴、母者人の話しで様子を聞いた。なぜ今まで戻らずにゐやしやつた。

三之　イヤ、戻りたかつたけれど、親の死に目に逢はぬ俺、世間の手前で戻らずにゐました。

又平　ハテ、律義な人ではある。

お百　コレ、又平どの、律義なと思はしやんしたら當てが違ふ。

三之　コリヤ〳〵、妹だてら兄の事を云ふのに

お百　コレ、最前も二人とも

又平　なんとしられた、

三之　こなんに近附きにならうと思ふて、妹を頼んでゐました。

ト此うち奥より

六部　婆さん〳〵。

ト六部、出て、お百、又平、顔見合はせ

そなた達は又平どの御夫婦

くま　そんなら又平夫婦とは近附きでござるか。

お百　ほんにあなたは松川采女さま、其お姿は

采女　アイヤ、拙者この所へ参つたは

ト三之助と顔見合はせ、互ひに悄り

ヤア、こなたは

三之　こなたは昨夜粟田口で

采女　出會ふた非人、即ち親の敵、うめを。
　トきつとなる。
又平　采女さま、コリヤ、何をなされます。
采女　ムウ、又平どの、あの者は
お百　わたしが兄さん、やう／＼今日戻らしやんした。
又平　女房どもの兄弟でござります。
采女　スリヤ、お百どのゝ兄、又平どのゝ、小舅とな。ハテナア。
　ト思案するこなし。
三之　昨夜の仕儀と云ひ、今また逢ふたお侍ひ、ハテ、思ひがけない所で逢ふたなア。
くま　なんの事ぢや。一つも合點が行かぬ。
采女　又平どの、拙者姿を變へ、これへ參つた樣子は
　ト立つて、店にある。藤の花かたげた大津繪を、又平が前に置き
　逢はして下され、連れて歸りたい。
又平　そりやわたしの商賣、大津繪の藤の花を擔げたお山。逢はして下されい連れて去なうとは
采女　その藤の花に緣つながれ、こなたが書いたこのお山繪、塗り笠でくろめる心の下繪、鬼の念佛や雷と一緒に、並べ置くは危ないもの、これぢやに依つて、この繪を身共が買ふて歸りたい。
又平　イヤ、又平が今商賣の大津繪、とつくりと譯を聞かねば、滅多に賣る事はなりませぬ。
三之　又平どの、その譯は俺が云はう。
　ト店にある鬼の念佛の繪を取つて
又平どの、妹が緣につれ、改めて俺が賴みたい、ソレ。
　ト大津繪を出し
又平　こりや鬼の念佛、この繪を見せて賴みたいとは
三之　サア、逞しい鬼の樣なものなれど、ほしの高い仕事すれば後日の難儀、命は惜しい、それで衣を着て姿を替へる鬼の念佛、賴みたいとはこの繪の心、ナ。
又平　スリヤ、こなさんの賴みは鬼の念佛、采女さまは藤の花、兩方思ひ合ふた二枚の繪、こなたは俺が小舅なり、女房の緣。
采女　それぢやに依つて、この繪が求めたい。
三之　鬼の目にも淚、怖い事は知つて居る。こなたを賴むは鬼の念佛。
又平　ムウ、なるほど賴まれた采女さま、この繪を賣りませうが、まだ燒筆の下繪の模樣、兩方とつくりと書き上

げ、この又平が彩色した上で、二人の望みを叶へませう。

采女　仕上げにかゝらぬ下繪の間が、拙者が情。

三之　彩色せずに俺が身の上、どうぞ墨繪に、こなたを頼む。

又平　ハテ、とつくりと、仕上げた上の事。

　ト才兵衛、勘七と連れ立ち、うちへ入る。

才兵　又平、うちにか。最前約束の金。受取らう。

又平　なるほど渡さう。ちつと間そこへ扣へてゐやんせ。

才兵　コレ、京へ去ぬる者ぢや、早う埒明けて下んせ。

勘七　イヤ、コレ、又平どの、俺も京への者ぢや。早う去にたい。サア、約束の金渡して下され。

お百　コレ、申し、お前は終に見た事もない人ぢやが、こちの人を捕へ何を出すのでござんす。マア、お前方は、どこのお人様ぢやぞいなア。

勘七　イヤ、俺や島原の廓屋、俺が抱への奉公人、遠山と云ふ傾城が駈落ちした。

お百　エヽ。

勘七　その事も大方合點、爰なうちに埋んであらう。それを渡しやと云ふ事ぢや。

お百　ムウ、そんなら傾城遠山どのは

勘七　爰なうちへ來てゐる。早う出して貰はう。

又平　イヤ、知らぬ。こちのうちへ傾城を、取り込んだ覺えはない。

お百　さうでござんす。さま／＼の事云ふて、來るわいなア。

勘七　コレ、最前才兵衛に様子を聞いたれば、狩野之助

お百　ア、コレ、必らず粗相云はしやんすな。

勘七　云はぬ程に、こちの奉公人遠山を出して貰はう。

お百　イ、エ、覺えはござんせぬ。

勘七　覺えがなけりやア、いつぞ。

　トお百を退け、行くを留めて

ひや　コリヤ、お前、なんとさしやんす。

勘七　ハテ、ゐるかゐんか、家搜しするのぢや。

お百　イヤ、さうさす事はならぬわいなう。

くま　コレ／＼、娘、家搜しゝて疑ひの晴れる事なら、どこもかも家搜しさしやいなう。

三之　ソレ／＼、戸棚も、二階も見せたがよいわいやい。

お百　サア、それでは。

勘七　エヽ、面倒な、そこ放した。

お百　イヤ、家捜しする事はならぬ。
くま　ハテ、面晴れに家捜しさせい。大事ない。
ト お熊、お百を留める。勘七は行かうとする。お百、留める。振り切り、行くを、又平、勘七を捕へ、見事に投げる。
勘七　又平、なんで俺を投げたのぢや。
又平　人のうちを家捜しするゆゑ、投げたのぢやが、なんとした。
勘七　そんなら遠山を爰へ出すか。
又平　イヽヤ、知らぬ。
勘七　それぢやに依つて家捜しを
ト 行かうとする。又平、附け廻し、立廻りある。此うち遠山、戸棚を明け、ちよつと覗く。又平、ふつと見て、愧りする。勘七、それをと行くを、引廻し、戸棚ぴつしやりさす。
又平　遠山を身請けせう。
勘七　ヤ、なんと。
又平　ハテ、金渡して身請けすりやア、家捜しする事も出す事も要るまいがの。
勘七　面白い、身請けさそう。遠山が身請け代、五百両受取らう。
又平　なるほど渡さう。
才兵　身請けの金があるなら、こつちの養生代、揚げ代も一緒に請取らう。
お百　コレ、又平どの、大枚の金がこなさんはあるかえ。
又平　ハテ、われが構ふ事はない。チツとしてゐよ。
くま　イヤ、又平どの、聟どの、傾城を身請けしたり、揚げ代とやらを、しやる金があるなら、後の月から親子三人、養ふた飯代を貰はう。
又平　エヽ。
三之　コリヤ、母者人、傾城を身請けや揚げ代とは違ふ、飯代取らにやなるまいぞや。
くま　サア、聟殿、親子を養ふた飯代貰ひませう。
才兵　サア、揚げ代と養生代受取らう。
勘七　サア、太夫が身請けの五百両、貰ひませう。
三人　サア、金受取らう。
お百　こちの人、こりやマアどうさしやんす。
又平　どうと云ふたら、この金が
三人　但しはないか。
又平　イヤサ、それは

三人　金受取らう。
ト皆々、詰めかける。此うち雲谷、片脇より、この時つツと出て
雲谷　その金貸さう。
又平　ヤ、なんと。
雲谷　手詰めの金、貸してやらう。
ト風呂敷より、白臺に千兩乘せて、又平が前に直し
サア、千兩、あり勝ちに遣ふた。
又平　スリヤ、この金を
お百　夫に貸して下さんすかえ。
雲谷　いかにも。
ト手水鉢の手拭ひかけを取つて來て、懷より胡蝶の前の繪姿を出し、手拭ひかけに貼り附ける。又平が前に直し
又平、この金遣ひたくばこれを讀め。
又平　桃の井造酒之頭が、妹胡蝶の前、行くへ知れず。尋ね出だし連れ來たる者には、褒美として金子千兩、當て行ふものなり。これは
雲谷　身は長谷部雲谷と云ふ者、即ち小栗宗丹が隱し目附け。胡蝶の前に心をかけ。尋ね出だし連れ來たる者には、千兩のこの金を、當て行ふ褒美のそくたく。
又平　スリヤ、この金を遣ふたら
雲谷　姫を渡せ。この金はそちに褒美。
釆女　又平どの、その金に手を出したら、この釆女が免しは仕らぬぞ。
お百　釆女さま、氣遣ひなされまするな。非道に組する夫ぢやござりませぬ。
くま　サア、結構な金主が附いた。その金借つて飯代を拂はぬか。
勘七　サア、身請けの金受取らう。
才兵　揚げ代取らうか。
雲谷　又平、その金遣ふて、胡蝶の前渡せ。
釆女　その金遣ふたら身共が免さぬぞ。
雲谷　名を取らうより得を取れ、目前の果報。
三人　サア、金受取らう。
又平　サア、それは
雲谷　この金遣ふてそちらを濟ませ。
又平　でも、これは
釆女　その金遣へば人非人、不忠になるがや。
又平　サア、それは

采女　サア
皆々　サア〳〵
三人　どうぢや。
又平　エヽ、四百四病の病ひより、今この手詰めの金。
三人　サア、受取らうか。
ト又平、思案して
又平　なるほど渡さう。
トずつと立ち、納戸より脇差し出し、兩肌脱ぎ、尻からげ、身拵へして
又平　母者人の飯代、身請けの金、揚げ代の金諸共、渡さう。
ト脇差しすらりと拔き、どつかりと坐る。
サア、皆寄つて受取つた。
ト皆々悔り。
皆々　ヤア。
又平　金渡さうにも、今はない。又この千兩の金を遣へばこの身の落度、この場の手詰め夜中まで、皆待てばよし、否ぢやと云へば、遠州助定、そつちへやるか、こつちへ取るか、命の相場は一分五厘、忠義に凝つた又平が、命は掃溜めの塵芥。寄つてこの命受取るか、又夜中まで待つてくれるか。
トこなしある。皆々、顏見合はせ、こなしある。
皆々　待つてやらう。
又平　ヤ、なんと。
皆々　サア、この金、夜中まで待つてやらう。
お百　スリヤ、お前方はこの金を夜中まで
雲谷　その代りに、夜中の鐘が鳴ると直ぐに取りに來る。ナア才兵衞。
勘七　ソレ〳〵、又平が男氣を見込んで待つてやる。その時違ふと家搜しの上、太夫を連れて去ぬぞ。
才兵　俺も代官所へ斷るぞ。
くま　聟は子なり、かゝりや繫がる娘の緣、俺も飯代夜中まで待つてやる。
又平　そつちから、きつぱう下ろした夜中まで、金拵へて渡さう。
雲谷　イヤ、又平、身共もそくたくのこの金、そちに渡すか渡さぬか。この家のうちで返答を待たう。
又平　そりやどうなりとお勝手次第。
雲谷　そんなら又平。
三人　夜中を合圖に

才兵　揚げ代と養生代。
勘七　身請けの身の代。
くま　傾代の算用。
又平　何もかも夜中まで。
雲谷　そくたくのこの金も
勘七　マア、それ迄は
才兵　出口の茶屋で待たう。
雲谷　俺も奥へ行かう。婆様、案内。
くま　からござりませ。
皆々　又平、慈々
又平　ハテ、念には及ばぬわいの。
　ト唄になり、勘七、才兵衛、橋がゝりへ入る。お熊、雲谷、奥へ入る。又平、三之助、お百、釆女、殘る。皆々こなしある。釆女、繩捌きして
釆女　又平どの、繩かけて渡さつしやれ。
又平　釆女さま、繩かけて渡せとは。
釆女　拙者が親の敵、粟田口の非人、鷲の三、卽ちそちが女房の兄、小舅に繩かけ渡し召されい。
お百　エヽ、そんならこの兄さんが
釆女　金の盜賊、親の敵。
又平　して、その證據
釆女　つゞれの片袖。
　ト拋る。三之助、見て、こなしある。
お百　ほんに最前着てござんした、つゞれの片袖。
三之　其やうな覺えはない。知らぬ〳〵。
釆女　親の敵、遁れはあるまい。
三之　いつそ、うぬを
　ト三之助、釆女、少々立廻りあり、又平留めて、中へ入り
又平　コレ、待つた。兄貴、小舅の緣、又平がしつかりと匿ふ。
釆女　それぢやに依つて身共が
　ト お百、留める。附け廻し、又平、留めて
又平　釆女さま、繩かけて渡さう。この繪も貰らう。
釆女　ヤ、、なんと。
又平　兩方ともに望みを叶へう。
お百　兄さんも匿ひ、釆女さまも望み叶へうとは
又平　鴉鳥懷へ入る時は、獵人もこれを助ける。釆女さま、わたしが賴み、繪を渡すまでこの鬼の念佛の繪を、暫らく御用捨なされて下さりますまいか。

釆女　現在親の仇なれど、事に依つたら暫時の用捨、致す
まいものでもないが、こなたの所存は
又平　なるほど。
ト硯を取つて來て、又平、誓紙を書く。
コレ、兄貴、これを見やんせ。
ト三之助に見せる。
三之　こりや俺をしつかりと、匿ふたと云ふ誓紙。
又平　サア、女房の兄、小舅となればしつかりと、匿ふた
と云ふ誓紙、これもこの通りに
ト右の誓紙を燒き、鉢に水入れ、右の灰を入れて、三
之助に持たし
この水を一滴でもうぼらしたら、釆女さまの親の敵、俺
は構はぬ。水のこぼれぬ間は十年でも二十年でも俺が匿
ふた。鵜の毛で突いた程でも怪我はさせぬ。水がこぼれ
ると命がない。隨分大事にかけて持つてゐやんせ。
三之　スリヤ、から持つてゐて、この水がこぼれたら、俺
が命がない。こりや迷惑なものぢや。
お百　迷惑なら釆女さまに、勝負をさゝうかいなア。
三之　イヤ、矢ッ張りこれがよい。
ト正面向き、鉢を大事に持つてゐる。

釆女　又平どの、あの水が一滴でもこぼれたら、親の敵、
生けては置かぬぞ。
又平　そりやあなたの御勝手。水をこぼすが生死の境。
お百　あれで戸棚へさはられず、兩方かけてよい思案。
三之　俺がためには大事の水。
釆女　こぼれぬ間が拙者の用捨。して、この繪の仕上げは
又平　奥にてとくと、申し談じてこの繪の納まり。
お百　彩色仕上げは夫の胸に
又平　萬事は後ほど、釆女さま。
釆女　又平どの。
又平　女房、御案内。
お百　アイ。
ト唄になり、釆女、お百、こなしあつて、三之助、鉢
を大事に、思ひ入れあつて、皆々入る。ト奥より狩野
之助、胡蝶、出て
狩野　最前から奥で樣子を聞けば、又平夫婦の難儀も皆俺
ゆゑ。寶は紛失、家は斷絶。せめて腹切つて死ぬるが先
祖への申し譯。親の讓りの大小は、この戸棚のうちへ
ト明けうとする。胡蝶、留めて
胡蝶　コレ、申し、殿樣、今お前が死なしやんしては、又

平どの夫婦の志しも水の泡、必らず御切腹は止まつて
下さんせ。

狩野　ハテ、最前も奥で云ふ通り、未練な、爰放しや。

胡蝶　イヤ、待つて下さんせ。

ト少し立廻りあり、胡蝶を突き退け、戸棚を明ける。
トうちより、遠山、出て

狩野　ヤア、そなたは太夫、爰にはどうして。

遠山　アイ、殿さんお、前が爰にゐやしやんすと聞いて、
廓を駈落ちして尋ねて來たわいなア。

胡蝶　そんならお前は、傾城遠山どのか。

遠山　そんならお前がお姫様か。何も申しませぬ、堪忍し
て下さりませ。

狩野　暇取つては又平が難儀、さうぢや。

遠山　待つて下さんせ。お姫様、しつかりと留めて下さん
せ。

胡蝶　遠山どの、必らず放して下さんすな。

狩野　イヤ〱、二人ともに放せ〱。

ト三人、いろ〱思ひ入れあつて、揉み合ふうち、寢
鳥ドロ〱にて、胡蝶遠山を振り拂ひ、狩野之助、女
形の身振り、これより千枝の附け聲にて

申し姫様、遠山どの、お二人ともに恨めしうござんす。

遠山　申し殿さん、そりや何を云はしやんすぞいなア。

狩野　何を云ふとは聞こえませぬ。遠山どの、お國でわた
しと云ひ交はした殿様、移り易きに殿御の心。わたしや
お前に思ひ替へられたわいなア。

ト泣く。遠山、合點の行かぬこなし。胡蝶、むつとし
て

遠山　申し殿様、遠山どのばかりに寄り添ひ、仇厭らしい、
こつちへござんせ。

ト連れて退く。狩野之助、女形のこなし、又胸倉を取
り、胡蝶に向ひ

狩野　申しお姫様、お羨ましうござんす。お前は禁廷の勅
諚と、殿様との御婚禮、さぞお嬉しうござんせうなア。

ト恨めしさうに顔を眺めて云ふ。此うち矢張り寢鳥、
合ひ方、ドロ〱。

胡蝶　嬉しい段か、わたしが心推量して下さんせと、添ひ
寐の節に云ふたぢやござんせぬか。

狩野　さう云ふ事を聞くと、わたしや猶腹が立つわいなア
立つわいなア。

ト振り廻し泣く。遠山、又むつとして、狩野之助をこ

ちらへ連れて來る。

遠山　申し殿さん、お前は〳〵、いつぞやの騒動から、便りをしても下さんせぬは、お姫様ばかりいとしぼがつて、わたしの事は思はしやんせぬ。聞こえませぬ〳〵わいなア。

ト泣く。狩野之助、きつとなり

狩野　エヽ、二人ともに睦まじい、その睦言を聞くにつけ、いとゞわたしが修羅のもと。この身は劍にかゝり、妄執の雲に隔てられ、浮かみもやらぬほむらの煩惱、二人ともに殿樣に、安穩に添はさうかいなア。

ト胡蝶、遠山、こなしあつて

遠山　申し殿さん、最前からお前の詞、その姿は

胡蝶　又平の身の難儀、ハアと思ふてお氣が亂れはせぬか。

狩野　イヽエ、殿さんぢやござんせぬ。假の契りは百歳の命、兄の又平どのゝ手にかゝり、焦れ死した腰元の千枝が、魂魄でござんすわいなア。

胡蝶　エヽ、そんならこなたは又平の妹か。

遠山　お千枝さんでござんすかえ。

狩野　閻浮に返る恨みの一念、思ひ知らさん二人の衆。

トこれより連理引きの樣になる。二人を惱ましゐる所へ、奥より又平、國丸を連れ出て、兩人を分け、狩野之助の胸倉を取り

又平　妹、そちや迷ふたな。

狩野　兄さん、お前は無慾なお人さんぢやなう。

又平　ヤイ、妹、そちは生れ附いて悋氣深い故、兄が手にかけ殺したは、殿のお情受けたそち、悋氣に募りお身の仇にもならうかと、後難を思ひ手にかけた。所詮叶はぬ戀と諦めて、成佛してくれい。

狩野　イヤ〳〵、戀に上下の隔てはない。輪廻の絆つき纏ひ、二人の衆に仇する。

又平　エヽ、怨念深い妹。これ高島の家の重寶、閻浮壇金の一寸八分の觀世音、國丸さまの御守り、さうぢや。

ト國丸が守りを取り、狩野之助に附ける。

しゆおんしつたいさんねび觀音力、南無觀世音菩薩。

ト追廻す。狩野之助、五體を震はし

狩野　エヽ、閻浮壇金の奇瑞、尊像の功力に依つて、死靈の附添ふ事は叶はぬか。赦させ給へ。

ト云ひ〳〵、ドロ〳〵にて、狩野之助、苦しみ、こける。

胡蝶　申し殿様、お心が附きましてござんすか。
　ト皆々、いろ〳〵あり、狩野之助、むく〳〵と起き
狩野　姫、遠山、又平、何とぞしましたか。
遠山　今お千枝さんの死靈が附いて、わたし等にもかこち
ごと、圓丸さまのお守りの功力にて、死靈は消えました
わいなア。
狩野　スリヤ、お千枝が執心、死んだ後までこの狩野之助
に迷ふか。可哀や〳〵。
　ト奥より足音して
三雲　又平々々。
　ト口々に云ふ。又平、こなしあつて
又平　コレ、申し、あいつ等は宗丹が廻し者、見附けられ
てはお身の大事。
　ト此うち始終呼ぶ。胡蝶、障子屋體へ、遠山、戸棚へ、
その間に又平、狩野之助を表へ連れて、番屋へ入れる。
奥より三之助、鉢を持つて、お熊雲谷とお百出る。
くま　又平、爰に何してゐやる。
又平　何もしやせぬが、母人、兄貴、なんの用でごんす。
三之　イヤ、俺や用はない。母者人がなんぢやゝら、云ふ
事があると云ふて居らるゝ。コレ、母者人、こなた今の
事を云はつしやらぬか。
くま　又平、なんでもない。最前待つてやらうと云ふた飯
代を、今貰はうかい。
又平　そりやこなた最前、夜中まで待つてやらうと云ふた
ぢやないか。
くま　サア、さう云ふたけれど、今急に金の要る事がある。
サア、飯代をおこしや。なけりやアきり〳〵出て行け。
又平　エヽ。
三之　今おこさにや追ひ出すとな、こりや母者人のが成る
ほど理屈ぢや。又平、飯代を拂はずば、われも、サア、
きり〳〵出て行け。
又平　事に依つては出て行くが、女房お百は
雲谷　われが女房は詮議の囮。
お百　コレ、申しこちの人　この場の手詰め、わたしや跡
に殘り、退けば他人になつて、この家のうちに、サア
　ト障子屋體を教へ、心遣ひする。
どうも云ふに云はれぬお前と離別するも、大切な、サア、
親の言ひ附け。男の子はお前に附けば、その子を連れて
必らずともに、遠うは、サア、ナ、門口になりと勝手に
行かしやんせ。コレ、なんにも氣遣ひな事はござんせぬ、

ナア、母さん。
又平　女房、たとへ俺が出て行くとも、そちが性根一つ、ナ、必らずこれを忘れなよ。
お百　アイ、女子でこそあれ、お主の、サア、親の言ひ附け、母さんの詞、背きはせぬわいなア。
雲谷　そんならこの家のうちに狩野之助、胡蝶の前、匿ふてあるなア。
三之　妹、きり／＼云ふて仕舞へ。匿ふてあらうがな。
お百　イヽエ、匿ふてはござんせぬ。知らぬわいなア。
雲谷　どうで優しう云ふてはぬかすまい。
くま　又平、きり／＼出て行け。
三之　母者人、叩き出して仕舞はつしやれいの。
くま　サア、出て行け。厭なら飯代おこすか。
雲谷　覺えがなけりやアこの火を握れ。
　ト火鉢を持つて出て、火を突きつける。
お百　エヽ。
雲谷　サア、昔から云ふ湯起請の替り、覺えなくば、この火を握れ。握らねば、コリヤ。
　ト鐵砲を出し、又平方へ構へる。
お百　エヽ、コレ。
　ト圍ふ。
三之　エヽ、母者人、雲谷さま、手ぬるい。早う片附けて仕舞はつしやりませ。
雲谷　サア、火を握らぬか。
お百　サア
雲谷　但し匿ふてあるか。
　ト鐵砲構へる。お百、圍ふ。
くま　飯代おこすか、出て行くか。
　ト又平を突き飛ばす。
國丸　コレ、父樣。
　ト取り附く。
くま　こいつも男の餓鬼ぢや。一緒に出て行け。
　ト頭毆る。
又平　エヽ、あんまり
くま　なんぢや、飯代おこすか。
三之　金があるか。
又平　サア、その金が
お百　こちの人、その子を
雲谷　コリヤ、じつとしてゐい。
くま　極道め、きり／＼失せう。

雲谷　サア、女郎め、この火を握れ。
お百　サア、それでも
雲谷　火を握らぬは匿ふたか。
お百　サア
雲谷　サア／＼、早う握れ。
お百　いつそ、さうぢや。
　ト火を握る。又平、戸を明ける。國丸、見て
國丸　ヤア、母さん。
　ト行かうとする。雲谷、鐵砲構へる。ト又平、留める。
雲谷　コレ。
　ト此うち胡蝶、出ようとする。お百、こなしあつて
お百　アヽ、出まいぞ／＼。サア、出て行かしやんした又平どの、金がなければ戻られぬ仕儀。サア、夫やわたしがこの辛抱も、皆、サア、ナ、お前方の疑ひの晴れるやう、覺えのない事ゆゑ、わたしや熱うもなんともござんせぬわいなア。
　ト思ひ入れある。又平、こなしある。
雲谷　ハテ、よう握つたなア。
三之　なんと雲谷さま、どうでござります。

雲谷　イヤモウ、大抵の事では行かぬわいやい。この證據を見るからは、もう疑ひ晴れた。
　ト障子屋體を顔で教へる。
三之　いかさま、ちつと氣を拔いてもようござりませう。
雲谷　これから奧へ行て、酒なと呑まう。
三之　俺も奧へ行て相伴せうかい。
くま　サア、ござりませ。
　ト唄になり、雲谷、お百を連れ、奧へ入る。三之助、お熊も奧へ入る。此うち又平、國丸を抱き、立ち聞きしてゐる。
國丸　申し父さん、母さんの難儀、わしや氣にかゝるわいなう。
　ト泣く。又平、こなしあつて
又平　誠に栴檀は双葉よりと、幼なけれども一國の若君、お家の騷動より我れ／＼が悴、いかい苦勞をかけますなう。
　トいろ／＼こなしある。此うち始終合ひ方。ト橋がゝりより、忍びの者一人出て、又平、片脇へ寄る。門口へ來て、呼子を吹く。奧より雲谷、出て、表の戸を明け

雲谷　宗丹どのゝ御家來平馬どの、御苦勞。
忍び　して、申し合はした儀は、
雲谷　よろしうござる。暫らくそれに。
ト此うち始終、又平、窺ひ居る。雲谷、うちへ入る。戸棚を明け、遠山を出し、手拭ひにて口を括り、繩をかけ
ソレ、宗丹公へ、早う〳〵。
ト門に出し、戸をぴつしやりとさす。忍び、合點し、遠山を擔げ行く。又平、出て、引戻し、遠山を下ろし、忍びをぽんと斬り、遠山が繩を解き、番屋へ入れる。狩野之助、顔見合はせ
狩野　ヤア、太夫か。
遠山　殿さん。
ト抱き附く。戸をさす。又平、片脇へ忍ぶ。うちにて雲谷、こなしある。奥へ入る。始終合ひ方。障子屋體より、胡蝶を連れ出で
雲谷　これも後から宗丹公へやる。
ト納戸口より葛籠を出し、胡蝶を入れる。此うち障子のうちより、お百、見てゐる。雲谷、そろ〳〵出て、葛籠を明け、胡蝶を入れ、こなしあつて、奥へ入る。

お百、出て、葛籠を明け、胡蝶を出し、繪の具の摺り鉢を入れ、胡蝶をほどき、囁き、下の戸棚へ入れる。これを三之助、見てゐる。お百、こなしあつて、奥へ入る。三之助、鉢を持ちながら、そろ〳〵出て、右の水鉢をそつと片脇へ置き、戸棚を明け、胡蝶を出し、無理矢理に采女が持つて來た笈の中へ入れ、これを采女、ちよつと見てゐる。三之助、よろしくあつて、又水鉢を持ち。大事さうに奥へ入る。此うち又平、表を切り破り、始終見てゐて、うちへ入り、笈にかゝらうとする。奥よりお百、出る。囁く。ト九つの半鐘鳴る。橋がゝりより才兵衛、勘七、出て、うちへ入る。
兩人　サア、約束の夜中、金受取らうか。
ト奥より、お熊、雲谷、采女、出る。
くま　又平、又舞ひ戻つたか。
又平　飯代の算用すりやア、言分はあるまい。
くま　サア、そんなら金受取らう。
才兩　おい等も金受取らう。
采女　又平、拙者が繪の返事は
くま　サア、約束ぢや。この金遣ふて娘を渡せ。
又平　何もかも今埒明ける。

ト右の金取り
ソレ、揚げ代、養生代二百五十兩。身請けの金五百兩。
ソレ、母者人、飯代の金。サア、皆受取つた。
ト皆々渡す。
くま　金さへ取れば云ひ分はない。
勘七　ソレ、太夫が年季證文渡す。
ト證文、又平へ渡す。此うち才兵衛、證文書きゐる。
才兵　揚げ代の請受り、疵養生代の一札。
ト渡す。
勘六　此うへは言ひ分ない。才兵衛、サア、去なう。
ト兩人、入る。
雲谷　サア、又平、そくたくの金遣ふた上は、姫を渡せ。
又平　なるほど渡さう。
ト葛籠を出す。
雲谷　この葛籠を姫とは。
又平　此うちへ姫を入れた事、よく見て置いた。
ト兩人、こなしあつて
お百　コレ、滅相な。その葛籠渡しては。
トお百、いろ〳〵あつて、留める。
又平　ハテ、コリヤ、主を思ふも身を思ふから。斯うなつたら、せうがない。
お百　そんなら渡さしやんすか。ハア、。
トこなしある。
雲谷　出かした。匿ふた科赦して下れう。一時も早う宗丹さまへ、此まゝで
ト葛籠をかたげ、橋がゝりへ入る。
采女　又平どの、そちらが濟んだら、手前の望みの繪の返事は。
雲谷　なるほど、こなたへの返事はその笈、勝手に持つてござれ。
采女　いかにも、それで拙者が望みも叶ふ。又平どの、なんにも申さぬ。お暇申す。
ト笈へかゝる。三之助、奥より出て
三之　その笈渡す事は、ならぬ〳〵。
采女　ハテ、こりや拙者が笈を拙者が持ち歸るを、なんで渡さぬ。
三之　サア、それでもその笈、渡す事はならぬ〳〵。コレ、母者人、ちやつと留めて下されいなう。
采女　身共が笈を持ち歸るに、妨げすりやア二つ玉ぢやぞ。

ト種ケ島構へる。

三之　エヽ、それでも、その笈は、もう是非に及ばぬ。

ト右水鉢を、鐵砲へかける。

又平　水がこぼれたから誓紙は破れた。采女さま、ソレ、勝負々々。

ト采女、三之助、立廻りになり、橋がゝりより雲谷、葛籠を持つて出て

雲谷　又平、よう銅脈渡したなア。うぬ。

ト又平にかゝる。立廻り、笈より胡蝶を出す。

くま　ヤア、そちや姫。

トかゝる。

お百　コレ、申しお姫樣、ちやつと殿樣

胡蝶　して、殿樣は

又平　表の番屋に

く三　そんなら表の番屋に

ト三人、行かうとする。又平は雲谷、お百はお熊、采女は三之助、兩方に立廻りいろ／＼あり、采女、三之助に、繪具鉢かぶせる。トお百、お熊に、葛籠かぶせる。又平、表へ出る。雲谷、行かうとする。又平、門口の戸ぴつしやりさす。

又平　ござりませ。

ト狩野之助、遠山、胡蝶、國丸、向ふへ入る。

ひやうし幕

切　幕　　不破屋敷の場

役名　高島狩野之助。澤井半次郎。松川采女。高島國丸。胡蝶の前。鬼塚玄蕃。秋塚源五郎。比良大角。奴、鳩内、同、鷲藏。同、鳶助。同、鵙平。妻、關の戸。奴、又平。名古屋山左衛門。傾城、遠山。胡蝶の前。不破伴左衛門。

造り物、綺麗なる館の體。幕のうちより鷲藏、鵙平、鳶助、鳩内、奴にて、狩野之助を中に置き、割り竹にて責めてゐる見得。又平、上の段にて、衣裳奴にて、寢ころび居る。この見得にて、幕明ける。

皆々　殿樣、お目を覺まされませい。

ト一度に割り竹にて叩く。狩野之助、目を覺まし

狩野　コリヤ、遠山、胡蝶、コリヤ、マア、待て／＼。

又平　ナニ、遠山ぢやの胡蝶ぢやのとは、なんの事ぢや。

トきよろ／＼する。皆々もきよろ／＼する。

狩野　日頃戀しい慕しいと思ふゆゑ、とろとろとまどろむうち、夢ともなく現ともなく、遠山と云ひ胡蝶の前まで、まざ／＼見しは、ウヽ、誠に胡蝶の夢の一眠り、覺めてはもとの苛責の刃。夢は五臓の煩ひ。ハア、何事も夢の浮き世、思ふまい／＼。

ト云ひ、又眠る。

鷲藏　なんのわしだとてこの四五日、夜の目も寐ずに、責めい／＼とお頭の言附け。ちつとでも怠ると、扶持米に離れるが厭。サア、白狀さつしやれ／＼と云へば、イヤ、どこでは傾城を見染めた、かしこではお娘と云ひ交したと、よしないたわ言、エヽ、怪體の悪い。

鳶助　この頃になつては、責めらるゝ若殿より、こちとらが結句責めらるゝ樣なものぢや。見りやアお頭も疲れが出たやら、とろとろやつてゐらるゝ。我れしも少しとろめかす程に、頼むぞ／＼。

鷲藏　イヤ、又こな奴ほどよく眠たがる奴はない。シタガ、鳶助が云ふ通り、もうこちとらも引き入れらるゝ程ねむたい。こりや又代り／″＼に、ちつと休んでも大事ありそむないものだ。

鴫平　イヤ／＼、大事の御用を云ひ附けられた事、高が暫らくの宥免するうち、こいつを取り逃しては、こちとらが笠の臺が飛ぶ。眠たいが辛抱せう／＼。

鷲藏　こりや鴫平が云ふ通り、大事の科人、こちとらに心ゆるさせ、高ぶけりせうも知れぬ。油斷はならない。

皆々　殿樣、お目を覺されませい。

トこの間、鳶助、眠りゐて、倒りし

鳶助　ハイ／＼、御赦されて下さりませ。余り眠たさに、昨夜も百文出して代りを雇ひましてござりまする。もうもう眠りはいたしません。御赦されて下さりませ。

鴫平　何ぬかす。その寐呆けた樣をお頭が見さつしやつたら、大抵の事ではあるまい。氣を附けろ、コリヤ、性根を附けないか。

ト又叩く。鳶助、倒りし

鳶助　アイ、申します／＼。この間の丁半の時、四五十手味噌をやつたより、何も覺えはござりません。

鴫平　エヽ、性根を附けろ。何もおのれに白狀せいとは云はぬわやい。

ト鳶助、邊りを見廻し

鳶助　鷲藏、鴫平、鳩內、今のはわい等であつたか。わし

は又お頭と思ふて、これ迄の惡事を、既に申さうとしたわい。

鴫平　何を馬鹿め。

鶯蔵　サア、狩野之助さま、氣を落着けて、ありやうに云はつしやれ。

鴫平　目を覺さつしやれ。

　ト割り竹にて叩く。又平、起き上がり

又平　コリヤ、皆の者ども、まだ白状召されぬか。お旦那伴左衞門さま御遊山にお出でなされ、お歸りまでに白状させ置けとの御意。責めても／＼白状せぬ、しぶとい性根。よい／＼、これからおらが替つて、一責め責めて白状さゝう。わい等はお旦那のお歸りまで、部屋へ行て、とろ／＼とやりかけるサ。

鶯蔵　そんならお頭、とろ／＼とやつても、大事ござるまいか。

又平　そりやおらが存込んだ。早く行かう。

皆々　エヽ、有難い。

蔦助　人は氣の物だわい。この間、夜も晝も寐んと思へば眠たし、又今の樣に行て休めと云ふ詞を聞くと、猶ねむたい。そんならお頭に任して、とろ／＼やりかけうわい。

三人　それがよからう／＼。

蔦助　お頭、頼みますぞや。

　ト云ひ／＼、橋がゝりへ入る。合ひ方になる。

又平　コリヤ、長うはならぬぞよ。旦那のお歸りと聞いたら、直ぐに起きて來う。

　ト云ひ／＼、邊りを見廻して、狩野之助の側へ寄り、介抱して

移り變る世の習ひとは申しながら、誰れあらう四國一圓のお大名、狩野之助さまともあらうお身が、夜を一夜まんぢりとも御寢なる事もならず、殊に大殿樣をあやめし詮議を、責めて白状さするとは。皆伴左衞門が巧みとは存じながら、何を云ふてもそれぞと云ふ手懸りも見出ださねば、是非に及ばぬ、とは申しながら、この又平めが居りまするからは、實の詮議し出だし、再びお家を立てさしませう程に、ちつともお氣遣ひなされまするな。

　ト此うち狩野之助、ふら／＼眠り居る。ふつと目を明き

狩野　又平、コリヤ、斯の詮議するのか。斯程責めるが苦しいと云ふて、現在親人を子の身として、なにに手にかけ

う。此やうに憂き目を見せずと、いつそ一思ひに殺して
くれいやい。
又平　スリヤ、この又平が心底をお疑ひなさるか。
ト此うち狩野之助、ふら〳〵眠り居るを見て
何を云ふても夢うつゝ。アヽ、お道理でもあり
ト思ひ入れあるうち、岡平、赤面の剃り下げ奴にて、
出かけゐて
岡平　又平、どうだ、狩野之助は白状したか。
ト又平、恟りし、ちやつと割り竹を振り上げ、叩く眞
似してゐる。
まだ白状せぬか。ハテ、しぶとい二才めだなア。
ト又平、地へ物を書き、岡平に見せる。
又平　コレ、狩野之助さま、こいつは金壺でござるゆゑ、
仕方さへして居れば、何を云ふても苦しうござりません
程に、何なりとも御遠慮なく、仰しやりたい事あらば仰
せられませい。
ト云ひ〳〵書くを、岡平、見て
岡平　なんだ、どの様に責めても白状せぬ。いつそ殺せと
ぬかすか、憎い奴の。滅多に殺すな。殺してしまふては
物がないぞ。

ト又平、心で笑ひ、割り竹を振り上げ
又平　この又平めが伴左衛門に隨ひ居りまするは、寶詮議
を致さんため。
狩野　左程また忠臣のそちが、親人様を討たぬ事を存じな
がら、かやうにはするぞ。
又平　ハテ、そこが惡に入つて惡を見出だす計略、寶の紛
失、大殿様を殺したも、大方伴左衛門が仕業。
岡平　又平、狩野之助を眠らすなよ。
狩野　シテ又、なんぞ詮議の手筋でも知れたか。
トうちより
呼び　お歸り。
ト云ふ。又平、きつと思ひ入れ。
岡平　なんぢや、何をきよろ〳〵する。
ト又平、書いて見せる。
又平　必らず私し次第にしてござりませ。
岡平　エヽ、旦那のお歸りか。
ト又平、仕方して見せる。
それならそれと、早くぬかしたがよい。早くお迎ひに出
ろ〳〵。
ト又平、岡平、出向ふ。蔦助、鷲藏、鴟平、鳩內、出

迎ふ。不破伴左衛門、衣裳羽織にて、侍ひ附き出る。
お旦那には今日は、いづ方へ御遊興でござります。

伴左　聾め、どこへとは、おのれに物を云へば草臥れるわい。

岡平　御褒美のお詞、有難うござります。

伴左　又平、狩野之助は白狀いたしたか。

又平　責めましたれども只今まで、現にも申した儀はござりませぬ、どうでこの手では白狀いたしますまい。こりや責めをお替へなされたがようござりませう。

伴左　われが爲には主人の主人、その大切な狩野之助を、見事責め負ふせて見せるか。

又平　これは又改めました儀を仰せられまする。一旦お旦那へ御奉公に出ましたるこの又平、以前の誼みも主筋も切り果てた、赤の他人の狩野之助、なんの誼み、用捨仕らう筈がござりません。

伴左　でも、うぬは怖い奴ぢや。スリヤ、身が目の前で見事責めをしかへて、白狀さして見るか。

又平　お目にかけませう。その水責めの道具、これへ。

侍ひ　ハツ。

ト梯子、水桶、砂舞臺へ直す。

又平　サア、水くれて白狀さす。立たつしやれい。

トきつと思ひ入れあつて、狩野之助を引立てる。

伴左　もうよい／＼。責めるに及ばぬ。牢屋へ打ち込み置け。

狩野　エヽ、口惜しい。遠山が事を根に持つて、覺えもないこの身に、さま／＼の惡名を附け、親殺しなんのとは、卑怯な宗丹。

ト詰めかける。

伴左　宗丹とは誰れが事。今にては禁廷のお見出しに預かり、この東山を領地に賜はり、洛東の支配を司り、先祖の家名を興し、不破の伴左衛門光秀と名乘るぞよ。大切なる預かりの重寶紛失の上、親を討つたる狩野之助、逆磔刑にもかける奴なれど、暫らく御前へ申し上げ、今日まで露命を繫がせ置くは、皆伴左衛門が情ぢやぞよ。暫時も命を延ばはり居る恩を忘れ、戀路の意趣なんど、は、色に迷ふおのれの心に引較べ、慮外の雜言、今一言云ふて見よ、手は見せぬぞ。

狩野　佞人みた人に紛ると、聞きよい情呼ばはり、元はと云へば皆一たい、この身の流浪。

ト又平、思ひ入れあり

又平　ハテサテ、今になり役にも立たぬ世迷ひ言。牢屋の役人、引立てい。

役人　ハア、ござれ。

ト無理に狩野之助を奥へ連れ入る。

作左　又平、改めてそちに責めさすものがある。

又平　まだ外に科人がござりますか。

作左　今を盛りの山櫻、色よき花の科人。玄蕃、その科人、これへ引け。

玄蕃　ハア。

ト説經になる。遠山、胡蝶、腰繩附けて引き出る。又平、思ひ入れある。

又平　スリヤ、科人と仰せられたは、この女でござりまするか。

玄蕃　科人も科人、今發行の伴左衛門さまのお心に、隨はぬ兩人の女、搦め捕つたはこの玄蕃がお目見得の奉公始め。なんと天晴れのお土産でござりませうがな。

又平　いかさま、こりや天晴れの科人でござりまする。

作左　又平、そちに云ひ附ける。この兩人のうち、いづれなりとも、この伴左衛門が心に隨はせ。

又平　畏まりましてござりまする。

玄蕃　サア、又平、伴左衛門さまの御意の通り、そちが働き、手際が見たい。

又平　お目にかけませう。胡蝶さまは格別、遠山どのは情を商ふ身でないか。なぜ伴左衛門さまのお心には從はぬぞ。

胡蝶　貞女兩夫に見えず。

遠山　忠臣二君に仕へず。

胡蝶　舌三寸を以て人を損じ

遠山　大惡人の小栗宗丹。

胡蝶　いかにさもしい下部ぢやと云ふて

遠山　さもしい卑怯な又平どの。

胡蝶　銘々の心に較べ、二挺つ弓を引くとは

遠山　なんぼう賤しい流れの身でも、わしやそんなさもしい、卑怯な心は持たぬわいなう。

胡蝶　エヽ、そちは見下げ果てた者ぢやなア。

又平　以前は以前、今は伴左衛門さまの家來のこの又平、御主人の御意なれば、金輪奈落まで口説き落として、お寐間の伽をと云へば玉の輿、否と云へば火水の責め、善惡の返事が生死の境。

遠山　ハテ、責めなりと殺すなりと

胡蝶　命は更々惜しまぬ。
遠山　どうなりと勝手にさしやんせ。
又平　しぶとい女め、幸ひこれに水くれる道具はある。サア、兩人ともこの梯子へ
鳶鷲　合點ぢや。
ト鳶助・鷲藏、立ちかゝるを
伴左　待て。その女を責める道具は外にある。
又平　この女を責める、外に道具があるとはな。
伴左　家來、申し附けた物、これへ持て。
侍ひ　ハア。
ト白臺に衣裳、上下、大小載せ、持ち出る。
又平　この衣裳大小を、責め道具とはな。
伴左　兩人のうちいづれなりとも、身が心に隨へば、直ぐに引上げ身が奥樣。その功に依りそちも引上げ武士にしてくれる。又否とぬかせば、身が心に隨はぬ女め、生けて置いて人の花を眺めさせんよりは、さつぱりと、ナア、その飛ばしりはどこへかゝるまいものでもない。正眞の下世話に云ふ、馬に乘るか牛に乘るか、胡蝶、遠山、兩人が心一つにて、一家一門までも浮かみ上がる事ぢやが、なんと思ひ直して、心に隨ふ氣はないか。
又平　今お旦那の御意の通り、應とさへ云ふて下さるれば、この又平めも立身出世、こなた衆も玉の輿、なんと得心する心は、遠山どの。
遠山　何を、こなさんの目からは、その衣裳大小も結構に見えるか知らぬが、わしが目からは辻かいもとに捨てゝある、塵芥の樣に見えるわいなう。
又平　エヽ、云はせて置けば法もない惡體、もうこらへ袋が切れるわい。
遠山　ハテ、から云ふが腹が立つなら、どうなりとさんせいなア。
ト此うち橋がゝりより、わや〳〵と云ふて、せり合ひゐる。釆女源五郎出る。
鷲藏　何者ぢや、退らぬか〳〵。
釆女　惡く留め立てひろぐと、打ち放すぞ。
源五　行く所までは行くのぢや。
釆女　イヤ、慮外な奴の。
トかゝるを、源五郎、釆女、ぼん〳〵と切る。
玄蕃　寄りやアがつたら殺すぞ。
ト身構へする。
源五　ヤア、玄蕃か。

玄蕃　源五郎か。

兩人　ハテ、よい所で逢つたなア。

ト兩人、きつとなる。

采女　扨ては佞人非道の鬼畜玄蕃。うぬもこの所に居るからは、ヤイ、人非人の又平め、大恩ある主人の仇ある宗丹に仕へる、コナ、犬腰拔けめが。

又平　名を取らうより得を取れと云ふが當世、要らざる忠義立てに痩せ頑張つては、鼻の下が干上がるわい。

采女　につくい雜言、討ち放す奴なれど、大切な御主人のお身の上、サア、狩野之助さまの御供して立ち歸る。

源五　ヤイ、玄蕃、胡蝶の前さま遠山諸共、おのれが奪ひ取つたに極まつた。こつちへ渡せ。

玄蕃　オヽ、よい推量、兩人ともにこの玄蕃が生捕つたはな、いつぞやの返禮、よう酷い目に遭はしたなア。

采女　先づ離れよりは、大切な狩野之助さま、奥へ踏ん込みお供する。退け。

ト行かうとする。この間、岡平、出て、立ち塞り

岡平　なんだ、遂に見た事もない侍ひめ、どこへ失せる。

采女　知れた事、若殿樣を

ト行かうとする。立廻りあり

岡平　晝中に躍り込むは盜賊か。譯を聞かないうちは一寸も奥へは、やらない〳〵。

采女　どうでもこいつは聾ぢやさうな。

源五　先づこの兩人を

ト胡蝶。遠山へかゝる。玄蕃、立廻りあつて

玄蕃　ほてさいたら免さぬぞ。

ト胡蝶遠山を圍ふ。

伴左　スリヤ、わい等は狩野之助が家來、扶持放されの素浪人ぢやな。

源五　面體は見知らねども、扨てはおのれは小栗宗丹。

采女　今こそは先祖を名乘る、不破の伴左衞門よな。

伴左　誠や紅いは園に植ゑても隱れなし。スリヤ、わい等が目にも、不破伴左衞門と見たか。

采女　おんでもない事。サア、速かに主人を返せばよし

源五　異議に及ぶと絶體絶命。

采女　主人の仇。

源五　お家の仇。

兩人　覺悟せい。

ト兩方より詰め寄る。伴左衞門、じろりと見て

伴左　ハテ、氣丈な奴等ぢやな。

又平　忝くも禁廷のお指圖を以て、預け置かるゝ狩野之助、サア、ちつとでも指さすと、お旦那には構はぬ、おらが免さぬ。
源采　見事うぬが邪魔ひろぐか。
又平　おんでもない事。
源采　イヤ、小癪な奴の。
　ト三人きつと詰めかける。
伴左　ハテ、ざわ〳〵と騒がしい。又平、待て。
又平　ぢやと申して、
伴左　ハテサテ、兩人が云ふ所みな尤も。又平、なんとわれが目からは、この伴左衞門が善と見えるか、惡と見えるか。
又平　家を治めんと欲する者は、先づその身を納む。然るに狩野之助どのには身持ち放埒にして、天子より預け置かるゝ大切なる重寶を失ひ、殊に親を討つたる懦弱者ゆゑ、家國を沒收せられれば、既にその身も同罪に沈むべき所、證據の日延べを願ひ、暫時も一命を延ばゝり居るは、これ偏へに伴左衞門さまのお情、この又平が目からは、善人も善人、天の再來かと存じまする。
伴左　へゝ、嘘をつく奴ぢや。

　トせゝら笑ひ
先づそれなればそれにしてやらうが、いよ〳〵身に忠勤を勵む志しに相違はないか。
　ト岡平に目配せする。岡平、呑込み、又平にかゝるを、立廻りあつて、向ふへこける。岡平、そつと引起こす。又岡平かゝるを、構はずにゐる。ト鷲藏、鳶助、拔いて斬りかゝるを、又平、空うそぶいて居る。
待て〳〵。捕つたとかゝれば、髓かに投げる筈を
岡平　エヽ、せいも張りもない奴だ。
　ト思ひ入れ。
又平　サア、爰が君への命に隨ふと云ふ、臣下の道。善にもせよ惡にもせよ、主人の命を受けた三人の者どもに手向ひは、即ち主人に手向ふも同然、これが高いも低いも臣たる者の誠の道。
玄蕃　面白い。また殿の上意を受けず、私しの宿意で、かう持つてから胸倉取つたらば
　ト又平にかゝる。
又平　それこそは蟷螂が斧、富士山を蟻が崩さんとするに同じ事、及ばぬ事。
玄蕃　その及ばぬ所を、かうしたら

トかゝる。花々しく立廻りあつて、玄蕃を當てる。岡平、かゝるを、散々に打ち据ゑ

又平　身動きひろぐと、首と胴との生き別れだぞ。一合でも大切な御主人の、扶持切り米を取るからは、私しの宿意、拳一つ當てたらば、それこそ知行盗人、ナア、コレ、爰が臣たる者の第一の愼み所。とても事にわい等も臣たる者の奥儀を見たくば、序でにまそつと見せうか。

玄蕃　イヤもう、それには及ばぬ。

皆々　これぎり〳〵。

伴左　ハヽア、なか〳〵わい等が手くさいでは及ばぬ筈。退け〳〵。

皆々　ハア。

ト皆々扣へ居る。伴左衛門、思ひ入れ。

伴左　又平、駒下駄。

又平　ナアイ。

トこなしあつて、駒下駄を直す。伴左衛門、庭へ下りて

伴左　刀持て。

玄蕃　ハア。

ト刀差出す。伴左衛門、取つて、拔き放し、又平が目先へ拔身を差出す。又平、思ひ入れある。

伴左　水。

ト手桶を持ち出る。杓にて拔身へ水かける。この間、兩人、思ひ入れ。

又平　ナアイ、思ひ寄らぬお手討ちは、何者をお試しなさるゝな。

伴左　うぬを討ち放す。

又平　そりや、なんの誤りで。

伴左　今ぬかすを聞けば、身が下知とあらば手向ひはせぬ、私しの宿意とあらば、金輪際生死の境とぬかしたでないか。

又平　なるほど左様でござわりまする。

伴左　今こそは主從なれ、以前はうぬ狩野之助が家來、身とは赤の他人、しかも意趣ある仲、その意趣遺恨を以て、うぬを斯う。

ト斬りかゝる。立廻り、又平、手桶にて見得よく留める。

又平　意趣遺恨を以てとあれば、どなたこなたの用捨はないぞ。

ト刀を拂ふ。

鷲藏　お旦那に手向ひひろげば、うぬ。

ト鷲藏、鴫平、嘉助、かゝるを、花々しきタテあつて、又平、四人を、散々にむれ打ちに打ち据える。

又平　惡くほたへると、小豆粥だぞ。

ト拔身きつと構へる。

伴左　そこを又主の威光で、かう。

ト切り附ける。立廻り

又平　御主人の威光とあれば、いかやうとも。

ト拔身を拂ひ

手向ひは仕りません。

ト目禮する。

伴左　スリヤ、しかと手向ひせぬぢやまで。

又平　一命をお旦那へ、差上げ置きましてござりまする。

伴左　イヤ、慮外な奴の。

ト又平を引附け、鍔にて眉間を割る。

最前より馬鹿になつて見て居れば事をひろぐ、おのれはこの伴左衞門が、なんにも知らぬ愚痴文盲な者と思ふて、心のうちでは嘲り居るな。イヤ、うづ蟲めが。高島の家へ亡びて後、おのれは大津追分へ引籠もり、僅か五錢三錢の價を取り、藤の花かたげたお山繪、鯰押へた瓢簞の、ふらり／＼と見苦しい、首を縊らうか身を投げうかと、途方に暮れしを不便と思ひ、身が引上げて一かどの武士に、取り立てくれんと思へども、先づおのれが性根を見定めてと、二合半に一兩三歩の切り米をくれるこの體になりたるは、誰れが庇と思ふ。皆この伴左衞門が庇ではないか。その恩を忘れ、あゝ云へば斯う云ふと、見たらもないほてゝんごう。サア、斯う引附けて居る伴左衞門、どうでもほてさいて見やアがらぬか。イヤ、こな大泥坊めが。

ト駒下駄にて、又平が眉間を割る。又平、辛棒するこなしあつて

又平　段々誤り入りましてござりまする。

伴左　ソレ、おのれが眉間から血が滴るが、それでも無念にはないか。

又平　一命を差上げた御主人のなさるゝ事、たとへずたずたに刻まれましても、お恨みとは存じませぬ。

伴左　ハテ、恐ろしい奴ぢや。佛の樣な者でも腹を立てねばならぬ所、スリヤ、どうあつても、身が詞を背かぬぢやまで。

又平　何が扨て、お詞を背いて、よいものでござりまする

か。

伴左　その詞に違ひなくば、兩人の女のうち、口說き落として抱かして寢させい。

又平　畏まり奉りましてごわりまする。

伴左　ヤイ、兩人、若者狩野之助を預かり、拷問するは、私しならぬ禁廷のお指圖。是非善惡は淨玻璃の鏡、心の曇り迷ひを晴らして、時節を待て。

源采　おやと云ふて、現在御主人の御難儀。

伴左　たつて連れ歸らんと思へば、違勅の罪も同然。

兩人　サア、それは

伴左　但し勅諚を背くか。

采女　スリヤ、御主人のお身の上は

源五　禁廷へ奏聞の上。

伴左　合點が行たか。

采女　源五郎。

源五　采女、

采女　これより直ぐに

源五　天奏へ。

采女　來い。

ト兩人、走り入る。玄蕃、行かうとする。

伴左　待て〳〵。禁廷の事は身が心にある。うつちやつて置け。

玄蕃　ハツ。

ト玄蕃、扣へる。

伴左　コリヤ、聾め、小姓どもに茶を立てさせ。

ト仕方する。

岡平　ナアイ。

伴左　又平、返事を待つてゐるぞよ。

ト唄になり、伴左衞門、玄蕃、岡平、鷲藏、鳶助、鵙平、鳩內、入る。胡蝶、遠山、待ち兼ねしこなし、兩方より又平が胸倉を取つて

胡蝶　ヤイ、われはマア日頃に似合はぬ、今の樣な事よう云ふたなア。

遠山　山三さんが常々こなさんの事は、褒めてゐやしやんした手前もあるぞえ。同じ屋敷にゐるこそ幸ひと、殿樣を助けませうと云ふ心はなうて、仇敵の伴左衞門に追從輕薄、その身の立身出世のために、お姬樣やわしに、伴左衞門の心に隨へとは、ようも〳〵云はれた事ぢやなう。

胡蝶　始めの程は、よもやほんの事ではあるまいと思ふて

見てあれば、今の樣子を見ては、もう〳〵とんと愛想もこそも、盡き果てたわいなう。
遠山　一合取つても人は武士と云ふのに、其やうに顏に疵附けられても、無念にはないかいなア。
胡蝶　口惜しうはないかいやい。
遠山　その疵をこれ程でも、無念なと思ふ心があるなら、殿樣の力となつて下さんせいなア。
ト兩方よりゆすり立て、云ふ。
又平　世になき者の狩野之助に、忠義を立てゝ苦勞せうより、伴左衞門さまに御奉公して、立身出世せにやアならぬわい。ナウ、二人とも、役にも立たぬ義理立てを云はずと、とんと思案を仕替へて、伴左衞門さまのお心に隨ひませうと云やいなう。
遠胡　エヽ。
ト胡蝶、遠山、顏見合はせ、又平が顏をきつと見て、ぽいと突き放し
遠山　いつまで云ふても、蛙の面へ水と云はうか。
胡蝶　よしない事に暇入れうより、言ひ合はした通り
遠山　ござんせ。
ト兩人、行かうとする。又平、引留め

又平　待つた。兩人ども、氣色を變へて、コリヤ、どこへ。
遠山　知れた事、殿樣のお供して去ぬるのぢや。
胡蝶　爰放せ。
ト立廻りあつて
又平　この又平が性根を見込んで、預け置かれし狩野之助、滅多に渡してよいものか。惡くほたゆると免さぬぞ。
又平　たとへこの身は憂き目に遭ふとても、殿樣をお助け申さにや、姫御前の操が立たん。
遠山　命は惜しまぬ。爰放さんせ。
ト行かうとする。
又平　さう云やア二人ともに、生けては置かれんわい。
遠山　こなさんの言譯立たずば、サア、殺さんせ。
胡蝶　命を捨てるが殿樣への言譯。
兩人　サア、殺しや〳〵。
ト兩人、首さし延べる。
又平　オヽ、よい覺悟ぢや。
ト刀ふり上げる。兩人、サア〳〵と首さし延べる。又平、思ひ入れあつて
天晴れ心底見えた。

兩人　ヤア、なんと。
又平　その料簡を見る上は、殿樣に逢はしてやらう。
遠山　そんなら殿さんに
又平　是非逢ひたい、連れて去たうと思ふなら、伴左衞門
が心に隨ふ氣はないか。
兩人　エヽ、なんの事ぢやえ。
又平　もと伴左衞門が殿樣に意趣を含みしも、お前方の色
に迷ひしゆゑ。どちらなりとも伴左衞門が心に隨ひさへ
すれば、意趣も遺恨もさらりと晴れ、殿樣がお身の上の
言譯も立つと云ふもの。
遠山　おやと云ふて、あた厭らしい伴左衞門に
又平　サア、それが身を捨てゝこそ浮かむ瀨もあれ。兩人
のうちどちらでも、心に隨ひさへすりやア、ハテ、肝心
肝文の闇の駈引きは、心にあるべき事。
　ト邊りを見て、兩人に囁く。
兩人　スリヤ、色に仕かけて
又平　どちらなりとも仕負ふせた方が御本妻、奧樣、ナア、
合點が行たか。
　ト奧より、金吾、出る。
金吾　申し父樣、兼ねて仰せつけられました通り、お茶の
水に毒をしかけて
　ト云はうとして
又平　シイ。
　ト思ひ入れ。遠山、胡蝶、聞き止め
兩人　ナニ、毒とは
又平　シイ、この毒の試み、今云ふた通り、必らずぬかる
な。
　トうちより
呼び　比良大角さまお入り。
又平　はや大角が
　ト思ひ入れ、金吾に囁く。
金吾　合點でござります。
胡遠　首尾よう仕負せたその時は
遠山　必らず殿樣と夫婦にして下さんせ。
胡蝶　若し仕損じたら一遍の、回向を頼む。
　ト泣く。
又平　さう弱うては心許ない。
胡遠　仕負ふせて見せませう。
又平　オヽ、それ〳〵。
遠山　夫婦になるか

胡蝶　ならぬかは

又平　夜中の鐘が

胡遠　生死の境。

又平　必らず急かずと

胡蝶　又平。

又平　ござれ。

ト唄になり、三人、きつと見得。直ぐにこの道具、引き込む。

正面より大屋敷を突き出す。前は泉水の體、よき所に大きなる石に、注連飾りあり、その側に藪柑子、その外植込み枯れし體、西の方、大角、坐り、眞中に伴左衛門、次ぎに玄蕃、鷲藏、蔦助、鵙平、鳩内、取り卷き居る見得。

奴四　玄蕃、動くな。

玄蕃　コリヤ、何ゆゑ拙者を斯やうになさるな。

蔦助　大切なお客人、もてなしのお茶の水、なぜ毒をしかけた。

玄蕃　これは思ひ寄らぬお咎め。全く私しお茶の水に毒をしかけました覺えはござりません。

蔦助　ヤア、覺えないとは、これなる掛樋より落ちては、山水にて水氣する時ゆゑ、新たに堀らせし茶の水は黄金水と號す。水澄ましには黄金かはを入れ、平常は錠を下ろし、鍵はこなたの預かり。珍客入來の砌り、その水を汲み上げれば、流れはこの泉水に落とす所、あれ見よ、泉水の鱗くづ、殘らず上がり、ほとりの草木までも殘らず枯れしは、なんとこれでも毒ではあるまいか。

玄蕃　サア、それは

鵙平　なんと言譯あるまいがな。

鷲藏　遁れぬ。腕廻せ。

大角　待て／＼、伴左衛門どのゝ御不審御尤もとは申しながら、某への御馳走のお茶の水、その番人たる玄蕃が誤まり。なんとも氣の毒。併しあれなる泉水のうろくず、草木などの枯れしを、あながち毒氣の印し、玄蕃が科とも申されまい。

鵙平　ぢやと云ふて、現在うろくずの上がりしは

鷲藏　毒でないとは申されませぬ。

大角　されば、人間に四百四病の外に、卽死頓死と申す儀もあり、ましてうろくず、寒氣に水に閉ぢられ、暑氣には水のほてりに痛む。草木とても風雨に依つて、枯れる

事も珍らしからず。魚が死ねばとて、必らず毒とも申されまいと存ずる。

伴左　なるほど御仁心の大角さまのお詞、魚と人間の性は格別、魚は水を住家と思ひ、天人は瑠璃と見る。餓鬼は水を猛火と見る。もとより人間は水と見る。魚類には毒なりとも、人間には薬にてあるまいものでもない。なにさま、こりやとくと吟味いたしてよからう。

皆々　ハア。

ト控へる。

伴左　過つて人を疑へばその身を亡ぼす。幸ひお客への饗應、春風と云ふ茶を持てと申し附けい。

鶯蔵　畏まつてござります。お小姓衆、お茶を持たつしやれ。

金吾　ハア。

ト小姓の形にて、茶を持ち出る。

お茶上げませう。

ト大角へ出す。

伴左　待て。その茶、大角さまへは上げられまい。

金吾　どう致しませう。

伴左　すべて貴人客人に奉るものは、前以て毒味いたす。幸ひ疑ひ立ちし言譯に、玄蕃、毒味いたせ。

大角　スリヤ、毒に極まつたと思はつしやるか。

ト思ひ入れ。

伴左　イヤ、極まつたれば毒味には及びません。いまだ分明ならぬゆゑ、疑ひ立ちし訝しき水にて立てたるお茶ゆゑ、お客へ上げられぬは亭主の念。玄蕃、毒味。

玄蕃　いかにも毒味仕りませう。

ト呑まうとする。

伴左　待て、玄蕃、心底見えた。その毒味、外にさす者がある。金吾、その茶を毒味せい。

金吾　エヽ。

ト偽り、この間より又平、出かけ、窺ひ居る。

伴左　何を仰天、新参なれども、茶小姓に召抱へ、圍ひ一巻きは其方へ預かり。茶の水不審なくても、そちが毒味する筈。早く毒味いたせ。

金吾　サア、それでも。

伴左　主の詞を背くか。

又平　イヤ、先づ〳〵、恐れながらお待ち下されませう。

ト出る。

伴左　又平、なぜ留める。

又平　なんとも合點が參りませぬ。尤もそれなる金吾どのにも、圍ひの預かりではござりますれど、肝心のお茶の水は玄蕃どのゝお役目。それを差措いて金吾どのに毒味とは、ちと御詮議が間違ふたかと存じまする。

大角　ハテ、われは異な肩を持つ。茶小姓の金吾が毒味するを、下郎のそちが出過ぎるは、なんとも合點が行かぬ。さ程ちつぺいめを勞はる心なら、その毒味、又平、おのれせい。

又平　致さいで叶はぬ毒味なら、呑み兼ねも仕りませぬ。

伴左　コリヤ幸ひ。毒に極まれば、詮議ある金吾、滅多には殺されぬ。幸ひの疑ひ晴らし、又平、早々毒味せい。

又平　畏まつてござりまする。

ト呑まうとする。金吾、これはと云ふ。引附け

鷲蔦　早く呑めい。

ト又平、思案して、かつと呑む。

又平　ハレ、結構なお茶でござりまする。

伴左　よく呑んだ。心底見えた。出かした／＼。

大角　下郎めが毒味ゆゑ、伴左衞門どのに野心はない。疑ひも晴れた。拙者も滿足に存じます。

伴左　イヤモウ、拙者とても、安堵いたしてござる。とてもの儀に、これより圍ひへ御案内仕り、粗酒一獻進上仕らう。

大角　然らば圍ひへ參り、何かの密談。イヤ、御馳走に預かりませう。

伴左　イザ、大角さま。

大角　御案内。

玄蕃　いづれも休息召され。

奴四　ハア、。

ト橋がゝりへ入る。

大角　イザ、御亭主。

伴左　先づからうござりませ。

ト唄になり、大角、伴左衞門、玄蕃、奥へ入る。又平、金吾、殘り居る。合ひ方になる。

金吾　又平、心持ちはどうぢや。

ト又平、大肌脱ぎ、樋口に仰向けになり

又平　かけ樋の水口、憚りながら

金吾　合點ぢや。

ト水口を拔く。本水流れ出る。ト又平苦しきこなしにて、腹を敎へる。金吾、うろ／＼する。又平、腹を踏めと敎へる。金吾、つか／＼と行て踏まうとして、踏

み隱れることなし。又平、いらち、飛び石を持ち來て、我が胸に押し當て、水を吐き、邊りを見て、木とんりやうな取り、なめることなし

どうぢや、ちつと心持ちはよいかや。

ト又平、息つき

又平　ハテ、危ふい、既に命一つ捨てうとした。

ト思ひ入れ

金吾　矢ッ張りわしが存んだらよかつたになう。

又平　勿體ない、お前に毒を上げましてよいものでござりまするか。お前樣をそのお姿にして入り込ませ置き、今日茶の水に毒をしかけ、大角を始め伴左衞門諸共、鏖殺しと思ひの外、差當たるお前のお難儀を引受け、奴めが毒でない疑ひを晴らさせしは、敵へ油斷さす計略。

ト此うち後ろへ、岡平、出かけ、聞き居る。空より鳩落ち、右の石の上に即死する。又平、きつと見て

空飛ぶ鳥の忽ち翼を折つて、この石の上にて死にしたるは、此岩大明神のお告げか、但しは又これも毒氣の中りしか。誠や加藤の何某毒氣に中り、木曾川の流れにて臓腑を洗ひ、命を助かりし例し。又この毒藥を調合せし者木天蓼の葉をなめては、たちどころに毒を消すと云ひしに違ひなし。この木天蓼を今なめれば、忽ち心清しくなつたるは、ハテ、毒も藥もあるものぢやなア。

岡平　誠や行き疲れたる旅人、毒氣に中りし木翁今の木のもとに死す。自然とその木の露の解け入りて、毒氣を消し、再び旅行に赴きて、一旦死せし者この木の德に依つて、又旅をせし、俗にこれをまたゝびと云ふ。

ト又平、振り返り、岡平を見て

又平　ヤア、岡平か。

岡平　正しく毒氣に中りし又平が、今存命と云ひ

又平　木天翁が今の不思議。

岡平　傳へ聞きたるばかりにて、眼前見るは今が始め。

又平　スリヤ、おのれ耳が聞こえるか。

岡平　あちらからこちらへ突きぬけるわい。

又平　大事を聞かれし上からは、いつそ

ト切りかゝる。立廻り、留めて

岡平　狼藉者、現在主人に向ふか。

又平　なに、おのれを主人とは

ト又切りかゝる。立廻り、留めて

岡平　又平、名古屋山左衞門を見違ふたか。

又平　ヤア、さま〴〵のたわ言。御主人名古屋山左衞門さ

また、御切腹なされて、この世にはござらぬわい。

岡平　一旦切腹と披露せし某、姿變れば見違ひしも理り。それを見い。

ト懷中より、系圖の一卷を出し

又平　ヤア、なんと。

金吾　ドレ。

ト開き、又平に見せろ。

又平　ヤア、こりや名古屋の家の系圖。

ト思ひ入れ。

金吾　この系圖が、どうしてこなたの手に入つたぞ。

岡平　肌身を離さぬ家の系圖、人に渡してよいものか。

金吾　又平、滅多に油斷はならぬぞや。

又平　いかさま、面ざし恰好、似た樣にもあれど、山左衞門さまはお國に名高き美男の聞こえ。この人は剃り下げ奴。

金吾　雲泥の相違、とは云ひながら

又平　若し御主人の山左衞門さまが、

岡平　そち達が眼力にも、春平とは見えぬか。

又平　サア、どうやらお旦那の樣にもあれど、ハテ、面妖な。

岡平　エ、有難い。最前源五郎系女兩人が見損ぜし其うへ、朝暮側を離れぬ又平と云ひ、若殿國丸さまゝで春平とも見分けぬからは、他門の人に名古屋春平とは、見知る者もあるまじ。ハア、有難や、大願成就。ハテ、悦ばしやなア。

又平　併し心得ぬは、お旦那山左衞門さまにはお國騷動の砌り、誤りを身に引受け、御切腹なされしと承りしに今の存命。

山左　一つの手段、何卒伴左衞門に賴り、大殿の敵、寶の詮議せんと、心は矢竹に逸れども、面體を見知られし某、いかゞはせんと心根を苦しめしうち、思ひ出だせしよい思案。昔しつしんとんたんとて、荒炭を喰らつて聲をからし、惣身には墨をさいて、姿を變へし昔を今にこの如くの剃り下げ奴、顏まつ黑に日燒けせし古歌の德、都をば霞と共に出でしかど、秋風ぞ吹く白河の關と、能因法師が旅の心を詠じたれども、白河の關へ行かざれば心淺し、秀逸ならじ、おのれと顏を日に曝し、旅行より歸りしと披露して、右の歌を出せしゆゑ、今の世までも名歌の聞こえ、道に心を敷島の歌人、古へにもかゝる例し、大義を思ひ立つての春平、しやつ面を炎天に干しつけて、燒

けも焼けたり澁紙奴、忠臣の心は割り符を合し、又平が健氣の志し、余所に見なして今日までは、同じ所にありながら、我が心底を包み隠せしは、深き巧み、今の義心を見る上は、疑ひ晴れた。又平、オヽ、でかした〳〵。

又平　お旦那。

山左　又平。

ト互ひに手を組み、思ひ入れあり

又平　段々お物語り承るにつけて、安堵いたせしはお旦那のお身の上、よく御息災でござつて下さりましたなア。もう鐵壁ぢや。お果てなされたかと思ふたお旦那は御存命でござつて下さるからは、直ぐに奥へ踏ん込み、若旦那を奪ひ返し、敵の詮議、寶の行くへを

ト行かうとする。立廻りあつて

山左　待て。

又平　なせお留めなされます。

山左　奥には佞人の大角諸共、密事の最中、若し手詰めに及び、詮方なきまゝ大切の、色紙掛地もろとも引裂き捨てなば、悔んで返らぬ一大事。急く事でない。マア、待て。

又平　御尤も。然らば若殿樣を

山左　理不盡に奪ひ返しては、禁廷への恐れ、後で對談の上、理非を糺せし上の事。

又平　然らば胡蝶さま、遠山どのも。

山左　色にしかけて山左衛門が胸中

又平　探る知らせは今宵夜中。

山左　暫時のうちぢや、辛抱せい。

又平　エヽ、早く埒が明けたいなア。

ト氣を急くこなし。此うち鳩内、鷲藏、出かけ

山左　樣子は聞いた。

ト山左衛門、又平にかゝる。兩人ともに見事に切る。この血汐前の岩にかゝりし體にて、吹き水上げる。兩人きつと見て

又平　ハテ、怪しやなア。

山左　澄むは元なり、濁るは地なり。

又平　今計らずも兩人の血汐

山左　この岩を穢すと其まゝ

又平　地中より水氣巻上げるは

山左　この岩根に不淨を忌む物ありや

又平　最前空飛ぶ鳥の、羽を打つて落ちし不思議と云ひ

山左　眼前にこの水氣
又平　何にもせよ。
山左　岩根を吟味せよ。
又平　ハア。
ト石をのけ、色紙の箱取り出し
ハテ、結構なこの箱は
ト山左衞門に渡す。明けて見て
山左　正しく系圖の色紙。扨こそ光源氏の眞筆。
又平　スリヤ、その御眞筆の
山左　疑ふ所もなき胡蝶の色紙。
又平　エヽ、忝い。
山左　先づ一色は手に入つた。
又平　これからは掛地の在所
山左　敵の詮議も追つゝけ知れう。
又平　心急くは若殿のお身の上。
ト暮れ六つの鐘。
山左　最早黄昏。
又平　お旦那、ではない、岡平。
ト山左衞門、氣を替へ
山左　又平。

又平　追つゝけ吉左右
山左　待つてゐるぞよ。
鳶鴫　様子は聞いた。
ト鳶助、鴫平、兩人にかゝる。立廻りあつて、兩人を二重舞臺へ、見事に押へる。この所、見得にて、唄になる。ト國丸、眞中に思ひ入れあり、この見得にて、道具廻る。
二階の體、燭臺數多ともしあり、眞中に伴左衞門、褥に坐り、脇息にかゝりゐる。胡蝶、琴を彈きゐる。遠山、三味線彈きゐる、道具留まる。
ト露の蝶を少しばかり唄ひ、伴左衞門、思ひ入れ
伴左　昨日の淵は今日の瀬と、變り易きは人心、今はこの身に愛想もこそもと彈く。スリヤ、そち達が身に愛想も盡きたか、但し又
遠山　狩野之助さまに
伴左　ヤア、なんと
遠山　あいそもこそも
ト唄にて
〽月夜の空や鳥が音を、恨みし事も仇枕。

ト彈く。
伴左　仇枕と云ふからは、とんと狩野之助が事を思ひ切つて
胡蝶　夏を知らずや草に寐て、花に遊びてあしたには、露に養ふ蝶々の
ト唄ひ、彈く。
伴左　スリヤ、胡蝶の前も、身が心に隨ふ氣か。
胡蝶　アイ。
伴左　イヽヤ、そりや嘘であらう。
胡蝶　ほんの事。
遠山　今まで狩野之助さまに義理立てたけれど、よう思ひ運せば
胡蝶　家を亡ぼし身を失ふ樣な放埒な貴樣、とんと愛想もつきて
遠山　今ではお前の心に、疾うから隨うたらよかつたものぢやと、思ひ運せば昔が戀しい。
胡蝶　伴左衛門どの。
遠山　宗丹さん。
ト顏見合せ、琴三味線にて、唄ふ。
胡遠　〽身ぞ羨まし味氣なや、思ひ切りなき女子氣の、涙にひたす袖袂。
伴左　らんにしよくしやの玉衣を飾り、花の錦の褥も、飛花落葉の衰へ果てしも、胡蝶の夢、醒むればもとの遠山が述懐、今榮華榮耀に、歡樂に耽るこの伴左衛門、身を羨まし味氣なやと、唄ふ唱歌に事寄せし、スリヤ、兩人とも、身が心に隨ふか。
遠山　只今までは、憎い奴と思ふてゐさんしたであらう。
ト伴左衛門が側へ寄り添ふ。伴左衛門も思ひ入れあり
山左　憎いと云ふも元は可愛さ。
遠山　ナアニ、嘘ばつかり。
山左　誠に誓文
遠山　ほんの事なら嬉しいけれど
山左　侍ひ冥利
遠山　オヽ、嬉し。
ト抱附く。胡蝶、思ひ入れあり
胡蝶　コレ、遠山どの、そんなら眞實こなたは、伴左衛門に
遠山　アイ、わたしや疾うから
胡蝶　そんならこなたは狩野之助さまに
遠山　元は浮氣で逢ひ馴れ染めて、深うなるほど逢はれは

せいでと、唄にさへ唄ふぢやないかいなア。今ではどこにゐさんすやら、せうども知れぬ殿さんに、心中立てるは野暮なぞえ。お前もちつと粋になり、伴さんの心に隨ふやうに、ナア、伴さん。

ト寄り添ふ。

伴左　ソレ〳〵、粋な太夫が機嫌を見習ふて、そもじも應と云やれば、右と左に手かけ本妻、戀に上下の隔てはない、さりとては愚痴なぞや。

遠山　コレ、胡蝶さま、伴さまの御機嫌を損ねぬうち、ナア、合點かえ。

ト額で押へる。胡蝶、呑込み、氣を替へ

胡蝶　ほんにさうぢやなア。わたしも

ト伴左衛門が側へ寄り添ふ。伴左衛門、じろりと尻目にかけ

伴左　古への常磐御前を習ふて

胡蝶　貞女を立てゝ

伴左　貞女の數に入りたいか

胡蝶　エヽ。

伴左　肌身を穢してなりとも、寶の詮議するのか。

遠山　エヽ。

伴左　某が戀慕ふを幸ひ、色でしかけて家の仇、寶のあり所を詮議せうとは、古いしかけぢやなア。

胡蝶　それ知つたらば

遠山　もう是非に及ばぬ。

ト双方より懐劍にて、突きかける。

伴左　二人とも、コリヤ、何する。

兩人　サア、これは

伴左　心中見たいと云ふのか。

兩人　推量の通り心中を

ト突きかけ、立廻りあつて

伴左　ハテ、及ばぬ事。女童の手に合ふ伴左衛門でないぞ。たちどころに命を斷つ奴なれど、戀は曲者、今にても身が心にさへ隨へば、命は助ける。サア、遠山、胡蝶、否か應かの返事が、この世あの世の生死の境。返事せいどうぢや。

兩人　サア、それは

伴左　サア〳〵〳〵。

トじり〳〵兩人を附け廻す。此うち

呼び　御上使。

ト呼ぶ。伴左衛門、きつと思ひ入れ

伴左　思ひがけなき上使の入來、
　ト思ひ入れ、兩人を縛り
　誰ぞ參れ。
又平　ハツ。
　トか／＼と出て
　御用でござりまするか。
伴左　この女、奥庭へ引据ゑ置け。
　ト又平、思ひ入れある。
又平　ヤア、これは
伴左　身に敵たふ女、今切り捨てんとは思へども、折惡しき上使の入來。
又平　スリヤ、兩人ともに、お旦那のお心には
伴左　隨はぬゆゑその繩目
又平　ア、、大事の所を
　ト思ひ入れ
胡蝶　仕損じて、口惜しいわいなア。
又平　につくい女め、奴めがキッと預かりましてござりまする。
伴左　手ぬるく致すな。引据ゑ置け。
又平　ハア。

　ト唄になり、又平、胡蝶遠山引立て、入る。
伴左　誰ぞ上下持て。
玄蕃　ハア。
　ト奥より玄蕃、上下持ち、出て、伴左衞門に着せる。
　關の戸、橋がゝりより、侍ひ連れ、出る。
　御上使、御苦勞千萬に存じ奉ります。
關の　役目でござれば、罷り通りまする。
　ト一座へ坐り、伴左衞門、玄蕃、次ぎへ坐る。
伴左　これはどなたかと存ずれば、管領桃の井造酒之頭さまの奥方、關の戸さま。
關の　不破伴左衞門どの、早速の出迎ひ、祝着々々。
伴左　シテ、御上使の趣きは。
關の　狩野之助を始め一家中の者どもの願ひに任せ、御邊に決斷仰せ附けられた。
伴左　ナニ、狩野之助一家中の者共、この伴左衞門に決斷とは
關の　双論開き屆け、善惡糺せよとの上意。
伴左　ハア。
　ト平伏する。
關の　高島一家中の者ども、罷り出ませい。

皆々　ハア。

ト釆女、狩野之助、源五郎、各各上下裝束にて出で、伴左衞門、憫り

伴左　ヤア、禁牢申しつけし狩野之助。

玄蕃　一家中かしづき此ありさまは。

釆女　最前この所へ參り、其方が我まゝ放埒を見屆けしゆゑ、天奏へ言上し、御免を蒙りこの決斷。

源五　さるに依つて御上使の御來駕、サア、この場に於いて言譯立たねば、伴左衞門、身の上であらうぞ。

伴左　この伴左衞門に決斷とは、なんの言譯。

釆女　我れ／＼が申す事、見事返答するかよ。

源五　一つでも返答の打ちやうが惡いと、身の上ぢやぞ。

伴左　この伴左衞門が身の上に、これ程でも曇り霞みあらば、云ふて見よ。

狩野　親を討ち主人を討つなどと云ふは、或は朝敵、又は謀叛人の事。其ほか筋もない事に、現在の親を討たんや。

釆女　正しく高島の家を繼ぐべきものは、狩野之助より外にはないぞ。

源五　なに恨み、なに不足あつて、親殿を討ちなされうぞ。

伴左　その又親を討たぬ者が、左京の太夫が死骸の傷口に、狩野之助が所持の小柄があつたぞ。

源五　ヤア、僅かな小柄を證據に取り、若殿を罪に取つて落とす、惡工みの地獄落としに、かゝり損ひしそちが不運。

釆女　其うへ情らしく若殿を預かりしは、まさかの時の人質であらうがの。

伴左　默れ。慮外な奴の、狩野之助を預かり置きしは、忝くも禁廷のお指圖。武士司を預かるは身共が役。

源五　その武士司を蒙りながら、多くの浪人を語らひ、日夜の參會は。

伴左　諸浪人を召抱へるは、軍司のため。晝夜の參會は國家の政事を、相談の工夫。

釆女　其うへ、山を開きこの如く遊興の座敷をしつらひ、堀を埋んで泉水となし

源五　山水をかけ樋に取り寄せ、我まゝ自由の樂しみは

伴左　山を開いて新殿のしつらひ、かけ樋に山水を取り寄せしは、若し逆臣洛陽に押し寄せんと謀る時は、道を遮る要害のお城サ。

關の　禁廷よりお言ひ號けのある、淡海之頭どのゝ妹胡

蝶の前を虜となし、無體の戀慕。

伴左　色と見せかけ狩野之助めが、放埒詮議のため。

狩野　然らば又親人を害し、系圖の色紙を奪ひ取りしは。

伴左　ヤア、云はせて置けば樣々の雜言、この伴左衛門、左京の太夫を手にかけ、系圖の色紙を奪ひ取りしと云ふには、なんぞ慥かな證據があるか。

狩野　サア、それは

伴左　慥かな證據もない儀を言上し、決斷を願ふ、コナ、僞り者めが。

釆女　ナニ、僞り者とは

伴左　但し證據があるか

三之　サア、それは

皆々　サア〱〱

伴左　なんと。

山左　その證據、それへ持參仕りませう。

伴左　ヤ、なんと。

トきつとなる。山左衛門、衣裳上下にて三寶へ色紙を載せ、持ち出る。玄蕃、悧り。

玄蕃　ヤア、鬱め、うぬ、この樣で、證據とは。

ト箱取らうとする。山左衛門、立廻りあつて

山左　大切なる決斷の場所、ざわ〱せずと扣へてゐい。

狩野　大切たる場所へ證據呼ばゝりせし、其方は

皆々　何者ぢや。

山左　何さま面體恰好變れば、方々の目損じ理はり。某こそ高島の執權、名古屋山左衛門春平。

皆々　ヤア。

ト悧り。關の戶、思ひ入れあり

釆女　ナニ、其方が名古屋山左衛門とは

關の　その名古屋山左衛門は、當日の日延べ申譯立たず、切腹せしと言上せしに

山左　御不審御尤も。かく姿を替へ、この館へ入り込みしも、大殿の敵を見出だし、この色紙を奪ひ返さん計略。再び奪ひ返せし系圖の色紙、イザ、お受取り下さりませ。

ト差出る。狩野之助、受取り、戴き

狩野　誠に紛ふ所もなき系圖の色紙、なんと伴左衛門、この色紙を隱し置くからは、親人を討ち取りし慥かな證據。

伴左　イヽヤ、そりや證據になるまい。

皆々　なぜな。

伴左　尤もその色紙は、高島の系圖とは云ひながら、この日の本は云ふに及ばず、唐天竺までも吟味せば、同筆同様の色紙があるまいものでもない。僅かなる色紙を證據に、左京の太夫が敵とは云はれまい。

山左　默れ伴左衛門、その爭ひをさせまいため、兼ねて某面體を變へ、作り聾となり入り込み、それなる玄蕃大角を引入れ、密事の段々、聞き屆け置いたわい。

玄蕃　ヤア、スリヤ、おのれが聾と云ふたも皆僞りであつたか。

山左　大馬鹿め、おのれ伴左衛門が近臣となり、大角と牒し合はせ、伴左衛門を謀叛の一味に引入れんため。

關の　スリヤ、比良の大角は謀叛人とな。

山左　今日茶の饗應と披露し、先だつて入込みし大角。

源五　スリヤ、比良の大角も

釆女　入込み居るとな。

關の　この場を取り逃がすまじきため、密かに此方に伏勢を以て、取り圍み置いたれば、最早大角は籠の鳥。サア、伴左衛門、かく露顯の上はもう遁れぬ。隱し置きたる血の達磨を渡し、大殿の敵、尋常に勝負せい。

伴左　エヽ、いかやうに云ふても左京の太夫を、手にかけた覺えはないぞ、

山左　かほど慥かなる證據ある上に、覺えないとは卑怯な國賊め。

玄蕃　國賊とは

ト山左衛門にかゝる。立廻りあつて

山左　先達て國遠の玄蕃、この家に入込み居るこそよき證據の手懸り。

ト玄蕃、又山左衛門にかゝる。立廻りのうち、伴左衛門、見兼ねて、斬りかゝる。山左衛門、立廻りあり、拔身持ち居る手をちよつと取る。

差表には十六葉の菊を据ゑ、差裏には一文字を彫つたるは、紛ふ方なき則宗の名作。

伴左　ヤ。

ト愕りする。

山左　俗にこれを菊一文字と號し、後鳥羽の院の御守り、禁廷守護の御守り刀となりしを、大殿御病氣に附き、枕刀に下し給ふ。外に類なきこの一腰を、奪ひ取つて帶するからは、疑ふ所もなき大殿の敵。

關の　かほど慥かな證據があつても

山左　まだ此うへにもあらがふか。

伴左　サア、それは
狩野　親人の敵。
關の　名乘り合にして尋常に
皆々　勝負せい。
ト皆つめかける。伴左衞門、思ひ入れあり
伴左　もう是非に及ばん。系圖の色紙、大内より預かり
奉る菊一文字、奪ひ取つたはこの伴左衞門ぢや。
皆々　扨てこそな。
伴左　元來某が先主は菊地の何某、いさゝかの誤りに依
つて、東山どのゝ御不興を蒙り、高島左京の太夫が手に
かゝりし、無念やる事なし。不破道犬と名乘り高島の館
へ忍び入り、主の敵を討たんと謀りし甲斐もなく、親道
犬どのは詰め腹切らされし、その敵と云ひ、狩野之助には
戀路の意趣、二色を隱し高島の家を亡ぼさんため、館に
忍び入り二色を奪ひ取り、いかにも左京の太夫を手にか
けし上、最早高島の家斷絶と思ひしに、春平に見現はさ
れしか。エ、エ、エ、、無念な。
ト地團駄踏む。
狩野　サア、親の敵、尋常に勝負せい。
伴左　ヤア、小癪な奴の。

ト詰めかける。又平、胡蝶、遠山、連れ出る。
又平　ヤア、伴左衞門、この兩人を虜に最前より、色にし
かけて汝が懷中に、血の達磨の一軸、所持する事
胡遠　慥かに見屆けた。
又平　サア、その一軸を渡して、敵討ちの勝負せい。
ト詰めける。
伴左　扨てこそ推量の通り。目ざす敵は狩野之助、恨みの
刃受取れ。
ト手裏劍打つ。又平、側にある石臺にて受ける。ト石
臺割れ、狼煙上がる。遠攻めになる。皆々、思ひ入
れ。
皆々　ヤア、あの遠攻めは
伴左　かやうな時を謀り、兼ねて仕かけ置きだる相圖の狼
煙。一味の諸浪人驅け附ける某が計略。
ト侍ひ大勢、橋がゝりより出る。
侍ひ　動くな。
ト ばら／＼と取り卷き
采源　伴左衞門。
ト伴左衞門、玄蕃、かゝるを、山左衞門、立廻り、又
平、狩野之助、胡蝶、遠山、銘々に立廻りあつて、追

込む。源五郎、采女、伴左衞門にかゝる。立廻りの見得にて、道具せり上げる。この間始終遠攻めにて、下の段には大角、又平、大童、山左衞門、又平、侍ひを放して、大角に詰めかけ居る。關の戸、西の方に立ち居る。見得にて、道具留まる。

山左　ヤア／＼、比良大角、おのれ謀叛の企て、伴左衞門を味方に勸め、東山どのを亡ぼし奉らんとする人非人。名古屋山左衞門が作り聾の計略に依つて、科明白に顯はれし上は、すみやかに繩かゝれ。

大角　ヤア、聾にもせよ山左衞門にもせよ、この大角を謀叛なぞとは、なんぞ慥かな證據があるか。

又平　ホウ、その爭ひをさせまいため、先年金閣寺にて繪合はせの砌り、山左衞門さまのお手に入りし汝が書狀。

山左　又平が本國へ持ち來たりしゆゑ、某が手に入りし汝が書狀。即ち宛名は小栗宗丹比良の大角、なんとこれでもあらがふか。

ト狀を突きつけ、見せる。

大角　スリヤ、その書狀が手に入つたるゆゑ、この大角を謀叛と云ふか。

關の　高島預かりの血達磨の掛軸を、贋物とすり替へ、その科を狩野之助に塗り、大切なる繪合はせの妨たげせしは、東山どのへ無禮、禁廷の畏れ。

山左　主人の恥辱

又平　お家の仇

山左　比良の大角、鬼塚玄蕃。

又平　覺悟せい。

ト又平、立廻りあつて、大角を押へる。山左衞門は玄蕃を押へる。

關の　オヽ、でかした／＼。

山左　謀叛の張本比良大角、玄蕃諸共生捕りし上は

又平　最早敵は伴左衞門一人、

山左　兩人を引立てい。

トこの見得にて、上段下段とも廻り道具になり、狩野之助、遠山、胡蝶、國丸、上下にて立廻りの見得。

關の　高島左京の太夫を討取りし、敵不破伴左衞門。

山左　逃げ隱れるとも天の網

狩野　遁れぬ所

皆々　不破伴左衞門。

トばた／＼にて、襖を蹴倒し、伴左衞門、源五郎、采女と斬り結び、出る。

皆々　覺悟せい。
山左　お家の仇。
狩野　親人の敵。
采女　不破の伴左衞門光秀。
山左　禁廷の重寶血の達磨の一軸を渡し
皆々　尋常に勝負せい。
狩野　不破伴左衞門。
皆々　覺悟せい。
　　ト皆々詰めかける。
　先づ今日はこれ限り。
　　ト打出し太皷。

ひやうし幕

けいせい花繪合（終り）

解説

渥美清太郎

不破名古屋の狂言については、その系統の大略を「舞臺」に書いた事があつた。今爰へそれを再錄させて戴く。

○

歌舞伎の開祖出雲のお國に緣のある、不破名古屋の狂言は、お家物の中では、忠臣藏と覇を爭ふほどに種類の多い世界である。

舞臺では吉原仲の町の眞中で鞘當をするほど關係は深いが、實際は二人とも同時代に存在した美少年といふだけで直接の交渉はなかつた。名古屋山三郎は人も知る蒲生氏鄉の小姓で、浪人してからお國と同棲し、後に姉の關係で作州津山藩の家老になり、井戸理兵衛に討たれるまで、大日本史料でお馴染の經歴である。また伴左衛門は關白秀次の小姓不破萬作の事で、芝居では敵役だが實際は美少年、秀次が高野で自殺の時、殉死をした筈だ。また葛城といふ遊女がキツと出てくるが、これは山三が京都に浪人してゐるうち馴染んだ傾城だといふ事だ。

これが初めて戲曲になつたのは、山本土佐掾正勝の淨瑠璃で、名題を「名古屋山三郎」といふ。初演の年月は判明せぬが、延寶の初年だといふ事だ。六段の長いもので、山三と戀仲の葛城へ伴左衛門が戀慕するところから喧嘩になり、伴左衛門は山三の父三郎左衛門を討つて立退く。後に仇討になる筋で、萬作を伴左衛門と改め敵役にしたのがこれから後に傳はつたので、萬作の爲には氣の毒である。梅津掃部だの傾城柏木だのといふ、この世界で馴染の名前も既に使はれてゐる。これでは名古屋の紋が巴になつてゐるのが面白い。

歌舞伎の方でも極の初期から始まつてゐる。まだ名題といふものが出來て間もない延寶八年に、市村座で「遊女論」といふ狂言で上演されたのが不破名古屋の始まりである。土佐淨瑠璃を土臺にして作つたものらしい。伴左衛門が初世市川團十郎、山三が村山四郎次、傾城葛城が伊藤小太夫で大當りをした。この年は、同じ狂言を同じ役割で、同じ芝居に三度も上演したといふのだから餘程評判がよかつたものらしい。不破の役は初世以來團十郎の藝なのである。例の「稻妻のはじまり見たり不破の關」荷兮の句から思ひついて、衣裳を雲に稻妻の模樣にした。今日までその型が傳はつてゐる譯だ。この好みも評判がよかつたので、團十郎はそれまで家の定紋であつた、折敷に二つ矢筈を、稻妻から工風した三升に改めたのである。市川家には、よ

〳〵由緒の深い役だ。

天和三年には森田座で「女君二河白道」といふのが上演されてゐる。梅津掃部が宮崎傳吉、名古屋山三が市川新九郎、伴左衛門は矢張り團十郎である。貞享三年には中村座で「不破卽身當」伴左衛門は矢張り團十郎である。元祿二年中村座で「名古屋大全」村山四郎次の山三に又ぞろ團十郎の伴左衛門。翌三年同座で「不破伴左衛門島原遊」同じく團十郎の伴左衛門。元祿八年中村座「不破名古屋初冠」中村七三郎の山三、岡田左馬之助の禰の葛城、澤村小傳次の東の葛城、伴左衛門は團十郎――といつた風に盛んに興行されてゐる。この中には既に鞘當が始まつてゐたかも知れない。何しろ團十郎大當りの役であつた事は斯く度々上演された事だけでも明瞭に想像される。

團十郎はその後上方へ赴き、元祿十年の正月、久々で江戸へ歸つて來た。お目見得には中村座で「參會名護屋」これでも團十郎が伴左衛門を勤めてゐるのである。この時は狂言本を殘して置いてくれたので、筋がよく解る。第一番目は正親町太宰之丞の謀叛から、仁木入道が雲捕の太刀を奪ひ取る件、山三がそれを詮議の筋で、これには伴左衛門は現はれない。第二番目は北野の天滿宮、太宰之丞が大福帳の繪馬を下ろさうとする所へ、「暫く」と聲をかけて出るのが團十郎の伴左衛門、これが「暫」の元祖である。第三番目は山三との鞘當、伴左衛門が葛城に戀慕して切腹するといふ場であるが、鞘當を留めるのは梅津掃部になつてゐる。第四が山三葛城の道行から、伴左衛門の靈は鍾馗となつて現はれ、惡人を取挫ぐといふ、元祿歌舞伎らしい結末であるが、伴左衛門を惡人にせず、葛城の色に迷ふ鳴神式の侍にしたところが面白い。山三は葛城の遺恨で伴左衛門を草履で打つといふ筋になつてゐる。この狂言が、この時の新作か、前に度々あつた同材料の狂言の改訂なのか、一向わからないが、兎に角不破伴左衛門は決して惡人とばかり扱つてはゐない事は、これで認められる。元祿十二年十一月に森田座でやつた「當世阿國歌舞伎」團十郎の伴左衛門は立役なのである。この十二年には春にも中村座で「葛城小夜嵐」に團十郎は白髮の伴左衛門を勤めてゐる。翌十三年には市村座で「けいせい濱眞砂」に、坂東又太郎が伴左衛門、赤つ面に烏の模樣の着附、長い大小を差して出て、梅ケ枝といふ女の扮した似せ山三と鞘當がある趣向だつた。同年中村座「葛城吳越戰」には又しても團十郎の伴左衛門。實に流行したものである。

不破や名古屋の本家の京坂で、一向脚色してゐないのは不思議であるが、或ひは憚るところでもあつたものか。寶永五年に至つて、ヤッと芝居になつた。作者は大近松、例の「傾城反魂香」である。主人公は狩野元信、有名なのは

吃又の件であるが、不破伴左衞門名古屋山三も主要人物として現はれる。伴左衞門は立敵の役である。山三と廓で達引があり、大門で殺されてしまふのであるが、この時の不破の拵へを見ると「二つ重ねの白無垢、白茶字の縫ひ紋、もみ裏に源氏雲の裾くゝみ、南鐐ころの大小、對の金鍔、毛彫は浪に山王祭、七所御物、蒔繪の印籠」と文中に明記してある。この淨瑠璃に依つて、狩野四郎次郎、歌之助、遠山、又平、なぞの役名が不破名古屋へ絡みつく事となつたのである。

もう一つ、土臺になる淨瑠璃がある。寛延二年十一月の豐竹座に出た「十帖源氏物ぐさ太郎」で、作者は淺田一鳥、安田蛙桂等。舞臺は江州佐々木家にとり、不破伴左衞門は立敵の家老で、これが主人の佐々木義賢を暗殺する、後室の御閨御前が身を犧牲にして名古屋山三と共に不破を亡ぼすのが眼目で、物ぐさ太郎といふお伽草子から取つた名の白痴が實は千の利休で、娘の早枝を廉屋姫の身替りに立てる三の切が中心だ。序には大門口で不波名古屋の鞘當もある。これが山三の夢で、女房の葛城が揺り起すところから始まるのである。お國御前は勿論出雲のお國から附會した役名。その外、金魚屋金八、お宮、撫子、なぞは皆この淨瑠璃が出生地である。後世、大流行の不破名古屋の狂言の役名は、初期の江戸で流行つだ不破名古屋より、寧ろこの二つの義太夫から殆んど出てゐるのである。

「傾城反魂香」と「物ぐさ太郎」を中心にして、不破名古屋の書替へを盛んに書き出したのは、江戸でもズッと後の事で、最初は「參會名護屋」のやうな江戸の古劇の系統をたどつて行つたものである。淨瑠璃から筋を引く書替へでは、不破名古屋の主家は大低近江の佐々木家であり、人物の役名も以上の二院本の範圍にとゞまつてゐるが、江戸古劇の直系となると、廣汎な東山の世界なので、仁木彈正も出れば、赤松武者之助も出る、今川仲秋も出るといふ譯で、人物も頗る多岐にわたるのが例である。この、直系の方で元祿以後の有名な脚本を擧げると、元文五年市村座の「吉例今川狀」は、葛城の亡靈が中心で、「名古屋山三郎にて澤村宗十郎、お國姫と盃をする所を、葛城の亡靈、妨げるところ大當り。葛城にて菊次郎、嫉妬に胸を焦し、胸の火に苦しみて、手水鉢に胸を當つれば火となる、間の盃を妨ぐる仕打大當り」と年代記に出てゐる通り、葛城嫉妬の場が評判で、この脚本は後までその名題を襲はれたものである。また寶曆六年の中村座「壽三升曾我」では、江戸式に曾我狂言へ侵入し、鬼王新左衞門が伴左衞門を草履で打つなどゝいふ新手で喝采を博した。また寶曆九年市村座の「阿國染出世舞臺」のやうに、不破名古屋の中へ荒獅子男之助が出たり、賴兼が現はれたり、山名宗全が敵役で活動

したり、ウッカリすると伊達騒動と間違へられさうな筋にしたのもある。また明和三年の市村座「東山殿劇朔」のやうに武智光秀を混じて太閤記の世界にするといふ奇抜なのもある。また實際伊達騒動と一つにして、不破名古屋と累與右衛門が顔を合せる、明和五年の森田座「伊達模様雲稲妻」のやうなものもある。また明和八年の森田座「葺換月吉原」のやうに、顔見世狂言に立てゝ「暫」へ山三を出す趣向にしたのもある。安永四年の森田座「けいせい月の都」のやうに、不破名古屋へ御堂前の仇討を入れて、純然たるお家狂言にしてしまつたのもある。年代順に追つて來て見ると、要するに江戸の不破名古屋は、最初は極めて範圍の廣い東山時代に世界をとつて、役名の如きも同じ時代ならんでも取入れるといふ行き方であつたが、段々下るにつれて範圍は狹くなつたが、内容は漸次複雜化してゆく傾向があつた。その傾向は山東京傳の「稲妻表紙」が發兌されるまで續いたものであつた。この改作中での一番の不思議な例は、天明二年中村座の「伊達染仕形講釋」で、これは、伊達騒動へ混じたものではあるが、伴左衛門が仁木彈正の代りに、足利家を押領の立敵になつて、床下もあれば對決もあるといふ、彈正の仕事を全部させるやうにしたところが面白い。

そこへゆくと、京阪の方は、江戸ほど澤山にやつてはゐないが、それだけ無暗と複雜にもなつてゐない。京阪の不破名古屋の書替へで代表的な作は「けいせい花繪合」と「けいせい廓源氏」とであらう。前者は年代はハッキリしないが、多分安永頃に京都で演じたものであらう。なか／＼面白い狂言である。これでは不破名古屋よりも、小栗宗丹といふ敵役が大活動をしてゐる。ちよつと並木正三の「三十石艠始」に似た作で、宗丹は河村瑞軒どころの惡方で、戀の遺恨から佐々木家を亡ぼしてしまはうとする、唐人殺しの典藏らしい所もある役で、これを小六玉の嵐雛助が、女形から立役へ變つたばかりの時にやつて大當りをやつたものである。この宗丹が後の不破伴左衛門で、これと山三の爭鬪が後半の中心になつてゐる。非常に歡迎されて、明治前まではよく京阪の芝居に出たものだ。

「けいせい廓源氏」は、享和二年の正月、大阪の中の芝居に出た狂言で、近松德三の作であるが、大體の趣向は「物ぐさ太郎」から借りてゐる。不破伴左衛門が佐々木家を乘取り、後に名古屋山三とお國御前に亡ぼされるまでを、二の替り狂言の派手な大曲輪に書き改めたものである。大谷友右衛門といふ實惡が伴左衛門をやつて當てたのであるが、この友右衛門の二役に猪熊門兵衛といふ役がある。これが法界坊をもう一層慘忍にしたやうな面白い人物で、金魚屋金八と女房お宮を迫害する幕が、なか／＼上手に出來

てゐる。實は安永頃の「花楓秋葉話」といふ狂言から脫化したものだが、原作よりもすぐれてゐる。この幕だけで、この狂言は、不破名古屋の澤山な書替への中に異彩を放つてゐる、

京傳は「昔語稻妻表紙」を文化三年に書いた。歌舞伎で賣込んでゐる不破名古屋を土臺にして、佐々良三八の因果譚を織り込んだところが、仇討物で飽きてゐた讀者に大歡迎されて、非常な賣行を示し、結果は芝居へも影響して、不破名古屋の狂言に革命を起させる事になつたのである。

近頃は小說や映畫を脚色する事が流行つてゐるが、丁度その時分京阪では、當つた小說を舞臺に上せる事が非常に行はれたものだ。江戸では小說作家と戲曲作家の間に、なか〱むづかしい契約があつて、迂濶には脚色する事も出來ず、またそれを作者の恥ともしてゐたが、京阪ではお膝元でない爲か一向に差支へなく、盛んに上演したものである。この前後に馬琴の「弓張月」「南柯夢」「靑砥藤綱」鬼武の「自來也」京傳の「櫻姬」なぞが續々と脚色され、看客にもお馴染が出來、大分歡迎されてゐたので、「稻妻表紙」が完結するのを持つて、大阪で早速上演される事になつた。しかも角の芝居と中の芝居で同時に、脚色を違へて上演し、競爭するといふ事になつたのだ。角座の方は奈河篤助の脚色で、名題が「けいせい輝草紙」當時人氣者の二代目嵐吉三郎が、名古屋山三と六字南無右衞門と梅津嘉門、市川團藏が不破伴左衞門と浮世又平と母芹生といふ役割に對して中の芝居の方は作者が近松德三、名題が「けいせい品評林」三代目中村歌右衞門が名古屋山三と浮世又平、中山新九郎が不破伴左衞門、片岡仁左衞門が六字南無右衞門梅津嘉門といふ役割で對抗した。作者は二人とも當時日の出の大立者だし、俳優も吉三郎と歌右衞門とは人氣爭ひが激しく、贔負客の競爭だけでも澤山の逸話が殘つてゐる位なのだから、山三の役でどつちが勝つかといふ土俵際。この兩座の競演は頗る烈しいものだつたらしい。が結局、俳優としては角の芝居が勝ち、作は中の芝居の方が勝利を得た。

この二つの脚本を比して見ると、成る程、德三の作の方が巧く出來てゐる。手法を舊來通りの二の替り狂言式に採つた、頗るの大曲輪なのだ。最初のうちは不破名古屋の件よりも、佐々木家のお家騷動の方が主になつて、頗る複雜に派手に出來てゐる。原作にはない百姓から成り上がつた佐々木藏人といふ重要な役をこしらへ、これが切腹して桂之助の身替りになつたり、桂之助の狂亂なぞも頗る大がゝりに書き、京阪の人には大いに受けるやうに出來てゐる。南無右衞門と山三の關係も巧く書いてあるし、葛城も原作の五條坂の廓をよして江戸の吉原に直したところなぞ頗る

如才ない。俳優の多かつた爲でもあらうが、人物を原作よりも殖してすべてが華やかに出來てゐる。

　鶴助の作を見ると、德三とは反對だ。大體に淋しい。飽くまでも不破名古屋を中心にして、お家騷動も輕く觸れただけである。南無右衞門の因果譚も、德三ほど突込んで書いてゐない。德三の方は何しろ理屈抜きで、しまひが石橋の場で、南無右衞門が獅子の狂ひを踊るといふやり方だから、京阪の看客には、この方が受けたに違ひない。鶴助の方が一體に地味だ。原作以外に又平の切腹をつけたり、廓の方は原作通り五條坂にしたのも、却つて看客には歡迎されなかつたのであらう。山三の浪宅の雨漏りの一件なぞも、德三の方が派手に書いてある。大詰も德三の方は嘉門や伴左衞門を出して、謀叛人の寂滅に二の替りらしい華やかな切幕になつてゐるが、鶴助は廓の場で筆を納めてゐる。これは公平なところ、德三の方が勝である。さればその後「けいせい繡草紙」は一度も上演されず、「けいせい品評林」は盛んに再演を見、江戸でさへ度々上せてゐる位である。「稻妻表紙」を仕組んだ京阪の脚本は、「けいせい品評林」と定つたのである。以後京阪では不破名古屋といふと、この脚本を指す事になつてしまつた。

　江戸ではどうであつたか。前に云つたやうな契約のあつた爲、稻妻表紙を脚色する事はなかつたが、不破名古屋の役名を使つた芝居は、引續いて盛んに出で、大抵は書替へ狂言の世界に利用されてゐた。例へば天竺德兵衞の狂言が出ても、德兵衞が不破伴左衞門の名をかりて名古屋山三の屋敷へ寶劍受取りの上使にくる、葛城が奥方で、德兵衞を色仕掛けにするといつた類である。これらは不破名古屋が單に利用されたに過ぎない。並木五瓶の「萬代不易戯場始」といふ顔見世狂言には、不破名古屋とも詰まらないツマに使はれてゐる。二代目櫻田治助の「東山殿劇場段幕」は、正三の三十石を改作したものではあるが、三十石の世界では江戸に馴染がないので不破名古屋の世界に直し、原作の神道源八を山三、關口平太を伴左衞門、川浦遊軒を小栗宗丹、花滿慧法を佐々木賴方、縫之助を佐々木桂之助、お舟をお宮と嵌め込んである。すべて斯ういふ風に、不破名古屋を中心とせず、單に書替への對照物にされて、文化文政度は甚だ振はなかつた。そこへ突如として南北の「浮世柄比翼稻妻」が現れたのであつた。

　南北の「浮世柄比翼稻妻」は、慥かに京傳の小說から暗示を受けたものに違ひないが、それは正に暗示の程度で、そこは何といつても江戸の作者だけ、すべてを南北式創造力を以て煉り固めてゐる。「稻妻表紙」の名聲を借りながら、事實はそれに卽してゐない、從つてゐない。作家的良心は認められるが、同時にづるい手法だと云ふ事も出來

る。南北は、小說を脚色したといふ批難を避ける爲に、先づ第一「比翼塚」の世界を合併した。白井權八と幡隨院長兵衞が不破名古屋と一緒に出る事となるのだ。尤もこれは、俳優の顏觸れから考へた事でもあるし、また南北物には附き物の手法で、珍らしいとは云へないが、まだ小說を脚色する事は許されてゐない時代の、南北が云ひ譯の種の一つの遣り方だと考へても差支へはなからうと思ふ。第二に、不破名古屋が佐々木家を離れる筋や、後の吉原の戀の葛藤、葛城と不破が肉親だといふ件は、原作を借りてはゐるが、その細敍法は勿論彼れ一流の筆法でゆき、原作の段取りにも據らなければ「けいせい輝草紙」「けいせい品評林」にも拘泥してゐない。勿論意識しての結果である。だから、ちよつと見たところでは小說と何等ゆかりは無いやうに思へるが、實は矢張り小說の流行を利用したものである。

この狂言に於る南北が第一の功績はなんと云つても「鞘當」の一幕を作つた事である　鞘當といふ詞が、喧嘩といふ意味に解されるやうになつたのは、この狂言が出來てからなつたのである。尤も、寫實好きの南北が、あの古典的な舞臺を創造したのは、古劇「不破」の復活を希望した七代目團十郎の依頼からである「鞘當」は歌舞伎十八番「不破」を再現するつもりで作られたものである。それが準舞踊ともいふべき手法をとつた爲に、一幕物として今日に殘つたのである。あれが寫實で行つたなら、一度ぎりで消えてしまつたに違ひない。それから、山三浪宅の場のユーモア、あれこそ南北が大得意のやり方で、京傳がソックリ南北化されてしまつて頗る愉快だ。同じ雨漏りの盥を吊すにしても、同じ掛取りを使ふにしても、徹頭徹尾彼れ一流の行き方で、三人の掛取りの顏が三色に變るなぞ、脚本を讀んでゐても吹出してしまふ。そこへユーモアの狂言廻しともいふべき、氣輕な家主を點出して、舞臺を縱横に搔き廻す。あの家主こそ南北自身だと思つても間違ひはなからう。その上に、吉原の花魁が、鳥越の裏長屋の路地を、八文字を踏んで來るなぞ全く至れり盡せりである。散々それで笑はせて置いて、最後に瘂のお國の死で、悲慘な裡に幕を切るなぞ老巧なやり方である。瘂のお國は勿論原作にはない、菊之丞の爲に南北が創り出した役だが、面白い人間に出來てゐる。

美貌の菊之丞に瘂娘をやらせて、看客に憤慨させてはといふ懸念から、忽ち早變りで葛城にして出すなぞ、用意周到なものである。次に伴左衞門だが、原作でゆくと葛城が肉身とわかつてから、多少惡心を折れるのだが、これでは徹底した惡人にしてしまつたのが面白い。葛城を妹と知つてから、面目ないあまり、一時は伴左衞門も死なうとする

が、刀を取つてから考へ直し、この事を知つたのは二人だけ、二人がしやべらなければ世間へも知れずに濟む、馬鹿馬鹿しい死ぬには及ばぬ、なんで死ぬなんて考へたのだらう、と忽ち心を飜へして葛城の嘆きを冷然と見るところがある。あれなぞは南北が新解釋ともいふべきで、頗る面白い。

斯うして、南北の「浮世柄比翼稻妻」は單に稻妻表紙を脚色した狂言といふ以外、不破名古屋の全世界を通じて、殿りに出ただけあつて慥かに第一の傑作と稱していゝ。だから、この狂言以後に不破名古屋の新作は出ない。尤もその味が純江戸向きな爲、上方の看客には適しないところから、京阪では「けいせい品評林」の方が行はれたが、明治になつてからはそれも絶えてしまつた。今では鞘當の一幕だけが殘つてゐるが、併し通し狂言でも最近まで出た事はある。現に二三年前の帝劇でも浪宅の場だけに演じられた。

南北以後只一つ、默阿彌の作に「當納芝福徳曾我」といふ不破名古屋が出た。これは種彦の「遠山鹿子」を脚色したもので稻妻組の俠客又六が、後に不破伴左衛門になるといふ筋なのだが、小說では割に面白くとも、芝居にしては割に引立たず、山中鞘當のだんまりなぞ書き加へても、一向に面白くないので、一度ぎりで廢れてしまつた。結局、元祿享保の昔から引續いた不破名古屋の世界は南北の筆で今日に名殘をとゞめ、「浮世柄比翼稻妻」がその集大成の名を負つてゐる譯である。

東山殿劇場段幕

「並木正三集」の中の「三十石艠始」と御比較を願ひたい。全然借り物である。たゞ江戸の芝居なので、會話、段取り其他を江戸向きに直し、枝葉を斷つたものである。カットの仕方は要領を得てゐる。原作の神道源八闕口平太を、不破名古屋に改めたのも、お馴染の役名でなければ納まらない江戸の看客の爲にしたのであるが、これも巧みな嵌め方である。不破名古屋の二人物ばかりでなく、外の役々の當て方も、同じ世界の人物を全く上手に配合してある。これは改訂者の二世櫻田治助の手柄であらう。文政元年三月、中村座に演じたものである。その役割は左の通り。

名古屋山三、小栗宗丹、物草屋太郎兵衛（中村芝翫）傾城葛城、阿國御前（五世瀨川菊之丞）銀杏の前（岩井松之助）後室藤波、傾城玉の井（坂東三津三）石塚瀨平（松本染五郎）傾城遠山（中山龜三郎）福島左近（中村七三郎）花形屋音平（物領甚六）犬上團八（大谷馬十）妹藤浪（松本よね三）土佐將監（松本七藏）

奴岡平（淺尾友藏）三上官藏（中村芝六）長谷部雲谷（市川友藏）不破伴左衞門（五世松本幸四郎）土佐又平光興（三世坂東三津五郎）細川圖書（坂東三津右衞門）岩倉宰相（市川門三郎）石橋三位（坂東秀助）土佐左馬次郎（中村傳九郎）佐々木左衞門賴方、金魚賣り金八（二世關三十郎）仲居お宮（五世岩井半四郎）佐々木桂之助、奴鹿藏（七世市川團十郎）

けいせい廓源氏（くるわげんじ）

享和二年正月、大坂中の芝居初演。近松德三の作である。不破名古屋の背景を更に大きくして、朝鮮人の大望までが加へたところが、二の替り狂言らしくて華やかである。

眞柴久吉、名古屋山三、金魚屋金八（二世嵐吉三郎）藏人妻撫子、長橋の局（中村粂太郎）霧尾姬（中村金藏）生駒歌之助、下人與九郎（中山兵太郎）腰元橫笛、下女お今（藤川勝二郎）傾城遠山、腰元柏木（榊山雛松）黑鐵鐵右衞門、長谷部藤太郎（淺尾友藏）犬上團八、堀尾帶刀（嵐猪三郎）物草女房梢、錦花皇女（山下八百藏）石ヶ坂勘兵衞、世繼瀨平（藤川鐘九郎）於次丸久春、粟津主水（嵐萬二郎）奴岡平、佐々木義賢（淺尾與次郎）長東內藏之助、佐々木彈正、好閑坊、金八母お種（淺尾國五郎）下女お芳（山下龜松）不破伴左衞門、猪の熊門兵衞（大谷友右衞門）御國御前、金八女房お宮（芳澤いろは）寺子屋當作　實ハ島左近、物草太郎　實ハ備後將軍伯莫（淺尾爲十郎）

けいせい花繪合（はなのゑあはせ）

安永二年二月、大坂角の芝居に上演したもので、作者は並木十介といふ事になつてゐるが、實はこれが初演ではないので、本當は明和八年の正月、京都の三桝座でやつた「けいせい蝶花形」が初めなのである。この時は、實惡の小栗宗丹は、淺尾爲十郎がやつて好評を得たのであるが、再演の時はまだ女形時代の嵐雛助が、この役をやつて、しかも可憐な腰元千枝と二役を兼ねて看客を驚かしたものである。爰には安永二年の時の役割を掲げて置く。

名古屋山三、名古屋山左衞門（中山來助）松川采女（嵐三十郎）秋塚萬之助、家杉大領。（三桝卯八）高島狩野之助（小川吉太郎）鬼塚玄蕃、お熊婆（中村岩藏）長谷部雲谷、比良大角（中村治郎三）鷲の三之助、菊地多門（染川此兵衞）傾城遠山（尾上粂助）同吳竹（中村龜菊）同卷絹（市山源之助）妻關の戶、女房お百（中

村喜代三）胡蝶の前（山下八百藏）腰元千枝、小栗宗丹（嵐雛助）奴又平（三枡大五郎）

責任校訂　渥美清太郎

日本戲曲全集・第二卷

不破名古屋狂言集・第卅壹回配本

編纂者檢印

昭和六年九月一日印刷
昭和六年九月五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七八八
振替東京一六一七

整版所　新倉東文堂

神田區松下町七番地　（明治印刷株式會社・印刷）

日本戯曲全集

歌舞伎篇　追加十八冊

大方諸賢の熱烈な御援助のお庇を以て「日本戯曲全集」歌舞伎篇も、いよ／＼終りに近づきました。世界無比の我が歌舞伎劇の特色ある内容を明かにするに、少しくお役に立つたかと思ひます。併し、流石に三百年の歴史あり、その複雑さに於て無類であり、その變遷が烈しかつただけに、三十二卷だけで御紹介した脚本ですら、數にしては勿論九牛の一毛であり、劇史の上から見ても重要な、興味ある脚本が山のやうに殘つて居ります。折角これだけの大出版を完行しながら、見す／＼大切な物を洩してしまふにも忍びませんし、讀者諸賢の盛んな御希望もあり、それに、今日これを完成してしまはないと再び機會も來ないと思ひますので、爰に續刊十八冊の追加を企劃し、斯界空前の一大文献の上梓を斷行する事に致しました。國劇を愛する皆様に、引續き御援助御購讀を願ふ次第であります。

追加篇は經費の關係から、殘念ながら一冊一圓五十錢に改めます。その代り頁數を增し、且、口繪に數十度刷の美麗な木版錦繪を加へます。

但し、第一期から追加篇へ變つた第四十八、第四十九、第五十篇の三册だけは、第一期から引續き御購讀を賜はるお方に限り、第一期の定價壹圓にてお頒ちいたします。

追加篇の內容は左の通りであります。なるべく內容は變更しない方針ではありますが、定本の善惡や原稿の具合で多少移動が無いとも限りません。それは成るべく良脚本を選擇したい意志からなので、さうした際は御寬恕を願ふ次第であります。

三十三卷　探偵狂言集
- 大賀仁政錄（小間物屋彥兵衞）
- 名高手毬諷實錄（大久保政談）
- 遠山政談腕彫物（遠山左衞門尉）
- 大岡政談夜嵐莨（莨屋喜八）

三十四卷　太閤記狂言集
- 繪本太功記（鷺の森と十段目）
- 祇園祭禮信仰記（金閣寺）
- 時桔梗出世請狀（馬盥の光秀）
- 八百八町瓢簞簪（顏見世太閤記）
- 日吉丸稚櫻（茶碗屋）

三十五卷　俠客狂言集
- 堂島救入濱（黑船忠右衞門）
- 幡隨長兵衞（長兵衞權八）
- 俠客五雁金（雁金五人男）
- 高藁橋諍勝負附（雷電源八）

三十六卷　情話狂言集
- 三勝櫛赤根色指（三勝半七）
- 色盛八丈鏡（お駒才三）
- 京羽二重新雛形（お花半七）
- 千種結色出來穐（小いな半兵衞）

三十七卷　續々義太夫狂言時代物集
- ひらがな盛衰記（逆櫓の松）
- 源平布引瀧（實盛物語）
- 戀女房染分手綱（重の井）
- 攝州合邦辻（玉手御前）

三十八卷　双蝶々狂言集
- 御攝曾我閏正月（め組の喧嘩）
- 色情曲輪蝶花形（清元嫁菜摘）
- 蝶同孖梅菊（長吉長五郎）

三十九巻　武勇傳狂言集、
敵討天橋立（岩見重太郎）
敵討巖流島（宮本武藏）
復讐上野譽（荒木又右衞門）

四十巻　續赤穗義劇傳集
日本花赤穗鹽竈（五瓶の忠臣藏）
いろは假名隨筆（忍切り勘平）
新臺いろは書始（松浦の太鼓）
忠臣藏後日建前（山名切腹御免）

四十一巻　續化政度江戸狂言集
俠客女吉原（館林の團七）
湊重噂菊月（城木屋お駒亡靈）
時鳥貞婦噺（江戸の朝顏日記）
惣一座色の世界（吃の定七）

四十二巻　京坂世話狂言集
男競三國湊（三人新兵衞）
文月恨切子（お妻八郎兵衞）
置土産今織上布（曾根崎五人斬）
大門口鎧襲（美濃の庄九郞）

四十三巻　京坂二の替狂言集
けいせい北國曙（柴田落城、毛受勝助）
けいせい蓍島臺（天草軍記）

傾城じやがたら戀文（大內征伐）
霧太郎天狗酒宴（天狗霧太郎）

四十四巻　維新狂言集
浪乘船開化初夢（桂小五郎）
近世櫻田雪紀聞（櫻田事件）
櫻田拾遺藤坂下（坂下事件）

四十五巻　一幕物狂言集
馬切り　外十五種

四十六巻　顏見世二番目狂言集
奴江戸花槍　外十二種

四十七巻　續舞踊劇集
大津繪　外數十種

四十八巻　近世大坂狂言集
玉櫛笥箱崎文庫（黑田騷動）
春鬼駒小栗外傳（小栗實記）
朝顏處女若紅筆（新朝顏日記）

四十九巻　中古大坂狂言集
秋葉權現廻船噺（日本駄右衞門）
戀（吾妻與五郎）

五十巻　初期歌舞伎狂言集
幼稚子仇討（田宮坊太郎）
江戸の「猿若」其他の若衆歌舞伎時代より、寛保寶